

ビルライブ！サンシャ
イン！！～School idol
War～

蒼人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火星から飛来した“パンドラボックス”が引き起こした“スカイウォールの惨劇”から5年。

“東都”、“北都”、“西都”の三つに分かれた日本で活躍するスクールアイドル達。東都を代表するスクールアイドル“Aquours”を生み出した学校——浦の星女子学院で教師として勤務している青年、戦兔キリオは人知れず街を脅かす怪物“スマッシュ”と戦う仮面ライダーである。

平穏な日々を求める彼は……戦えば戦うほどに隠された真実へと近づいていく。

仮面ライダービルド×ラブライブ！サンシャイン!!

——世界の命運は、何気ない出会いの中に。
【完結しました】

目次

プロローグ	遠いシンパシー	1
第1章	仮面ライダー	
第1話	正義のヒーロー	10
第2話	アイドルの日々	24
第3話	血走りのコブラ	36
第4話	リバーシブルな歌姫	51
第5話	陰謀のライブ	66
第6話	見え始めるエネミー	82
第7話	イビルの企み	95
第8話	ティーチャーの仕事	108
第9話	二人のサイエンティスト	

第10話	危ういプラン	119
第11話	メモリーがこぼれ始める	146
第12話	ロボットの足音	160
第13話	動き出すシナリオ	176
第2章	ライダーウォーズ開戦	
第14話	三都のソルジャー	190
第15話	仕組まれたベストマッチ	205
第16話	兵器のライダー	219
第17話	スクラッシュの力	236
第18話	ベルトに託す想い	252

第19話	ポイズンの波紋	—	269
第20話	心傷へのカウントダウン		
282			
第21話	蒸気のミステリー	—	297
第22話	深まるミスト	—	311
第23話	スタークの策略	—	326
第24話	底に眠るパワー	—	343
第25話	ハードな運命	—	360
第26話	エボリューションの前触れ	—	378
第27話	ジェノサイドが始まる日		
396			
第28話	聖なるジャッジ	—	413
第29話	禁断のトリガー	—	427
第30話	涙のヒストリー	—	446
第31話	救えドラゴン	—	463
第32話	フェスティバルの後		
477			
第33話	アイドルの裏側	—	489
第34話	ベルナージュの真実		
510			
第35話	崩壊するピース	—	524
第36話	氷室ミカ	—	543
第37話	戦意のボーダーライン		
561			
第38話	クイーンが目覚め	—	574

第39話	揺らぐマイソウル	—	588
第40話	スクールアイドルの反撃		
602			
第41話	ならず者ガール再燃		
616			
第42話	クロコダイルの脅威		
630			
第43話	守るべきハート	—	648
第44話	逆襲のライブ	—	664
第45話	信頼のアンコール	—	680
第46話	ピリオドを打つとき		
696			
第47話	決着のデスマッチ	—	711

第48話	スノーにくべる心	—	726
第49話	ミストマッチな奴ら		
742			
第50話	レベリングの罠	—	756
第51話	ローグの叫び	—	774
第52話	ラビットタンク二乗		
787			
第53話	ユイちゃん	—	809
第54話	終わり行くウォーズ		
835			
第3章	最終兵器エボル		
第55話	開演のベルが鳴る	—	853
第56話	和解のガーゼ	—	869

第57話	パンドラボックスの開錠	886
第58話	星狩り族エボルト――	900
第59話	究極のドライバー――	915
第60話	俺のマグマがほとぼしる	
935		
第61話	エボルトは止まらない	
955		
第62話	プログラムされた喜劇	
977		
第63話	独りきりのベストマッチ	
993		
第64話	真実のパラドックス	

1021	第65話	グレートな信念――	1035
	第66話	救えラビット――	1057
	第67話	戦兔キリオ――	1078
	第68話	約束のビー・ザ・ワン	
1098			
	第69話	遅めのモーニング――	1120
	第70話	終末のランチタイム	
1141			
	第71話	ディナーにはまだ早い	
1159			
	第72話	アポカリプスの日――	1177
	第73話	シスターの祈り――	1192

1345	エピソード ベストマッチな奴ら	13211291
	第79話 ビルドが選ぶ明日	1291
	え	
1274	第78話 ラブ&ピースを謳	
	第77話 仮面ライダーは壊れない	125812361216
	第76話 ヒトの輝き	
	第75話 灼熱のブリザード	
	第74話 わたしのプライム	

プロローグ 遠いシンパシー

辿り着く場所はない。ひたすらに“寄り道”を繰り返すだけの生だ。

赤みがかった砂にまみれた大地を見下ろし、オレはこの手で滅ぼした文明の最期を見届けた。

今回のターゲットも問題なく——いや、見栄を張った。想定していたよりも手こずってしまったのはシステムの障害だろうか。

……いや、そんなはずはない。オレは確かにプラン通りの行動を遂行したはずだった。

予想を遥かに上回る、見えない力……………研究する余地がありそうだ。

——
次の惑星は、

「……………」

奇妙な感覚。

何かがこぼれ落ちてしまうような、大事なものが欠けていくような、取り戻さなくて

は支障が出ると明らかなモノが失われていく。

暗い暗い世界のなかで、木漏れ日のように差し込んでくる一筋の光。

次は——ここだ。



件。
“スカイウォールの惨劇”……それは5年前、この日本で起きた痛ましい大事件。

火星から飛来してきた“パンドラボックス”と呼ばれるアーティファクトによって出現した巨大な壁、“スカイウォール”。

それを要因とした日本列島の分断——それが悲劇の全容。

「……つと、ここまではお前達も知っている常識の範囲……だな」

気怠そうに机へ突っ伏し、腕のなかに顔を埋めた青年が消えそうな声で生徒達に問いかける。

「……先生、きちんとした姿勢で授業をしていただけます?」

「この声は……黒澤か、相変わらず真面目だなお前。じゃあ分かれた地区の名前を全部言ってみろ」

「……外交に力を入れている『西都』、社会福祉の充実を目的とする『北都』、そしてわたくし達の住む『東都』……です」

「パーフェクト。……代わりに教鞭とる?」

「結構ですわ」

教え子と顔も合わせないまま話を進める青年の名は『戦兎^{せんう}キリオ』。浦の星女学院の化学教師である。

数少ない男性教員、そして学校一の変わり者ということもあり内浦の街ではちよつとした有名人だ。

「はあ……さて、黒澤が答えてくれたことはあくまで表向き^{おもむき}のものだ。今はまだ平穏と言える状態なんだろうが……冷戦状態と例えた方がいいな。ま、そこそこは政治の授業でつてことで」

顔を伏せたまましばしの沈黙が教室を満たし、直後に静かな寝息が漏れる。

「……鞠莉さん」

「私がこの学校の理事長であることをお忘れなく、センセ」

「はい！真面目にやります!!」

電気でも通されたかのように瞬時に跳ね起きたキリオは流れるような動きでチョークを手に取り、黒板へ文字を走り書きしていく。

その狭間に見えたのは席に腰を下ろす生徒達の姿。その内の三人ほどは学外でも名が知られている少女達だった。

そう、今この日本でいつ内乱が起こるかわからない。……いや、“内”じゃない。もはや三つの国と認識したほうがいい。

冷戦状態を保っていられるのは5年以上前から存在する“スクールアイドル”の存在が大きいだろう。

全国大会まで行われている、学生達によるアイドル活動。

血生臭い争いとは程遠い少女達によるパフォーマンスのおかげで、世間の求めるものは三国の統一よりもエンターテインメントに向きつつある。

なかでも平和維持に一際買っているのがそれぞれの地区を代表するスクールアイドル

ル達。

北都の“Saint Snow”

西都の“Bernage”

東都の“Aquours”

現在スクールアイドル界での3トップと言われているのがこの3組。

そして何を隠そう——東都を代表する“Aquours”こそ、この浦の星女学院が誇るスクールアイドルなのである。

そのメンバーの内三人が今授業を受け持っているこのクラスの生徒。

授業中に背筋の緊張を解いた試しがない黒澤ダイヤ。

笑顔を絶やさない理事長様、小原鞠莉。

そして後ろの方で堂々と居眠りこいている海の化身、松浦果南。

「松浦」

「……うえ？」

軽く弾いたチョークが見事果南の頭部に命中。よだれを垂らした間拔けな表情を晒しながらやつと顔を上げる。

「あれ……？イルカは……？」

「……は陸だぞ、目を覚ませ」

ついさつきまで自分も睡魔に負けていたことは内緒のまま彼女を注意するキリオ。

「今なんの授業中かわかるか？」

「えつと……、あつ自習？ “キリオくん” が担当だし」

「違うわ。この俺が珍しくやる気になつて教鞭振るうつていう時にそんな態度じゃダメだろ？ あと先生と呼べ」

パツと見開かれた瞳をダイヤと鞠莉に向けた後、ニヤついた顔で彼女は言い放った。

「……鞠莉に給料減らすぞつて脅されたんだ」

「正解ですわ果南さん」

「容赦ないな黒澤。そうだよその通りだよ………悪いか!？」

「よくその態度を保つていられマスね……」

「ほら先生！先ほどから無駄話ばかりで授業が進んでいませんことよ！」

「わーったよ！やればいいんだろやれば!!わかったから給料下げないでね!!」

冷めきつた表情が途端に温度を上げ、キリオはすぐさま教科書を手にとつては板書を再開した。



西都のとあるライブ会場。

街中で行われた小規模のライブ——だったはずのそれは押し寄せるようにやってきた観客達によつて警察まで出動する事態へと変貌した。

その人氣の中心にいるのは——二人組の少女。

片方は小柄で茶髪のショートヘアに活発的な振る舞いを見せる、血のように赤い衣装をまとった少女。

もう片方は長身で肩ほどまで伸ばした黒髪に落ち着いた雰囲気を漂わせた、漆黒のドレスを身につけた少女だ。

「みんな——っ！今日はあたし達のライブに来てくれて、ありがとね——っ!!」
マイクを通した可愛らしい声音に反応して観客達のテンションがヒートアップ。地震でも起きているかのような迫力を見せる。

「ほらほら、みーちゃんも何か言ってあげなよ」

「えつと……………わたしは……………」

「もー！照れ屋さんだな——!!」

「ご、ごめんユイちゃん」

「さてさて、そろそろお別れの時間がやってきちゃいました……」

会場内を掌握した一人の少女が瞳の色をうつすらと変え、不意に涼しげな笑みを浮か

べた。

今の変化に気づいたものはこの場に誰一人いないだろう。

「それじゃあ皆さん、チャオ」

一気に高いテンションを引き戻した少女は客席に向かってウィンクを飛ばしつつステージ上から去った。

控え室として設立されたテントの中は異次元のように外とは空気が違っていた。張り詰めた空間のなか、赤い少女は黒い少女と向かい合うようにして椅子に座り、置いてあったスマートフォンを手にとってはおもむろに操作する。

「きやはっ……ビンゴー！」

「……見つけたの？」

「うん、この前放ったスマッシュの反応が東都で消滅。これはもう“ここにいます”って言うてるようなもんだよねー！」

「……じ、じゃあ、すぐにでも東都に……う？」

「あはは、バカなのみーちゃん？あたし達が動く必要なんかないよ。………今はね」
人とは思えない笑顔をにじませた真紅の少女は最後にそう言い残し席を立った。

——「ふふ、楽しい実験の始まりだよ」

第1章 仮面ライダー

第1話 正義のヒーロー

「ゴリラ、ダイヤモンド——」

何かの設計図や資料からテッシュを丸めたゴミまで散らばっている、今まで掃除の類をしてこなかったのが丸わかりな部屋。

濃緑色のパネルに2本の「ボトル」をはめ込むと、化学反応を起こすように光とアルファベットが浮かび上がる。

「ベストマッチ・フー！ やっぱ授業なんかより、こっちの実験に時間を費やした方が有意義だなあ」

ふと背後から階段を降りてくる足音が聞こえ、キリオはテーブルの上に置かれていた機器に資料を被せて隠した。

「キリオくん——って、相変わらずきつたないねえ……」

「千歌、勝手に入ってくるなよ」

「なにしてたの？」

「べつに……」

明るい髪色をしたこの少女の名は高海千歌。十千万という宿を経営している高海家の三女だ。

キリオは近くにある海岸で倒れていたところを彼女に拾われる形でこの家に居候させてもらっている。

使わなくなった地下室を借り、失った記憶を探し求める毎日を送っているのだ。

「もうっ……どうして顧問が生徒より先に帰ってるの?」

「前にも言っただろ。顧問ってのはあくまで名目上だ、俺自身スクールアイドルに興味があるわけじゃねえよ。……部活ならお前達だけでもできるだろ」

「今回はキリオくんがいないとダメなんだってば!」

「はあ?」

ぐい、と前触れもなくスマホの画面を突きつけてくる千歌。

そこに映っているのは二人組の……おそらく千歌達と同じスクールアイドル。赤と黒の少女の姿だった。

「……“Bernage”だろ?こいつらがどうしたよ」

「この二人から、Aoursとコラボしてほしいって連絡が届いたの!」

「へえ……」

「場所は西都の特設会場!」

「いいんじゃないか？行つてこいよ」

「だーかーらー！」

千歌がバシン！と傍にあつた机を叩くと、上に置かれていた紙がはらりと地面に落下した。

「……うちの学校、他の地区に行く時は保護者同伴つていうのが条件でしょ？」

「あー……」

「美渡姉も志満姉もこの日は用事があるらしいし……キリオくんお願い！」

「……………」

高海家の人間の頼みとなれば断りにくいが……………正直西都に足を運ぶのは気が進まない。

以前倒した怪物はやつてくる方向からしてどれも西都から送り込まれたものだろう。

狙いはおそらく――

「……………確かに、千歌達だけで行かせるのも心配だな」

「じゃあ決まりね！」

「ちよつと待った」

「え？」

千歌の持っていたスマートフォンを取り上げ、そこに映るBernageのライブ映

像に目を凝らす。

一見他のスクールアイドル達と変わらない、普通の女の子のようにも見えるが
.....

「千歌、この赤い奴……なんて名前だっけ？」

「えつと……葛城^{かつらぎ}ユイちゃん。Bernage^{ひむろ}は氷室ミカちゃんとの幼馴染グループな
んだって」

「幼馴染……この二人がか」

知り合いではないはずだが……どうにも気になる。特に赤い方。

——もしかすると、「記憶を失う前の自分」と何か関係が………？

●●●

初対面の人からは「男か女かわからない」と言われる。体格や顔つきもそうだが、雰囲気^{きふ}がそう思わせるらしい。

キリオが高海家の世話になり始めたのは5年前。ちょうどスカイウォールが現れた

時期と同じだ。

災害に巻き込まれて傷付いた者は大勢いる。記憶がないのはキリオ自身、その時のショックが原因だからと医者に診断された。

……が、後にスカイウォールから採取された“ネビュラガス”と同じ成分が彼の身体から発見され、単なる身体的ショックが原因ではないだろうという結論が出された。

火星から落ちてきたと言われる、スカイウォールが出現した原因——“パンドラボックス”は現在東都政府が預かり、研究を進めている。

(……きつとあの箱に……俺の記憶の鍵が——)

「ア……ウアア………」

日は完全に落ち、辺りは暗闇に包まれている。

波の音に混ざって何者かの足音が耳に滑り込み、キリオはすぐさま下ろしていた腰を上げて“ドライバー”を腰に巻きつけた。

「来たるスマッシュ」

闇夜に紛れてこちらへ歩み寄ってくる影が一つ。

白い身体。針らしき物が指先から伸びている。

キリオが内浦で保護されてから数日置きにやってくる怪物達。こいつも今までと同じ――

「狙いは俺か？」

「アアアアアア……!!」

突然奇声を上げて襲いかかってきた怪物を受け流し、コートから取り出した二本のフルボトルを振る。

こいつを放つてはおけない。一般人に危害が及ぶ前に――この手で倒す。

《ラビット!》

《タンク!》

《ベストマッチ!!》

ベルトに装填したボトルに反応して発光。レバーを回せば機械的な音と共に透明なパイプがキリオを囲むように形成され、“人の型”を形作る。

《Are you ready?》

「変身!!」

覚悟を問われ、それに応えるようにファイティングポーズと掛け声を叫ぶ。

《鋼のムーンサルト! ラビットタンク!!》

《イエーイ!》

仮面ライダービルド。

キリオが作り出した技術——二つのフルボトルを“ビルドドライバー”に装填し、組み合わせごとに装着者を戦士へと変身させるシステム。

彼が内浦の海で発見された時、大事そうに抱えていたという“別のドライバー”を元に作られている。

そこらは怪物から採取した成分を浄化するための装置に組み込んでいたので劣化版であるこちらを戦闘に使っているが、これまで敵との戦闘で支障が出たことは一度もない。

「アアアアアアア………!!」

「おっと」

怪物は腕の針を伸ばしたままそれを細剣のように刺突。瞬時に反応して回避してみせる。

スピードもパワーもこれまでの奴らと大差ない。手持ちのボトルで対応できそうだ。

「……すぐに戻してやるからな……………」

ドライバーから飛び出したパイプが直線的に形成され、スーツを生み出したのと同じように“ドリル状の剣”へと変化する。

「はあッ！」

効率的に、最速で片付けられる方法を――

繰り出される攻撃を最小限の動きで回避し、確実に急所を回転する刃で抉っていく。

「ウア……………」

「いいぞ、もう少しの辛抱だ」

多少のダメージを負わせなければゆくり成分採取もできやしない。

キリオを襲うこの怪物達の名は“スマッシュ”。

国境を越える際に東都のガーディアン達に仕留められる場合がほとんどで、こういった情報は一般に公開されることもあまりない。

世間に知られているのは精々スマッシュという名前くらいなものだ。

「ふっ……！」

スマツシュが繰り出す刺突を避けながら思考を巡らせる。

だがこうしてキリオに辿り着くスマツシュこそ——おそろく本命。

何者かが東都政府の目を引くために別働隊を送り、単騎を潜ませてまつすぐ俺の所に向かうよう仕向けているのだろう。

敵の正体は何か……。単身か組織か、男か女かもわからないが——はつきりしていることは一つ。

「俺の平穏を邪魔する奴は……。誰であろうと容赦しないッ!!」

《Ready go!!》

《ボルテックフィニッシュ!! イエーイ!!》

レバーを回しつつ手に持っていた“ドリルクラッシャー”を一旦しまう。

「はあああああッ!!」

地面から唐突に出現した数式でスマツシュを拘束し、上空へ飛び上がり最善の角度で突貫。キックを炸裂させる。

「ウアッ……アアアア……!!」

爆煙から弱り切ったスマツシュが倒れるのが見え、取り出した“エンブティボトル”を奴に向けた。

たちまちスマッシュの身体を形成していた成分が抜け落ち、ボトルへと吸い込まれ――

「……やっぱ今回も、人間が変えられていたか」

スマッシュはどこにでもいる中年の男性へと変貌した。

……これまでのスマッシュも一般人が何者かに誘拐され、ネビュラガスによつて姿を変えられたものだった。

今回は――どこかのアイドルのイベントにでも行った帰りに連れ去られたのだろう。可愛い女の子の子が描かれたTシャツを身につけている。

「ほらおっさん、しっかりしろ」

「……うう……」

「……ちつ……タクシー役は勘弁だつてのに……」

しょうがない。このまま病院に連れて――

「……ん？」

ふと男が身につけていたシャツを改めて見ると、見覚えのある顔が視界に入った。

「これは……Bernageの葛城ユイ……。ということやはり西都からやってきたのか？」

確定ではないが今までの例から考えるに彼も西都の人間。

やはりキリオを狙ってスマッシュを送り込んでいる奴の本拠地は西都にあると見て良さそうだ。

「……………千歌達とのコラボの話もあったし、一度色々と調べてみるか」



「さてさて……………現在のランクはつと……………」

使われていない倉庫のように寂れた部屋の中で、葛城ユイは足を組みながらどつしりとした態度でテーブルの上に置いたパソコンを操作する。

スクールアイドルの人気を表すランキングが記されたサイトだ。

「……………む？あれ？あたし達2位になってる……………」

「1位はSaint Snowさんみたいだね」

「うわっみーちゃん!?急に出てこないでよ!びっくりするじゃん!」

「ごめんね。これ……お腹空いてるかなって……作ってみたの」

横から差し出されたクッキーを一瞥するが、興味なさげにテーブルを指で示すユイ。少しだけ悲しそうに眉をひそめたミカは持っていた皿を静かにそこへ置いた。

「なるほど……聖良さん達、新曲の動画をアップしたんだ」

「わっ……わたし達も……負けられないね。が、頑張ろう?」

「そうだねー……やっちゃう?」

「……え?」

ライブ中に見せるものとは違う、ユイが見せた黒くて含みのある笑顔。

ミカは彼女の表情を見て何を悟ったのか、震える声で言った。

「あ、あの……でも、聖良さんと理亜ちゃん……は、関係ない……よう?」

「関係……?この前スマッシュにしたオタクくんだってそうでしょ?」

「えっと……でも……だって……この二人は、有名人だし……手を出すのは……まずいんじゃない?」

「——正解!なんだ、思ったよりも考えられる子だったんだね!」

椅子から立ち上がったユイは傍に放置していた「ブレード」を拾い上げ、背後を振り返ってはそのバルブを回転させた。

「さて……つと、思わぬ材料が手に入ったことだし」

「むーっ！むーっ！ツッ！！」

猿轡で口元を固められ、全身に縄を張り巡らされた一人の男性が床に転がっている光景を見下ろし、ユイは不気味に口角をつり上げた。

「ねね、おじさん、あんな夜道であたしを襲って………何しようとしてたの？」

声も出せないまま怯える男性を見つめていたユイははっとした顔で口にする。

「ああ、あたしが掲示板で呼びかけたんだっけ。まさか本当に来るバカがいると思わなくて、ちよつとびつくりしちゃったけど」

《デビルスチーム！！》

「ムーっ！ーっ！ツッ！！！！」

「きやはっ………きやははははハハハハ!!」

黒霧が周囲を満たす。

少女が振り下ろした刃は男の胸に深く突き立てられる。

男性の悲鳴を聞きたくなかったミカは涙を流しながらも必死に両耳を腕で塞いだ。
た。

「……あれ？」

しかしガスを注入された男はたちまち身体が紫色の粒子に変化し、宙に溶けるように消滅してしまった。

「……なあんだ、ハザードレベル1の役立たずだったか。つまんないの」

巧みな手つきでブレードを逆手に持ち直したユイは冷めきった顔で空を見つめる。

「楽しみだなあ、どんな人達なんだろ。……東都のAquoursさん」

第2話 アイドルの日々

『Bernageの方々とコラボ……ですか』

「はい、それで……どんな人達なのか気になって。聖良さん達なら何か知ってるかもと思つて……」

部室の席に座つてスマートフォンを片耳に当てる千歌。

通話の相手は数多くのスクールアイドル達が集う大会——“ラブライブ!”——でも競い合つたことのある北都を代表する姉妹グループ、Saint Snow………その一人、鹿角聖良だ。

『すみません……実は過去に一度、彼女達から共演の依頼が届いたことはあるのですが——』

「ええっ!? そうだったんですか!？」

『ええ。……でも、その時私と理亜は調整中だったので断つたんです』

「そうだったんですか………」

自分達の他にも、以前コラボの提案を持ちかけていたことがわかつてほんの少し安心した。

「ちよっぴり心配だったんです。私達よりもすごいスクールアイドルはたくさんいるのに、どうしてBernageeさんはAqoursに……って」

『ふふ、もうそう自虐的になっていているようじゃ困りますよ。あなた達は前回のラブライブで……見事私達を負かしてみせたんですから。いつまでもそんなじゃ、私も理亞も報われません』

「そうですよね……すみま——ありがとうございます！」

『ああ、それと』

耳からスマートフォンを離そうとしたところで聖良の待ったがかかり、咄嗟に「はい？」と詳細を尋ねる千歌。

『ルビイさんに変わってもらってもいいでしょうか？理亞が少し話したいことがあるって……』

「お安い御用ですー！」

横の方で同級生である国木田花丸、津島善子と何気ないガールズトークに花を咲かせていた黒澤ルビイと視線を交差させ、ちよいちよいと軽い手招きをする。

「千歌ちゃん、どうかしたの？」

「ほいっ！」

「……？」

なんの説明もなしに差し出されたスマホを見て首を傾けるルビィ。

おそるおそる手にとって耳元へ近づけてみれば——遠く離れた地に住んでいる、友達の声が聞こえてきた。

『る、ルビィ?』

「理亞ちゃん!どうしたの?」

S a i n t S n o w の片割れ、鹿角理亞。聖良の実の妹である彼女は、姉とのコンビネーションを活かしたパフォーマンズで全国でも上位の人気を誇るアイドルへと登りつめた実力者だ。

『あー……そのね……ほら、本物でしょ?』

「……………」

電話越しに誰かと会話を交わしているような様子の理亞。

彼女の声を聞いたルビィは怪訝な声でもう一度呼びかける。

「理亞ちゃん?」

『あー……つたくもう……あのねルビィ、S a i n t S n o w に新しく入ったマネージャーがいるんだけど……あんたのファンみたいだね』

「えーっ!う、嬉しいな………どんな人?」

『どんな……。面倒くさいから一度声を聞かせてあげてもらえる?』

『えっ……ちよっ……おまつ』

「えっ…いきなり!? ルビィも心の準備が——」

ゴト、という重い質感の音が耳朶に触れ、同時に心臓の鼓動のような高速リズム。

先に沈黙を破ったのは、勇気を振り絞って自分のファンと向き合おうとしたルビィだった。

「あっ……あの……初めまして……?」

『——る』

「る?」

何かを溜め込むような静寂。

携帯越しに感じるのは、明らかに緊張した様子の少年の声だった。

『ルビィちゃんだあああああッッ
!!!!』

「ピギっ……!？」

あまりの叫びにスマートフォンから発する音声部室中に響き渡り、昼寝をしていた果南が飛び起き、衣装を縫い合わせていた曜が指先に赤い雫を作り、曲作りを進めていた梨子は見事に椅子から転げ落ちた。

『あ、あのの……自分、猿渡さわたりタクミ、16歳、初めてあなたを見た時から——』

『はいそこまで』

『あぶっ……!？』

誰かが誰かを突き飛ばしたような鈍い衝撃が伝わり、苦笑いを浮かべながらなんとか向こう側の空気を察するルビィ。

『ごめんね。どうしても声が聞きたいって聞かなくて………』

「う、ううん、大丈夫」

『じゃあね、ルビィ。またいつか、一緒にライブしましょう』

強引に話を切り上げた理亜は最後にそう言い残すと、ブツリと通話を終わらせた。

「な、なに今の……？あ、曜ちゃん血出てる」

「びつくりしたねえ……あ、へーきへーき」

「あ、あはは……」

苦笑しつつ千歌にスマホを返したルビィは詳しいことを話さないまま元いた席へと

戻っていく。

「そういえば知ってる？ “仮面ライダー” の噂」

「え？ なんですのそれ？」

先ほどまで黙々と自分のスマートフォンをいじっていた鞠莉が皆にそう問いかけた。

「これデース！」

その場にいた全員に画面が見えるよう前方にスマホを突き出す鞠莉。

映っていたのはSNS上にアップされた数枚の画像。

どれも夜に撮影されたもので細かく目視することは不可能だが、その全てに赤と青の螺旋模様をした人影が確認できる。

「……………なにこれ？」

「私は知ってるわよ！ 人知れずスマッシュを倒して世の平和を守っていると噂される――」

――正体不明の執行人！

「善子ちゃんが好きそうな話題すら」

「ヨハネ!!」

しばらく興味深そうにそれらの画像を見つめた梨子がふと口を開いた。

「どうして急にこんな話を……？」

「それがですね……この写真、どれもこの内浦で撮影されたものらしいのデス」

ええっ!?!とふわふわ漂っていた皆の視線が一気に鞠莉のスマートフォンに集中する。

「……つて、そのスマツシュとかいう怪物、私見たことないんだけど……」

「街に侵入してきたなんて話も聞いたことありませんわ」

「騒ぎになる前に倒されちゃうんじゃないかな？」

徐々に盛り上がりを見せる仮面ライダートークの最中。引きずるような重い足音が体育館から聞こえ、数秒後に死んだような目をした青年が戸を開けて部室内へと足を踏み入れた。

「うーす………」

「あ、キリオくん」

「先生と……呼べ……」

「うわっ!すごい限!」

「今日は一段と気怠そうぞら」

「ロクに身体を動かしてもいないのに、どうしてそんなに疲れているんですの?」

「大人の仕事は……大変なんだよ………」

——ここ数日、立て続けにスマッシュが現れている。

奴らを倒した後、好奇心に負けてすぐにボトルを浄化してしまうせいか連日の疲労が蓄積されているのだ。

それよりも気がかりなのは千歌達が話していたこと。こうも戦う毎に写真を撮られてしまつては正体がバレるのも時間の問題だ。面倒事は嫌いなのでそれだけは極力避けたい。

「ねえキリオくん、仮面ライダーって知ってる？」

「知らん」

「こういうの興味なさそうだもんねえ……」

「ていうかそんな都市伝説よりもな、まずは西都を代表するスクールアイドル様達との共演について話し合えよ。曲とダンスは大丈夫なのか？」

「それなんだけどね、私達の曲を向こうで練習して、一緒に踊ってくれるみたい」

……いいのかそれで。西と東を代表するスクールアイドルがコラボするまたとない機会だぞ。

決めるのは千歌達の役目だ。キリオがとやかく言う筋合いはないが——客観的

に聞いて物足りない感じはある。

「お前達はそれでいいのか？」

「当日まであと一週間もないし……負担が減るならこつちもありがたいかな……つて」

「まあ、それもそうか」

急な出来事で彼女達も戸惑っている。

合同ライブを申し出たのはBernageの方だ。とりあえずは向こうのペースに合わせるとしよう。



難波高校——それは国内で最大級の規模を誇る重工業メーカー、*“難波重工”*の傘下である高等学校である。

様々な分野において優秀な人材を輩出しているこの学校は、現代社会で凄まじい人気を持つスクールアイドルについても力を入れている。

Bernage——彼女達こそが難波高校のスクールアイドルであり、西都を代表するエンターテイナー。

「やつほー万丈くん。元気してた？」

「うわっ……!?!—なんだお前かよ、葛城」

「なんだとはなんだ。西都の代表と言つても過言ではない、このあたしが自分から挨拶してあげてるっていうのに！」

ユイの呼びかけに顔をしかめたこの少年の名は万丈リユウヤ。

5年前——スカイウォールの惨劇が起きたその日、孤児院の前で倒れていたという天涯孤独の男。

苗字と名前は孤児院を経営している老夫婦から貰い、以降は施設で暮らしている………という部分を抜けば、他の生徒達と変わらない普通の少年だ。

強いて言うならば格闘技のクラブに通っており、それなりの実力を持つということくらいか。

「……ていうか、お前はなんで俺にちよっかいかけてくるんだよ」

「え?………仲良くなりたいからって理由じゃ……ダメ?」

「その上目遣いウザいからやめろ」

「えー……」

リユウヤは入学当初から声をかけてくる彼女のことがどうにも好きになれないでい

た。

彼女——葛城ユイとその幼馴染である氷室ミカはBernageのメンバーだからという理由の他に、その容姿の秀麗さも相まって男女問わず校内でもかなりの人気がある。

なかには「うざかわ妹系」であるユイに対して苦手意識を感じる者もいるが、皆少なからず興味は持っているのだ。

だがリユウヤは違う。なぜだか二人について「クラスメイト」以上の感情が抱けない。

「万丈くんってさ、格闘技やってたよね？」

「それがどうかしたのか？」

「戦うの、好きなの？」

「なんだその質問……」

思えばどうして格闘技を始めたんだったか。
いざ問われるとはつきりした答えが浮かばない。

「……日頃のストレス発散……か？」

「なるほどなるほど」

人通りの少ない放課後の廊下。

小柄な身体をウサギのように飛び跳ねさせ、ユイはリユウヤの横を通り過ぎる。

「今度ね、東都のスクールアイドルさん達と一緒にライブするんだ！よかつたら君も見においでよ。チケットは取っておくからさ！」

その言葉を残して教師に注意されながらも構わず廊下を走り去っていくユイ。

「……スクールアイドルね」

孤児院でよく懐いてくる子供達からも何度か聞いた名前だ。

三国の平和維持に一役買っていると言われるあの――

「……まあ、見に行くだけなら」

どうせ他に用事はないんだ。一度この目で確かめるのも悪くない。

みんなが夢中になっている………スクールアイドルとやらを。

第3話 血走りのコブラ

「いいかお前ら、くれぐれもバスの中ではうるさくしないように」

——はーい!!

西都にある会場へ向かうAqoursのメンバー達のためにバスをチャーターした。今や彼女達は日本中で知らない人はいないというほどの有名人集団。

日は跨いでもうが、この情勢下に別の地区で騒ぎを起こしたくはないので公共の交通手段は極力避けるようにした。

「さて……………」

必要なもの——自分のバッグの中にビルドドライバーと数本のボトルがあることを確認したキリオは、千歌達全員がバスに乗車したことを確認した後で車内に足を踏み入れた。

全員乗車したことを運転手に報告するとすぐにエンジンがかかり、長い道のりが始まる。

「……………寝るか」

到着予定は2日後の朝。会場との間にBernageの二人がホテルを予約しておいてくれたので宿の心配はしなくてもいい。

それまではボトルを浄化した時の疲れを癒して――

「はい次、〃ら〃ね。キリオくんの番」

「……………何が？」

先ほどの忠告も虚しく何やら背後で騒がしくはしゃいでいるなど思っていれば、唐突に後ろの席に座っていた曜から声がかかった。

「なにつて、しりとりだよ。もしかして聞いてなかった？」

「……………俺は寝るぞ」

「えーっ!?付き合い悪いなあ!」

「今は頭動かしたくないんだよ」

「そんなこと言つて……………負けるのが怖いんじゃない？」

「あ?」

横から聞き捨てならない言葉が飛び出し、閉じていた目を開いては発した本人を見やる。

「なんだと津島…………?」

「ヨハネよ!適当なこと言つて逃げるなんて男らしくないわね!」

「そうだよキリオくん！」

「男を見せてよ!!」

善子を皮切りに次々に上がる罵詈雑言。

自分達の遊びにキリオを引き込む作戦だと重々承知だったが、言われるままという状況は耐えられなかった。

「なめんなよお前ら!! “ラビット”!!」

「よしきた!!」

さらに騒がしさを増したキリオ達の被害を最も受けている運転手は、苦笑しつつそのハンドルを切るのであった。



「じゃあ30分間トイレ休憩入るから……、11時までにはバスに戻ってくるように」
——は——い。

三時間ほど移動した後でサービスエリアにバスを止めてもらい、飲み物等の調達に各々が施設内へと歩き出す。

結局あのは後は一睡もできなかった。もう二度と千歌達のテンションには乗らないと心に決め、キリオもまたドリンクを購入しようと傍にあった自動販売機に歩み寄る。

その直後、周囲から広がるようにして上がった悲鳴に反応し視線を横へ流した。

「……なんだ……………」

駐車場から逃げ出していく一般人の波に逆らって、キリオは数メートル先に立つ奇妙な影を見据える。

血のように赤い身体。マスクと胸に描かれたコブラのマークとマフラーの如く首元に巻かれたパイプが特徴的な――

「……スマツシユ……………」

「うーん……………」外れだ。ま、初対面じゃあ仕方がないか」

ふらふらと緊張感のない足取りで距離を詰めてくる赤い戦士を前にし、キリオは咄嗟に周りの人目を確認した。

（……千歌達の中にいるか）

建物の陰に隠れたキリオはすぐさまビルドドライバーを腰に巻きつけ、二つのフルボトルを取り出す。

「オレの名は『ブラッドスターク』。……以後、お見知りおきを」

わざとらしい口調でお辞儀を見せた奴に対して警戒心をむき出しにしつつ、探りを入れていく。

「内浦にスマッシュを送り込んでいたのはお前か？」

「……ハハッ……！今度は正解だ！ご褒美に遊んでやるよオ……!!」

「……………!!」

反射的にスタークが構えたライフルの射線上から逃れ、放たれた弾丸を回避する。

ボトルを何度か上下に振り、立て続けに発射される弾を身体を横に転がせることで避けながらドライバーにそれらを装填。

《ラビット！》

《タンク！》

《ベストマッチ!!》

レバーを回し、現れたパイプで奴の攻撃を弾きながら両手を構える。

《Are you ready?》

「変身ッ!!」

《鋼のムーンサルト！ラビットタンク!!》

《イエーイ!》

ラビットタンクフォーム——ウサギの跳躍力と戦車の破壊力を兼ね備えた、最も
攻守のバランスが取れた基本形態。

「ほお……………やはりお前が、仮面ライダーだったか」

「……………なに？」

「お手並み拝見させてもらうぜ」

「……………!」

放たれた弾丸はキリオの頬を掠め、背後にあつた車を貫いていった。

しばらくは接近する機会をうかがおうと回避に徹するが——

「……………くそっ……………!」

回を増すごとに精密な射撃になっていく。どうやらスタークは敵の分析能力に秀でて
いるらしい。

「はあああああッ!!」

避けられないのなら防ぐまで。

ドライバーから取り出したドリルクラッシャーの刃で遠距離から飛んでくる弾丸を弾き、徐々にスタークとの距離を縮めていく。

「だあッ!!」

キリオが振り下ろした刃をスタークはライフルと片腕で強引に受け止め、そのまま罅迫り合いの体勢で硬直。

「やるねえ。……だがこれじゃあまだ、及第点はやれないな」

「なんだと………!!?」

「そら、これはどうだ!?!」

ドリルクラッシャーの刃を弾き、5メートルほど距離をとったスタークは腰に手を伸ばし――

《フルボトル!》

1本のボトルを取り出したかと思えばそれをライフルへと差し込んだのだ。

「フルボトルだと………!!?」

「上手く避ける」

《スチームアタック!!》

凄まじい量の蒸気と共に爆発的に放たれた弾丸がビルドとなったキリオを襲う。

「こんなもの………!!!」

正面から迫ってくる弾を最小限の動きで避けたキリオは、すぐに反撃しようと体勢を立て直した。

しかし――

「おっと、気をつける？」

「あ？――なっ……………!!？」

避けたはずの攻撃が背後でUターンし、猛スピードで再び強襲。

「ぐあぁッ!!」

反応しきれずに自らの胴体へ直撃させてしまったキリオは無残に吹き飛び、スタークの足元まで転がる。

「おお、大丈夫か？」

「……………ぐっ!!」

からかうように顔を覗き込ませるスタークに向かってドリルクラッシュヤーを薙ぎ払うが、読まれていたのか容易に回避されてしまう。

「もう遠距離からは撃たせない……………!!」

《ゴリラ!》

《ダイヤモンド!》

《ベストマッチ!!》

右手の武器でスタークを牽制しながら左手で1本ずつボトルを取り出し、ドライバーに挿し込む。

《Are you ready!?》

「ビルドアップ!」

ラビットタンクのボディに被さるように茶色と水色のスーツが形成され、キリオの身体を上書きする。

《輝きのデストロイヤー!ゴリラモンド!!》

《イエーイ!》

ゴリラモンド——ゴリラの肥大化した右腕とダイヤモンドの最高質な硬度を併せ持つベストマッチ形態。

キリオが現在持つボトルの組み合わせの中で最強の攻撃力を誇るフォームだ。

「オラツ……!はあッ!だあああああッ!!!」

「ぬう……………!?!」

一撃目はスタークが交差させて防御に用いていた両腕を捉え、力で押し勝つことに成功。奴が上半身を仰け反らせたところで二撃目を叩き込む。

「……さすがに強烈だな」

「……………いつ……………っ」

三撃目は軽くないなされ、そこからは徐々にこちらの繰り出す打撃が当たらなくなってしまう。

……さつきと同じだ。奴はこっちの動きや癖を見切つて、即座に対応している。

「ダイヤモンドはお飾りか？」

「うるっ……せえええええッッ!!」

ならば意識外から。

スタークの懐へ潜り込んだキリオは奴の視界の外から凄まじい右ストレートを放つた。

その軌道はスタークの胴体へ吸い込まれるように描かれ、重い金属音と火花を撒き散らしながら奴は後方へと吹き飛ぶ。

「ぬっ……ぐああ………っ!!」

《鋼のムーンサルト! ラビットタンク!!》

弾かれるようにボトルを入れ替えたキリオは再びラビットタンクフォームへと変身を遂げ、横たわるスタークにとどめを刺そうと腰のレバーを回した。

「勝利の法則は………!!」

《Ready go!!》

「決まった!!」

地面から飛び出した数式がスタークの腰を拘束し、身動きの取れない状態となった奴目掛けて片足を突き出す。

《ボルテックフィニッシュ!! イエーイ!!》

戦車の破壊力を備えた右足の跳び蹴りが奴へと迫る。

「うおおおおおッ!!」

「ふう……………」

———「そらよッ!!」

周囲に止めてあつた車両が浮き上がるほどの衝撃が広がる。

スタークを捉えていたはずのキックは———奴の手の中で止まっていた。

「なっ…………!?!」

「いいキックだ…………!」

ギリギリ、と受け止めた足を握りしめたスタークが勢い良く横方向へとキリオの身体を放り投げる。

「がはっ……………!!」

そのまま受身も取れずに地面を転がったキリオを見下ろし、スタークは片方の手を開き閉させながら口にした。

「ハザードレベル3、4つてところかな。……………つたく、情けないねえ」

「なんだと……!?」

くぐもった声でそう言い残した後、肩をすくめながらこちらに背を向けるスターク。

「だがまだまだ伸びしろはありそうだ。——じゃあな」

「待て……っ!」

黒い霧をまとってたちまちに姿を消した奴の影を追って、キリオは遠くへと手を伸ばす。

「……………ブラッドスターク」

奴が内浦にスマッシュを送り込んだ張本人だというのなら、その目的はなんだ？

あいつはどうして自分を狙っている？

「……くそ、わけわかんねえ」

人目がないことを確認したキリオはドライバーからボトルを抜き取り、ビルドの装甲を解除した。

●●●

「昼間はびつくりしたよね……」

「あれがスマッシュってやつ？」

「なんかイメージと違いましたわ」

ホテルの一室に集まってトランプを楽しみながら数時間前に目撃した出来事を振り返る千歌達。

「さつき撮った写真と比べてみて……あの怪物と戦っていたのが仮面ライダーで間違いないようデス」

「なんか苦戦してたみたいだけど……」

「どう思うキリオくん？」

「なんでお前らは俺の部屋でババ抜きやってんだよ」

放っておけばいずれ出て行くだろうと早めにベッドに潜り込んでいたキリオだが、い

つまで経っても退室する気配のない彼女達に耐えかねてじつと睨み返した。

「七並べにする?」

「いやそうじゃなくて」

「UNOの方がよかった?」

「だからちげーって!!早く出てってくれよ!!こっちは眠すぎて死にそうなんだってばもー!!」

「なんだか落ち込んでるみたいだったから元気付けようとしてるのに……」

「俺は至って元気だよ。元気ハツラツ」

「ほんとに……?」

連日のスマッシュの襲撃に続いて今日の戦闘はさすがに身体に響く。

顔にも出ていたらしいし……彼女達には無駄な心配をかけてしまったか。

「俺より自分達のコンディションを心配しろよ。ライブは明日なんだぞ」

はい、と各々が揃って返事したのを見て改めて枕へ顔を埋めるキリオ。

——
つたく、情けないねえ。

スタークに言われた言葉が頭に残っている。きっとあいつは何かを知っているんだ。
この世界がどうしてこんなことになってしまったのか。
スカイウォールとは……………パンドラボックスとはなんなのか。

「あ、神経衰弱はどう？」

「話聞いてたか？」

第4話 リバーシブルな歌姫

本日催される予定のイベントは、西都のとある公園で開かれる夏祭り。

当初はBernageのみが出演するはずだったのだが、メンバーの一人である葛城ユイの提案により急遽Aqoursとの共演が決まったのだという。

「やつと着いたな……」

「まだ設営中みたいだね」

バスから降り、会場へ向かって最初に目に飛び込んできた光景は、夕方から開催される祭りの準備に勤しむ人々の姿。

忙しそうに屋台やらテントやらを組み立てており、奥の方にある広場にはライブ用と思しき特設ステージが建てられていた。

「で、肝心のBernage様達が見えないみたいだが。詳しい待ち合わせ場所はどこ

なんだ？」

「……あつ！ちゃんと聞いてなかった……」

「千歌ちゃん………」

てへへ、と苦笑いを見せつつ舌尖を出して誤魔化そうとする千歌に皆の細めた視線が刺さる。

「……この公園、結構広めだぞ？」

「あんまりウロウロしてたら邪魔になってしまいますし……」

「かといってこのまま突っ立ってるわけには………」

「サプラー………イズ!!!」

「うおおおっ!？」

「わっ!？」

パパンツツ!!と、突然隣に立っていた木の上からクラッカーが二連発。

何事かと思い咄嗟に身体を向き直せば、それと同時に枝に腰を下ろしていた二つの人影が目の前まで飛び降りてきた。

「きやははっ!嬉しい反応してくれるね!」

ケタケタと無邪気な笑顔を見せながらこちらへ歩いてくる小柄な少女と、その後ろに付くようにたどたどしい歩き方をする長髪の少女。

「あなたは……………」

「ようこそ西都へ、A q o u r s の皆さん。もうご存知だと思うけど、あたしはB e r n a g e の小悪魔担当、葛城ユイだよ!こっちは真面目ちゃんの氷室ミカ!」

「ど、どうも……………」

妖精の如く突如現れた二人の少女は唖然とするキリオと千歌達に向けて簡単な自己紹介をし、「次は君達の番」とでも言うように笑顔を彼らの方向へ固定した。

「あ……………私は高海——」

「千歌ちゃんでしょう……………動画で見るとよりもずっとかわいい!」

「え?…ありがとうございます……………?えへ……………」

戸惑いつつも表情を緩ませて照れ臭さを隠せないでいる千歌。

彼女から視線を外したユイは、並んでいるA q o u r s のメンバー全員に対して一人

ずつ尋ねていく。

「君は……渡辺曜ちゃん！君が考える衣装っていつも素敵ね！ヨーソロー！」

「ありが——え!?よ、ヨーソロー!!」

「こちらは……桜内梨子ちゃんだ！君が作った曲は毎日聴いてるの！“海に還るもの”、ぜひ生で演奏してもらいたい！」

「ピアノの曲まで!」

「ダイヤさんに鞠莉さん！実際に見るとやっぱスタイルいいなあ……!!」

「そ、そんなこと……あるかもしれませんわね」

「ダイヤったら照れてるの〜?」

「鞠莉さんこそ、顔が赤くなってますわよ」

完全にユイにペースを持つていかれている。みんなこうやって面と面を合わせて褒められることに慣れていないのだ。

「それに果南さん!!ハグしてもらっていいですか!」

「え?私は別にいいけど……」

「ひゃあああああああ!!!」

果南に腕を回された途端に力の抜けた悲鳴を轟かせるユイ。

「そしてルビィちゃん、花丸ちゃん!くうくう!持つて帰りたいくらい愛らしい!!」

「ピギツ!？」

「なんだか照れるずらね……」

「君は——津島善子ちゃんね!」

「ヨハネよツ!!」

「キャー!!言われちゃった!!」

——なんだ、これは。

横でJK達が戯れている様子を死んだ魚のような目で眺めていたキリオの隣にユイのパートナー、氷室ミカが静かに歩み寄り、消えそうな声で謝ってきた。

「ご、ごめんなさい。ユイちゃん、ずっと前からA q o u r sの皆さんの大ファンで……」

「へえ……ランキングトップ3常連のB e r n a g e様が……」

千歌達9人に挨拶を終えたかと思えば——方向転換したユイが今度はキリオのもとへ近づいてきた。

……その瞬間ほんの少しだけ、ミステリアスな雰囲気彼女を包み込んだことには誰も気づかない。

「えつと……あなたは——」

「ああ、俺はただの保護者だ。裏方の仕事とか、いろいろ押し付けてもらって構わない」
「教員の方でしたか……急な依頼を引き受けていただきありがとうございます。少しの間、A q o u r s の皆さんをお借りしますね」

受ける受けないの判断は千歌達が決めたことで、自分は本当に付き添いで来ただけなのだが……………。

軽薄な印象から一変して頭を下げてきたユイに会釈しつつ、キリオはふと辺りを警戒するように見渡した。

昨日襲ってきたブラッドスタークとかいう男が今日はやってこない保証などない。

こんなイベントでの襲撃など目立つ行為はしなれないと思いたいところだが、奴は一般人の目があるところでも平気で戦いを始めるような野郎だ。

今日のライブは千歌達だけじゃなく西都を代表するスクールアイドルも一緒。無駄な騒ぎは起こしたくない。

(……念のため、怪しいところがないか調べてみるか)

「じゃあ、本番の予定を確認するね」

会場内にある出演者待機用のテント。

練習着に着替えたBernageとAqoursの面々がホワイトボードの前で集まり、パフォーマンスの流れを改めて把握する。

「みーちゃん、お願い」

「うん。……まずはわたし達、Bernageが最初に1曲、次に皆さんが2曲目を披露。軽い休憩を挟んだ後で、最後はわたし達全員のライブになります」

「合計3曲か。ちよつとしたミニライブよりも少なめの構成だね」

「はい！あたし達だけでお客さん取っちゃったら、出店のおじさん達に申し訳ないですからね！早めに切り上げちゃいましょう！その後もお祭りはしばらく続くので、よかつたら皆さんも楽しんでいってくださいね！」

あくまで自分達はゲスト。ここはいつものライブ会場じゃないということを考えられている。

Bernage——振る舞いから連想するものよりも、よほど律儀な人達なのかもしれない。

「では、さつそくりハーサルに移りましょう。3曲目は既にポジションの確認は済ませているとはいえ……ぶつつけ本番で合わせるわけにはいきませんから」

ミカの呼びかけで皆が席から立ち、ステージへ向かうためテントからぞろぞろと歩き出す千歌達。

「緊張するねえ……いつもと環境が違うからかな」

「だねー……」

「そういえば、キリオ先生は？」

ルビイの一言を聞いて全員がそれぞれの顔を合わせ、瞳を瞬かせる。彼が急にいなくなるのはいつものことだ。

またか、とため息をついたダイヤがその長髪を軽く整えつつ口を開いた。

「その辺で会場設営の手伝いでもしてるんでしょ」

「まずはライブのことを考えましょうよ。キリオがいなくてもLiveは始まるんだから！」

鞠莉の言う通りの言わんばかりに皆それ以上は気にすることなくステージへと足を進めた。

●●●

適当に準備を手伝いながら周囲を警戒すること1時間。

何事も起きないまま時間が過ぎていき、キリオのなかで徐々に「襲われるかもしれない」という危機感が消えつつあった。

「……トイレ」

テントを立てたり商品を運んだりと体力を使う仕事が多い。

ただでさえ疲れが溜まっているというのに……と心の中で散々愚痴をこぼしながらも公園の中心から離れた場所にある公衆トイレへと向かう。

「……………ふう——」

直後、ただならぬ気配を察知したキリオはノールックで横からの“銃撃”を回避し、即座にビルドドライバーを取り出して腰へ装着。

「——はっ！ ビンゴ。一人になった途端に来ると思つてな」

引きつった笑みを浮かべたキリオは目の前に立つ“黒い戦士”を睨んだ。

《ハリネズミ！》

《タンク！》

《Are you ready?》

「変身ツ!!」

無言で再び引き金へ指をかけたのを見てすぐにボトルをバックルに装填。速攻でビルドへと変身する。

予想していたとはいえ急な襲撃であることに変わりはない。思わずベストマッチではないボトルを選んできました。

……ちよーどいい、先日手に入れたばかりの“ハリネズミ”の力、試してみるとする

か。

「コブラの次はコウモリか？お前、スタークの仲間？」

「……………」

一向に口を開く様子のない敵に右腕の針を突きつけ、突進。

「……………！」

奴はバルブが取り付けられたブレードでこちらの体当たりを難なく受け止めた。

「なんか言えよ」

「……………無口なんでね」

「あつそ。——なら」

《Ready go!!》

《ボルテックアタック!!》

爆発的に伸びた無数の針がコウモリ男の身体を弾き飛ばし、その隙に背後へと回りこむ。

「だあッ!!」

棘だらけの拳が奴の背中へ迫るが、あと数センチのところまでブレードを用いた回転切りによって防がれた。

すぐに追撃へと向かうもあらゆる方向からの打撃が防御され、奴がもう片方の手に

持っている拳銃でカウンター攻撃を仕掛けられてしまう。

スタークと違って戦闘中に軽口は叩かない。キリオとしてはそちらの方が好ましいところだが……………。

「ロボットみたいに無駄のない動きだな。普段の生活でもそれだけ寡黙だと苦労してるんじゃないのか？」

「……………」

《アイススチーム!!》

姿勢を低くして一歩踏み出したコウモリ男がこちらの反応しきれない速度で一気に接近。

「……………っ!?ぐあッ!!」

氷結した刃が「ハリネズミ」の腕を掠め、咄嗟に下がるも今度は拳銃の方で銃撃を喰らってしまう。

《エレキスチーム!!》

「まずい……………っ!!」

急にブーストをかけてきたコウモリ男から逃れようとするがそう簡単にはいかず――

「ぐあああああッ!!」

幾筋もの電撃がキリオの身体を捉え、全身に凄まじい衝撃が走った。

……………強い。トライアルフォームじゃ歯が立たな——

《スチームブレイク!!バット!!》

「うつ……………!?!」

禍々しい光弾が銃口から膨れ上がり、巨大なエネルギーと化した塊がキリオへと迫る。

反射的に身構えたキリオは“タンク”の足を地面にめり込ませ、コンパスのような動きで放たれた光弾を後方へといなした。

「……………」

「はあ……………はあ……………。これ以上戦いを長引かせるのは無理だな」

先ほどの爆発音を聞いて駆けつけてきたのか、遠くにこちらへ向かってくる人影が見える。

コウモリ男は何も言わないまま、胴体に取り付けられたパイプから霧を放出して姿をくらませてしまった。

「……くそっ……敵はスターク一人じゃないってことか」

●●●

「あ、みーちゃん。ずいぶん長かったね」

休憩時間。

Aqoursのメンバーが各々で水分補給をするなか、ユイはトイレから戻ってきたミカのもとへ駆け寄った。

「ごめんね。……そ、それと」

「うん？」

「ユイちゃんの分の飲み物も買ってこようとしたんだけど……全部売り切れて……」

彼女の発言を聞いたユイは緩めていた口元をほんの少し引き締め、人工的な“笑顔”を見せる。

「……そっかー……ダメだったかあ……」

「ごっ……ごめんなさ——」

「ううん、大丈夫。わざわざありがとね」

パツと自然な笑みを取り戻したユイはミカの肩に軽く触れると、後ろで休んでいた千歌達に向けて言った。

「さあ、次で最後にしますよ！次こそ完璧に合わせましょう！」

「うんっ！頑張ろうね、ユイちゃん！」

この少しの間に東都のスクールアイドル達と打ち解けてしまった様子のユイを見て、ミカは震えた。

——頼もしさというよりも、一瞬で人の心を掌握してしまう彼女のカリスマ性に。

……………怖い。今ある感情は、たったそれだけだ。

第5話 陰謀のライブ

「じゃ、行ってくるね」

「席は特別に用意しておきましたから、楽しんでいってくださいねー」

「ああ、頑張れよ」

ステージ衣装に着替えた11人の少女がこちらへ手を振ってくるのを、キリオは半眼で見送った。

この祭りの目玉と言ってもいい、東都と西都それぞれを代表するスクールアイドルのライブだ。

さすがに今回ばかりは居眠りの類はできない。モラル的にも、スクールアイドル部の顧問としても。

「えーつと……席は確か………」

Bernageの葛城ユイが無理やり作った関係者席に座るよう言われたが……。

「……まさか、あれか？」

先頭列よりもさらにステージに近い、飛び出した席が二つほど。

やけに目立つ位置に用意された関係者席に少々歩み寄り腰を下ろすと、背後から千歌

やユイ達のファンの恨めしそうな視線が刺さってくる。

「[「どうしてこんな席を用意したんだ……………」」

隣の席から聞こえてきた声と重なる。

「え?」

「ん?」

キリオと同じ、もう一つの「関係者席」に座っていたのは高校生くらいの少年。

彼も同じ心境だったのか、キリオとは言葉を交わすこともなくただゆつくりとこちらを見つめたまま頷いた。

後ろから注がれるファン達の視線に耐えられそうにないキリオは同じ境遇である彼へ自然と口を開く。

「……………もしかして、葛城ユイの知り合い?」

「あんたもなのか?」

「俺は——A q o u r sの付き添いで来ただけの教師さ」

「ああ、そういや……………さつきコラボがどうか言ってたな、葛城のやつ。…………俺はあいつ

のクラスメイトで、半ば強制的に連れてこられた」

「なるほど、なんとなく想像できる」

それにしてもわざわざ一人だけライブに招待するなんて不自然だ。この少年は葛城ユイの彼氏——いや、さつき彼はそんなことは口にしていなかった。

「お、始まるか」

「……………」

既に時刻は19時を回っており、先ほどまで点灯していた照明が消えたことで会場は一気に暗闇に包まれる。

そして押し上げるような歓声と共に——彼女達はステージに現れた。

まずは1曲目。不意を突くように始まったのは——Bernageの二人が披露する「MULTIPLE」だ。

天体をコンセプトとした神秘的な衣装を身にまとった赤と黒、二人の歌姫が会場を独自の世界観に引き込んでいく。

(…………)の二人のライブをちゃんと見たのは初めてだが…………なるほど、確かにこれは——

メンバーが二人しかないという点は北都の Saint Snowと同じ、イメージカラーも通ずるものがあるが………こちらの方が観客を魅了するというスキルに長けている。

葛城ユイ——普段見せている“お調子者”がまるでフェイクのようだ。この瞬間だけ切り取ってみればいつもの幼さよりも妖艶さが勝っていることは明白。

そして氷室ミカ——最初に顔を合わせた際の控えめなイメージともまた違う、物静かな魅力を秘めている。加えて彼女に関しては歌唱力がずば抜けている。全スクールアイドルの中で随一と言っても過言ではないだろう。

——『ああ、ダメだなこりや』

「うつ……………!?!」

「……う？どうかしたのか？」

頭に亀裂が入るような痛みが走る。

隣で苦しうに表情を歪めたキリオを見て、隣に腰掛けていた少年が声をかけた。

「おいあんた、大丈夫なのか？」

——『火星でダメージを受けすぎたか。……仕方がない、一旦活動は休止と

しよう』

声が、聞こえる。……誰の？

よく思い出せ、これは知っている声だ。

「おい、あんた!!」

「……お……まえは……」

「あ!?!」

『ドライバーと……そのパネルはお前に預けておく、無くすなよ?……』
ああ——』

「……誰だ……!?」

——『もう聞こえてないか』

「おいッツ!!」

「……!?」

少年に肩を揺すられて我に帰る。

ふと顔を上げれば赤と紫のライトがステージを彩っていた。

「……すまない、急に頭痛が……」

「つたく……びつくりせんなよ」

「悪いな……えつと……」

「万丈だよ、万丈リュウヤ」

「万丈……か、礼を言うよ。俺は戦兎キリオだ」

流れでお互いに自己紹介を終えたところで会場を満たしていた音楽が止まり、Bernageの二人もフィニッシュのポーズをとる。

鼓膜が痛むほどの歓声上がり、ステージを照らしていた光からは徐々に色が抜けていった。

「さあて皆さん、こんばんわーーーーー!!」

軍隊の如く揃った拍子で返答するファン達を見て、キリオとリュウヤは耳を塞ぎながら瞳を細める。

「あわわ……びつくりした。もうちよつと抑えて抑えて。あんまりうるさくしちゃうとスタツフさん達に怒られちゃう!」

ニツと口の端を上げたユイはマイクでステージ上手を指し、観客の視線がそこへ集中する。

「今日のライブはあたし達だけのものじゃないよ!なんとスペシャルゲストに来ても

らっています!!」

ざわつくファン達からは既に落ち着きが失われている。Aqoursが出演するこ
とは事前にわかっていたので、観客のなかにはわざわざ東都から足を運んだ者もいるか
もしれない。

「Aqoursの皆さんですどうぞー……ー!!」

ユイの呼びかけに応じて千歌達9人が一斉にステージの横から登壇する。

トップ3の内2つのグループが並んでいることがよっぽど衝撃的だったのか、コール
まで上がるほどの盛り上がりっぷりだった。

「あいつらって………」

「こんな人気あったんだなあ………」

キリオとリユウヤは今まで興味を示していなかった身近にいた少女達の一面を思う
知らされることとなった。

「はーい皆さーん! かんかん!」

——みかん!

「かんかん!!」

——みかん!!

「かーんかーん!!」

—— み・か・ん
!!!!

「……なんだ、これ」

「コールつてやつじゃないか。……そういえば前に千歌達が決めたって言ってたな」

「はあ……」

リユウヤはスクールアイドルにあまり興味がなかったのか、ライブに関しての知識もほとんど見受けられない。キリオが言えた口ではないが。

「うーん千歌ちゃんつたら可愛すぎだよまったく!!」

「それでは次の方——」

9人全員のコールと紹介が終わり、いよいよ次のプログラムへと移ろうとミカがマイクを持ち口元へ近づける。

「それではここで2曲目……A q o u r sの皆さんで、『未来の——』」

瞬間、ステージを照らしていたライトが騒音と共に消え、会場に暗闇が訪れた。

「なんだ……………!?!」

何かが破壊される音。

すぐそばで巨大な炎が上がり、客席に座っていた人達は咄嗟にその場を離れようと滝のように会場から逃げていく。

「なに……？なにが起きてるの……!!」

ステージの上に立っていた千歌達はただ呆然と逃げ惑う人々を見下ろすことしかできなかった。

「と、とにかく避難を！」

「……あれって——」

梨子が指で示した先にあるのは大柄な人影。

暗闇に煌めくのは右腕から射出されている火柱。炎を操る——スマッシュだ。

「怪物……!!」

「スマッシュですわ！」

「……！危な——」

バーンスマッシュが放った火球は照明が取り付けられていた柱に直撃。被弾した部分が焼け切れ、ステージへと真っ直ぐに落下してくる。

「……!! ユイちゃん危ない!!」

「きゃあああああああつ!!」

地を蹴り飛ばし、駆け出したミカはユイの身体を覆うようにして庇った。

「二人とも…………!!」

「千歌ちゃん!」

千歌が伸ばした手は空を切るも、彼女はユイとミカを助けたい一心で走り出した。
「ダメ……！間に合わない——」

「うおおおおおおおッ!!!」

刹那、驚異的なスピードで壇上へと上がってきた人間が一人。

一人の少年はユイとミカを腕で包み込むようにして突き飛ばし、そのまま勢いに任せて落下してくる柱の真下から連れ出した。

「あつぶねえ……！死にとこだった……!!」

「万丈くん……!?!」

リュウヤが二人を助け出したのを見て胸を撫で下ろすのも束の間。千歌はスマッシュの銃口がこちらへ向いていることに気がつき、目を見開いた。

《ボルテックブレイク!》

その直後、螺旋状の斬撃が発射された火球を打ち落とした。

先日目撃した赤と青の戦士が、千歌達を守るようにスマッシュの前に立ちはだかる。

「……！仮面……ライダー……？」

「お前達なにやつてる！ここは危険だ、早く逃げろ！！」

「はっ……はい！！」

バーンスマッシュの火球を防ぎつつ彼女達の逃げ道を作る。

「……くそっ……！」

「万丈くん……！？」

「先に行け！！」

ユイや千歌達を送り出したリュウヤが続こうとしたその時、彼を行かせまいとするもう一体のスマッシュが突如として現れた。

身体のあちこちに備えているプレス機構が特徴的な怪物。生身でこの両腕に挟まれればひとたまりもなさそうだ。

「おいお前……！なにしてんだ！！」

キリオは傍でプレススマッシュと対峙しているリュウヤに気がつくも、バーンスマッシュの対応で手が出せないでいた。

「チィ……！——オラアッ！！」

「……!？」

予想外にも素手でスマツシユと戦い始めたリユウヤに呆氣にとられるも、その奮闘ぶりを見てしばらくは持ちこたえられると判断。

キリオは1本のフルボトルを取り出しては、隙を見てリユウヤへと投げ渡した。

「あ……うなんだ——これッ!？」

プレススマツシユに拳を浴びせながらも受け取った青いボトルを見つめるリユウヤ。

「さすがに素手のままじゃ埒があかないだろ。それを振りながら戦え」

「振りながら……てかあんた誰だよ!？」

「んなこた今はどうでもいいんだよ!こっちはこっちで手一杯なんだ!!死にたくなけりゃ死ぬ気でやれ!!」

「くっそ……どうしてこんなことに……!!」

●●●

「はあ……っ……はあ……っ!」

「……ここまでくれば………平気だよね……う?」

会場から逃げてきた人々が多く集まるなか、千歌達はふと欠けている人物がいること

に気がつく。

「……キリオくんは？」

「このなかにいるんじゃないかな」

曜が示した先に見えたのは通る隙間もないほどの人混みだった。

「……はぐれないように探しましょうか」

「まったく世話が焼けるわね」

「……あれ？」

不意にミカが短く声を上げ、皆の視線が彼女へと集中した。

その表情からは血の色が抜け落ちており、いつものそれよりも一層気弱な印象を与えてくる。

「どうかしたの？」

「……ユイちゃんが——」

「おーおー、やってるやってる」

夜闇のなかでスマッシュと戦う仮面ライダーと少年の姿を目で追う者が一人。

高台の上で血のように赤い”蛇”が眼下を見下ろし、不敵に笑った。

「さあ、実験を始めようか」

第6話 見え始めるエネミー

「ユイちゃんが……ユイちゃんがない……!!」

「そんな……さつきまで一緒にいたのに!」

逃げ惑う人々の波から一旦離れ、はぐれてしまった人間がいることに気がついた千歌達が集まる。

ユイとキリオ——キリオはともかくユイは共に行動していたはずだが、少し目を離した際に人混みのなかへ流されてしまったのか。

「わたし……ちよつと探してくる! 皆さんは戦兎さんの搜索をお願いします!!」

「え!? 一人じゃ危ないよ!!」

「大丈夫ですから!!」

ほとんど強引に、単独でその場から抜け出したミカは脇目も振らずに走りだす。

「……はあ……っ……はあ……!!」

——我ながら当初から比べて随分と演技が上手くなったものだ。

ユイを探すつもりなんてないし、その必要もない。彼女にかかる心配なんか無いのだ。

気にするのだとしたら、それは自分自身。こうしている今も怖くて怖くてたまらない。

「……ほんと、どうにかなりそう……だよ……」

《バット!》

衣装の隙間から取り出した『拳銃』。

機械的な装飾が施された黒いそれを片手で握り締め、もう一方の手に収まっている『ボトル』をスロットに装填。

「誰も……見てない、よね?」

改めて周りに人がいないことを確認したミカは、待機状態へと移行した拳銃を構え――

「……………蒸血」

辺り一面に撒き散らすように、黒い霧を散布させる。

《ミストマツチ！》

《バット……バツ……バット……》

《ファイヤー！》

いくつものパイプが身体から伸びる“コウモリ”。霧をまとったミカは一瞬にしてその怪物へと変化したのだ。

暗闇に揺らめくコウモリ型のゴーグル。

「……………行かないと」

——彼女のもう一つの名は“ローグ”。
“ナイトローグ”だ。

●●●

「おりゃあああああッ!!」

「——！」

強烈なパンチを身に浴びたプレススマッシュがよろめく。

青い炎を拳にまとわせ、万丈リユウヤは勇ましくも生身でスマッシュと互角以上の戦

いを繰り広げていた。

「すっげえ……なんだこれ……!!」

右手に握った「ドラゴンフルボトル」を上下に振り、成分を活性化させることでパンチ力が底上げされる。

「ははっ……!! 負ける気がしねえ!!」

次々とプレススマッシュシュへ連続打撃を与えていくリュウヤ。格闘技のクラブへ通っていることもあつてか、自我のないスマッシュ^敵シュが放ってくる攻撃には全て対応できた。

「ノロいんだよ……!!」

「ひゃー……すげえな、あいつ」

遠目でリュウヤの戦いを眺めていたキリオがバーンスマッシュシュの火球を弾きながら感嘆の声を漏らす。

通常生身の人間がスマッシュシュを倒すなんてことはまずありえない。ありえないはずなのだが——

「凄まじいな、万丈とか言ったか……。——おっと!」

発射された火炎を撃ち墜としつつ接近。スマッシュシュの身体をドリルクラッシュャーで

確実に削っていく。

とりあえず戦況に支障はない。いつも通り難なく倒せるくらいのスマッシュだ。

……問題なのはスタークやコウモリ男がやって来ないかどうかだが――

「とにかくまずは……！」

《Ready go!!》

ゴリラフルボトルをドリルクラッシャーに装填。

「勝利の法則は決まった……！」

《ボルテックブレイク!!》

ボトルの成分によって巨大な拳が生成され、先ほどまで放っていた攻撃とは一変して強烈な打撃がバーンスマッシュに炸裂した。

「……………ツツ!!」

「よつと」

爆発の衝撃で吹き飛んだバーンスマッシュが地に伏せた隙を突いて「エンプティフルボトル」を向ける。

いつもの通りスマッシュの成分が抜き取られ、それと同時に被害者である人間の姿が現れた。

「さて――うわあ……………」

リュウヤに加勢しようと背後を振り向いたところで思わず声が出た。

修羅のような形相をした彼が自力でスマッシュにとどめを刺す瞬間が目に飛び込んできたのである。

「はあ……ッ！はあ……ッ……!!」

「……まじか、お前」

もう一つエンプティフルボトルを取り出したキリオが若干引き気味に成分を回収。

……襲ってきたスマッシュはどちらにも倒すことができた。しかし問題は別にある。

「……奴らがどこかに潜んでいるはずだ」

「おいあんた……」

「大勢が集まつてる所を狙うなんて……やっぱり何か狙いが——」

「無視すんな!!」

ブツブツと考えていることを無意識に口から放出していたキリオにリュウヤの張り手が叩き込まれる。

「つてーな!!何すんだこのバカ!!」

「このボトル返そうと——今バカって言ったか？言ったよな？」

「ああ言った。……違う違う、今はそんなことで揉めてる暇はないんだよ」

「チツ……なんかもやもやるけど、確かにな」

今キリオとリュウヤが抱えている感情は同じだ。

……………ライブだったんだ、今日は。BernageとAqoursが初共演する日だった。

キリオ自身スクールアイドルに入れ込んでいるわけではない。それはリュウヤだつて同じだ。

けど――

「……………ひどい有様だな」

改めて破壊された椅子や机やらが散乱している会場を見渡したりリュウヤがふとつぶやく。

スマッシュによってめちゃくちゃにされてしまったライブ。千歌達が…………ユイとミカが創ろうとしていた大事なライブを。

彼女達が何日も前から準備や練習をしてきたかはわかっている。キリオも頑張っている千歌達を見て励ましをもらっていなかったわけではない。

だからこそ、今回の事件は今までのそれよりも腹立たしい。

「……………あいつらは……………俺の――俺達の平穏を壊しすぎた」

「平穩ねえ……そんなもの、この国のどこにもありはしないよ」

「……………!?!」

キリオとリユウヤが上空から聞こえてきた声に反応して振り向く。

真紅のオーラをまといながら地上へ落下してきた一人の赤い蛇。一目見た瞬間に殺意が湧く姿がそこにあつた。

「スターク……」

「おっ覚えててくれたか」

「誰だデメエ……?」

睨み合う三人のなかでリュウヤだけが状況についていけない。

人間とは思えない戦闘力からスターク達と繋がりがああるかもしれないほんの少しだけ睨んでいたが、どうやら本当にただの一般人らしい。

……だが、今回の襲撃を仕組んだのもスタークの仕業という事実は変わらない。

だとすれば――

「……お前、ただで帰れると思うな」

「おつかないねえ。……が、お前の相手はオレじゃない」

「ああ……？」

刹那、遠方から発射された銃撃がビルドの装甲に直撃。

体勢を崩したキリオのもとに大きな翼を生やした漆黒の戦士が突っ込んでくるのが見えた。

「コウモリ男……!?!」

そのまま強引に身体を掴まれたキリオはなすすべなくその場から連れ去られてしまう。

「くっそ……！おいお前!! 突っ立ってないで逃げろッ!!」

「あ……？」

徐々に離れていく仮面の男の忠告を聞いて、リュウヤはやつと今の状況を悟った。

眼前に立つのは明らかにヤバそうな雰囲気醸し出しているコブラの怪物。そしてリュウヤの武器は——先ほど返しそびれた『ドラゴンフルボトル』一本のみ。

冷や汗を流しつつ距離をとるリュウヤだが、それもスタークの脚力を持つてすれば1秒足らずで肉薄できるほどではない。

「万丈リュウヤだな？」

「……だから誰だよお前は。どうして俺の名前を知ってんだ？」

拳を構えつつ質問を始めたリュウヤ。

まさに苦肉の策。逃走方法を思いつくまでのわずかな望みに賭けた時間稼ぎだった。

「そりやあなあ……お前のことは赤ん坊の頃から知ってるよ」

「は……？」

奴の口から出た言葉は、リュウヤにとって信じられないものだった。

それもそのはず、リュウヤ自身親の顔も知らないまま孤児院に入れられ、そこで育った。赤ん坊の頃からの知り合いなんて施設の人間くらいしか——

「……ふざけんな。俺はお前みたいな胡散臭い野郎は知らねえ」

「さて、どうだか。このマスクの下がどんな顔をしてるか………気にならないか？」

軽快な口調で、時折低い声音を混ぜて話すスタークの言葉には表現し難い魔力が秘められていた。

……すなわち、*“挑発”* という名の魔力が。

「……ああ、気になるな……めちゃくちや」

逃げるための策を考えていた脳内が吹き飛び、血が上った思考が全身を支配する。

どこの誰とも知らない仮面野郎から借りた物だが——この際なんでもいい。

目の前に立ついい好かない野郎を殴るための武器が必要だ。

「歯あ食いしばれ」

「はっ単純な奴め。いいぜ………来いよ」

ドラゴンフルボトルを上下に振った後、リュウヤは迷いを振り切り地面を蹴り飛ばした。



「……ダメ！全然見つからない!!」

避難してから既に40分近く経過しているが、キリオはおろかユイとミカが帰ってく

る気配もない。

取り残されたように佇んでいたAqoursの面々だったが、リーダーの一言で彼女達の表情が引き締まる。

「……私、ちよつと探してくるよ」

「千歌ちゃん……!?!」

曜が引き止めようとするのも構わずに走り出した千歌。

——何が何だかわからない。わからないけど……嫌な予感がしてならない。

「……!?!なに……!?!」

あてもなく敷地内を駆けていた千歌だったが、右方向に迸った閃光を捉え、反射的にそちらへと身体を向ける。

金属同士が擦れ合う——何かが争っているような歪な音。

「……………」

それは木々が立ち並ぶ、公園を囲むように拡がっている森。

「あれは……………」

暗闇で満たされた空間のなかに——二つの人影が驚異的なスピードで戦闘を繰り広げているのが見えた。

片方はコウモリのような外見をしていて、もう一方は——

「……仮面ライダー……？」

第7話 イビルの企み

「フンツ……！ハッ！オラアアアアツツ!!」

ドラゴンフルボトルの力が備わったリユウヤの拳が次々にスタークの身体を射抜く。

「おお……!!」

スタークは連続で放たれるパンチに即座に両腕でガードすることで対応してみせるも、徐々に押されていることは明白だった。

生身の人間でありながら尋常ではない戦闘能力を秘めているリユウヤを見て、奴の口元から笑いが漏れる。

「きひっ……くは……っ……ハハハハハツツ!!ハザードレベル2. 2……2. 3……!!」

「ああ……!!」

拳を受けるごとに何かを測定するようにそう声を上げるスタークに怪訝な目を向けつつも連打は止めない。

「なにわけわかんねえこと……言っただあ!!!」

腰を思い切り捻り、大きく身体ごと回転させて勢いをつけた右手が弾丸のような速度

「ライダーシステムも装備していないお前が、オレに敵うわけないだろう？……今日はここまでだ」

「……………っ……………!!待て……………!!」

「じゃあな」

どこからともなく取り出した黒い拳銃から霧を発生させ、自らを包んだスタークは瞬く間に姿を消してしまった。

「……………何なんだよ……………いったい……………!?!」

●●●

《タカ!》

《ガトリング!》

《ベストマッチ!!》

《Are you ready!?!》

景色がスライドしていくなか、高速で飛び回る敵に対抗するべくボトルを取り替えるキリオ。

「ビルドアップ!!」

オレンジと灰色のボディが形成され、
“コウモリ”の上空からの銃撃を避けながら装
着。

《天空の暴れん坊！ホークガトリング!!》

《イエーイ!》

空中戦ならこのフォームがベストだ。

ガトリングフルボットの成分を元に製作した
“ホークガトリング”で遠距離攻撃
にも対応できる。

「……………無駄な抵抗はやめろ」

「やめるかよ……………!!」

《10! 20!》
テン トウエンテイ

真上から突進してきたローグに向かって機関銃を乱射。奴が回避する
“線”を追う
もこちらの速度が追いついていない。

キリオは背中から伸びている“タカ”の翼を肥大化させ、ローグと同じ土俵
空へと舞い上がる。

「……………」

「落ちろ……………ッ!!」

黒い巨翼を目印にホークガトリングを発砲。天の川の如く夜空に弾丸の直線が描

かれた。

しかしまるで当たらない。こちらの腕がどうこうというよりも向こうが速すぎる。

「無駄だ」

「……そう判断するのは——まだ早いぜ？」

全力で、“回転”。

《10！20！30！……》
テン トウエンテイ サーティ

ホークガトリンガーのマガジンを回転させ、エネルギーを充填。

40、50、60、70、80、90——そして、

《100！フルバレット！！》
ワンハンドレッド

球状に出現した数式に囲まれたローグが動きを止める。この領域に入ったらその瞬間…… “的” 同然だ。

「なに……!？」

「さあ、実験を始めようか。数撃ちや当たるとてのは……本当なのかな？」

奴が回避しようとした直後に引き金を絞る。

360度に放たれた銃弾の雨霞がローグへと殺到し、回避不可能な状態へと陥った奴はなすすべなくその身に射撃を浴びることとなった。

「きやあつ……………!!」

捉えた……………!

このまま畳み掛ける。反撃の隙を与えるな。

「喰らええええええええええツツ!!」

「……………!」

無理やり身体を捻ったローグは一発の銃弾を明後日の方向に放つ。

弾丸は大木を貫き、千切れた幹が横倒れになる瞬間が視界によぎった。

「はっ……………!どこ狙って……………」

「きやあああああああつ!!」

構わず奴に攻撃しようとした直後、鮮烈な悲鳴が迸る。

倒れかけている木の真下に……………一人の少女が尻餅をついていたのだ。

「なっ……………千歌……………!!」

高海千歌の姿を一瞥したキリオはすぐさまその場を離れて猛スピードで大木へと向かう。

「クソッ……………!!」

ホークガトリンガーを発砲し幹を木っ端微塵にしたのも束の間、破片の先に見えた黒い銃口がキリオと千歌を狙っていた。

《フルボトル!》

「油断したな……………!!」

「うつ……………!!」

《スチームアタック!!》

発射された追尾弾頭が煌めき、不規則にうねりながらキリオ達のもとへ殺到。

「危ないッツ!!」

千歌に覆いかぶさるようにして弾丸から彼女を守る。

巨大な爆発が上がり、凄まじい衝撃に耐えながらも少女の身体を抱えて地面を転がった。

「がはっ……………!!」

さすがに直撃はまらなかったか。変身が解除されたキリオはすぐさま起き上がると爆煙の向こう側を睨んだ。

「……逃げやがったか」

ガンガンと痛む頭部を抑えつつ後ろを振り向く。

「えっ……？ キリオくん………？」

「——最悪だ」

自分が仮面を被っていないことに少し遅れて気がついたキリオは、ぽかんとした面はこちらを見上げる千歌に青ざめた顔を向けた。



結局、最高の盛り上がりを見せたライブは、最悪の幕引きを迎えてしまった。

怪我人は少なかったものの、人々に刻まれた恐怖が……スクールアイドルの築き上げてきた「平穏」を壊していく。

「ごめんなさい………っ………ごめんなさい………!! あたしが………皆さんを誘ったから………こんなことに………巻き込んで………ッ!!」

ユイは気絶した状態で発見され、そのまま病院へ搬送。

責任を感じているのか、彼女はリユウヤや千歌達にいくら励まされても涙を止めることはなかった。

「ユイちゃんのせいじゃないよ……」

「だって……！だってえ……っ……！！」

「スマツシユが現れるなんて……誰も予想できませんもの」

「そうだぜ葛城。……氷室も、あんま気落とすなよ」

ユイの涙声を背に、キリオは病室の外で暗い廊下の床を見つめながら、ふと先ほどの戦闘のことを思い出していた。

「……………あのコウモリ男、俺の攻撃を受けた時——」

『きやあつ!!』——と、確かに発した。

あの時は戦いに必死で気に留めていなかったが……………あいつの中身は女だったのか？

ボイスチェンジャーの類でも使用しているのだろう。声はくぐもっていて性別は判別できない——そのせいで自然と男だと決めつけていたが。

「…………とりあえず一つ手がかり…………か」

「キリオくん」

背後から聞き覚えのある声がかかり、反射的に振り向く。

真剣にこちらへ視線を注いでいるのは——数分前にキリオが変身を解除する瞬間を目撃した、千歌だ。

「どうかしたか？」

「……この状況で、とぼけるつもりじゃないよね？」

かつてないほどに千歌はまっすぐな瞳を向けてきた。

……隠し通すのは失敗した。取り繕える望みもない。

「はあ………みんなには言うなよ」

「………どういふことなの……!? どうして……いつから仮面ライダーに——!」

「あんな千歌」

一歩近づいて顔を合わせる。千歌とこちらの目線が重なり、やがてキリオが口を開いた。

「俺がどうしてこのことを黙っていたのか……今回の件も含めてよく考えろ」

「……!」

「だが言うならば……俺は教師だからだ。教師が生徒を守るために戦うのはダメか？」

「それは……—そうじゃなくて!!」

咄嗟に人差し指を立てて「ここは病院だぞ」と言った後、キリオは身体の向きを直して皆がいる病室の中へと入った。

「今回の事件は非常に残念なことになってしまったが……はつきり言つて俺達にはどうすることもできない」

「そう……ですね。A q o u r sの皆さんは、できるだけ早くに東都へ戻った方がいいかと思います。怪物達が何を狙っているのかはわかりませんが……」

ミカの言葉を聞いて何かを悟ったのか、ダイヤが険しい表情を見せる。

「……スクールアイドルという文化の崩壊を狙っているのでは？」

「えっ……？」

「確かに……その可能性もあり得るな」

「それは……どうして？」

「政治の時間に教えてもらつたでしょ？ 果南ったら……授業中に居眠りしてるから」

現在の冷戦状態を取り持つているのは「スクールアイドル」という平和的象徴。国民が求めるものを「争い」から遠ざけるための、いわば戦争防止装置。

しかし何者かがスマッシュという「兵器」を国へ忍ばせることによって、各国は互いに疑心暗鬼の状態となる。そうなればもはやスクールアイドルという存在は意味を成さなくなる。

スタークや“コウモリ”……奴らがどこに所属しているのかさえわかれば、多少はやりやすくなるのだろうか……。

「つまり“スマツシユ”を操ってる誰か”は……戦争を起こそうとしてるの?”」

「なんと極悪非道な……!」

「許せないぞら……!!」

「今は現状維持を目指すしかないな。……負けるなよスクールアイドル、今のお前達は国を背負っているに等しい」

キリオの言葉に頷く千歌達。

酷なお願いかもしれないが、表の舞台でそれができるのは彼女達だけだ。

「うつ……ひう……うつ……うつ……」

重苦しい雰囲気のままA q o u r sのメンバー達が部屋を出た後も、すすり泣く声が病室を満たしていた。

「……………じゃ、俺そろそろ帰るから」

「う、うん……………ありがとう万丈くん」

泣きじやくるユイを胸に抱きつつ、リュウヤへ会釈する。

「……………あつ……………これ返すの忘れてた……………。ていうか結局あいつ何だったんだ……………?」

上着のポケットの中に腕を突っ込んだ彼が出入り口前に立ち止まったのを怪訝な目で見やった。

「え?」

「あ、いやっ!なんでもない……………じゃあな!葛城が落ち着いたら、一応連絡くれ」

「うん」

パタン、と静かに部屋の扉が閉まる。

ミカとユイ。二人きりになった部屋のなかで聞こえるのは——やはり、“声”だけ。

「う……………っ……………ひつく……………!!ううう……………!——ぶはっ……………ははっ……………!!」

第8話 ティーチャーの仕事

西都で起きたスマツシュ襲撃事件はメディアによつて大体的に取り上げられ、日本全土に震撼が走ることとなった。

怪物を操る謎の勢力が存在するという情報も三国の各政府に通達され、街には以前よりもガーディアンや警備兵が増えた気がする。

なかでも注目すべきなのは東都と西都の関係だ。

以前から西都の方からスマツシュが送り込まれていることはわかっていたが、今度はその西都のど真ん中での襲撃。混乱が起こるのも当然と言えるだろう。

各政府の首相達は今一度対策を考えるために、首脳会議を開く可能性もある………と噂されている。

「テレビもネットも、この前の事件で持ち切りだね」

「そろそろ明るいニュースが欲しいよ………」

部屋に集まったA q o u r sの面々は連日の押しかけ取材によって明らかに疲労が溜まっている様子だった。

マスコミは実際にその場で被害を受けた者としての証言やコメントが欲しいのだろう。キリオからは「避難するのに必死だったから何も知らないって言え」と釘を刺されたが。

「理亜ちゃんと聖良さん……大丈夫かな」

ルビイが不安げな様子でそう呟いた。

「まあ、今一番疑われてるのはスマッシュの被害を一切受けてない北都だからな」

「ちよつとキリオ……」

ズバリと口にしたキリオを制止しようと善子の手が伸びる。

今回の件で北都に不信感を抱く者は少なからず出てくるはずだ。北都を代表するスクールアイドルであるSaint Snowに影響が出る可能性もないとは言い切れない。

「でも鹿角姉妹は政治家でも何でもない。難癖つける輩がいるとしても、そこまで気にする必要はないんじゃないか？」

「そうかな……。———そうだよね」

未だ不安が残滓しているようにすすきりしない笑顔を浮かべるルビイ。彼女は人一

倍優しい心の持ち主故に簡単には安心できない性分なのだろう。

「もう！いつまでこんな空気にいるつもりデース!？」

「鞠莉?」

机に片手を置き前のめりになる鞠莉が不意に声を張り上げた。

「こんな時だからこそ、私達スクールアイドルが頑張らなきゃいけないでしょ!？」

「……確かに、鞠莉さんの言う通りですわね」

「そう、だよね……うん！そうだよ!」

徐々に明るい雰囲気を取り戻していく千歌達を見て安心するようにため息をついた後、キリオは皆に背を向けて部室の戸を開いた。

「……キリオくん、どこ行くの?」

そう問いかけてきたのは……やはり千歌だった。

先日キリオが仮面ライダーであると知った彼女は、それ以来彼の一つ一つの行動がやけに気になってしょうがないのだ。

「ちよつと首相に呼び出されたから、行ってくるわ」

「ふーん………つて首相!？」

「じゃあな」

ありえない単語を聞いて目を剥く千歌を放置して、キリオはさつさと部室を出て行っ

てしまった。

●●●

「よく来てくれたな。まあかけてくれ」

「はあ……」

一人の男にそう言われて傍にあつた椅子へ腰を下ろす。

東都政府の主導を一任されている——とうの塔野首相。

キリオは彼から直接連絡をもらい受け、政府の研究施設まで足を運んだ。

客室らしき場所へ案内され、ふと周囲を確認すれば護衛のガーディアンすら配置されていない。聞かれたらまずい話でもするつもりなのだろうか。

「今日君を呼び出したのは他でもない。……………我々が保管している、パンドラボックスの解析を君に手伝ってもらいたいんだ」

「……マジです？」

「マジだ」

単刀直入な物言いに驚きつつもその内容に心が躍った。

パンドラボックスは火星から飛来し、「スカイウォールの惨劇」を引き起こした原因と

も言えるアーティファクト。一科学者として前々から興味を惹かれていた。

「でもどうして俺に？」

「浦の星女学院理事長から話は聞いている、とても優秀な科学者だとね」

「小原——理事長から……ですか？」

首相にパイプがあるとか何もんだよあいつ、と顔を引きつらせるキリオ。

まあ5年前からこの国は三つに分かれ、領土が縮小化したことで勢力図も大分変化した。小原グループも東都ではかなりの権力を有しているのだろう。

「優秀なつて言つても……俺特にすごい論文を発表したとか、画期的な発明をしたとかって経歴は無いと思うのですが」

「何を言う。……君だろう？ 『仮面ライダー』のシステムを作ったのは」

直後、その場の空気が瞬時に張り詰めていくのがわかった。

ほんの少しだけ千歌が情報を漏らした可能性を考慮したが、そんなことをする奴ではないことはわかつてる。鞠莉だってキリオがビルドであることすら知らないはずだ。

「実は小原さんに声をかけたのはこちらからだ。……こんなものが、ウチ宛てに送られてきてね」

塔野首相が机の上にあつたパソコンを操作し、くると画面をこちらへ向けた。

そこに見えたのは一本の録画映像。……戦兔キリオが仮面ライダービルドの姿に変

わる瞬間が正面から映されていた。

こんなアングルから撮影が可能な人物は限られている。——考えるまでもなくスタークの仕業だろう。

大方サービスエリアで戦った際に盗撮されたに違いない。

キリオの無言を肯定と受け取ったのか、首相は勝手に話を進めていく。

「表向きは先ほども言った通りパンドラボックスの解析に当たる研究員として君を雇いたい」

「……………裏の方は？」

「——君を、我が国の戦力としてスカウトしたい」

「断固拒否します」

「即答か、まあ予想はしていたが」

冗談じゃない。こうなるのが嫌でずっと正体を隠しながら戦ってきたんだ。

仮面ライダービルドは『都市伝説』程度で充分だった。それがスターク達の登場で一気に状況が一変してしまったのだ。

「スマッシュのことは当然ご存知だろう？ あいつらは以前から西都方面から東都へ流れていた。こちらとしても放つてはおけない」

「この前の襲撃事件についてはどうお考えで？」

「はっ……あんなの、西都側の言い訳作りに決まってるじゃないか。北都に予先を向けるための工作だよ。現在最も経済的に枯渇気味なのは北都だ、攻め落とすのも容易だろうからね」

塔野首相——この男はハナっから戦争を仕掛けるつもりだったのか？

「……俺は教師だ。断じてあんたの兵器なんかじゃない」

「すぐに答えを出すのは賢明とは言えないな」

「パンドラボックスの解析については引き受けましょう。科学者として興味もありますからね。——では」

それだけ言い残したキリ才は腰掛けていた椅子から立ち上がると出入り口へと足を進めた。

「……君もすぐにわかる時がくるよ」

「失礼します」

背後から聞こえた塔野首相の言葉を聞き流し、扉を開けて外へと飛び出した。

「……あれが、パンドラボックス」

施設の中央で厳重なセキュリティによって守られている箱を遠目で見やる。

5年前、火星から飛来し——かつての日本政府官邸で開かれていたとあるセレモニーの最中、そのど真ん中に落下したとされている。

箱から放射された光を浴びた人間は好戦的な気質が剥き出しになり——その影響を受けた権力者達がそれぞれの国を建てた結果、今の分裂した日本が出来上がった。

そして——

「……やっぱり、俺が持つてる『パネル』と似てるな」

キリオが高海家に世話になった際に抱えていたものはドライバーだけじゃない。パネルや数本のフルボトルもその時から持っていた。

ボトルのベストマッチを識別する力を秘めている緑色のパネルの外見は、パンドラボックスの側面と酷似している。無関係とはとても思えない。

「俺は……いったい何なんだ……？」

●●●

「んふふ——……順調に崩れてきてるね」

難波高校スクールアイドル部部室。

無駄に広い室内の中でたった二人の女子生徒が相對しながら愉快的時間を過ごしていた。

「ねえ、ユイちゃん……いつまでつ、続けるの……？　こういうこと……」

正面にいる人間と目を合わせることもできないまま、氷室ミカは消えそうな声音でそう尋ねる。

「ん、どうかしたのみーちゃん？」

「だって、その………なんか、危ないことになりそうな感じ………だけど……」

「うん、そうだね。三国が争い始めるのも時間の問題かも」

「……!?　じゃ、じゃあなんであんなこと………!?」

「なんでって………戦争起こすのがあたし達の目的でしょ」

「———え？」

ミカは何を今更、とでも言いたげなユイの顔を見て蒼白した。

「わっ………わたし達、スクールアイドルだよ!?　みんなの心の支えにならないといけないのに………どうして………!?」

「わっ！　びつくりしたあ！　急におつきな声出さないでよ！」

「ご、ごめんなさい………」

縮こまった長髪の少女を見下ろし、ユイは怪しげな笑みを浮かべつつ口を開く。

「もう、心配性だなあ。みーちゃんはあたしの言う通りに動いてくれればいいの！OK？」

「……………うん」

「よろしい」

ユイはもう彼女が後には引けないことを知っている。主導権はこちらが握っているということも。

満足げに笑うユイを見たミカは、俯きながら言った。

「……………変わっちゃったよね、ユイちゃん」

「変わった？……………どこが？」

「前はもつと……………歌と踊りが好きで、スクールアイドルが大好きで……………ライブしてる時が、一番楽しそうだった」

「……………今も」

「え？」

ふと顔を上げると、ユイの表情が視界に入る。

「今も大好きだよ、スクールアイドル」

懐かしい笑顔だった。

近頃の彼女が一切見せなかった、純粹な心からくるもの。

しかし――

「……………勝手に出てくるなよ」

「ユイちゃん…………？」

その笑顔は、ほんの数秒間の出来事だった。

すぐに冷徹な顔を取り戻したユイは席を立ち、ミカの隣まで歩み寄ってくる。

「いい？もう昔には戻れないの。…………言うこと聞いてくれるよね？だってみーちゃん、あたしの言うことならなんだって聞いてくれるもんね？」

「……………うん……………」

なぜだか申し訳なさそうに視線を落としたミカ。

もはや彼女のなかに…………自分の意志はほとんど残っていないかった。

第9話 二人のサイエンティスト

「入れ」

扉が小突かれて発生した軽快な音を合図に、室内にいた老人がしわがれた声でそう口にする。

パタパタと騒がしい小動物のような足音が聞こえ、難波重三郎は重そうな挙動で回転椅子を操作し後ろを振り返った。

「こんにちは会長！あたしに何かご用ですか？」

難波高校の制服に身を包んだ活気のある少女——葛城ユイ。

スカイウォールの惨劇以降も尚日本全土に勢力を広げている大企業、難波重工の会長に対して一介の生徒の身でありながらこのように軽薄な振る舞いができるのは彼女くらしいものだろう。

「よく来たなユイ。スクールアイドルとしての活躍はよく聞いている。あの小さかった子が……立派になったものだ」

「えへーやめてくださいよ会長」

緩みきった表情ではにかむユイ。……が、その無機質な笑顔を硬直させたまま続けて

重三郎へ尋ねる。

「……で、本題は何でしょう？」

幼い頃に両親を失った彼女は難波重工の傘下にある施設で育てられ、並外れた頭脳を評価されたことで現在は企業に一役買うほどの人員となっているのだ。

「近頃、誰かさんのおかげで世間も物騒になつてきただろ？……そろそろ新兵器についても考えてもらいたいと思つてな」

「たはー！ずいぶんと急ですね！いくらあたしがすぐくて最高で天才つて言つても限度はありますよー？」

ユイの大袈裟なジェスチャーに対して特に反応を見せない重三郎。長い付き合いなだけあつて彼女の扱い方はわかつているのだろう。

「……まあ、できなくはないですが」

「お前ならそう言つてくれると思つたよ」

「ただし一つ条件があります」

「……………言つてみなさい」

ふふ、と視線を逸らしたユイが怪しく笑う。

「その兵器を使う人材、あたしに決めさせてください」

「構わないが……それは“施設”の人間か？」

「いいえ、でもウチの生徒ではありません。ご心配は無用です、實力はあたしが保証しちやいますので」

胸を張ってそう語るユイの瞳に影が差す。

不思議なものでも見るような顔を浮かべる重三郎に、彼女は静かな声音でその人物の名を伝えた。

「……………万丈リユウヤっていう子なんですけど」

「お行儀悪いよユイちゃん。……………勝手に決めて大丈夫だったの？」

部室内に設置されてあるソファでゼリー飲料を啜えながら寝そべるユイに向けて、ミカの不安げな疑問が投げかけられる。

「平気だよ。万丈くん優しいし、お国のためって言えばきつと働いてくれるって」
「そんな簡単にいくのかな……………仮に戦争が始まったとして、ユイちゃんはその後どうするつもりなの？」

難波重工が自分達の兵器をアピールするために戦争を引き起こしたいと考えている政府に加担している、ということは聞いた。しかしユイがここまで積極的な理由がミカにはわからなかった。

「戦争なんか起こしたら……………その……………スクールアイドルだつてできなくなっちゃうよ……………」

「なーを言ってるのかなみーちゃんは。あたし達の行動理念なんて最初から決まってるでしょ」

ソファアールから跳ね起きたユイは心底胡散臭く口元をつり上げると、拳を自分の胸に当たてて唱えた。

「全ては難波重工のために……………つてね」



「これとこれで……………」

足の踏み場もない地下室でセーラー服の少女が何やらボトルの群と向かい合っている。

緑色のパネルに二本のフルボトルを差し込む千歌だったが、特にこれといった変化は起きない。

「あれ？ 光らない……………」

「勝手に触んじやないよ」

「わっ!？」

彼女の背後から手を伸ばしたキリオがテーブルの上にあったパネルを取り上げる。

「なにをするのー!？」

「こっちのセリフだ。俺の研究室に無断で入るのはやめろっていつも言ってるだろ」

「仕方ないでしょ！ まさか自分の家の地下が……………実は仮面ライダーの秘密基地だったなんて、気にならないわけじゃないじゃん！」

キラキラした瞳が迫り思わず仰け反る。

千歌がビルドの正体を知ったあの日から、彼女はよくキリオの研究室へ足を運ぶようになった。以前までは「埃っぽいからやだ」と近寄りもしなかったくせに。

「ま、俺のすごいくて最高で天才な発明に興味が湧くのは当然と言えるか……………」

「あっ！もしかしてこれで変身するの!？」

「……………」

キリオの話に微塵も耳を貸す気がない千歌は傍にあつたビルドドライバーへと歩み寄る。

「もしかして……私でも変身できちゃったり……？」

「無理だな」

千歌の手からドライバーを取り上げ、パネルと共にフルボトルの隣へ置きつつキリオは説明口調で語り始めた。

「……特別授業だ。ネビュラガスのことは知ってるな？」

「え？確か……スカイウォールから出てるガスのことだっけ？」

「そうだ」

ホワイトボードに文字を走り書きしていくキリオ。

ビルドのことを知られてしまった以上、千歌には中途半端な知識で放っておくよりも内情がある程度把握してもらったほうがいい。

……彼女自身の安全のためにも。

「人体にそれを注入すると当人の“ハザードレベル”に応じて変化が起きるんだ」

「ハザードレベル……？」

ハザードレベル——それはネビュラガスに対する耐久力とも例えられる。

ガスを注入して間もなく死に至るケースが“ハザードレベル1”。スマツシユに変化する場合は“ハザードレベル2”。

大方の一般人ならばこのレベルがほとんどだが、ごく稀に“2”を超える人間が存在する。

「それいづらはガスを身体に取り入れてもヒトの姿を保っていられる。……そして“ハザードレベル3”を超える者は——」

「……仮面ライダーになれるってこと……？」

突然真剣な眼差しでこちらを見据えてきた千歌と視線が変わる。

「それってつまり……キリオくんも、身体にガスを入れてるってこと？」

彼女がやけに仮面ライダーについて尋ねてくる本当の理由に気づいたキリオは、バツが悪そうに顔を逸らした。

「……俺が心配ってか？」

「……ネビュラガスは解明されてない部分も多いから危険って……授業で言ってたよね？」

「そういや言ったかも……よく覚えてないけど」

キリオは緊張感のない様子でそばにあったポットで湯を沸かしつつ、適当に手に取ったボトルで何気なく「実験」を始めていく。

「安心しろって。俺は身体にガスなんか入れてない」

「え？……どういふこと？」

「さあ？俺にもよくわからんが……最初からハザードレベル3を超えた逸材ってことじゃないか？」

自慢気に語るキリオがコーヒを注ぎながらさらりと口にする。

そう、少なくともキリオは自分の身体にネビュラガスを注入した覚えはない。

スマツシュが現れ、それに対抗すべく開発したライダーシステム——ビルドは最低でも「3」以上は必要だということは最初からわかっていた。

しかし物は試しに……と、人体実験を行う前に一度ドライバーを使用して見たのだ。するとどういふわけか変身できてしまった。

「……話は終わりだ。お前が気にかけるべきは俺じゃない、スクールアイドルだ。わかったらとつと回れ右して練習にでも行つてこい」

「……………」

言葉に詰まった千歌は何も言えないまま背を向け、静かに旅館へ繋がっている階段へと足を進める。

「——信じてるから」

「……ん？」

去り際に聞こえた声が反響して耳に残る。

その意味を理解することができなかったキリオは、首を傾けては気を紛らわすようにコーヒーを口に含んだ。

「……！ まつつず!!」

●●●

北都——函館聖泉高等学院。北海道で最古の歴史を持つ由緒正しい学校だ。

近年ではスクールアイドルである“Saint Snow”が力をつけており、その人気は西都の“Bernage”や東都の“Aquours”に匹敵するという。

「……クソッ！ みんな好き勝手言いやがって！」

パソコンを前にした一人の少年——猿渡タクミが不愉快そうにそう吐き捨てた。

「落ち着いて猿渡くん」

「聖良さん……!?」

冷静な雰囲気で彼を遮ったのは Saint Snow——そのメンバーの一人
鹿角聖良だ。

「私達がやることは変わらないわ。……これからも、ファンの方々の心の支えになるようなライブをする。ただそれだけよ」

「……だってよ……二人は関係ないってのに……」

「ネットの評価なんて気にするだけ無駄よ。いいから落ち着きなさい、タクミ」

隣で頬杖を突く少女——鹿角理亞に制されたタクミは渋々椅子に腰を下ろした。

西都で起きたスマッシュの襲撃事件が起きてから……異常なまでに北都へのバッシングが行なわれている。それも何者かが印象操作をしていると明白なほど。

それだけならまだ良かったものの、よりによつて Saint Snowにまでも予先が回りつつあったのだ。

「……胸糞悪い」

じつとしていられなくなったタクミは部室を飛び出し、あてもなく歩き続けた。

聖良と理亞……あの二人だって平気そうに振舞ってはいるが気にしていないわけがない。

——なにがいけない？ どうしてこんなことになった？

スクールアイドルのおかげで保たれてきた平穩が崩れつつあることはタクミだけじゃなく日本中の人間が気づいている。

スマッシュとかいう怪物を操り、この国を混乱に陥れようとする黒幕が存在するはずなんだ。

「可哀想に……世間は勝手な奴で溢れてるよなあ」

「……あ？」

不意に顔を上げたタクミは、唐突に現れたその「赤」に目を見開いた。胸と顔にあるコブラのマークが不気味な印象を刻みつける怪物。

「なんだお前……?」

「オレはブラッドスターク。……迷える子羊に足掻くための“力”を与える者さ」

「なんだと……?」

ひよろひよるとふざけた足取りでこちらへと近づいてくるスターク。隙だらけなはずなのに全方向に鋭い威圧感を放っている奴からは形容し難い恐怖を感じさせられる。

「近々、西都か東都の軍が北都へ侵攻してくる。スマツシュを操る悪を肅清するという

“正義”の名の下にな」

「はあつ……!?何言ってるんだお前……!北都がスマツシュをけしかけてるなんて完全な言いがかりだろうが!!」

「真偽は関係ないさ。武力で圧制できればその後はどうとでもなる。……だがまあ、北都の首相も黙っているわけじゃあないらしくてな、やられる前にやるって方針らしい」
スタークはタクミの真横までやってくると、その濁った赤色の手で彼の肩を掴み、耳元で怪しく囁いた。

「北都を率いる“新兵器”………その候補者を募集し始めた。オレはそのスカウトマンってところだな」

「……………はっ……………胡散くせえ。他を当たりな」

「——鹿角聖良に鹿角理亞」

去ろうとしたタクミの足がスタークの一言で瞬時に止まる。

「Saint Snowにありもしない悪評を垂れ流しているのが……西都や東都の間だとしたら？ お前はそれでも指を咥えてただ見てるだけのつもりか？」

「……おい、待てよ……どういことだ？」

「詳しいことは、敵さんに直接聞くといい。——じゃあな」

「なっ……！おい待てッッ!!」

霧に包まれ見えなくなっていくスタークの姿を追いタクミは手を伸ばす。

空を掴んだ彼は、その握り拳を手元に引き寄せ——歯を強く軋ませた。

「……心火^{しんか}を燃やして……ぶっ潰す……!!」

第10話 危ういプラン

「つまりなんだ………近々始まるかもしれない戦争に備えて、俺に兵士になれって？」
「うん！お願いできる？」

早々に帰宅しようと校門を通ったところでユイに引き留められたリュウヤがそう聞き返した。

ユイがスクールアイドルとして有名なのは周知の事実だが、大企業難波重工の会長と何らかの接点を持っていることは難波高校の生徒くらいにしか知られていない。それもただの噂程度だが。

彼女はいい加減な人間だがこの手のつまらない冗談を言う輩ではないことはわかっている。

リュウヤはどうやら噂は本当だったらしい、と内心つぶやいた後、受け流すように答えた。

「断る」

「うんうん、もちろんことわ——え？」

「じゃあな」

「ちよちよちよ……！ちよつと待つてよ!!」

去ろうとするリュウヤの肩を背伸びしつつ強引に掴んだユイは心底焦った様子でまくし立てた。

「なんで?!どうして?!西都が攻撃されるかもしれないんだよ!!ねっお願い!おねがいっ!!」

「そこでどうして俺に白羽の矢が立つんだよ。……ライダーシステム……だっけ?学生にしか扱えないなんてめちゃくちゃな理由じゃないだろうな」

「それは、その……ほら、万丈くん強そうだし……」

「んだそれ……。それよりお前、難波重工のお偉いさんとどんな関係なんだよ?」
何より気になるのはそこだ。

確か難波重工は身寄りのない子ども達を引き取っては専用の施設で育てていると聞くんが……。ユイもその内の一人なのだとすれば、難波重三郎ともそこで関わりを持ったのだろうか。

「どんな関係つて……そりや、会長はお父さんみたいな存在だよ?みんなだつてそう思つて——ああ、万丈くんは他所から来たんだっけ」

「まあな」

リュウヤはいわゆる“難波チルドレン”と呼ばれる人間ではない。

難波高校において他の施設や一般の家庭から通う生徒は非常に珍しく、学年で絞つても片手で数えられる程度の人数だろう。

「何考えてるか知らねえけど……俺を誘つたのも会長さんの指示か？」

「え？ んーと……」

「……それにお前はいいのかよ。戦争なんか起きたら、スクールアイドルどころじゃねえだろ？」

リュウヤは以前の一件からユイやミカに対してどこか気にかけている節が見られた。

ライブでのパフォーマンスが想像していたよりも心打つものであり、それをスマツシュに壊されたユイ達が余計に気の毒に思えてしまうからだ。

「難波の会長から何を言われたのか知らないけどな……お前、ステージの上が一番輝いてるよ」

そう言つたリュウヤはユイに背を向け、気恥ずかしい気持ちを隠すようにポケットに手をつ込んだ。

「——しようがない」

ユイが軽く腕を振るうと不気味な粒子が宙を舞い、校門をくぐろうとするリュウヤの

衣服へ付着。

そのことに気づく様子もないまま、彼はその場から去ってしまった。

「ごめんねー……万丈くん」

●●●

「……ん、小原」

「Oh、Mr. キリオ。これから部室デスか？」

「いや、お前に用があつたんだ。ちようどいい、手間が省けた」

廊下の曲がり角でバツタリと鉢合わせしたキリオと鞠莉。

相変わらず気怠そうな薄眼を目の前の金眼へと向ける。

「首相に俺を紹介したの、お前なんだって？」

「ああ、そのこと……勝手にごめんね」

舌先を見せておちやらけた謝罪を飛ばしてきた鞠莉の様子からして、塔野首相から聞いた事情は「表向きなもの」だけらしい。

それもそうだ、戦争の兵器として御宅の教師を雇わせて欲しいなんて依頼を彼女が引き受けるわけがない。

「でもよかったじゃない、政府の研究チームに抜擢なんて二度とない大出世だよ？」
「まあ別に文句を言いに来たんじゃないが……」

キリオは一度考え込むように顎に手を添える仕草を見せた後、再び顔を上げて尋ねた。

「……他に何か、聞かれたことはなかったか？」

「他に？ 特になかったと思うけど……」

「そうか、ならいいんだ」

「あ、ちよつとキリオ！」

用が済んだ途端にその場から離れようとしたキリオに鞠莉からの待ったがかかる。

「どうかしたか？」

「これから部活でしょ？ 顧問のあなたがいなくちゃ始まらないわ」

「……？ 今更なに言ってるのさ。それに俺がやることなんて——」

「ノンノン」

人差し指を振ってキリオの言葉を否定した鞠莉は、黄金色の髪を豪快に振り回しながらその指先を彼へ向ける。

「今回もあなたの力が必要な」

「日本中のスクールアイドルを集めて……ライブう!？」

「うん! いいアイデアだと思わない!？」

部室で千歌達から一つの提案を聞かされたキリオが驚愕のあまり声を張った。

日本全国からスクールアイドルを一つの場所に集結させ、共同のライブイベントを催したいと言うのだ。

「ずいぶん思い切ったな……………」

「これくらいインパクトがちょうどいいんじゃない?」

「三国がこんな状況だからこそ、ですわね」

果南とダイヤも千歌に続いてそう主張する。

今にも戦争が始まりそうというなか、今一度スクールアイドルとして国民の注目を集めて場を収めようということなのだろう。

それもただのライブじゃない。日本中のスクールアイドル達を集めた最大規模のイベント。しかし当然彼女達だけの力となると限界が生じる。

「そこで俺が色々と根回しを……つてことか。止めはしないが、具体的にどんなことをするかは決まってるのか？」

「そこは大丈夫！」

いつになくテンションの高いルビイが横から飛び出てきたかと思えば目にも留まらぬ速さでパソコンのキーボードを操作し始めた。

代わりに隣に立っていた善子と花丸がキリオに説明する。

「それがね、前例がないわけじゃないんだって」

「5年くらい前に、一度だけ全国のスクールアイドルが秋葉原に集まって路上ライブを披露したことがあるらしいぞら」

「これ！」

興奮した様子でパソコンを抱え、ぐっと画面をキリオの眼前まで持っていくルビイ。勢いに気圧されつつ、キリオはそこに表示されている動画に目を移した。

「これは……」

5年前に行われたという秋葉原の大規模ライブ。

数百人ものスクールアイドル達が一丸となって展開される巨大なステージには画面越しでも充分にその想いが伝わってきた。

“スクールアイドルは楽しくて、素晴らしいもの”だと。

確かにこれほどのライブとなると影響力は桁違いだ。しかしその分——狙われる可能性も高くなる。

「……わかった、少し時間をくれ。こっちで使える場所の交渉をしてみる」

「そこなくっちゃ！」

「じゃあ私達は、他のスクールアイドルの人達に連絡だね」

「くうくう！なんだかワクワクするであります！」

賑やかな空気を背中で感じながらキリオは部屋を出た。

「……やってやるよ」

本当にこのライブが実現するのならスタークが黙っているわけがない。まず間違はなく何かしらの妨害をしてくるはずだ。

ならばそこを抑えればいい。戦争の元凶となった者を捕らえることができれば、きつと……………。

「……覚悟してろスターク」

キリオはスマートフォンを取り出し、とある番号に向けて発信した。

「……戦兔です。突然すみません、首相」

●●●

「キリオくん、今日もお疲れ様」

「あ、志満さん……」

長い黒髪をなびかせた女性がキリオへキッチンから声をかける。

彼女はよく家を空けている母の代わりに家事を行っている高海家三姉妹の長女だ。

「これから地下に行くの？」

「ああ、はい。まだ少しやることがあって……」

「研究に没頭するのはいいけど、たまにはきちんと休むことも大切よ？」

「はは、お気遣いどうも。ご飯ごちそうさまでした、今日も美味しかったです」

「はいお粗末様」

重い瞼を無理やり開き、キリオはゆっくりと地下へ続く階段に向かう。

塔野首相には知る限りスタークの情報を伝え、今度から各地で行われる予定であるスクールアイドルのライブには警戒するよう要請。

もうすぐ行われる首脳会議でも議題として挙げてくれると言ってくれた。

「さて……………」

キリオは研究室にあるパソコンの前に座り、とある人物についての調査を進めていた。

「——葛城ユイと氷室ミカ」

難波高校のスクールアイドル“Bernage”の二人。

彼女達は幼い頃に両親を失い、大企業難波重工が運営する孤児院で育てられてきた。

これは単なる噂にすぎないが、ネットの情報によると難波重工は身寄りのない子ども達に洗脳教育を施し、あらゆる方面で優秀な人材を生み出している……………らしい。

トップである難波重三郎についてもよく悪評を耳にする。なんでも自社の兵器をアピールするために戦争を引き起こそうとしているとか。

この二人もスクールアイドルになるべくして育てられた人間だとしたら――

赤と黒。ユイとミカのイメージカラーが良からぬものを連想させる。

“コウモリ”が女である可能性が出てきた以上、ありえない話ではないが……………。

スターク達が難波重工に付き従っているとすれば全て合点がいく。

「…………戦争を起こす引き金になるために、お前らはスクールアイドルを始めたのか？」

画面のなかの少女達に向けて問う。

被害者であるスクールアイドルになることで自分達の身の潔白を証明し――――そ

の陰で難波重工の犬として活動していたと？

「……………考えすぎか」

キリオは自分の勘繰りを鼻で笑い、画面に表示されていた二人の資料を消した。

気のせいだと思いたくなるほど彼女達のライブは素晴らしいものだった。今まで興味がなかった自分がそう心を揺さぶられるくらいに。

『続いてのニュースです』

「……………」

不意に横へと視線をずらすと、何気なく電源を入れていた小型テレビが視界に入る。

『一人の男子高校生が、西都の聖堂^{せいどう}首相を毒殺しようとした容疑で逮捕されました』

「はっ……………!？」

あまりにも唐突にそう知らされたキリ才は驚愕のあまり椅子から立ち上がると、前のめりになって画面に釘付けとなる。

首相が一人の少年の手によって昏睡状態に陥ってしまったというニュース。

このタイミングで首相を暗殺しようとするなんて正気の沙汰とは思えない。今にも戦争が起きそうだという時に――

「……………まさか……………!」

●●●

数時間前。

「お邪魔します……………つと」

「なっ……………なんだ貴様は……………!？」

官邸に上がりこんできた怪物——スタークは西都の首相である聖堂のもとを訪れていた。

「警備は……!? ガーディアンはどうした!?」

「ああ、それなら全員始末しておいたよ」

狼狽える首相に向かって、剽軽な態度で無慈悲に通告するスターク。

「さて——」

「なにを………ッ………!?」

赤い腕から伸びた触手が聖堂首相の首元へ突き刺さり、同時に「毒」を注入。

致死量には満たない程度のそれを打たれた聖堂は消滅することなく、苦しみながらその場に倒れた。

一瞬の何気ない動作。スタークは日常に起こる些細な出来事かのように、躊躇いもなくその行動に出たのだ。

「これはいけない! 通報通報つと」

白々しい口振りで傍にあった受話器に手をかけたスタークは、警察に繋がると途端に声色を変えて言った。

「すぐに来てください！首相が……首相が万丈リユウヤという少年に襲われました!!」

第11話 メモリーがこぼれ始める

「おいーちよつ……!!ちよつと待てよ!!なんで俺が容疑者になつてんだよ!」

ガーディアンに取り押さえられ、抵抗も虚しく独房へ放り込まれる少年が一人。

西都の首相を殺害しようとしたという容疑をかけられたリウウヤは、無罪を主張する暇もないままここへ連れて来られたのである。

なんでも首相が盛られた毒と同じ成分のものがリウウヤの制服から採取されたい。

「おいッ!!話を聞けよッ!!」

牢屋に押し込まれ蒼白するリウウヤは、会話の通じるわけがない機械兵士へと必死にそうせがんだ。

「……クソッ!!」

こんなの普通じゃない。あらゆる手順が飛ばされているように感じる。

まるで誰かが自分を——犯罪者に仕立て上げようとしているような。

「……いや、そうに決まってる」

自分を嵌めた人間がいるはずなんだ。

何者かが罪をなすりつけるために冤罪を……………。

「……………なんのために？」

整理していた思考が途端にほつれてしまう。こここのところ許容範囲を超えた事件が多すぎるせいだ。

ライブに誘われて顔を出してみれば怪物に襲われ、今回は首相殺人未遂事件の犯人にされた。

間違いない、身の回りが——否、この国全体に変化が起きようとしている。それも悪い方向に。

「さすがのお前も、違和感に気付いたようだな」

「……………!？」

カツン、と足音が聞こえ、視界の端から赤い影が現れる。

リュウヤも見覚えのあるコブラを形取った容貌は、檻に寄りかかりながら彼へ顔を向けた。

「よお、また会ったな」

「蛇野郎……!」

「ブラッドスタークだ。——以後、お見知りおきを」

ふざけた口調で語るスタークにリュウヤの鋭利な視線が刺さるが、それを意に介してさえないように奴は続ける。

「気になってるんだろ? なぜ首相を殺した犯人はお前に罪をなすりつけたのか。そもそもどうしてこんなことをしたのか」

「……! てめえ! 真犯人を知ってるのか!」

「さあな……答えは自分の目で確かめてみるといい。——フンッ!!」

直後、スタークはどこからともなく取り出した剣で牢獄の檻を切り裂いた。

「……ああ……? なんのつもりだ……?」

火花が飛び散り、いつでも外へ脱出できる自由の身となったりリュウヤが間の抜けた声を出す。

すると呆然とする彼に向けて再度奴が呼びかけた。

「オレがお前を助けてやるよ」

「いったいどういう風の吹き回しだ？」

自分を解放したスタークに向けて、リュウヤは今一度鋭い目を突きつける。

解放してくれたとはいえ、以前危険な目に遭わされた身としては奴を信用することはできない。

しかし――

「ただし、条件がある」

「条件……………」

人差し指を立てたスタークの言葉にリュウヤは首を傾けながらも、自らを無罪にするには従う他ないという諦めが頭のなかによぎっていた。

●●●

「各地の学校に直接訪問したい？」

「うん！私達が三組に分かれて、それぞれの地域の学校を訪ねて回るの！……どうかな？」

キリオが職員室の一席で睡魔に襲われながら授業日程を組み立てている最中、ニコニコした顔で彼のもとを訪れた千歌。

全国のスクールアイドル達が一斉に集うライブイベント——その参加者を募るために各地域へ向かいたいと言うのだ。

「ダメだ」

答えはもちろんNOである。

「ええっ!?なんで!？」

「なんでじゃねえよ！今のこの国の状況がわかってんのか!？」

「わかってるよそのくらい!」

「わかってるなら普通そんな発想は出てこないんだよ!!」

兄妹喧嘩のように向かい合って眉を寄せる両者を見ていた周囲の職員達から仄かな笑い声が聞こえた。

「ごほん、と咳払いをした後、今一度冷静さを取り戻して千歌の方を見る。

「だいたいお前、わざわざ現地に行かなくてもメールとかで連絡すればいい話だろ」

この情勢のなかで彼女が言う通りの行動をするなんて、解れかけた命綱を自ら断ち切

ろうとするようなものだ。

これまでのことから考えてスタークがスクールアイドルを狙っていることは明白。東都内で外出規制がかかってもおかしくないレベルで千歌達 A q o u r s は危険な立ち位置に置かれているのだ。

「それがさ……………急にサイトが繋がらなくなっちゃって」

「なんだって?」

「ほら」

スマホを取り出し、慣れた手つきで検索をかけた千歌は、真っ白なまま停止してしまった画面をキリオへ見せた。

「……………ほんとだ」

「でしょ?」

「いつからだ?」

「3日前……………くらいかな」

全国のスクールアイドルには特設サイトが設けられており、そこにプロフィールや仕事の依頼を受けるための連絡先も記載が可能だ。

普段ならばこのサイトを使って他のスクールアイドル達とやりとりを行うはずなのだが……………。

「これじゃあ、ライブに参加してくれる人達が集められないよ……」

「……それでさっきの話か」

「うん!!だからお願い、キリオくん!!」

前々から交流があつた Saint SnowやBernageはともかく、それ以外のグループとの関わりはほぼ皆無。正直言つて八方塞がりだ。

「そうは言つてもな……他の区域には保護者同伴が絶対条件だぞ?俺に分身でもしろつてか?」

「それなら大丈夫!実はすでにアテがあるのだ!」

「ほう?」

「難波高校から職員が派遣される」って……そこって確か——」

「うん、Bernageの二人がいる学校」

部室に移動したキリオは、集まった9人の少女達から詳細を聞かされた。

以前の合同ライブの際に交換したアドレスを用いてBernageへイベントに参加してくれないかと頼んだところ、承諾してくれただけではなく保護者としての人材を寄越してくれるというのだ。

(……Bernageか)

葛城ユイに氷室ミカ。この二人に関して調べていると時折影が差す時がある。

安心して千歌達を任せられるかと言われれば首を横に振らざるをえないというのがキリオの本音だ。

「サイトがいつ復旧するかわからないしね」

「確かに危険なのはわかってるんだけど……だからこそ、できるだけ早く行動しなくちゃならないと思うの」

千歌の後ろに立っていた曜と梨子が揃って口を開き、それに続くように他のメンバーも加わる。

「今やらなきゃ、もっと危険な状況になっちゃうかもしれないでしょ?」

「そうずら!怖がつてる場合じゃないよ!」

「ルビイも……みんなの意見に賛成です」

「まずはわたくし達が行動を起こすべきですからね」

「このままだとモヤモヤしつ放しだもんね」

「だってさ、キリオ」

口々にその言葉を浴びせてくる彼女達に細めた瞳を向けつつ、キリオは困ったように肩を落とした。

——きつとこうなったのは、自分のせいでもあるのだろう。

スカイウォールの惨劇以降、スクールアイドルという存在は日常を保つための象徴となつてこれまでの日々を紡いできた。

キリオ自身それを千歌達に押し付けすぎてしまっていた。本来彼女達はこんな危険な役回りを引き受けるべきではないというのに。

「キリオくん………お願い」

まっすぐな視線がキリオに突き刺さる。

以前のライブ襲撃事件を始め、彼女達のなかで膨れ上がった正義感を今更押し留めることはできない。

これはキリオ自身の責任でもあるのだ。

「……わかったよ。ただし何かあればすぐに引き返してることが条件だ」

「……うんっ!!」

顧問の許可が下り、パツと表情を明るくさせる千歌達。

争いとは無縁な少女達の無邪気な笑顔を途端、キリオのなかの決意がより一層強いものになるのがわかった。

「ちなみに、三組に分けるってのは……?」

「ああ、それね」

千歌はそれぞれを指で示しながら、誰がどこへ向かうのかを伝えた。

「果南ちゃん、ダイヤさん、花丸ちゃんは北都。鞠莉ちゃんに梨子ちゃん、善子ちゃんは西都に。私と曜ちゃん、ルビィちゃんが東都で呼びかけてみるよ」



「きやははー、あの子達も面白いこと考えるよねー」

下賤なものでも見下ろすように、葛城ユイはA q o u r sから送られてきたメールに改めて目を通していた。

「どうするのユイちゃん？」

「とりあえず引き受けておいたよ。人付き合いは大事にしないとねー!」

身体ごと豪快に回転椅子を回しながら語るユイが不意に静止。

メールを閉じ、画面の隅にあったファイルへとカーソルを動かす。

「それと——こつちも進めなきやね」

それはとある『兵器』の研究資料だった。

無数に羅列された数式と設計図を見て、ミカがほんの少し目を剥いて驚くように顔を覗き込ませる。

「このドライバーは……?」

「会長に頼まれて造り始めた新しい兵器だよ。……すごいでしょ? 最高でしょ? 天才でしょ!」

「う、うん、さすがユイちゃん。……でもこれ、ハザードレベル4以上って……」

「そうなんだよね……今のところ扱える人がまだいないのよお。くまったくまったく」

わざとらしく眉を下げたユイだったが、すぐに邪な笑みを浮かべては冷めた声色で

言った。

「でもまあ、候補はちゃんといるんだけどね、2人——いや3人ほど」

「そうなんだ……………」

「……………」

「……………」

しばらくお互いの顔を見つめ合い、やがてミカがきよんとした表情で首を傾げる。

「だーつもぅ!!ほんとに鈍いなみーちゃんはあ!!」

「えっ……………?え?」

「だーかーらー!その内の一人はみーちゃんなんだつてば!!」

「えっ……………ええ!」

思わぬ事実が舞い込んだことでミカの瞳が困惑と戸惑いで満たされる。

それもそのはず、ハザードレベル4となれば並の人間とは比べものにならないほどの実力を備えた存在となる。しかし当のミカはその域に達してはいないのだから。

加えて——

「わたし……………まだそんな……………無理だよ……………」

「ん?どうして?」

「だって……………今だってすごく必死で、いつやられちゃうかわからないのに……………」

新型のドライバーを与えられるということは、自らが国の兵器として前線で戦うのと同義。

ミカは、それがたまらなく怖いのだ。

「いやだよ……なんで、わたしばかり……!」

「ふーん……そっか」

「ユイちゃん……?」

おもむろに席を立ったユイが背を向け、表情を見せないままミカに問いかけた。

「またそうやって逃げるんだね」

「え——」

「あの時もそうだったよね。……みーちゃん、あたしのことを見捨てて自分だけ逃げ出した」

「あ……っ……ユイちゃ……」

「あたし、痛かったのに……悲しかったのに……辛かったのに……みーちゃんは助けてくれなかったよね」

「ごっ……!ご、ごめんなさ………!」

「あたしの味方だって言ってくれたのに………また、口先だけの嘘つきなんだね」

「ごめんなさいッ!!」

ミカは震える足で何度も躓きながらユイのもとへ駆け寄り、制服の裾を掴んでは彼女へ泣きついた。

「ごめんなさい…………ごめんなさい…………もう…………嘘つかないから…………だから…………! そんなこと言わないで…………!!」

心の底から笑いだしそうになるのを堪え、ユイは立て続けにミカへと問いを投げる。

「許してほしい?」

「うん…………うん…………!!」

「これから、あたしのために戦ってくれる?」

「……………うん」

「きやはっ…………!」

ついに抑えきれなくなった笑みがにじみ、ユイは顔を歪ませた。

「さて……………お前はとうするつもりかな…………?」

第12話 ロボットの足音

千歌達がライブの計画を立て始めてから、既に一ヶ月が経とうとしていた。

結局スクールアイドルのサイトは復旧せず。なんでも外部からのハッキングを受けていたらしい。

結果的に千歌達の案は無駄にはならなさそうだ。

しかし想定できる限りの人員分の衣装や会場、そして曲。その準備にかかる時間と費用は並大抵のものではなかった。

「戦兔さん、大丈夫ですか？」

「……はっ……」

失いかけていた意識がぐん！と引き戻される。

政府の研究施設——何十人もの同業者に紛れつつ、キリオは塔野首相から頼まれていた。パンドラボックスの解析に精を出していた。

「一度休んだほうが……」

「いや、必要ないです。すみませんね」

隣に座っていた男性にそう示すキリオだったが、実際今にも倒れそうなのは事実。

明日には千歌と曜とルビィ以外のAqoursメンバー6人がそれぞれの地へ向かう。やるべきことは済ませたつもりだが……ここにくるまで体力を使いすぎた。

(帰ったら寝る……帰ったら寝る………)

ここ最近スマッシュも出現しなくなったので、少しはゆつくりできるだろう。

「……ん？」

PC画面に映るパンドラボックスの構造図を見てふと手を止める。

シミュレーターで行った復元状態のデータを確認すると、実物よりも一回りほど大きな箱が表示されていたのである。

「これは——」

即座にキーボードを打ち、次の「状態」へ。

するとパンドラボックスを構成する6面が外へ弾け飛ぶモーションが展開されたのだ。

「パンドラボックスから……パネルが……？」

6枚のパネルが外れたパンドラボックス——それこそが現在東都政府に保管さ

れているもの。

つまりこれは……完全な状態ではないということだ。

「……………ッ……………」

ズキ、と杭を打たれるような痛みが頭部に走る。

衝撃の事実が判明したというのに、なぜだかあまり驚きの感情は湧いてこなかった。

「……………とにかく報告を」

「パンドラボックスからパネルが分離……か」

無駄に広い部屋の中、回転椅子に座った塔野首相がそう呟く。

キリオを観察するようにじつと視線を注いだ後、彼は静かな声色で言った。

「思っていたよりも早くに辿り着いたな」

「……………? どういうことです?」

「これを見てくれ」

首相は机の引き出しからトランクケースを取り出すと、何重にもかけられたロックを解き始める。

「それは……!!」

彼がその中にしまわれていた物を掲げた途端、キリオは目を剥いてそう声を漏らした。

濃緑色のパネル——キリオが持っている物と同じものが、首相の手の中にあつたのだ。

「見事だ戦兎キリオくん、やはり君を選んで正解だったようだ」

「……俺を試したんですか？」

「そんなつもりはなかったつもりだが………一つ確認したいことがあつてな」

首相はその場を離れ、持っていたパネルをキリオに突きつけながら尋ねた。

「君もこれを持っているんじゃないか、仮面ライダー？」

「……………」

首相が何をしたいのか大体わかってきた。

彼は探りを入れるどころか、自身の持つ情報と引き換えにキリオの持つ情報を引き出そうとしている。

一元化——じわじわと外堀から埋めて取り入れようという腹積もりか？

「確かに、俺もこれと同じものを所持しています」

「隠そうとはしないんだな」

「隠しても意味があるとは思えないので」

「そうだ、今は政府の力が必要だ。」

首相が何を考えているかはさておき、今後は間違いなく彼らとの連携が必要になる。

そのためにも………情報は共有しておくのが一番だ。

「政府はスカイウォールの惨劇が起きた直後にこのパネルを発見したが……君はどこでこれを知った？」

「物心ついた時から持っていました」

「ふざけてるのか？」

「ああ、すいません。俺、記憶喪失なんですよ」

「……マジかよ」

「まあそれは置いといて」

自分で言うておいてなんだが、そんなことはどうでもいい。

確認したいことは一つ。

「このパネルはパンドラボックスの側面から分離した物ですよ？」

「ああ、おそらく」

「では他の4枚はどこに？」

「……それなんだがな」

首相はため息をつく、肩を落しながら語り出した。

「西都、北都の政府も我々と同じく、2枚ずつパネルを所持しているみたいなんだ」

まあ、予想はしていた。

……過去の資料映像を見た限りでは、スカイウォールを出現させた時のパンドラボックスは現在と同じく不完全な状態だった。

それだけでも日本中が混乱に陥ったというのに、全てのパネルが揃った時には何が起こるのか――

「……………」

首相の顔を一瞥する。

政府がどこまで知っているのか。パネルを持っているとなれば当然ボトルのことだつて……。

「……あなたは、パンドラボックスをどうするつもりなんですか？」

「ん？」

「仮に全てのパネルが揃ったとして、あの箱をどう使うつもりなんですか!？」

「決まってるじゃないか。……この国を一つにするんだよ」

突然の質問に困惑することもなく、首相はまるで当然のことを口にするように言い放つ。

「君は政府の研究チームに入り、最もあの箱の近くで活動していたわけだが………感じなかったか？あの箱に眠る凄まじいエネルギーを」

「どういうことです……？」

「何者にも侵害されないほどの力……それがパンドラボックスには備わっている」

何かに取り憑かれたような瞳。空を見つめたまま首相は語り続ける。

「あの絶対的な力を使って、私は……断絶されたこの国を再び一つにする。そのために必要なことは——わかるだろう？」

再びキリオと目が合った時、首相の瞳には狂気が宿っていた。

五年前に起こったスカイウォールの惨劇——パンドラボックスの光を浴びた人間は、例外なく好戦的な気質へと変貌したと聞く。

塔野首相だけじゃない。おそらく北都と西都の首相も——

「……失礼します」

これ以上彼と同じ空間にいたくない。

キリオは踵を返し、乾いた空気を押しのけて部屋を飛び出した。

——
帰ってこい。

声が聞こえる。覚えているはずなのに、知っているはずなのに、思い出せない声が。
「……………クソッ」

●●●

『衣装のデザイン案と試作品、届いたよ！あとはこっちでガンガン量産してくからね！』

「ほんとに助かるよー！ありがとうユイちゃん！」

『なにになに、お安い御用ですよ！こんなに面白そうな企画なんだもん……喜んで引き受けさせてもらいます！——ではまた！』

「ミカちゃんにもよろしくね」

『はいはい！』

パソコンの画面に映し出されていたユイの顔が消える。

椅子にもたれかかっていた曜とルビイが溶けるように項垂れた。

「だああああ……疲れた……」

「衣装の方は……なんとかなりそうだね……」

「二人ともお疲れ」

「「ありがとう果南ちゃん……」」

机に突っ伏したまま差し出された飲み物を受け取る二人。

「うーん……聖良さん達にも相談したほうがいいかなあ」

その向かい側では千歌や梨子達が作詞作曲に精を出している。

「それにしてもすごいよね……。あの難波重工に、あんな気軽に衣装製作を依頼できるなんて」

「あの二人は難波高校のスクールアイドルだし……普段衣装を作る時も、あんな風に会社からサポート受けてるみたい」

「ひゃあー……スポンサーだねもう。私達にもどこかの会社が支援してくれたりしないかなあ」

千歌は歌詞の候補が書かれたノートから視線を外し、寝息も立てずに眠っているキリオを視界に入れた。

「もうっ！キリオくんも少しは手伝ってよ！」

「しょうがないわよ、最近先生いつになく忙しそうだったし……」

「確かにそうかも。……今までサボってきたツケが回ってきたとか？」

「お前らのせいだっつーの!!」

「うわっ!？」

カッと目を開いたキリオが飛び起きる。

不健康な生活が見て取れる青い顔で彼は叫んだ。

「あのな、誰が会場の確保から護衛の用意までしてやったと思ってるんだ？そう、俺！他でもない俺!!」

「急に叫ぶと危ないよーキリオ？」

「小原！だいたいお前の親父さんの力を借りれば一発だったんじゃないのか!？」

「ダメよ。パパだつて今は色々と忙しいの」

「俺だつていそが——うっぶ……」

「言わんこつちやないずら」

頭部を抑えながらよろめくキリオを側にいた花丸が支え、再度椅子の座らせた。

「……ところで、本当にいいのか？出発は明日……まだどれだけの人数が集まるかもわからないんだろ？」

今のところ見切り発車感が否めないわけだが……。

衣装に関してもだいぶ先を進んでいるようだが、予約した分の数が埋まるかもまだわからない。

「大丈夫だよ」

千歌は迷いのない目でそう言った。

「私達だけじゃない。……全国にいるスクールアイドルのみんなも、今の状況が危ないことは感じてるはず。手遅れになる前に、行動しないと」

今思えばスクールアイドルのサイトがこのタイミングで繋がらなくなったのは不自然だ。

誰かが妨害しているのしか思えない。

……いや、きっと『誰か』じゃないのだろう。

——私達が三組に分かれて、それぞれの地域の学校を訪ねて回るの！

(……まさか)

あいつは、こうなることも予測していたのか？

千歌達ならどんな手を使ってもライブを開催させようとすると。

そのためにわざわざ三組に分かれて……各地を訪問してまでメンバーを集めようとする。

「……………っ！お前ら！」

「……………どうかした？」

冷や汗を流しながら何かを訴えようとするキリオを見やり、9人が首を傾ける。

「あ……………」

……引き止めたとして、そこから先は？

今更計画を反故にしたとして、戦争が起こるタイミングが変わるだけだ。

スタークの企みであることを想定して千歌達を引き止め、このまま戦争を起こすか。

それとも彼女達に希望を託し、危険を背負わせるか。

——まあ落ち着け。いいじゃないか、行かせてやれよ。

（……だけど）

—— 確かに戦争が起こるよりマシだろう？ たかが人間9人を危険にさらすだけだ。

（……黙れよ）

—— スクールアイドルは、戦争を止めるために存在してるんだろ……？

「黙れッ!!」

無意識に声を張り上げていたキリオは、ハッと我に帰り顔を上げた。

怯えるような目が自分に集中していることに気がつく。

「ど、どうしたんですの急に……？」

「……すまない」

居た堪れなくなったキリオは逃げるように部室を出て、誰もいない校庭へと向かう。

「……誰だ、お前は……？」

時折聞こえてくるのは、記憶を失う前の自分自身の声だろうか。そうは思いたくなかったが、そうとしか思えなかった。

「……俺はいつたい、どうしたいんだ……う。」

おもむろに取り出したラビットボトルに視線を落とす。

欠けた記憶を取り戻すには……このまま戦い続けるしかないのか？
たとえそれが、千歌達を巻き込むことになったとしても？

「……………俺がすべきことは……………」



「オオオオオオオオオ……!!ラアッ!!」

外からの光が差し込むことのない、密閉された地下室。

猿渡タクミはそこで、スマッシュを相手に生身で戦っていた。

凄まじい一撃が叩き込まれ、一体のスマッシュが爆発。その光景を眺めていた赤い蛇

が手を叩きながら彼に歩み寄る。

「ははっ……ハハハハハハ!! ついに覚醒したかア!!」

「……………」

暗い目を浮かべながらスタークを睨みつけるタクミ。

「……あれをよこせ。今度は成功させる」

「いいだろう。……今のお前は、誰よりも高いハザードレベルを備えている……!」

ひゅっ、と赤い手から一つの機器が投げ渡される。

青い素体にスパナが取り付けられたようなデザインの……ドライバーだ。

《スクラッシュドライバー!》

腰に当てると同時に巻きつくベルト。

「数々の候補者を下し、勝ち取ったその力……さあ見せてみろ……!!」

《ロボットゼリー!》

タクミの手によって装填された“スクラッシュゼリー”。機械的な待機音が流れ、横

にあるスパナ型のレバーが力強く押し込まれる。

《潰れる！流れる！溢れ出る！！》

タクミの周囲を囲むように現れたビーカーに黒いゲルが溢れ、装甲へと変化。彼の身体を覆う。

東部から噴き出た成分も同じく頭と胸部を纏う。

《ロボットイングリス！ブラア！！》

黄金色に輝く身体に黒いアーマー。

どこかメカメカしい印象を与える戦士……。

「仮面ライダー……………グリス」

第13話 動き出すシナリオ

「さて、今回集まってもらったのは他でもない。……最近世間を騒がせているスマッシュという怪物についてです」

薄暗い空間のなかに浮かぶ三つの椅子。

そこに腰を下ろすのは東都、北都、西都を統率する首相である3人……のはずだが。

「聖堂首相は——さすがにまだ起き上がれないでしょうね」

北都首相である来沢きたざわが薄ら笑いを浮かべながらそう呟く。

西都の聖堂首相は未だ昏睡状態。その理由は不自然にも「高校生による毒殺未遂」。

現在席の横に立っている人物はその代理だろう。先ほどから無言で顔色一つ変えずに佇む様子は気味悪さを感じさせる。

「まさにその聖堂首相のことなんですがね。……彼を襲わせたのはあなたの仕業じゃありませんか、来沢首相？……いや、それだけじゃない」

「スマッシュを送り込んでいるのも北都だと……そう言いたいのかしら？」

来沢が馬鹿馬鹿しい、と嘲笑するように肩をすくませる。

「言いがかりもほどほどにしてください、だいたい、東都は以前から西都の襲撃を受け

ていたはずでしょう？向こうに聞いた方が早いのでは？」

そう言つて西都の席を指し示す来沢首相。

「まあ……どうしても言うのならば……こちらとしては実力行使も厭わないつもりですが」

(……想定通りの展開だ)

塔野はそれを聞いて内心ほくそ笑んだ。

当初は西都がスマツシュを操っていると睨んでいたが、首相が襲われたことも相まつて複雑な状況に変わった。

北都に向けられていた矛先も以前より増えている。

「くく……ははは……っ!!」

いずれ戦争が起こることはわかっていた。だがこの状況……北都に向けられた不信感を利用しない手はない。

「こちらにはパンドラボックスがあることを忘れないでもらいたい」
「それは脅迫と受け取つてよろしくて？」

ああ、まどろっこしい。

もう結果は決まっている。拔足差足で近づく意味はもうない。

「……もう狐と狸の化かし合いはやめにしましょう」

塔野の言葉でその場の空気が一気に張り詰めた。

「我々の目的も、求めている手段も同じだ。………あとはいつ始めるのか、それだけじゃありませんか？」

「……………ははっ……………話が早くて結構」

ブツン、と来沢と西都首相代理のホログラムが消失すると同時に周囲の風景が一変。

官邸の一室に座り込んでいた塔野は机の上に置かれていたパンドラパネルを見下ろし、口角を吊り上げた。

「悪いね、戦兔くん」



浦の星女学院校門前。

普段からここへ足を運ぶのは本校の生徒くらいのものだ。加えて休日ともなれば一層人通りがないと思われるが……。

「え？うそ！本物!？」

「らしいよ。なんでも千歌達に会いに来たとか……」

「さすが東都を代表するスクールアイドルだね……！あの二人とも知り合いだなんて！」

本日は西都から派遣されるBernageのスタッフが他の地区へ向かうAquoursのメンバーを迎えにくる日。

どうやらどこからかその情報が漏れてしまったらしく、Bernageのファン達が彼女達目当てにこうして押しかけてきているのだ。

「さっすが、情報伝達が早いねえ」

「俺としてはかなり気を使ったつもりだったんだが……」

「あはは……田舎特有の……ってやつかな？」

「ユイちゃんとミカちゃんが内浦に来るなんて、大イベントだもんね」

キリオの隣で校門の人だかりを眺めている3人は千歌と曜とルビィ。彼女達は東都に残る組だ。

「うう……なんか緊張してきた」

「リリーだったらだらないわね。こういう時はドンと構えておくものよ」

「そういう善子だつてガクブルしてるじゃない」

「ヨハネ!!」

少し離れたところで校門の集団を見ているのは西都に向かう梨子、善子、鞠莉。

「みんなと離れ離れになるのは……ちよつぱり不安すら」

「覚悟は決めたつもりでしたが……いざその時になってみるとルビイが心配で心配で……」

「まあまあ、気楽にいこうよ」

そして北都を目指す花丸、ダイヤ、果南。

全国のスクールアイドル達に声をかけるための旅。これから来るのはBernageの二人だけではなく、その付き添いを担当してくれるスタッフの人間も同行してくるはずだ。

「お姉ちゃん達……ちゃんと向こうに行けるのかな?」

「今は政府間がすごい険悪だつて聞くよね……」

ルビイと曜が不安げにこぼす。

もともとスカイウォールを越えて他の地域に行くのは、許可を取るだけでも骨が折れ

る行為だった。

あの壁は日本列島を完全に分断しているわけではなく、所々に“スカイロード”と呼ばれる切れ間が存在する。

普段はそれを用いて他の国へ渡っているのだが……。

「今はスマツシユのこともあつてか、検問もかなり厳しくなつてゐるみたいだ。正規のルートじゃまず通ることはできないだろうな」

そう、あくまで“正規のルート”ならば。

「じゃあ別の方法があるの？」

「あー……………言つていいのかなこれ」

「えー!? 教えてよー!!」

横にいた3人の視線が一斉にキリオへ集まっていくな。

……………まあ、どうせ千歌達が知つても実際に使用することは不可能だ。具体的な場所を伏せれば何ら問題ないだろう。

「一般には把握されてないスカイロードもあるんだよ。そこは政府の管理が届いてないから、ブローカーに金さえ積みゃ渡れないこともない」

「そんなのがあるんだ……」

「知らなかった……」

「そりやそうだろうさ。まだまだ都市伝説レベルだし、授業でも習わないだろ」

言わなくてもわかるだろうが金額はべらぼうに高い。女子高生のお小遣い程度じゃ使うことはできないだろう。

（だがおそらく……）

……難波重工から資金提供を受けているのなら、ユイやミカは難なく裏ルートを通ることが出来る。今回だってそちらを使用するつもりなのだろう。

「あ、そういうしてる間に……」

「来たみたいだな」

坂道を登って接近してくる高級車が2台、遠くの方で小さく見える。

校門前で停車し、黄色い歓声が上がると共に彼女達は姿を現した。

「やつほー！！！！難波高校スクールアイドル、Bernage!! Aqoursのみなさんをお迎えにあがりましたー！！！！」

車の窓から身体を出してちぎれんばかりに腕を振ってくるショートカットの少女は

葛城ユイ。

その後ろから小さく顔だけを見せている長髪の少女が氷室ミカだ。

「ユイちゃんとミカちゃん……!!」

「ほんとに本物だ!!」

「すごーいっ!!」

身軽な動きで車から降り、周囲の人間達に手と笑顔を振り撒きつつユイが早歩きで浦の星の校門をくぐり抜けた。

「こんにちはユイちゃん、ミカちゃん。また会えて嬉しい!」

「は、はい……」

「こちらこそ!千歌ちゃん達も元気そうでよかった!」

トコトコと千歌達のもとへ歩み寄ってきたユイの後ろからはミカの他に見知らぬ男性と女性が一人ずつ。双子だろうか、その顔つきはまさに瓜二つだ。

おそらく彼らが付き添いに派遣された人材。

「話は前に伝えた通りだけど……本当に頼んでも大丈夫?」

「心配しなくても大丈夫だってば!。難波の力は伊達じゃないよ!人材の一人や二人、どうってことありませぬ!」

申し訳なさそうに言った千歌とは対照的にあつけらかんと言いつつユイ。

「こちら、みんなの旅に同行してくれるウチのスタッフさんです」

「鷺尾雷斗らいとです」

「鷺尾風華ふうかと申します。しばらくの間、皆様のお世話をさせていただきます」

スーツ姿の姉弟は深々と頭を下げ、それぞれ丁寧に挨拶を交わした。

「それじゃあ西都に向かう3人はあたしとみーちゃん、雷斗さんと一緒に車。他の3人は風華さんと一緒に北都だね」

ぞろぞろと皆が乗車していくなか、腰に手を当てながらニコニコとその光景を眺めているユイにキリオが近づき、口を開いた。

「……葛城」

「ん、あなたは確か千歌ちゃん達の先生……。何かご用ですか？」

「言い出しつぺのこつちが言うのも何だが……西都の分をお前達Bernageが担当

することはできなかったのか？」

わざわざ千歌達が危険な行動をせずとも、地元のスクールアイドルであるユイやミカが声をかけることは不可能だったのだろうか。

「もちろんできましたよ。……けど、他のアイドル達が賛同してくれるかはわかりません。それは北都のSaint Snowさんにも言えることでしょう」

「えつと……つまり？」

「それだけ、ラブライブ優勝校の影響力は強いものなんです。数を集めたいのなら、Aqoursのみなさんが直接出向いた方が効果的ですから」

他のスクールアイドルにはない、真の意味で周りの人間を惹きつける力。それが千歌達のなかにあるのだという。

「でも、千歌ちゃん達だけにいい格好はさせません！あたし達も精一杯サポートさせてもらいますよー！」

「チャオ」とキリオに言いつつ背後に待機していたミカに一言呼びかけた後、ユイは梨子、善子、鞠莉の3人が乗り込んだ車へ向かおうと足を進めた。

「……！おい、お前——」

「えつ……？きやつ——！」

キリオはふと自分の前を通り過ぎようとしたミカを見て、驚くような素振りを見せながら咄嗟に彼女の腕を掴み取った。

彼女が制服のブレザーから覗かせる首元、手首、太もも………身体の様々な部分に包帯が巻かれていたのだ。

まるで何か強い衝撃が、360度のあらゆる方向から激突したかのような不自然な怪我だった。

「これは……………」

「あつ…………あの…………いい、痛い…………です…………っ」

「…………あ、す、すまない」

ハッと我に返ったキリオは力を込めていた手のひらを開き、ミカから一歩後ずさった。

逃げるようにそそくさと退散していく彼女の後ろ姿を目で追いつつ、キリオは胸の奥底で引っかかっている違和感を探るが、あと一歩のところでのその正体が掴めないでいた。

『無事、スカイウォールを越えたよ』だつて！ 梨子ちゃんから！』

「花丸ちゃん達も北都を移動中だつて！」

「とりあえずは一安心……なのかな？」

部室の椅子に腰掛けながらメンバーの無事を喜ぶ。

現在この東都に残っているのは千歌、曜、ルビイの3人——とキリオのみ。普段と比べて随分と部屋の中が広く感じる。

今のところ変わったことは起きていない。……スターク達が行動を起こすとすればどういったタイミングなのか、予想することは難しい。

「さあ！ 私達は私達の仕事をしなくちゃ！」

「うん！」

「お！ さつそく同志を集めに行くでありますか!？」

東都の声かけ担当は千歌達の仕事だ。少しでも早く行動を——

「……む」

着ていた白衣から着信音が漏れるのが聞こえ、やたらゴツゴツした形状のスマホを取り出すキリオ。

届いていたのは電話、それも塔野首相からのものだった。

「すまん、ちよつと席を外す」

「えー!?これからって時なのに!」

「悪いな」

少し慌て気味に席を立ち、部室を出て体育館へ出る。

『急にすまないね、時間を取っても大丈夫かな?』

「……どうかしましたか?」

『すぐに政府官邸に来てほしい。緊急を要する事態だ』

「……!?何があったんです!?!」

次に首相の口から出た言葉を聞いた瞬間、キリ才は恐れていたことが現実に来たことを知る。

『北都政府が、我々に宣戦布告を言い渡してきた』

第2章 ライダーウォーズ開戦

第14話 三都のソルジャー

「ワンツースリーフォー！ワンツースリーフォー！」

グラウンドの一角でダンスの振り付け練習に励む者が二人。

鹿角聖良は前方の脚立に置いてあるスマートフォンに目線を集中しつつも、時折隣で同じ動きをしている妹へ視線を送っていた。

「一旦ストップ」

やがて目を伏せ、身体を休めた聖良はフォームの確認用に設置してあったスマホを取り上げ、普段の気力が見られない妹——理亜の方を見やる。

「またワンテンポ遅れてるよ、理亜」

「……ごめんなさい」

今日は練習を始めてから——いや、ひと月ほど前からずっとこの調子である。

原因は……考えるまでもないだろう。

「猿渡くんとはまだ連絡つかないの？」

「……うん……」

猿渡タクミ。前回のラブライブが終わった後、自分達 Saint Snowのマネージャーをしたいと駆け込んだ少年。

動機は「Aqoursのルビィちゃんとお近づきになれるかもしれないから」という不純極まりないので、当初はきっぱりと断らせてもらった。

結局はあまりにもしつこく懇願されたことでこちらも折れてしまったわけだが。

もともと理亜のクラスメイトであつたからかすぐに打ち解け、時間が経つにつれてタクミが根は真面目な人間だとわかつた。

——そんな彼も、一ヶ月ほど前から音信不通。それが原因で理亜も練習に集中できなくなつてしまつてゐる。

「……いつもなら私達よりも先に来て、頼んでもいないのに勝手にお弁当用意してたり、勝手に模様替えしたり……勝手に、部室の掃除したり……してるはずなのに」

理亜の言う「いつも」が随分と昔に感じる。

気にせず練習に励めと言いたいところだが、タクミが急に姿を見せなくなったのは確かに変だ。

「……最近広まつてる噂と、なにか関係があるのかも」

「理亜」

「姉様だつてそう思つてるんですよ!!タクミの奴……ずっと私達のこと気にかけてくれ

てた……きつと変な口車に乗せられて……!」

「少し落ち着きなさい!」

捲したてる理亞に向かって聖良の声が被さる。

……近頃、北都は東都と西都に戦争をしかけるつもりだという話が流れている。

そしてその「兵士」を集めるために、相応しい人材をスカウトして回っている者がいるとか。

「確かに、以前から猿渡くんの様子はおかしかった」

北都に対するバツシング、それは北都を代表するスクールアイドルである Saint Snow にまで飛び火していた。

そのせいでタクミは東都や西都に強い敵意を向けていたことはわかっている。

けど――

「……戦争なんて、そんな……ありえないわよ。だったら私達は……スクールアイドルは何のために……!」

「……姉様……」

「二人して俯いて……なにかあったのか?」

背後からかけられた声に反応し、聖良と理亞は揃って後ろを振り返る。

「タクミ……!?!」

「猿渡くん……?」

モッズコートを着込み、身体のうちこちに痛々しい傷を付けた少年がそこにいた。

「いやあ悪いな、ちよつと外せない用事があつてさ。サボった分はきっちり働くから、安心してくれ」

「今までどこ行つてたのよ!?!」

「うおお!?!」

物凄い剣幕で迫つてきた理亞の顔に仰け反りつつも、タクミは視線を泳がせながら必死に口を動かした。

「まあ……それはあれだ……自分自身を鍛える旅だったり……」

「わけわかんないこと言つてんじゃないわよ……!」

「イダダダ！耳引つ張るな!!」

止まっていた時間が動き出すように、理亜の表情に活気が取り戻される。

じやれ合う猫のような二人を遠目で微笑ましく眺めていた聖良は、ふとタクミの着ているコートのポケットから何かが落ちるのに気がついた。

「これは……なんですか？」

ひよい、と何気なくソレを手取る。

パッケージの形からしてゼリー飲料のようだが……見たこともない品名だ。

「『ロボットスクラッシュゼリー』……………?」

「……………ッ!」

「きゃっ……………!」

不意にこちらへ飛び込んできたタクミは聖良が握っていた物を強引に奪い取ると、すぐさまそれを再びしまいこんで引きつった笑顔を見せてきた。

「すみません聖良さん、これは大事な物なんで」

「はあ……」

どうしても詮索する気にはなれなかった。

何事もなかったかのように帰ってきたタクミと、そのことを純粋に喜ぶ理亜。

聖良はこの光景から、なぜか不穏な空気しか感じ取ることができなかった。



時は約一ヶ月前に遡る。

「西都の兵器になれ、万丈リユウヤ」

「兵器……？俺が……？」

牢獄から解放されたリユウヤはスタークに言われるがまま、薄暗い演習場のような場所へ連れてこられていた。

「お前のハザードレベル上昇率は他の奴らと比べても異常だ。西都の連中も歓迎してくれることだろう」

「他の奴ら……？さっきから何の話をしてんだよ!?わけわかんねえぞ!!」

「罪を帳消しにしてほしいんだろう？なら、素直に従え」

「だから俺は誰も襲ったりしてねえんだよ!!」

スタークの挑発じみた言動を聞き、余裕のないリユウヤは奴のパイプ型マフラーを乱暴に掴んでは側にあった壁へ身体を叩きつけた。

「クハッ……！いいぞお……今のでまた少し、ハザードレベルが上がったか……!?」

「……………ッ……………!」

反射的にドラゴンフルボトルを取り出す。

がむしやらにそれを振り、成分の力を拳に乗せた後でスタークに向かって立て続けに打撃を放った。

「おいおいそう急かすな。慌てなくても、お前にはすぐに戦いの舞台を用意してやるよ……！」

流暢に喋りながらも正確にリュウヤの攻撃を受け止めていくブラッドスターク。

反撃に出るわけでもなく、回避するつもりもない。ただただ繰り出される攻撃を腕で防御するのみ。

まるでリュウヤの怒りそのものを受け止めているかのようにだった。

「くそっ……！」

やがてリュウヤは疲れ切ったように膝に手をつけ、顔を伏せた。

「さて——オレも色々と忙しくてね、お前の相手はこいつらに任せる」

「あ……？」

スタークがその赤い腕を一振りすると、天井に取り付けられていた機器が作動。リュウヤの目の前に数体のスマッシュが形作られ、一斉にその牙を剥いてきた。

「なっ……!!」

「わからないことがあつたらなんでも教えてやるよ。……次に会う時に生きていれば、

の話だが」

「デメエ……！待ちやがれッ！！——クソッ！！」

戦闘を強いられるリュウヤに背を向け、スタークはあっさりとその場を立ち去ろうとする。

「オレの期待を裏切らないでくれよ」

表情の見えないマスク。その下で奴は確かに——笑っていた。

西都のとある地域にひっそりと建てられている孤児院、そこが万丈リュウヤの家だ。

「あの——！んにちは——！！」

小柄な身体から精一杯出された声が施設内に響く。

スリッパの音と共に玄関へやってきた中年の女性は、突然現れた少女にきよんとした顔を向けつつ彼女へ尋ねた。

「えーと、どちら様でしょうか？」

「初めまして、万丈さん……ですよね？あたし、リュウヤくんのクラスメイトの葛城という者なのですが……」

「あらまあ！リュウヤの！——立ち話もなんだから、どうぞ上がって」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

愛想笑いを振り撒きつつ、ユイは靴を脱ぎ揃えて孤児院のロビーへと足を踏み入れた。

「こんにちはー！」

「ふふ、こんにちは。元気いいね」

廊下を歩いている最中で通りすがりの子供達が挨拶を交わしてくる。皆この施設で不自由なく暮らせているようだった。

「おねえさんだれー？」

「リュウヤお兄ちゃんのカノジョ？」

「あつ！テレビで見たことあるよ！」

「こちらこちら、お客さんに失礼しちやダメでしょ」

「あはは、ぜんぜん大丈夫ですよ」

しばらく歩いた先にあった主任室に招かれ、この施設の責任者であろう女性と面と面を向かい合わせた。

「じゃあ……まだ帰ってきてはいないんですね」

「ええ。……クラスメイトの子なら、何か知っているんじゃないかと思っていたのですが……」

「ごめんなさい、あたしも……わからないことばかりで」

リュウヤが殺人未遂犯として連行されてから一ヶ月以上経つ。

免罪だったという報道もないまま時間は流れ、事件の真相はうやむやになりつつあるのだ。

「……あの子はバカだけど、殺人なんて本当に馬鹿な真似はしないはずだよ。それは……親である私が一番わかってる」

「――」

「ユイちゃん……だっけ?」

「あ……はい、そうです」

一瞬肩を震わせ、俯いたユイが気を取り直して口を開く。

「あたしも……そう思います。万丈くんはそんなことしないって、あたし信じてます」

施設を出て少し進んだ先に建っている電柱。その陰に身を潜めている者へと歩み寄る。

「おまたせみーちゃん」

「あ……どうだった？」

「うん、大丈夫。情報が漏れた様子はなかったよ」

ゆつくりと歩き出しながらそう口にするユイ。

計画は順調だ。

東都、西都、北都、それぞれ核となる人間の配置は済ませた。あとはシナリオを進めるだけ。

「そろそろみーちゃんにも頑張ってもらわないとね」

「……………」

「ね、みーちゃん？」

「あつ……………うん、頑張る……………」

消えそうな声で返事をするミカを尻目に、ユイは空を見つめながら自分にしか聞こえない音量でポツリと言った。

「唯一危険分子になる可能性があるとするば——あの王妃、か」



政府官邸からの連絡を受けた直後、キリオは即座に浦女を離れ首相のもとへ向かっていた。

スマートフォン型のアイテムである“ビルドフォン”を変形させたバイク、“マシンビルダー”を走らせながらも思考を巡らせる。

（なにがどうなってる……………!?!）

北都はどうして東都に攻撃を……………? 急すぎる。あまりにも。

首相はいったいなにをしていたんだ。こうなるのを防ぐために他の首相達との会議を開いたのではないのか？

「塔野首相ッ!!」

息を切らしながらノックもせずに執務室の中へ飛び込んでいく。

待機していた複数のガーディアンと警備員達が一瞬銃口を向けるが、首相の一声でそれらを下ろした。

「よく来てくれた」

「さっきの電話は……どういうことですか？」

「言った通りさ。北都の連中が、この官邸を目指して侵攻中だ」

表情を崩さないままそう語る首相に眉をひそめつつ、キリオは傍の机に置いてあったパソコンの画面に目を移した。

進行してくる北都軍と東都軍の防衛戦。リアルタイムでの戦況が映し出されている。

「今までなにを……していたんだ！あなたは!!」

思わず一步踏み出すキリオだったが、瞬時に動き出したガーディアン達によつて羽交

締めにされてしまった。

「いや、本当にすまない。私としても最善を尽くしたつもりだったのだが……聞く耳持たずでね。君にはこれからすぐに現場へ向かってもらいたい」

「誰が……!!」

「嫌とは、言わせないぞ?」

「……………」

ふとパソコンから聞こえてくる音声が目撃を打つ。

弾丸の飛び交う音や爆発音に紛れ、逃げ惑う人々の悲鳴が映像を通して聞こえてくるのだ。

——放つてはおけない。

「くっ……………そ……!!」

「決まりだな」

にやり、と本性を現したように笑った首相を睨みつけ、キリオは身体を奪っていたガーディアンを強引に引き剥がした。

「ああそれと……これは吉報だな。西都の軍が我々に加勢してくれるそうだ」

「西都が……?」

「ああ。——ちようど着いたみたいだ」

何者かが扉を開き、部屋に足を踏み入れる音。

背後から感じた気配を察知し、キリオは警戒しつつ後ろを振り向いた。

「お前は――」

「……！ あんた――」

顔の数力所にガーゼや湿布が貼られている痛々しい風貌。

青いジャケットを羽織った高校生らしき少年。

「紹介しよう、彼が西都から派遣された兵士、万丈リユウヤくんだ」

第15話 仕組まれたベストマッチ

それは星の終わりに起こった、わずかな間の攻防。

鬼神の如き斬撃の乱舞を浴びせる者と、それを全て捌ききる黒き災害。

間違はなくこの世で繰り広げられてきたどんな戦いよりも混沌に満ちている、そう思わせる光景だった。

『……………う——！あああああああああッッ!!』

「……………」

刹那、凄まじい金属音と共に光の槍が黒い人影を貫通。

腰に巻きつけていたベルトは破損し、鎧を身にまとっていた白髪の人物が顔を出す。

「……………まだ、だ」

最後の力を振り絞り、彼は自らのエネルギーと肉体を“箱”の中に閉じ込めた。

——ワタシが覚えているのは、ここまでだ。

暗闇のなかでひたすらに待つ。
代わりとなる身体が、必要だ。

●●●

『無事にスカイウォールを越えられたようで何よりです。どうか慌てず、ゆっくり来てくださいね』

「ええ。色々のご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願いますわ」
お互い相手が先に通話を切るのを待っていたせいで数秒の沈黙が流れる。
気まずそうな笑い声が聞こえた後、先に切ったのは聖良の方だった。

「こつちで活動してる間は、聖良達の家でお世話になるんだよね」

「そういうことになっていきますわ」

北都を移動中のダイヤ、果南、花丸。

電車内の席を変形させ、4人向かい合う形で暇つぶしの会話を交わす。

スカイウォールの影響で航空機関は機能していないため、必然的に車と電車での移動になつてしまう。向こうに着くまでにそれなりの時間がかかるだろう。

「あれ？じゃあ、えっと……………風華さんも理亞ちゃん達の家泊まるずら？」

大人しいを通り越して不愛想な印象を与えるポニーテールの女性。

先ほどから一切会話に加わりうとしない難波重工のスタッフ、鷲尾風華に花丸が氣を利かせてそう話を振った。

「いえ、私は近場のホテルに宿泊する予定です。どうかお氣になさらず」

「そうですか……」

素つ氣なく返されたことで会話はそこで途切れてしまう。が、ナチュラルにコミュニケーション能力の高い果南がそこで終わらせはしなかった。

「風華さんですごくスタイルいいよね。何か秘訣とかあるんですか？」

それもあり突っ込んだ話題をねじ込んでくる。

考えているのか、風華は数秒黙り込んだ後で凍りついた表情のまま口だけを動かし

た。
「特に意識したことはありませんが………運動なら、物心ついた時から継続して行っています」

「へえ！ 私も身体動かすの好きですよ。意外と気が合うかも！」

そう言って笑う果南に対して精一杯の返礼なのか、風華はどこか引きつった薄ら笑いで言った。

「……そうですね」

「…………えっと…………み、ミカン！——あつ！」

「はい、ン、ついたー！またみーちゃんの負けー！」

「うう……」

「もしかして、ミカつたらしりとり苦手？」

「善子ちゃんもさつきは危なかったけどね」

「言い直しはナツシングだよー？」

「あれはセーフよセーフ！あとヨハネ!!」

一方西都を移動中の梨子、善子、鞠莉、そしてBernageの二人。

西都にいる間はユイやミカ達が普段使用している難波高校の生徒専用の宿舍を借り

ることになっている。現在彼女達を乗せている車はそこを目指して走行中だ。

「……ユイさん」

「ん？どうかした雷斗さん？」

「これを」

雷斗はハンドルを握りながら助手席に座っているユイに自らの携帯を差し出してきた。

おもむろにそれを受け取ったユイは、画面に記されていたニュース記事を見た途端にニコニコと緩めていた口元が鋭いものになる。

書かれていた記事のタイトルは「北都政府、宣戦布告へ踏み切る」だ。

「……………ふふん」

いたずらが上手くいった子供のように笑うユイ。

「……………ユイちゃん、なに見てるの？」

「うひゃあッ!？」

背後からかけられた梨子の声に飛び上がる。

すぐさま取り繕った笑顔を彼女に向け、なんとかその場をやり過ぐそうとした。

「な、なんでもないよ。エゴサしてただけ」

「そ、そう……?！」

急に挙動不審になったユイを見て不自然だと思ふ梨子達であつたが、それ以上は氣にすることもなくすぐに談笑へと戻つていく。

ユイの本性と、これから起ころうとしていることを知つてゐるただ一人を除いて。

「……………万丈くん」

●●●

「お前が……………西都の兵士……………？」

「東都の仮面ライダーと組むとは聞いてたけど……………まさか、あんたがライブの時の……………」

傷だらけの少年を目にしてキリオは啞然とする。

未だに理解が追いつかないまま言い渡された西都からの増援——それは思いもしない人物だったのだ。

「おや、すでに知り合いだったかな？」

「……………あんたらは……………子供まで戦争に巻き込むつもりなのか!？」

塔野首相に食つてかかるキリオの発言に一瞬ムツと表情を歪ませるリュウヤ。

「おいおい、勘違いしないでくれ。彼を兵器として扱っているのは西都の連中だ、私じゃない」

「なんだと……!？」

「……どうでもいいけどよ」

リュウヤの低い声が部屋に通る。

静まり返った執務室の中心に立っていた彼は、ただ一言口にするだけだった。
「行くならさつさとしようぜ。……速攻でケリつけてやる」

結局、ユイが言った通りの事態になってしまった。

彼女は難波重三郎からの指示で自分を西都の兵士に仕立て上げようとしていたはずだが……どうもしっくりこない。

あの誘いは本当に会長の意思だったのか？

(……あれからスタークの野郎も顔を出そうとしない)

スマッシュとかいう怪物達とひたすら戦わされた後、奴の手下と思われる人間から
“ドライバー”を受け取った。

やっとあの息苦しい実験場から出ることができたと思えば今度は戦争に駆り出されることになった。

(あの野郎だけは……いつか必ずぶん殴ってやる)

こうしてどこから出されているかもはっきりしない指示に従っているのも、スタークの正体を暴いて一泡吹かせてやるためだ。

そのためにも今は――

「おい、お前。……万丈リユウヤだったか」

2人乗りの最中、バイクの運転を担当していた青年がそう声をかけてきた。

「ああ。……えつとあんたはキリ――キリ……なんだっけ？」

「戦兔キリオだ」

「ああ、そうそうキリオだ」

どこか浮世離れしているような雰囲気青年。

以前ライブでのスマッシュ襲撃の際に助けてくれた仮面ライダーは……今日の前に

いる彼だったのだろう。

「ライブん時は……ありがとうな。あの変なボトルのおかげで生き延びられた。……

あ、そうだ、今返すよアレ」

「いやいい、あれはこれからお前が持つてろ。役に立つはずだ」

「いいのか？」

「念のためだ。……お前も狙われてる可能性があるしな」

「……？なんのことだ？」

「知らなくてもいいことだ」

「氣を利かせてくれているのはなんとなくわかる。わかるのだが————キリオの発する言葉には節々にトゲがある気がする。」

「……とりあえず、だ。今は西都と東都は協力関係にあるんだよな？」

「……そういうことになってるみたいだな」

「つしやあ！頑張ろうぜキリオ！俺達の力を見せてやるんだ！」

「先に言っておくが、俺はお前を戦わせるつもりはない」

「は？」

「よし、この辺でいいか」

唐突にスピードを落として停車するバイクに呆然とするリュウヤ。

しばらく無言の空気が漂い、やがて痺れを切らしたキリオが静かに言い放つ。

「……早く降りろよ」

「いや降りないけど、普通に」

「そう言うと思った」

懷から取り出したビルドドライバーを腰に巻きつけ、二本のボトルを装填。

《忍者!》

《コミック!》

《ベストマッチ!!》

「うおっ!」

レバーを回転させてスナップライドビルダーを出現。紫色と黄色のスーツを形成する。

《Are you ready?》

「変身」

《忍びのエンターテイナー! ニンニンコミック!!》

《イエーイ!》

変身と同時に手元へ飛び出してきたのは専用の武器である“4コマ忍法刀”。

「どうしたんだよ？まだ目的地には着いてないだろ？」

ビルドへ姿を変えたキリオに首を傾けるリュウヤだったが、当の本人はまるで意に介していない様子で手に持つ刀を軽く振るった。

「お前みたいな子供を戦わせるわけにはいかない。来たけりや自力で来るんだな」

「は!!おいちよつと——!」

「もつとも、足のないお前に辿り着ければの話だが」

《隠れ身の術!》

「……なぜ戦うのか。その答えがわからないうちは大人しくしておくんだな」

4コマ忍法刀の刀身から放たれた煙幕がキリオとマシンビルダーを包み込み、一瞬にしてその姿を消す。

「……どうもこいつも……バカにしやがって……!」

1人その場に置いてけぼりとなったリュウヤは、わなわなと身体を震わせては思い切り声を張った。

「上等じゃねえかあああああッ!!」



「……キリオくん、戻ってこないね」

早速東都のスクールアイドル達に声をかける計画を立てていた千歌、曜、ルビイの3人。

電話をしに部室を出て行ったきり姿を見せないキリオに唸る。

「毎回肝心な時にいなくなるんだから……もう」

「最近は特に多いよね、そういうこと」

何気ない会話をする曜とルビイを尻目に、千歌は何か嫌な予感を察せずにはいられなかった。

自分だけが知っている、戦兔キリオが仮面ライダーであることを。

「千歌ちゃん、なにか知らない？」

「えっ……!? う、ううん、なにも聞いてないよ」

必死に手を振ってそうアピールする。

だいたい彼がなにをしているのか知っていると、自分になにかできるわけでもない。

……自分達にできることとなれば、スクールアイドルとして戦争の歯止めになることだけ――

「……………え？」

不意に上がった声音に反応し、千歌とルビイの視線が曜へと集まる。

「どうかしたの？」

「……………どういふ……………こと……………？」

「曜ちゃん？」

ひよい、と上半身を伸ばして曜の握っていたスマートフォン画面に目を移す。

検索エンジンの隅にあるニュース記事がまとめられている部分、そのトップに書かれていた記事のタイトルは――

「……………北都政府が……………宣戦布告……………？」

単語の意味を理解するよりも先に1人の面影が脳裏をよぎる。

北都政府が、他の国に攻撃宣言したという記事。

「“なお、各政府は全てのスカイロードの完全封鎖を決定。現在政府が発見できていないものについても同様の措置をする予定”……これって……!!」

「そんな……! そんなことしたら……!! お姉ちゃん達が!!」

文を読み上げた曜とルビィはひどく取り乱した様子だ。

当たり前だ。スカイロードの完全封鎖……これはつまり、西都や北都への移動が事実上不可能になるということ。当然それは“向こう側”から同様。

……西都に向かった梨子達も、北都に向かった果南達も……東都に戻ってくることはできなくなる。

「みんな……!!」

第16話 兵器のライダー

「最前線より官邸へ！現在、仮面ライダーと思しき者を含んだ北都軍と交戦中！」

「ダメだ……押し切られるぞ!!」

「こつちの仮面ライダーは何してる!?増援に来るんじゃないのか!」

「いいから進めツツ!!ありったけのガーディアンを持ってこい!!」

混乱極まる戦場の真っ只中。

当たり前のように弾丸の雨が飛び交う光景のなか、一際その存在感を煌めかせている人物がいた。

《ツインブレイカー!》

黄金の戦士が駆ける。

おびただしく感じるほどに並べられた東都のガーディアン達の壁へ一筋の流星の如く突貫し――

《シングル!》

《ツイン!》

「おおおオオオオオラアアアアアアアッ!!」

撃滅。

自らの腕が千切れんばかりに放たれたその一撃は、黄金色の螺旋を描きながら機械仕掛けの兵隊を一掃した。

「うっ……!」

あまりの戦力差にその場にいた兵士達が後退する。
もはやここは黄金色のライダーの独擅場と化していた。

「……足りねえ」

気怠そうに上体を揺らめかせたライダーがこぼす。

「足りねえ、足りねえんだよ……全っ然足りねえんだよなあ……」

おもむろに兵士達が集う方向を睨む戦士。

その威圧感に東都側の統率は瞬く間に崩れ去った。

「ひっ……!」

《スクラップフィニッシュ!!》

「誰が俺を——満たしてくれるんだよおおおおッ!!」

何もかもが葬り去られる。

東都だけでなく北都のガーディアンまでもを巻き込みながら前進する。

金色の波動が拡散するなかで、ついに動ける者はただ1人になってしまった。

「……待っててくれ、ふたりとも。俺が、必ず……この国を——」

●●●

「では私はこれで」

「うん、ありがと雷斗さん。うひーつつかれたあ………みーちゃん部屋までおんぶしてー」

「う、うん」

「前から思ってたんだけど、あんた達ってやけにお互いの距離が近いわよね……」

「あはは……これだけ長いこと車で移動するのって、なかなかないものね」

「A q o u r sのメンバー間ではあまり見られない s i t u a t i o n ね」

難波高校に到着した時には、すでに辺りは暗闇に包まれていた。

学生寮を見上げるといくつかの窓に明かりが灯っているのが見えるが、物音ひとつ聞こえない異様な空気で満たされている。

年頃の高校生達ならばこのような遅い時間帯に騒がしくなっても何らおかしくはないはずなのだが、そういった類の騒音は一切捉えられない。

「……が……難波高校」

「ずいぶんおつきいわね……」

大学と見紛うほどの広大な土地に広がる施設の数々。

そのひとつに過ぎない生徒達の宿舎だけでも相当な規模で建造されている。浦の星女学院の倍は軽くありそうだ。

やけに豪勢な雰囲気醸し出している廊下を歩く。学校の施設というよりも高級ホテルに在るような感覚だ。

「あ、みーちゃんバスコンでストップ」

「わたしバスじゃないよ……」

ミカの背中に収まったままのユイが横にある部屋を指し示す。

空き部屋が三つ。それぞれ梨子と善子、鞠莉のために用意されたものだろう。

「奥の方から鞠莉ちゃん、梨子ちゃん、ヨハネちゃんの部屋だよー」

「だからヨハっ——あれ？」

「本当に、いろいろありがとうねユイちゃん、ミカちゃん」

「今後の小原グループは難波重工とも仲良くせねばならないねー」

「もう、お礼はいいって何度も言ってるでしょ？」

ふわあ、と猫のような欠伸を見せた後、今にも眠そうな瞳を梨子達へ向けながらユイは続けた。

「んん……やつぱりちよつと疲れちゃったみたい。もつとたくさんお話したかったけど……今日はもう遅いし、また明日だね」

「ええ、おやすみなさい」

「では、チャオ……。ほらほら、みーちゃんバス発進！」

「そろそろ降りてよ……」

自分達の部屋を指指して遠ざかっていく2人の背中を見送りつつ、梨子達も与えられた一室の扉を開いた。

「ここが私の……束の間の結界……」

部屋に足を踏み入れるなり飛び出した善子の一言である。

「なーんか実感湧かないのよねえ」

墮天使モードから一変して、傍に設置されていたベッドへだらしなき満点でダイブする。

千歌や花丸達——他のメンバーと離れてからそう時間は経っていない。だからだろうか、自分が今西都にしていることが嘘のようだった。

「Bernageか……」

人付き合いが得意ではない自分でも、出会った当初から自然な会話ができる少女達。

葛城ユイに氷室ミカ。彼女達がどうしてもというのなら、梨子と同じく上級リトルデーモンにしてあげるのもやぶさかではない。

「ヨハネって呼んでくれるし」

しばらくぼう々と天井を眺めていてふと気づく。

移動中の車内では暇つぶしのしりとりを終えた後、運転手以外は皆眠りこけてしまった。目的地に着いたことがまだ千歌達に連絡できていないのだ。

「メールメールつと……」

ゆつくりと取り出したスマートフォン画面に映し出されていたのはニュースサイトの通知。

一瞬気にせずホーム画面へ移ろうとするが、とある2文字が視界に入った途端に善子の表情は凍りついた。



時は数時間前に遡る。

「こ、これ見るすら!」

「どうしたんですの? いきなり大声をあげて……」

「いいから見るすら!」

電車に揺られるなか、花丸が慌てた様子で見せてきたのはSNSに掲載されていたニュース速報。

北都が東都と西都に戦争を仕掛けたという情報。

「……………どういう……………こと？」

狼狽える花丸、果南、ダイヤを一瞥した風華が不意に顔を背ける。

「……………始まってしまいましたか」

「風華さん、どうしよう……………！」

「どうか落ち着いて。……………今ある情報で確認しましたが、戦場となっているエリアはすでに通り過ぎました」

こんな状況だというのに、冷や汗はおろか少しも焦った様子を見せない。

「あなた方を危険な目には遭わせはしません……………そのために、私がいるのですから」

「……これは——」

そこには瓦礫の山が無数に築かれていた。

兵士だったものが倒れ、ガーディアン達の消し飛んだ灰が床に転がり、焦げ付いた匂いを醸し出している。

戦地の中心に佇んでいた戦士を——キリオは冷ややかな目で見下ろした直後、やるせない感情を露わにした。

「……………お前がやったのか？」

「……………だったらどうする？」

金色の鎧をまとった人影がこちらへ歩み寄ってくる。

左腕に装備した刃の切っ先が光り、今にもキリオの身体を貫きそうな威圧感だった。そして腰には——

「……………そのドライバーは……!？」

「ああ?……なんだ、お前も『仮面ライダー』ってやつじゃねえのかよ?」

水色の素体にレンチ型のレバーが取り付けられており、中心にはゼリー飲料のようなアイテムが装填されている。

キリオが使うビルドドライバーとは全く違う——新型のドライバー……?」

「お前……いつたいてどこでそんなものを!」

「ごちやごちやうるせえよ。………戦場に自分からやつてきたつてことは、死ぬ覚悟はできてるんだよな?」

強烈な殺意を察知したキリオはすぐさまビルドドライバーを腰に巻き、向こうが仕掛けてくる前にボトルを装填。

《ラビット!》

《タンク!》

《ベストマッチ!!》

《ビームモード!》

キリオの身体を覆うレールに奴が撃ち出した弾丸が衝突。火花を散らすなか、彼は静かに問いに答えた。

《Are you ready?》

「……変身!」

《鋼のムーンサルト!ラビットタンク!!》

《イエーイ!》

「はっ……………」

敵の力は未知数。実力を測るためにも……………

「最初から全力でいかせてもらう」

ラビットの足を駆使した高速移動で距離を詰め、強襲。そのまま奴の胴体へ連打を加えていく。

「……………そうか、お前が—— “ビルド” か」

「……………」

キリオの放った拳を難なく掴み取り、力任せに腕を捻る。

「俺は 그리스、仮面ライダー 그리스。……………覚えときな、東都の仮面ライダー。お前らを倒す奴の名前だ」

「仮面ライダー 그리스……………だと……………？」

「ハアッ!!」

直後、頭部に鋭い痛みが迸る。

一瞬混乱しかけたが、数秒たった後頭突きを食らったと気づき、瞬時に退避——

「逃がさねえよ」

「……………!?!」

《アタックモード!》

グリスの左腕から黄金のドライバーが伸び、思い切り腕を振り抜く。

「オラッ……! オラオラオラオラア!!!」

「ぐっ……!?!」

ビルドの装甲が抉られる。

何度も火花を散らした赤と青の身体は、なすすべもなく後方へ吹き飛んだ。

「……いつ……!」

ベルトの性能差はもちろんだが……それ以上に、ハザードレベルが自分よりも遥かに高い。

すぐにその結論へとたどり着くキリオだったが、同時に不自然さも感じていた。

(そのわりには動きがデタラメ過ぎる。……場数もそこまで踏んでいるようには見えな
いし、戦闘技術もまだまだ粗が目立つ)

……仮面ライダーになって、まだ日が浅いのか?

「……! お前、まさか……ネビュラガスを使って無理やり……!?!」

「戦いの最中に……ベラベラ喋ってんじゃねえぞゴラア……ッッ!!」

「ぐう……ッ……!!」

横薙ぎの蹴りがキリオの脇腹へ直撃し、水切りのように地面を転がる。

「……ああ、お前もダメだ。足りねえ……ぜんっぜん足りねえ……!!」

間違いない。こいつは……仮面ライダーグリスの変身者は、

「誰が俺を満たしてくれるんだよおおおおおッッ!!」

大量のネビュラガスを人体に注入し、ハザードレベルを先取りしている。

「……………!!」

《ニンジャ!》

「ビルドアップ!!」

ラビット部分のボディをニンジャに変更。咄嗟に4コマ忍法刀を出現させ、忍術を発動させる。

《分身の術!》

真上から特攻してきたグリスの攻撃を回避し、4人に増えたビルドが順に奴の身体を切り裂いていく。

「チィ……………」

《火遁の術!》

《火炎斬り!》

4方向から放たれた炎柱がグリスに殺到。

回避することは叶わず、奴はそのまま炎の波へと飲み込まれてしまう。

しかし――

「さつきからチマチマチマチマよお……………」

「……………なに……………!?!」

「そんな攻撃……………効くわけねえんだよなああああああッ!!」

黒いゲル状の成分が周囲に分散し、まとわりついていた炎を払う。

「なんて奴だ……………!」

「そろそろ終わりにするかあ……?」

グリスは自らの腰に手を回し、左腕にある武器——ツインブレイカーへとめ込む。

その光景を見たキリオは、仮面の下で目を見開かずにはいらなかった。

奴が取り出したのは——

「フルボトル………!?!」

《《シングル!》》

《《ツイン!》》

グリスは一本のボトルに加え、ドライバーに装填していたゼリーまでもをツインブレイカーに挿した。

まさかスタークと自分以外にも、ボトルを扱う人間が——

「……………!!」

視界が輝く。

目が潰れそうになるほどの眩い金色を前に、キリオは手も足も出なかった。

閃光と衝撃だけが世界を支配する。

変身が解除され、気を失ったキリオを見下ろすグリス。

「……………もつと……………もつとだ……………!!」

バリ、と黄金色の身体に稲妻が走り、我を失ったかのような挙動で声を張った。
「俺の求める相手は……………!!どこだああアアアアアアアアッ
!!!!!!」

「はあっ……………はあっ……………!!」

「……………あ?」

遠くからこちらへ走ってくる人影が見える。

あのシルエットはただの人間じゃない。頭部にはツノのような凹凸が確認できる。

「はあ……ツ……ここか!? ここだよな!」

予想通りその人影の正体は一般人などではなかった。むしろ――

「あれっ? キリオ? なんで寝て――つて誰だお前!」

銀色の身体に、ドラゴンを模したような空色の装甲。

そして決定的なのは腰に巻いたドライバー。

「……………俺の心火は、まだ燃え足りねえ……!!」

目の前に現れた新たな獲物に向けて、グリスはその闘争心を露わにした。

第17話 スクラッシュの力

「——ハザードレベル、目標値までの到達を確認」

「……………ああ……………」

これ以上はもう限界だと思い始めた時、残存していたスマッシュ達が電源を落とされたPC画面のようにブツリと姿を消す。

天井から降り注ぐわずかな照明を頼りに、リュウヤは仰向けの状態のまま声のした方向へ顔だけを向けた。

そこに立っていたのは、タブレットを抱えた1人の女性。後ろの方でひとつに束ねられた髪は解けばそれなりに長そうだった。

「誰だ……………あんた……………」

「スタークからあなたの管理を任せました、鷲尾風華と申します」

「スターク……………あいつの仲間だったのか……………!?!」

無理やりにも奴の居場所を聞き出そうと全身に力を込めるリュウヤだったが、度重なるスマッシュとの戦闘で力が残っているはずもなく、

「ぐ……………っ……………」

立ち上がろうとして膝をついたリュウヤのもとに風華が歩み寄る。

「……………怪我自体は大したことありませんね。その消耗は疲労によるところが大きいでしょう」

「なに冷静に分析してんだ……」

「……………いえ、その……大事にならなくてよかった。スタークがあなたを選んだのには、やはり何かしらの理由がありそうですね」

「……………」

ほんの一瞬、氷結した表情が安心するように緩んだように見えた。

「では、これを」

「……………なんだよこれ」

風華は何気なく懐から取り出した「ドライバー」と「ゼリー」を彼に手渡した。

「……………んだよ、気が利くじゃねえか」

「あ、いえ、飲料ではありません。ダメです飲まないでください」

「え？」

はあ、と軽いため息をついた後、リュウヤが口元へ持つていこうとしたゼリーを取り上げ、ドライバーを握っていた腕を腹部へ当てるようジェスチャーで伝える。

「うおっ!!」

瞬時にベルトが伸び、リュウヤの腰に巻きついた。
すかさずレールに「スクラッシュゼリー」を装填してやる。

《ドラゴンゼリー!》

「なんだよこれ!」

「あなたの所持していたボトルから成分を抽出し、ゲル状にしたものです」

「……? よくわかんねえんだけど」

「これがあれば、兵器として凄まじい能力を発揮することが可能になります。いずれ始まる戦争で成果をあげることができたのなら……あなたの冤罪を晴らすことも叶うでしょう」

「……! やっぱ俺は誰かに嵌められて——!」

「あとはレバーを押し込めば完了です」

風華の手によってドライバーのレンチが下げられる。

「!」

次の瞬間、鋭い刺激が全身を駆け巡った。

身体中の神経が研ぎ澄まされ、どこからともなく自信と高揚感が湧いてくる。

《潰れる！流れる！溢れ出る！！》

リュウヤの周囲に巨大なビーカーが出現。ゲル状の“ドラゴン”成分が白銀の装甲となつて彼の身体を覆う。

《ドラゴンインクローズチャージ！ブラア！！》

「どうなつてんだ……？」

文字通り“変身”したリュウヤは、自分の状況を確かめるように手のひらでマスクに触れた。

「これであなたも仮面ライダー……。――その名も、仮面ライダークローズチャージ」



「オラあああああッッ!!!!」

「なっ…………ちよっ…………!!」

前方から襲いかかってくる黄金の戦士——グリスの繰り出す刺突を避ける。

「お前が北都の仮面ライダーか…………!!」

「そう言うお前は情報になかったな。…………それに、そのベルト——」

グリスはリュウヤの身につけているドライバーに視線を落とすと、微かに舌打ちを響かせた。

「……………スタークの野郎、いったいどういうつもりだ…………?」

「……………スタークを知ってるのか!」

《ビームモード!》

「ぐおっ…………!!」

会話を交わすつもりはないとも言わんばかりの射撃がリュウヤを襲う。

……………そうだ、今は戦争の最前線に立っている。敵同士なんだ。

—— 存分に、戦ってやるよ。

「……………おおおおおッッ!!」

《ツインブレイカー!》

リュウヤもまた左腕にツインブレイカーを出現させ、グリスへと肉薄。
力任せに振るわれる攻撃をいなし、それに応えるようにグリスが豪快なカウンターを放つ。

「ハハッ……………!!」

「オラア!!」

両者とも時折稲妻を放出しながら本能のままに拳を交える。

技術もへったくれもない、不良の喧嘩を本気の殺し合いに変貌させたかのような戦いだった。

（……………なんだよこの力……………!）

攻撃を受けても痛くない。……………痛覚が鈍っているのだろうか。

格闘技の試合でも感じたことのない感覚。

（今の俺は……………! 負ける気がしねえ!!）

《シングル!》

ドラゴンフルボトルをツインブレイカーに装填。

拳を振り上げた状態のグリスへ渾身の一撃を叩き込む。

《シングルブレイク!》

「がっ……………!?!」

予想外の一発だったのか、グリスは受け身をとることなく派手に吹き飛んでは地面へ真っ逆さまだ。

「いける……………!」

「へっ……………へへ……………つ!!ははははは!!!!」

よろよろと起き上がったグリスは狂気じみた笑いを上げながら天を仰いだ。

「これだ……………!俺が求めてたのは……………こういうバトルなんだよおおおおおツツ!!!!」

「……………!?!」

金色の腕が腰へ伸び、一本のフルボトルが取り出される。

《デイスチャージボトル!》

《潰れな〜い!》

《デイスチャージクラッシュ!!》

グリスの手のひらにある穴からゲル状のエネルギー——ヴァリアブルゼリーを
噴射し、プロペラを形成。

「喰らいな」

そのまま飛翔し、上空からリュウヤを乱れ撃つ。

「飛べんのかよ……!?!」

銃弾の雨に翻弄されながらも、リュウヤは急所に迫ってくるものだけをツインブレイ
カーで弾いていく。

格闘技で培われた勘と、驚異的な反応速度が可能にする荒技だった。

「はっ……そこで転がってる奴よりはやるみたいじゃねえか」

「……そうだ、キリオ——」

戦いに夢中で忘れていたが、後ろで気絶しているキリオをこのまま放置するわけには
いかない。

巻き込んでしまう前に決着をつけないければ。

「……っ……!」

蒼い稲妻がクローズチャージの装甲を走る。

……そうだ、早く目の前にいるこいつを……！

「倒さねえと……！！」

「」

直後、後方からの衝撃が波紋し、殴り合っていた2人はもろともに紙吹雪のごとく飛ばされてしまう。

「なんだ……!!?」

赤い衝撃波の根源に目をやるリュウヤ。

そこに立っていたのは————先ほどまで横たわっていたはずの戦兔キリオだった。

「キリオ……?」

しかしその瞳は虚ろであり、精気というものがまるで感じられなかった。

こちらに目を向けているはずなのに2人を見ているわけではない、果てを見据えているような遠い目。

「ぐっ……まだ隠し玉を持っていやがったか……!」

火花を散らすグリスは先ほどとは違うボトルを取り出すと、震える手でドライバーに装填。

《デイスチャージボトル!》

《潰れな〜い!》

「一旦撤退だ……!」

自分の身体をなぞるようにして腕を動かすグリス。

まるで消しゴムで消されるように、瞬く間にその場から去ってしまった。

「」

「キリオっ!?!」

ふつと膝から崩れ落ちる青年のもとへ駆け寄る。

リュウヤが介抱しようと近寄ったその時、ゆつくりと瞼を開けたキリオはぼんやりと

した様子で口を開いた。

「……？誰だお前……」

今度は普段と変わらない、光を宿した瞳で。

「俺だよ俺！万丈リュウヤだ！」

「なんでお前がライダーに……？———そうだ、グリスは……!?!」

キリオは変身を解いた万丈を一瞥した後、突然起き上がったのは焦燥に満ちた顔で周囲を確認した。

「あいつなら俺が追っ払ってやったよ。……どうだ！これで子供だなんだとバカにできなくなっただろ！」

「お前が……？」

不意にリュウヤが装着していたベルトに目が移る。

グリスと同じものを身につけているということは……。

「……さて、北都の軍もこれ以上は攻めてくる様子はないみたいだし、この後は政府に報告か？」

「……いや、お前にはいろいろと聞きたいことがある。俺と一緒に来い万丈」

「お、おいちよつと……？」

《ビルドチェンジ！》

ポケットから取り出したビルドフォンをマシンビルダーに変形させ、半ば強引にリュウヤを後ろへ乗せる。

キリオの知らない新型のライダーシステムを作ったのは誰なのか。その謎はきつと……今回の戦争と大きな繋がりがあるはずだ。

●●●

「はあっ……！はあ………ッ!!」

変身を解除した途端、凄まじい疲労感に襲われて思わず道端に倒れこんでしまう。

「クソッ……！抑えが効かなかった……！」

スクラッシュユドライバー………スタークが自身に与えた現状最強のライダーシステム。

最初は何ら問題なく使いこなせていると思っていたが、実際は違った。

自分が……猿渡タクミという人間が……消えてしまいそうな感覚。

「……まだまだ、強くないと……」

ハザードレベルを上昇させれば、きっとベルトの副作用だつて――

——『もっとレベルを上げたければいつでもオレに言え。この“トリガー”があれば、好きだけ強くなれるぞ?』

「……………スターク」

気がつけば携帯を取り出し、とある番号へ電話をかけていた。
しかし、

『——ただいま、電話に出ることができません』

「チツ……いつもは呼ばなくてもやってくるくせによ……」

重い足取りで“学校”への道のりを歩いていく。
守るべき相手が待っている場所へ——

「ただいま」

部屋に戻って、一番最初に飛び込んでくるのは2人の少女の見開かれた瞳だった。

「猿渡くん……!？」

「そのケガ——」

「ああ……。もうニュースとかで知ってるだろう？ちよつと巻き込まれちゃってさ」

鹿角聖良と鹿角理亞……この2人にだけは、自分が兵器として戦争に参加していることは知られてはならない。

知られたらきつと……自分達を責めてしまうはずだから。

「病院に行かないと……!」

「いや、必要ない。かすり傷程度だし」

「……とにかく治療だけでも」

手早く近くの柵から救急箱を持ってきた聖良。どんな時でも冷静な彼女も、今回ばかりは焦燥を隠しきれていなかった。

「いっつ……!」

「動かないで、上手くできないじゃない」

タクミの傷ついた頬に消毒液をつける理亞の表情が曇る。

「……結局、こうなっちゃうのね」

北都が戦争を起こすかもしれないという話は国民のなかでじわじわと広がっていたのは確かだが……まさかこんなにも早く現実起きてしまうとは。

「心配いらねえって。北都がスマッシュを操ってたなんて話は東都と西都の言いばかりなんだ、2人が気にする必要なんてこれっぽっちもねえよ」

「……………そういう問題じゃないでしょ」

——悲しそうな表情を見る度に思う。

早くこの戦争に勝って、この国をひとつにしなければならないと。

「……花丸達、無事にここまで来れるかな」

「え？」

「そういえば、猿渡くんはまだ知りませんでしたね。A q o u r s の3人がこちらに来る予定なんです」

「まあルビィは来ないみたいだけど」

——このタイミングで？

いや、北都にやってくることで自体は前から計画されていたものだろう。
むしろそれを見計らったように戦争が起きたと考えたほうがいい。

「いったいどうなってやがる……？」

第18話 ベルトに託す想い

「計画は中止にすべきだ」

浦の星女学院スクールアイドル部、その部室。

東都に残っているAqoursのメンバー、高海千歌と渡辺曜に黒澤ルビィ——
そして顧問である戦兔キリオがテーブルを挟みつつ今後の方針を話し合っていた。

「……………でも」

「お前達が考えていたライブの目的は、三国の注目を政治から遠ざけて、国民のスクールアイドルへの意識をさらに強めることだった。……けど、こうなった以上そうも言ってはられない」

「わかつてるよ！——わかつてるけど……」

口ごもる千歌の姿を見てキリオも悩ましそうに下を向く。

彼女の言わんとしていることはわかる。悔しいという気持ちも。

だがこの状況で行動が起こせるわけがない。計画の中心であるAqoursのメンバーも終結することは叶わなくなり、加えて北都からの攻撃。

「……とりあえず今は西都や北都に向かったメンバーの安全を第一に考える。まずは西

都との交渉からだ。こつちで上手くやってみせるさ」

「……………お願い」

息苦しい空気が充満する。

この場にいる誰もが不安で仕方がない。この先自分達は、他の皆がどうなるのか見当もつかないんだ。ここで元氣を出せという方が無理な話だろう。

「あ、あのお……」

「ん?どうかしたか、黒澤妹」

皆が黙り込んでいたなか、怪訝な顔でキリオの背後を見やるルビィ。

「そちらの方は——?」

「あ……………」

彼女の示した方へ振り向く。

そこには千歌達が過去に使ってきた衣装やら何やらが保管されている棚を物珍しげに眺めている少年の姿があった。

「ん?俺?」

数秒遅れてこちらからの視線に気がついたのか、少年——万丈リユウヤはルビィと視

線を交わした。

「あれ、確か君……前のイベントの時の——」

「あ！ユイちゃん達のクラスメイト！」

「……ああ！お前らは確か東都のスクールアイドルの………あきゆあ！」

「「A q o u r s ! / です！」」

「お、おお……そうだったか……悪い」

そういうえぶりユウヤと千歌達は一度顔を合わせていた。といってもほんの数分だけだった。

「こいつな、しばらく東都にいたことになったから。仲良くしてやってくれ」

「はっ!?!いや聞いてね——」

何かを言いかけたリユウヤの肩を掴み、千歌達の死角になるところへ素早く移動して耳打ちをする。

「お前にはいろいろと聞きたいことがあるって言つたろ……?」

「いやそれは聞いたけど……こつちに残るなんて一言も——」

「政府には俺が適当に伝えとくから、とにかく頼むぞ、いいな？」

しづしが「しょうがねえな」と頷いたリユウヤを尻目に千歌達へ向き直る。

「そうだったんだ……」

「左から高海千歌、渡辺曜、黒澤ルビィ——んで、こいつは万丈リュウヤだ」
 「よ……よろしく」

1人ずつ名指ししながら半ば強引に話を進めていくキリオに微妙な表情を浮かべる千歌達だったが、すぐに普段と変わらぬ緩やかな笑顔で挨拶を返す。

多少空気が和らいだようにも見えたが、彼女達は未だ心の中で隠しきれない不安を募らせていることだろう。

(……一刻も早く、この戦争を——)



「おお……なんか秘密基地みてえだな……」

「テーブルにある物は勝手に触るなよ、どこにいったかわからなくなるからな」

今日のところは一旦解散となり、キリオと千歌はリュウヤを連れて旅館「十千万」へと帰宅。

周囲に散乱する紙や山のように積み重なっている本を見てはリュウヤが目回している。

しばらくの間彼の面倒はキリオと同じ——この地下室でみることにした。高海家の人達にはこれ以上迷惑はかけられない。

それに、

「お前の持つてるドライバー、ちよつと貸してみろ」

「あ?……これか?」

リュウヤがおもむろに取り出したそれを受け取り、まじまじと目視で観察した後パソコンの横に置く。

データを読み取るためのコードを接続。PC画面に設計図が映し出された。

「少しの間借りるぞ」

「別にいいけどよ……それどんくらい時間かかる?」

「わからん。暇ならそこらへんにある本でも読んでろ。読み終わったら元の場所に戻しといてくれよ」

「どれどれ」

何気なく手に取った小難しそうな冊子を開いたのも束の間、「さっぱりわからねえ」ただけ呟いて再び部屋の散策を始めるリュウヤ。

「……………これは」

羅列された文章を注意深く読んでいくうちに、リユウヤや 그리스 が用いていたこのベルトの特性が徐々に判明していった。

“スクラッシュドライバー”——ハザードレベルが4を超える者にしか扱うことのできない最強のライダーステム。

ボトルの成分をゲル状に変化させた“スクラッシュゼリー”を変身に用いることで、キリオが扱うビルドドライバーとは一線を画す能力が得られる。

（……………しかし、その代償は——ネビュラガスの影響をより強く受けて、好戦的な気質が現れる……………か）

どうりで——戦闘中の 그리스 の様子からしても間違いないだろう。おまけに装着者のアドレナリンまで過剰に分泌されるときだ。

……………このベルトを使い続ければ危険だということは明白だ。

「万丈」

「あー?」

「お前これ没収な」

「あー……………あ!?!なんで!?!」

「おそいよ反応が」

待ち疲れたのか、椅子に腰かけつつ頭を上下させてウトウトしていたリュウヤが跳び起きた。

「お前……これがどんな物かわかってて使ってたのか？」

「どんなって……軍事兵器だろ？」

彼が口にした単語に反応するように、キリオの肩がほんの少し揺れる。

「……なにも考えてないだろ、お前」

大きくため息を吐き出したキリオを見てムツと表情を歪ませるリュウヤ。

「どうして戦うのかってやつだろ？……決まってる、いつかスタークの野郎をぶっ飛ばしてやるためだ」

「スタークを？」

「ああ！あいつは……葛城達の気持ちを踏みにじって、この国をめちやくちやにした最低な奴なんだろ？……それに」

「……？」

当時の悔しさを思い出したのか、リュウヤは力強く握りこぶしを作った。

「俺は……あいつに冤罪をかけられてるんだ」

「冤罪——」

言いかけたところで不意にひとつの記憶とマツチする。

以前ニュースで聞いた、西都首相の殺人未遂事件……………。

「まさか、お前が…………？」

静かに頷いたリユウヤを視界に捉えつつ思考を巡らせる。

彼がどういった経緯でドライバーを手に入れ、戦場へ駆り出されたのか……………。大方無罪にする代わりに兵士として働けとでも吹き込まれたのだろう。

なら実際に首相を襲ったのはやはりスターク…………？

「最初は葛城からの誘いだったけど…………その時は断ったんだ。けど、スタークが強引に…………首相まで巻き込んで…………」

「…………ちよつと待て、今なんて言った？」

「え？」

予想していなかった名前がリユウヤの口から飛び出したのを聞き逃さなかった。

「葛城から誘われたって？」

「あ、ああ。なんでも、難波重工の会長が俺を欲しがってたみたいでさ。西都の兵士にならないかって、葛城を挟んで声かけられたんだよ」

…………なんだ、この違和感は。覚えのある不快感だ。

何もかもが誰かの描いたシナリオ通りに進んでいるような不安感。同じものを何度も感じたことがある。

「それよか、あんたはどうなんだよ？偉そうに説教するんだったら、あんたにもそれなりの戦う理由つてもんがあるんだろうな？」

「ごちゃごちゃになった頭のなかで、リュウヤの質問が鮮明に響いた。

「あるに決まってるでしょうが」

「なんだよ？」

「……………そうだな、簡単に言えば——」

背もたれに身を預けたキリオは天井を見つめながら静かに言い放つ。

「適当に飯を食べて、適当に寝て、起きたらだるい身体引きずって学校で教鞭振るって——ここに帰ってきたら新しい発明に着手する。そんな“当たり前”を過ごすために戦ってる」

「……………なんだよそれ、俺と大差ないじゃねえか。結局は自分のために戦ってるんだろ？」
ふとキリオの瞳に影が差す。

考えるように顎へ手を寄せた後、再び口を開くと落ち着いた口調で言った。

「自分のため……………か。捉え方によってはそうなるのかもな」

「……………」

「そういや言ってなかったがな、俺にはスカイウォールの惨劇以前の記憶がないんだ」
突然の告白に面食らったような表情を浮かべるリュウヤ。

「記憶喪失って、んなバカな話——」

「俺はこれ以上自分が無くなるのが嫌なんだ。…………だから、俺を取り巻く周囲の環境、人間、土地…………戦兔キリオ」という存在を構成しているもの全てを守りたいと思ってる」

真剣な眼差しで語るキリオを見て冗談や嘘の類ではないと理解したのか、リュウヤはやがて静かに彼の話を聞いていた。

「戦争で人が死ねば千歌達が悲しむ…………それは嫌だ。あいつらが笑ってくれないと、おちおち授業もできやしない」

要は他人のために戦うことが、自分のためになるんだ。

戦兔キリオという空っぽの人間は、今までそれだけを拠り所にして生きてきた。

「……………とんだお人好しだな」

「ん？」

「なんでもねえよ」

どこか含みのある言葉を呟いた後、リュウヤは拗ねたように背を向けて傍にあった椅子へドカッと音を立てて座り込んだ。

「……………それで、だ。話を戻すが……………このスクラッシュドライバーな、使うにはいろいろとリスクが多すぎる」

「んなこと言ったって、他に戦う手段がないんだからしょうがねえだろ。…………あ、言っておくが戦いから降りるって選択肢はねえからな？」

「ま、そう言うと思った。…………手段がないなら作ればいい」

「え？」

「ドラゴンフルボトルあつただろ、あれ一旦返せ」

頭のなかで大量に「？」を浮かべつつ、言われるままにボトルを取り出してはキリオへと手渡す。

「なんに使うんだよ？」

首を傾けて尋ねるリュウヤを尻目に、キリオはうつすらと口元を緩めた。

「決まってるだろ。……ガキンチョのお前でも扱える変身アイテムを作るんだよ」

●●●

その夜。

「ちよつ……ちよつと!」

「大変だわ!!」

「Emergency……!!」

並んでいた三つの扉がまったく同じタイミングで開かれる。

ひどい焦りが見て取れる顔で廊下に飛び出したのは――善子、梨子、鞠莉の3人。

言葉を交わすまでもなく、彼女達の訴えたいことがお互いに理解できた。

「北都が攻撃をつて……他のみんなはどうなるのよ!」

「スカイロードの封鎖つて……」

「どうか……した?」

不意にかけられた声の方向へ反射的に振り向く。

既に部屋着に着替えていたミカが恐る恐るそう問いかけてきたのだ。表情から察するに「廊下が騒がしいので様子を見にきた」といったところだろう。

「これ……見た？」

「」

梨子が差し出してきたスマートフォンの画面を見るなり、ミカは眉をひそめては口元を震えさせた。

「こんなの……あんまりよ」

「いくらなんでも……」

「……………急すぎるわよね」

肩を落とす3人とは対照的に、怖いぐらいの冷静さをミカは見せる。

「……………たしかに、緊急事態……だね。……でも、考えるのは明日にしよう？」

「え…………？」

「わたしとユイちゃん、で、なんとか東都にいる人達と……連絡をとってみるから。……今日はもう、疲れたよね？」

「でも——」

「安心して。あなた達が危険な目には遭わないよう……わたし達も、尽力するから」

途切れ途切れにそう話す彼女の語気には、どこか必死さが滲み出ていた。

一方、北都。

「理亜、こんな時間にどこに行くの？」

「ちよつと散歩。大丈夫、そこらへんでちよつとウロウロしてるだけだから」

心配そうな視線を送ってくる姉を一瞥した後、小さく「行つてきます」とだけこぼして夜風の流れる外へと踏み出す。

規則的に並べられた街灯からの光だけを頼りに足を進め、時折ため息混じりの鼻歌を漏らす。

(……………これから、どうなっちゃうんだろう)

重たい思考で頭を満たしながら、理亜はゆっくりと歩み続けた。

ついこの前までは、昼は姉と一緒にダンスの練習をして……………夜は友達と楽しく遅くなるまで電話で話して、ほんの少しだけ叱られた後にやつと眠る。そんな日常が続いていたのに。

今でも眠れない日々は続いているが、それは決して「楽しいからまだ眠りたくない」なんて気持ちからじゃない。

今はただただ――

「……………こわいよ……………」

「こんな時間に女の子が1人で出歩くななんて……………感心しないねえ」

「……………!?だれ……………っ!?」

アテもなく歩き続けていたその時、傍に見える茂みのなかから聞こえた声に身体をビクつかせた。

「こんばんはお嬢ちゃん。……相変わらず寒いねえ、ココは」

ひと目見ただけで声の主が普通じゃないことはわかった。なぜなら人間の姿をしていなかったからだ。

赤い身体に張り巡らされた無数の排気管。顔面と胸には特徴的なコブラのレリーフが刻まれている。

「怪物……………ッ!？」

「おおっと、ストップ。そんなに怖がらなくても、オレは別にお前に危害を加えようだなんて思っちゃいない」

ちっちゃち、と指を振りながらそう語る奴だったが、理亜にはその姿がとても恐ろしいものに見えた。

「……………な、何者なのよ……………あなた……………？」

「んん？」

ごほん、とわざとらしい咳払いをした後、胸に手を当てて紳士的なお辞儀を見せながら奴は言った。

「オレの名はブラッドスターク……………以後、お見知りおきを。S a i n t S n o w
の……………鹿角理亞ちゃん？」

第19話 ポイズンの波紋

「……なんだかわかんないけど、胡散臭いのは確かね」

「まあそう言うな。今後のためにも、少しだけ助言をしてやろうと思つてな」

「助言……？」

血のように赤い不気味な外見からは想像できない、外れた調子の物言い。奴はそう語った。

ブラッドスタークと名乗ったその人物——マスクで顔はわからないが、声は男性のものだ。

「……アドバイスされることなんてないから」

「そうかあ？これは理亞にとつても悪い話じゃないと思うんだがね」

「気安く呼ばないで!!」

ハッとしたように踵を返しかけた身体をスタークへ向き直す。

「……どうして私の名前、知ってるの？」

「そりゃあ知つてるとも。北都を代表するスクールアイドル、Saint Snow！この国じゃ知らない人間のほうが少ないだろうさ」

スタークの言う通り、それぞれの国を代表する Aqours、Bernage、Saint Snow……これらのグループのメンバーならば、今の日本において知名度はそこいらの芸能人よりも高い。それは理亜もわかつている。

しかし奴——スタークの言葉には何らかの「含み」があるように感じた。

ただならぬ雰囲気。戦争が起きたこの状況のなかで、影響力のある人間に声をかける者……。

「……もしかして、政府の人間？」

「ほお……？まあ間違っではない」

スタークはガードレールに体重をかけながら、マスクの下にある鋭い目を理亜へ向けた。

「この状況でよく冷静に考えられるな。いいぞ、頭の回る奴は嫌いじゃない」

「政府が私にんの用!？」

少し声を荒げた理亜に動じることなく奴が続ける。

「実を言うとな、オレは今オフなんだ。政府の役人じゃなく、個人としてここに来ている」

「……………？」

ますます怪訝な表情になっていく理亞を尻目に、スタークは腰掛けていたガードレールから離れ、大げさにジェスチャーを加えながら言った。

「お前、この戦争を止めたいとは思わないか？」

「……なによそれ。当たり前でしょ、止められるものなら止めたいわよ！」

「だよなあ？……お前だけじゃない、この国のあらゆる人間がそう願ってるだろうよ」
「なにが言いたいのか……？」

「……この戦争を止める方法はひとつしかない。戦いが大きくなる前に……圧倒的な戦力差で東都と西都を制圧するしか、な」

「だからなにが言いたいのかよ!？」

徐々に苛立ちを募らせていく理亞。

スタークは先ほどとは打って変わって、神妙な声音で言い放った。

「率直に言うとな………北都の戦力として働く気はないかって話だ」

「え………」

想像もしていなかった問いが投げかけられ、理亞の表情は一気に戸惑いの色に染まった。

「スマッシュのことは知ってるか？」

「……………ええ、日本中を騒がせている怪物のことですよ」

「ああそうだな。……実はな、あれを操っているのは東都政府と西都政府なんだ」
「……………!？」

スタークの言葉の意味を理解し始めた理亜が明らかに動揺するような顔を見せる。

「2つの政府が手を組んで、北都を潰そうとしてるってこと……？」

「そうだ」

理亜はふと、以前のタクミの憤慨している様を思い出していた。

理不尽な疑惑に対しての怒り。これまでは必死に考えないようにしていたが、こうして真正面から話されたことで身体の奥底が煮えたぎるのを感じた。

「……………それで？どうして私が戦わなくちゃならないの？」

「スマッシュの技術自体は北都にもある。だが現行のスマッシュは自我がない分、戦略的にも運用が難しい。……そこで、だ——北都政府は新型のスマッシュを開発することに決めたんだ」

「新型……………」

「ああ……………そいつの名前は“ハードスマッシュ”。自我を保ちながら肉体を動かせるスマッシュだ。だがこれには少し問題もあってな、体質が合う人間でないと使うことはできないんだよ」

「……………私なら、それができるってこと？」

「ビンゴ……どうだ？北都の戦力が整えば、この戦争を終わらせることだって夢じゃない」

スタークの話が本当ならば、北都は完全に被害者側だ。先制攻撃の正当性だって充分にあるのかもしれない。

けど——自分は初対面で、顔も見せないような相手を信用するほど馬鹿ではない。

「……………お断りするわ。他をあたってちょうだい」

「んん……？」

逃げるようにさっさとその場を後にしようとする理亜の背中に、追い打ちをかけるような言葉が浴びせられる。

「いいのか？力を使える人間は限られている。お前が参戦すれば、状況は一気に好転するんだぞ？」

「……戦うってことは、他の誰かを傷つけるってことでしょ。私はそんなこと、絶対にしたくない」

足音と共に遠ざかっていく理亜の後ろ姿を見送りながら、スタークは深くため息をついた。

「……………ま、ほんととは人体実験さえすれば誰でも扱えるんだけどね」

くぐもった声が夜風と一緒に闇へ溶ける。

誰もいなくなつた道路の真ん中で、赤い蛇は何気なく空を見上げた。

「まあいいさ、いずれ向こうから頼むことになる」



「やつと着いたずら……」

「飛行機が使えないのはやはり不便ですわね……」

北都に向かったメンバー——花丸、果南、ダイヤが函館駅に到着したのは二日後の朝方だった。

ここに来る途中、東都にいる千歌からライブの計画は一旦保留にするという連絡が届いた。そしてキリオ曰く「状況が落ち着くまで北都にいた方がいい」とのこと。

「……………なんか、大変なことになっちゃったね」

ぼつりとこぼした果南が自然と下を向いたのを見て、花丸とダイヤもつい俯いてしま

う。

ここまで混乱に満ちた環境に放り込まれるのは5年前のスカイウォールの惨劇以来だ。

「この後の予定は決まっていますか？」

通夜じみた空気のなかを女性の冷たい声が通る。

不意に飛ばされた風華の質問に一拍遅れつつダイヤが答える。

「えっと……確か聖良さん方が待っていると——」

「お久しぶりです、皆さん」

ふと視線を外した先に立っていた制服姿の少女2人と目が合った。

言葉を返す前に無意識にその場から駆け出してしまう。

「聖良さん！理亞ちゃん！」

「前回のラブライブ以来だね！」

「またお会いできて嬉しいですわ！」

詰め寄ってくる3人に圧倒され、聖良と理亜が苦笑しながら対応。

「なによ、案外平気そうじゃない」

「疲れたでしょう。今日はお店を貸切にしてあるので、ゆっくり休んでくださいね」

少し離れた場所からその様子を眺めていた風華はスーツの内ポケットからスマートフォンを取り出し、何やらメールを打つような仕草を見せる。

「……………」

やりとりしている相手からの返信が返ってきた瞬間、若干不愉快そうに眉尻を上げた。

「あちらの方は？」

「ああ……あの人は私達の保護者としてここまで付き添ってくれた、鷲尾風華さんですわ」

「Bernageのスタッフさんらしいぞら」

「へえ、あの2人の……………」

自分の方向に視線が集中したことでハッと顔を上げた風華が素早くスマホを懷にしまい込む。

やがて初めて顔を合わせる2人のスクールアイドル達の前へ歩み寄り、深々と頭を下

げた。

「初めまして、Saint Snowのお二方。この度Aqoursの皆さんにご同行させていただくことになった鷺尾風華と申します」

「こちらこそ、よろしく願います」

よろしく願います、とお辞儀してきた彼女を見て驚くような素振りを見せるも、聖良は性格上なのかすぐに腰を折って丁寧な挨拶を返してみせた。

「ふう……落ち着きますわ……」

「やっぱりこのあんみつは絶品ずら」

「ほんとよく食べるね……」

喫茶店——鹿角家に到着した3人は、すぐさま和風のメイド服に着替えた聖良と

理亞にもてなされていた。

ここに来るまで疲れが溜まっていたせいかな、つい人様の家ということも忘れて大きく姿勢を崩してしまう。

「東都の方は……その、平気なの？」

不意に曇った眼で理亞がそう聞いてきた。

「マル達も出発してから知らせを聞いたから……詳しいことはわからないんだ」

「少なくとも千歌達に大きな被害は出てないと思うけど……」

何のことを話しているのかは言わなくてもわかつている。

先ほど聖良達にもライブの計画が保留になったことは伝えた。予想していたのかそれほど驚愕している様子は見せなかったが、やはり悔しいという念が強いのだろう、話を聞き終えた直後にぐつと息を呑み込んだのを見逃さなかった。

「……そういえば風華さんは？」

いつの間にか居なくなっていた彼女の姿を追って果南の瞳が泳ぐ。

「あの人ならさつき、宿のチェックインを済ませておくと言つて……」

「テキパキしてるなあ。あの人少しくらい休んだほうがいいと思うけど……」

今はいない凍った表情の女性を思い出し、やれやれと肩をすくめる果南であった。

「——どうして、ここにいらっしゃるんですか？」

鹿角家とそう距離のない宿舎、その一室。

自分の泊まる予定だった部屋に荷物を置こうと足を運んだ風華だったが、扉を開けた瞬間に見えた人影へ反射的に身構えた。

「——さん」

「おいおい、今はその名前で呼ぶのは禁止だ」

赤い身体にコブラの顔——呑気にベッドへ腰を下ろしている、ブラッドスタークの姿がそこにあっただのだ。

「お前がちゃんと仕事をしているのか確認しようと思つてな」

「こちらら順調です、なにも問題はありません。……それよりあなたは大丈夫なんです
か？ あなたが『向こう』にいないと不自然でしょう」

「そんなものは心配する必要ない。トランスチームシステムには、移動手段だつて搭載
されているんだからな」

立ち上がったスタークはストレッチでもするかのように身体を大きく曲げながら言
う。

「とりあえずは東都、西都、北都にA q o u r sのメンバーを散らすことに成功だ。あと
はシナリオ次第でどうにでもなる」

「……万丈リユウヤは？」

「万丈はしばらく東都に滞在するみたいだな。……あいつが気になるか？」

「いいえ、特には」

そつけなく返す風華とは対照的に、スタークは愉快な笑いを含みつつ続けていく。

「そうか、お前はずつとスクラツシユドライバーの使用者を気にかけていたな。北都に
来たのも、猿渡タクミの様子が気かりだったからか？」

「……少し、黙つててください」

「ハハッ……！」

静かに怒りを燃やした風華の肩を強く握り、耳元でスタークが囁いた。

「『全ては難波重工のために』……だろ？」

蒸気と共に嫌な存在感が消えていくのがわかる。

蛇が残した毒に侵されたような重苦しい空気のなか、風華は止まっていた足を無言で踏み出し、何事もなかったように荷物の整理を始めた。

第20話 心傷へのカウントダウン

「……ユイちゃん、いる？」

数回扉をノックするが、いくら待っても返事が返ってこない。

ミカは静まり返った廊下を左右キョロキョロと確認した後、誰もいないとわかった途端にドアノブにかけていた手に力を込めた。

「入るね……」

すでに就寝している可能性を考慮してゆっくりと部屋へ入る。

明かりは消えているがユイの気配はどこにもなく、一番最初に乱れた掛け布団がベッドからずり落ちているのが視界に入った。

「……………」

やれやれと肩をすくめ、直そうと屈んだその時、横に設置されていたテーブルの上に意識が向く。

様々な色と模様で染められた小物——フルボトルが並べられていたのだ。

「——あれ？」

ふとミカのなかでひとつの疑問が生まれる。

「……こんなボトル、前まであったっけ……?」

—— 虎、UFO、クジラ、ジェット機、キリン、扇風機、ペンギン、スケートボード、マイク、熊、テレビ、カメラ、カブト虫、エンジン……。

見覚えのある物とは別に—— 見たこともないボトルも確認できた。

「ふわぁ……やっぱり夜更かしするのは良くないね……つてうええ!」

「きゃっ!」

背後から飛んできた叫び声につられて体勢を崩すミカ。

後ろで同じように尻餅をついたのは…… たった今ここへやってきたユイだった。

「みーちゃん!?! どうしたの!?! ここあたしの部屋だよ!?!」

「あつ……えつと……ちゃんと眠れてるかなって」

「あのねえ……あたしもう高校生なんですけどー」

「そ、そうだよね。……ごめんね、驚かせちゃって」

逃げるようにその場を去ろうとしたミカだったが、「そうだ」とつぶやいたユイが咄嗟に彼女の服の裾を掴んで引き止めた。

「みーちゃんに質問！好きな動物をふたつ挙げて！」

「えっ……えっ？」

「ほら、はやくはやく」

「ええっと………」

あまりに突拍子のない質問だったせいか、頭の中が真っ白になってしまう。

「……ワンちゃんとか……コウモリ……とか？」

数秒悩んだ後、やっと浮かんできた生き物の名前を口にした。

「……犬はわかるけど、なんでコウモリ？前も聞いた気がするけど」

「こっ……コウモリってよく見たらかわいいんだよ!？」

「ま、いいや。おやすみ」

「あ、うん………」

その会話を最後に扉が閉じられ、ユイの姿が見えなくなる。

結局その夜は、彼女がどうしてこのような質問をしたのかわからないままだった。

「……ユイちゃんは、いったいなにを知ってるの……？」

今まで言われるがままにここまで戦ってきた。

スカイウォールがどうして現れたのか。どうして仮面ライダーや、スマッシュという存在が生まれたのか。

その全てを……自分はまだ知らないのだ。

●●●

「ん……………」

紙吹雪が舞った後のように散らかっている、いつも通りの地下。

高海千歌はキリオの留守を狙って彼の部屋——研究室へと足を運んでいた。

「あ、あったあった」

不自然に並べられた資料の束が壁となつて隠していたビルドドライバーが千歌の手によつて露わになる。

きよろきよろと辺りを見渡し、監視の目がないことを確認。

「……………(くり)」

手に持ったドライバーをゆっくりと腰に当てる。

「わっ——いだっ!？」

勢いよく巻きついてきたベルトに驚いて一歩下がった千歌の足が背後にあった机に激突。

「いたたたた……。えーつとそれからボトルを――」

一個のボトルを適当に取り上げ、何気なくその柄を見る。

透き通るオレンジ色が綺麗なボトルだった。

「……みかん……。？」

——
チーン
!!!!

「ひいつ?
!?!?」

部屋の奥に設置されていた巨大な機械の小窓が展開し、モクモクと煙を立ち昇らせる。

同時に扉が横にスライドし、装置の中から一人の青年が姿を見せた。

「……………千歌？」

「あう……………き、キリオくん……………!?そこにしたんだ……………」

「んん……？」

眠そうな瞳から送られる視線が千歌の腰へ下がる。

彼女が装着していたビルドドライバーに気づいた瞬間、キリオは怠そうな表情のまま静かに怒りの炎を燃やした。

「……とりあえず外せ」

「はあい……」

青ざめた顔で薄ら笑いを見せた千歌がキリオの言う通りドライバーを腰から離し、そばにあつた机に置く。

彼はそれを確認した後、装置の小窓に入っていた小さなボトルを取り出してはまじまじと観察し始めた。

「錠前のボトルか………へへへ」

「なんか気持ち悪いよキリオくん」

「うっさいわ」

近くにあつた椅子を指で示して千歌を座らせる。

「本当に性懲りもないな、お前は」

「えへへ……」

「えへへじゃないんだよ。前に説明しただろ、そのドライバーはハザードレベルが3を

超えない限り扱うことはできない」

「じゃあ、私もそうなるようにしてよ！」

「は？」

自分はいたつて大真面目である、といった顔でそんなことを口走る千歌に思わず間も抜けた声がこぼれる。

「どうした？ 最近いろいろありすぎて疲れたか？」

「……………む」

冗談交じりに返してきたキリオにふくれっ面を向ける千歌。

「…………キリオくんはずるいよ。肝心なことはなにも話してくれないくせに、自分だけ危険なところへ行っちゃうんだもん」

「……………」

「私はスクールアイドルとして、この国のためにやれることを精一杯頑張りたい！……だから……私も、キリオくんと一緒に——」

「ずいぶんと……背負わせちゃったみたいだな」

「え——？」

キリオは眉をひそめ、苦しそうな表情で千歌と目を合わせた。

「お前達には改めて謝らなくちゃならないな。……“スクールアイドルとして戦争を防

ぐために頑張ってほしい”っていう、俺達大人のわがままに付き合わせちゃった」

「……！」

「スクールアイドルが戦争なんかしちやダメだろ？……こんな状況になってから言うのもなんだが、千歌達は自分達のできる範囲で歌って、踊っていればそれでいい。走る速度を上げれば上げるほど、転んだ時に感じる痛みは増していく」

「……私は………」

「お前はA q o u r sのリーダーだろ。その責任を果たすのが最優先だ」

今の千歌にとってはあらゆる事がプレッシャーになっている。

自分だけが知る仮面を被ったキリオや、離れ離れになってしまった他のメンバーのこ
と。

……一人で思いつめるよりも、みんなで問題と向き合った方がいいに決まってい
る。

「……………仕方ないか」

「え？」

「千歌、みんなを呼んでくれ。今から部室へ集合だ」

「いいけど……………どうしたの急に？」

キリオは机のビルドドライバーを掴み取り、はつきりと口にした。

「かーっ！どこのコンビニも品切れでカップ麺ひとつありやしねえ!!」

「私もルビイちゃんと買い出しに行ってみただけ……」

「大した食べ物手に入らなかったね……」

部室に集まったリュウヤ、曜、ルビイ、千歌、そしてキリオ。

北都からの攻撃があつた日から、東都中の店から物資が急激に消費されていった。

今は協力関係にある西都からの支援や小原グループからの支えもあり、なんとか成り立っている状況。

しかし戦力の増援に関してはリュウヤくらいしか派遣されていないため、西都側の考

えていることが未だに見えないのも不気味だ。

「……それで、なにかあったのキリオくん？」

そう切り出してきたのは曜だった。

若干疲れが見て取れる表情で肩を軽く回しつつ質問してきた彼女に対し、キリオはホームルームに知らせを伝える時のようにさらりと言い放った。

「実はな、俺と万丈は仮面ライダーなんだ」

●●●

「……………」

猿渡タクミはいつも通っているスクールアイドル部の部室へ足を運び、そこに集まっていた顔ぶれを見た途端に言葉を失った。

「こちら、私達のマネージャーの猿渡タクミ。……花丸達のこととはわざわざ紹介しなくてもいいわよね？」

「Aqours……！そうか……今日到着だったんだな……」

「なんか反応薄いわね。もっと狂喜乱舞するかと思った」

「い、いやいや！喜びすぎて絶句してるだけ……」

理亞を介して紹介されたタクミが椅子に座るダイヤ、果南、花丸へ順に軽く挨拶をしていく。

「聞きましたわよ、ルビイの大ファンなんですつて？」

「あはは。残念だったね、ここに来たのが私達で」

「見くびってもらっては困ります！俺はルビイちゃんに限らず、全国のスクールアイドルに精通してる男ですよ！」

「おお、ダイヤさんといい勝負ができるかもずら」

表向きへらへらと笑顔を振りまきながら花丸達と会話を交わすタクミだったが、内心吐きそうになっているのを必死にこらえていた。

「ちよつとトイレ」

「え？」

前触れもなくそう言って部屋を出るタクミに理亞達の視線が集まる。

それを気にする暇もなく彼は校内をしばらくの間走り続けた。

「……………クソ……………」

確かに自分は東都や西都の連中を恨んで仮面ライダーになった。しかしそれは、何も

知らないくせに理亞や聖良の悪評を振りまく輩に対しての怒り故だ。

「……………」

取り出した携帯に表示されているのは政府からの指令。

次に行動すべき任務の詳細について書かれていた。

自分に与えられた仕事は、東都と西都が所有しているフルボトル及びパンドラツボックスの奪取。

「……………落ち着け、俺……………兵士になった時から覚悟していたことだろ……………」

——次の標的は浦の星女学院。隠されているであろうフルボトルを奪い取るために、次の作戦で攻撃する場所だ。

正確にはそこに所属している教師が持っているという話だが……………。

「仮面ライダービルドの正体がまさか……………A q o u r s の顧問だったとはな……………」

政府の調べで判明した事実——戦兎キリオという人間が、仮面ライダービルドの変身者だということ。

彼を殺害することも推奨された。

身近な人を傷つけられる痛みはタクミだって充分に承知している。

けれど今度は――

「俺も……“そっち側”に回れってことか」

北都を……理亞達を守るために。

「俺は………!!」

「なにを躊躇う必要がある」

「……!?!お前――」

廊下の角から姿を見せた人影を見上げる。

自分にグリスの力を与えた者――ブラッドスタークだった。

「どうして学校に………!?!」

「お前の調子を見に来たんだよ。案の定、罪悪感で押しつぶされそうになっているみた
いだな」

「……………」

スタークはやれやれと両手を挙げ、タクミの肩に軽く触れた。

「今更氣にする必要もないだろ。お前はすでに、何人もの兵士の命を奪っているんだからな」

「……なに——？」

「ハッハハハ!! 気づいていなかったとは傑作だ! いや、スクラツシユドライバーの特性を考慮すれば仕方ないか?」

「どういふことだよ……!!」

「普段新聞やニュースは見ないのか? この前の東都襲撃の際、死傷者は300人を軽く超えている」

「……………なんだと……?」

スタークの言葉を聞いた瞬間、全身から血の気が引いていくのがわかった。

「まさか……誰も傷つけずにこの国をひとつにするなんて……本気で思っていたのか?」

「——黙れッ!!」

背後から聞こえる声の主に向かって思い切り拳を振り抜く。

その一撃が空を切る。後ろには奴が残した黒い蒸気が立ち込めるばかりで、スタークの姿はとつくに消え失せていた。

「……人を……殺したってのか……？俺が——」

思い出そうとしてもぼんやりとした光景しか浮かんでこない。
戦いを楽しんでいた自分が、笑いながら敵を——

「うつ………!!」

こみ上げてきたものが飛び出さないよう口元を押さえながら洗面所へ駆け込む。
後戻りなんてできないことはわかっている。でも——

「立ち止まることすら……許されないっていうのか……」

第21話 蒸気のミステリー

「おおー！これが……………」

「仮面ライダーの秘密基地……………」

「そんな大層なもんじゃないぞ」

一歩踏み出すのにも気を使うほどに散らかった地面を曜とルビィが進んでいく。

「あんた、今まで自分が仮面ライダーだってこと黙ってたのか？」

キリオの隣に立っていたリユウやは、瞳を輝かせながら部屋を探索する彼女達を見たり意外そうな様子で言った。

「これまでは話す必要性がなかったからな」

「じゃあどうして今更？」

「……………もういつまでも隠し通せる状況じゃない。それに——」

反対側に佇んでいた千歌を見やる。

彼女が抱えている不安のなかにはキリオ自身の安否が含まれている。ならばせめて……………それを共有できる人物がいた方がいい。

自分はいくらでも戦い続ける必要がある。立ち止まらないが故の、気休めにもならな

い苦し紛れの案だ。

「ん？なあにキリオくん？」

「べつに」

「えー!?絶対なにかあるでしょー!」

そう言つて千歌がキリオへ問い詰めようとしたその時、

?????????????!!

「わっ!」

机の上に積み重ねてあつた紙束の隙間から、手のひらに乗るくらいの物体がキリオ達の眼前を舞つた。

小さなドラゴンを模した、ガジェットのようなやつだ。

「なにそれ!」

「かわいいー!」

「ちっちゃいドラゴンだ!」

「ペット型のロボットまで作れるのかよ」

空を飛ぶドラゴンに向かって口々に感想を並べる千歌達。

自慢げに胸を張った後、リュウヤの肩を軽く叩いながらキリオは言った。

「こいつは『クローズドラゴン』、お前の新しい相棒だ。仲良くやれよ」

「は？……まさかキリオお前、このちんちくりんを使つて俺に戦えつて言うんじゃねえだろうな？」

リュウヤの言葉に苛立ったのか、宙をぐるぐると旋回していたクローズドラゴンは彼の方を向くなり――

「どわっちイ！」

青い炎を吐き出した。

「んだよいきなり……!？」

「おいおい、仲良くしろつて今言つたばかりだぞ」

「こいつが急に攻撃してきたんだよ!!——アチツ!? あつ!! アツツイ!!!」

クローズドラゴンと激しく戯れているリュウヤを尻目に、千歌達がこちらに顔を近づけつつ耳打ちをしてきた。

「そういえば、万丈くんも仮面ライダーつて言つてたよね……?」

「ああ、あいつは西都から増援として派遣されてきたんだ」

「千歌ちゃんは、いつから先生達が仮面ライダーって知ってたの？」

「んーと……Bernageの2人と共演した日からだったかな……。万丈くんに関してはたった今だけど」

「そんなに前から!？」

数分前、曜とルビィに全てを話した時……当然2人はとても驚いていた。

もちろんキリオを疑いもしたが、こうして地下室に招いた途端この通りだ。

ともかくそれなりに適応してくれているみたいでよかった。ひとまずは安心
……………とまではいかないが、もしもの時に色々と手が回りやすくなる。

「でもさ、2人が仮面ライダーってことは……………」

「この前戦ってたのも……………」

心配するような上目遣いを送ってくるルビィと曜。

「ああ、当然この先も……俺は戦場に向かうだろう。けどそれは戦争を止めるために、
だ。東都政府のいいように使われるつもりはない」

「そうは言ってもね……………」

「大丈夫だよ、2人とも!」

顔を俯かせる曜達を見て、声を張った千歌が立ち上がる。

「キリオくんは給料とか、自分のことになると死ぬ気で頑張れる人だから！きつと命が危なくなったら速攻で逃げてくれるよ！」

「……うん、そうだよね！」

「褒めてるのか？貶してるのか？」

意外にもその場を収めてくれたのは千歌だった。

まだ全てを納得したわけじゃない。表面上はこうして平気なふりをしているだけだろう。

だから、今後はさらにキリオ自身が頑張らなければならない。

(……こいつらを、心配させないためにも)

『ごめんね万丈くん……大変なことに巻き込まんじやつて』

「最終的に決めたのは俺だ。葛城が気にすることなんかねえよ」

海岸沿いの砂浜を歩きながら、リュウヤは電話越しに聞こえてくる力のない声に答えた。

相手の名は葛城ユイ、リュウヤのクラスメイトでもある難波高校スクールアイドル、その片割れだ。

『そっちにいるAqoursの人達は無事なの?』

「高海とかいう奴らか? 顧問も揃ってピンピンしてるよ」

『よかった。こっちにいる梨子ちゃん達も……今のところは心配いらないって、改めて千歌ちゃん達に伝えておいてくれないかな?』

「いいぞそれくらい。……じゃあな——」

『ああつ! ちょっと待って!』

「あ?」

通話を切ろうとスマホを耳から離れたところで待ったがかかった。

数秒口ごもるような沈黙が流れた後、ユイは照れくさそうに笑いながら言った。

『兵士になってほしいって頼んだあたしが言うのも変だけど……その……どうか無事でいてね』

「……………」

『あたし、万丈くんが西都に帰ってくるの待つてるから。……君に“おかえり”って言える日を楽しみにしてるからね』

あまりに突拍子もない励ましの言葉にどう反応していいかわからず、リュウヤは無意識に自分の頭を掻きながら一言「ああ」と返した。

直後、プツリと電話は途絶える。

「……………やつば変な奴」

《《???

「う?おつ!?いつの間に!」

突如横から飛翔してきたクローズドラゴンが意味もなくリュウヤの周囲を飛び回る。

「……………つたく、キリオの野郎……こんなボンコツ一匹でどう戦えつてんだよ……」

スクラッシュドライバーは依然キリオの手元にあるため、変身することはできない。

このまま何も渡されないと———また生身で敵に殴りかかることになってしまう。

「さすがにそれはないと思いたいが……………」

「あついた!」

「万丈く————ん!!」

歩道側から自分を呼ぶ声が聞こえ、リュウヤは反射的にそちらへ顔を向けた。
セーラー服に身を包んだ少女が2人、細い腕を懸命に振っている。

「確か……渡辺と黒澤だったか。なんか用か————!?!」

「キリオくんが呼んでるよー!!」

考えていた矢先に彼の名前が出てきた。

今度はなんだ、と期待と不安が入り混じった感情を抱きつつ、リュウヤは海岸から離れた。

「たった今最終調整が終わってな。……これがお前の新しいベルトだ」

「おぉー！————つて」

再びキリオの部屋へ呼び出されたリュウヤを待っていたのは、新たな装備。

本来なら喜ぶ場面なのだろうが、手渡された物が視界に入った瞬間、リュウヤは眉をひそめて低く口にした。

「……これ、お前と同じやつだろ？」

そう、キリオが渡してきたアイテムは……他ならぬ“ビルドドライバー”だったのだ。

スクラッシュドライバーよりも低いハザードレベルで扱える分、当然スペックに差はある。

「不満か？」

「いや不満っつーか……………いわゆる旧式だろこれ？」

「旧式……………」

「あついや……………」

ドライバーにケチをつけた途端露骨に悲しそうな顔をするので慌てて訂正しようとした。あたふたする。

そこでふと2人のやりとりを眺めていた千歌が首を傾け、ひとつの疑問を投げかけた。

「…………このベルト、ボトルが2本必要なんだよね？万丈くんは持つてるの？」

「あ、そうだよ。俺はドラゴンボトルしか持ってねえぞ」

「心配するな、そのためにクローズドラゴンを作ったんだ」

「この子、ただのペットじゃなかったの？」

きやつきやと笑いながらクローズドラゴンと遊んでいた曜とルビィがきよとん、とした表情でそう問う。

「当然だ。こいつにはボトルの成分を2本分にする機能がある」

「ほお……………」

「それってすごいのか？」

いまいち実感がない様子のリユウヤ達を見て、キリオは少し残念そうに眉を下げる。

「……この天才的な発明の価値がわからないとはな」

「まあ細かいことはどうでもいい！仮面ライダーにさえ変身できれば、俺は問題ねえ！」
「ま、お前の言う通り……スクラツシユドライバーより多少性能は劣るだろうが、そこは持ち前のハザードレベルでカバーしてくれ」

ビルドドライバーはキリオ自身が安全に扱えるよう開発したアイテム。

少なくともスクラツシユドライバーのように暴走する心配はなくなるだろう。

ひとつ気になるのは……敵はこれからも変わらずスクラツシユドライバ^れーを使用してくることだ。

（……そろそろ本格的に考えなきゃならないな——ビルドドライバーの拡張アイテムを）



「うつ……………!!」

薄暗く、広大な空間に金属が擦れるような音が響く。

目立った障害物は一切見られない、闘技場のような部屋で——2人の戦士が拳を

交わっていた。

「はあっ……はあ……っ……!!」

黒い装甲に身を包んだコウモリは倒れ伏した後、数秒かけて立ち上がる。

対峙しているのは、腰に手を当てて余裕な様子を見せている赤い蛇だ。

「もう終わりか？」

「は……っ……!ぐ——!」

黒い戦士——ナイトローグは目の前の人物に視線を注いだ後、再びコンクリートの地面に膝から崩れ落ちてしまう。

「やれやれ……お前の力は、こんなものじゃないはずだぞ？」

「あぐっ……——!」

赤い戦士——ブラッドスタークがローグの首を鷲掴みにし、強引に立ち上がらせた。

「今のお前なら戦場に一步踏み出しただけで御陀仏だろうな。……それが嫌なら本気を出せ」

「そんな……こと……できな……!」

《コブラ!》

《スチームブレイク! コブラ!!》

「

視界がチカチカと明るくなった刹那、暗転したような漆黒に包まれる。

紫色の渦々しい光弾をゼロ距離で受けたナイトローグはそのまま後方へ吹き飛ばされ、数メートル離れた先にあつた壁に激突。

悲鳴すらあげる暇もなく絶大な一撃を受け、闇夜のような鎧とマスクが解除される。

「ぐう……………っ……………けほっ……………げほッ!! ゲホ……………ッ!!」

屈強な印象を与えるスーツの中から現れたのは黒髪の少女。

瞳から完全に戦意を感じない彼女に大きいため息を吐くと、スタークは踵を返し口を開いた。

「もうじき北都が東都へ再度襲撃を仕掛ける。オレ達もそれに乗じて東都へ向かうぞ」

「……………それ……………って……………パンドラボックスを……………?」

「それもあるが……………本命は別にある」

ひよろひよろと定まらない足取りで靴音を鳴らすスターク。

表情は読み取れないはずなのに、マスクの下には邪悪な笑みがあると瞬時にわかっ

た。

「あいつらにも頑張ってもらわないとな。いや——」

スタークはどこからともなく1枚の写真を取り出しては宙に放り投げる。

そこに写っているのは……1人の赤髪の少女。

「あいつ風に言えば……がんばるルビイってところか？」

1発の銃声が炸裂する。

スタークの持つトランスチームガンから放たれた一撃は、写真に写る少女を的確に撃ち抜いていた。

第22話 深まるミスト

東都政府官邸。

首相である塔野はデスクに積まれた報告書に一通り目を通した後、戦争による被害が大きい地域から順に物資の手配を要請していた。

「……想定していたよりもこちらのダメージが大きいな」

塔野が険しい表情でそう呟く。

北都がここまでの戦力を備えているとは思っていなかった。

向こう側が最新型のライダースシステムを所有しているという情報は、つい先日までこちらの耳には入ってこなかったのだ。

「事態は、我々が思っていたよりも複雑ということか……？」

「首相!!」

目をつむり、考えをまとめようとした矢先に執務室の扉が勢いよく開かれた。

息を切らしながら駆け寄ってきた職員を見やり、その表情から事の深刻さを予感した塔野は静かに尋ねる。

「どうした？」

「その……こんなものが官邸に……！」

その職員から手渡されたのは一枚のメッセージカード。

書かれていたのはシンプルな文章――

「……………」
“本日正午、パンドラボックスを頂きに参上します。”
“…………？”



「……………そうだ！ライブ！ライブやろうよ！！」

浦の星女学院、スクールアイドル部部室。

前触れもなく声を張りながら席を立ち上がった千歌に皆の視線が集中する。

キリオはすぐに手元に目を戻し、何やら装置をいじりながら彼女へ言う。

「ライブの話は保留にするって決めただろ」

「そつちじゃなくて！ほら、あれだよ！……なんて言うんだっけな……。なんだっけちゃん？」

「いやいや、私に聞かれても……………」

困ったような顔でそう答える曜。

「うーんとだからね……東都に残ってるメンバーだけでライブとかできないかなって思ってたんだ」

「もしかして、ユニットライブ？」

「そうそれ!!」

「なんだそれ？」

ハツと千歌の言いたいことに気がついたルビイとは逆に、奥に座っていたリユウヤがきよとんとした顔で問う。

アイドル通でもあるルビイもまた彼の質問に真っ先に答えた。

「ルビイ達、今は3人しかいないから……A q o u r sとはまた別のチームを結成してライブをする……ってことかな？」

アイドルグループそのものを「ユニット」と呼称する場合も多いが、千歌が言いたかったのはそちらではないだろう。

A q o u r s という大隊のなかでさらに振り分けられた小隊、といったところか。

「なるほど、ユニットか……」

「それなら東都のなかだけで活動できるし！ね、どうだろキリオくん!」

確かにそれなら残りのメンバーを待たずともライブを開催できるだろうが……。

各政府間がさらに險悪の今、小規模のライブを行って果たしてどこまで影響力があるのかという問題がある。

戦争の抑止力として活躍していたスクールアイドルだが、今更東都だけで国民の注目を集めたって――

(……いや、そういうことじゃないよな)

キリオは千歌と目を合わせ、無意識に浮かんでいた野暮な考えを消し去った。

彼女のまっすぐな瞳を見ればわかる。今の千歌はそんなこと微塵も思っていないんだ。

ただ純粹に、少しでもこの国の人達が笑顔になってほしいと。晴れやかな気持ちになるようなライブをプレゼントしたいと。

そう思っているだけなんだ。

「わかった。会場は確保できるかわからないが……最悪この学校の体育館を使えばいい。それでいいか？」

「いいよいいよ全然いいよ!!」

「そうと決まれば!!」

「まずはやっぱりグループ名からだね!!」

一気に騒がしくなった3人に肩をすくめつつ、キリオは口元を緩めながら機械いじりの作業に戻る。

……その矢先、

「んん……?」

白衣のポケットにしまっていたビルドフォンから着信音が流れていることに気がつき、手を止める。

素性故に友人と呼べる存在がほぼ皆無なため、キリオは誰からかかってきた電話なのかを瞬時に察した。

「今度はなんですか………首相」

つい気怠げな態度で対応してしまった相手は東都の首相である塔野だった。

『突然すまないな。君と万丈くんにしかできない頼みがあるんだ』

「……万丈はともかく、俺はあんたの便利な兵器になったつもりはないんですが」

『別に北都に攻め入ろうなんてことじゃない。ちよつとした防衛任務だ』

「防衛……?」

『ああ。……実は政府宛に妙なメッセージが送られてきてね』

どうやら北都絡みとはまた別件らしい。

「こんな時にまた厄介事を引き受けるのは御免だが、わざわざ仮面ライダーに防衛を頼むとなれば只事ではないはずだ。」

『詳しいことはこちらで話そう。すぐに東都研究所へ来てくれ』

「研究所? 官邸ではないんですか?」

『ああ、とにかく来てくれ。——パンドラボックスが狙われている』

「えっ……?」

通話はそこで途切れた。

「パンドラボックスが狙われている」、首相は確かにそう言った。

今あの箱を狙うとすれば北都ぐらいしか考えられないと思うが——

「……いや」

ふと赤い人影が脳内をよぎり、すぐさま立ち上がる。

「キリオくん？」

「研究所の方へ行ってくる」

「えー？また出かけるのー？」

「別に俺がいなくても活動はできるだろ。……あ、あと万丈、お前も一緒に来い」

「え？俺も？」

いつの間にかダンベル片手にプロテインを口へ流し込んでいたリュウヤが呆けた顔でこちらを見る。

「万丈くんもってことは……」

「先生、また戦いに……………」

そう言つて表情を曇らせる曜とルビィ。正体を明かしたのはいいが、やはりこういう時に動揺を与えてしまうのはどうしようもない。

「わからん。けど首相から呼び出しがあつたんだ、無視するわけにもいかないだろう？」

部屋を出ようとしたその時、ただ一人無言でこちらを見つめている千歌と目が合った。

明らかに不安げな様子だ。

こういう時になんて声をかけてあげればいいのか、何度もそう思う。そしてその度に答えが出ないのだ。

だから、

「帰ったら、どんなグループ名に決まったのか教えてくれ」

「へ？」

だからせめて——ちよつとしたことでいい、
“帰る理由”を決めておくんだ。

「……うん！お仕事頑張つてね！」

ひらひらと手を振る千歌の顔に、少しだけ明るさが灯った。

「おーおー、教師と生徒の禁断の関係つてやつ？」

「うるさいぞ筋肉バカ」

「へへ……」

「いや褒めてないわ。あとお前買い出しの時にプロテイン箱買いしてくるのやめろ、部屋に保存してる食料は俺のポケットマネーで買つてるのを忘れるな」

「ゴチになります先生!!」

（こいつ……）

日に日にこの環境に馴染んでいるリュウヤ……それだけなら別にかまわないの

だが、千歌達の影響か出会った当初よりもどこか生意気になっている気がする。

そのまま2人でくだらない言い合いをしつつ、学校の廊下を歩いて玄関へと向かった。



『 그리스、そろそろ時間よ』

「……………了解」

廊下の隅で身を隠すように、ひっそりと首相からの連絡を受けとる。

タクミはスクールアイドル部の部室のなかで仲睦まじそうにガールズトークに花を咲かせている少女達を、外からじっと見つめた。

そこには理亜や聖良の他に、長期休暇を利用して東都からやってきたAqoursのメンバーもいる。

なんでも戦争を止めるためにわざわざこの北都まで来たというのだが……………。

「…………俺のせいで、全部台無しになったってわけか」

直後、部屋のかなかにいた理亜と目が合った。

「あ――」

なぜだかひどく居た堪れない気持ちになり、反射的にその場から駆け出してしまう。

「ちよつとタクミ!？」

背後からかかる声を振り切り、タクミはとても恐ろしい何かから逃げるように学校の外へ飛び出した。

（俺は……北都の兵器……!! 人殺しなんだ……!!）

もう彼女達とは関わるべきではないことは承知している。

理亜は薄々タクミが何かを隠していると勘付いている節がある。このまま下手に関係を長引かせて自分が仮面ライダーだと気づかれる事こそが最悪の事態だ。

「理亜と聖良さんには……これ以上迷惑はかけられない」

一方、東都研究所。

「予告状……ですか？」

「ああ、これがそうだ」

キリオは塔野首相が差し出してきたカードを受け取り、そこに記されてあった短い文章を注意深く読み込んだ。

顎に手を当て、数秒考えた後で口を開く。

「こういうふざけたことをする奴なら……1人心当たりがあります」

「ほう……というと？」

「俺が……いや、俺達が何度か交戦したことのある相手——ブラッドスタークと名乗る者です」

「ブラッドスターク……？」

首を傾げる首相に、キリオはこれまでスタークが行ってきた所業の全てを語り始めた。

西都でのライブ襲撃から……それ以降のことも含めて、知り得る限りの情報を。

「……なるほど、そんなことがねえ……」

「……スタークがパンドラボックスを狙ってるのか……?」

「なんだ万丈、パンドラボックスのことは知ってるんだな」

「さすがにバカにすぎだ。5年前の惨劇は忘れたくても忘れらんねえ」

リュウヤは右手を強く握ると、それに視線を落として言った。

「少し気になることがあるんだ」

「なにがだ?」

「もしスタークがパンドラボックスを狙っているなら……そりゃ西都の、東都に対する裏切り行為だと思うんだよ」

「……?どうしてそこで西都が出てくるんだ?」

「あのベルト……スクラッシュドライバーを俺にくれるよう指示したのは、スタークなんだ。むかつく奴には変わりねえが……一応は西都側の奴だと思ってたんだが……違うのか?」

「はあ……!?!」

無表情だったキリオの顔が一気に困惑で満たされる。

「どうしてそんな大事なことを今まで黙ってたんだよ!?!」

「す、すまん、忘れてた」

頭を掻きながら誤魔化すように笑うリュウヤを尻目に、深い思考へと潜る。

スタークがリュウヤにスクラッシュドライバーを渡したということが本当なら、余計にわけのわからないことになる。

つまりはアレは西都で開発され、リュウヤに渡された物の他に………流用された同質の物が北都のグリスに渡った——もしくはその逆。

スタークが物流の源だとすれば……西都と北都、どちら側の人間なんだ？なぜわざわざ対立している国の双方にドライバーを渡した？

「ああ、くそ……っ………わけがわからない」

奴の行動は何もかもが霧がかっているようで心底気持ち悪い。そもそもなぜ東都だけに渡さなかったのか——

「……………渡す必要がなかったから……？」

——ジリリリリリリリ
!!!!

「……!?なんだ!」

突如として警報が鳴り響く。

扉の外から騒がしい足音が近づいてきたかと思えば、1人の警備員が部屋の中に勢いよく転がり込んできた。

「侵入者ですツ!!ただいまガーディアン部隊が交戦中!!」

「万丈!!」

「ああ!!」

考えるよりも先に身体が動いていた。

戦闘音が聞こえる方向は。パンドラボックスが嚴重に保管されている大広間。

キリオとリュウヤが駆け付けた時にはもう、立っていられる兵士も、起動しているガーディアンもいなかった。

「これは皆さんお揃いで」

コツ、と鈍い靴音がこだまする。

赤と黒——2人の戦士が前方から歩み寄ってくるのが見えた。

「予告通り……………パンドラボックスを頂きに参りました」

奴は柄でもない紳士的なお辞儀を見せながら低い声でそう言った。

「……………スターク」

握った手が震える。

宿敵を前にしたキリオは——説明のつかない不安感に苛まれていた。

第23話 スタークの策略

「……………ふん、随分と無用心だな」

遠目に見える浦の星女学院の校門を注意深く観察した後、タクミは木陰に身を潜めながら懐へ手を伸ばす。

この物騒な国情のなかでガーディアンはおろか護衛の1人も配備していないとは。……平和ボケしてやがる。

そういえばスクールアイドルでの平和活動に一番貢献していたのは東都だったな。奴らにとつて、今の日本は最悪の環境だろう。

「この連鎖は、俺の手で終わらせてやる」

今回の任務は極秘に行われるものだ。故に北都のガーディアンやスマッシュは連れてきていない。

取り出したスクラッシュユードライバーを腰に巻きつけ、スクラッシュゼリーを構える。

これから俺は……また一つ『平穩』を壊すんだ。

「……………変身」



「よっ！やっぱりお前らもいたか。ナイトローグと一緒に出向いて正解だったみたいだな」

「スターク……」

研究所に侵入してきた2人の戦士——ナイトローグとブラッドスターク。

立ち向かうのは数十人の兵士とガーディアン……そして2人の仮面ライダー。

「おいお前！西都の人間じゃなかったのかよ!？」

「んん……?」

凄まじい剣幕で怒号を飛ばすリュウヤを一瞥し、スタークはたじろぐことなく普段通り冷静な調子で答える。

「オレが一言でもそんなこと言ったか？」

「……ッ！テメエ……!!」

「クハハ………悪いな、オレはオレの意味でしか行動しない。西都の味方になった覚えはないぜ?」

「じゃあ、どうして万丈にスクラッシュドライバーを渡したんだ?……いや、そもそもあれは誰が作ったものなんだ!」

「知りたいか? いいだろう。——ただし」

《エレキスチーム!!》

「……ツツ!」

突如として繰り出された電撃の波をそれぞれ左右に避け、キリオとリュウヤは瞬時にビルドドライバーを取り出した。

「オレ達に勝ったら教えてやるよ」

キリオ達の背後で待機していたガーディアン達は電撃を回避しきれずに爆散。それを目見て焦った兵士が首相を連れて施設の奥へと退避していく。

「上等だア!!」

「万丈、お前はコウモリ——ローグをやれ」

「あ……!?なんで——」

「頼む」

キリオの瞳のなかで静かに燃える怒りの炎。リュウヤは彼の表情を見た途端、ただならぬ雰囲気を感じ、舌打ちをしつつ渋々頷いた。

「わーっつたよ」

「よし、いくぞ」

2人がビルドドライバーを装着すると、スタークはリュウヤの方だけを見て怪訝そうに首を傾げた。

「なんだ、スクラッシュドライバーは使わないのか？」

「お前らなんかこれで十分だよ。——来いッッ!!」

《《》》

????????!!!!

リュウヤの呼び声に応えるように、どこからともなく滑空してきたクロースドラゴンが彼の手の中で止まる。

（……………いつらを、倒す……!!）

ライダーシステムに必要なのは一定のハザードレベルだけではない。

使用者の感情——特定の強い想いが閾値を超えなければ変身することすら叶わない。

キリオの場合は平穏を望む心。

そして今のリュウヤは——

《ウェイクアップ!》

《クローズドラゴン!》

ドラゴンフルボトルをクローズドラゴンにセット。そのままドライバーに装填。拳をもう片方の手のひらへ打ち付け、眼前の敵を睨む。

(……………葛城)

ライブイベントの夜に起きた襲撃事件。思えばあれが全ての始まりだった。

会場をめちやくちやにされたあの時の……………ユイとミカの顔が、頭の中にこびりついて離れない。

だから——!!

《Are you ready!?!》

「変身ツツ!!」

《Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON!!》

《Yeah!》

ドラゴンの成分が装甲を練り上げ、前後からリュウヤの身体を挟み込むと同時に翼を模したアーマーが出現。蒼い炎と共に彼の胸部を包んだ。

「ほう……?」

「……これは」

先ほどまで口を開くことのなかったナイトローグと、スタークが驚愕の色を含んだ声を漏らす。

「おお……? おお!!」

「仮面ライダークローズ」。……うん、我ながらいい出来だ」

「なるほど、ボトルの成分を二倍にしたってわけか。さっすが天才物理学者!!」
「軽口叩けるのも今のうちだ」

《ラビット!》

《タンク!》

《ベストマッチ!!》

《Are you ready!?!》

「変身!!」

《鋼のムーンサルト!ラビットタンク!!》

緊迫した空気が辺りに充満する。

両者がじりじりと距離を縮めるなか、最初に打って出たのは――
「つしやア!!負ける気がしねえ!!」

リュウヤだった。

向かってきたナイトローグの銃撃を躲しつつ打撃でカウンターを狙う。

「オラッ!オラオラオラオラ……!!オラア!!」

「……………」

相手に反撃の隙を与えない。蒼い炎を纏った拳を何度も叩き込む。

防御の体勢から動けないでいるローグへ肉薄し、腹部に最大級の一撃を放った。

「ぐっ……………」

「どうしたどうした……!!こんなもんかよ!？」

リュウヤは身体を激しく動かしつつも、自分が戦闘の最中でもはつきりと意識を保っていることに驚きを隠せずにいた。

（キリオが言った通りスクラツシユドライバーよりも出力は低い……けど——）

「はああッツ!!」

「うぐっ…………!？」

頭が嘔みたいにすつきりしている。変身中のはずなのにこんなに清々しい気持ちでいられるなんて。

「ははははッ!最っ高っ!だな!!」

「調子に…………!乗るなア!!」

「うおっ!？」

スチームブレードによる大振りの横薙ぎ攻撃がクローズの胸部を掠め、その隙を見逃

さなかつたローグが一気に間合いを詰めてくる。

《フルボトル!》

「……!?!」

《スチームアタック!!》

トランスチームガンに1本のボトルが装填され、すぐさま発砲。弾丸が曲がりくねった弾道を描きながらリユウヤへ殺到する。

「うつ……………おおおおおおおッ!!!」

《ビートクロザー!》

「……………なに……………!?!」

無我夢中で振り抜いたりリユウヤの腕と連動するように、ビルドドライバー内部から一振りの剣が飛び出してきた。

勢いよく振るわれた刃は左斜め上空から飛来してくる弾丸に直撃。迎撃された瞬間に小さな爆発と衝撃を引き起こした。

「へへっ……………サプライズってわけか?」

少し離れた場所ですタークと戦っているであろうキリオに対して心の中で礼を言い、休むことなくローグへ接近する。

「ぐっ……………」

「そろそろ決めてやるぜ……………!!」

「はッ!ぜやッ!!だああッッ!!」

「ハハハ……………!!良い、良いぞ……………!!」

1、2、3……………。

一方、スタークとビルドは拳と蹴りによる激しい攻防を延々と繰り返し、研究所の外までやってきていた。

「ハザードレベル3・9……………!やっと調子が出てきたみたいだな……………キリオオ!!」
「相変わらずわけのわからないことを……………!!」

「オレはお前達が成長してくれることが嬉しいのさ。そう……………何よりもな!!」

鮮烈な一撃が顔面に迫る。

身体をひねりつつそれを回避し、スタークの背後へ回り込んだキリオは瞬時にドライバーのボトルを交換し、

《海賊!》

《電車!》

《ベストマッチ!!》

《Are you ready!?!》

「ビルドアップ!!」

《定刻の反逆者!海賊レッシャー!!》

ベルトから生成された弓形の武器“カイズクハッシャー”を手に取り、奴の背中を弓部分での斬撃を浴びせる。

「新たなボトルか……」

「一気に決めるツツ!!」

スタークの強みは相手の攻撃パターンを瞬時に読み取る分析能力と、わずかな時間でそれに対応する適応能力。

少々脳筋気味なのは自分のスタイルとして気に入らないが……こっちのパターンを読まれる前に奴を倒す。

……………と、見せかけて。

《各駅電車！》

《急行電車！》

《快速電車！》

連続で放たれた三連撃のエネルギー弾がスタークを襲うも、奴はそれらを蛇に似たトリッキーな動きを駆使して全て回避してみせた。

楽しそうに笑いながら再度こちらへ迫ってくる。

「この程度は予測済みだぜえ……………」

「で？」

「……………!？」

《海賊電車！》

スタークの不意を突いた“4発目”を奴の至近距離から解放。

カイズクハッシャーで生み出せる最高のエネルギーを込め、四肢のど真ん中に撃ち込んでやった。

「ガハ…………ア…………ッ!!」

「まんまと引つかかってくれたな。……動きが読まれることをあらかじめ把握していれば、タイミングをずらして不意の一撃を叩き込むこともできる」

先ほどのスタークとの打撃戦では、キリオは無意識を装ってわざと3つのリズムに乗せて攻撃を加えていた。そうすればスタークはそれを「キリオの癖」だと誤解し、カイゾクハッシャーの攻撃にも難なく対応してくる。

そう、「3発目」までは。

「“相手が自分の手の中で踊っている”と……そう思ってる馬鹿にしか効かない手段だな」

「ハッハハハ!!……言ってくれるねえ」

倒れ伏したスタークはコンクリートの上で大胆にも大の字になり、不気味な笑い声を響かせた。

「フルボトルによる変幻自在の攻撃、か……。確かにトランスチームシステムとライダーシステムじゃあ差がありすぎるな」

「……………どうしてパンドラボックスを狙う?」

「それもオレに勝ったら教えてやるよ。……勝てたらな」

露骨に苛立たせるような声音で語りかけてくるスタークに、キリオは仮面の下で歯ぎしりを立てる。

「……いいさ。乗ってやるよ、その挑発に……!!」

《輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！！》

Ready
go!!

《ボルテックファイニッシュ!!》

流れるような速さでボトルを入れ替えたキリ才は、自分が持つ最上級の攻撃を加えようと走り出す。

「くらええええええええええッ!!!」

「確かにボトルの扱いじゃお前の方が幅が広い。だが――」

「え」

刹那、視界が赤い輝きに染め上げられる。

全身に迸る鋭い痛みと、頭部の鈍痛。吹き飛ばされて頭を打ったのか。

耳鳴りがひどい。

身体が動かない。声も出ない。それどころか前だつてよく見えな

「……………ツツ……………!!あ……………ツ!!」

やつと出た声は……………声というよりも悲鳴に近いものだった。

「おととつと、少し張り切りすぎたか？」

「い……………ま……………のは……………」

「お前もよく知る……『火星』の力さ」

「なん……だ……と……」

いつの間にか変身は解除され、身動きが取れないでいるキリオの前へしやがみ込み、スタークは続けた。

「……さっきの打ち合いで、お前も一度『解放』した形跡があるのはわかっていたが……この様子じゃ、やはりまだまだのようだな」

「……なにを……いつ……」

「——さて、そろそろ頃合いか」

スタークは立ち上がると、マジシャンさながらに何もない空間から携帯電話を取り出すと、そのまま誰かと会話を始めた。

「……そうか、浦の星女学院に………わかった」

キリオは奴の発した単語で目を見開かせ、力を振り絞って上半身を立たせる。

「お前……今度はいったい何を……!!」

「お前の勤め先が 그리스 に襲われているらしいぞ」

「なっ……!」

「落ち着け、オレがけしかけたわけじゃない。奴は政府の指示で動いているからな。……だがオレも鬼じゃない、罪のない少女達が傷つくのはとてもとても……悲しいこと

だ」

「心にもないことを……！うっ……！！」

痛みに耐えきれずに再び倒れたキリオを尻目に、スタークは飄々と歩み出した。

「安心しろ。今からオレが向かって、助け舟を出してやるのさ」

スチームブレードの刃を丁寧^{ていねい}に手でなぞりながら、スタークは霧と共にその場を去ろうとする。

「グリスを退けられるかどうかは……あいつの頑張り……いや、がんばルビイ次第だな」

第24話 底に眠るパワー

「はあっ……はあっ……！」

——氷室ミカはわからなかった。

ナイトローグのマスクの下で、整った顔が悲痛に近い表情へ変わる。

今自分が対峙しているこの少年、万丈リユウヤが想定していたよりも遥かに高い戦闘能力を発揮しているのだ。

確かにドラゴンの成分は強力だ。しかしそれを差し引いてもこの力はおかしい。戦いのなかでハザードレベルまでも上昇している節が見られる。

「……どうして、仮面ライダーに……？」

「あ？」

「どうして……ここまで……必死になれる……!？」

肩で息をしながらリユウヤに対してそう尋ねる。

彼はゆっくりと腰を下ろし、拳を構えつつ迷わずに答えた。

「決まってるんだろ……！お前らがめちやくちやにしたライブの……落とし前つけさせるためだ!!」

「……………!!?」

余計に疑問が深まるばかりだ。

リユウヤはユイやミカと特別仲がいいわけではない。友達と呼べる人間、とはとてもじゃないと言える関係ではないはずなのに。

ただのクラスメイト……それなのに彼は、そんな人達のことを気にかけるというのか。

そこから湧き上がる感情が……彼を強くしていると？

「休んでる暇なんかねえぞ!!」

「……………この……………つ……………!!」

クローズの腕が縦方向に振るわれ、ビートクローザーの刃が眼前まで迫る。

それをスチームブレードで受け止めつつ、空いた片手のトランスチームで牽制。一時的に距離をとった。

彼はそう簡単に隙は与えてくれない。だからこの一瞬で――

「目的を果たす」

「ああ……!?」

「ハアツ!!」

大きく両腕を広げると同時に、ナイトローグの背中に巨大な黒翼が展開。

「なんだア!?」

地を蹴り、クローズ目掛けて一直線に飛翔。

「あぶねっ……!」

身体を捻ってそれを回避するクローズ。しかし当然この程度の突進は避けられると予測済みだ。

——今回の目的は彼らと戦うことじゃない。

「……これ以上は不毛すぎる」

クローズの背後へ回り、パンドラボックスが嚴重に保管されている透明なケースをトランスチームガンで射撃。素早く箱を抱える。

「あああああっ!?」

眼下で狼狽するクローズに背を向け、ローグはそのまま研究所を去ろうと高く飛び上がった。

「これで——!」

《ラビット!》

《ガトリング!》

「——!?!」

ふと耳に入った電子音声が聞こえた方向を見やる。

捉えることも難しい速度で地上から跳躍した人影が、その手に持つ武器の銃口をこちらに向けてきた。

「なっ……………!?!」

彼は何も言わずに引き金を絞り、その銃弾を巨翼の付け根へと叩き込んだ。

「あっ……………!」

バランスを崩した瞬間、今度はパンドラボックスを抱えていた腕に連射を受け、思わず収めていたそれを手放してしまった。

すぐに取り返そうと旋回しかけるが、落下しながらも正確に照準を合わせてきた攻撃が追い打ちのように放たれる。

反撃しようとして取り出していた1本のボトルまでも落としてしまい、加えて蓄積していたダメージが限界を迎えているとシステムが警告。スーツ内部に警報が響いた。

「……………!!」

これ以上はナイトローグの姿を保てない。正体がバレることだけは防がなくてはならない。

齒を軋ませた後、定まらない翼のバランスで必死にその場から離れた。

「……………間一髪だったな」

ナイトローグから取り返したパンドラボックスとフルボトルを回収し、戦兎キリオは変身を解除した。

が、やはり無理をしすぎたか、数秒保たずにその場に崩れ落ちてしまう。スタークと

の戦闘でダメージを受けすぎたようだ。

「おおキリオ！ たすかつ—— て大丈夫かお前!? なんだそのケガ!？」

「俺のことはどうだっていい。……千歌達が危ない」

「高海達が? ……なんでさ?」

リュウヤも変身を解き、キリオに肩を貸しつつそう尋ねた。

「……グリスが、浦女に侵攻しているらしい」



『こ、校内に不審者が侵入しました！ 校内にいる教員と生徒の方々は直ちに避難を——』

——！』

放送室から発信されたその声は、ひどく取り乱した様子で学校全域にそう伝えた。

「不審者」って……もつとマシな呼び方してもらいたいもんだ」

金色の装甲をまとった戦士が仮面の下で呟く。

それにしても、休日だというのに人が多い。ドタバタと騒がしく逃げ惑う足音があちこちから聞こえてくる。部活動をしていた生徒達だろう。

そうだ、さっさと逃げろ。今回の任務はフルボトルの奪還。他は全て邪魔者以外の何者でもない。

時折生徒に出くわすこともあるが、変身していればこの姿を目撃した瞬間一目散に去っていく。

「……どこにいる、ビルド……」

「……………ピギっ……………!？」

けたたましいサイレン音に気がつき目を開けた。

「……………避難訓練……………？」

黒澤ルビイは現在進行形で鳴り響いている警報の意味を理解できないまま、重い瞼をこする。

今日も変わらず千歌と曜と共に部室に集まってネタ出しをしていたのだが、ユニット名を決めた辺りで自分を含め眠りこけてしまっていたのだ。

最近は精神がすり減るようなことばかり起きるので、みんな疲れ切っていたのだらう。

「千歌ちゃん、曜ちゃん」

机に突つ伏すようにして眠っていた2人の背中を軽く揺らす。

「ん……………」

「うう……………あと5分……………」

「ち、ちよつと起きて。なにか……………校内の様子がおかしいの」

「……………?」

うとうとした瞳で身体を起こす2人だったが、スピーカーから流れるサイレンを聞いた途端に耳を塞いでは再びきゅつと目を閉じた。

「わっ!? なになに!? 火事!」

飛び出すような勢いで部室の扉を開けた曜が周囲を見渡し、自分達が眠るまでは体育館にいたはずのバレー部員達が消えていることに気がついた。

「なんだろう一体……………」

「休みの日に避難訓練なんておかしいよね……………」

「たぶんもうみんな外に……。私達も行くこう! たぶん訓練なんかじゃないよこれ!!」

曜の一声で一気に表情を緊張感で一杯にする千歌とルビィ。

幸いここは一階。玄関まではそう遠くはない。

「急ごう!!」

「……………んだよ。ビルドの野郎は留守か?」

しらみ潰しに教室を探し、職員室までたどり着いたグリスは気怠そうに肩を落としてつ、「戦兎キリオ」の名がないか、並べられた机を端から順に注意深く確認していく。正直言ってフルボトルがこんな場所に隠されている確率は低い。ていうか普通ならこんなわかりやすい場所に持つてくるわけがない。それほど馬鹿な奴じゃないはずだ。が、ボトルの他にも何か為になる情報が見つけれられるかもしれない。

「……………」か

「戦兎先生」と記されたシールが引き出しに貼つてある机が目にとまった。

他の机と比べてもロクに整理もされておらず、プリントが散乱。主を見ずともずぼらな雰囲気はひしひしと伝わってきた。

「チツ……探す前から嫌気がさしてきたぜ」

渋々膝を折り、引き出しを開けようとしたその時、

「よおタクミ、お疲れさん」

「……………」変身している時は「グリス」だ。今度間違えたらぶっ殺す」

「おっと、これは失敬」

黒霧と共に現れた人物を睨む。

ブラッドスターク。この男はいつでも現れる。

「何の用だ？今は任務中だぞ」

「いやなに、ビルドとクローズに苦戦してると思ってた。様子を見に来たんだよ」

「はっ……俺があんな雑魚共にやられるかよ。……それに、なぜか今はいいみたいだ」

「なんだそうだったか」

「これは困ったとしても言わんばかりに、大袈裟に頭を抱えるスターク。

「せっかく援軍を連れてきてやったのに」

「……あ？」

「きやあああああッ!!」

「……!?」

外から聞こえてきた悲鳴に反応し、タクミは無意識にその場を駆け出しては校庭へと飛び出した。

「……!! っ……………!!」

飛び込んできた光景に目を疑った。

先ほど外へ追い出した浦の星女学院の生徒達が——次々に現れる無数のスマツシュ達に襲われかけていたのだ。

「なんだよ、これ……!!」

「あちゃあ。連れてきたスマツシュは全員旧型。目に映る者を手当たり次第に攻撃するタイプだからなあ。このままじゃ、あの生徒達の命はねえな」

「馬鹿野郎が!! なに考えてんだテメエ!! 頭おかしいのか!？」

スタークの胸ぐらを掴み、その憎たらしい面を引き寄せる。

「なあに怒ってんだよ。敵国の市民がどうなるうがお前には関係ないことだろ？」

「……………この任務は極秘に行われるはずだったんだよ!! こんなことすればすぐに騒いを聞きつけた東都のガーディアンがすっ飛んでくるぞ!! 余計なことしやがって!!」

「それはすまないことを——」

「キヤアアアアアア!!!!」

プレススマツシュの剛腕が1人の生徒に振りかざされるのが見える。

「……ツツ……クソが……!!」

考えるよりも先に、タクミはスタークを突き飛ばすと地面を蹴り、瞬く間に校庭に群がるスマツシュ達のもとへ突っ込んだ。

……これ以上自分のせいでは……人が死ぬのは御免だ……!!

「お前ら走れ!!」

少女達を必死に守ろうと奮闘するグリスを離れた場所から眺めていたスタークは、くぐもった声音で笑いをにじませた。

「フッフッフ……用事が済むまでここで足止め喰らっててくれよ」



「きやあつ!!」

「ルビイちゃん!!」

横からやってきた凄まじい衝撃で身体が吹き飛び、廊下の壁に激突する。

ルビイは突然現れた怪物と、それに襲われようとしている2人のチームメンバーの姿を、はつきりとしめない意識のまま視界に捉えていた。

「うっ……!」

頭を打ったのか。鋭い痛みが後頭部から眉間に走る。

「千歌ちゃん! ルビイちゃんを連れて逃げて!!」

「曜ちゃん……!?!」

「私はコレの注意を引くから! 早くツツ!!」

鬼気迫る様子でそう伝えた曜は、持ち前の運動神経が生み出す小回りを利かした動きでなんとかスマッシュを翻弄しているが、体力が切れるのは時間の問題だろう。

二択を迫られた千歌は、倒れるルビイと曜を交互に見ては混乱した顔で青ざめている。

「このままじゃ全員――」

——あいつらを助ける力が欲しいか？

「……だれ……？」

消えそうな意識の最中、ルビイはすぐそばで聞こえる声にそう尋ねた。

——時間がない。今あいつらを救えるのはお前だけだ。

「ルビイ……だけ……？」

——ああ。オレならお前に力を与えることができる。この状況を打破できる力をな。

もはや選択技すら与えられてはいなかった。

千歌と曜……2人を助けるためには——それこそ奇跡のような力が必要だった。

「……………」

自分以外にはわからなそうなくらい小さく、それでいて決意に溢れる瞳で、ルビィは頷いた。

——いい子だ。

《デビルスチーム!!》

第25話 ハードな運命

「浦の星がグリスに攻撃されてるって……ほんとかよそれ!」

「スタークの言うことを信じるのは癪だが……もしそうならすぐにでも向かわないと」

そう言ってボロボロの身体を引きずりながら歩き出したキリオは、一歩二歩と踏み出したところですぐに膝をついてしまう。

見るからに消耗し切っている彼は、それも意に介すことなく立ち上がった。

「お、おい!……待てよ。そのケガじやまともに戦えないだろ!」

「……………いいや、いける」

「おいっ……………無理だつて!」

キリオの肩を掴み、リュウヤは彼の半ば虚ろな状態の瞳と目を合わせた。

「……………!」

直後、表現し難い寒い寒気が全身に走る。

キリオの暗い瞳の奥に宿った炎が、自分にも燃え移ったような感覚だった。

「……………やらなくちゃいけないんだよ。俺は——仮面ライダーなんだから」

「……………」

キリオは以前こう言った。『誰かのために戦うことが、結果的に自分のためになって
いる』と。

自分が過ごす『日常』を保つために、彼は戦っている。

(……なんだ？この感じは……………)

何かがひつかかる。キリオは本当に……………そう思っているのか？

彼の真意は——

「……………万丈、それは……………」

「あ？……………ああ、ナイトローグとかいう奴が落としていったボトルだよ」

「ちよつと貸せ」

リュウヤの手から取り上げた1本のフルボトルを見る。

透き通ったブルーに一機のロケットが大きく刻まれていた。

「ロケットボトル……よし、これでいこう」

「お、早速使ってみるってか？」

「ここから学校へ向かうにはマシンビルダーじゃ少し時間がかかる。……それに、今まで手に入れたボトルの組み合わせを消去法で考えれば——」

キリオはビルドライバーを腰に装着し、また別のボトルを1本だけ取り出し、軽く振った。

《パンダ！》

《ロケット！》

《ベストマッチ！！》

《Are you ready!？》

「おお!？」

「やっぱりな。……変身」

白とスカイブルーの装甲が形成され、キリオの身体を挟み込む。

《ぶっ飛びモノトーン！ロケットパンダ!!》

右手には巨大な爪。左手には存在感のあるロケットが装着されている。ビルドの新たな姿だった。

「これで俺が持つてるボトルは21本、その内発見できたベストマッチは10……か。……パネルにはめる時1本余るな」

「パネ……なんだって？」

「こつちの話だ。……ほら、しっかり掴まってる」

「え？」

キリオは生身のリユウヤを右腕で抱え、左手のロケットから勢い良く炎を噴射。

そのまま上昇し、瞬く間に空へと飛び上がった。

「えっ!? ちよっ……! うおおおおおおおおお!!」

「叫ぶな馬鹿。舌嚙むぞ」

「筋肉つけろやああああああ!!!」



「うつ……！うつうつ………ッ!!」

黒霧に包まれた赤毛の少女が苦しそうに身を曲げる。

傍でその様子を眺めていたスタークは、思い出したように1本のボトルを取り出してはそれを彼女の左腕へ突き刺した。

「あぁっ……！くう………!!」

「危ない危ない。こいつを忘れるところだったぜ」

赤い閃光が少女——黒澤ルビィから放出し、徐々に小柄な影が膨張したシルエツトに変貌する。

「ああああああ………!!あああああああッツ!!」

霧が衝撃波と共に拡散。

「きやあッ!」

「なんなの………!!」

「………!!」

千歌と曜を襲おうとしていたスマッシュが吹き飛ぶ。

その場にいた全員の視線が、赤い戦士とその隣に立つもう一体の怪物へ向けられた。全身を強固な装甲で覆われた赤い身体。頭部には砲台、両肩にはウイング状の巨大なシールドが装備されている。

まさに「兵器」と表現するに相応しい姿がそこにあつた。

「ギャッスルハードスマッシュ……。さあ、存分に戦え！」

高笑いを響かせながら赤い戦士の姿が霧と共に消えていく。

「……………ッ!!うああああああつ!!」

シールドを前方へ展開したルビイは、そのままスマッシュ目掛けて強烈な体当たりを繰り出した。

「???
……………ッ!!」

うめき声をあげながら廊下を転がるスマッシュを尻目に、千歌と曜を庇うように両腕を広げつつ彼女は言った。

「2人とも逃げて!!」

「ルビイ……ちゃん……?ルビイちゃんなの……?」

「早く!!」

「……………!!」

理解が追いつかない状況に対して恐怖に満ちた表情を浮かべる2人の少女。

怯えながらも必死にその場を去っていく千歌と曜だったが……その恐怖心の矛先は自分達を襲ったスマッシュだけじゃなく——明らかにルビイまでもが含まれている様子だった。

「……………あ」

ふと横にあつた窓に自らの姿が映る。

ルビイは変わり果てた自分を認識した途端、奥底から悲哀の感情が湧いてくるのがわかった。

「これが……………ルビイ……………なの……………？」

——オレならお前に力を与えることができる。この状況を打破できる力をな。

「ルビイも……………怪物に……………」

「」

「……………！」

起き上がったスマッシュが巨翼を広げ、一直線にこちらへと突撃してくる。

「きゃあつ!!」

咄嗟にシールドで防御するが、勢いで負けてしまい後方へ思い切り倒れてしまった。痛みを堪えながらもすぐに体勢を立て直し、シールドを構えたまま再度体当たりを試みる。

「や……やあああああああつ!!」

狭い廊下での不可避の攻撃。スマッシュはなすすべなくルビイの突進を全身に浴びた。

そのまま壁を突き破り、両者が校庭へ放り出される。

「くう……!」

勢い余って地面を転がる。戦い慣れていないせいだろう、一挙一動する毎に余計な体内を消耗してしまう。

「????????」

大きな翼を備えたスマッシュがこちらを睨んでくる。

今すぐここから逃げ出したい。でもそれはできない。今ここで学校の人々を守れるのは――

「負ける……」

「負けない……負けない………もん……!!」

――自分だけだから。

「うおりゃあああああッッ!!」

全身を使った回し蹴りが数十体のスマッシュ達を一気に薙ぎ払った。

黄金色の軌跡が消え、仮面ライダーグリスは肩で息をしながら地面を見つめていた。

「ハア……ハア……へへっ………今のでかなり、ハザードレベルが上がったか……?」

ふと横を見ればお互いに身を寄せて身体を震わせている女生徒達が見える。

「あつ……あの……」

「助けてくれて……ありがとうございます……」

「あ……?……あー………」

少し落ち着いた途端に自分の生ぬるさに嫌気がさしてきた。

……もともと自分はこの学校を襲撃しにやってきたんだ。スタークが引つ張つてきた奴らなんか放つておいて、さっさと用を済ませばよかったはず。

猿渡タクミは既に取り返しをつかないことをした。後戻りはできないのに――

「……チツ」

ここに目当てのものは見つからなかった。これ以上長居するのは危険だ。

一旦帰還して――

「……………!?!」

直後、校舎付近から爆音と衝撃が届いてきた。

「なんだ……………!?!」

じつと目を凝らし、遠くに見える大柄な影を見据える。

「……………なんだあのスマツシュ。あんなの見たことないぞ」

スマツシュの残党……………かと思ったが、明らかに先ほどまでは確認できなかった種類のものがそこにはいた。

城を模したような外見に大盾で武装されている。……………新型か？

「まさか東都の新兵器か？……いや、なんにせよ——」

もう仕事は終わった。スマツシユを野放しにしておく理由はない。

「——ぶっ潰す」

凄まじい脚力によって生み出されたクレーターのみを残し、タクミはミサイルのような速度で新型スマツシユとの距離を詰めた。

「一撃で決める……!!」

《スクラップフィニッシュ!!》

両肩から射出されたヴァリアブルゼリーの力でさらに加速。

加えて腕にまとったゼリーを機械的な巨腕に変形させ、そのままスマツシユ目掛けて振り上げた。

「おおおおおおおッッ!!」

グリスの間にスマツシユが到達するまで残り数メートルかと思われたその時。

「……………え？」

急な出来事に思わずそう声を漏らした。

突如気絶するように体勢を崩したスマッシュは、その装甲をボロボロと分解しながら徐々に人の姿へ一人で変わっていったのだ。

「ちよつ……………なつ……………!？」

反射的に必殺技をキャンセルしたタクミは、移動する速度を落としながら両腕を広げる。

意識を失った状態で現れた人間をそのまま受け止めた。

「なんなんだよ一体……………!？」

自分の腕の中で眠っている者の顔を恐る恐る見る。

そこには……………自分のよく知る人物の、疲労と苦悶に満ちた表情があつた。

「A q o u r s の……………ルビィ……………ちゃん……………!？」



「……………うっ……………」

全身に出来た傷が痛む。戦いから帰った後はいつもこうだ。

この痛みだけはどんなに経験を積んでも克服できる自信がない。

難波高校生徒寮。

高級ホテルじみた広さのロビーで自分の身体を引きずりながら階段へ向かおうとしているのは——Bernageの片翼、氷室ミカだ。

制服はもちろん、着用していた黒のタイツまでもあちこちが無残に引き裂かれている。

「ミカちゃん……………!?!」

「……………あ、梨子さん。こんにちは」

踊り場ではつたりと鉢合わせになったのは東都から派遣されてきたスクールアイドル、Aqoursの桜内梨子。

彼女はズタズタになったミカを見るなり血相を変えて歩み寄ってきた。

「こんにちはじゃないわよ……! どうしたのこの怪我!？」

「ちよつと転んじやつて……。ほら、わたしってドジだから……。あはは」

「とにかく手当しないと!」

「このくらい自分で……。つて、梨子さん……。?」

有無を言わずにミカの手を優しく引つ張った梨子は、そのまま保健室のある方向へと向かった。

「ごめんね、ちよつと沁みるかも」

「ううん……。大丈夫、慣れてるから。……。いたつ!」

保健教諭が留守だったので、梨子が自ら消毒液とガーゼを調達してミカの傷口に応急措置を施していく。

ベッドに腰掛けながら彼女に身を預けていたミカは、その場を満たしていた沈黙に気

まずさを覚えながら、地面だけを見つめていた。

「……………またユイちゃんに怒られちゃうな」

「え？」

心の中で呟いたはずの言葉が無意識に口から出てしまっていた。

ハツとそのことに気がついた時には、梨子は首を傾けてこちらに視線を注いでいた。

「ユイちゃんがどうかしたの？」

「う、ううん！なんでもない！なんでもないです……!!」

「そ、そう……？」

慌ててその場を取り繕うミカだったが、それがよほど不自然だったのだろう。梨子の表情を見るに何やら違和感を植え付けてしまったようだった。

「ほら、動かないでね」

「うん……………」

ミカは梨子とは一切目を合わせようとはしなかった。

彼女に限らず A q o u r s の人達と一緒にいる時はどうも落ち着けない。

彼女達に隠し事ばかりしているせいだろうか。とにかく罪悪感で押しつぶされそうになる。

「はい、これでおしまい」

「あ、ありがとうございます……ございます」

「うふふ、どうして敬語なの？」

「あつ……ごめんなさい……」

くすくすと笑う梨子を見て、ほんの数ミリ程度だが安心する。自分はこの場を……彼女と二人きりの状況をうまくやり過ごせたと思えたからだ。

「服も取り替えないと……」

「私がつて来ようか？」

「ううん。これ以上は悪いし……」

手当のために脱いでいたブレザーを手に取り、袖を通していく。

「ミカちゃん、スクールアイドルをやるうと思つたきつかけとか、ある？」

「え？」

それは保健室を出て行くまでの、束の間の雑談の続き。何の意図もなく発せられた梨子からの質問だった。

「きつかけ……」

「うん。私は浦の星女学院に転校してきたその日に、千歌ちゃんに誘われて……。最初

は断ってたけど、結局最後は承諾しちゃって、こうして今も続けてるんだけど――

『みーちゃんみーちゃん！スクールアイドルやろうよ！一緒に!!』

いつかの友達の姿が脳裏をよぎる。

凍ったように動かなくなったミカは、目を大きく見開いたまま一言だけ答えた。

「……わたしも……同じだった」

「そうなんだ！それってやっぱりユイちゃんが——」

二つ目の質問が飛んでくる前に、ミカは何も言わずに部屋の扉を開けていた。

「ミカちゃん……？」

「ごめんなさい」

呆然とする梨子に、ミカは背を向けたままそう言った。

「……………壊したのはわたしなんだから。……わたしが、償わないと」

相変わらず身体を小さく引きずりながら廊下を進むミカ。

その背中からは、普段の弱々しい雰囲気は見られなかった。

第26話 エボリユーシヨンの前触れ

“彼女達”のことを知ったきっかけは、誰にでも当てはまるようなものだった。

何気なくネットサーフィンをしていた時、意識せずとも視界に入ってくる変わった英字。

“A q o u r s”。それが彼女達のグループ名。

9人のメンバーが織り成す歌声と踊りが調和したパフォーマンスは、さながらギリシャ神話に登場するセイレーンを連想させた。

今までそういった俗世に染まるようなコンテンツには手を出していなかったタクミも、彼女達のライブに引き込まれるのにそう時間はかからなかった。

なかでもタクミが熱狂的に支持をしたのは――

「なんで……なんでルビイちゃんが……スマツシユに……」

自分の胸に寄りかかりながら意識を失っている赤毛の少女。

タクミは彼女の顔に視線を固定したまま、仮面の下でひどく狼狽していた。

ほんの数秒前。

タクミがスクラップファイニッシュを発動した直後、突然その肉体を崩壊させ、内部から素材として使われたであろう人間が現れた。

それがまさか——あの黒澤ルビイだなんて。

「……………」

遠くの方から聞こえる騒々しい足音に気がつく。

襲撃の情報を聞きつけた政府がガーディアン部隊を派遣したのだろう。じきにここまで到着するはずだ。

加えて駆けつけたのは……………それだけじゃない。

「……………あいつら……………!!」

「おおおおおおおおおおお!?」

1人の少年を抱えた仮面ライダーが、上空からとてつもない速度で降下してくるのが見えた。

「お、おいキリオ! あれ!!」

「手遅れだったか……! ある程度降りたらお前を投げる! 着地は自分でなんとかしてくれ!!」

「おっしや任せろツ!! …………… いや今なんて?」

リュウヤの問いは虚しくも風の轟音でかき消され、キリオの耳に入ることはなかった。

「サン、ニ、イチ! 今だ!!」

「ちくしよおおおおお!!!」

ヤケクソになりながらも、リュウヤは放り投げられた瞬間に受け身の体勢になり、そ

のまま地面を転がった。

「黒澤妹から……！離れろッ!!」

「ぐっ……！」

腕に取り付けられたロケットを用いての高速移動。

グリスはルビィを抱いたまま咄嗟に身体を捻り、退避用に持ってきていた1本のフルボトルを取り出す。

「スタークの奴……めんどくさい状況にしがって……!!」

《デイスチャーージボトル!》

「……!!待てッッ!!」

《潰れな〜い!》

グリスが腕を掲げ、自分達を覆うような動きで空中をなぞっていく。

たちまちその金色の姿と共に、ルビィまでもがその場から消えてしまった。

「黒澤妹が……スマツシユに……？」

「……………うん」

政府から派遣された兵達が襲われた校舎とその周辺を調査しているなか、千歌と曜を含めた生徒達は揃って校庭で待機していた。

一体何があつたのかを2人から聞いたキリオが頭を掻きながら悩ましげな表情を浮かべる。

（でも妙だな……。人間をスマツシユ化させるのには、相応のハザードレベルが必要になるわけだが……。黒澤妹にそれほどの力があるとは思えない）

それに、だ。実験機材もないこの学校でどうやってネビュラガスを……？

加えてその犯人……。考えるまでもなくスタークだろうが、なぜ彼女を狙った？

……………いや、そんなことはどうでもいい。

「……グリスに連れ去られたってことは、黒澤妹は北都にいる可能性が高い。すぐにでも出発を——」

「私も連れてって」

「……私も」

顔を伏せたまま、千歌が強い口調でそう言ったのを聞いて、曜もそれに賛同する。

「……俺、お前らは物わかりがいい方だと思ってたんだが。……………どうしちゃった？」
危険だから極力関わるなど散々言い聞かせたはずだ。本人達だってそれは十分に理解している。

「私達……ルビイちゃんにひどいことを……」

「え？」

「ルビイちゃんだってわかったのに……………あんな……。あんな……目で……！」

数分前の自分達がしたことが頭の中に蘇る。

友達が変貌した怪物に向けてしまったあの……恐怖と嫌悪に満ちた瞳。

キリ才は千歌達が言わんとしていることを察し、考えるように黙り込んだ後、2人の肩に手を添えた。

「怖いのが当たり前だ。友達が突然、化け物に変わるんだからな。黒澤妹だつてそれはわかつてるはずさ」

「でも……」

「でなきや、俺と万丈がここに来るまで……必死で戦つたりはしない。お前らを守りたいと思つたからこそ、あいつは必死に戦えたんだろうからな」

キリ才はぼん、と千歌達の頭を軽く叩いた後、傍でその様子を見守っていたリユウヤと目配せする。

「あとは……俺達に任せてくれ」



『そっちの方はどうだい、姉さん』

「……順調よ。雷斗の方はどうなの？」

『こつちも変わらずだ。東都からの“お客さん”も、特に目立った行動を起こそうとはしていない』

北都と西都へAqoursのメンバーが派遣されるにあたって、その保護者として同行していた難波重工からのスタッフである鷺尾風華と鷺尾雷斗。

弟から報告の電話をもらった風華は、現在政府関係者にしか存在を知らされていないはずの地下施設にいた。

「もういいかしら。ついさつき北都の来沢首相から呼び出しがあったの」

『了解、また連絡する。……全ては難波重工のために』

「全ては難波重工のために」

お互いに決まり文句を交わした後、通話を終了する。

風華はすぐ側で意識を失い縛られたまま椅子に腰掛けている少女と、彼女を連れ去ってきた少年を順番に見やる。

「……それで、なぜこのような勝手なことを？あなたが彼女のファンであることは知っていました、任務に私情を挟むようなことはご遠慮していただきたい」

「べ、別に誘拐しようとしたわけじゃない!!」

「してるじゃないですか」

「だからこれはな……!!」

猿渡タクミとは以前からの知り合いだ。……といっても、風華はタクミがスクラツシユドライバーを使用できるようになるまでの間、スタークに言われた通り彼の世話をしていただけで、そこまで親密な関係というわけではない。

「まあいいじゃないの。おかげで新しい戦力も手に入りそうだしね」

部屋の奥から歩いてきた人影を目で追う。

余裕に満ちた雰囲気を見せる女性——北都を統べる来沢首相だった。

「……………ん……………」

大きな脱力感と共に捕らわれていた少女の途切れていた意識が覚醒する。

薄暗い部屋の中心に置かれた一つの椅子。少女——黒澤ルビィは自分がそこに拘束されていることを数秒遅れて気がついた。

「えっ……………ど……………」

未だはつきりとはしない視界を凝らし、きよろきよろと周囲の状況を確認する。

「初めまして、黒澤ルビイさん。私は北都首相の来沢という者です」

「えつと……………その……………」

明らかに混乱している様子のルビイは、首相の背後に立っていた2人の人間——
その片方を見た途端に瞳を大きく見開いた。

「あなたは……………確か……………お姉ちゃん達と一緒に北都に行った……………」

「……………」

疑問を交えたルビイの言葉を聞き流し、風華は無表情のまま彼女を見つめている。

「ふふふ……………御察しの通り、ここは北都です。うちの兵士が手違いで連れてきちゃったみたいだね。スマツシユに変身できると聞いていたから、念のため身体の自由は封じさせてもらったわ」

「……………そうだ……………学校みんなが……………!」

「浦の星女学院に沸いたスマツシユなら俺が全て倒した」

「え……………」

壁際を離れて近くへ歩み寄ってきたタクミを見上げる。

どこかで聞いたことのある彼の声。不意にルビイの脳裏に、以前理亞との電話で耳に入った少年のことがよぎった。

「あなたは——」

「彼の言う通り、あなた方の学校にもうスマッシュはいないわ。安心してちょうだい」
ルビイの言葉を遮り、そのままほぼ一方的に首相が続けていく。

「……それでね、あなたに一つ相談があるのだけれど、いいかしら？」

「浦女に北都の軍が襲撃……ですってえ!？」

いつも通り Saint Snow の2人が活動している部室で時間を潰していたダイヤ、果南、花丸の3人だったが、スマートフォンを見ながら突然叫び声をあげたダイ

ヤを皮切りに、のんびりとした空気は一瞬で崩れ去った。

「それ、本当すら!？」

「どうして私達の学校に……!？」

「……ルビィ……!」

理亜は咄嗟にスマホを取り出すと、すぐさま通話アイコンへと指を走らせた。

が、しかし――

『ただいま、電話に出ることができません――』

「そんな……」

理亜の手から滑り落ちたスマートフォンは横にあつたテーブルの上へ落下し、静かな空間に鋭い音が響いた。

戦慄する一同の代わりに、ダイヤが消えそうな声で記事の続きを読み上げた。

「……………」戦場を制したのは北都。東都研究所でも同じく襲撃が行われ、東都軍はそちらの防衛に徹していたようだ。……………」

「……キリオが付いてるなら、きっと大丈夫だよ。千歌達に何かあったら、向こうから連絡がくるだろうし」

不安を押し殺しながらそう語るのは果南だ。余裕があるように振舞っているのは、皆を少しでも安心させようという心の表れだろう。

「理亞」

「……………」

「理亞っ」

「……姉様……………」

聖良は呆然と立ち尽くしていた理亞の肩を掴み、強引に彼女の意識を自分へと集中させた。

「大丈夫…………？」

「……………ごめんなさい姉様。少し外の空気を吸ってくる」

「あ……………」

姉の手を払った理亞は、それ以上は何も言わないまま部室の扉を開いて廊下へ出て行ってしまった。

「……理亞さん」

その光景を見ていたダイヤは目を伏せた後、意を決したようにきゅつと握り拳を作った。

●●●

「……全員集まったな」

多くの兵士達が集結したのは東都の首相官邸前。

整列した兵の前に立つのは東都首相である塔野……………そして彼の横には戦兎キリオと万丈リユウヤの姿もあった。

「北都が行った武力行使はもはや看過できるものではない。奴らはこの国の平穏を脅かす侵略者に他ならないのだ」

塔野が演説をする最中、いまいち状況が掴めないでいるリユウヤはひっそりとキリオに尋ねた。

「なあ……さつき首相と何話してたんだ？」

「……………一時的にだ」

「あ？」

「一時的に東都政府の管理下に置かれることを承諾した」

「ほお……………つて、えええ……………!？」

あつさりと答えたキリオに驚愕する。

無理もない。彼は今まで東都の兵器として行使されることを嫌っていた節がある。それはリユウヤもわかつていたからだ。

「いいのかよ……………!？」

「……………なんだ、お前は以前から乗り気だったじゃないか」

「それはそうだけど……………」

「今後はおそらく北都との全面戦争に発展していくだろう。……………そして、負けた方が敵国の勢力下に置かれる」

そう妙に淡々と話すキリオには一種の恐怖すら感じた。

「……………どうしちまつたんだよ、お前……………」

自分でも意図がよくわからない質問を発したりユウヤに対し、キリオは静かに返答する。

「この際だから言っておくよ万丈。俺はな——」

「今こそ北都に我らの鉄槌を下す時だ!!この国を制するのは東都だということ……奴らに知らしめてやれ!!」

——オオオオオオオオオオオオ!!!

兵士達が自らを鼓舞するために雄叫びをあげるなか、キリオは地を見つめたまま口を動かす。

「——俺は、この国がどうなろうとどうでもいいと思っている」

「……え?」

「スマツシユが現れれば、俺はすぐにでも駆けつけてそれを退けよう。教え子が襲われようとしているなら、同じように力の限りを尽くそう」

生徒に教鞭を振るう時のように、何気ない会話を交わすように、キリオは自然な口調で言った。

「……………平穩を脅かすものは、何であろうと殲滅する。俺の日常を奪う奴は、誰であろうと容赦しない。黒澤ルビイは、戦兎キリオを形成するのに必要なピースなんだ。……だから、俺はあいつを連れ去ったグリスを許せない」

落ち着いた表情をしているはずなのに、リュウヤはキリオからはただならぬ狂気を感じていた。

「……………お前は どうする?」

「え……………」

「お前はもともと西都から派遣されてきた人間だろ。お前次第じゃこの戦いから降りることだってできるはずだ。気が乗らないなら西都へ戻ればいい」

「……………! 本当にどうしちまったんだよ……………」

「どうもしてないさ。……………ただ、奴らの行動が俺の“許容範囲”を超えただけだ」

東都の軍が北都に向かえば、その時点で侵略行為とみなされすぐにでも全面戦争が始まる。

それは千歌達にとっても良いことではない……………そう考えて、これまでは防衛に徹していたが——もうそんなのは関係ない。

「……………待ってろよ、黒澤妹」

第27話 ジエノサイドが始まる日

「理亞さん」

「……………ダイヤ——さん」

「ダイヤ、で構いませんわ」

部室を飛び出した理亞を追っていたダイヤは、中庭の隅で小さくうずくまっていた彼女のそばへゆつくりと歩み寄った。

「大変なことに……………なっていましたね」

「……………ずいぶんと、他人事みたいに言うわね。ルビイが心配じゃないの?」

「もちろん心配ですわ」

「なら、どうしてそんなに平気なふりしてられるのよ?」

顔を腕の中に埋めたままそう尋ねる理亞に、ついダイヤは隠していた表情を露見してしまいそうになる。

浦の星に残っていたメンバーの——ルビイ達の安否が確認できないことが何より辛かった。

悔しさを押し殺した顔で、ダイヤは小さく呟く。

「……最近私達わたくしの身の回りに起こる出来事って、とても自分じゃ手に負えないことばかりなんです。だからせめて……皆さんのお手本になるような佇まいを、常日頃から心がけてきましたわ。私にできることなんて……それくらいしかありませんもの」

辛いと思う気持ちはみんな同じなんだ。

キリオだつて生徒達を導く存在であることを忘れずに、頼れる“教師”であろうとしている。ならば生徒会長である自らも相応の振る舞いが必要だと、これまで考えてきた。

「けれど……やっぱり、慣れることはできませんわね」

「……………ダイヤ」

必死に堪えていた涙がこぼれ落ちる。

理亜を慰めに來たはずなのに……こんなにはつきりと感情を表に出してしまうとは。今まで我慢していた分が回ってきたのかもしれない。

「どうしたどうした、女の子が辛気臭い顔を並べて」

「えっ……」

腰を下ろしていたダイヤと理亞にかけられる男性の声。

ランプの魔人を思わせる黒い煙と共に……………1人の異形が現れた。

「こんにはお嬢さん達。……君と会うのは初めてだったかな、黒澤ダイヤちゃん」

「ピギャツ……………!」

腰を曲げて覗き込んできた怪物を前にして震え上がったダイヤ。背中に当たる校舎の壁のせいで後ずさりもできず、理亞共々そのまま身動きが取れないでいた。

「あなたは……………っ!」

「お、お前は覚えててくれたようだな!さすがはオレの見込んだ女だ」

両手の赤い人差し指を理亞に向けたブラッドスタークは、見るからに警戒している様子の2人を見てふつとため息をついた。

「政府の人間が何の用?」

「そんなに睨むなよお。せつかく、黒澤ルビイに関する情報を持ってきてやったつてのに」

「……………えっ……………!?!それは本当ですの!?!」

スタークへの恐怖心などどこかへ行ってしまったように、ダイヤは妹の名前を聞いた途端に下ろしていた腰を上げる。

「ちよつとダイヤ……!」

「どなたか存じませんが、ありがとうございます!」

「礼には及ばん。……ほらよ、これを見てみな」

空中をスライドするようにスタークが腕を振るう。

するとその場にテレビ程の大きさがあるモニターが現れ、何やら映像を中継し始めたのだ。

そこに映っていたものは――

「……!まさか……!」

「これは一体……!?!」

視界に入っただのは、拘束具で自由を奪われているルビイの姿だった。気を失っているようで、こちらからの声も届いていないようだった。

「見ての通り、お前さんの妹は北都に捕虜として捕らえられている。今は大丈夫みたいだが……これから北都政府が何をしでかすかわかったもんじやないぜ」

「そんな……!どうしてルビイが……!?!」

狼狽する理亞とダイヤをしばらく眺めた後、一旦その映像を消した。

「黒澤ルビイを連れ去ったのは北都の仮面ライダーだ。なぜ彼女なのか、という疑問は………誘拐した本人に聞くといい」

「えっ……？」

瞬時に別の映像が流れ始める。

金色の戦士が眠っているルビイを抱え、先ほどの部屋へ運んでくる様子が映し出されていた。

「あれが、北都の………」

ルビイを床へ寝かせた後、黄金色の仮面ライダーが自分の腰に巻かれたベルトへ手を伸ばす。

「え———？」

変身が解除され、装甲の下にあった身体が明るみになる。

理亜はその変身者の姿を見た瞬間、信じられない光景を目にしたと言わんばかりに大きく目を見開いた。

「……………猿渡タクミ。北都の仮面ライダー、*“グリス”*であり……………確かこの学校のス

クールアイドル“Saint Snow”のマネージャーでもあったな」

「彼は……以前お会いした——」

「どう……して……？」

口元を押さえて絶句する理亜は、シヨックでその場に立っていることすら困難な様子だった。

これまで幾度も東都を攻撃し、親友を連れ去った張本人が……まさか、いつも近くにいた同級生だったなんて。

「最近顔を見せなかったのは……このため……？」

「ずいぶん前から北都政府のもとで働いていたみたいだぞ。……部のマネージャーになったのも、戦争が始まるまでの間、兵士としての素性を隠しておくためだったのかもな」

「……………ッ」

理解が追いつかない。どうしてタクミが政府と繋がっているばかりか、仮面ライダーとして活動しているのか。

——今まで、利用されていただけだったのか。

「……そこで、だ。お前達にオレから提案がある」

「……なによ」

「現在東都政府が備えている兵力じゃあ、 그리스 に勝てる見込みはほぼゼロだな。お前達が戦いに参加してくれるなら……確実に黒澤ルビィを奪還できるんだが………」

「……前に言ってた、新型のスマッシュの話？」

「ビンゴ！さすがだぜ理亜！」

「気安く呼ぶなって……言ってるでしょ」

理亜は深くうつむき、左手に作った拳を握る力を強めた。

「……スマッシュになれば、仮面ライダーにも負けない力が手に入るのよね」

「ああ。おまけにお前さんの身体能力は大したもんだ。並の人間じゃ到達できない領域に達せるかもな」

「……………いいわよ、乗った」

「……フツ」

「あ、あの……私、お二人が話していることがまだよくわからないのですが……」

スタークと理亜の会話に付いていけない様子のダイヤは、首を傾けながらそう

言った。

「こういうことだよ」

「え……？」

《デビルスチーム!!》

「なっ……!?!」

突如ブレードを取り出したスタークは、前に立っていた理亜の身体目掛けてそれを振り下ろしたのだ。

「ぐっ……うう………!!」

「よっと」

続けて流れるように1本のボトルを彼女へ突き刺す。

その矮軀は黒い霧に包まれ、数秒後には全く違うシルエットが浮かび上がってきた。

「理亞……さん？」

青く、分厚い装甲に覆われた身体。頭部にはクワガタを連想させる角が2本備わっている。両手には自然と生成された剣らしいものが握られていた。

「『スタツグハードスマツシュ』……お前の新しい力だ」

「これで……ルビィが助けられるのよね……？」

「それは、お前のやり方次第だな。……というのも、しばらくしないうちに東都と北都の全面戦争が始まる。チャンスがあるとすればそれぐらいだろうよ」

スマツシュの姿を解除し、ヒトへと戻った理亞は、手元に残ったフルボトルを見つめる。

「……ねえ、このこと姉様には言わないでくれる？」

「……………え？」

ダイヤと視線を合わせた理亞は、弱々しい声でそう言うと、逃げるようにその場から駆け出しては校舎へと戻っていった。

「さて、お前は どうする？」

「……………」

「囚われの妹を自分の手で助けに向かうか……………それとも妹の親友を戦わせて、自分は指をくわえて見ているだけか」

「そんな……………私は……………!!」

口ごもるダイヤに追い打ちをかけるように、スタークは彼女との距離を詰めていく。
「選ぶのはお前自身だ、黒澤ダイヤ。お前は妹を救いたいんだろう?……………なら、道は一つだ」

「……………わた、くしは……………」

——
お姉ちゃん!

ある日の妹の笑顔が頭に浮かぶ。
ダイヤの慎重な思考を壊すのに、それは十分すぎるものだった。



「お断りします」

薄暗い部屋の中心から発せられた声がこだまする。

黒澤ルビイは強い意志の宿った瞳を見せながら、北都首相からの申し出を拒んだ。

「……我々の仲間になる代わりに、東都の仮面ライダーの命は保証してあげると言っているのよ？ 悪い話じゃないと思うけど？」

「その必要はありません」

揺らぐ素振りを見せないルビイにしびれを切らしたのか、首相は徐々に語気を荒げていく。

「……あら、そちらの教師が殺されてもいいということかしら？」

「キリ才先生は……あなた達なんかに負けたりしません、絶対に」

「……っ……！ 本当にそうかしら？ 以前の戦果を見るに、そちらがグリスに勝てる確率はゼロに等しいのよ？」

「大丈夫です。………信じてますから」

頑なに首を縦に振らないルビイを見て、ついに来沢首相は露骨に顔を歪めた。

「……いいでしょう、いずれ後悔させてあげる。行くわよ鷲尾さん。……グリス、見張りはあなたに任せるわ」

「……ああ」

風華と首相が部屋から出て行くのを確認した後、タクミは改めて拘束されているルビイへと視線を移した。

（……………ルビイちゃんと、2人つきり）

ごくろ、と喉を鳴らすタクミだったが、すぐに自分の立場を思い出しては乱れていた姿勢を正す。

「あ、あのー……………これ、解いてくれたり……………しませんよね？」

「もちろ——つ!!んん……………ゲホンゲホン!!!」

「え?」

「……………ダメに決まってるだろ。俺が見張りとして立っていることを忘れるな」

「……………理亞ちゃんの、友達だよな? 前に私のファンだって……………電話で……………」

(覚えててくれたっつ!)

推しに認知されていたことを知り、一気に脈拍が上がるタクミ。

(マジか……俺なんかのこと覚えててくれたの……!!?なんて真摯な……!!好感度カンストですぞオ!!くっそ嬉しい生きててよかった……!!)

表情を緩めるタクミだったが、すぐに我に返って厳格な態度を装おうとする。

……そうだ、下手なことをするもんじゃない。彼女を解放して……その後はどうするっていうんだ?

反逆者として罰せられるだけならまだいいが、グリスの資格を剥奪される可能性だつてある。そうなれば……この手で戦争を終わらせるといふ願いは永遠に叶わない。

「どうしてこんなところで働いてるの?どうして学校を襲ったの?……どうして……ルビィを攫ったの?」

ルビイが悲しげな目でそう問いかけてくる。

憧れの人物に嫌われたくないという気持ちも確かにあったが……この時タクミは、それよりも罪悪感で押しつぶされそうになっていた。

彼女の質問のなかで、唯一答えられるものだけを選び、口を開く。

「……こっちの技術で、人体から完全にネビュラガスを抜くことができないか……色々探ってみたんだ」

「……え？」

「けど駄目だった。軍の研究者に聞いても、一度ガスを注入された者をヒトに戻す方法はない……って、そう言われたんだ」

「それじゃあ……ルビイのために？」

連れてきた時点では咄嗟だったのは確かだ。

政府へ連れていく前に東都ヘルビイを返すことだつてできた。それをしなかったのは……彼女からガスを抜くことができないかを確かめるため。

結局政府の関係者に見つかつて、彼女は捕虜として捕らえられてしまったが……。

「巻き込んじゃまって……悪いとは思ってる」

「そっか。……優しいんだね、君も」

目の前の女の子一人すら満足に救えないなんて……。

ふつと綻んだ笑顔を見せたルビィを見て、自分の情けなさに心底腹が立った。



高海家地下室に位置する研究室。

千歌達が寝静まったのを待ち、キリオとリュウヤは来たるべき北都との戦いに備えて装備の最終調整を行っていた。

といっても、作業しているのはキリオのみで、リュウヤ自身は後ろでその姿を眺めているだけだ。

「おい万丈、これ」

「あ?」

キリオがおもむろに渡してきた物を確認する。

以前彼に預けたスクラッシュドライバーが、再びリュウヤの手に握らされていた。

「お前、これ……………」

「俺達のドライバーじゃ限界があるかもしれない。……確実にグリスを仕留めるためだ、念のため持っておいてくれ」

「……………そこまでして、あいつを倒したいのかよ?」

スクラッシュドライバーを使えば、より好戦的な気質が表に出てしまう。だからクロードドラゴンを作り、リュウヤが安全に戦えるようこれまで工夫してきた。

今のキリオはそれすらも割り切っているようだった。

「今までの主張を全部ひっくり返してまで……グリスを倒したいって言うのかよ!？」

「なんだ、やっぱり使うのが怖いってか？」

手のひらを差し出してきたキリオが、いつも通り軽薄な口調で言う。

「なら別に無理して使わなくてもいいさ。これまで通り俺が持つとくよ。いざとなったら俺がそれを使って——」

「……いや、断る」

「へ？」

「これは俺の物だ。……お前には使わせねえよ」

「……つたく、最初からそう言いなさいよ」

ため息をついたキリオが回転椅子ごと背を向ける。

（……ふざけんな、誰が使ってやるかよ）

リュウヤはドライバーを強く握りしめ、キリオと出会った当初のことを思い出した。

いつだって彼は千歌達や自分への気遣いを忘れなかった。仮面ライダーとしてじゃない、1人の大人として正しくあろうとしてた。

自分達は兵器じゃない。そう言ったのはキリオ自身じゃないか。

彼が正気に戻るまでは――

（たとえどんなことがあっても……俺はお前の言いつけを、絶対に守り通してやるからな）

第28話 聖なるジャッジ

午前5時前の早朝。

十千万の地下にある研究室は、普段より一層神妙な雰囲気を充満させていた。

「万丈——おいコラ二度寝すんな、起きろ馬鹿」

「うえーい……………」

（二日酔いのおっさんかこいつ…………）

今日は重要な任務——北都侵攻作戦を実行する日だ。

集合時間までまだ時間があるが……………今のうちにここを出ておいたほうが〃面倒なこと〃は避けられる。

「ほら自分で立て。ベルト、忘れてないだろうな？」

「ああ…………」

まだ臉を重そうにしているリュウヤの肩を担ぎながら、キリオは自らもビルドドライバーを持っているか今一度白衣の中を確認した。

「…………よし、行くか」

2人で地上へと繋がる扉を開こうとドアノブに手をかけたその瞬間、

「……………千歌」

まるで待ち構えていたかのように、1人の少女によつて一足先にそれは開けられた。

「おはようキリオくん。……………本当に行くの？」

「ああ、黒澤妹を助けにな」

いつの間にかはつきりと覚醒していたリュウヤがキリオの腕を解き、「先に外出てるぞ」とだけ言い残して気まずそうな表情で去っていく。

「やつぱり……………戦うしかないのかな」

「残念だがそうなるな」

これからキリオが何をしようとしているか、彼女はわかっているのだろう。

千歌は必死に泣き出しそうになるのをこらえながら、キリオと視線を合わせている。

「もつと早くにこうしていればよかったのかもな。……………そうすればお前達が……………傷つくことなんて、なかったのに」

「……………ううん、それは違うよ」

「……………？」

「だって——そんなことしても、キリオくんが傷つくだけじゃん」

彼女はかすれた声音でそう言った。

ああ、まただ。また何を言えればいいのかわからなくなってしまった。これだけはどれだけ修正してもしきれない。

「あ——」

「……う・キリオくん？」

なぜだろう、視界が赤い。知らない感情が湧き上がってくる。

「なあ千歌、俺は……俺はどうすればいいと思う？」

自然と口に出ていたのがその質問だった。

戯言を。そんなものは自分で決めろ、とキリオ自身なら言うだろう。そうわかっていても問わずにはいられなかった。

誰かに自分は間違っていないことを証明してもらいたかったのかもしれない。

「わからないよ。……私はキリオくんみたいに頭がいいわけじゃないし。これまでみんなにいつばい迷惑かけてきたから……こういう時にこうすればいいって………言える自信もなくしちゃった」

俯き加減でそう答える千歌。

ベストな回答だ。だが同時に悲しくもある。

千歌は教え子として他の生徒よりもキリオの影響を受けすぎている節がある。彼の合理的かつ不器用な面が彼女にも現れてしまっている。

そうなったのもキリオ自身の責任だ。

「……悪いな、変なこと聞いて」

「でも！」

「……？」

「でもね………私が『こうなったらいい』っていう……願い事ならあるよ」

千歌の横を通り過ぎようとした途端、彼女を肩を震わせながらキリオにそう切り出した。

「キリオくんには………誰かの命を奪うようなことは、して欲しくない。みんなの正義のヒーローでいて欲しい……！」

雫を溜めた瞳で千歌がそう伝える。

キリオは目を伏せ、逃げ出したい気持ちで一心になりながらも口にした。

「……………いつてきます」

「……………いつてらっしゃい」

背中に感じる視線は、これまで戦った敵から受けたどんな攻撃よりも痛かった。

「君から申し出を受けた時は驚いたよ。あれだけ戦争に否定的だった君がね」

「時間が惜しい。早く軍を動かしてください」

「わかつているさ、約束は果たすとも。黒澤ルビイくん……だったかな？ A q o u r s
というスクールアイドルはもはや東都の宝といってもいい。協力は惜しまないよ」

どこか含みのある言い方でそう語る塔野首相。

キリオはリュウヤと共に、無数に整列しているガーディアン達の先頭に配置されてい

た。

「万丈、悪いがお前は隊列と一緒に正面突破で頼む」

「お前はとうするんだ？」

「……いざ戦闘が始まれば、軍と軍の衝突で乱戦になるだろう。その隙を見て俺は単独で北都政府の官邸へ向かう」

「 그리스 に遭遇したらどうすんだよ？ 今のお前じゃ1人で奴に勝つのは難しいだろう？」

「それは——なんとかするさ」

「大丈夫かよ……」

「とにかく黒澤妹を確実に助けるには少数で動いた方が断然いい。なるべく戦闘は避けるようにする」

「……本当だな？」

「ああ」

キリオの言葉を聞いて胸をなでおろすリュウヤ。

しかし——こちらが戦闘を避けるつもりでも、向こうからやってくる場合だってある。

その時は——

(……………千歌)

●●●

「あ、善子ちゃん！」

「リリー、鞠莉」

難波高校の中庭でぼうっとくつろいでいた善子だったが、校舎の方から駆け寄ってきた梨子と鞠莉を見て我に返る。

「どうしたのよそんなに急いで？」

「実は……私達3人と、Bernageの2人だけでも、何かライブみたいなことはできないのかなんて思ってた……」

「いいじゃないそれ！……って、どうして私に黙ってたのよ！」

「Stay cool、善子。ついさっき、私と梨子で思いついたことなの」

「ああ、そう……」

「でもね、校内のどこを探しても……ユイちゃんとミカちゃんがいなくて……」

『聞こえているか?』

「ああ」

キリオとリュウヤの腕に巻かれた金属製バンドから塔野首相の声が聞こえる。

政府から支給された通信機だ。今回の作戦ではここから流れる指示を聞いて動くことになる。

「さっき言った通り俺は単騎で動かしてもらおう。指揮は万丈に伝えてくれ、こいつに務まるかはわからないけどな」

「いちいちムカつかせるなお前」

『いいだろう、目的を果たした後でこちらに加わってもらえれば問題ない』

リュウヤは軍用車で大軍と共に移動中。キリオは1人マシンビルダーに搭乗。

既に北都の連中もこちらの動きに気付いているだろう。迎撃行動が始まるのも時間の問題だ。

「健闘を祈るぜ万丈」

『本当に大丈夫なんだろうな?』

「俺より自分の心配をしろガキンチョ」

そう言うときリオは車体の進行方向を変え、隊列から徐々に離れていく。

(……ある程度進んだらそこでニンニンコミックに変身して……あとは隠密行動を……)

正直言つて今回の作戦が成功するかは……自分達の力量にかかっている。

軍隊と軍隊の戦いではお互いにほぼ互角。勝敗を決するのはやはり——仮面ライダーの力だ。

「今は信じるしかない」

自分が正しいということを信じるしかない。それしか――

「……………」

廃れた畑のような道をしばらく進んでいくと、奥の方で何者かがこちらを見つめながら立っていることに気がついた。

その人物から数メートル離れた場所でマシンビルダーを停車させ、キリオはヘルメットを外す。

「何しに来了。今はお前に構ってる暇はないぞ――スターク」

「フッフ……相変わらず冷たいねえ」

組んでいた腕を大きく広げ、心底嬉しそうな様子を見せるコブラの戦士。

「今回はお前の味方をしに来たんだよ。オレとしても、北都に好き勝手やられるのは回避したいんでね」

「信用するとでも?」

「あー、わかってるよんなことは。……………だからブツだけ渡しておく。オレは戦争に加わる気はない」

ひゅつ、とスタークは懷から取り出した物をキリオ目掛けて放り投げた。

赤い、カーブがかかった形状の中心には大きくメーターらしきものを取り付けられている。

「これは……………」

受け取った物を見つめ、キリオは問う。

「“ハザードトリガー”……………そいつをビルドドライバーに挿せば、今までよりもずっと強い力が手に入る」

「強い力……………」

「まあ多少デメリットがないわけではないが……………今のお前がグリスを倒すには、そいつを使うしかないだろうな」

じつと渡されたそれを見つめ、キリオは数秒考えこむような仕草を見せる。

これまでの戦いから考えて……………スタークはネビュラガスの扱いが飛び抜けて上手い。奴が使用しているブレードや銃も、ガスを自由に扱えるように設計されているのだから。

で、あれば……………このアイテムの効果はおそらくグリスと同じように——
「そう心配するな。別に使ったからといって死にはしない」

「だろうな。使用者の寿命が削れるアイテムなんて……発明品としては二流もいいところだ」

スタークがそういった物を作らないと断言できないのも確かだが……今はそれよりも気になることがある。

「おいスターク………お前まさか……ビルドドライバーの構造を理解しているのか？」

「んん……？」

そうだ。このアイテム……ハザードトリガーは明らかにビルドドライバーでの使用を想定したものだ。

「それだけじゃない……スクラッシュユドライバーや……お前が使っている銃や剣………いったいどこでその技術を手に入れたんだ？」

「おっと、甘く見てもらっては困るな。これでもオレは、あんたに負けないくらい “天才” だと自負しているんでね」

「仮にそうだとしても………短期間であんな物を作るには、それなりの設備や人材が必要はずだ!!」

「それ以上はノーコメントってことで。……じゃあな、せいぜい頑張ることだ」

「……! 待てッ!!」

黒霧に包まれて消滅していくスタークを睨む。

誰もいない空を見据えつつ、キリオは再びマシンビルダーのエンジンをかけた。

（……間違った、奴には“協力者”がいる）

それもとてもし大きな。

スクラッシュドライバーなんて高度なシステムを短い間で完成させるには……それこそ難波重工のような大企業からのサポートが必要だ。

そしてスタークは……この国における、何か強力なものの陰に潜んでいる。

（この国で……今影響力のあるものに……奴は身を隠している）

大企業へのパイプ……政府か、軍か。……いや、どちらもピンときてくれない。

（……………くそっ）

考えたくない選択肢が脳裏をよぎる。確かに一度は考えた可能性が。

だがそれが意味するのは――

「……………そろそろ、覚悟を決めなきゃいけない時なのかな。——俺も、お前達
”も」

第29話 禁断のトリガー

『キリオくんには……………誰かの命を奪うようなことは、して欲しくない。みんなの正義のヒーローでいて欲しい……………！』

1人の青年にそう伝えた少女の顔は、とても儂げに見えた。

少年——万丈リユウヤは2人のやりとりを思い出し、考える。

戦兎キリオという人物がこれまで築いてきたもの。彼にとって守りたいと願うものは、自分にとってのそれとは似ているようで全く違う。

自分は葛城ユイや氷室ミカ、2人の頑張りを踏みにじった奴らが許せなかった。だから自らの身体が傷ついたとしても、彼女達の無念を晴らそうとしていたんだ。

けど…………キリオはその真逆。彼にとって守りたいものとは、あくまで“自分の一部”だけなんだ。

そのためなら例え国を巻き込んでもいい。そういう思考を持った人間だ。けれどそれは大きな矛盾を生むことになる。

キリオがAqoursのメンバーを守るために人を殺めようとするならば……………彼が

人を傷つけることを嫌う千歌達のためにはならない。

他人の幸福が自分のためになると言った彼の目的は果たせなくなる。

(……あいつ、自分でもどうすればいいかわからないんだ)

東都の兵士達に囲まれた車内で、リユウヤは強く拳を握る。

まるで負担をかけすぎてバグが起きてしまった機械のようだ。このままいけばキリ才はほぼ確実に崩壊してしまう。

……そんなのは嫌だ。ユイ達と同じように……これまで頑張ってきた奴らが、他人の悪意のせいでめちやくちやになってしてしまうなんて。

(俺が………もつとしっかりしねえと)

「……………!あれは……………!?!」

「……？」

1人の兵士が窓から身を乗り出し驚愕する。

遠方から近づいてくる落下音。徐々に大きさを増していくそれに悪寒を感じたりユウヤは、すぐさまビルドドライバーを装着。

「警戒態勢!!」

「ぐっ……!!変身ッッ!!」

直後、隊列の先頭にいた車両——リュウヤが搭乗していた軍用車めがけて何かを着弾。凄まじい爆発を引き起こした。

「がはっ……!!」

間一髪クローズへの変身が間に合ったリュウヤは、炎上した車両の中から吹き飛ばされるかたちで外へ飛び出した。

「爆弾……いやミサイル……!!?もう北都軍の射程内にいるってことか……!!?」

「次弾くるぞ!!」

「——!!」

隊の指揮をとっていた男がそう叫ぶ。

リュウヤは瞬時にドライバーのレバーを回し、地面を蹴った。

《ドラゴニックファイニッシュ!!》

「らああああああッッ!!!」

蒼炎をまといせ振り上げた足が飛来した弾頭に炸裂。東都軍に到達する前に空中で爆発させた。

リュウヤは着地した後、次に備えて体勢を立て直しつつ……………数分前に見送った青年の後ろ姿を思い出す。

「……………始まっちゃったのか……………」

●●●

「なんの騒ぎだ……………」

猿渡タクミは部屋の外から感じる慌ただしい雰囲気^{きふき}に意識を傾けた。

首相へ連絡を入れようとした矢先、腕に巻いてあった小型の通信機が仄かに赤く発光する。どうやら向こうから先にかけてきたみたいだ。

「……さつきから一体なんだってんだ？」

『東都が攻めてきたのよ。どうやらそちらのお嬢さんがよっぽど大事みたいね』

「俺はどうすりやいいんだ？」

『あなたはこの官邸を守りなさい 그리스。……東都軍など、私達の敵じゃないわ
「了解」

ふつと安心するようにため息をついたタクミが通信を切ろうとしたその直後、

『……？この反応——』

「……？どうかしたのか？」

『……！警戒なさい 그리스！そっちにスマッシュの反応が……!!』

「なっ……スマッシュだあ……!!？」

警告を受けてすぐに周囲を確認するタクミだったが、この部屋にいるのは自分と拘束されたルビィのみ。

スマッシュなんてどこにも——

『これは……まさか上空から——!!？』

「うっ……!？」

刹那、薄暗い部屋の壁に巨大な風穴が撃ち抜かれた。

「ぐおおおお………っ!？」

「きゃあっ………!？」

空気の流れに思わず身を仰け反らせる。

反射的にルビイが縛り付けられている椅子の前に立ち、砂埃が舞う前方を睨んだ。

敵の襲撃であることはすぐに理解できたが………まさか、空を移動して一気に官邸までやってきたっていうのか？

どうやってこの場所を突き止めたのか知らないが………目的は十中八九ルビイ。ならおそらくやってきた相手は——

「ビルドか………!？」

スクラツシユドライバーを装着し、スクラツシユゼリーを構える。

大丈夫だ。戦兎キリオと比べればこちらの方がハザードレベルは上。加えてベルトの性能もスクラッシュの方が強力だ。

こちらに負けの芽はない……！

「……あいつの言ってたことは、本当だったみたいね」

「え？」

先ほどの衝撃でできた砂埃の煙幕が薄れ、二つの人影が歩み寄ってくるのが見えた。予想もしていなかった人物。

「あ……………」

タクミは目の前に現れた人間を認識した途端、言葉を失ってしまった。

「理亞……それにダイヤさんも……どうして……」

左右で一つずつ結んだ髪が印象的な少女に、自分が慕っていた黒澤ルビイの姉――

鹿角理亞と、黒澤ダイヤの姿がそこにあった。

「〴〵どうして……だつて？」

それはもはやかつての友人を見るような瞳ではなくなっていた。

ダイヤもタクミの腰に巻かれたベルトを見るなり絶句する。

「……それはこっちの台詞よ。……ねえ、教えてよ、いったいいつから私達を騙してたの？」

「だま……す？」

頭が漂白されて何も考えられない。

どうして2人がこんなところにいる？なぜ自分達は対峙しているんだ？

「私だけじゃない……姉様も、ダイヤも……！　いったいどれだけの人を悲しませたと思ってるのよ!!」

もう自分が何者であるのか知られてしまっている。……そう気がつくまでにしばらくの時間が必要だった。

「私と姉様に取り入って……ルビイの情報を掴むためにマネージャーになんかなって……！」

「ち……っ……違う!!」

必死に弁解しようと試みる。

しかし最初に出てきた否定に続いたのは……あまりにも“足りなすぎる”言葉だった。

「俺は……俺は……理亞や、聖良さん……北都のみんなのために——！」

「ふざけないでよッッ!!」

目に涙を溜めた理亞は、その憎悪に満ちた瞳でタクミを射抜いた。

「……………どいて」

「……………」

理亞がタクミを軽く突き飛ばしながら横を通り、先ほどの衝撃で気絶してしまったのか、意識のないルビィを縛っている拘束具に手をかける。

「——ッ!!」

到底ヒトの力とは思えない腕力でそれを断ち切った理亞は、ダイヤに彼女の身を預けた後で再びタクミと目を合わせた。

「理亞……！」

「……………」

今度は何も言わずに、彼女はおもむろに一本のボトルを取り出して自らの腕に突き刺した。

「なっ……!!?」

続いてダイヤも同じようにフルボトルを取り出す。

みるみるその姿を変貌させていく2人を見たタクミの両手の力がだらりと抜けていく。

フクロウとクワガタを思わせる2体のスマッシュに……彼女達は変身したのだ。

「待ってくれ……!! 理亞!!」

伸ばした手が届く前に、ダイヤが変身したフクロウハードスマッシュが翼のような巨腕を振るった。

「……………友達だと、思ってたのに……!!」

一言そう言い残した後、壁の穴から脱出し遠ざかっていく。

『——やっとな繋がったわね。いったい何が起きたの!?!』

通信機から聞こえてくる声など耳に入るわけがなかった。

(……………ああ)

もう、本当に取り返しのつかないことになってしまったんだ。

人を殺め、大切な友達をも裏切った。

……いや、もつと前から。仮面ライダーとしての運命を歩んだ時から……この結果は決まっていたんだ。

全てはこの北都のことを想ったことだった。そうだ、だから仕方がない。

——仕方がないじゃないか。

『なに……今度は仮面ライダー……?! 単騎で攻めてきたですって?! 前線はなにをやっているの!!』

しばらく立ち尽くしていたタクミは、床に落ちていたロボットスクラッシュゼリーを再び拾い上げた。

『グリス!! そっちはもういいわ!! 今すぐ下に降りてきなさい!! ビルドを血祭りにあげて

やるのよ!!
』

「く……うつ………!」

《ロボットゼリー!》

「うあああああああああああッ
ッ
!!!!
」

——俺に残っているのはもう………

《潰れる! 流れる! 溢れ出る!!》

《ロボットイングリッド! ブラア!!》

「心火を……燃やして………!!
」

——戦^こいだだけだ。

「ぶつ潰す……!!」

●●●

《ゴリラ!》

《ロック!》

「はあああああッ!!」

北都のガーディアンを鎖でまとめて縛り上げ、動きを封じた後でゴリラの腕で強烈な一撃を放つ。

（やっぱりな……北都の軍は 그리스 に頼りきりな状況）

ガーディアンに関してはビルドドライバーで問題なく対応できる。

それに他の兵力も予想を下回っている。軍事に関しては東都とさほど変わらないと踏んでいたが……どうやら、奴らの経済状況はこちらが思っていたよりも深刻らしい。

キリオは辺りを見渡し、敵が残っていないことを確認すると、ドライバーに装填されていたボトルを引き抜いた。

《ラビット!》

《タンク!》

《ベストマッチ!!》

「さて、とつとと黒澤妹を探して——」

《スクラップファイニッシュ!!》

《ボルテックブレイク!!》

上空から迫り来る黄金色の戦士を捉え、ギリギリのところで取り出したドリルクラッシュャーへロックフルボトルを装填。

大量に生成した鎖で盾を作り、奴の蹴りを防御しようとするが——

「ぐっ……………!!」

受け止めきれずに後方へ吹き飛ばされてしまう。

受け身を取り、地面を転がりながらドリルクラッシュャーを銃形態へと変形させ、牽制。

「……ッ!!」

それを意に介さず距離を一気に詰めてきた 그리스。

一直線に飛んでくる拳を胸部に喰らい、今度は勢いを殺せずに地を這ってしまう。

(なんだこのパワー……!?)

以前戦った時よりも格段に強くなっている。ハザードレベルが上昇したのだろうか？

「はっ……ここで決着をつけるつもりか?」

「俺達は互いにそれを望んでる。………そうだろ、東都の仮面ライダー……?」

異様な空気をまとう 그리스は、確実にキリオを殺すつもりでかかっている。

何があつたのかは知らないが、以前よりもスクラッシュドライバーを使いこなしているようだ。

——さあ、どうする?

確かに 그리스に対抗する策は考えてきた。

……だがそれは、これまで手に入れてきたボトルを連続使用して、現在判明しているベストマッチ形態で奴を押し切るという手間のかかる小細工に過ぎない。

以前の 그리스 ならいざ知らず、今の奴に通用するかどうか――

――何を言っているんだ。より確実な方法があつたじゃないか。

「……………」

頭の中に浮かんでくる、最適な答え。

（そうだ、俺は……………なんとしてでも、こいつを排除しないといけないんだ）
キリオの瞳が仮面の下で赤く光る。

「覚悟決めろオラァ……………!!」

グリスがこちらへ向かつてくる。

奴を倒す。……………倒して、千歌達を守らないと。

「俺がお前を倒す。……………例え、この身をかけてもな」

——
さあ、

——
使え。

《ハザードオン!》

「……………!?!」

うつすらとノイズがかった電子音が響く。

キリオはスタークから受け取ったアイテム……………“ハザードトリガー”をビルド
ドライバーへと突き刺した。

《ラビット!》

《タンク!》

《スーパーストマッチ!!》

《ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!》

《Are you ready!?》

「…………ビルドアップ」

鑄型のようなフレームがキリオの前後に形成され、彼の一言でその身体を一瞬で挟み込む。

やがて黒い煙と共に……“それ”は現れた。

《アンコントロールスイッチ！ブラックハザード!!》

《ヤベーイ!!》

ラビットとタンク……赤と青の複眼のみを残し、全身は汚染されたかのような黒一色。

刺々しい外見から不気味な雰囲気を漂わせているそれは……ビルドの新たな形態。ラビットタンクハザードフォーム。

「おおおおおおおッ
!!!!」

金色と黒。二つの拳が凄まじい衝撃と共に交わった。

第30話 涙のヒストリー

——この世に生まれ落ちてきて、最初に出会った少女の顔を覚えている。

「こんなところで寝てたら、風邪ひいちゃいますよ。ほら、起きて起きて」
頬に伝わる砂の感触。

何もわからない。己のことでさえ。

そんな自分に、少女は何をすべきか教えてくれた。

「記憶喪失？」

「らしいのよねえ……どうしようかしら？」

「たぶん外国の方……だよな？ 髪白いし……」

困ったような表情を浮かべる女性達に囲まれ、頭のなかを探りながらただじつと時間が過ぎるのを待っていた。

「じゃあ、どこのお家に住んでたか思い出すまで、ウチにいたらいいよ」

「バカ千歌、そういう問題じゃないの」

確かそこで、「千歌というのか、君の名前は」と尋ねた気がする。

その幼い矮躯で大きなアクションを繰り返していたのがとても印象に残っている。

「うん！—— あ、そうだ！ みかん食べる？」

差し出された鮮やかな色の物体を受け取り、どうすればいいかわからずにそのままかぶりついた。

忘れるわけがないとも。……みかん、オレンジ、エレメント橙色の果実。

——初めて取得した、自分を形作ってくれる成分。



きんきんとした耳鳴りが頭のなかを何度も反響する。

拳の感覚がなくなってもただひたすら向かってくる敵を殴り続ける。

「――！」

幾度も、幾度も、幾度も幾度も幾度も。

加減する必要なんかない。奴は自分にとって不要な存在なのだから。

だから――

「なぜだ……!?なぜ攻撃が通らねえ………!!」

狼狽する金色の戦士を捉え、その打撃をいなしながらカウンターを叩き込む。

「がっ………!!」

「消えろ」

《ガタガタゴットンズタンズタン!ガタガタゴットンズタンズタンズタン!》

《Ready go!!》

《ハザードアタック!!》

禍々しいオーラを足へと宿し、遠心力を活かした回し蹴りをグリスへお見舞いする。

「ぐああああアツ………!!」

数十メートル先まで吹き飛ばされたグリスを一瞥した後、キリオは腰に巻かれたドライバーに挿入されている物へと視線を落とした。

——「ハザードトリガー」……スタークから渡されたビルドドライバー用の強化アイテム。

一時的なものだろうが、自分のハザードレベルが急激に上昇していくのを実感できる。なるほど、確かにこれならグリスを圧倒できる。

だが油断はできない。今の自分はおそらくネビュラガスを注入しながら戦っているのと同義。スタークの言う「デメリット」とやらがわからない以上、短期決戦を狙うのが賢明だろう。

「がはっ……！ゲホッ！！ゲホ……ッ！！」

「……まだ動けるとはな」

「デメエ………そいつをどこで手に入れた……！？」

「あ………？」

よろよろと立ち上がったグリスがハザードトリガーを指しながら問う。

……逆にどうして奴がコレの存在を知っているのか聞きたいところだが、

「お前が知る必要はない」

「へっ………イキってんじや………ねえぞ………っ！！」

《シングル!》

《デイスチャージボトル!》

《潰れな〜い!》

腕に装着されたツインブレイカーとドライバーへ、合計2本のフルボトルを装填したグリスが再度突撃してくる。

右手からプロペラ状に変形させたヴァリアブルゼリーを噴射し、それを前方に構えながら突進してきた。

ツインブレイカーからは棘いばらのようなものを伸ばし、こちらへ振るおうとしている。

(……………身体が軽い)

なんだかとても頭が冴えている。今ならなんでもやれる気がする。

《タカ!》

《ガトリング!》

《スーパーストマツチ!!》

「ビルドアップ」

《アンコントロールスイッチ!ブラックハザード!!》

《ヤベ〜イ!!》

ボトルを交換し、装甲を換装しつつ武器であるホークガトリングーを取り出す。

眼前に迫るプロペラの回転から逃れるために背中からタカの成分を使った翼を形成。真上へと飛翔する。

「そうくると思ってたぜ……！」

「……！」

急遽身体を捻ったグリスがそのまま片腕を上空に向かって大きく振り回し、ツインプレイカーから伸びたツタでキリオを拘束した。

「リアッツ!!」

「……………」

キリオが地に叩き付けられ、同時に巨大なクレーターが出来る。

この隙に仕切り直しを図ろうとするグリスだったが……………。

「ぐっ……………!?!」

距離を取ろうとした直後に無数の弾丸が全身へと撃ち込まれた。

「遠距離攻撃……………このためにボトルを変え——」

「逃がさない」

地面を後ろへ蹴り上げる。

クレーターのなかにさらに巨大な穴を作りながら、漆黒の戦士がミサイルの如き速度で前へと跳んだ。

《ラビット！》

《タンク！》

《スーパーストマッチ!!》

再びラビットタンクハザードへとフォームチェンジを遂げた後、左の拳を一気に引く。

詰めだ。このまま空いた右手でベルトのレバーを回せば必殺技が発動し、その直後に左手の拳が奴の頭を吹き飛ばすことだろう。

あの体勢から防御には移ることは不可能。渾身の衝撃は 그리스へとフルに伝わり――
奴は確実に死ぬ。

(これで……戦争が終わる……っ……!!)

그리스さえいなくなれば北都の軍はあつという間に崩壊する。そうなれば東都の勝利は揺るぎないものになる。

晴れて平和な世界が戻ったことで、また千歌達が笑顔でスクールアイドル活動ができるというわけだ。

(この国の平和を……俺の手で取りもど――)
刹那、

(あ……………?)

グリスに到達するまで残り数メートル。そんな時のことだ。

キリオの方から、1本のフルボトルが宙へ放り投げ出された。

ホルダーから抜けてしまったものだろうか。これだけ激しくやり合っていたのだからあり得ないことではないが。

まあいい、後で回収すれば……………。

「」

そのフルボトルを視界の中心に捉えた瞬間、キリオは自らの足が悲鳴をあげるほどの力を振り絞って、グリスへと向かっていた身体を静止させた。

(みかん……………)

オレンジ色を煌めかせている1本のボトル。

キリオが唯一戦闘に用いたことがない、1人の少女がくれた思い出がこもったボトルだった。

——『キリオくんには……………誰かの命を奪うようなことは、して欲しくない』

「あ…………ぐ…………！」

——『みんなの正義のヒーローでいて欲しい…………！』

「くつ…………！そおおおおおオオオオオオオツツ！！！！」
行き場を失った拳を地面に思い切り叩きつける。

凄まじい衝撃波がコンクリートを粉碎し、黒い腕が地中を貫通する。

「うわっ…………！？」

キリオが持てる全ての力を注いで放った一撃は、その余波ですらグリスの身体を大きく仰け反らせ、尻餅をつかせるほどの威力を備えていた。

（落ちて着け…………！なにが違う…………！——俺は何をしようとしていた…………！？）

ダメだ、人を殺すのはダメだ。そんなことをすれば千歌達が――
だが奴を始末しなければ戦争は……………!!

「いつ……………!!?」

ズキリ、と太い針で刺されたような痛みが頭部を駆け巡る。

身体が燃えるように熱い。制御が効かな――

（まずい……………長く使いすぎたか……………!!?早くトリガーを抜かないと――）

突然襲ってきた正体不明の頭痛に底知れぬ恐怖を覚えたキリオは、すぐさまハザードトリガーを外そうと手を伸ばす。

……………しかし、

「――」

●●●

「……………ん」

やけに騒がしい雰囲気を感じ、黒澤ルビイは重い瞼をゆつくりと開けた。

「ルビイ!」

「お姉ちゃん……………?」

目が覚めたルビィに最初に気がついたのは姉であるダイヤだった。

強く抱きしめてくる姉の背中に手を回しながら、ルビィは周囲の状況を確認する。

「ルビィちゃん、大丈夫ずら……？」

「痛いところとかない？」

こちらを覗き込みながらそう尋ねてきたのは花丸と果南。

よく見れば今いる場所は政府の官邸でも部室でもなく、体育館の中だった。

避難所に指定されたからなのか、自分達の他にも多くの一般人が流れ込んできている。

「あれ……？どうなってるの……？」

「聖良さん達の学校ですわ」

「まさかルビィが捕虜として捕まってたなんて……」

「東都軍の人達が助けてくれたからよかったけど……危ないところでしたね」

胸をなでおろす聖良達を尻目に、ルビィは落ち着かない様子で視線を泳がせていた。

「もう大丈夫よ、ルビィ」

穏やかな笑顔でそう笑いかけてくる理亜と目を合わせる。

「理亜ちゃん……さっきのは……？」

「しーっ……私とダイヤ……それにルビィがスマッシュになっちゃったことは内緒

ね」

「う、うん……」

頭がぐらぐらする。

数時間前に何があったのか、まだよく整理できていない。

理亜の顔から視線を外すのと同時に、ルビイの脳裏に1人の少年の姿がよぎった。

「そうだ……！タクミくんは……!?」

「……！……あんな奴、もうどうでもいい。ルビイを狙って私達に近づいたりして……！」

「そんな……！……違うよ理亜ちゃん！タクミくんはルビイのことを助けようとしてくれたんだよ！」

自分の聞いた話と食い違っていることに気がついたルビイは、すぐに理亜へそれを伝えようとした。

「は……？」

「タクミくんは……北都で私の身体を元に戻す方法を探して……！……政府の人達に引き渡すつもりは、本当はなかったって……!!」

突拍子もないルビイの発言に思わず声を漏らした理亜は、困惑に満ちた顔を見せる。

「ちよつと……意味わかんないんだけど……？なによ……それ……？」

『……スーグリス!』

「首相……!」

ビルドと対峙していたその時官邸からの通信が入り、タクミは半分の意識を前に向けたまま、首相の話に耳を傾ける。

『なにをしているの!』

「なにつて……絶賛ビルドの相手をしてる途中だが」

『なんですつて……!?!さっさと引導を渡してやりなさい!!もうとつくに前線は破られて
いる……!!東都の軍が目の前まで迫ってるわ!!』

「なっ……!」

知らされた状況を聞いて、タクミの顔から一瞬で血の気が引いた。
……………やられた。このままでは北都軍は完敗だ。

そんなことになったら……!!

「聖良さんと理亞が——」

自分を睨む少女の瞳を思い出す。

自分に残っているのは、もう戦いだけ。そのはずなのに……………。

（守りたいものは……そう簡単には変えられないってわけか）

ぐつと拳を握りなおし、前方に立つ黒い戦士へと構える。

まだ諦めるわけにはいかない。ここで俺が倒れるわけには——

「なんだ……?」

ビルドは赤と青の複眼をこちらに向けるばかりで、動こうとしない。

明らかにさつきと様子が違——

《マックスハザードオン!》

「ああ……………?」

ビルドドライバーに取り付けられた、ハザードトリガーのスイッチがビルドの手によって押し込まれる。

《ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！》

《Ready go!!》

《オーバーフロー！》

「……………!?」

防御———そう思った時には、既に自分の首元へ打撃が入っていることに遅れて気がつく。

「つ……………!?」

間髪入れずに飛んでくる、驚くほど正確な急所への攻撃の乱舞。

（こいつ……………!!）

「……………」

言葉はいらないとばかりに、掛け声もなしに無言のまま繰り出される拳と蹴り。

人間らしい感情など一切感じ取れない、まるで一種の殺人マシーンに成り果ててしまったかのようにだった。

（なるほど……………これがハザードトリガーの力か……………!!あの蛇野郎ツ!!）

長時間使い続けることにより脳への刺激が限界を超え、一定の時間を過ぎれば理性を失いながらも目の前の相手を殺すことだけを目的とする戦闘兵器が完成する。

奴はこんな物を……自分にも使わせようと――

「がっ……!!」

「――」

鳩尾による一撃が脳天まで響く。

嘔吐しそうになるのをこらえ、必死に敵の動きを捉えようとするが、ビルドはそれすらも許さなかった。

顔面に強烈な蹴りが薙ぎ払われ、脳が揺れる。意識が飛びそうになる。

（ああ、これはダメだ）

死ぬ。直感ではなく体感でそう感じた。

「り……あ……」

「――ろー!」

黒い、とどめの一撃が迫る。

「——めろ!!」

奴は躊躇いもなく、自分の命を奪おうと——

「やめろって言うてんだよ!! キリオオオオオオオオオオオオツツ
!!!」

遠くから飛んでくる、必死な叫び。

青い戦士は、タクミを殺そうとする黒い戦士に向かって——

《Ready go!!》

《ドラゴニックフィニッシュ!!》

蒼炎をまとった蹴りを放った。

第31話 救えドラゴン

「ミカちゃんとユイちゃん……………いったいどこに行っちゃったんだろ」

無駄に広い生徒寮の中をしらみつぶしに徘徊しながら、桜内梨子は困った様子でそうつぶやく。

現在西都にいるAqoursメンバー3人にBernageの2人を加えたライブ……………その企画について相談しようとユイ達を探していた梨子だったが、いくら建物内を歩いても彼女達が見つからない。

ユイとミカは普段から一緒にいることが多い。

まあその点だけを見れば梨子達もそうだが、Bernageの2人に関しては単に仲がいい友人同士というよりは家族間のそれだ。

いつもなら1日に2度3度は必ず彼女達に出くわすのだが……………。

（さすがにまだ寝てるってことはないだろうけど……………一応部屋の方も確認してみようかな）

不気味なくらい静かな廊下を移動する。

時折難波高校の白い制服を身につけた生徒とすれ違うが、梨子のことは特に気にも留めない様子で彼女の横を通っていく。

「確か……」だったよね」

突き当たりの扉の前で立ち止まり、札に「葛城」の文字があることを確認。ゆっくりとドアノブに手をかける。

がち、とロックがかかっている感触が手のひらに走った。

「あれ?」

思わず首を傾ける。ユイはまだこの部屋の中にいるのだろうか。

もうすぐ正午を回る頃だ。そういえばユイは朝起きるのが苦手で、よくミカにモーニングコールをもらうと話してはいたが……。

「ユイちゃん、いるの?」

小さくノックしつつ扉の内側に向けてそう尋ねる。

返事は聞こえない。

「もうっ」

肩をすくませて短い文句をこぼす。

ユイは未だ布団のなかで夢を見ている可能性が高い。

「ユイちゃ——」

先ほどよりも少しだけ声を張ろうとしたその直後。

「……………?」

カチリ、と何かが外れるような音が耳に滑り込んできた。

「ユイちゃん……………」

再びドアノブに触れ、扉を開けようとすると——

「あれ?」

ロックが解除されたのか、今度はあつさりと開くことができた。

「…………ユイちゃん?」

梨子が薄暗い部屋のなかに向けてそう声をかけるが、それに応える者は誰一人としていなかった。

玄関で靴を脱いだ後、フローリングの床へ踏み出す。

奥に進むと良質な絨毯が敷き詰められたリビングが広がっており、同時に甘い香りが鼻をくすぐってくる。

壁際に設置されている棚にはスクールアイドルに関する雑誌やDVDが並べられており、部屋の主のイメージに反してきちんと整理整頓が成されているのが意外だった。散らかっているとすればテーブル横にあるベッドが少し乱れていることぐらいだろうか。

「ユイちゃん、いるんでしょ？」

再度そう呼びかけてみるが、やはりユイからの返答はない。

彼女が留守だとすれば……先ほど鍵を開けたのは誰なのだろうか？

（……私の勘違いで、最初から鍵なんかかかってなかったのかも？）

だとすれば早く出た方がいい。勝手に散策するような真似はよくない。

——こつちだ。

頭のなかで、はつきりとそう聞こえた。

「ええ？」

梨子は反射的に声の聞こえた方向へ顔を向けた。

背後に見える玄関……………確かにそこから声がした。

——ここだ。

自分を呼ぶような、不思議な雰囲気をもとった声色。

気がつけば梨子は玄関まで移動し、懸命にその声を発している“何か”を探った。

(…………あれ、……って…………)

横にあった下駄箱——その一番下段の壁に、不自然な切れ込みがあることに気がつく。

「隠し扉…………？」

軽く切れ込み部分を押し込むと、きい、と軋むような音と共にさらに奥に隠れていた小さなスペースが露わになった。

夜空に浮かぶ星のように、真っ暗な小部屋に一筋の黄金が輝いていた。

「バングル…………かしら…………？」

隠されてあった物をおもむろに取り出し、観察する。

金色に煌めく、電子回路のような変わったレリーフが刻まれている腕輪だ。

「どうしてこんなところに……？」

改めて下駄箱の隠し扉に視線を向けようとしたその時。

「きゃっ!？」

眩い光がバングルから発せられ、それはたちまち梨子の左腕手首に巻きついたのだ。

「えっ……!!? ウソ、なにこれ……!!?」——「え」

急に意識が遠のき、目の前の光景がチカチカと点滅する。

——「すまない。」

頭のなかで主張してくる……しかし不快感はない、弱々しい声。

その言葉を耳にした直後、梨子の視界は暗転した。



——「どうして自分は、こんなにも必死に叫んでるんだ。」

万丈リユウヤは走りながらふと疑問がよぎる。思えばあの日……ユイに誘われ

てBernageとAqoursの合同ライブを訪れたあの日から、全てが変わったんだ。

初めて感じた途方もない怒り。他人のことでこんなにも熱くなれる人間だとはその時まで自分でも知らなかった。

「目え覚ませ！キリオ!!」

「――」

物言わぬ殺戮兵器と化した黒き戦士に向けて立て続けに呼びかけながら、リュウヤは放たれる攻撃の数々を紙一重で回避する。

先ほどの一撃――クローズのドラゴニックフィニッシュをまともに受けたにも関わらず、ビルド奴は動じることなくこちらへ向かってきた。

（意識がねえのに……無理やり戦わされてるのか……!?）

今のビルドにキリオの意思はない。たとえば変身者の骨や内臓が弾けたとしても、この暴威の化身は戦闘行為をやめることはないのだろう。

変身した人間をもパーツにしてしまう……恐ろしいシステムだ。

(ダメだ……下手に殴ればキリオが……！かといってこの状況じゃ手加減もできねえ……っ!!)

リュウヤは全ての意識を費やし、ビルドが繰り出す打撃の防御と回避に専念するが………それも長くは保たない。

きつと根本的なスเปックに開きがあるんだ。

——— けど、

「うおおおおおッ!!」

「———」

ビルドの一瞬の隙をつき、低い姿勢をとりつつ渾身の右ストレートを最も厚い胸部装甲めがけて放つ。

衝撃を殺しきれずに後方へたじろいだビルドから離れつつ、リュウヤは感じた手応えに心のなかでガッツポーズをした。

(まだ間に合う………！スเปック差があるんなら、突破口が開くまで粘ってやらあ………!!) 格闘技の試合だって、そうやって強敵達に勝利を収めてきた。

ビルドの攻撃は急所をターゲットにしているのがほとんどだ。それさえ見切れてしまえば………!!

リュウヤ自身も気づかない間に、彼の身体は現在進行形で急成長していた。

——ハザードレベルという力が。

《ガタガタゴットンズツタンズタン！ガタガタゴットンズツタンズタン！》

《Ready go!!》

《ハザードファイニッシュ!!》

「いっ……!!？」

仮面の下で笑みを浮かべたその刹那、ベルトのレバーを回転させたビルドが先ほどまでとは比べものにならないスピードでこちらへ肉薄してきた。

（はやッ——!!？）

咄嗟に鳩尾の前で腕を組み、黒い一撃を受け止めようとする。

が、想像以上に重い一撃が入り、空気の槍が両腕を貫通して腹部まで到達してくる。

「ガッ………!!」

水切りのように何度も地面へ身体をぶつけながら吹き飛びリュウヤ。

「あ………がはっ………!!」

多少痛み慣れている彼もすぐには立てなかった。
ゆつくりと歩み寄ってくるビルドを睨みながら、リュウヤは必死に思考を巡らせて次の一手を考える。

《ゴリラ!》

《ダイヤモンド!》

《スーパーベストマッチ!!》

「……………ぐっ……………」

無言でボトルを入れ替えながら奴が近づいてくる。

「こんなところで…………死ぬわけにはいかねえんだよ…………!!」

全身に力を込めて立ち上がり、震える足で上体を支えながらビルドと対峙する。

「――」

奴が迫る。これ以上戦いが長引くのは危険だ。

刺し違えてでも、キリオを助け――

「えっ……………!?!」

直後、リュウヤは横からの衝撃で突き飛ばされた。

誰かが自分を抱え、ビルドから遠ざけたことにほんの少し遅れて気づく。

「闇雲に戦うな」

「お前……！」

黄金色のスーツが視界に飛び込んでくる。

北都のライダー、グリスが自分の隣に立っていたのだ。

「助けてくれたのか……？」

「癪だが今は協力するしかねえみたいだ。……………仲良く心中するよかマシだろ」

「……………ああ」

ゆらりと方向転換したビルドが再度接近してくる。

「奴の腰。……………ベルト部分にあるトリガーを狙え」

「あ？……………よく見りやなんだあれ。あんなの見たことねえぞ……………」

「あれが奴を暴走させている原因だ。外すでも破壊するでもなんでもいい、とにかく奴から手放させろ」

「……………わかった」

グリスとタイミングを合わせて地を蹴る。

——どうしてこんなに頑張れるんだろう。

スカイウォールの惨劇が起こった5年前に天涯孤独の身となり、それからは自分のことを考えるだけでも精一杯だった。

だけど今、自分は1人の青年を助けるために命を懸けている。

いや、もつと前から……………リユウヤは他人の悔しさを代わりに晴らそうと奮闘していた。

（お前の影響……………なのかもな）

戦兎キリオ——たとえそれが自分のためであっても、誰かを守るために戦う彼の姿は純粋にかっこいいと感じたんだ。

（なあキリオ……………お前が言う“自分を構成しているもの”に……………俺は入っているのか？）

高海千歌、渡辺曜、黒澤ルビィ……。東都で出会った3人の少女は、キリオに深い信頼を寄せているようだった。

その信頼こそが、彼がこれまで築いてきたもの。創り上げてきた戦果だったんだ。

だから——！

「今だッ!!」

グリスがビルドの注意を惹きつけている間に、リュウヤはその懐へ潜り込んだ。
「キリオ……っ!!」

——だから、それを崩そうとする奴らが許せない。

頑張った奴らを嘲笑し、蔑みながらその努力を踏みにじる奴が許せない……!!
だからこそ自分が戦う……!! 悪意を持った奴らに泣かされた人の代わりに……!!
(俺がみんなの無念を晴らす……!!それが、戦う理由なんだッツ!!)

ビルドドライバーへ手を伸ばす。

「俺、頑張るから……!! お前も自分の役目を果たせよ!! キリオオオオオッツ!!」

リュウヤはしっかりとハザードトリガーの持ち手を握りしめた。

《ハザードフィニッシュ!!》

しかしその直後、ビルドの放った禍々しい拳がクローズの複眼部分へと炸裂。

「が……っ……!!」

視界が消えそうになる。

頭蓋に亀裂が走ったかもしれない。とてつもない刺激が痛覚を引っ掻いてくる。
けど止まるわけにはいかない。

リュウヤは破壊されたマスクから燃え上がるような瞳を覗かせ——

「ツツ……!! オオオオオオオオッツ!!」

朦朧とする意識を振り払い、握りしめた物を一気に引き抜いた。

「……………きやは」

遠くで小さな人影が嗤う。

高台で足をぶらぶらと揺らしながら、決死の覚悟で戦う少年達を、まるでコメディアンでも眺めるような目でソレは言った。
「おもしろいアドリブだね、万丈くん」

第32話 フェスティバルの後

サイレンの音が響いている。

変身を解き、鈍い痛みが残る頭部を抑えながら——猿渡タクミはゆつくりと、瓦礫の中で立ち上がった。

「つつ……」

よろめきながら周囲を確認する。

倒れている男が二人。一人は東都の、そしてもう一人は西都から派遣された仮面ライダーだ。

「……………なんとか、ビルドの暴走は止められたみたいだな」

クローズの捨て身の特攻により、ビルドのベルトからハザードトリガーを抜き取ることに成功。

現在この場で動けるのは自分だけだ。

「……状況を……確認しねえと」

通信機を取り出し、首相官邸へと繋げる。

仮に東都軍に分があったとしても、今から駆けつければ押し切ることは不可能じゃな

いはずだ。

敵のライダーは二人とも気を失っている。逆転を狙うのなら今しかない。

「……………首相」

向こうの通信機との接続を終え、来沢首相からの指示を仰ごうと呼びかける。しかしタクミからの連絡に応じたのは……………全く別の人間だった。

『ハロオ、 그리스。調子はどうだ?』

「……………スターク……………?どうしてお前が——首相はどうした?」

ご機嫌な口調で語りかけてくるスタークから嫌な予感を覚え、咄嗟にそう尋ねた。

『来沢か……………奴の仕事はもう終わったんでな、地獄へ永遠のバカンスでもどうかと思つて……………ついさつき送つてやったよ』

「……………っ……………!?!」

向こう側から高笑いをするスタークの声音が聞こえてくる。

「まさか……………殺したのか……………!?!お前北都を裏切るつもりか!?!」

『何か考え違いをしているみたいだな。……オレは元より、お前らの味方じゃない』

「デメエ……………」

爪が手のひらに食い込むほどに拳へ力を込める。

……………まさか奴は、最初から東都側の人間？ いや、クロースが所持していたスクラッシュドライバーのことを考慮すれば西都政府の回し者と考えた方が自然だ。

「……………いったい何が目的だ……………?!」

『北都政府はもう用済みだがグリス、お前はまだ消すには惜しい。せいぜいキリオ達の糧となつてもらうぞ』

こちらの質問には答えないまま、スタークはそこで通信を切る。

タクミは途方にくれた表情で膝を折り、地面を見つめた。

その直後、握っていた通信機から報告が届く。

『……………北都軍全員に伝える、首相が何者かに暗殺された。繰り返す、首相が暗殺された。至急作戦を中止———』

●●●

東都と北都の間で行われた戦争は、東都側の勝利で幕を下ろした。

同じ内容のニュースが何度もテレビ内で報道され、それは急速に日本中へ広がっていった。

「……………キリオが、仮面ライダー……………」

病室のベッドに横たわるキリオを見つめながら、松浦果南が呟く。

彼女と向かい合うように立っていた千歌、曜、ルビイの三人は、申し訳なさそうな表情で小さく「ごめんなさい」と口にした。

「……………本当は、もっと前に言わなくちゃいけなかったと思うけど……………キリオくんが、みんなに言うのはやめろって……………」

北都との戦争が終結した数日後、全国に散らばっていたAqoursのメンバーは再度東都に戻ることができた。

「えっと……そちらの方は？」

ふとダイヤが首を傾け、千歌達の隣に立っていたリユウヤの方を見やる。

「万丈リユウヤ。………西都から来た、キリオと同じ仮面ライダーだ」

「あなたもひどい傷があるけど……大丈夫ずら？」

「ああ、顔にもらったから派手に見えるだけだろ。見た目ほど痛みはない」

「あはは……相変わらず頑丈だね万丈くんは」

花丸の問いに何気なく返答したリユウヤにユイが肩をすくめる。

「もしかして知り合いなの？」

「うん、万丈くんもあたしとみーちゃんと同じ、難波高校の生徒なんだ」

「なるほど、リトルデーモンね」

「普通にクラスメイトって言うすら」

またしばらくの沈黙が場を満たした後、意を決したように聖良が切り出す。

「それで………今後のことなんですけど」

「はい………そうですね」

千歌に続いてその場の全員が頷いた。

現在はSaint SnowとBernageも加え、13人で次に打つべき計画を考えている。

現在北都は東都と西都の勢力下にある——というのは表向きで、実際はほとんどが西都軍に占拠されている状況だ。

彼らの言い分は「東都軍は消耗している。代わりに我々が後始末を行おう」らしい。怪しき満点なのは確かだが、東都の兵士も国民も疲弊しているのは事実。何人か東都軍の兵士を同行させることを条件に、それは承諾された。

「今回戦場となった区域がとても広いらしくて……今は西都の人達が何か……調査」？に來てて、私達の家にも帰ることができません」

「ったく……胡散臭いっただけありやしねえぜ」

「聖良さんと理亞ちゃんに関しては、しばらくうちの旅館に住んでもらうことにしたんだ」

「ええ、本当にありがとうございます。……ほら、理亞」

「……………お世話になります」

白い床を見つめたまま、理亞はか細い声でそう言った。

「すみません、数日前からずっとこんな調子で……」

「いえ、お二人も大変だったでしょうし……疲れてもおかしくないですよ」

「……………」

その時、聖良の横で椅子に腰を下ろしていた理亞が何も言わずに立ち上がり、ゆらゆ

らとした足取りで病室から出て行ってしまった。

「ルビィ……ちよつと様子見てくる」

彼女の背中を追うようにルビィも駆け出す。

「……ライブ、どうしようか」

二人がいなくなった病室に、鞠莉の声がうつすらとこだまする。

「スクールアイドルは平和の象徴。戦争で国のみんなが疲れてる今こそ……私達で大きなライブをして、みんなを元気づけるべきだとは思うけど……」

「まあ……キリオくんならそう言うかもしれないけどね……」

千歌はこの病室にはいない、一人の少女の顔を思い浮かべていた。

「梨子ちゃんが目を覚ましたら、考えてみようか」

梨子意識を失った状態で発見され、西都の病院へ搬送されたという話は、善子と鞠莉から聞かされた。

原因がわからないらしく、今も向こうで昏睡状態が続いているらしい。

「ごめんなさい……あたしがしっかりしてなかったばかりに……」

「そんな、ユイちゃん達のせいじゃないよ」

「……………確かに、合同ライブをするにしても、梨子がいなくちゃ曲は作りにくいだろうしな」

「え?」

ベッドの方から飛んできた声に、千歌は思わず短い声を上げた。

「キリオくん!目が覚め——ああ、ダメだよまだ寝てなきゃ!」

「大丈夫だつーの、身体に大きな傷があるわけでもないし」

乱れた病衣を整えながらキリオが上体を起こし、ベッドを囲んでいた千歌達へ順に視線を注ぐ。

「はあ……………また迷惑かけちゃったな。……もう知ってるんだろ?」

「……………うん、さっきみんなに話した」

「そんな顔するな、バレたらバレたでやりようはいくらでもある」

キリオは千歌からリユウヤへ向き直り、口元を緩めながら言った。

「迷惑かけたな」

「……ほんとだよ、死ぬかと思ったんだからな」

顔を逸らしながら悪態を吐くリュウヤを見てつい吹き出しそうになる。

……リュウヤが止めてくれなければ、キリオはあのままハザードトリガーに意識を食われたままだった。

「……………無事で何よりです」

黙り込んでいたミカが不意にそうこぼす。

「……………Bernageの二人も、梨子達が世話になったな」

「お気になさらず、戦兔センセ。スクールアイドルは助け合いですから」

しばらく目を合わせ、表情を硬直させるキリオとユイ。

「……………？」

千歌にはそれが、なぜだか睨み合っているように感じた。



「……………理亞ちゃん」

ルビイがそう声をかけると、休憩スペースに設置されているソファアの隅に座っていた理亞の肩がピクリと揺れた。

「大丈夫？」

「……なにが？」

「なんだかずつと苦しそう」

「平気よ……………べつに……………」

「——猿渡くんのこと？」

ルビイが一人の少年の名を口にした瞬間、理亞の瞳が潤む。

「……………私、怖かったんだ。戦争が始まった途端、タクミもルビイも、私から離れて
いっちゃって」

「理亞ちゃん……………」

「だから必死だった、ルビイを取り戻すことに必死で——あいつの言い分なんか、聞
こうともしないで……………」

戦争が終わったあの日以来、タクミとは連絡がとれていなかった。

何度か政府に問い合わせてみたが何もわからないまま、生死すら不明の状態だ。

「……バカだよ私。ダイヤだって、私に付き合わなければ怪物にならずに済んだのに」

「……………ううん、たぶん違うよ」

「え？」

「理亞ちゃんがそうしなくても、お姉ちゃんは同じことをしてたと思う」

ルビイは理亞の頬に触れ、彼女の瞳に視線を重ねた。

「私もそうだった。……誰かを守りたいって思ったから、怪物になる覚悟ができたの。理亞ちゃんだってそうでしょ？」

「……………」

「猿渡くんだって、きっと理亞ちゃんや聖良さん、北都の人達を守りたいって思ったから仮面ライダーになったんだよ。……その気持ちは、簡単に消えたりしない」

そう言っただけで笑顔を浮かべるルビイを見て、ほんの少し胸の奥が暖かくなった気がした。

「……………そうだいいね」

「もしもし、首相」

『おや、戦兎くん。身体はもう大丈夫なのかな?』

「ええ」

病衣姿のまま廊下の壁に寄り掛かるキリオは、ビルドフォンを耳に当てひっそりと話し出す。

「少し頼みがあるのですが……よろしいですか?」

『言ってみたまえ。今回の勝利は君と万丈くんがもたらしたものだ、報酬と言ってはなんだが……できる限りのことはしよう』

「助かります」

胸に手を当て、深く息を吸う。

やがて決心がついたようにキリオは切り出した。

「パンドラボックスの成分を……採取させてはもらえないでしょうか」

第33話 アイドルの裏側

砂嵐が吹き荒れている。

気がつけば自分は、どこか知らない場所に立っていた。

激しい風と剣戟の音が鼓膜を揺らし、必死にその場に留まろうとしても拡散する衝撃のせいでもとても立ってはいられない。

砂嵐が吹き荒れている。

霞んで見える景色のなかに、天へと続いている1本の塔が見えた。

——いや、違う。自分自身が、その塔の頂上に立っている。

目の前から挑みかかってくる悪魔の刃を受け止め、斬り伏せようと奮闘する。が、向こうは自分に匹敵するほどの力を有していた。

このままでは奴を仕留めることはできない。……刺し違えてでも、止めなくてはならない。

刹那、土壇場で放った互いの一撃が両者を貫いた。

奴が被っていた仮面が碎ける。

砂嵐が吹き荒れている。

星を滅ぼしたその生命体は、白髪の間隙から自らの顔を覗かせて――

「……………ッ!!」

見てはいけないものを見たような気がする。

自分以外は誰もいない、個室のベッドの上で――桜内梨子は動悸が加速する胸元を押さえながら上体を跳ね起こした。

「……………今……………のは……………」

ふと視線を左腕へと落とす。

手首に巻かれている黄金色のバングル。外そうと手をかけてみるがビクともしない。

「……は……………病院……………」

状況を飲み込めないまま辺りを見渡していたその時、

「あつ！目が覚めたんだね！」

病室の扉が開かれ、背丈の小さいボブカットの女の子が明るい表情のまま駆け寄ってきた。

「ユイちゃん？」

「よかつたー！あたしの部屋で倒れてるの見た時はびっくりしたんだからね！」

「倒れ……？」

「うん、ここは難波高校の近くにある病院。梨子ちゃんったら、どうしてあんなところで寝ちやつてたの？」

ぼんやりとした記憶を辿り、自分が病院に運ばれた理由を思い出す。

最後に覚えているのは確か……ユイを探しに彼女の部屋へ向かって、それで――

「ま、いいや。とりあえず千歌ちゃん達に連絡だね」

「なんだか、迷惑かけちゃったみたいだね……」

「ううん、大事にならなくてよかつたよ」

梨子が目を覚ましましたことをメールで千歌へ送信し終えたユイは、梨子の方へ向き直り

彼女の左腕を見やる。

「……………ところでさ、梨子ちゃん」

「ん？」

「そのバングル、いつの間にか付けてたけど……………誰かにもらったの？」

「ああ、これは———そうよ、これよ！」

ハッと何かを思い出したように、梨子はあたふたとした口調で話し始めた。

「これ……………ユイちゃんの部屋で見つけたものなんだけど……………勝手に腕に巻きついてきて、それ以来どうしても取れなくて……………ユイちゃんの物じやなかったの？」

「……………ない」

「……………え？」

「そんなの知らない」

そう言つて彼女はそっぽを向いてしまった。

「えつと……………勝手に部屋に入つてごめんなさい。だからその……………いじわるしないで、どうすれば外れるのか教えて欲しいな……………なんて」

珍しく露骨に不機嫌な態度を見せるユイに戸惑つてしまう。

「あの……………ユイちゃん？……………ごめんつてば……………！」

どうすればいいかわからず、オロオロと視線を泳がせる梨子。

そんな彼女を見て、やがてユイは満足したような顔で笑ってみせた。

「なーんちやって、別に怒ってないよ」

「へ?……も、もうっ! からかわないでよ!」

「ごめんごめん。……でもそのバングルのことは本当に何も知らないよ」

「へ?」

「だから外す方法もわからないや、ごめんネ」

舌先を出してわざとらしく謝るユイに、梨子は青ざめた顔で肩を落とした。

「そ、そんなあ……………」

「いいじゃん、似合ってるし。そのまま付けちゃいなよ」

「まあ、このまま外れないならそうするしかないけど……」

しばしの沈黙の後、ユイがゆっくりと席を立つ。

「じゃ、あたしはこれで。お医者さんの話によると、目を覚ましてから特に異常がなければすぐにでも退院できるらしいから、落ち着いた時はあたしに教えてね。すぐに東都まで送り届けてあげるから」

「え?でも……………大丈夫なの?」

小首を傾げる梨子の心配も最もだろう。彼女は気絶していたせいで北都と東都の戦争が終わったことを知らないのだから。

ユイは踵を返し背を向け、表情を隠したまま伝えた。

「うん、北都の人達がおバカさんで助かったよ」

「え？」

「ううん、こつちの話——それじゃ、チャオ」

小さく手を振りつつ、病室から飛び出していくユイ。

一瞬だけ彼女が呟いた言葉の意味を考えようとするが、直後にかかってきた電話によつて思考が遮られてしまう。

「あ、千歌ちゃん？」

それに応じた時にはもう、そんな疑問は頭の片隅に追いやられていた。



「ええつと……………」

相変わらず研究資料やら学校の教材やらで散らかっている研究室。

ダイヤは足の踏み場を探しつつ、目の前で腕を組みながら佇んでいるキリオを上目遣いで視界に入れた。

「なにかご用……………でしょうか？」

「ちよつとそこに座れ、正座だ正座」

薄い目でこちらを睨んでいるキリオに観念したのか、ダイヤはしょんぼりとした様子で膝を折る。

「黒澤妹と鹿角妹はどうした？あいつらも一緒に来るよう言つたはずだが……」

「何かを察したみたいで……二人とも、私が声をかける前にどこかへ隠れてしまひましたわ」

「……………え、鹿角の方はともかく、黒澤妹つてそんな往生際の悪い奴だったわけ？」

「おそらくその理亞さんが連れ出したのかと」

「かーっ！めんどくさっ！……………ま、いいや。お前から2人にも伝えてくれ」

キリオは3枚の紙を机の引き出しから取り出すと、改めてそれらに目を通した後で再びダイヤの方へ向き直った。

紙に記されているのはとあるデータ。

北都との戦争を終えた後に、念のため千歌達に健康診断のようなものを受けてもらった。これはその結果をまとめたものだ。

「黒澤と……黒澤妹、鹿角妹の3人。お前らの人体にはネビュラガスの反応が見られた」

「……………」

「黒澤妹のことは千歌と渡辺から聞いてはいたが……………その他に2人も、同じ実験を

受けているとは知らなかったよ」

黙り込んでしまっているダイヤに構わず、キリオは淡々と続けていく。

「思えばお前から聞いたルビイが助け出された時の状況も不自然だったな。東都軍の兵士に助けられた……だっけ？ 言い訳にしても無茶があるぞ。あの時は確かに東都側が優勢だった……北都の官邸に攻め込めるほど軍は侵攻できていなかった」

何も言わないまま俯くダイヤ。

キリオは拳に力を込めながら、ひとつだけ彼女に尋ねた。

「……………蛇野郎に会ったな？」

蛇という単語を聞いた途端、彼女の様子が変わる。

ダイヤはそれに反応するように一瞬肩を震わせた後、小さく首を縦に振った。

「私も理亞さんも……………一刻も早くルビイを助けたかったです。そのためには……………ああするしかなかった」

おもむろにそう語るダイヤに、キリオはいつになく神秘的な表情で口を開いた。

「現状、人体からネビュラガスを取り除く方法はない。……………それは理解していたか？」

「……………いいえ。けど、薄々気づいてましたわ」

「あの2人も？」

「…………おそらく」

キリオは平静を装いながらも、彼女達をスマツシユへと変貌させた者に強い憎しみの念を抱いていた。

ブラッドスターク……………奴はことごとく彼女達の絆を利用したのだ。

目的はわからない。だがそんなことは些細な問題に過ぎない、重要なのはルビィやダイア、理亞の優しさを使って陥れたことだ。

（腹の内を探るのはもう終わりだ）

「ダイヤさん、キリオくん！今日中に梨子ちゃん帰ってこれるって————あれ？取り込み中だった？」

唐突に部屋へと飛び込んできた千歌が向かい合う2人を見るなり立ち止まる。

「いいや、大丈夫だ。梨子が戻るのか？」

「うん！これでまたライブの計画が立てれるね！」

「……………ライブについては、ちょっと待ってくれ」

「え？」

キリオが顎で立つように示し、ダイヤは小さく会釈した後にくつくりと立ち上がる。

「黒澤、今日のところはもういい。……万丈を呼んできてくれないか？大至急で」

「え？はい、構いませんけど……」

「千歌は——梨子が到着したら、ここにみんなを呼んできてくれ。それまでは絶対に立ち入らないように」

「いいけど……なにかするの？」

「ちよつとな」

横にある机の上に並べられた小物を視界に入れる。

オレンジフルボトルを除いた——合計20本のボトルが、それぞれの輝きを放っていた。



「……………で、なにをする気なんだ？」

「ビルドの強化アイテムを作る。……そのために協力してほしい」

リュウヤがやってくると同時に、彼を呼んできたダイヤも含めて他の人間は全員研究室に近づくなど伝えておいた。

理由は簡単、これから少々危ないことを始めるからだ。

「強化アイテムって……もう戦争は終わったんだ、そんなもの作る必要あんのか？」

「いや、そうとも限らない」

そう、確かに北都と東都の戦争は終結した。

だがまだ不安要素が消え去ったわけじゃない。

「スタークとローグ……奴らと決着をつける必要がある」

「……!? あいつらの正体がわかったのか!?」

「確かめない限りそうとは言いい切れないが……ほぼ黒だと考えていい」

「誰なんだよそいつは……!?」

詰め寄ってくるリュウヤを制止し、首を横に振る。

前々から目をつけていた者なら存在する。しかしそれが真実だとするならば――

「そのあたりも含めて、あとで千歌達にも一緒に……ちゃんと話すよ」

顔を伏せると浮かんでくる、2人の人物の顔。

キリオは拳を強く握り、リュウヤの方へ向き直ると再び口を開いた。

「いざ正体を掴むとなった時……また奴らと戦うことになるだろう。だからその時のために、ハザードトリガーに頼らなくてもいいよう新しいアイテムを作るんだ」

使う度に暴走していたのでは、止めるにしてもリウウヤの体力が保たない。

しかし通常のビルドではスタークと渡り合えるかも怪しい。よって安定して高いスペックを発揮できる発明が必要なのだ。

トリガーを使わなくとも、スタークを圧倒できるだけの発明が。

「……………わかったよ。俺は何すればいいんだ？」

「さあ、実験を始めようか」

「待てコラ」

リウウヤの立つ場所から数メートル離れつつ用意した分厚い鉄板の影に隠れたキリオにドスの効いた声音が突き刺さる。

「なんだよその盾は。てかどうしてそんなに離れてんだよ」

「そうだ、まだ実験概要を話してなかったな」

キリオはリュウヤの目の前に設置された装置を示しながら、新アイテムの開発方法を説明し始めた。

「そこにある装置に俺が伝えた『ベストマッチボトル』を差し込んでくれ。上手くいけば横に繋がれてる……政府から調達したパンドラボックスの成分と結合して、強化アイテムの基になる成分が完成するはずだ」

「え、なんだって？」

「とにかく言う通りにすればいいんだよ。ほら、まずはパンダとロケット」

「はあ……よくわかんねえけど、ここにぶっさせばいいんだな？」

リュウヤはキリオの指示通りテーブルに置いてあったボトルを2本手に取り、装置へと装填する。

「おおおおおおおっ?!?!?」

直後、化学反応を起こしたように凄まじい衝撃と爆風が巻き起こった。

「パンダロケットだめー……っつと」

真横まで吹き飛んできたリュウヤは意に介さず、キリオは淡々と手元の用紙にバツ印をつけていく。

「ほら寝てる暇はないぞ、次だ次」

「てんめえ!!なに自分だけ防御手段用意してんだよ!!」

「危ないからに決まってるでしょうが」

「俺の安全は考えねえの!?!」

「万丈の強靱な肉体なら暴発の衝撃にも耐えられるはずだ」

ものすごい剣幕で迫ってくるリユウヤに対し、なだめるような口調でそう語る。

「強靱な肉体……………」

「ああ、これはお前にしかできないことなんだ」

「俺にしかできない……………。チツ…………。しゃあねえな」

(ちよつろ)

一転してやる気満々な様子を見せたりユウヤに吹き出しそうになりつつも、キリオは続けて用紙に並んで記載されているボトルの名前を読み上げていく。

「次はゴリラとダイヤモンド——」



一週間後。

東都のとある施設の一室を借り、千歌達は再び全国のスクールアイドル達で行うライ

ブについて計画を立てようとしていた。

「すごいひろ〜い！ね、すごいねみーちゃん！」

「本当に、ここを使っても……？」

「Of course！パパの知り合いが所有してる施設なんだ。講堂の方も自由に使っていいって！」

「さすがだな小原家……」

部屋の隅で壁にもたれかかっていたキリオが苦笑する。

「梨子ちゃん、身体はもう大丈夫なの？」

「うん、むしろ前より調子いいかも」

縦長の会議室に集まったメンバーはAqours、Saint Snow、Bernage、そして付き添いのキリオにリユウヤ。計15人だ。

各々が席に座り、落ち着いたところでダイヤと聖良が皆の前へ出てくる。

「司会進行は私、黒澤ダイヤと……」

「鹿角聖良が務めさせていただきます」

ホワイトボードの前に立った2人が小さくお辞儀し、ユイの「よっ！」という掛け声と共に拍手が巻き起こる。

「……………」

普段と変わらない、賑やかな雰囲気を含んだ少女達の会話。

リュウヤはそれを、なぜだかそわそわした様子で眺めている。

「なあ、キリオ——」

隣で腕を組みながら立っていたキリオに何かを話そうとするリュウヤだったが、彼の視線の先を見た途端に黙り込んでしまった。

「ごめんなさい、ちょっとお腹が………」

一時間ほど経った後、そう言っただけで席を立ったのは水室ミカだった。

その場にいた全員の視線が彼女に集まる。

「ミカちゃん、大丈夫？」

「私がお手洗いまで一緒に——」

聖良がそう言いかけたその時、

「あたしが連れて行くから、みんなは会議続けてよ」

ユイは立ち上がり、腹部を抑えるミカの肩に優しく手を添えながらそう言った。

「場所はある？」

「うん、大丈夫。さつき廊下で見かけたから」

果南の問いにそう答え、ユイとミカが静かに退室していく。

——部屋の中に、嫌な沈黙が充満した。

施設内にあつた、講堂。今日は貸し切り状態のため、ここへ来る者はまずいない。
「……………」

明かりも灯っていない薄暗い空間。

奥にあるステージ——その隅に潜んでいた人影が怪しくうごめく。

その手に握られているのは――

「トイレに行くんじゃないかなかったのか？」

その一言と共に、講堂内に設置されていた照明が一斉に光を放った。

ステージに立っていた人物が、ビクリと肩を震わせながら声の主へと振り向く。

「キリオ……先生」

その人物――葛城ユイは突然現れたキリオに対して驚愕の表情を向けた。

「ち、ちよつと講堂がどんどころか気になって……。振り付けの練習とかも、ここできるんですね？」

「ああ、小原はそう言ってたはずだ」

「すつごいなあ。難波高校もさすがにこんなに大きな練習場所は提供してくれなかったの、なんだかワクワクします……。って、今はまだライブ計画も初期段階でしたね。すぐ戻らなきゃ」

無邪気な笑顔でそう言ったユイはステージ上から飛び降りると、キリオの横を通って傍にある出口へ向かおうとする。

キリオはそんな彼女の腕を掴み上げ、強引に立ち止まらせた。

「えーつと……この手は一体……？」

「……………」

「あ、もしかして、あたしの魅力にあてられて襲おうとしちゃったとか？」

「……………」

「うふふ、ダメですよ正義の味方の仮面ライダーがそんなことしちゃ。……あ、いたつ

……ちよちよちよ、力入れないでくださいよ」

「……………ずつと」

「へ？」

「ずつと考えてたんだ」

ユイの腕を離さないまま、キリオは顔を伏せながらゆつくりと語り始める。

「“あいつ”はどこに潜んで俺達を観察し、どうやって装備を整え、どこから襲撃を仕掛けてきていたのか」

「ええつと……なんの話です？」

「そうしていくうちに1つの結論にたどり着いた。奴はこの国において、大きな存在に

身を隠しているってな」

徐々に語気が強くなっていく。

様々な感情がキリオのなかで渦巻き、抑え込めないものが声に宿る。

「奴が所有している武器のことも考えて、最初はどこかの軍隊と繋がっていると思ってた。……けどそれは、100点の答えじゃなかった」

頭のなかで改めて「あいつ」の行動を振り返る。

奴が現れるのはいつも唐突で、尚且つキリオ達に関係している場所や人物のもとだった。

「今の日本で大きな影響力のあるものは三つある。一つは各国の政府、二つ目は軍隊、そして三つ目は——スクールアイドル」

静かな講堂にキリオの声だけがこだまする。

ユイは抵抗する様子も見せずに、黙って彼の話を聞いていた。

「あいつはその中でも、最も信用を得やすいものの影に潜んだんだ。……国民にとって身近で親しみやすいものに隠れて、表舞台で立ち回りやすいように」

「……………」

キリオは顔を上げ、横に立つ少女の目を見ながら……………ひどく苦しそうな声で言い放った。

「なあ、
そうだろ……葛城ユイ——
——いや、ブラッドスターク」

第34話　ベルナージュの真実

「葛城と氷室が……………スタークとローグ…………？」

時は一週間前に遡る。

キリオは研究室に集まったAqours、Saint Snow、そしてリュウヤに……………あることを打ち明けた。

ブラッドスタークとナイトローグ——その正体がBernageの2人であることを。

「えつと…………」

「いきなりなにを言い出すかと思えば…………」

それを聞いた全員が、どう反応すればいいかわからずに隣に立っていた者と顔を見合わせる。

「そんなわけ…………ねえだろ…………」

「万丈くん？」

「あいつらは…………スターク達にライブをめちやくちにされて、泣いてたんだぞ…………!?
それが全部自作自演だったっていうのかよ…………？」

リュウヤは青ざめた顔でキリオに詰め寄り、震える声でそう主張した。

「どうしてそう思うの？」

取り乱すリュウヤの言葉を代弁するように曜がそう尋ねる。

「……俺達が初めてあの2人と会った時のことは覚えてるか？」

「サービスエリアでの騒ぎのことですか……？」

「ああ、あれはBernageとの合同ライブに向かう途中だっただろ。あの時、わざわざバスを使ったのは余計な騒ぎを起こさないためだった。当然お前達がどんなルートを使つて西都へ向かったかなんて情報も、葛城と氷室以外には明かしていなかった」

「そんなの……別の誰かが情報を聞きつけた可能性だってあるじゃねえか」

「まあ、確かに」

「……は？」

あつさりと反論を聞き入れたキリオに、リュウヤは拍子抜けするように短い声を漏らした。

「今言ったことはあいつらを疑い出したきっかけに過ぎない」

「……………他にも何かあるの？」

前に踏み出してそう問いかけてきた千歌は、心底苦しうに胸元を押さえている。

「スクールアイドルであるお前達に……まず、聞きたいことがある。どうだ鹿角、鹿角

妹、Bernageが世に出てきた時、なにか違和感はなかったか？」

「え？」

「違和感……」

「2人だけじゃない、千歌達も考えてみてくれ」

10秒ほどの沈黙。

やがて聖良は隣にいた理亞と目配せすると、静かに切り出した。

「……………あらゆる面で、早すぎるとは思ってました」

「早すぎる…………？」

「ライブのクオリティにしろ、単純な人気にしろね」

聖良の言葉をおうむ返しする千歌に、理亞が付け足すように言う。

「確かに疑問は感じていました。……今までラブライブにも出ていなかったグループ

が、どうして西都を代表するようなスクールアイドルにのし上がったんだろう、と」

「言われてみれば……。でも、それがなにか関係あるの？」

「注視すべきはあいつらの学校だ」

「学校…………？」

難波高校——大企業である難波重工直属の傘下にある学校。

難波重工はガーディアン等の軍事兵器の生産の他に、現在では様々な分野における人

材も育成していることで有名だ。

……そしてそのなかでも、スクールアイドルに関しては異常なまでに力を注いでいるのだ。

練習のための専用施設やダンスと歌を指導する専属コーチ、極め付けにライブを行う会場まで用意されているらしい。それを考慮すれば短期間での上達も頷ける。

「難波重工はよくない噂もあると聞く。……自分達の製品を世界に売り出すために戦争を引き起こそうとしている、とかな」

「それがスクールアイドルとどう繋がるんですの？」

ダイヤが首を傾けたすぐ横で鞠莉が眉をひそめる。

「それも全部……スクールアイドルという文化を崩壊させるためだって言うの？」

「えっ………!?!」

鞠莉の問いに静かに頷き、キリオは一点を見つめながらさらに続けていく。

「この国におけるスクールアイドルは……まさに平和を支える柱と言ってもいい。奴らにとつては何よりも邪魔な存在だ。最初に襲撃を受けた時も、全国のグループに声をかけようとした時も、奴らはことごとく邪魔をしてきた」

スクールアイドルを内部から崩壊させるために、難波重工はわざわざ自分達のなかから優秀な“アイドル”を生み出したんだ。

加えてスタークとローグの銃や剣……そして万丈が持っていたスクラッシュドライバーも、おそらく難波重工が作った物。

奴らの目的と、スターク達の行動——それらが全て繋がってしまうのだ。

「で、でもよ……！だからって葛城達がスタークだつて証拠にはならない！お前のそれは全部憶測だろ!？」

「ああ、当然だ。これだけであいづらが黒だと言い張ることはできない。——だからお前達に頼みたい」

キリオは一步踏み出し、曇った表情を並べている千歌達に向けて言った。

「葛城と氷室………あいづらがそうじゃないって確かめるのを……手伝って欲しい」



「——氷室」

施設の傍にある駐車場。

ゆらゆらとした足取りで駐車場へと出て行くミカの姿を追い、リュウヤは彼女の前に立ちはだかった。

「えっ……？ば、万丈くん……!? どうしてここに——!?」

リュウヤの視線が彼女の手元に移る。

ミカの手にはナイトローグが所有していた銃——トランスチームガンが握られていた。

「あつ……………あの、これは……………」

「—————」

言葉を失った。

必死に弁解しようとするミカだったが、リュウヤの耳にはもう何も届いてはいなかった。

何もかもが壊れていく。矜持も、戦う理由も、大切にしていたものが全て。

「どうしてだ…………？」

「え…………？」

「お前達は…………スクールアイドルじゃなかったのかよ…………？みんなの抛り所になれるよ
うな、平和の象徴を目指してきたんじゃないのかよ…………？」

「そ、それは……………」

冷や汗を流しながら、ミカは瞳を鋭くさせてリュウヤへと向き直る。

「ごめんなさい万丈くん……………わたしにはやらなくちゃいけないことがあるの」

「……………それは政府官邸へ向かって、パンドラボックスを奪うことか？」

「……………そこまで知ってるんだね」

「ああ。……………キリオの奴がそうするだろうってな」

「あなたの役目は……………わたしをここで食い止めることなんだね」

震える手で拳銃を構え、ボトルを装填。

《バット!》

「氷室……………」

「もう戻れないよ。……………ユイちゃんのために、わたしは戦う……………! 蒸血!!」

《ミストマツチ!!》

《バット……………バット……………!》

《ファイヤー!》

黒霧がミカの身体を包み、その姿を変貌させていく。

漆黒のボディにコウモリを思わせる意匠。

「お願い万丈くん、そこから動かないで」

黄色のゴーグルがリユウヤへと向けられる。

もう隠す必要はないとでも言わんばかりに、ナイトローグから発せられる声は少女のものへと変わっていた。

「……………できるわけ……………ねえだろ……………」

リュウヤがビルドドライバーを装着し、ドラゴンフルボトルを取り出したクローズドラゴンへと叩きつける。

《ウェイクアップ!》

「なんもわかんねえよ……お前がなに言ってるのかも、どうしてこんなことすんのかも……!!」

《クローズドラゴン!》

レバーを回転させつつ、リュウヤは前方に立つ黒い戦士を睨んだ。

《Are you ready!?!》

「変身……ッ!!」

形成されたスーツ越しにローグを見つめる。

表情はわからない。いつだって彼女のことはわからないことだらけだった。

学校ではいつもユイと行動を共にし、他者とはあまり関わろうとしない。ライブに誘われなければ知り合うこともなかっただろう。

だが、それでも――

《Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON!!》

《Yeah!》

「お前と葛城を止める。お前からスクールアイドルが積み上げてきた行いを……お前から自身を壊していいはずがない!!」

強引に掴んだ腕——その手に握られていた物を見る。

コブラのレリーフが掘られた……紫色のフルボトルが、そこにあった。

「本当はもつと前から気づいてたんじやないですか?」

「……………千歌達がお前達を信じるように、俺もお前達を信じたかった。お前も氷室も、スクールアイドルとして平和を願って、人々を笑顔にしようと頑張っているんだって……………そう信じたかった」

キリオは握っていた腕を離し、だらりと下がった前髪から覗かせている瞳を見つめる。

いつものように媚びるような上目遣いで、ユイはうつすらと口角を上げて言った。

「それが本当だとすれば、救いようのない大バカ野郎ですね」

背後にあつた扉が開かれ、講堂へと流れ込んでくる足音。

キリオとユイの会話を聞いていた千歌達が、絶句した様子で2人に視線を向ける。

「なるほど……………初めからこのためだけにみんなを集めたんですね」

「そんな……………ユイちゃん……………!」

「キリオくんが言つてたこと……………本当だったずら……………!」

「ずっと騙してたつてこと!」

ルビィ、花丸、善子が狼狽しながらユイに言葉を浴びせていく。

「合同ライブがめちやくちやにされたあの日……………ユイちゃん、本気で悲しんだ。

あの時の涙は嘘だったの……………?」

左腕のバングルを煌めかせ、梨子が通路の階段を下りながらそう彼女に問う。

ユイは不安に満ちた表情でこちらを見る梨子を視界に入れると、

「……………ぷふっ…うふふふふ……………あっははははは……………!!きやははははははハ

ハハハハハハハハ!!」

心底彼女をバカにするように、腹を抱えて笑い転げた。

「当たり前じゃん」

「……………」

「ああ……………つたくも……………本当に面白いよね君達つて。 ”こうすればこうなるだろう” って、頭のなかで思ってた通りに動いてくれるんだもん」

「……………ひどいよ」

「んん?」

ぎゅ、と拳を握りしめ、唇を固く結んだ千歌が前に出る。

「ずっと仲間だと思ってた。……………平和のために、みんなのために歌を届ける……………同じ志を持った人達だつて、そう思ってたのに……………!こんなひどすぎるよ!!」

「そう? あたしはとつても楽しかったけどな、お人形遊びしてるみたいで」

屈託のない笑顔でそう言ってみせるユイに、千歌は怒りの感情すら起こす気になれなかった。

「お前達の目的……………スクールアイドルを崩壊させて、戦争を引き起こすつてのは……………全部難波重工の連中から命じられたことか?」

鋭利な眼でキリオがそう尋ねる。

「おお、もうそこまで察しがついているとは。まあ、確かにそんなことは上から言われていますけど……あたし個人の野望としては、もうちよつとだけスケールが大きいかなあ……なんて」

「なに……？」

「おっと、おしやべりが過ぎましたね」

後ろで腕を組み、踊るような動きでキリオから距離をとるユイ。

狂気のようなものを宿した瞳でこちらを見つめ、彼女は再度口を開く。

「さて、と。あたしはこれから政府官邸に向かって、パンドラボックスを頂戴する予定だったのですが……。ま、通してはくれませんよね」

「当たり前だ」

ビルドドライバーを装着し、ユイと睨み合うキリオ。

「通常のビルドではあたしには勝てませんよ」

「そんなことはわかってるさ」

「ほほう、まさかまたハザードトリガーを使って暴走でもするつもりなんですか？」

「トリガーは必要ない」

「……………はい？」

眉をひそめ首を傾けるユイを尻目に、キリオは千歌達に避難するよう視線で促す。

「それは——？」

上着から炭酸飲料の缶のようなものを取り出したキリオは、それを掲げて上下に激しく振り出した。

中の成分が活性化した後、プルタブ型のスイッチを起こしてそれを起動し——

《ラビットタンクスパークリング！》

ドライバーへと装填。

以前とは違いビルドを表す歯車のような円形のスナップライドビルダーが出現し、スーツを形成していく。

《Are you ready!?!》

左右に両腕を開いた後、勇ましくそれを前方へ構え直し——

「変身ツツ!!」

キリオの肉体に装甲が重なる。

《シユワつと弾ける！ラビットタンクスパークリング!!》

《イエー！イエーイ!!》

ラビットタンクの赤と青——そこに新たに白が加えられ、炭酸を表すように全身の至る所が刺激的に尖っている。

パンドラボックスの成分を備え、強化されたビルド。

その名も仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム。

「……新しい発明品ですか」

不敵な笑みを浮かべ、トランスチームガンを構えるユイ。

《コブラ!》

「いいでしょう、少し遊んであげます。——蒸血」

《ミストマツチ!!》

ユイが静かな声音でそう言い放ったのと同時に、下に立ち込めた黒霧が上昇。彼女の身体を覆っていく。

《コッ……コブラ……コブラ……!》

《ファイヤー!》

何度も相対した赤い戦士。

静かな講堂のなかで、お互いに地面を蹴り、走り出す音が鳴り響いた。

第35話 崩壊するピース

「ミカツツ!!」

誰かの怒号が聞こえる。

痛いのが嫌い。

身体に伝わる感覚のなかで一番嫌いだ。痛くなることがわかつているのに、我慢しなくちやいけないのがとても辛かった。

暴力が嫌い。

あんなものを振りかざす人はどうかしてる。こっちは誰も傷つけたくないのに、抵抗しないのをいいことにたくさん痛いことをぶつけてくる。

大人の人が嫌い。

大人はみんな勝手なことを口走る。自分の都合しか考えていないからだ。

自分を嫌う人が嫌い。

敵を作らないようにひっそりと過ごしているのに、危害を加える人達はいつも向こうからやってくる。

お父さんが嫌い。

先輩が嫌い。

人間が嫌い。

自分が嫌い。

嫌い、嫌い、嫌い、嫌い、嫌い、嫌い。

『みーちゃん』

それでも、あの子だけは――

「はあっ……！はあっ……！」

衝撃の雨が降り注ぐ。

蒼炎をまとった拳が何度も放たれ、避けようにも身体が上手く反応してくれない。
ならば防御と腕の盾を作るのも虚しく、クローズの繰り出した右ストレートはその余波でナイトローグの身体を後方へ吹き飛ばした。

「きゃっ――ぐう……ッ！」

「オオオオオオオオッ!!」

《ドラゴニックフィニッシュ!!》

息もつかせず追撃がやってくる。

蒼い龍がクローズの背後に具現化し、今度は下から右腕が突き出される。

「――！」

爆発。

ナイトローグの腹部に直撃した渾身のアップercutは、その肉体を衝撃と共に軽々と遠方へ放り出した。

(……………いたい)

腹部から伝わってくる鈍痛が神経を伝って自分を苦しめる。

(いたい……………おなか……………いたいよ……………!)

無残に地面へと倒れ伏したローグ――氷室ミカはマスクの下で歯を軋ませ、やり場のない怒りに身を震わせていた。

戦う意思が薄れていく。

勝てるわけがない。気持ちでも、単純な戦闘能力でも、自分がリユウヤに勝るわけがないのだから。

「……や……」

「……!」

ナイトローグの装甲が消滅する。

中から現れたミカは………涙でくしゃくしゃになった顔で、自らを抱きながら小刻みに震えていた。

「——氷室」

「いたい……くるしい……たたかいたくない………」

リユウヤがクローズドラゴンからボトルを抜き取り変身を解除する。

素顔のままミカのもとへと歩み寄り、その弱り切った表情を視認した直後にだらりと全身の力が抜けた。

「どうしてそんなになつてまで……お前は戦おうとするんだよ……う」

哀れみなんかじゃない。ただただ彼女の悲惨な姿を見るのが悲しかった。

西都を代表するスクールアイドルだと謳われ、多くの人から愛されている彼女が……なぜこうして涙を流してまで戦わなくてはならない？

「……………全部、葛城のためなのか…………？」

「——ユイ……………ちゃん…………？」

リュウヤから発せられた少女の名前を聞いた瞬間、ミカの瞳に消えかけていた光が戻る。

「——ッ!!」

形容し難い悪寒がリュウヤの全身を駆け巡り、反射的に彼の身体は回避行動をとった。

視界の端に映る銀色が危機を煽る。

突如身を乗り出してきたミカが、懷から取り出したバタフライナイフでリュウヤの脇腹めがけてそれを突き立てようとしたのだ。

「あつぶ……………!!」

すぐさま距離をとったリュウヤは両手を構えつつ再びミカの方へと向き直る。

「氷室てめっ……………!!」

「動かないでよ……………!ちゃんと急所に当たらないようにするから!」

「そういう問題じゃねえんだよ!!」

相変わらず生まれたての子鹿のような足取りで近付きながらナイフの切っ先をこちらに向けてくるミカ。

「痛くても……戦わなきゃ……！じゃないと……今度こそ……本当に……！！」

「ああ……？」

「本当に……ユイちゃんに嫌われちゃう……！！」



「——ハハッ」

時折、そんな笑い声が聞こえてくる。

仮面ライダービルドとブラッドスタークによる戦いは……前者が圧倒的に優勢さを見せつけていた。

「ッ!!」

ラビットの力を備えた左足。スパークリングになったことでさらに爆発力を得たそれで地を蹴り、一瞬でスタークの眼前まで接近。

「……………!!?」

奴はまだこの動きに対応できていない。

両腕に装備されているカッターで牽制し、続いて身体ごと捻り遠心力で威力を上げた打撃を浴びせていく。

「ハッ……ハハッ……!!アハハハハハ……ッ!!」

スタークは子供のように笑いながら、攻撃を受けた腹部を押さえて膝をついた。

「やりますねキリオ先生。まさかトリガーを使わずに、ここまでボトルの性能を引き上げられるとは」

「お前に先生と呼ばれる筋合いはない」

「寂しいこと言わないでくださいよお。——楽しくやろうじゃねえか、キリオ」

《コブラ!》

《スチームブレイク!コブラ!!》

ビルドの両脚から泡が溢れる。

トランスチームガンから発射された光弾を瞬時に避け、再度スタークに肉薄。互いに拳を受け止め、睨み合う。

「ハザードレベル4。1……!——オレは嬉しいんだよキリオ、お前が成長してくれることが何よりもなア……!!」

前触れもなく声色を変えたスターク——ユイは興奮するような様子を見せながらそう口にした。

「……………その口調、一体どっちが本当のお前だ？」

「こっちの方が馴染みがあると思ったんだが——アハ、普段のプリティボイスの方がお気に召しますか？迷いますよねえ。あたしとしても両方いい声だと自負しているので、どちらを使おうか迷っていたところなんですけど……」

「ほざけ」

両者の間を裂くように、炭酸の如く衝撃が炸裂する。

「これならどうだ……!!」

互いに距離をとったところで、スタークは胸にある蛇のレリーフを妖しく輝かせた。

巨大な影が伸びる。

大の大人を軽々と超える全長を持った青白いコブラが2体、ビルドを見下ろす。

「問題にもならないな」

キリオはコブラの猛攻を回避しつつベルトのレバーを回し、両腕の筋肉に力を込めた。

《Ready go!!》

コブラの尾を掴み取り、乱暴にそれを振り上げる。

「ほう……!!」

感嘆と驚愕が入り混じった声を漏らし、スタークが仰け反る。

キリオはそのまま2体のコブラを奥にある講堂入り口付近まで投げ飛ばし、壁や天井を巻き込みながら空中へと追いやった。

「きゃあつ!？」

外に避難していた千歌達が施設を突き破って現れた巨大な蛇を見上げて息を呑む。

《スパークリングファイニッシュ!!》

「勝利の法則は……! 決まった!」

複数の円形が標的への道を作り、抜群の破壊力を備えたタンクの片足を突き出しながら2体のコブラごと一直線にスタークへと迫った。

コブラを瞬く間に消滅させた後、無数の泡が拡散される。

「うっ——!？」

ミサイルの如き速度で飛来するそれを打ち消そうとするスタークだったが、次々に降り注ぐ泡は奴に防御を許さなかった。

「ぐおおおおお………ッ!？」

全身が爆発するような衝撃がスタークを襲う。

「うぐっ……!」

ステージ上まで転がったスタークの変身が解除され、苦悶の表情を浮かべるユイが中から現れた。

天井に空いた風穴から降り立ったキリオも自らビルドの装甲を解き、ゆっくりと彼女に歩み寄る。

その後、

「……………これは……………?」

ユイがかくんと首を傾ける。

半壊した講堂に駆けつけてくる足音——それも複数。

口元を結んだキリオの背後にある扉が勢い良く開かれ、大量のガーディアンと兵士と共に1人の男性が入ってきた。

「決着はついたようだな、戦兔くん」

「……………東都の首相さんですか」

自分を囲むガーディアンと塔野首相の登場に、ユイは不気味に嗤った。

「政府とも連携させてもらったってわけだ。……もう終わりだ、葛城」

「ふふっ……あはははは……！ きやはははははは！！！」

壇上で笑い転げるユイに怪訝な目を向ける。

曲げた膝に手を置き品のない座り方でキリオを見下ろしながら、彼女は言った。

「いいえ？ なにも終わりはしませんよ」

「此の期に及んでまだ何かするつもりだとしても？」

「わかりませんか？どうしてあたしがわざわざスクールアイドルなんかやって、キヤーカーと黄色い声援を浴びる必要があったのか」

「……こうして正体がバレた時に味方を増やせるよう、支持を得るためだろう。だがそんなものの、どこまで効果が続くかたかが知れてるぞ」

ユイやミカが悪党だと世間に広まって、仮に擁護する人間が現れたとしてもだ。少なくともスクールアイドルを続けられなくなるくらいはバッシングは避けられないだろう。

「お前が最初、Saint Snowの2人にやったことを倍返しさせてもらおうか」
「はっ……当てつけのつもりですか？」

クク、と堪えるように笑い声を漏らしたユイがゆっくりと立ち上がった。

「でもですよ先生、人間とは愚かな生き物です。他により大きな話題があれば、みんなこ

ぞってそちらへ意識を向けるものですよ」

「なに……う？」

「ちようどいいや、首相さんもいらつしやるようですし？　ここらで伝えておこうかな
……なんて」

《ギアエンジン！》

《ギアリモコン！》

——「潤動」

《《ファンキー！！》》

刹那、ステージ上手側と下手側の扉が開かれ、ふたつの人影が講堂へと踏み出す。

同時に巨大な歯車がユイを取り囲んでいたガーディアン達を蹴散らし、爆散させた。

「なんだ……!?!」

塔野の表情に驚愕の色が混ざる。

煙幕が晴れ、徐々に影の全貌が明らかになっていく。

「キリオくん……!?!」

再び起きた騒音に異様な空気を感じ取り、千歌達が急いで講堂へと戻ってきたその時だった。

《エンジンランニングギア!》

《リモートコントロールギア!》

機械的な身体——その半身に備わっている歯車が不気味な印象を与えてくる、2人の戦士。

片方は白、そしてもう片方は暗い緑。

「紹介しましょう———と云いたいところですが、皆さんは既に1度お会いしていますよね?」

ユイの言葉を聞いた千歌達が「え?」と不安げに呟く。

「では改めて、白いのはエンジンブロス——鷲尾雷斗さん。緑の方はリモコンブロス……………鷲尾風華さんです」

ユイを挟んで並び立つスーツ姿の男女。

顔立ちがよく似ている2人は……………以前梨子や果南達が西都と北都へ向かった際に同行した、難波重工から派遣されたスタッフだった。

「……………そういうことかよ」

キリオは3人を順に睨み返し、拳に力を込める。

「さて、と—— たった今から我々西都政府は、東都政府に対して宣戦布告します」

「我々だと……………」

塔野がユイの言葉に眉をひそめる。

「ええ、といっても西都の聖堂首相は今も昏睡状態……………あたしは今、首相代理様の言葉传达了ままですけどね」

「代理……………？誰だそれは？」

「あなた達が知る必要はありませんよ」

直後、奥にある出入り口から千歌達を押しつけてやってきた者が2人。

「葛城……………お前え……………」

「……………っ」

満身創痍となったミカの動きを封じながら、リュウヤがユイに鋭い視線を向けた。

「やつほー万丈くん。……あーあ、やつぱり負けちゃったんだね、みーちゃん」

「…………ごめ…………んなさい…………」

「ま、どうでもいいけど。ねえ万丈くん、君って元々西都側の人間だよな？だから一応聞いておくけど、こっちに帰ってくる気はあるかな？」

「ふざけんなツ——!!」

リュウヤがミカの腕を放って階段を駆け下り、ユイのもとへ向かうとしたその時、
「ぐっ…………!!」

雷斗が手に持った紫色の拳銃——ネビュラスチームガンを発砲。

火花が散り、リュウヤは反射的に立ち止まった。

「…………ツー!」

「あつ…………ミカちゃん…………!!」

隙を見て千歌達の間をくぐり抜けたミカがステージへと走る。

「ユイちゃ——!」

「風華さん」

ミカがステージに歩み寄ろうとしたその時、ユイの指示に従うように風華が彼女の行く手を阻んだ。

「ご無礼を」

「えっ……!?——きゃっ!?」

地に組み伏せられたミカは、困惑した顔でユイを見上げる。

「ユイちゃん……!?」

「なにその不思議そうな顔。言っただしょ、もうみーちゃんなんてどうでもいいの」

「え……?」

「役立たずの駒なんかいらぬ。……“地下”に連れて行つて、風華さん」

「……………了解しました」

「ちよつと……待つて! ユイちゃん!!」

「チャオチャオ」

悪びれる様子もなく、ユイは笑顔で手のひらを開閉してそう告げる。

「お願い待つて! ユイちゃ——!」

風華は握つていたネビュラスチームガンを振るい霧を発生させると、ミカごと自らの身体を覆いその場から退散した。

「うるさいのがいなくなつたところ……あたしからも一言加えさせてもらつて、今日はトンズラしましょうかね」

ユイはキリオの背後に並んでいたAquoursとSaint Snowの11人に

視線を移し、静かな口調で言った。

「スクールアイドルの皆さん、今までの無駄な時間の数々を労いましょうーご苦勞様。まあでも、そこそこ暇つぶしにはなったかな」

「……………このっ……………」

「善子ちゃん……………」

かつと頭に血を昇らせた善子が踏み出そうとするのを花丸が制止する。

「悪いけど、君達が築きあげてきたものは……………全部あたしが壊しちゃうから。ああ、別に了承を得ようとしてるわけじゃないし喋らなくてもいいよ。こっちはこっちで適当にやらせてもらうから」

「勝手なこと言わないで！」

誰も予想していなかった一声。

そう言つて前に飛び出したのは——ルビィだった。

「あなたが何をしようと……………私達がやつてきたことは無駄なんかじゃない！みんなの笑顔のためにいっぱい練習して、辛いこともたくさん乗り越えて……………！その先に得たものは、絶対に無くなったたりしないんだから!!」

想定外の反抗を目にしたユイがほんの一瞬だけ、不快そうに眉をひそめる。

「きやはっ……………精々楽しませてよ。……………君達がなにを創ろうと、あたしがこの

手で破壊する」

パチン、とユイが指を鳴らし、それに反応して横に待機していた雷斗が拳銃を振るつた。

「——なかなか様になってるじゃん、そのバングル」

「えっ?」

霧に包まれて去ろうとするその瞬間、ユイは怪しげな笑みを浮かべ——梨子の方を見てそう言い残していった。

「それでは皆さん、チャオ」

第36話 氷室ミカ

物心がついた頃——初めて覚え、口にした言葉は「ごめんなさい」だった。

「くそっ……また負けた……ッ!!」

わたしのお父さんはいつも何かに対して怒っていた。

「——おい!金だ!次は50万………ああ!?これ以上は貸せないって!」

受話器に怒鳴り声が飛んだ後、刃物のように尖った視線がわたしに向けられる。

「クソがッッ!!」

硬い大きな手がわたしの頬をひっぱたく。

お父さんは怒る度にわたしをぶった。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

痛いのがたまらなく嫌で、わたしは必死に呪文を唱える。

何度も頭を下げているうちに、お父さんは徐々に叩く回数を減らしてくれた。

「ミカは……まだ小さいのに料理が上手だなあ」

そんなお父さんも笑ってくれるのが夕食の時間だった。

この一瞬だけはお父さんはわたしに優しくしてくれる。そうわかってからはひたすらに練習して、お料理の腕を上げた。

けれどそれも長くは続かない。

「本当、母さんそつくりだよお前は。……母さんに……母さん——ハルカ……ああああああ……!!」

食事が済んだ後は、いつも決まってお父さんは泣きながら怒った。

わたしが家で特に嫌だったのはこの時。1日のなかで1番たくさん叩かれる時間。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

この時だけは、何度そう口にしてもお父さんはなかなか叩くのをやめてくれなかった。

「ハルカ……ミカ……ハルカ……ミカ……」

ある日のことだ。

夕飯の後、いつものように叩かれていた際にお父さんの目が一度も見なかったことに変わった。

わたしの身体の上に跨り、よくわからないことを口走りながらわたしの首へと手を回していく。

痛くはなかった。けど苦しかった。

いつもと違う、嫌な感覚。死が近づいてくるのがわかる。

死んだ後はどうなるのだろうか。

天国と地獄が存在するという話は聞いたことがある。もし天国へ行けたなら、この苦しみからは解放されるのだろうか。

——けど、地獄は？地獄には想像もつかないほどの苦痛が待っていると聞く。

わたしは安心が欲しかった。確実に天国へ迎えるという、誰かの太鼓判が欲しかった。

もしも地獄へ行ってしまったのなら——またわたしは、痛いことをされてしまう。

「ミカ……父さんと一緒に、地獄へついてきてくれ」

「」

——痛いのは、嫌だ。

わたしは咄嗟に、そばに転がっていたステーキナイフを手にとった。

「……子供……それも女の子がやったっていうのか？これを……？」

赤く染まったわたしに毛布を被せてくれたおまわりさんが、なぜだか怯えるような目でわたしを見た。

「ごめんねお嬢ちゃん、もう一度聞いてもいいかな？」

顔のなくなつたお父さんに青いビニール袋をかけた後、1人の婦警さんが視線を合わせ
て尋ねてくる。

「家に誰か知らない人が入ってきたりとか……そういうことはなかったの？」

わたしは首を横に振る。

そこでわたしは気づいた。

目の前にいる婦警さんも、離れたところでお仕事をしているおまわりさんも。その場にいた全員が、わたしのことを化け物でも見るような目で見ているのだ。

「今日からここが、お前の家だ」

天涯孤独となったわたしを、1人のおじいさんが拾ってくれた。

その人はわたしに、可愛い服も欲しかったぬいぐるみも、なんでも与えてくれた。

「ここはお前と同じような子が暮らしを共にしている。じき、友達もできることだろう」
杖をつきながらそう語るおじいさんの横顔を、わたしは首を傾げながら見上げる。

——「友達」という言葉の意味が、よくわからなかった。

「あの子は危険です……感情の制御がまるで効いていない」

「既に何人もの子が彼女に大怪我を負わされているんです。このまま放っておくわけには……」

少しでも痛いことをしてくる人には、2度とわたしに近づかないよう仕返しをした。わたしはひとりになった。——いや、最初からひとりだった。

もう誰もわたしに近づこうとする者はいない。痛いことをする人もいない。そう思っていたのに——

「邪魔すんなよなユイ！」

「そこどけよ！」

「いやっ！」

なんとなく騒がしい空気が気になり、わたしは複数の子供が集まっていた校庭に足を

運んだ。

そこで目にしたのは一匹の猫を抱き上げている女の子と、複数人で石ころを片手に構えている男の子達。

「この子はなんにも悪いことしてないでしょ!? どうしてこんなひどいことするの!」
「ちっ……どかねえとこうだぞ!」

「いたっ……!」

1人が投げた石が少女のこめかみに当たり、白い肌にじんわりと血がにじんだ。

「かまわねえや、ユイごとやっちゃえ!」

「おおー!」

なぜだかわたしの身体が勝手に動いた。

「へ?」

その辺にあった手のひらに収まるほどの石を拾い上げ、無言で男子のもとへ駆け寄る。

前触れもなく振りかぶったわたしは、石を握りしめたまま殴るような動作でそれを少年の横面に叩きつけた。

「ぎゃっ……!!」

「氷室!？」

少年に馬乗りになった後、追い打ちをかけるように何度も拳で少年を打ち付けた。

「ひいつ……!!？」

「逃げろおおおー……!!」

取り巻きが走り去っていくなか、わたしの行動を止めたのは意外な人物だった。

「や、やめて! もういいよ! しんじやう!」

「……………」

わたしを止めたのは——猫を助けた少女だった。

「ば、化け物お!!」

血だらけになった少年が弱々しい足取りで逃げていくのを見送った後、わたしは少女と視線を合わせて口を開いた。

「痛くなかったの?」

「え?」

「痛くなかったの?」

「さっきの傷? そりゃ、痛かったけどさ……………だからってあんな、痛めつけるようなことするのは良くないよ」

「でも、仕返ししないとまた痛いことされるよ」

「ミカちゃんのは度が過ぎてるの!」

自分の名前が彼女の口から出たことに驚愕する。

思えば施設に入ってから同年代の人間に名前を呼ばれたことが一切なかった。

「名前わかるの?」

「まあ、君けっこう有名なだし。主に悪い意味でだけど」

「そう」

立ち上がり、踵を返す。

「あ、ちよつと待って!」

「……?」

肩にやさしい感触が置かれる。

振り向くとそこには吸い込まれそうなほどに大きな瞳があつた。

「あたし、葛城ユイ。助けてくれてありがとう。……けど、もうさつきみたいなのはしないでね」

「え?」

「自分がされて嫌なことはしちゃいけないんだよ。痛いのが嫌なのはみんな同じでしょう?」

「……………」

「バーイ！」と言い残して笑顔で去っていく、猫を抱えた女の子。

葛城ユイ——その名前が、わたしの心に深く刻み付けられた。



「……………っ！」

——痛い。

全身が強く打ち付けられる。

硬いタイルが敷き詰められた地面に倒れるミカを、白い歯車の戦士が冷たく見下ろした。

『経過はどうだ？』

「……………ダメですね。戦意というものをまるで感じない。ミカさんのハザードレベルをこれ以上引き上げるのは困難かと思われます」

システムに内蔵された通信機を通して、エンジンブロス——鷲尾雷斗が低い声にそう返答する。

青い生地の仕事着らしき衣服を赤く染めた少女。

この地下施設で現在行われているのは西都の新兵器である仮面ライダーの変身者を選出するための試験——というのは名ばかりで、その実不要になった組織の関係者を処刑する“作業”。

部屋の中央に転がっている、返り血の帯びたスクラッシュドライバーがその悲惨な現状を訴えている。

当初は数十人の人間がここに集められたが、最終的に生き残ったのはミカだけだった。

“人間だったもの”が辺りに転がるなか、ミカは虚ろな瞳で一点を見つめている。

『過去の記録を見て使える奴だと判断したんだがなあ。このまま本性を見せずに死ぬつもりなのか?』

「どうしましょうか?」

『どうもこうもないだろ、こうなったらもう本当に用済みでしかない。新たな候補者は後々決める。そいつの命にはもう価値はない』

「よろしいのでしょうか? ミカさんはユイさんの——」

『やれ』

雷斗の言葉を遮るように、スタークがそう指示を出す。

右腕の歯車を高速で回転させ、凶器と化したそれを掲げてゆつくりとミカに近づいて

いく。

「悪く思わないでください」

「そう……………だった」

「……………」

不気味にぶつぶつとつぶやきながら、ミカは静かに立ち上がる。

「わたしは……………ユイちゃんがいいたから……………こうして……………人らしくいられて——
——」

「なんだ……………!?!」

ゆらり、と幻影のような足取りでエンジンブロスへと歩み寄る。

「——ッ!!」

形容し難い悪寒を感じた雷斗は、激しく稼働している腕のカッターを彼女の頭部めが

けて振り下ろした。

「え……!？」

大げさな動作は必要なかった。

ミカは上から迫る攻撃を紙一重で避け、装甲の薄い首元へ的確に手刀を叩き込んだのだ。

「かつ……は……!？」

狼狽するエンジンブロスの横を通り過ぎ、ミカは床に落ちていたスクラツシユドライバーと1本のボトルを拾い上げる。

——『ねえ、みーちゃんって呼んでいい?』

——『いいなあ、長い髪。あたしもみーちゃんみたいに伸ばしてみようかな』

——『みーちゃん……たすけて——!』

君のせいだ

「痛いことは……しちやダメ……」

《スクラツシユドライバー!》

暗い瞳を浮かべたまま、ミカは自らの腰にドライバーを装着する。

人間はみんな、痛いことが嫌い。そう彼女に教わったから、自分はこれまで人の苦しみを理解しようとしてきた。

けど――

「ひとつ……聞きたいことがあるんです」

「……?」

「あなたは今、わたしをどうしようと思いましたか……?」

「……なにを言って——」

『ククク……! ハハハハハハハハ!!』

困惑する雷斗に構わず、通信を介したスタークは歓喜の声を上げる。

『待ってたぜこの時を……!』

「ユイさん……!?!」

『よく聞け氷室ミカ、オレ達は今からお前を——』

笑い混じりの声音がミカの耳に届く。

一転して上機嫌な様子で話し始めたスタークは、やけに強調した口調で彼女に伝えた。

『——地獄へ送ってやる』

直後、ミカの瞳に黒ずんだ光が宿る。

悲しそうに、そして安心するように、彼女はため息をつきながら返答した。

「よかった、じゃあ——」

——遠慮はいらないね」

《デンジャー!!》

《クロコダイル!!》

紫色のボトルに血のような亀裂が走る。

「まさかそんな……!!? ハザードレベルが急激に——!!?」

このまま何もしなければ、待っているのは死。

死んでしまえばもう何も残らない。たった一人の友達を想う気持ちさえも。地獄へ行くくらいなら——他人の痛みなんか顧みる必要なんて、ない。あの時、父にした時と同じように、

「変身」

やってみせる。

《割れる！食われる！砕け散る！！》

レバーを倒した直後、ボトルの成分がドライバーへと移動。

ミカの全身を包むようにビーカーが形成され、満たされた成分ごとワニの顎がそれを喰らう。

《クロコダイルインローグ！！》

《オーラア！！》

パープルで染められた刺々しい装甲に、ワニの顎を思わせる頭部。

「変身した……！？」

『ハハハハハ……！フハハハハハッ！！！！』

新たに誕生した仮面ライダーの姿を見て、スタークは高らかに声を響かせる。
『ついに覚醒したか……！仮面ライダー……！ローグ……！！』

張り詰めた空気が破裂する。

ローグは地を蹴り、目の前の敵を目標に——白い拳を突き出した。

第37話 戦意のボーダーライン

「スクールアイドル？」

「うん！」

「流行りのアレか………なんでまた急に？」

まだ戦争が勃発する前のある日のこと。

昼休みの職員室で惰眠を貪ろうとしていたその時、1人の教え子が部活の顧問をやつてくれないかと頼み込んできた。

「いや……それがさ、私と曜ちゃんだけじゃ足りなくて。キリオくんが顧問になつて口添えしてくれば、なんとか交渉できるかな………と思ひまして」

「“先生”を付けろ。というか……部の設立には5人以上必要だったはずだが？」

「そのあたりも含めて、一緒に生徒会長に頼み込んでくれると非常に助かるのですが………」

「あー………!?やだよめんどくさい」

「そこをなんとか！」

「だいたい相手は黒澤だろ？そんな例外を通すような奴じゃない。認められません

わあ」とか言うに決まってる。諦めるんだな」

そう口にした直後に失言をしたと気づく。

彼女に対して「諦めるか」や「やめるか」といった問いは逆効果だ。

……それを見る。目の前の少女は、諦めるどころかより一層瞳をメラメラと燃え上がらせて――

「諦めない!!」

全力でそう歯向かってみせた。



「やられたな」

政府官邸の一室。

塔野首相は眉根を揉み、側に立つキリオにそう投げかけた。

「北都は実質西都の勢力下。おまけに主犯格の葛城ユイと氷室ミカを両者とも取り逃がすとはな」

キリオは目を伏せ、現状を呪うように奥歯を噛みしめる。

数日前、西都政府は正式に東都へ宣戦布告を言い渡した。

西都と東都が敵対していると世間に知れた今、Bernageの正体を公表しても、東都側のでっちあげで済まされてしまう。

自分達はまたも、奴らに出し抜かれてしまったわけだ。

「……奴らの狙いは、東都政府が保管しているパンドラボックスかと思われます」

「ああ、私もそう考えている。西都政府のバックには難波重工が付いているわけだしな。奴らにとつては、未知の力を秘めたあの箱は喉から手が出るほど欲しいはずだ」

——パンドラボックス。5年前、突如としてこの地に飛来し、そしてこの国を分断するスカイウォールを作り出した悪魔の箱。

難波重工の目的は戦争を引き起こすことだけじゃない。絶対的な力を持つ兵器を生み出し、その果てに世界までも掌握することを企んでいる。

そのために奴らは………スタークやローグを使ってスクールアイドルを崩壊させ、箱を手に入れようと暗躍してきた。

「さて戦兎くん、今後の方針だが——」

研究室の机に突っ伏し、間の抜けた顔で真横に置いてあったオレンジフルボトルを眺める。

(……仮面ライダーを正式な防衛システムに、か)

首相から言い渡された提案を思い返す。

北都との戦いを経て——もはや仮面ライダーの存在が戦争の勝ち負けを左右することは、誰の目にも明らかだった。

もう単なるヒーローで居られる状況じゃない。東都の人々も、仮面ライダーの認識は“兵器”へと移りつつある。

(俺が仮面ライダーになったのは……千歌達を、自分を戦兎キリオらしくいさせてくれる人を守るため。そのためならどんな犠牲も厭わないと決めていたのに——)

……………彼女の口から聞いてしまった。

千歌の願いを。兵器ではなく、みんなのヒーローでいて欲しいと。

「なーにしょぼくてんのさ」

目だけを動かして背後からかった声の主を視界に入れる。

「……なんだ、いたのか」

「なにその言い草、私んちなんだから当然でしょ」

髪を解き、寝間着姿の千歌がそばにあった長椅子へ腰を下ろす。

キリオの様子をうかがうように視線を注いだ後、彼女は小さく問いかけてきた。

「ねえ、覚えてる?」

「なにが」

「スクールアイドル部を作った時のこと」

突拍子もなくそう尋ねてきた千歌に困惑しつつ、キリオはすぐに何気なく返した。

「その表現で思い当たることが多すぎて、なんの話をしてるかわからないな」

「じゃあ……ファーストライブの時」

「覚えてる、ビラ配りが面倒だった」

「いやもつと他にあるでしょ!」

さすがに今の答えは自分でもどうかと思ったので少し真剣に考えてみる。

思えばファーストライブの時は、それを開催すること自体が苦労の連続だった。

転入生の梨子を加えても部員が足りない状況に陥り、突如この学校の理事長に就任した鞠莉の計らいで部を設立できると思ったのも束の間、千歌達に突きつけられた条件は

「ファーストライブで体育館を満員にする」こと。

そのために彼女達は曲を作り、振り付けを考え、客を集めるための宣伝を行ったのだ。
「……………長かったような、短かったような」

最初は人数も足りなかった千歌達Aqoursが……………いつの間にか東都を代表する
スクールアイドルになって、ラブライブで優勝して——

同時に悪化する三国の関係とは裏腹に、スクールアイドルという文化は人々の注目を
集め、平和を支える大きな柱になった。

「今は国中が大変なことになってるけど……………私ね、みんなと一緒に頑張ってこれた毎日
のことを誇りに思うんだ。前にルビィちゃんと言ってたみたいに、それだけは絶対にな
くならない。……………キリオくんはどう？」

「……………」

一緒に頑張ってこれた毎日——

記憶喪失のキリオにとって、千歌達と過ごしてきた日々だけが積み上げてきたもの。
それ以外に誇れるものなんてない。

「ああ、俺もだよ」

だからこう答えるしかなかった。

千歌は微笑んだ後、不安げな様子でまた尋ねてくる。

「もし……もしさ、記憶が戻ったら……どうするの?」

おそるおそるそう聞いてくる千歌は、目を合わせて話すことを怖がっているようにも見えた。

「記憶………」

それは「自分を構成してくれる人を守る」こと以外に、唯一キリオが興味を持つことだった。

今の自分を創り上げているものとは全く別の「要素」。

すなわち戦兎キリオではない「本当の自分」を取り戻す手がかり。

目の前のことを片付けるのに精一杯で、最近はずっかりそんなことは頭から抜けていた。

「——俺自身、前の自分がどんな奴だったかなんて知らないしな。戻ったら戻ったで、その時考えるさ」

「内浦から——みんなの前からいなくなったりしない?」

「さあな」

跳ね上がるように椅子から立ち上がると、キリオは机に置いてあったオレンジフルボトルを手にとってそれを上着のポケットへ突っ込む。

濁すような態度にムツとする千歌を見て、苦笑しつつキリオは答えた。

「別に意地悪してるわけじゃない。まだわからないことだらけなんだ、そう無責任に約束することはできない」

「はいはい、わかってますようだ。——おやすみなさい！」

少しばかり不機嫌そうな顔で背を向けた千歌が出入り口の扉を開け、部屋を飛び出していく。

「……………まあ、でも」

その後ろ姿を見送った後、キリオは沈んだ表情で上着のポケットに触れた。

「忘れることはないだろうさ」



『ターゲットを確認』

『確保する』

北都と東都の境界線。

スカールウォールが間近に見えるその地で、夜闇に紛れた逃走劇が繰り広げられてい

た。

「くそっ……！西都の連中め……いったいどれだけのガーディアンを……!!」

腰にベルトを巻いた、みすばらしい布切れで身を隠した少年が駆ける。

現在の北都は西都に支配されている。奴らは東都に協力するふりをして、最初からこの地を狙っていたんだ。

「はあ——っ！」

立ち止まり、追っ手と相對する。

姿を隠していた布を自ら剥ぎ取り、少年——猿渡タクミは瞬時にスクラッシュゼリーを取り出し、ドライバーへ装填した。

《ロボットゼリー!》

「変身!!」

《ロボットイングリス!!》

《ブラア!!》

ヴァリアブルゼリーが弾けたのと同時に金色の戦士が20体を超えるガーディアン達の懷へ突っ込む。

《ツインブレイカー!》

《ビームモード!》

すぐさま出現させた武器を振り回して軍勢を攪乱しつつ、ボトルを取り出す。

《《シングル！》

《《ツイン！》

選んだのは「薔薇」と「ヘリ」、どちらも使い慣れているフルボトルだ。

ヴァリアブルゼリーで形成されたプロペラで円を描きながらガーディアンを巻き込んでいく。

「らあああああッッ!!」

付近の敵を片付けた後は棘を伸ばして離れた場所の目標もなぎ倒す。

爆発の光が星空の下で一瞬の輝きを放った。

「この数を一瞬で片付けるかあ。ますます腕を上げたみたいだね、猿渡タクミくん」

「……………？」

肩の力を抜いたグリスの背後にそう声かけられる。

タクミは後ろに立っていた人物の方へ、警戒心と共にツインブレイカーの砲口を向けた。

「葛城……………ユイ……………!?!」

そしてその人間を視認した途端に戸惑うような反応を見せる。

それもそのはず、目の前にいるのはスクールアイドルに精通している者ならば誰もが知っている程の著名人だったからだ。

慌てて変身を解除し腕を下ろしたタクミは、近寄ってきた少女の顔を奇異の目で見た。

「ん？……あーそつか、君はまだ知らなかったんだっけ」

「……？ どういう——？」

「これならわかるかな？」

少女はブレザーのポケットから1本のボトルを引っ張り出すと、タクミの眼前にそれを掲げてきた。

中心に刻まれているコブラの意匠。虫酸の走る喋り方をする奴が嫌でも連想される。

「コブラフルボトル……!? どうして————なんで……そんなもの……!?」

「お……そうこれだよこれ！ こういう反応が見たかったんだよねあたし——」

ステージ上で見せるような無邪気な笑顔で、少女は手中のフルボトルをコロコロと弄ぶ。

「まったくあのバカ教師ときたら勝手にシナリオ進めちゃうんだからさ。正体を明かすとなれば、やっぱり今みたいに間抜け面拝まないかねえ！」

「は……？」

「まだわかんない？ かー……頭がよわよわな人は嫌いなんだよねあたし。じゃあ大ヒントあげちゃうね。これで答えられなかったら毒殺だよ毒殺」

少女はどこからともなく取り出した拳銃を構え、持っていたボトルを――

《コブラ！》

それに突き刺した。

「なっ……！」

「蒸血」

《ミストマツチ！！》

闇のなかでも一際目立つ黒い霧が小柄な身体を包む。

《コッ……コブラ……コブラ……！》

《ファイヤー！！》

次にその姿を現した時、彼女はタクミが最も嫌悪する者となってその場に佇んでいた。

「さあ問題、あたしは誰でしょう？」

「ブラッド……スターク……！？」

「今度は正解！ やればできる子だね猿渡くん！」

「……っ……！」

霧散する赤い装甲から再び影の帯びた笑みを見せる少女と目が合う。

タクミは徐々に荒くなっていく呼吸を抑えるように自分の胸を抱きしめ、青い顔で口を開いた。

「……………意味が……………わからねえ……………」

「これからわかればいいよ。それよつか君に話があつてさ」

膝をつくタクミと視線を合わせた少女は、変わらない笑顔でひとつの提案を出してきた。

「西都の兵器として……………働く気はないかな？」

第38話 クイーンの日覚え

「あれから具合どう？」

「平気だよ。もうすっかり元気」

ぼつぼつと光の粒が浮かぶ夜空の下。並んでいる建物から見える2人の少女の顔。

それぞれの家のベランダに体重をかけ、千歌と梨子は向かい合いながら互いに不安な気持ちを慰めるように話していた。

「ただ……このバンブル、どうやっても本当に外せなくて……」

「工具とか使ってみれば？」

「試したわよ、でもダメなの。ダイヤモンドの手錠でもかけられたみたい……」

梨子は自分の左手に巻かれた黄金色の腕輪に触れ、困ったように眉尻を下げた。

機械的な回路のような模様が刻まれた、奇妙なブレスレット。

「それってその……ユイ——ちゃんの部屋にあったんだよね？そのまま付けてて大丈夫なのかな……？」

「それは………たぶん？」

「なにい、それ。梨子ちゃんらしくない」

「私にもよくわからないけど……でも、なぜだか大丈夫って気持ちになれるの」
バングルから伝わってくる不思議な感覚。

自分の手首でそれは生きているかのように「平気だ」と主張してくるのだ。

「今のところは異常もないし、しばらくはこのままでいいかなって考えてる」

「まあ……梨子ちゃんがそう言うなら」

「いざとなったら戦兔先生に頼んで外してもらうわ」

ふ、と息をつくように口を閉じた後、おもむろに空を見上げて梨子は言った。

「……………また、戦争が始まっちゃったんだね」

その言葉に千歌は目を伏せ、沈んだ表情を浮かべては小さくこぼす。

「……………こわいな。またたくさんの人が傷ついて、泣いて……………それでも何もできない日々が続くって思ったら、胸が裂けそうになる」

「…………それはみんなも同じだよ」

やるせない気持ちを吐き出せないでいる千歌をなだめるように、梨子は落ち着いた調子で続けた。

「でも、なににもできないって思い込むのは違うんじゃないかな」

「え？」

「確かに前までは……私達は戦争に巻き込まれた一般人でしかなかった。けど、みんなが揃ってる今なら変えられるんじゃないかなって」

この東都にいるのは自分達 A q o u r s だけじゃない。

S a i n t S n o w の 2 人 がい いる。キリオ がい いる。リュウヤ がい いる。内浦のみんなが揃っている。

「全国ライブはもう難しいかもしれないけど……それでも、なにか私達にできることを精一杯やる。そういう気持ちって、大切だと思うの」

「……………」

「————って……ほんとにこういうの、リーダーの口から出なきゃいけないような気がするけど?」

ぽかん、とした顔で自分の話を聞いていた千歌を見てなんだか恥ずかしくなり、梨子は頬を赤らめながら唇を尖らせた。

「そういえば梨子ちゃん、西都から帰ってきてから妙に大人っぽくなった?」

「も、もうっ! そういうのはいいから!」

「あつはは、ごめん」

千歌は再び視線の先にある地を見つめ、ぽつりとつぶやいた。

「……………」そっか、そうだね。大きなライブじゃなくなっちゃって、みんなのためにできるこ

とはいくらでもあるよね」

自分達がこれまで感じてきた、東都の——内浦この街の暖かさを、今度は目一杯この地に返す。

たとえ小さなことでも、それが今自分達にやれることなら………全力を尽くすだけだ。

「じゃあ久しぶりに体育館でライブしちゃう？ 聖良さんと理亞ちゃんも一緒に！」

「いいわね………つて、あのステージでその人数じゃ大きな振り付けにはできないわね………」

夜が深くなる。

明かりのほとんど消えた街で、少女達の談義の声が響いた。

●●●

「猿渡タクミ。農家の出身で現在は実家を離れひとり暮らし。Saint Snowの2人が通う高校でマネージャーとして活動していたところ、あたしにスカウトされて北

都の兵器となる——だったよね？」

青ざめた顔で自分を見上げている少年に向けて、ユイはさっぱりとした口調でそう尋ねた。

「ふふ」

「……なにかおかしい」

「いやあ、こうして考えるとバリバリ一般人だったんだなあ、と。あたしが兵器としての才能を見出さなければ、そこらへんの有象無象と変わらない人生を送っていたことだろうね」

コツ、と靴音を鳴らしながらタクミの真横を通り、背を向けながら彼女は続ける。

「今の北都は西都政府が占拠してる。君が必死に守りたがってたものはぜーんぶこっちの手の中だよ」

「……交渉する気はないみたいだな。要は人質取ったから言うこと聞けってことだろ？」

「ええ、まあ」

踵を返し、タクミの背中にそう返答するユイ。

夜風が両者の間を吹き抜ける。

「クソくらえだ」

直後、振り返り際にタクミが繰り出した右ストレートがユイの顔へ吸い込まれていく。

寸前でその打撃を受け止め上体を反りつつ勢いを受け流した彼女は、そのままバク転の要領で身軽に後退。タクミから数メートルの距離をとった。

「は……はあく!? 女の子の顔面を迷わず殴り飛ばそうとするなんて……なんて野蛮な人だ……とー!」

「うるせえ喋んな。お前の声は頭に響く」

《ロボットゼリー!》

「ちよちよちよ! なに戦おうとしてるんですか! ていうかあなたスクールアイドルにお熱だったでしょう!? どうしてあたしにここまで敵意むき出しにできるの!？」

「悪いがお前らにはそこまで興味がなかったもんでな。むしろスピード昇進すぎて違和感覚えてたくらいだ」

《潰れる! 流れる! 溢れ出る!!》

《ロボットイングリス!!》

《ブラア!!》

グリスへと変身を遂げたタクミがユイを睨む。

「……なるほどな。こういう裏があるとは思わなかったが………これで心置きなく、お前をぶつ飛ばせるぜ。なあ？ブラッドスターク……!!」

「ひいいい!!」

情けない悲鳴をあげながら突進するグリスの拳をひらりと避け、逃走を計ろうとするユイ。

「逃がすか……!」

その後ろ姿を捉えつつ、タクミは瞬時に方向転換して彼女を追う。

「聖良さんと理亞ちゃんがどうなってもいいって言うんですかあ!!」

「あの戦いから俺が何も知らないと思ったら大間違いなんだよ!あの2人が東都で保護されてるってのは……もう把握済みだツ!!」

《スクラップフィニッシュ!!》

「ひゃあああああつ!!?!」

高く飛び上がった後ヴァリアブルゼリーを両肩から噴射し、ユイの退路を塞ぐように彼女の目の前へ強烈なキックを轟かせる。

「あわわわわ……」

赤い複眼を輝かせる鬼神のようなグリスを尻餅をつきながら見上げたユイが身体を震え上がらせる。

「心火を燃やして……!!」

「き、きやああああああああ——!!」

「ぶっ潰す!!」

金色の拳がユイの頭部へと振り下ろされようとしたその時、

「——なんてね」

傍にあつた茂みの中から、とてつもない殺気が飛び出してきた。

《クラックアップフィニッシュ!!》

「なに——!?!」

意識の外から放たれた攻撃に反応することができず、タクミは草むらから現れた巨大な“顎”になすすべなく肉体を喰われてしまった。

「ぐああああああ……ッ!？」

爆発するかのような勢いで弾かれた身体が、数本のフルボトルを撒き散らしながらコンクリートの地面を転がる。

「なん……だ……!？」

顔を上げて闇に浮かんでいる影を捉え、幻想的な紫で染められた全身像を視界に入れた。

「きやー！ナイスタイミング！さすがだよローグ!!」

「ローグ……!?!西都の仮面ライダーか……!?!」

ローグと呼ばれた戦士は何も言わないまま動き出し、タクミが落としたフルボトルを淡々と拾い上げていく。

「……………」

回収したそれらをユイに手渡し、ローグは倒れ伏しているグリスへと再度視線を向ける。

「さて、と……今のうちに残りのボトルも差し出した方がいいよ、余計な苦しみを味わいたくねければね」

「……！お前……最初からそれが目的か……!?!」

「まあねー」

ユイは手に入れたボトルを懷にしまうと、再び見下すような目でタクミを見た。

「パンドラボックスってあるでしょ？あれって元々内側の箱と外側のパネルとで二重構造になっててね。力を引き出すには6枚全てのパネルとボトルが必要なんだよね」

「……………」

「その顔は心当たりがあるっぽい？ま、北都にあつたパネルは2枚ともあたし達が奪っちゃったんだけどさ」

「——ッ！」

横たわっていたグリスの肩に片足を置き、不気味に笑いながらユイは言う。

「いろいろと踏まえた上でもう一度聞こうか。このローグを備えた勝利確定のあたし達の敵になるか、それとも味方になるか」

「……………」

「なんならえーつと…………ルビィちゃん？あの子連れてきて侍らせてあげても——」

刹那、大砲の如き威力の一撃が放たれる。

首を傾けて回避したユイの頬に、細い血の筋が引かれた。

「きやはっ…………わかりやすいなあ」

ユイが軽く腕を振ったのを見て、ローグは乱暴にグリスの角を掴み取ると、目の前まで頭部を持ち上げた。

そしてもう片方の手で固く拳を作り、後方へと引き絞る。

「答えはNOということでは？」

タクミは余力を振り絞り、親指を立てた後ゆつくりとそれを――下へ向けた。

「やっちゃえ」

董色の成分で練り上げられた高威力の一撃が迫る。

「――」

抵抗しようにも全身に力が入らない。

（……………までか？）

薄れていく意識のなか、タクミは仮面の下で瞼を閉じ、最期の時を待った。

「……………!？」

が、しかし。

「うわっ!？」

「――!!」

突如グリスとローグの間に衝撃波が発生し、ユイ諸共強制的に彼から引き剥がされたのだ。

グリスの変身が解除され、意識を失ったタクミの身体は光に包まれ瞬時に消滅。
まるでどこかへワープしたかのような現象が起きた。

「……………っ……………！」

タクミの消えた空間を驚愕の顔で凝視したユイは、やがて引きつった笑いをこぼす。
「はっ……………ははっ……………クハハハ……………っ!!」

その場で大の字になって背中をつけたユイは、星空を見つめながら小さく口にした。

「まだ……………までの力があつたとはね……………」

「——ちゃん！梨子ちゃん！」

「ん……………」

ぼんやりと隣人の顔が見える。

「だ、大丈夫？」

瞼を開けた梨子は額に手を当てながら起き上がると、向かい側のベランダで身を乗り出している千歌の方へ身体を向き直した。

「あれ…………私……………」

「急に倒れるからびつくりしたよ。立ちくらみでもした？」

「え…………？」

どうやらほんの数秒間、自分は意識を失っていたらしい。

胸をなでおろす千歌と自分の身を交互に確認し、梨子はふと左手のバンダを視界の中心に捉えた。

「今日はもう休んだほうがいいよ」

「う、うん……………そうする」

「それじゃあおやすみ」

「おやすみなさい」

背を向け、ベランダから自室へと戻る。

——『少し借りるぞ』

気を失う直前、女性の声でそう聞こえた気がした。

（あなたは……………いったい誰なの……………？）

バングルに宿っているであろう存在に向けて心の中で問う。

その夜……………答えが返ってくることはなかった。

第39話 揺らぐマイソウル

「ふう……ここまで来るのは少し骨が折れるね」

晴天の空の下で、黒髪が風になびく。

力強い踏み出しで坂道を進んでいる者が1人。

ジャケットを羽織り、きりりとした瞳が少年のような印象を与えるが、その人物が下に着用しているのは白のミニスカート。

少女は奥にある大きな建物へと繋がっているその道を歩き続け、やがて期待のような感情を含んだ眼差しで言った。

「楽しみだなあ、あの子達と会えるなんて」

「浦女で特設ステージを使ったライブ……………か」

西都と東都の間の亀裂が徐々に大きくなっていく日々のなか。

キリオは部屋に集まっていたAqoursとSaint Snowの面々から次に行うライブ計画を聞かされていた。

「ええ、今まで企画していたものと比べればささやかなものかもしれませんが……」

「それでも今はこれしかないですよね」

苦しい表情で語るダイヤに落ち着いた佇まいを崩さない聖良がそう同意する。

「彼女達……Bernageの2人がスクールアイドルを崩壊させようとしているのなら、私達はそれに真っ向から戦います」

「スクールアイドルは終わらない。それを示すためのライブをするのですわ」

息を揃えてそう口にするダイヤと聖良に、続けて千歌達も同時に首を縦に振った。

（……やっぱりこうなるか）

それを見たキリオも目を強く閉じて考える。

彼女達が黙って見ているままなわけがないとわかってはいた。そろそろ行動を起こしてくる頃だろうと察してさえたのだ。

千歌達がそういう気持ちになるのも最もだ。それを否定するつもりは全くない。

だが、

「……西都の連中が睨みを利かしている間は無理だ。奴らはあらゆる手段を使って妨害してくるぞ」

A q u o r s と S a i n t S n o w——東都と北都を代表するスクールアイドル達。その影響力は絶大だ。

そんなグループのライブを……難波重工と西都政府が放っておくわけがない。

奴らは確実に来る。そしてライブを破壊し、最悪出演者^{千歌達}に危害が及ぶ可能性だってある。……いや、葛城ユイならそう考えるはずだ。

かつての計画が全てめちやくちやにされたように、今回もその悲劇は繰り返されるんだ。

これまではみんなの意思を汲んできたが、今回ばかりはそうもいかない。

「悪いが今の状況では認可できない」

「キリオくん……!?!」

当然了承を得られるだろうと思っていたのか、千歌は虚をつかれたように瞳を見開いた。

「そんな、どうして……?」

千歌の隣に座っていた曜が腰を上げて抗議するように尋ねる。

キリオは眼前のテーブルに視線を落としながら、冷たい声音で返答した。

「……最初の合同ライブの時も、全国ライブのために他の国へ向かった時も、何もかもが失敗に終わった」

「それは……」

「あいつらはどこでライブを計画しようが必ず嗅ぎつけてくる。……次は死人が出るかもな」

「そ、そんな……！脅すようなこと言わなくても……」

しゅん、と静まり返ろうとする空間。

それを打ち破るような勢いで、ツインテールの少女が口を開いた。

「ちよつと待ってよ……！」

大声でそう言い放ったのは理亜だった。

彼女は必死な表情でキリオを睨むと、強く席を引いて立ち上がった。

「私達は……スクールアイドルとして戦わなくちゃいけないの！戦わないと意味がないの……！でないと、何のために……私はいつを——」

徐々に涙を溜めていく理亜の目と向き合い、キリオは一拍置いて答える。

「ライブを“戦い”なんて表現するな。お前らがするべきは人々を戦争の不安から救うパフォーマンスだろう」

「だから……そういうことを言ってるんじゃないかって……！」

「……………お前も抱えているものはそう単純じゃないだろ」

ふと理亞から彼女の隣に座っていた聖良へと目を移すキリオ。

それに気がついた理亞はぐつと言葉を飲み込んで不安げな瞳で自らの姉へ視線を注いだ。

「……………理亞？」

「う……………」

なんのことだかわからない、といった様子の聖良とは逆に、理亞自身は自分の胸に両手を当てて何かを隠すような素振りを見せた。

理亞がハードスマッシュになってしまったことは聖良はまだ知らない。

……………大方、もしもライブ中に襲撃された際には自分の力だけで窮地を脱しようとも考えていたのだろう。そんなことをすれば当然姉にそのことは露見してしまう。

「ともかくこの件は一旦保留だ」

これ以上の議論は必要ないとも言うように、キリオは白衣を翻して部室から出て行ってしまった。

「お前らしくないな」

「万丈？」

扉を開けて体育館に出たその時、傍の壁に寄りかかっていたリュウヤがそう投げかけてきた。

「聞いてたのか……」

「高海達に甘いお前のことだから、二つ返事で許可すると思ったぜ」

「今までとは状況が違う。敵の攻撃対象がスクールアイドルだとはつきりわかった以上、あいつらをみすみす危険な舞台に立たせるわけにはいかないんだよ」

目を合わせようとしないうままそう語るキリオに、リュウヤは違和感を覚えずにはいられなかった。

「お前……怖いんだろ」

「は？」

「自分のことも、あいつらのこともわからなくなってきたて怖がってるんだろ？」

こちらを見据えてそう問い質してきたリュウヤに面を食らったような顔を向ける。

彼の静かで真剣な問いに、キリオもまた正直に答えようと口をもごもごと動かした。

「……やるべきことがわからない。一体なにがあいつらのためになるのか……俺にはわからないんだ」

胸元を押さえてそうこぼすキリオ。

千歌達のことを蔑ろにはしたくない。けれど彼女達がライブをするとすれば、それは常に危険と隣り合わせの状況となってしまう。

自分はどの立場でそばにいてやればいい？

教師としてか、仮面ライダーとしてか、それとも――

「……なにお前、ホントにいつもそんなこと考えながら行動してんのか？」

呆れたような物言いをするリュウヤにキリオはむつと眉をひそめた。

「なにが言いたい？」

「ずいぶん面倒くさい生き方だなあって」

「面倒くさい……？ なのにも考えないで生きる方が難しいだろ」

「いや……そういうことじゃなくてだな」

腕を組み、数秒考え込むように頭を悩ませた後、ハツと思いついたようにリュウヤは言った。

「シンプルに自分がやりたいと思ったことをするだけじゃダメなのか？」

「やりたいと思ったこと………？」

「ああ。やるべきこと」 じゃなくて、 “自分がやりたいと思ったこと” をするんだよ。それなら後悔なんてしなくて済むだろ？」

に、と歯を見せながらそう語るリュウヤを見て、なぜだか心の奥が暖かくなった。

「……子供は気楽でいいよな」

「ああ!?なんだよ人がせっかくアドバイスしてやってるつてのに!」

「でもまあ……お前の言うことも間違ってるかもしれない」

好き勝手やれる大人だからこそ、自分自身の行いに責任を持ち、尚且つ自由に行動できる。

戦兔キリオとして、やりたいこと――

「だけどな、現実問題どうしようもないんだ。あいつらがライブをしたいと言っても、俺達が西都に対抗できる力があると断言できる状況じゃない。スタークの出方がわからない以上、むやみな行動は――」

「あのおー……」

どこからか飛んできた声が耳朶に触れる。

それがリュウヤの背後から聞こえてきたことに気づき、キリオは咄嗟に彼の後ろを覗き込んだ。

立っていたのは私服姿の少女。外見から判断して千歌達と同世代くらいだろうか。

「すみません、ちょっとお聞きしたいのですが」

（……なんだこの感じ？）

既視感のようなものが頭によぎる。

黒髪の少女は、薄い愛想笑いを浮かべながら……………2人に向けて尋ねてきた。

「“スクールアイドル部”の部室って……………こつちで合ってますか？」

（なんか——渡辺に似てる？）



「紹介するね。こちら私の従姉妹の月ちゃん」

「初めましてヨーロシクー！みんなのことはいつも曜ちゃんから聞いているよ！」

曜からの紹介を受けると同時に彼女が見せた敬礼ポーズにまたもデジャブを感じる。

渡辺月——曜の従姉妹と聞いてどこか似ているのも納得できた。

すぐに彼女との繋がりを察することができたのは外見というよりも身にまとう雰囲気

気がそっくりだったからだろう。

「曜ちゃんの……従姉妹お!？」

「ん、あれ?もしかして話通ってない?」

「ご、ごめんね。ここのところバタバタしててすっかり今日のこと頭から抜けてた……」

「あはは、まあしょうがないか。こんな状況だもんね」

一向に話が見えてこないのどこちから尋ねようとキリオが口を開いた。

「渡辺」

「はい?」

「あ、いや………曜の方。これはどういうことだ?」

「それがね、実は前から月ちゃんから“A q o u r s”のみんなと会ってみたい”って頼まれてて、北都との戦争が終わった時に『近いうちに内浦に来てみない?』って誘ってたんだけど………」

歯切れ悪くそう説明する曜。

つまりあの戦いの直後に月を本日内浦へ来るよう誘ったはいいものの、タイミング悪く西都との争いが激化してしまったと。

「なんだか忙しそうにしてるけど、今日訪ねるのはまずかったかな?」

「ううん、そんなことないよ!曜ちゃんの知り合いだったら大歓迎だよ!ね、キリオくん?」

「ああ……」

本当は事前に一報入れてほしかったところだが、来てしまったものはしょうがない。

「ところで……そちらのお二方は？」

「俺は戦兎キリオ。内浦で教師をやってる者だ。こっちは——」

ふと横に立っていたリユウヤを見て凍りつく。

すっかり忘れていたがこいつは元々西都の人間。顧問であるキリオはともかくリユウヤだけはこの場にいる時点でバリバリ不自然な人物だ。

仮面ライダーですと紹介するわけにもいかない。どう誤魔化したものか。

「こいつは……俺の従兄弟で、名前は万丈リユウヤ」

「あ？なに言ってるんだお前」

「お前はちよつと黙ってる」

「ああ、なるほどあなたが“キリオくん”ですネ！お若いので先生だとは思いませんでした」

リユウヤの口が滑らないように睨みを利かせつつ、即興の設定を伝える。

千歌達も色々と察してくれたようで、苦笑いしながらも「うんうん」と首を振って話を合わせてくれた。

「うん？……あれ!?奥に座っている2人はもしかして……!?」

S a i n t S n o wの方を見て驚愕の表情を浮かべる月。

そんな彼女にいち早く反応したのは聖良だ。

「えつと……………しばらくの間この街に滞在させてもらっています、鹿角聖良と言います」

「鹿角…………理亞です」

「え、本物!? 北都を代表するスクールアイドルがどうしてここに!」

「まあ…………色々あります」

予想以上に食いついてきた月に圧倒されつつも、聖良がその場をしのぐと言葉を濁らせた。

感嘆のため息をついた月が改めて部屋にいる面々を見渡し、興奮の冷めきっていない調子で言った。

「本当に驚きだよ。A q o u r sのみんなに会いに来たのに…………まさか仮面ライダーとS a i n t S n o wさんもいるなんて!」

「え?」

「え?」

「あ?」

月以外の全員が目点を点にしてお互いの顔を見合わせる。

「ん、どうかしました?」

「ちよつと……待て、今なんて……?」

「月ちゃん、どうしてキリオくんと万丈くんが仮面ライダーだつて知つて……?」

曜が皆の疑問を代弁して尋ねてくれる。

彼女の問いを聞いて、月はきよとした顔で自分のスマホを取り出してはおもむろにその画面を掲げた。

「どうしてつて……ちよつと前に政府が発表してたよ。『東都の新しい防衛システム、仮面ライダー』つて……ほら」

彼女が見せてきた画面に大きく書かれている2人の人物の名前。

仮面ライダービルド——戦兔キリオ。

仮面ライダークローズ——万丈リユウヤ。

「はっ……!? はあああああッ!?!?」

「あ?」

まだ了承していないはずの案件がいつの間にかまかり通っていることに思わず叫ぶ。
相変わらず状況が理解できていないリュウヤを尻目に、キリオは東都政府首相の不敵な笑みを思い出していた。

(あの……野郎……!!)

第40話 スクールアイドルの反撃

「あの発表はどういうことですか首相？」

慌てて部室から退出したキリオは塔野首相へ抗議しようとビルドフォンを耳にあてがった。

怒気のこもった声を聞いた首相は、静かに笑い飛ばすように何気ない態度で返してくる。

『なんの反応もなかったんで、君達も同意の上だと思っていたのだが……』

「そんなわけではないでしょう。俺も万丈も……あんたの良いように使われる気はない」

『では北都との戦いの際に手を貸してくれたのは気まぐれだったと?』

「……あれはこちらの生徒を救出するために仕方なく行ったことです」

そうだ。北都へ攻撃を仕掛けたのはルビィを助けるため。侵略行為が目的じゃない。

防衛システムと称しながら、首相は仮面ライダーを単純な兵器としてしか見ていないに決まっている。

東都政府の管理下に置かれ、ただ他国への攻撃を繰り返すだけの道具になるなんて

……そんなのは――

(……千歌が望んだことじゃない)

ビルドフォンを握る手に力が入る。

キリオは自分でも不思議なくらいに嫌悪感を剥き出しにしながら塔野首相の言葉を聞いた。

『君はこの国をひとつにできる力を持っているというのに、ただ“守る”ためだけに仮面ライダーとして戦うと?』

「……………そうです」

電話越しに首相がため息をつくのがわかった。

『——— いったいなにが君をそうさせる? 強大な力を有していながら、それを有益に使おうとしない理由はなんだ? 』

塔野の語気が徐々に強まる。

パンドラボックスの光の影響を受けているであろう人間の1人である彼にとって、力を備えていながら他国への侵略にそれを使わないことは理解し難い愚行なのだろう。

「それは……………」

首相の問いに対して、すぐに返すことはできなかった。

空っぽだった頭の中に一筋の光が差し込む。

キリオはふとリュウヤとのやりとりを思い出し、半ば無意識にそれを口に出してい

た。

「それは——俺が、そうしたいと思ったからです」

これが最適な答えだと……………なぜだかそう思えた。

『……………いいか戦兎くん、西都は未だに派手な動きは見せていない。仕掛けるなら今がチャンスなんだ。先手を打つことが我が国の“防衛”に繋がるんだよ』

「攻撃は最大の防御なんて理屈、通りませんよ」

ビルドフォンを耳から離し、強制的に通話を終了しようとしたその時だ。

『君は何もかもを先延ばしにしているだけだ。それでは根本的な解決にはならない。……………いつかそれを思い知ることになるぞ』

そう最後に言い残して、首相はキリオとの通信を切った。

「そうだとしても俺は……………後悔しない方を選ぶ」

誰もいない体育館に向かってひとり呟いた後、キリオは強い意志の宿った眼差しで振り返り、再び部室へと戻っていった。

「ぼ、ボクの知らないところでそんなことがあったんだね……………」

月が呆けた顔でそうこぼす。

これまで巻き込まれてきた戦争と、その発端となった人物であるBernageの2人。

できるだけの情報を月に話し終えた千歌達は、改めて自分達が歩んできた過酷な日々を思い出しては鳥肌を立たせていた。

「まあ、私達はキリオくんと万丈くんが戦うのを見てることしかできなかったけどね」

「それにしても西都を代表するスクールアイドルが戦争を……………か。著名なグループはチェックしてたから割とショックだよ……………」

「……………私も」

月が肩を落とすのを見て、梨子も力が抜けたように俯いた。

「なによ、リリーったらまだあんな奴らのこと気にかけてんの？お人好しが過ぎるわよ」
呆れた様子でそう指摘する善子に自虐交じりの笑みを返そうとする梨子だったが、すぐに真剣な眼差しを取り戻して再び口を開いた。

「でもあの2人のライブを思い出すと……全部嘘だったとは思えないの。上手く言えないけど……スクールアイドルとしてステージに立っている間は、ユイちゃんもミカちゃんも、純粋にその時間を楽しんでたんじゃないかなって……」

同じくそのような心当たりがあつたのか、千歌達は互いの顔を見合わせては期待と不安の混ざった表情を浮かべた。

「ねえ、万丈くんってあの2人と同じ難波高校の人なんだよね？」

「万丈くんはどう思う？」

「お、俺？」

急に皆の視線が集まったことでリユウヤがたじろぐ。

腕を組んで懸命にBernageの2人について覚えていることを思い出そうとするリユウヤだったが、考えれば考えるほど彼の顔は曇っていく。

「……今思えば、ライブの時——」

「なにかあつたの？」

「いや、大したことじゃねえんだけど……。あの性悪が葛城の本性だとするなら、ライブの時のあいつは別人みたいだなって……。今思った」

「それは当然じゃないのか？ あいつは今まで猫被ってたわけだし」

「違うんだ、そういうことじゃなくて……。くそっ……。上手く言えねえな」

キリオの問いを聞いて余計に混乱する様子を見せるリウヤ。

「氷室はどうだかわかんねえけど、葛城に関しては確かに素性を隠すためだけにスクールアイドルをやったとは……思えねえんだ」

キリオを除き、その場にいた全員がユイに対してまた別の疑問を抱き始めていた。

同年代だからこそ感じるものがあるのだろうか。

スタークとしての彼女と対峙したせい、キリオにはどうしても葛城ユイという存在に対して現状以上の理解を深めようとは思えなかった。

「これ以上考えても仕方ないだろ。今重要なのは葛城と氷室が敵で、あいつらは問答無用でお前達を潰しにかかってるってことだ」

「それは……たしかに」

再び淀んだ空気が充満する。

「そうだ！」

誰も喋ろうとしないまま1分ほどの時間が経った後、唐突に何かを思いついたように月が手を打った。

「月ちゃん、どうかした？」

「今の君達はさ、そのスターク？つて奴が監視しているせいでライブができないんだよね？」

「う、うん」

にに顔のまま質問を投げかけてくる月にわけもわからず曜が返答する。

「なにか思いついたことでも？」

「まあね」

「本当!？」

聖良、理亞に続いて自信ありげに胸を張る月のもとへ皆が詰め寄った。

「でもそれってさ、ライブ会場さえ秘匿しちやえば解決することじゃないのかな？」

「ライブ会場を秘匿……？」

「はい！」

首を傾けておうむ返しするキリオに向けてウインクを飛ばす月。

「これまでのやり方だったら告知ひとつで敵に君達の居場所を晒しちゃうからね。ならそれをしなければいいんだよ」

「会場の告知をしないって……それじゃあお客さんは？」

「まあ、当然来れないだろうね」

「じゃあダメじゃねえか!!」

混乱した様子でそう指摘するリュウヤを尻目に、キリオがハッと気がついたように大きく目を見開いた。

月が言わんとしていることがわかったのだ。

「そうだ……その手があったか……! どうして今まで気付かなかったんだ……!!」

「え、なに?」

「もったいぶらずに tell me!」

「そうですわ、もつと皆さんにわかるように言っていただけない」と

こほん、と咳払いした後、月はテーブルの隅に置いてあった黄色のPCを指しながら言った。

「つまるところ初心に帰るんだよ。みんな初めから会場を設営してライブをするわけじゃなかったよね? ラブライブ出場に必要な知名度を上げるために、最初にやったことはなんだったか思い出してみて」

「最初にやったこと——」

千歌が隣に座っていた曜、向かい側の席に腰掛けていた梨子、続いて善子、花丸、ルビィ、と各々に顔を合わせる。

一方で果南、ダイヤ、鞠莉、理亞、聖良の5人は、一足早くにその答えにたどり着くことができた様子だった。

「ああ~~~~!!!!」

「ネット配信!」

舞い降りた妙案に声を上げる千歌達。

そう、月が言いたかったのはそれである。

至つて単純な仕組みだ。千歌達11人が誰にも知られることのない極秘の会場でライブを行い、その光景を様々な媒体を通して生放送すればいい。

それなら西都の連中に嗅ぎ付けられることなくライブを完遂することができる。これまでのようなリスクがゼロになるのだ。

「名付けて、『Saint Aqours Snow全国ライブビューイング大作戦』!!」

「まんまじゃねえかよ!」

「でもこれならいけるよ!」

「月ちゃんかしこい!!」

一転して活気を取り戻した部室内を見渡し、キリオが安堵のため息をつく。

（まったく……本当にたくましい奴らだな）

こんなどん底のなかでもしぶとく次の手を打てる。スクールアイドルとして活動を続けていくうちに培われた意地の強さというべきか。

「ねえキリオくん、これならいいでしょ!?ライブできるよね!」

「わかった、わかったから。近い近い」

興奮気味な調子で踏み出してきた千歌から視線を逸らすと、その先に立っていたリユウヤと目が合った。

「なんかよくわかんねえけど、よかったな」

「ああ」

自然とキリオの口元が緩む。

皆の焼ついていた熱意が再び燃え上がるのを強く感じた。

弾くように身を翻した千歌は「よーし!」とテーブルを囲んでいた皆の輪に戻ると、広げた手のひらを中央へ差し出した。

「やろう、みんなで!スクールアイドルは不滅だってことを……ユイちゃんやミカちゃんに見せつけてやろう!」

「ボクもやれる範囲で協力させてもらおうよ」

「ここから反撃ですね」

月、聖良から始まり、次々に千歌の手にみんなの手のひらが重ねられていく。

「ほら、2人も!」

「え?お、おう!」

「ああ」

リユウヤとキリオも加え、全員で円陣を組んで改めて気合いを入れ直した。

「今は聖良さんと理亞ちゃんもいることだし——」

思い切り息を吸った千歌が引き締まった表情で声を張る。

「Saint Aqours Snow!!」

——サンシャイン!!

小さな部室内に掛け声がこだまする。

これから始めようとしているのは、全てのスクールアイドルの想いを背負って行う反撃のライブだ。

西都に潜んでいる難波重工の魔の手から——スクールアイドルそのものを救うライブ。

国中の人々の不安をかき消すような歌を届け、再び平和の象徴を築き上げるんだ。

●●●

「……………小賢しいマネしてくれちゃうなあ」

不機嫌な様子でスマートフォンを操作しながらニュース記事に目を通していたユイが不意にそう呟く。

急遽発表されたAqoursとSaint Snowによる合同ライブ。それは客の現地参戦枠がゼロという一風変わったものだった。

最初から最後までインターネット上の配信や、映画館の劇場等を用いたライブビューイングのみ。西都側の妨害を危惧していることは明らかだった。

「……………あいつの入れ知恵にしては少し強引な気もするし……………別の誰かがあの子達にアドバイスを……………」

回転椅子に腰を下ろし、ぐるぐると回りながら思考を巡らせる。

直後、部屋の扉が開かれ、薄暗い空間に放射線状の光が差し込まれた。

「ユイさん、奴らの動向を探っていた者から報告がありました」

「おつかれ雷斗さん」

靴音を鳴らしながら近づいてきた雷斗から数枚の資料を受け取った後、ユイはなかなか出て行かない彼の視線の先を見た。

部屋の奥で座り込んでいる人影に——雷斗は恐れるように眉をひそめている。

「どうかしたの雷斗さん？」

「……いえ。では失礼します」

そう言つて逃げるように退出していった彼を見送つた後、ユイは抑えていたものを吐き出すように笑い声を上げた。

「ぶはっ……あつはははは!!今の雷斗さんの顔!完全にトラウマになっちゃつてるよ!」

腹を抱えながら手元の資料を読んでいく。

書かれていたのは現在東都にいる戦兔キリオと、その仲間達の動きについて。

さすがに向こうの警戒も強いいため詳しいことは調べられないが、些細な変化を見つけるぐらいは容易だろう。

「……………ん?誰…………?」

数枚の盗撮写真に目を通していくうちに、ユイ自身も初めて見る人物が写っていることに気づいた。

ボーイッシュな雰囲気を持った黒髪の少女。親しげにAqoursやSaint Snowのメンバーと話している様子がうかがえる。

「……………いつか」

鋭い眼光を写真のなかの少女に向けたユイは、ほとんど放り投げるようにそれ以外の資料をテーブルへ置く。

「新しい任務だよ」

席を立ったユイが部屋の奥へと進み、暗がりのなかで座り込んでいた人物に持っていた写真を見せつけた。

「こいつ殺して、一刻も早く」

「……………危険なの？」

「うん、たぶん千歌ちゃん達に今回のライブのアドバイスしたのもこの子。……………こういう小細工を考える輩は早い段階で始末しておかないと、後々面倒くさいことになる」
俯いていた顔が上がり、隠れていた表情が露わになる。

「いけるよね？」——「ローグ」

第41話　ならず者ガール再燃

「理亞、今のところテンポが遅れてましたよ」

「ルビィは力みすぎて振り付けが急ぎ気味ですわ」

「ごめんなさい……」

「本来は9人でやる予定のダンスだったからねえ……。まだまだ聖良さん達と調整が必要そう」

少女達がお互いの欠点を補い合い、汗を流しながら徐々にそのパフォーマンスの完成度を高めていく。

屋上で懸命にダンスレッスンをする千歌達を、キリオ、リュウヤ、月の3人は自己紹介を兼ねた会話を交えながら見守っていた。

「パンドラボックスの解析を？政府直属の研究者つてことですか!？」

「まあ一応……そうなるのか？」

「へえ……なんだかすごいですね……」

戦争が始まってからはパンドラボックスの解析も疎かになってしまっていたので、正

直月に尋ねられるまではキリオ自身も政府の研究者であることを忘れていたのだが。

月は興味深そうに頷き、続いてリユウヤを見やる。

「そして万丈くんは格闘家……と。戦兎先生とは真逆のバリバリ肉体派。同じ仮面ライダーでこうも違うんだね……」

「筋肉がある分俺の方が強いけどな」

「……ふ」

「ああ!?!んだ今の笑いは!!」

(仲良いなこの人達)

子供のような言い争いをする2人を面白そうに眺めた後、月は奥の方で振り付け練習に励んでいる千歌達へと視線を移した。

これまでの鬱憤を晴らすかのように、みんな瞳を輝かせて存分に身体を動かしている。

そんな彼女達の姿を、月もまたキラキラとした目でじつくりと視界に収めようとしていた。

「渡辺従姉妹は——」

「その呼び方面倒じゃないですか……? 月でいいですよ」

「……まあ、そのうちな」

微妙な表情ではぐらかしたキリオが気を取り直して月に尋ねる。

「渡辺従姉妹は、スクールアイドルやったりはしてないのか？」

「うーん……ボク自身が活動することはたぶんないと思います」

「え、なんでだ？」

自前のデジカメをいじくりながらそう答える月に、リュウヤが首を傾けながらそう聞いた。

「かわいい衣装を着て踊ったり歌ったり……ボクにはそういうのは似合わないと思うし——」

「なんでだよ、めちやくちや似合いそうじゃねえか」

「あはは、ありがと。でもね、ボクのなかでは“やってみたい”って想いより、“見守りたい”って想いの方が大きいんだと思う」

デジカメのレンズ越しに千歌達の姿を捉え、月は静かに続けた。

「曜ちゃんから話を聞いて、初めてスクールアイドルのライブを見た時は衝撃を受けたよ。どこにでもいるような普通の子達が、一生懸命ひとつのことに打ち込んでいる姿は……本当に輝いて見えた」

そう語る彼女の姿は、とても楽しげに感じる。

「けどボクが曜ちゃん達のように輝く側の人間になったら……今みたいな光景は見られ

なくなるんじゃないかって……そう思ったんだ」

気持ちのいい笑顔でそう口にする月の横顔を、キリオは表情を変えずにただ見つめ続けた。

彼女はどこまでも輝きを “見る” 側でいたいんだ。さながら太陽の光を浴びて輝く月のように。

「だからボクは、あくまでみんなを支える立場でいたい。それがボクの……精一杯やれることだから」

レンズから目を離し、明るい表情で彼女はそう言う。

どこか達観しているような印象を与えてくる月に驚きつつも、キリオはそんな彼女に自分と似通った部分を感じ、心の中で呟いた。

(……………輝きを支える……………か)

ライブを見て応援する観客。サポートをするマネージャー。部を管理する顧問。これらも全てスクールアイドルと連なっているもの。

様々な人達が繋がり合って形成されていくのがスクールアイドル。協調という人々の性質が形となった一種の可能性だ。

スカイウォールによって分断されたこの国を救えるものがあるとすれば……………それは政府でも武力でも、ましてや仮面ライダーでもない。

人間の協力し合う心が集まって出来ているスクールアイドルという文化こそ、この国を戦争という悲劇から救世する唯一の方法。

「ライブ、成功するといいな」

微笑みながらそう言うリユウヤにつられて、キリオと月も自然と表情が綻んだ。

「ちよつと一旦ストップ！」

突然聞こえてきたその一声に3人が硬直する。

塀から上半身を乗り出してその声を上げたのは、先ほどまで皆と一緒にダンスの練習をしていた曜だった。

「どうかしたのか？」

ただならぬ空気を感じ取ったキリオが立ち上がり、彼女のもとへ駆け寄ろうとする。両手で形取った双眼鏡で航海士の如く遠方を覗いた曜は、やがて啞然とした顔で言った。

「ねえ、あの黒い煙……………なんだろう？」

数キロ先に立ち上っている黒煙に全員の視線が集まる。

その後、

「きゃあつ!？」

「うわ…………っ!？」

強烈な閃光が迸り、千歌達のいる浦女の屋上まで爆風と衝撃が届いてきた。

縮めた身体を立ち上げ、血相を変えたキリオが瞬時に千歌達の方を向き直る。

「避難所だ!…………黒澤!みんなを連れて一番近い場所へ!」

「は、はい!」

「渡辺従姉妹もこいつらについていけ!」

「はい———って、もしかしてこれって……………」

「ああ」

鋭利な目つきへと変わったキリオとリュウヤを見て、月はやつと異常事態だと気づくことができた。

「……………西都の襲撃だ」

●●●

「西都の軍隊だ!!」

「逃げろおおおっ!!」

散り散りになって逃げ惑う人々の声が鼓膜を揺らす。

冷たい歯車で構成された装甲を引きずりながら——鷲尾風華は弟と共に無言で街を蹂躪し続けた。

何も考える必要はない。ただ物言わぬ兵器となつてひたすらに攻撃を繰り返せばいい。

そう、何も考えず——主人の命令通りに事をこなせば、それで……………。

「——さん……姉さん？」

弟の声が聞こえ、マスクの下で風華はハツとするように瞼を開いた。

隣に立つ白い戦士……………エンジンブロスに目を向ける。

「どうしちゃったんだ、ぼうつとして」

「……………ぼうつとしてた？」

「ああ」

「そう……ごめんなさい」

「しつかりしてくれよ姉さん。難波重工の未来がかかってるんだ、失敗は許されない」

「そうね」

《ギアリモコン！》

《ファンキーショット!!ギアリモコン！》

手に握っていたライフルモードのネビュラスチームガンを構え直し、前方から接近してくるガーディアンズの群衆に向けて発砲。

高速回転する巨大な歯車と化した弾丸が隊列のど真ん中を突っ切り、ガーディアン達を四方へ吹き飛ばした。

『排除する』

仕留め損ねた敵がリモコンブロス目掛けてマシンガンを乱射する。

が、放たれた弾丸の雨は彼女を守るように出現した白い歯車状の盾によって防がれた。

「次」

エンジンブロスが障壁を張って守りを固めている隙を狙って、リモコンブロスは冷静に照準を定めて残党に弾を撃ち込んでいく。

合図もなしに繰り出される完璧と評して差し支えないコンビネーション。

「ふん……拍子抜けだな。北都との戦いで東都も消耗していると見える」

「油断はしないで雷斗。ここは戦場なのよ」

鷲尾姉弟は瞬く間に障害となっていたガーディアンを退け、東都へと繋がるスカイロードをくぐり抜けようとする。

しかしその時、

「……待って雷斗」

遠くから聞こえる走行音に耳を澄ませ、2人は警戒するようにその場に立ち止まった。

徐々に近づいてくる1台のバイク。

乗っている人間は2人。どちらも見知った顔の人物だ。

「お早い到着ですね」

ヘルメットを取り、顔見せてきた2人に風華が投げかける。

戦兔キリオに万丈リユウヤ——どちらも東都を守護する仮面ライダーだ。

「ついに本格的におっ始めるつもりか？」

ビルドドライバーを装着しながらこちらを睨むキリオ。

「お前ら2人は難波重工直属のスタッフだったな。今西都の実権を握っているのは難波の権力者か？」

「それを聞いて……私達が答えるとは思っていないのでしょうか？」

「ああ………だから」

《ライオン！》

《掃除機！》

《ベストマッチ！！》

《クローズドラゴン！》

「力尽くで口を割ってもらう。……お前らが隠していること、全部——！」

《Are you ready!?》

「変身ッ!!」

キリオとリュウヤが同時に腕を構え、隣り合わせにスナップライドビルダーが出現。スーツを形成する。

《たてがみサイクロン！ライオンクリーナー!!》

《Wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON!!》

《イエーイ!》

《Ye ah!》

黄色と青緑の装甲に包まれたビルドとクローズが立ちはだかる。

エンジンブロス、リモコンブロスはそれぞれスチームブレードとネビュラスチームガンを握りしめ、その切っ先と銃口を2人の仮面ライダーへと向けた。

「学校に残ってる生徒は!？」

「大丈夫!もういないはず!」

鞠莉の呼びかけに廊下を走り回っていた果南が返答する。

浦の星女学院の校内に逃げ遅れた人がいないか確認し終えた後、皆と合流して予定通り避難所を目指した。

「バスは通っていないんですか!？」

「たぶん街の人を乗せるので精一杯だと思う……」

「じゃあ走っていくしかないと……?」

「さつき爆発が起きた場所からはずっと距離があるので、深く侵攻されない限りは大丈夫かと思うのですが……」

先頭を走っていたダイヤと聖良が不安げな様子で黙り込む。

以前のように直接学校に攻撃されるよりは遥かに動きやすいが、それでも身の安全が保障されているわけではない。

「……どちらにせよ、今私達が危ない目に遭うのはまずいよね」

苦い表情でそう呟く曜。

そうだ、今度行うライブが最後の希望。スクールアイドルとして一矢報いることができるチャンスなんだ。

敵はあわよくば自分達に危害を加え、進行中のライブビューイング企画を白紙にするつもりだろう。

それだけは絶対に――

「——止まってくれるかな」

学校から伸びている道路。

ふらりとした足取りで遮るように現れた人影に、千歌達は反射的に足を止めた。

「あなたは……？」

最初はそれが誰なのか認識することができなかった。

それもそのはず、その人物は以前最後に会った時とは別人のような風貌と空気を備えていたからだ。

軍服を連想させる黒染めのポンチョコートに、それと対照的な白いスカート。

乱雑に切られた髪の間から光のない瞳でこちらを見つめている。

「まさか……ミカちゃん……？」

1番早く目の前に立つ人物の正体に気がしたのは梨子だった。

以前のように尻込みする様子は一切感じられない。氷のように冷たいオーラをまとった少女がゆつくりと歩み寄ってくる。

「な、何しに来たのよ！」

「君が渡辺月……………で、間違いない？」

「え？」

ミカは呼びかけてきた善子を一瞥した後、何も言わないまま集団の中心に立っていた

——月の側へ向かった。

「そ、そうだけど……………」

「そう」

近づき難い雰囲気を漂わせたミカは、おもむろにコートへと手を伸ばし——

「……………ごめんなさい」

紫色に染められた拳銃を構え、その引き金を引いた。

第42話 クロコダイルの脅威

「う……………」

ひどい頭痛と波の音で目が覚めた。

柔らかい感触が頬に触れる。どうやら自分は海岸沿いの砂浜に横たわっているらしい。

「どうして海なんかに……………」

頭を押さえながら周囲を確認する。

しきりに聞こえてくる細波の音に不安を煽られ——猿渡タクミは身体を起こした。

最後に見た光景を思い出す。

ローグと呼ばれていた西都の仮面ライダーにやられた後、突然視界が眩しくなつて……………。

意識を失いかけていたせいかな、記憶にモヤがかかっている。

「……………やけに騒がしいな」

街道を駆け回る住民達が目に映る。

「また……戦争か……?」

立ち上がったタクミは、腰に巻かれているベルトに触れながら………ため息と共に言葉を吐き出した。

「もう……たくさんだ……」

「下がれ万丈!」

「うおっ!」

敵がリュウヤを狙って射出した弾丸を左腕の掃除機で吸い取る。

「ッ……!」

飛び散る火花に視界を遮られ、狼狽する2体のブロス。

ライフルを構えているリモコンブロスが追撃を放つ前に溜め込んだ弾丸を解放し、接近するまでの隙を強引に作り出したのだ。

「今だ！抑えてろ万丈！」

「っしやあ!!」

瞬時に肉薄したクローズがエンジンブロスとリモコンブロスの間を引き裂き分断。次の連携攻撃へ移るのを防いだ後、キリオはすぐさまボトルチェンジを図った。

《ロック！》

「ビルドアップ！」

ドライバーにロックフルボトルを装填。掃除機の部位が錠前を象った装甲に変化する。

《Ready go!!》

《ボルテックアタック!!》

「——ッ!!」

左腕から伸びたチェーンでリモコンブロスを絡め取り、引き寄せる。

「はあっ!!」

「ぐっ……!!?」

そのまま右腕のゴールドライオガントレットを用いて至近距離からの光弾をお見舞いした。

「……………くお———!」

後方へと吹き飛びリモコンブロスだったが、奴はすぐに空中で体勢を立て直すとライフルの銃口をこちらに向けてトリガーを引いた。

「あつ……………キリオ!!」

同時にエンジンブロスがクローズの妨害を振り切り、巨大な歯車をビルドめがけて放つ。

《ゴリラ!》

《ガトリング!》

「ビルドアップ……………っ!!」

すんでのところで比較的防御力の高い組み合わせのボトルへ交換し、全身でその一撃を受け止めた。

「ぐっ……………! おおおおおおおッ!!」

ゴリラの腕を全力で振るい、オーラで出来た歯車を粉々にしつつ受け流す。

「大丈夫か!?!」

「ああ……………」

お互いに距離をとり、ビルドとクローズ、そしてブロス姉弟が睨み合う。

「思っていたよりは楽しませてくれそうじゃないか」

「……お2人ともなかなかのハザードレベルをお持ちのようですね。それも私達に匹敵するほど」

出方をうかがいながらも口を開く歯車の戦士に、キリオも警戒心を向けつつ返した。

「そうかよ。こっちは西都の差し金が案外弱くて安心してやるよ」

「ふん……吠えていられるのは今のうちだ」

「……？」

そう含んだ物言いをする雷斗。

首を傾げるキリオ達に、彼は嘲笑するような口調で続けた。

「おめでたい奴らだと言っている。……我々は尖兵に過ぎない。西都の主力は別にあるのさ」

「その言葉がハツタリかどうかは………お前らを倒せば手っ取り早くわかりそうだな」

キリオは取り出した缶型のアイテムを上下に振り、プルタブ型のスイッチを起動させた。

《ラビットタンクスパークリング！》

《Are you ready!?!》

「ビルドアップ!!」

《シュワつと弾ける! ラビットタンクスパークリング!!》

ビルドドライバーへそれを装填した後、レバーを回して即座にスパークリングへの変身を完了させる。

対峙する両者の間を、不穏な風が吹き抜けた。

●●●

「ダメエツ!!」

ネビュラスチームガンの引き金に指がかかり、弾丸が発射されるその直前、

「ルビィちゃん!」

「……………っ」

横から飛び出してきたルビィが月の身体を抱え、そのままの勢いで地面へと転がった。

「くう…………!」

発砲された弾丸が2人の上を通り過ぎ、奥に設置されていたガードレールを掠めて甲

高い音を響かせる。

ネビュラスチームガンを構えていたミカは身を挺して月を守ったルビイを見下ろすと、変わらない無表情のまま言った。

「……邪魔しないでルビイちゃん。怪我しちゃうよ?」

「ミカちゃんこそ……どうしてこんなひどいこと……!」

月を庇いつつミカに食ってかかるルビイ。

千歌達も2人を守るようにして壁を作り、暗い瞳を向けてくるミカと対峙した。

「……わたしがあなた達の敵だってことはもうわかってるでしょ?」

じりじりと距離を詰めてくるミカからは迷いは一切感じられない。

彼女は本気だ。理由はわからないが確実に月の命を奪おうという意志が伝わってくる。

「どうして……ボクを狙うんだ……!?!」

時間稼ぎのつもりだろうか、冷や汗を流しながら月はミカにそう尋ねた。

「ユイちゃんが、それを望んだから」

「……え?」

さも当然のことのようにはつきりと言い張ったミカに、千歌達は狂気さえ覚えた。

「それ……だけ？」

「ゆ、ユイちゃんが人の命を奪えって言ったら……ミカちゃんはその通りにするつていうずら!」

「そうよ……!そんなのおかしいに決まってる!」

必死にそう呼びかける花丸と善子の言葉も空しく、ミカは凍った表情のままコートの中に腕を忍ばせる。

「おかしいかなんて……そう考えることもわたしには許されないんだよ。ただユイちゃん望む通りに動くだけ。……それがわたしの、償いだから」

《スクラツシユドライバー!》

ベルトを装着したミカを見て、ルビイが血の気の引いた顔で叫んだ。

「みんな逃げてツ!!」

「ルビイちゃん……!?!」

取り出したボトルを自らの腕に突き刺すルビイを見て、皆の表情に驚愕の色が混ざる。

《デンジャー!》

《クロコダイル!》

「——変身」

《割れる！》

パープルの輝きと大量の蒸気がぶつかり合う。

《食われる！》

大柄な異形の姿に変貌を遂げたルビイが紫色の戦士にタツクルを仕掛け、千歌達から離そうとするが――

《碎け散る！！》

「邪魔を……しないで」

「うぐつ……！？」

強烈な肘打ちを食らってその場に崩れ落ちるルビイ――もといキャツスルハードスマツシュ。

《クロコダイルインローグ！！》

《オーラア！》

「――ツ！！」

サッカーボールでも蹴るように、仮面ライダーローグへと変身したミカは軽々と赤い巨体をつま先で横方向に吹き飛ばしてしまった。

「ルビイツツ!!」

「ルビィ……!!」

「うう……!」

倒れ伏すルビィのもとに駆け寄るダイヤと理亞。

その傍らで一連の光景を目撃した……千歌と曜を除いた全員は、青ざめた顔で佇んでいた。

「どうい……こと……?」

「ルビィちゃん……?」

状況を整理できていない善子と花丸の横を通り過ぎ、ローグがゆつくりと月のもとへ歩み寄ろうとする。

「果南……ちゃん……みんなを連れて逃げて……!」

「えっ……えっ?」

同じく困惑した様子で月の横に立っていた果南に向けて、絞り出すような声でルビィは言った。

「早く……ここは……ルビィが……なんとかするから……ツ!」

立ち上がり、再びローグの懷に飛びついては動きを止めようとするルビィ。

「早くっ!!」

「で、でも……!」

「私からも……お願いしますわ」

「ダイヤ……?」

理亞とダイヤが互いに顔を見合わせる。

「……………ツ!!」

覚悟を決めたように頷いた2人は……………ルビイと同じように小さなボトルを取り出し、それを自分達の腕へと突き立てた。

「理亞……?」

「ダイヤまで……………どうして——!!」

黄色と青色。2体のハードスマツシユへと姿を変えた2人を見て、鞠莉と聖良は緊迫した空気に圧倒されるように一歩後退した。

「どいてって……………言ってるでしょ!!」

「ぐう……!」

ローグの手に握られたネビュラスチームガンが火を吹く。

彼女の腰にしがみついて離れないルビイへ放たれる容赦のないゼロ距離射撃。

「姉様……………ごめんなさい……………!」

「みなさん早く!早く逃げて!!」

「……………う、うん……!!」

加勢に向かったダイヤと理亞を見開いた瞳で視認した果南、鞠莉、聖良の3人は、ほとんど逃げるように月や千歌達の手を引いてその場から駆け出した。

「邪魔を……………しないで…………ッ!!」

「きゃあっ!」

爆発的な勢いでオーラが吹き出し、ローグにしがみついていた3体のハードスマッシュが一気に剥がされてしまう。

「うっ…………!」

「理亞ちゃん!お姉ちゃん!」

よろよろとした足取りで地に立つクワガタとフクロウを守るように、キャツスルハードスマッシュが両肩の盾を前方に展開してローグの前に立った。

「……………あくまでわたしの邪魔をする気なんだね」

身体についた埃を払うような仕草を見せたローグは、白い手をゆつくりと掲げて硬い握り拳を作り、3人へ構えた。

「ユイちゃんからガスを注入されたとはいえ……あなた達のハザードレベルは決して高いものじゃない。無理に戦いを続ければただでは済まないよ」

「きやう……!!」

腕の一振りでルビイの構えていたシールドごと彼女の肉体を横に吹き飛ばしてしまった。

「ルビイ……!——っ……!?」

続けて胸を押さえながら息を荒げる理亞——スタッグハードスマッシュにロウグの繰り出した拳が迫る。

理亞は寸前で両腕の刃を交差させ、凄まじい衝撃を帯びた打撃を受け止めた。

「ぐううううう………ッ!!」

膝をつきながらも必死に抵抗する姿を見せる理亞を見て、ミカは仮面の下で眉をひそめる。

「ほら、痛いでしょう? 苦しいでしょう?……こんなことをこのまま続けるつもりなの?」

「ええ……あんたが手を引くまでは……絶対に——!」

クロスさせていた刃を弾き、発生したノックバックによりローグの体勢が一瞬だけ崩れた。

「逃げるわけにはいかないの!」

「……………」

理亜の背後に身を潜めていたダイヤ——オウルハードスマッシュが空中高く飛び上がる。

あらゆる方向から体当たりを仕掛け、ローグが次の攻撃へと移るのを防いだ。

「ルビィ!!」

「——まさか……」

ダイヤの一声で反射的に背後を振り返るミカ。

そこにいたのはつい先ほど退けたキャッスルハードスマッシュだった。

塔のように伸びた赤い頭に強力なエネルギーが収束しているのを感じる。

「うああああああああっ!!!」

ダイヤと理亜が瞬時に離脱したのを確認した後、道路の中心に立っていたローグめがけて渾身の力を注ぎ込んだ熱線を解放した。

灼熱の光柱が周囲のコンクリートを蒸発させながら一直線にパープルの戦士へと伸びていく。

——直撃。

広範囲に爆風と衝撃が拡散し、巨大な黒煙が舞い上がった。

「はあっ……！はあっ……！！」

火の草原が道路を覆い尽くす。

「大丈夫ルビィ……!?」

3人の変身が解除され、元の少女の姿が露わになる。

肩で息をしながら膝を折ったルビィのもとに、すぐさま理亞とダイヤが駆け寄った。

「う、うん……平気……」

「今の攻撃でミカさんもしばらくは動けないはずです。急いで皆さんと合流しましょう」

「……………バレちゃったね、みんなに」

そう小さく呟いた理亞に、ルビィとダイヤもまた地面を見つめて消えそうな声で口にした。

「……………しようがないよ」

「そうですわ。きつと皆さんも……………聖良さんだつて、わかつてくれると思います」

「……………うん」

不安が混ざった笑顔で理亞が頷く。

消耗し切っているルビィの肩を他の2人で担ぎ、この場を離れようと踵を返した。

「……………正直驚いたよ」

「!?」

瓦礫をかき分け、火の海の中から起き上がる人影が低い声音で投げかけてきた。

「うそ……………でしょ……………!?今ので動けるの……………!?」

「……………!」

顔色の悪いルビィを庇うようにしてダイヤが一步前に出る。

煙の中から徐々に距離を詰めてくる戦士——先ほどの熱線を受けてもなお無傷で立ち上がったローグは、冷たい声で言い放った。

「……………今の攻撃で、いかにあなた達が本気なのか伝わってきた。その覚悟だけは認めてあげる」

「……………は私が……………!理亞さんはルビィを連れて逃げてください!」

「そんな……………ダメだよお姉ちゃん……………!」

重い金属でも打つような足音を響かせながらローグが歩み寄ってくる。

「でも残念だね。覚悟が本物でも……実力が伴っていないければ何者にもなれない。あなた達はわたしに勝つことも、足止めすることも叶わない」

「——うぐつ……！」

再度ハードスマッシュへの変身を試みようとしたダイヤだったが、全身に走る激痛がそれを妨げた。

「言ったはずだよ、あなた達のハザードレベルじゃロクに戦えないって。これ以上力を使えば本当に死んじゃうよ？」

「っ……」

「安心して、わたしのターゲットは1人だけ。あなた達に危害を加えるつもりはないから」

「ま、待って……！」

もはや立つこともままならない3人の横を通り過ぎ、逃走した千歌達を追おうとするミカ。

動かない身体を引きずるも、なすすべもなく突破されようとしたその時——

「……………よう」

炎上する道路の脇を静かに歩く、別の人影。

ボロボロの衣服のなかに巻かれた“ドライバー”が……その人物が何者なのかを物語っていた。

「あなたは——」

自分と同じスクラッシュドライバーを装着した少年を見やり、ミカが絶句する。
だが驚愕の表情を見せたのは彼女だけではなかった。

「タク……………ミ……………？」

そう呟いたのは他でもない理亞だ。

少年——猿渡タクミはどこかやつれた顔を彼女に向けた後、すぐにローグに鋭い視線を突きつけた。

第43話 守るべきハート

（つたく……………冗談じゃねえぞ……………）

刺々しい凶悪な外見をした戦士と対峙し、タクミはいつでも戦闘態勢になれるよう口ポットスクラッシュゼリーを握りしめる。

浦の星女学院のある方向から光線のようなものが見えたかと思えば、直後に大爆発ときた。

それに加えて急いで駆けつけてみればルビィ、ダイヤ、理亜の3人と以前襲ってきた紫のライダーが戦っていて……………。

（わけわかんねえ状況だが……………このまま放っておくわけにもいかねえ。だが——
——）

ズキ、と痛む胸を押さえる。

今の自分の身体には海に飛ばされる前……………あの夜ログから受けたダメージがそのまま残っている。戦闘が行えるような状態ではない。

このまま挑んだところで、奴を退けることは叶わないだろう。

でも——

（今度こそ……俺は……みんなを守るために……！）

ゼリーを握った腕を掲げ、スクラツシユドライバーにそれを差し込もうとしたその時、

「……………はい」

こちらの様子をうかがっていたローグが、自らの耳元に指先を当てて誰かと通信するような仕草を見せた。

『あたしだよー』

わざとらしく大音量で通信を垂れ流してくる少女の声。

漏れた音声を聞いたタクミやルビィ達は、その恐ろしくも可愛らしい口調からローグが誰と話しているのかを瞬時に理解した。

「ユイちゃん……………どうかしたの？」

『あのねー、今日はもういいや』

「え？」

『今日のところは帰っていいよ。深追いするのもアレだし』

そんな会話内容を聞いて、タクミは内心胸を撫で下ろしていた。

……よくわからないが、どうやら自分達は助かったらしい。

一方で突如下されたその命令にローグは困惑しているようだった。

「そんな……いいの？今の東都にわたしを止められる兵器はない。このまま攻め込めば確実にあの子を仕留められるのに……」

『だからもういいってば』

「でも——」

『撤退しろって言うてるのが聞こえないの？』

一転して冷たい声音でそう言い放ったユイに、ローグはびくりと一瞬だけ肩を揺らす。

「……………了解」

自分の腰にあるドライバーへ手を伸ばし、通常のフルボトルとは一風違った外観のボトルを引き抜く。

装甲が解かれ、中からポンチョコートを翻した少女が現れる。

「チツ……………やっぱりあんたか……………氷室ミカ……………!!」

変身を解いたミカにタクミが吐き捨てるようにそう投げかけた。

「西都を代表するスクールアイドルが……………揃いも揃って政府の犬かよ!!」

スクールアイドルを愛しているからこそ……………タクミはBernageの2人が

暗躍して戦争を引き起こしたという真実に辿り着いた時、途方もない怒りに苛まれた。
「……北都に飼われてたあなたなんかと一緒にしないで。わたしは、わたしの目的のために行動してる」

「そうかよ……？それはそれは大層な野望がお有りのようだな。多くの人を騙して、この国をめちやくちやにした上でも成し遂げる価値のあるもんなのかそれは？」

「……………そうだよ」

顔を背け、その場から離れようと歩み出したミカに対して、タクミは一層注ぐ視線を鋭利なものにする。

「ユイちゃんの誘いを断ったこと、いつか後悔させてあげる」

ミカが遠ざかっていくと同時に張り詰めた空気も綻んでいく。

「するわけねえだろ……！とつとと失せ……………ろ——」

剥き出しにしていた警戒心が解かれたせいか、タクミは眠るように意識を失い、そのままコンクリートの地面に身体を叩きつけて倒れてしまう。

「タクミッ!!」

傍で一連のやりとりを見守っていた理亜がすぐさま駆け寄り、彼を仰向けにして抱えた。

「タクミ……」

静かに聞こえてくる寢息に安堵した理亜は、自然と流れてきた涙に戸惑いつつも……
帰ってきた友人の名を小さく呼んだ。

「——潮時ですね」

息もつかせぬ攻防の末、不意にリモコンブロス——鷲尾風華がそう呟いた。
「引きますよ雷斗」

「了解だ姉さん」

「あ……!?!ちよつと待てよ!逃げんのか!?!」

踵を返してその場から去ろうとするブロス達の背後にそう投げかけるリュウヤ。

「また近いうちに戦うことになるだろう。……その時は必ず仕留める」

最後にそう言い残したエンジンブロスがネビュラスチームガンを振るい、黒霧を拡散。リモコンブロスと共に跡形もなく消えてしまった。

キリオとリュウヤも変身を解き、軽く肩を回す。

「どうかしたのか？」

ラビットタンクスパークリングを見つめながら佇んでいたキリオの顔をリュウヤが覗き込む。

「……あの2人、スパークリングの動きに対応できていた」

「……というと？」

「初めてこれを使った時、あのスタークが全く歯が立たなかったんだぞ？」

「じゃあ……あの姉弟は葛城より強いってことか!？」

「いや、そう単純な話でもない。たぶんスタークの奴が戦闘データか何かを奴らに渡したんだ」

スターク——もとい葛城ユイの恐ろしいところは1度戦った相手の動きや技を短い期間で見切るようになるまで読み込む分析能力。

講堂での戦闘の際……ユイは攻撃を受けながらもこちらのデータを採取していたに違いない。どこまでも抜かりのない奴だ。

(想定していたよりもまずい状況なのかもしれない)

“ハザードトリガーがなくなるともビルドを強化できないか”……………そう考えた末に生まれたのがパンドラボックスの成分を取り入れたスパークリングだ。

結果としてその判断は間違っではないなかった。安定した高出力を発揮できるスパークリングは、見事にスタークを負かしてみせたのだから。

だからデーター1つで凌駕される程度のスペックだったとも思えない。思いたくない……………のだが、事実として西都の戦力は東都を上回りつつある。

（——いや、奴らが言ってた“主力は別にある”って発言を考えれば……………もしかしたら既に）

このままスパークリングだけで戦い抜けるといふ保証はどこにもない。

いずれは……………トリガーを使わざるをえない状況がやってくる。どこかで、必ず。

その時自分分は——どうするべきなのだろうか。



ガヤガヤと騒がしい広間に集まっているのは街の住人達。

度重なる戦闘行為に逃げ惑い、恐れるだけの日々に……………人々はひどく疲弊していた。

千歌達が月を連れて逃げてきた避難所の一角。

スマツシュとしての力を酷使し疲れ切ったルビイを担いできたダイヤと理亞は、待機していた千歌達と顔を合わせても言葉が出なかった。

「みんなには……………私と曜ちゃんから説明しといた」

「そう……………ですか」

「……………姉様」

ルビイをダイヤに任せ、理亞は引きずるような足取りで聖良のもとへ歩いていく。

「あの……………」

「なにも言わないで」

「えっ？」

立ち上がった聖良は、小さく震えている理亞の身体を手繰り寄せ——そつと抱きしめた。

「姉様……………」

「つらかったでしょう。…………すみません、私がつとしつかりしていれば……………あなたが痛い思いをしなくて済んだかもしれないのに」

理亞の頬に出来ていた擦り傷をいたわるように優しく撫で、聖良は一層彼女に回した腕の力を強めた。

「本当は叱つてあげるべきなのでしょうけど……それ以上に私は、あなたにお礼が言いたいんです。皆さんを守ってくれてありがとう。……理亞は私の、自慢の妹です」

「ねえ、さま……。うう……。ごめんな、さい……!」

「謝らないでください。本当に……。無事でよかった」

姉の胸のなかで泣きじやくる理亞に、ルビイとダイヤも暖かな瞳を向けていた。

「全員無事か?」

後方からかかった声に全員が振り向く。

そこに立っていたのは腰に手を当てた青年——キリオと、その横に並んでいるリュウヤだ。

「2人とも!よかった、帰ってきた……!」

「ああ……つて、どうしたんだお前ら?」

ルビイ、ダイヤ、理亞の3人の生傷を確認した途端、キリオは若干上ずった声をあげた。

「大丈夫なのか?……なにがあった?」

千歌達に尋ねようとするも、お互いに顔を見合わせては困ったように視線を逸らすばかり。

「氷室の仕業だよ」

やっと答えが返ってきたかと思ったその矢先——その言葉を発したのが、思いもよらぬ人物だったことに気がつき、キリオとリュウヤは大きく目を剥いた。

「あ……………」

突如自分達の前に現れた少年を視認し、短い声を上げたのは果南と花丸。以前ダイヤと共に北都へ渡った2人だ。

「くっそ……………まだ少し頭がいてえ……。んで、ちようどトイレから戻ってみれば……………ようやく全員集合したみたいだな」

「猿渡……………タクミ……………!?!」

「どうしてお前がここにいんだよ!?!」

貧血気味の青ざめた顔を左右に振って頭痛を振り払おうとするタクミにキリオ達の

視線が刺さる。

「知らねえよ。気が付いたら東都に飛ばされてたんだ」

「飛ばされて……？」

「うー……気分悪い。少し横にならせてもらおうぞ」

そう言っておもむろにブルーシートへ寝転んだタクミは、ものの数秒で深い眠りに落ちてしまった。

「……誰か説明できる奴」

キリオが千歌達に向けて拳手を促す。

数秒の沈黙が流れた後、目を赤くした理亜が聖良に埋もれながら小さく答えた。

「……わからない。私達が氷室ミカと戦ってたら突然タクミが来て……」

「氷室……？さつきこいつも言ってたが、氷室がまた現れたのか？」

「ええ、ちょうど猿渡さんが付けている物と……同じベルトを巻いていましたわ」

膝にルビイの頭を乗せたままダイヤがそう付け加える。

彼女に言われて初めて、キリオはタクミがスクラッシュドライバーを身につけていることに気づいた。

「氷室……」

少女の名前を耳にした直後、リュウヤは両手で作った拳を強く握りしめる。

スクラッシュドライバーを用いた新たなライダー……………プロス達の発言からして、氷室ミカこそが西都の“主力”である可能性が高い。

「……………」

恐れていた事態が……………現実になろうとしている。

その夜。

避難所にいた多くの人間が寝静まった後、キリオは音も立てずに外へ出て夜空を見上げていた。

「……………本当に、驚くことばかりです」

見計らったように施設から現れた月を一瞥した後、キリオは重苦しい声音で口にする。

「黒澤達があんなことになったのは……………全て俺の責任なんだ。あんな……………無駄な危険に晒されるような状況を作っちゃったのも、全部」

改めて自分の不甲斐なさが頭にくる。

いくら使用を制限させようと、彼女達は今回のようなことになれば自ら戦いへ身を投じるだろう。

言って聞くようなもの分かりのいい生徒ならば、そもそもスマッシュなんかになつていない。

だがそんなことは言い訳にはならない。止められない時点で自分は……間違いない教師としては失格だ。

「無駄っていうのは違うと思います」

空に輝く星々を眺めながら月が言う。

「だってあの時………3人が立ち上がってくれなかったら、たぶんボクはあのまま殺されてましたから」

「……………すまない、俺のせいだ」

「ちよつ……え!? いや、そういうことを言っているのではなく!」

完全にネガティブモードに突入しているキリオに向けて必死に言葉を換えようとアタフタする月。

「……ボクはルビイちゃん達に救われましたから、彼女達が行ったことを……無駄とは思いたくないんです」

月の声に耳を傾けながら、キリオはふと……いつか自分が千歌達に伝えたことを思い出した。

誰かを守りたいと思ったからこそ、必死に戦うことができる――。

「それじゃあ、おやすみなさい」

手を振りながら施設内へと戻っていく月を見送った後、キリオは物陰に潜んでいた気配に向けて言い放った。

「それで隠れてるつもりか？」

「げっ……なんだよバレてたのか」

気まずそうに頭を掻きながらやってきたのはリュウヤだった。

「もう話は終わったのか？」

「お前がそういう気遣いのできる奴だとは知らなかったな」

「あ？——いや、そうじゃなくてだな」

「……ほん、と咳払いしたリュウヤが口をもごもごと動かす。

「ベルトのことで……ちよつとな」

真剣な眼差しで訴えてくる彼に、キリオは目を伏せつつ瞬時に返答する。

「スクラツシユドライバーを使いたいつて言うんだろ？」

「まあ……そうだ」

2人とも考えることは同じだった。

西都がどんな戦力を保持しているのかはまだわからない………が、氷室ミカがスクラツシユドライバーを自在に扱えるという可能性を考慮すれば、少なくともグリスと同等かそれ以上の力を有していることになる。

奴らに対抗するには……スパークリングだけじゃ足りない。そうなれば現状、最も現実味のある方法は――

「……………万丈」

キリオは眉根を揉み、長考した上でリュウヤの顔を真っ直ぐに捉えると……………

「お前に頼みがある」

強くそう口にした。

「頼み……？」

「これから先、今まで以上に厳しい戦いが待っているかもしれない。けど俺は……
黒澤達を危険な目には遭わせたくないんだ」

彼女達が望んでいたとしても、

それが正しい行いだとしても、

誰かを守りたいと思った末の善意だとしても……………あの3人がそれを強いられることは、絶対にあつてはならないことだから。

「お前は強い。お前なら俺は背中を預けられる。……信用できる」

キリオは右手をリュウヤの前へ差し出し、力強い口調で彼に懇願した。

「これから先の戦い^{地獄}を……………どうか俺と共に戦って欲しい。……もうこれ以上、あいつらを巻き込まないために」

「キリオ……」

青年の手のひらに視線を落としたリュウヤの顔に、自然と笑みが浮かび上がっていた。

「バーカ……今までずっとそうしてきたじゃねえか」

差し出された手のひらを強く握り返す。

「ああ、最後まで付き合ってやるよ。この戦争が終わるまで、必ず……………お前の生徒を守りきってやる」

2人の上空に広がる星々。

無数に散らばった輝きのなかに——二筋の流星が煌めいた。

第44話 逆襲のライブ

「お、おお……！」

「……でライブを……？」

西都の襲撃から一週間ほどが経過したある日。

Saint Aqours Snowの11人は、キリオ達に連れてこられたある施設を前にして感嘆の声を上げた。

「よくこんな場所が用意できたね」

「ちよつとしたコネを使っただけだ」

驚いた様子で尋ねてきた鞠莉に、キリオは胸を張ってビルドフォンを見せびらかす。

“……”に訪れる前、塔野首相と少しばかり取引をさせてもらった。

キリオやリユウヤが自ら責める必要がない、あくまで“防衛”という形で戦うための………西都の連中をおびき寄せる作戦。

「それにしても制服のままライブかあ……なんか物足りないかも」

「この際しようがないよ」

ちよつぱり不満げな囁を千歌がなだめる。

西都が本格的に動き出した以上、もう悠長に準備を施している時間はなかった。早く行動するに越したことはない。

「月ちゃんも協力ありがとね」

「これくらいおやすい御用だよ」

にこやかに自前のデジカメを構える月。

話によれば月は沼津にある静真高等学校という高校の生徒会長らしい。

今回の作戦は、そんな彼女の協力が必要不可欠だった。

「それでは……最後にもう一度ポジションと振り付けの確認をしておきましょう」

聖良の一声で皆が「はい」と返事をしながらそろそろと位置についていく。

キリオは彼女達からリユウヤへと目を移し、互いの意思を確認し合うように同時に頷いた。

「お前も一緒に来てもらうぞ」

「はっ……本気で殺そうとしてた奴にかける言葉とは思えねえな」

「俺はより勝率が高くなる手段を選ぶだけだ」

横で腕を組みながら悪態をつくタクミに、キリオは至って冷静な調子で返した。

……タクミが単にルビィを人質に利用しようとして連れ去ったわけではないことは彼女から聞いた。しかしだからといって彼を完全に許したわけではない。

これまでタクミが振るってきた猛威は……間違いなく彼自身の意思で行ったことなのだから。

「わかってるさ。今は北都も西都の奴らに占領されて……どうせ俺も他に行く場所なんてないんだ。理亞や聖良さんやルビィちゃん……みんなを守るためだったら、いくらでも戦ってやる」

そう言って装着しているスクラッシュユドライバーに触れる。

「……俺の罪は、戦うことでしか償えないから」

誰にも聞き取れないくらい小さく、タクミはそうこぼした。

「——行くぞ」



並べられた長机に何人もの難波重工の職員達が腰を下ろしている一室。

「千歌ちゃん達、本気でライブするつもりみたいだね」

パソコンの画面を見下ろしながら低い声でそう呟くユイ。

彼女の背後には蠟人形の如き静寂な佇まいで待機しているミカが立っている。

「……ま、いいや。会場の特定なんてライブが始まってからやればいいんだし。ね、ローグ？」

「……………」

「え、無視……？へこむわあ……」

1人で肩を落とすユイを尻目に、ミカはじつと床を見つめて平静を装いながらも……正体不明の不安感に襲われていた。

（……なにかおかしい）

テーブルに置かれたパソコンに映っているライブ中継の映像。

現在は「今しばらくお待ちください」としか表示されていないその画面へと視線を移し、ミカは顎に手を当てて深く思考を巡らせた。

（ユイちゃんの言う通り……いくら事前情報を隠し通したとしても、ライブが始まってしまえば背後に見える景色からでも場所は特定されてしまうはず……）

AquoursやSaint Snowのメンバーは自分達が狙われていることは当然承知している。東都から出ることはまずありえないだろう。

“東都内にある”という条件を付けた時点で会場となり得る場所はかなり限定され

てくる。彼女達だってそれはわかってるはずだ。

そのことに気づいていない……という可能性も捨てきれないが、これまでライブに関しては向こうもかなり慎重に事を進めてきた。ここにきて単純なミスでコケるような姿を見せるとは考えにくい。

(……戦兔キリオ先生—————いったい何をする気なんですか……?)

「あ、始まった。特定班の皆さん、お仕事ですよお」

画面が切り替わった瞬間にかかったユイの一言で、複数のスタッフ達がせわしなくキーボードを叩き始めた。

ミカも吸い込まれるように画面上に映っているものに目が釘付けになる。

「……………」

映っているのは……ボロボロになった古い校舎と、寂れた校庭のど真ん中に立つ一人の制服姿の少女。

その内の一人———高海千歌が一步前に出て、何やら深呼吸をし始める。どうやらすぐにライブを見せるわけではないらしい。

『この放送を見ている……日本に住む全ての皆さん——こんにちは、Aqoursリーダーの高海千歌です』

暖かい笑みを浮かべながらも、どこか強い闘志のようなものを宿した瞳が光る。

『これからSaint Snowさん達との合同ライブを行います……その前に少しだけ、私達から伝えたいことがあります』

それは東都の電気街にある巨大モニター、

あるいは北都にある人通りの多い交差点付近に取り付けられたビルの大型ディスプレイ、

そして東都と敵対関係である西都でも……人々が手にする小さな画面のなかで、その少女は真剣な眼差しで訴えてきた。

『戦争が起きて……多くの人が傷つき、深い悲しみが……この国中に広がってきました。ここに立っている私達では想像がつかないくらい悲惨なこともあったかもしれません』
苦しんでいる人達の想いを受け止めるように胸に手を当て、千歌は伏せていた目を再び前に向ける。

『でも、決して希望を見失わないで欲しいんです。今はこうして争いの絶えない毎日が

続いていく……かもしれません。けどそういう想像力は全部、プラスのことに向けて欲しい。……本当になんでもいいんです。些細なことでもいいんです。……なにか、楽しいと思えるものを、自分の周囲に溢れているのは戦争だけじゃないってことを……思い出して欲しいんです!』

戦争が始まる前………あんなに楽しかった日々を。

悲しいことと同じくらい、忘れちゃいけないものが確かにそこにはあったのだ。

『私達スクールアイドルは………応援してくれる皆さんからたくさん勇気をもらっています。だからその分、私達もやれる限りの最高のライブを贈りたいと思っていますんです。……今はこうして画面越しでしか話せないかもしれないけど、いつかはきっと――』

左右に並んでいるメンバー達と目配せした後、千歌は前方へ向き直り、

『――きつと戦争も……東都も、北都も、西都も関係ない、おーつきな会場で思いつつつきり歌を届けられると思います!!』

モニター前に集まり、その中継を目の当たりにした人々のなかから徐々に歓声が広がっていく。

今この瞬間、この時だけは………スカイウォール及び戦争によって国民達を縛り付

けていた呪いが解かれたようだった。

『皆さんを楽しませる“何か”になれることを願って——聞いてください、私達の歌を!!』

——Hop? Stop? Nonstop!——

戦争が勃発して以来初めて行われるスクールアイドルのライブ。

軽快なリズムと共にステップを踏み出す11人の少女達は、今まさに争い事が起きている世界の住人とは思えないほどに愉快痛快な歌とダンスを披露し始めた。

「……ユイさん、特定完了しました! 奴らはおそらくこの……沼津にある、既に使われていない小学校に特設会場を設置していると思われます!」

回転椅子から立ち上がった1人の男性職員が急いだ様子でユイのもとへ駆け寄り、抱えていたPCを差し出してそう報告をあげる。

しかし今の本人は今まさにライブが中継されている画面を見つめるばかりで、一向に

反応を見せる様子はなかった。

「ユイさ——ん……!？」

職員が再度ユイに呼びかけようとしたその直後、彼の表情が苦悶に歪んだ。

「う……あ……う……あ……!？」

紫色の粒子となつて消滅していく職員には目もくれず、ユイは彼の身体に突き立てていた片腕を引っ込める。

「ローグ、ローグ」

眉ひとつ動かさないまま背後へ振り向いたユイは、まるで笑っていない瞳を向けながらミカへ言った。

「聞いてたよね？今すぐ現場に向かつて——『あいつら全員皆殺しにしろ』」

瞳の奥に怪しげな赤い光が宿る。

ユイが命令を発したその瞬間、少女の声に男性の声音が重なったように聞こえた。

●●●

——『私達スクールアイドルは……応援してくれる皆さんからたくさん
の勇気をもらっています』

あの少女……………高海千歌の声が頭から離れない。

「ミカさん、奴らの居場所は？」

「ここに載ってる小学校。座標を確認しておいてください」

風華と雷斗を従えたミカが早足で廊下を歩きながら一枚の資料を手渡していく。

これから向かうのは元々なにかに再利用される予定だった廃校済みの小学校。重要なのはこの場所が静真高等学校という全く別の教育施設と繋がりが深いということ。

手を回したとすれば……………その高校で生徒会長を務めている渡辺月の仕業に違いない。

「雷斗、ネビュラスチームガンを出して。すぐに奇襲攻撃を仕掛ける」

「了解」

出撃の準備をしている2人を尻目に、ミカは思いつめた顔で先ほどの中継映像を思い出していた。

彼女が画面越しに伝えた言葉……………それは戦争で苦しんでいる人々だけに宛てたものじゃない。

同じようにライブが行えずにいた他のスクールアイドル達、そして……………ミカやユ

イも例外ではなかった。

「そういえば……………新しい衣装のデザイン案、確認してなかったな」

「……………ミカさん？」

「あ……………」

首を傾けている風華と目が合い、無意識に漏れていた声に気づいてすぐさま口元を押さえる。

「…………大丈夫ですか？」

「問題ありません、すぐに出発しましょう」

自分を気にかけるように不安げな顔をする風華の横を通り過ぎ、出口をくぐり抜ける。

「…………雷斗さん」

「はい」

政府官邸から出た3人の身体を、雷斗がネビュラスチームガンを用いて発生させた黒い霧が包んでいく。

数秒後、再び瞼を開けばそこはライブの真っ最中だ。

自分達はそれをめちやくちやに壊せばいい。…………楽しいライブを、血祭りに変えてやればいい。

カンタンナオシゴトだ。

（なにも考えるな。……考えるな、考えるな、考えるな……）

これも全てユイが望んだこと。彼女が償える機会を与えてくれているのだ。

（……ただ静かに、ユイちゃんから頼まれたことをこなすだけ——）

閉じた瞳の先が明るい。

転移が完了したことを悟り、ミカはゆつくりとその目を開けて、

「ツ！」

ネビュラスチームガンを構え、発砲し——

「……………え？」

トリガーにかけていた指先が硬直する。

ミカ達3人は目の前に広がっている光景に目を見開き、驚愕の表情を並べた。

「誰も……いない……？」

ぴゅう、と乾いた風が吹き抜ける。

前方に建っている古い校舎も、狭い校庭も、全て資料で確認した通りだ。ライブの
継から見えた景色とも合致している。

にもかかわらず、そこには A q u o r s も S a i n t S n o w も、ましてや一般
人の姿さえも見えない。

「どういう……ことだ？」

啞然とした様子でそうこぼした雷斗が周囲を見渡すも、やはり誰の人影も確認でき
なかった。

「まあ……………要はプロジェクションマッピングってやつだ」

不意に背後からかけられた声に、3人の兵士は反射的に振り向いた。

「戦兎……………キリオ……………」

雷斗が歯を軋ませ、唸るような声でその人物の名を呼ぶ。

「うお……………ほんとに髪切ってる」

「だろ？」

「……氷室」

しかしそこに現れたのはキリオだけではなかった。続くように姿を見せたのはスクラッシュドライバーを巻いた猿渡タクミに……。万丈リユウヤ。

「プロジェクションマッピング……。まさかあの映像に映っていたもの全て——」

「いや？千歌達は確かに絶賛ライブ中さ。ただし……。お前らの知らない、東都政府が運営する地下施設でだけどな」

単純なことだ。

東都政府が保管していた施設を借りて背景に小学校の景色を投影し、そこを会場として全国にライブ配信を行っていた。

中継を観賞している側は今もこの校庭でライブをしているように見えることだろう。

だがその本質は……。千歌達が安全にライブを行い、且つミカ達をこの「仕組まれたアリーナ席」へ誘い出すための、陽動作戦。

「小賢しい真似を……。してくれますね」

「悪いがこつちはてんつ……。さい物理学者でね。小賢しいなんてレベルじゃないぞ？」

「——口の減らない人」

《クロコダイル!》

装着したスクラッシュドライバーにボトルを叩き込み、ミカは鋭い瞳でキリオ達を睨

み返した。

「さて、と……ちようど一曲目が終わった頃かな？」

キリオは腕時計から視線を前に戻すと、上着から取り出したビルドドライバーを装着。続いてラビットタンクスパークリングを掲げた。

「お前達がまんまと引つかかってくれたおかげでライブは大盛況さ。このままアンコールまで付き合ってもらうぞ？」

「あの人達がライブを完遂することはありません。ここを突破した後、東都政府が保有している施設を徹底的に調べ上げて、しらみ潰しに叩けばいい。……そうすれば今度こそ、スクールアイドルという文化は死に体になる……ッ!!」

「……させると思うか？」

キリオの横に立っていたリユウヤが強く踏み出す。

「氷室……これ以上お前を間違わせない……!」

ドラゴンの横顔が描かれたスクラッシュゼリーを取り出した彼が、それを勢いよくドライバーに装填する。

《ドラゴンゼリー!》

《ロボットゼリー!》

同時にタクミも片腕を構えて敵へと狙いを定めた。

戦闘態勢に入った2人を交互に見やり、キリオがふっと口角を上げる。

「変身」

「潤動」

《クロコダイルインローグ!!》

《リモートコントロールギア!》

《エンジンランニングギア!》

「変身ツ!!」

《ラビットタンクスパークリング!!》

《ドラゴンインクローズチャージ!!》

《ロボットイングリス!!》

たちまち姿を変えた6人の戦士が対峙する。

互いに火花を散らすなか、火蓋を切るように静かな一声が飛ばされた。

「——さあ、実験を始めようか」

第45話 信頼のアンコール

「はあ……はあ……」

肩で息をしながら、順に全員へ顔を向き合わせる。

予定されていたセトリリストは全てやり終えた。ここから先は……人々の反応次第だ。

「……ん」

千歌から送られてきたアイコンタクトに気がつき、月は映像確認用のパソコンに視線を移した。

しばしの静寂のなか、滝のように流れてくる観客達のコメント。そのどれもがアンコールを望む声ばかり。

「よっし……!」

小さくガッツポーズをした月は、千歌達全員に見えるよう頭の上まで腕を持っていき大きく円を作った。

汗を流す千歌達の表情が明るいものになる。

軽く身なりを整えた後、千歌は会場の外まで突き抜けていくような声を張り上げた。

「さあ……！次で本当に最後だよ！みんなで盛り上がっていこー……！！！！」

●●●

小規模の爆発が何度も土煙を巻き上げる。

3対3の乱戦。東都と西都……それぞれの最高戦力を投入した熾烈な戦いだった。

「ふっ……！はっ！オラアアアアッ！！」

「ぐっ……！」

クローズチャージの放った拳がリモコンブロスの左肩を捉える。

《ビートクローザー！》

「……！？」

続いてベルト内部から射出された剣を掴み取り、間髪入れずに斬撃を浴びせていく。

「うっ……ぐ……！」

《スペシャルチューン！》

《ヒッパレー！ヒッパレー！ヒッパレー！》

《メガスラッシュ！！》

ドラゴンフルボトルをビートクローザーに装填、瞬時に力を解放する。

蒼炎で構成された龍がリモコンブロスへと喰らい付き、爆風と衝撃波でその強靱な肉体を軽々と吹き飛ばしてしまった。

「前より使いやすくなってる……?」

リュウヤは自分の腰にあるベルトに目を落とし、以前使用した時よりも副作用が減少していることに気がついた。

「ハザードレベルの上昇ってやつか……?」

「——ッ!」

《ファンキーショット!!ギアリモコン!》

リモコンブロスが構えたライフルから歯車のオーラを帯びた弾丸を発射する。

「おおおおおオオオオッ!!」

リュウヤはビートクロウザーの刃でそれを受け止め、身体を捻りつつ弾丸と衝撃を後方へ受け流した。

「いけるぞ……!今の俺は……負ける気がしねえ!!」

爆発を背に再度刃をリモコンブロスへと向け、勇ましくそう宣言した。

そのすぐそばで近接戦闘を繰り返しているのはエンジンブロスとグリス。

「だりやああああッ!!」

「チィ……！」

スチームブレードとツインブレイカーで互いに荒々しいカウンターを放つ。

鷲尾雷斗と鷲尾風華は両者とも難波チルドレンとして戦闘訓練を受けている身だ。格闘技の経験があるリュウヤはともかく、タクミが彼らに戦闘技術で上回るのは難しい。

考えられる手段としては――

「手数だ……！」

《シングル！》

《ツイン！》

タクミは取り出したフェニックスフルボトルとロボットフルボトルをそれぞれツインブレイカーに差し込み、向かってくるエンジンブロス目掛けて腕を振るった。

「喰らえやアアアアアアッ！！」

両肩から放射されたヴァリアブルゼリーが翼を形取り、飛翔しつつ体当たりを仕掛ける。

「――！？」

接近に成功したところでゼリーによって肥大化した巨腕を使い、エンジンブロスの身体を挟み込む。

「ぐおおおおお……ッ!!」

地面を大きく挟りながらエンジンブ罗斯を引きずり、そのままの勢いで宙へと放り投げた。

「最大!」

さらに肉薄し、ツインブレイカーによる追撃を加える。

「無限!」

「っ……!」

体勢を立て直す前にそれを受けたエンジンブ罗斯は、防御しきれずに幾度も直撃を許してしまった。

「極致!——これが俺の……!力だあああああッ!!」

全ての力を注ぎ込んで放たれた拳が白い歯車の敷き詰められた胸部へとめり込む。

地に強く身体を打ちつけながら転がったエンジンブ罗斯だったが、直後に両足を突き立て、よろめきながらもその場に留まった。

「ぜえ……ぜえ……死に損ないが……!」

「チツ……しづとい野郎だ」

「俺は……俺達は……負けるわけにはいかないんだ……!」

「あ?」

再度構えをとる 그리스 に対し、エンジンブ罗斯はスチームブレードを強く握り直し………標的へと駆け出した。

「全ては……難波重工のためにッ!!」

何度も、何度も、何度も、糸口が見えてくるまで殴りつける。

「――!」

マスクの下にある顔を強張らせ、キリオは思い切り地面を踏み切って空高く跳躍した。

泡の爆発力を加えたキック、パンチ――あらゆる方向から思いつく限りの打撃を加えていく。

が、しかし、

「硬っ……………!？」

通っている気が微塵もしない。

至近距離からの攻撃を受けても全く動じる様子のないローグを見て、キリオは徐々に焦りを感じていた。

「ッ……………」

ただならぬ殺気を感じ、奴が繰り出してきたカウンターの拳を瞬時に後退して回避する。

「どうしました？ さっきからピョンピョンと……………バツタみたいに跳ねてるだけじゃ、わたしには勝てませんよ」

「……………ウサギだ」

余裕を崩さないミカを捉えつつ、考える。

彼女が使用しているのはタクミやリユウヤと同じスクラッシュドライバーだが……………妙だ。

あのベルトの特徴の1つとして射出されるヴァリアブルゼリーを自在に操ることができる点が挙げられる。が、ミカはゼリーどころかツインブレイカーすら使用するところを見せてはいない。

（すぐに反撃できる運動性を考慮しても……………単に分厚い装甲を着込んでるってわけじゃ

なさそうだ)

とにかく重要なのは、ローグはスパークリングの攻撃すら完全に防ぎ切ってしまうということだ。西都の主力というのも伊達じゃないらしい。

《クラックアップフィニッシュ!!》

「はっ——!」

前方から迫る大顎に反応しきれず、ローグの繰り出した右ストレートが脇腹を掠める。

「く……っ!」

鋭い痛覚が走り、直後にコンクリートに叩きつけられた反動で数本のフルボトルがホルダーから落下してしまった。

「さっきまでの威勢はどうしたんですか?」

ゆっくりとキリオの落としたボトルを拾い上げながら静かにそう投げかけてくるミカ。

キリオの方が場数を踏んでいることが幸いているのか、なんとか耐えてはいられるが——やはりシステムの性能差は埋められない。

だがこれでいい。今回の目的はミカ達を倒すことじゃない。

千歌達がライブを終わらせるまでの時間が稼げれば……それが自分達の勝利に

なる。

（とはいえ……このままじゃジリ貧なのは確かか）

キリオは震える足に力を込め、立ち上がると………ラビットタンクスパークリングをドライバーから外した。

「……ひとつ聞きたい」

「……？」

「お前らBernageは、本当に難波重工に言われるままに活動していたのか？そこには千歌^{あいつら}達のような想いは一切なかったのか？」

「なにを今更……。だいたい、それを聞いたところで……もうどうにもならないですよ」
「答えになってねえぞ」

返答を洩るローグ——そのマスクの下に向けてじつと視線を送るキリオ。

ミカは顔を横に振ると、相変わらず冷たい声で言い放つ。

「……もう、忘れました……そんなの」

「わかりやすい嘘をつくんだな」

「つ……あなた……なんかに……！あなた達なんかに！わたしのなにがわかるっていうんですか!!」

ミカは髪の毛を逆立たせる勢いでそう捲し立てると、握った拳に目を落としながら

言った。

「わたしの心を理解できるのは……ユイちゃんだけ……！わたしを救ってくれた、あの子だけだツ!!」

ミカの繰り出した蹴りを避けつつ、キリオは取り出したアイテムのスイッチに指を置いた。

「———そうか」

《ハザードオン!》

ノイズがかった電子音声がそう宣告する。

「お前達とはまた改めて話し合いの機会を設ける必要があるそうだ。……………だから今は戦いに集中するでしょう」

「ハザードトリガー……!」

《ラビット!》

《タンク!》

《スーパーストマツチ!!》

ビルドドライバーにハザードトリガー、及び2本のボトルを装填する。

「万丈に代わって、まずは俺がお前を矯正してやる。……教師としてな」

《アンコントロールスイッチ！ブラックハザード!!》

《ヤベー！》

出現したハザードライドビルダーにプレスされた後、漆黒に染められた装甲を引きずりながら再びローグの前に現れた。

●●●

「投影された映像だと……!?!」

「すぐに調べ直せ！奴らの居場所を突き止めるんだ！」

騒音が飛び交う一室の真ん中で、1人の少女が静かに戦士達の戦いを見守っている。

——スクールアイドル。この星に浸透している未知の力の発生源。

かつて訪れた惑星のなかでこれほどまでに活気付いている場所があったのだろうか。少なくとも“こちら側”にその記憶はない。

火星で感じたものと似てはいるが、地球こつちの方が規模はずっと大きい。

……また、この“見えない力”に手を焼かれるというのか。

「……………少し予定を早める必要がありそうだ」

今まさに終わろうとしているライブの映像を眺めながら、ユイは遠い眼差しでそう呟く。

「……………経過はどうだ？」

扉が開かれ、よろよろとした足取りで部屋に入ってくる気配がひとつ。

現れた老人を見るや否や、PC画面に集中していた職員達は一斉に胸に手を当てて見事な敬礼を見せた。

ユイは彼の方へ身体を向けると跳ねるように椅子から降り、その眼前まで駆け寄ってはにこやかな表情を浮かべた。

「会長……わざわざこんなところに来るなんて、どうされました？」

「少し様子が気になってな。……………どうだ？我が難波重工が生み出した兵器達は、成果を出しているか？」

「首尾は上々、といったところでしょうか。まあ彼女達が負けることはありません。……………ただ東都の連中も想定以上に奮闘しているようで、このままではライブの完遂を許してしまうかと」

淡々と報告を上げていくユイの横を通り、老人——難波重三郎は重い腰を用意された椅子に下ろした。

「ライブが成功してしまえば人々の意識は一気にそちらへ向いてしまいます。戦争は政府の『独り善がり』だという批判も出てくるでしょう」

「それならそれで……もつと相応しい手段を向こうに提案するまでだ」

「相応しい手段……ですか？」

「ああ、手っ取り早くこの国の覇権を手に入れる方法をな」

首を傾げるユイに、重三郎は不敵な笑みを見せ……しわがれた声音で何かを告げた。

（ハザードすら凌ぐか……!!）

意識を持っていかれないよう、ギリギリのところまで踏み留まりながらキリオはローグと近接戦を繰り広げる。

奴め、生意気にも手加減をしていたのか。こちらがハザードトリガーを出した途端に明らかに動きが変わった。

「はア……ッ!!」

「うっ——!?!」

ローグの放った横薙ぎの蹴りを片腕で受け止めるも、勢いを殺しきれずに体勢が崩れてしまう。

「——ッ!!」

直後、追撃が飛んでくる前に腰を低く構え、崩れた体勢のまま奴の腹部に一発打撃を叩き込んだ。

だが隙を作るのが精一杯だ。おそらくダメージは与えられていない。

「……ッ……!!」

すぐさまローグから距離を取り、ハザードのタイムリミットが刻一刻と迫っていることに冷や汗を流す。

（これ以上長引かせるのはまずいか……!）

「はああああッ!!」

再度接近してくるローグに対して拳を構え直したその時、

『ストップ』

通信機から聞こえる少女の声に反応し、ミカは走り出していた足を地面に突き刺して強引に身体を止めた。

(……！葛城……！?)

「ユイちゃん……!?!」

飛ばされた音声にキリオもつられて動きを止める。

『会長直々のご命令だよ。3人とも今すぐ撤退、今回の作戦は諦める』

それを聞いたミカが悔やむように歯を軋ませるのがわかった。

自らボトルを引き抜いて変身を解いたミカが背を向け、去ろうとする。

『ああ戦兔先生、そこにいるんだよね?』

直後、ユイは言葉の矛先をキリオへと向け始めた。

「葛城……」

『前よりトリガーの稼働時間延びてるじゃないですか、すごいすごい！』

「今度はなにをするつもりだ？」

ハザードトリガーを引き抜き、変身を解除したキリオは警戒しつつミカの耳元にある通信機へと尋ねた。

『まあ詳細は後日、ということ。感謝してくださいよ？難波会長が国民を巻き込まない平和的な決着方法を提案してくれたんですから』

ミカがネビュラスチームガンを使つて放射した霧に包まれながら、ユイは笑いを含んだ声でそう言い残していった。

『チャオ〜』

おちやらけた挨拶を最後に彼女達の気配が消える。

キリオは手にしていたトリガーを見つめ、その力を持つてしてもローグを退けることが叶わない現状に眉をひそめるのだった。

第46話 ピリオドを打つとき

「雷斗」

「……ああ」

ネビュラスチームガンから振りまいた霧に身を隠しながら、エンジンブロスとリモコンブロスが後退。

先ほどまで凄まじい戦いを展開していたリュウヤとタクミは、拍子抜けした様子で消えていく2人を眺めていた。

「なんだあ？あつさり引きやがったぞ……？——うつ……!？」

突如全身に走った電撃に、リュウヤは地に膝をつけて苦しみだした。

「バカッ……！早くゼリー抜け!!」

「ぐ……お……ッ!!」

「しょうがねえな……!」

慌てて駆け出したタクミがリュウヤの腰にあるスクラッシュユンドライバーからドラゴンスクラッシュゼリーを引き抜く。

変身が解かれ青い顔をして出てきたリュウヤを見下ろし、タクミはそれを投げ返すつ

つ口を開いた。

「お前、だいぶ無理して使ってただろ」

「べつに……これくらいどうってことねえよ」

ベルトを指して尋ねてきたタクミを一瞥し、リュウヤははっきりしない口調で返そうとする。

「……ま、どう戦うかはお前の自由だが。焦って自滅しちゃ元も子もないぞ」

「……………」

座り込み、俯いた状態でタクミの言葉を意図的に遮断するように黙り込む。

……スクラッシュユドライバーが危険なことくらいわかっている。だが以前よりも使いこなせていることは事実なんだ。

キリオの期待に応えるためにも、自分は――

「お前ら、無事だったか」

薄汚れた上着を羽織ったボロボロの青年が小さく挙手しながらこちらへ近づいてくる。

「なんだお前……あんな口上叩いておきながら傷だらけじゃねえか」

「やかましいな、そういうお前は尻餅ついて何してんだ？」

「……ついてねえし」

リュウヤは立ち上がり、擦り傷が多く見られるキリオの顔を捉えると落ち込むように目を伏せた。

「……ん？」

ビルドフォンから着信音が鳴っていることに気がつき、キリオはすぐに上着のポケットに手をつ突っ込みそれを取り出すと表示されている名前を確認した。

「塔野首相……」

一瞬応答するか迷った後、通話ボタンをタップして耳元へ持つていく。

『どうやら目的は果たせたようだな』

聞こえてきた男の声に自然と口元が引きつった。

「……ええ」

『一仕事終えた直後で悪いが……たった今西都政府から通達があつた』

「通達？」

『ああ、なんでも手っ取り早く決着をつける方法を提案する……とか』

「俺も奴らに言われましたよ、それ」

詳細は後日……とユイは言っていたが、あいつのことだ、またフェイントを仕掛けて

くる可能性も否定できない。

正式な知らせが来るまでは警戒を怠らない方がいいだろう。

『我々の方でも目を光らせておこう』

「お願いします」

事務的なやり取りを終え、キリオはビルドフォンを耳から離す。

……何はともあれ、今回はこちらの勝利だ。今は純粹にそのことに喜ぶとしよう。

●●●

「では皆さん、私達 S a i n t A q u o r s S n o w の合同ライブ大成功を祝いまして………かんぱーい!!」

——かんぱーい!!

部室に集まった A q u o r s、S a i n t S n o w……そして月やキリオ達を加えた15人。

それぞれの役目を終え、盛大な打ち上げがこの部屋で行われようとしていた。

西都の妨害を振り切り、ライブをやり遂げられたんだ。今日くらい羽目を外させてもいいだろう。

「なんかスツキリしたね」

「ほんと、今までのモヤモヤした気分が嘘みたい」

曜が身体を伸ばしながら言ったのを見て、梨子も胸に手を当てて清々しい気持ちを確認する。

「ヨハネの再臨にリトルデーモン達も歓喜している頃ね……」

「最近の生配信もできてなかったから反響もすごそうずらね」

「なんであんたがそんなこと知ってんのよ!？」

部室内に広がる賑やかな雰囲気なんだか懐かしい。

皆が思い思いの感情を吐露していく光景を見守りつつ、キリオは部屋の隅で一人紙コップに口をつけていた。

「あ、白髪発見」

「ぶっ……」

唐突に横からかかってきた声に驚き思わず含んでいた麦茶を吹き出しそうになる。

いつの間にか席を立て隣にやってきていた千歌を見下ろし、キリオは口元を拭い

つ苦笑した。

「驚かせるなよ……」

「えへへ……ごめんつい。キリオくん、そろそろ髪染め直した方がいいんじゃない？」

「あー……確かに色落ちしてきたかも」

「え？ お前それ染めてたの？」

側でその会話を聞いていたリュウヤが驚いた様子でそう尋ねてきた。

「ああ、元は白なんだ俺の髪」

「地毛が白ってどういうことだよ……。あ、あれか？ カルビ……みたいな名前の」

「アルビノって言いたいのか……。いいや、別にそういうわけでもないらしい」

記憶喪失になってから何度か医者に診てもらった機会があったが、驚くべきことに数値だけを見れば色素等の遺伝子情報に関しては通常のそれとは大差ない結果だった。

「私が最初にキリオくんと会った時はまだ小さかったから特に何も感じなかったけど、今思えば不思議だね。なんで砂浜で倒れてたの？」

「こつちが聞きたいわ」

今でこそこうして普通に過ごしていられるが、当初は本当に不安で押しつぶされそうだったのを覚えている。

キリオの失われた記憶————スカイウォールの惨劇とは必ず何かしらの因果関係

があるはずのそれは、相変わらず彼の心にぽっかりと穴を空けたままだ。

……まあ、今は千歌達に付き合っているだけで精一杯だが。

「……………」

コップに残っていた麦茶を飲み干した後キリオは微弱な振動を腰に感じ、何気なくビルドフォンをポケットから取り出した。

送られてきたのは塔野首相からのメール文。

「……………」

キリオは息を呑み、危険物でも取り扱うかのように慎重な手つきでそれを開いた。

「……はあ」

部室内が見える窓を避けるように移動し、タクミは薄暗い体育館の壁に寄りかかりながらため息を吐いた。

別にたそがれているわけではない。自分達を危険な目に遭わせた奴が近くにいたら純粹にくつろげないと思つて退出しただけだ。

「……さすが東都だぜ、平和ボケした奴らが揃いも揃つて……」

「なにしてるの？」

「うおおおっ!？」

生えてくるように視界に入ってきた少女の顔面に思わず身体をビクつかせて叫んでしまう。

「なっ……なんだ理亞か……」

「なによそれ、失礼な奴」

腕を組んでそっぽを向く理亞だったが、視線だけはこちらを捉えたままだ。

「どうかしたのか？」

「いや……その……」

もじもじと身を縮ませてなにやら口ごもる彼女にタクミが首を傾ける。

「私……タクミにきちんと謝ってなかったから」

消えそうな声でそう伝えた直後、理亞は伏せていた顔を上げてタクミと視線を合わせた。

「あの時……タクミの言葉もちやんと聞かずに……勝手に疑って、ごめんなさい」

ふと北都での出来事が脳裏をよぎる。

葛城ユイ————スタークの策略でタクミと理亞が引き裂かれてしまったあの瞬間の光景が。

「あ……」

タクミは急に苦しくなった自分の胸を押さえ、絞り出すように返した。

「俺も……」

「……？」

「俺の方こそ……悪かった。理亞や、聖良さんにも迷惑かけて……自分勝手なことばかりで」

その答えを聞いて理亞も首を振る。

「ううん……それはもういいの。タクミが私達のために戦ってくれてたんだってことは、もう充分伝わったから」

「……」

笑顔を浮かべる彼女を見て、タクミはごまかすように口角を上げる。

——言えない。自分の手が既に汚れてしまっていることは。

人間をこの手で……殺めてしまっているということは、絶対に……。

「ほら、戻ろ」

手を差し出しながらそう言う理亞に、タクミは一瞬たじろぐ。

「いや、俺は……」

「変なこと気にしなくていいからー」

痺れを切らした彼女に半ば強引に腕を引かれてしまう。

暖かい、優しさを分け与えてくれるような手の感触。

強烈な罪悪感が渦巻く。

迎え入れられた部室のなかで、タクミは胸に残滓する負の念を奥へ追いやりながら、一時の幸福を身に刻むのだった。



「代表戦……？」

部室内の雰囲気は落ちてきてきた頃、キリオは全員に向けて送られてきたメールの内容について切り出した。

「ああ。東都と西都、双方で3人ずつ戦う者を選んで……最終的に勝ち数の多い国が勝利」

「西都の奴ら……」一気に決着をつけるつもりだな」

3対3の団体戦……こちら側で出せるのはキリオとリュウヤ、そして――

「3人ずつ……」

ふと呟いたルビイが部屋の隅に視線を向ける。

今の今まで極力気配を消していたタクミが苦い表情で顔を上げた。

「猿渡」

「あーもう……わーってるよ。協力しろっていうんだろ？」

「ごめんね猿渡くん……」

もう好きにしてくれとでも言うような様子で両手を挙げるタクミに、ルビイは申し訳なさそうにそうこぼした。

「なっ……なんでルビィちゃんが謝るん……ですか!？」

（なんで敬語……?）

必要な人数は問題なく揃いそうなことを確認すると、キリオは踵を返して部室から出ようとする。

「キリオくんどこ行くの?」

「決まってるだろ、奴らに勝つための新アイテムを開発しに行くんだよ」

ハザードトリガーやスパークリングだけではログに勝つことは難しい。

もっと何か別の工夫を………せめてオーバーフロー状態を自在に操れるようになれば――

「……で、なんでお前らまで来るんだよ?」

「なんか面白そうだったし」

開発のため十千万地下にある研究室へと移動したキリオだったが………なぜかナチュラルに千歌達も付いてきてしまった。

「……」が仮面ライダーの秘密基地ってわけですね!」

「ちよっ……！撮影禁止だこは！」

「えー!?」

ちやつかり部屋を撮り始めた月からデジカメを取り上げて動画データを迅速に削除する。情報なんてどこから漏洩するかわかったものではない。

「す、すみません」

「ったく………」

気を取り直して机に向かおうとするキリオだったが、

「……………」

目を閉じ、腕を組んで考え込む姿を見せた彼は一向に手を動かそうとはしない。

「……キリオ?」

「寝てるの?」

その様子を横から眺めていた千歌達が怪訝な目を向けてくる。

「もしかして……………アイデアが浮かんでこないとか?」

「……………」

果南が指摘した途端にキリオの額にうつすらと汗がにじんできた。どうやら図星らしい。

うーん、と唸るばかりでそのまま5分ほどの時間が過ぎていく。

「私達……やっぱり邪魔になっちゃうかもね」

「そ、そうだね……行こっか」

やがて椅子に腰掛けながら悩み続けるキリオに背を向けて皆がその場から離れようとしたその時だ。

「……………」

千歌達がそろそろと部屋から出て行くなか、梨子が傍に設置されていた机の前で急に立ち止まった。

バングルが巻かれた左腕を机の上に置いてあつた“エンプティボトル”へとかざし

「——ッ！」

黄金色の輝きを注ぎ込む。

空だったボトルの中に薄い赤色の成分が溜まり、新たなフルボトルとして変化させた。

「……………」

その直後、意識を失ったかのように彼女は床へ横たわってしまった。

「……ん？——んっ!？」

何かが倒れる音に反応して振り返ったキリオが二度見する。

「さ、桜内!？」

仰向けになって倒れていた梨子のもとへ慌てて駆け寄り、キリオは彼女の上体を起こした。

「おい桜内!大丈夫か!？」

軽く揺すってみるが反応はない。……というか眠っているようだった。

あまりに突然な出来事に驚愕しつつ、キリオは視界に入ってきた卓上のボトルを手に取り。

「これは……」

通常のそれとは違う白い外装で包まれ、赤い成分が内蔵された1本のボトル。

そこに刻まれたレリーフへと目を落とした時、キリオは無意識にそのエレメントの名を口にしていた。

「ラビットボトル……?！」

第47話 決着のデスマッチ

スカイウォールの惨劇——それは突如として地球に飛来した『パンドラボックス』と呼ばれる物体によって引き起こされた大事件。

日本列島を3つに分断する巨大な壁を作り出しただけでなく、その悪魔の箱は長くに渡り多くの人々を苦しめてきた。

そう………全ては『あの日』に始まったのだ。

「……………」

東都政府官邸、その執務室。

普段は厳格な雰囲気を漂わせている塔野首相だったが、机の端に飾っている写真を眺めている間は綻ぶような暖かみが瞳に宿る。

「5年前………か」

写っているのは後の各国首相となる聖堂、来沢、塔野……………そしてその傍らに並ん

でいるのは華やかな衣装に身を包んだ少女達。

彼らが掲げている横断幕には「祝開催 スクールアイドルフェスティバル」の文字が見える。

それは政府協力の下に行われたイベントのオープニングセレモニー時に撮影されたものだっただけ。

額縁のなかの彼らは……その数分後に悲劇が起こるなんて当然知る由もなく、ただにこやかな笑顔を浮かべている。

ため息を吐きつつ写真から目を逸らす。

「……急がなければ」

この国をひとつにする、それが自分の使命。

そのためならどんなに犠牲を払っても惜しくはない。

もつと力が……あらゆる障害をもつとしない圧倒的な力が必要だ。

●●●

「なんつだあ……？ やけに息苦しい場所でやるんだな……」

「被害が広がらないための配慮ではありませんの？」

「奴らがそんなこと気にするとも思えねえけど……」

灰色の壁と床、天井に囲まれた閉鎖的な空間にヒソヒソとした会話が反響する。

西都と東都の戦争に終止符を打つための代表戦——キリオ達は西都にあるその会場へ足を運んでいた。

難波重工が保有する地下施設。字面だけ見れば畏に思える状況だが………どうにもガーディアンや警備員の類が見当たらない。

「お前らまで来る必要なかったんじゃないかねえか？」

リユウヤは背後に付いてきていた千歌達へと振り返り、心配そうな顔でそう尋ねる。

「ううん、いいの。きちんとそばで見届けたかったし、それに——」

千歌は数メートル離れた場所でも何やら考え込むように佇んでいるキリオを視界の端に入れつつ答える。

「一緒に行動した方が安全だ……ってキリオくんが」

「まあ……それもそうか」

また別行動をとって奇襲を仕掛けられてはたまったものではない。

西都にはもう妙な動きはとらせてはダメだ。今日この場で決着をつけなくては。

『よく来てくれた』

会場内に設置されているマイクを通して伝わってくるしわがれた声。

奥に見えるガラス張りの窓を見上げ、こちらを見下ろしている老人を捉えたとキリオは不愉快そうに眉をひそめた。

『今日君達をここに呼んだのは他でもない、国同士の争いを相応しい作法をもって決着をつけるためだ』

「難波重三郎……」

「……葛城……」

椅子に腰掛けている重三郎の隣で君の悪い笑みを浮かべているユイを見てリュウヤが歯を食いしばる。

想像していた通りの構図だ。やはり彼女達が従っている難波重工こそ……現在西都を牛耳っている黒幕。

「さっさと始めようじゃねえか……!」

『まあそう急ぐな少年。国の未来を決めるんだ……慎重に、余裕をもった行動を心がけるとしようじゃないか』

「じゃあとりあえず布陣を決めるとするか」

ちようど用意された闘技場がガラス越しに見える部屋へ移動。

西都側から手渡された1枚の資料に目を落としながら、キリオはリュウヤとタクミにそれぞれ視線を送る。

資料に記述されているのは西都が誰をどのタイミングで投入するのか、といった表だ。

「んなもん渡してきやがつて……ハンデのつもりか？　ますます気に入らねえ奴らだ」

「今は余計な勘繰りはやめとけ。あつちにどんな思惑があらうと、こつちも最高戦力を注いで挑むだけだ」

改めてプリントされている名前に目を通す。

1番手は鷺尾風華。難波チルドレンのなかでも随一の戦闘力を誇るであろう鷺尾姉弟の片割れだ。

彼女に関してはわからない部分も多いが、以前戦った様子を見ていると単独ではあまり脅威にはならない印象だ。弟との連携がないのならそれほど警戒する必要はないだろう。

2番手……ある意味こいつが最も危険だ、葛城ユイ。

なにを仕掛けてくるか全く予想できない。スタークとしてのトリツキーな動きに加えて、以前奴が見せた『謎の力』……。考えられる限りの対策を練る必要がある。

「……………」

そして3番手——氷室ミカ。彼女に関しては小細工なしのパワー勝負で向かってくるだろう。単純に迎え撃てるだけの戦力が必須になる。

……先に決めておきたいのはやっぱり、

「猿渡——」

「俺を2番手にしてくれ」

顔を上げ、タクミの名を呼ぼうとしたキリオにリュウヤの声が重なる。

「……万丈」

「頼む」

真摯に詰め寄ってくる彼と目が合う。

……理解した。西都の連中はリュウヤをユイとぶつけるためにわざわざこんな表を渡してきたんだ。

だが彼は彼女と対峙する際に精神的な部分で不安定になってしまう可能性が高い。極力対峙するようなことは避けたいが――

「大丈夫だ、自分を見失うことなんかない。あいつらの間違いを正すために……俺は戦う」

手のひらに拳を打ちつけてそう語るリュウヤの瞳には、メラメラと自信の炎が宿っているように感じた。

「……ま、たまにはお前の判断を信じるのも悪かないか」

「じゃあ3番手は俺か?」

横から割って入ったタクミがキリオの手から資料を取り上げつつそう投げかける。

すぐにプリントを奪い返したキリオは、どこか自信ありげな表情を見せながら言った。

「いいや、お前は1番手だ。氷室の相手は俺に任せてもらう」

「は?」

きよとん、とした顔で間の抜けた声を上げるタクミ。

「いやいやいや……同じスクラッシュ持ちの俺が戦った方が断然勝率いいんじゃないか?」

「いいやダメだ、あいつの戦闘能力はハザードをもつてしても破り難い。お前じゃ確実に負ける」

「お前なら勝てるって言うのかよ?」

少しばかりムツと眉間にしわを寄せたタクミが薄めた目を向けてくる。
しかし、

「ああ」

キリオは若干の笑顔を含ませながら、胸を張ってそう答えてみせた。

「……始まるんだね」

部屋の傍に設置されていたテーブルを囲みながら、千歌達は神妙な表情でキリオ達3人の背中を見守っている。

「こうして街の人達を巻き込まない形で勝負ができるのはいいけど……」

「やっぱり先生達が戦うのは気が休まらないよね」

自分達のライブが成功したからこそこの状況に持ってこれたのは確かだ。しかしやはり彼らだけに重荷を背負わせるのは心が痛む。

「……信じよう」

机の下できゅ、と手に力を込めた千歌がこぼす。

彼女の力強い様子を見て、皆も互いに確認し合うように首を縦に振った。

「渡辺従姉妹」

「はい？」

千歌達の視線が声の飛んできた方向に移る。

不意にこちらへ歩み寄ってきたキリオが月の隣で立ち止まった。

「今撮影手段はあるか？」

「ええ、いつものデジカメなら……」

「よかった。……お前達も聞いてくれ」

キリオがその場にいた全員へ目配せする。

「——しておいてくれ。それも奴らにバレないように、だ」

説明を聞き終えた千歌達が不思議そうに彼を見上げた。

「いいけど……」

「どうしてですか？」

「……念のためだ」

月が尋ねると、キリオは奥に見える向かい側の部屋でくつろいでいる老人を一瞥した後、小さく答えた。



刻一刻と時間が迫ってくる。

タクミは闘技場に一步踏み入れると、準備運動がてらに身体を伸ばし始めた。

「……どうした？」

背後に感じた気配に問いかける。

恐る恐る物陰から姿を見せたのは……髪をふたつに束ねた同級生。

「あつ……あのさ」

理亞はタクミのそばまで駆け寄ると、何を言いだそうか迷うようにもごもご口を動かした。

「その……………悪いわね、いつもあんたにばかり辛い思いさせて」

「お前らを辛くさせないために俺達仮面ライダーがいるんだ、国の運命を背負うくらいの覚悟はある」

「でも……………人を傷つけて、その上自分も傷つけられるなんてこと……………あんただって本当は嫌なんでしょ……………」

装着したスクラッシュドライバーを軽く撫で、タクミは顔を俯かせている理亞に微笑みかけた。

「今回の勝敗は相手を変身解除か降参させるかで分けられる。誰かが死ぬようなことは起こらないさ」

「……………」

「だからさ、そんなに心配すんなって」

タクミはぼん、と彼女の肩に手を置くと、顔を上げて窓の奥に立っているキリオと視線を交わした。

（わかったよ戦鬼キリオ。……………俺達の目的は同じだ）

『それでは猿渡タクミと鷲尾風華による、第1戦目を行いますッ!!』

審判の男性の声が会場内に響き渡る。

互いに背中を見守られつつ、2人の戦士が闘技場内で相対した。

「鷲尾風華……………俺が初めて変身した時も近くにいたな。あの時からスタークの言いなりだったってわけか」

「私は難波会長の意思に従うだけです」

「ふん……………まあそんなことはどうでもいい」

《ロボットゼリー!》

スクラツシュゼリーをドライバーに叩き込み、風華に向けて構えをとる。

「まずは1勝だ。——変身ッ!!」

《潰れる!流れる!溢れ出る!!》

《ロボットイングリズーブラア!!》

「あんたらの企みを……全部ぶつ潰す。俺に力を与えたことを後悔させてやるぜ」
「そうですか」

風華もネビュラスチームガンを取り出し、落ち着いた様子で “ギア” を装填――

《ギアエンジン!》

「……………あ?」

事前に確認しておいた情報と違うアイテムを用いたことに驚愕する。

彼女が前の戦いで使用していたのは “エンジン” ではなく “リモコン” だったはず。
なぜここにきて弟のものを――

「けれど残念ですね。今のあなたでは私には遠く……………及ばない」

《ギアリモコン!》

1度装填したギアエンジンを抜き取り、立て続けにギアリモコンを差し込む。

《ファンキーマッチ!!》

「なにを——」

「潤動」

狼狽するタクミを捉えつつ、風華は強くトリガーを引き絞った。

《フィーバー!!》

白と緑の歯車が乱舞する。

右半身には白、左半身には緑。それぞれ偏るように装着された歯車が回転し、火花を撒き散らしながら新たな戦士が誕生したことを知らしめた。

《パーフェクト!》

「ヘルブロス………誕生」

想定外の事態にマスクの下で目を剥くタクミ。

やがて背中に感じた少女の視線に押されるように……………彼は雄叫びを上げながら
地を蹴り上げた。

『それでは第1戦……………始めッッ!!』

第48話 スノーにくべる心

「マネージャー希望……？」

「そうみたい」

ダンスのレッスンを終え、疲労しきった身体を更衣室で落ち着かせていた時だった。思いもよらぬ発言が妹の口から出たことに驚きつつ、聖良はタオルで汗を拭いながら聞き返す。

「ええつと……その子は理亞のお友達ですか？」

「友達つてわけじゃ……」

答えに詰まったように頬を掻いては視線を逸らす理亞を見て、聖良は普段の生活ではあまり見せない小悪魔じみた笑みを浮かべた。

「男の子ですか？」

「え？そうだけど……どうしてわかっ——」

ハツとするように目を見開いた理亞の顔がりんごのような赤みを帯びる。

それを隠すように片手で顔を覆い、否定の意を込めてもう一方の手のひらを姉に突き出した。

「ちよつと姉様……ほんと、やめてよ………そんなんじゃないからね」

「ふふ、私はまだ何も言つてませんけど」

「ただのクラスメイトよ、スクールアイドルオタクの」

半ば呆れるようにため息をついた後、自らのほつぺたを軽く叩いて気を正す理亞。

「それで、どうしてまた私達のところにな？」

聖良は改めてそんな問いを投げかけた。

マネージャーの仕事は部員のスケジュールや体調管理……その他諸々。いわば雑用だ。

話を聞く限り理亞のクラスメイトだという少年はやけに積極的な印象を覚える。が、そうまでしてマネージャーにこだわる理由が理解できなかったのだ。

「ああ、それなんだけど……不純も不純。判断は姉様に任せるけど……断つてくれて構わないわ」

「不純？」

「ええ、『ルビイちゃんに会えるかもしれないから』だつてさ」

腰を当てながら下手くそな声真似を披露する理亞に思わず苦笑する。

ルビイちゃん……とはA q o u r sの黒澤ルビイのことで間違いないだろう。なる

ほど、確かに不純だ。

そのような理由で入部を希望されても当然「はいそうですか」とはいかない。

「まあ、本当に私達と共に高みを目指そうとする気があるのなら……………1度や2度突き放したくらいでは、懲りないでしょうけどね」



「ふ——ッ!!」

「ハアッ!!」

重たい金属音が闘技場のなかを何度も行き来する。

互いの拳が互いの装甲を抉ろうとする暴力の鐘。この会場の中心では今まさにそれが荒ぶるように奏でられている。

「ハッ……………」

ヘルプロスの放つ巨大な歯車が迫る。

ギリギリまで引きつけた後、地面を滑りながら上体を低くしてそれを回避。そのまま奴の懷まで潜り込んだ。

「もらった——！」

起き上がる際に上半身を捻った勢いで威力を底上げた裏拳をお見舞いする。

……が、しかし。

「……………」

直撃したはずのその攻撃を、ヘルブ羅斯は防御体勢もとらずに胸で受けきってみせた。

「ぐっ……………」

「……………脆弱ですね」

腕を弾かれ、がら空きになった胴体に高速回転した歯車の刃が刻み込まれる。

「ぐああああああ……………ッ!!」

血飛沫の如く大量の火花が舞い散り、グリスがいたぶられるのを晒すかのように薄暗い闘技場が照らされた。

「っ……………」

天井高くまで弾き飛ばされた彼の身体に追い討ちの一撃が接近する。

自分を仕留めようと発射された歯車のオーラを捉え、タクミは空中でボトルを取り出

してはそれをツインブレイカーに叩き入れた。

「うらあああああああああああッッ!!」

手のひらからヴァリアブルゼリーで形成されたプロペラを伸ばし、回転させることで即席の盾を作り上げる。

飛来してきた歯車を受け止め、押し負ける前に体勢を変えて後方へと受け流すことでその場を凌いだ。

「はぁ……はぁ……っ」

着地し、必死に酸素を吸っては拳を構え直す。

——強い。鷲尾風華の身体能力もそうだが……あの歪な姿、単にエンジンブロスとリモコンブロスの合体形態というだけではない。スペックだけならローグにまで迫るだろう。

（……少し舐めすぎてたか）

リモコンブロス単身ならばあるいは——と考えていたが、隠し玉を出されては対応に遅れるのも必然。このまま防戦を続ければ確実に取り返しのつかないダメージを負ってしまう。

……それはダメだ。

士気を落とさないためにも、ここは勝たなければいけない。

それに、

(……………理亞達にこれ以上……………苦しい想いをさせないために……………！)

自分が今ここに立っているのは、悪夢を終わらせるため。この手で戦争に決着をつけるためだ。

もう一度“彼女達”が笑顔で歌って、人々に希望を送り届けられるように。

「タクミ……………！」

「猿渡！」

ガラス越しに対戦を見守っていた理亞とリュウヤが血相を変えて彼の名前を呼ぶ。誰が見てもグリスの劣勢は明らかだった。

「チェックメイトです」

「ああ……？」

不意に投げかけられた言葉に顔を上げる。

前方で佇んでいるヘルブロス——そのマスクの下から落ち着いた女性の声が届いてきた。

「これ以上の戦いは無意味です。再起不能になる前に降参することを推奨します」

「なに言ってるんだあんた……？——ぐっ……！」

言葉の切れ目で発砲されたネビュラスチームガンによる射撃を両腕を交差させて耐える。

腕の隙間からヘルブロスを睨みつつ、タクミは彼女が話すのをしばらく黙り込んで傍聴していた。

「あなた方は我々を悪魔か何かだと勘違いしているようですが、そのような誤った認識は改めるべきだ。難波重工が作り出す新たな統一国家……それは世界のあらゆる国々をも凌駕する絶対的な存在になることでしよう」

タクミは彼女の言葉を聞いて、仮面の下で絶句した。

「戦争で悲しみに包まれたこの国を導く……いわば救世主。難波会長は新時代の支配者となるべきお方です」

どこからが本気でどこからが冗談なのかわからない。

「は——」

ああ、笑えてくる。これが難波チルドレン、あの老人に魂を売った人間の末路か。

「ふざけるな……救世主？新時代の支配者だ……う？」

崩れそうになる身体に力を入れ、なんとか踏み留まりながらタクミは言った。

「大層な看板掲げて誤魔化そうとすんじゃあねえよ。自分達はそこまで尊い存在だって

……何があんたらをそう思わせてるんだ……？」

力強く踏み出し、助走をつけて徐々にヘルブロスのもとへと駆ける速度を上げる。

「あんたらはこれまで一体なにをしてきた……？人々を笑顔にするために努力してきた

のか？そうじゃないだろ……ッ!？」

《アタックモード!》

ツインブレイカーで奴の腕にあるカッターを抑えこみ、競り合いへと移行。

「難波重工が生み出したのは殺人兵器と悲しみだけだ……！幸せだった人達を一瞬にし

て地獄に叩き落とした極悪人の集まりだろうがッ!!！」

「……………」

強引に押し切ったグリスがヘルブロスの腕上にツインブレイカーの刃を滑らせ、流れるような動きで頭部を抉った。

「……!? ハザードレベルが急に——!」

たたらを踏んだヘルブロスの際を見て腰を低く下ろす。

《シングル!》

《ツイン!》

ツインブレイカーにロボットゼリーとロボットボトルを装填した後、装着された左腕を引くと同時にスクラツシユドライバーのレバーを弾いた。

《スクラツプフィニツシュ!! / ツインブレイク!!》

「あんたら全員……俺と同じだろうがよッツ!!」

「かつ……ふ——!!」

ツインブレイカーの刃の細さを利用し、歯車が密集していない装甲の薄い隙間へと全力を注いだ一撃を放った。

練り上げられた最大威力をそのまま身に受けたヘルブロスは宙で放り投げられた玩具のように回転した後、凄まじい騒音を立てながら地面へと落下した。

「ぐっ……う……!」

「オオオオオオオオッ!!」

膝をつくヘルブロスに向かって一直線に走り出すグリス。

自らの腕も壊れそうになるほどにツインブレイカーを振り回す猛攻。

風華は防御が追いつかないラッシュを前にして身を縮ませるばかりだ。

「愛情！ 厚情！ 激情ツ!!」

「……!」

「喰らいやがれええええええええええッツ!!」

《スクラップフィニッシュ!!》

至近距離から放たれた跳び蹴りがヘルブロスの胸部を直撃し、そのまま地面を抉りながら滑走。

吹き飛ばされたヘルブロスからは蓄積されたダメージが溢れ出るように稲妻が走っていた。

「(っ)まで……やるとは……」

今にも倒れそうな風華が子鹿のように震える足を踏ん張り、立ち上がる。

形勢逆転。どちらに勝負が転がるか判断がつかなくなったその時、

『なにをしている風華』

マイクから流れ出る老人の声に、名前を呼ばれた彼女は小さく肩を震わせた。

「会長……」

『わかっているんだろうな？お前がこの戦いに敗れば雷斗がどうなるのか』

「……っ」

そのやりとりを聞いたタクミが呆然とした様子で立ち尽くす。

「は……？——ッ！」

駆け出してきたヘルブロスの打撃を受け止めつつ、タクミは戸惑いながら風華に対して問いかけた。

「おい……今のはどういう——」

「あなたが気にする必要は……ありません……！」

距離をとり、再度ヘルブロスの振るった両腕からグリスを巻き込まんとする歯車が射出される。

側宙の要領でそれを回避したタクミはすぐさま顔を上げて前方に立っている戦士の顔を睨んだ。

「あなたと同じように……私にも負けられない理由があるということです……ッ!!」

ネビュラスチームガンによる射撃に耐えながら頭を動かす。

(弟を……人質にされているのか……!?)

この会場にやってきてから鷲尾雷斗の姿が見られないのは確かだ。

今ここで自分が勝てば——1人の人間の命が失われることになる。

「……………ッ!!」

ツインブレイカーを構えながら地を蹴り、飛来してくる銃弾を避けながらヘルブロスにとどめを刺そうと闘技場内を駆け巡る。

何も考えるな。

今までとは背負っているものが違う。ここで負けてしまえば、その責任は“次”に降りかかってしまう。

だから確実に……………奴を仕留めなくては——!!

(敵の事情なんて……知ったことかよ……!)

徐々に距離を詰めていき、ヘルブロスの死角に潜り込んで再びスクラッシュドライブバーのレバーへと手をかける。

このままレバーを押せば間違いなく奴を倒せる。1戦目の勝利は自分達のものになるんだ。

「おおおおおおおおおおおッ
!!!!」

——
タクミ。

少女の顔が脳裏によぎる。
今にも泣き出しそうな顔。
他人が傷つく痛みを、まるで自分のことのように想つてく
れる女の子が見える。

（また……俺は——）

——人を殺すのか？

凄まじい圧力に押し出されるような感覚が全身にほとばしる。

ヘルブ羅斯の繰り出した一撃に吹き飛ばされ——タクミは生身の身体で地

面へと放り出された。

『仮面ライダーグリス、変身解除！よって勝者……ヘルブロス、鷲尾風華!!』

重い沈黙が空間に充満する。

「チッ……」

しばらく天井を見上げた後、重い腰を上げて立ち上がる。

「どう……して……」

何も言わないまま立ち去ろうとしたタクミの背中に、動揺で満ちた声が投げられた。

「どうして一瞬……動きを止めたんですか……？」

変身を解いた風華が青くなった表情でそう尋ねてくる。

タクミは疲れ切った顔を彼女に向け、

「なんのことだよ」

消えそうな声音でそう返した。

今まで冷徹だった風華は安堵と驚愕の入り混じった複雑な表情で、去っていく彼の背

中を見つめていた。

第49話 ミストマツチな奴ら

「タクミ！」

引きずるような足取りで帰ってきた同級生へと駆け寄り、理亜は彼の肩を支えると足並みを揃えながらゆっくりと歩み出した。

「すまん、負けた……」

「そんなことはいいのよ！ ケガは大丈夫なの……？」

「平気だよこんくらい」

灰色の扉がひとりでに開く。

少女に体重を預けながら部屋に戻ってきた少年に、待機していた全員の視線が集中した。

「猿渡くん、すぐに手当を……！」

「聖良さん……すんませんお手数かけて」

「今更でしょ」

タクミを椅子に座らせながら呆れた顔でそうこぼす理亜。

鹿角姉妹から消毒液の染み込んだガーゼを傷口に付けられる度に苦悶の表情を浮か

べる彼に、やけに落ち着いた様子の青年が歩み寄ってきた。

「ちっ……いいぜ、文句なら聞いてやる」

「いや、お前も案外甘いところがあるんだな……っと思つてさ」

そう微かに笑ったキリオが部屋の隅でストレッチに励んでいたリュウヤの方を見やる。

「3回勝負なんだ、これから巻き返せばいい」

「そうだよ猿渡くん！まだ負けが決定したわけじゃないんだから！」

「うえ……っ!?は、はい……!!」

元氣付けようと彼の手を強く握つたルビイを見てタクミの顔面が上氣する。わかりやすい奴だ。

「いけるか万丈？」

「あつたりめえだろ、見てろよ俺の超つえー姿をよ！」

自信満々な調子でシャドーボクシングをするリュウヤ。彼のおかげで少しだけ場の空気が和らいだ。

……實際問題、次の戦いでリュウヤが勝たなければ東都に未来はない。

葛城ユイ——スタークの思惑が未だわからない以上、彼には万全の体制かつ慎重に臨んでもらわなければ。

「……………」

「梨子ちゃん？」

急に額を押さえて俯いた梨子の肩に千歌が優しく手を置く。

「大丈夫？ 頭痛でもするの？」

「ううん、平気……少しくらつときただけ」

「桜内はこの前も俺の部屋で気絶してたからな。具合が悪いならすぐに知らせろよ」

「はい、すみません……。みんなも心配かけてごめんね」

「もう、梨子ちゃんたらずく謝るんだから。心配するのは当然でしょ、友達なんだから」
少女達のやりとりを横で眺めていたキリオの瞳が、何かを注意深く観察するように細くなる。

その視線の先にあるのは——梨子の左手首にあるバングル。

異様な雰囲気を漂わせているそれを視界の中心に捉え、キリオは上着にしまっていた棒状のアイテムをポケット越しに触れた。



「ははは、それでこそ……難波重工の最終兵器だ」

「……お褒めに預かり光栄です」

待機部屋へと戻った風華を待っていたのは、上機嫌な様子でたい焼きを口にする難波重三郎だった。

「姉さん、勝ったんだな」

「雷斗……」

後ろにある扉から勢いよく入室してきた弟を見て胸を撫で下ろす風華。

「約束通り、雷斗の拘束は解いておいた。……すまなかったな雷斗、辛かっただろう？」

「いえ、会長が望むことであるのなら……例えどのような命令でも従う所存であります」

拳を胸に打ち付けて敬礼の意を表す雷斗を一瞥し、風華はどこか痛ましそうに彼から視線を外した。

「さて………次はユイの番か」

「はあーい！難波会長の右腕、葛城ユイ！ご期待に沿えるよう一生懸命頑張ります！」
語りかける老人に対して元気よく挙手する少女。その光景だけを切り取れば孫娘と

その祖父が微笑ましいやりとりをしているようにも見える。

「――間違えて殺しちゃうかもしれません、問題ありますかね？」

「はっはっは、構わんよ」

だがその実態は恐ろしいほどにドス黒い感情を胸に秘めた者達の会話に過ぎない。

狂気に満ちたその一室で、風華は吐きそうになるのを堪えながら平静を装って佇んでいた。

「うふふふー……やっぱり2番手になってくれたんだね、万丈くん。罨だとは思わなかったの？」

「……葛城」

闘技場に立ち、向かい合ったりリュウヤとユイが一定の距離を保ちながら互いに口を開いた。

「お前からはまだまだ聞きたいことが山ほどあんだよ」

「あ、もしかして……あたしと話すために自らこのタイミングを選んだの!? 嬉しいなあ！ なになに、なんでも聞いて！」

尻尾を振る子犬のように無邪気な反応を見せるユイに、リュウヤは終始鋭い眼差しのまま問いかける。

「お前と……氷室についてのことだ」

「あたしとローグのこと？」

ミカのことを「ローグ」と呼ぶユイにまたも怒りが湧いてくる。

彼女にとってもうミカは友達ではなく、都合のいい兵器なのだと嫌でも理解させられた。

「お前らBernageは……これまでやってきたことに何の感情も抱かなかったのか？ スクールアイドルに対する想いは……本当に偽物だったのか？」

疑問に思っているのはリュウヤだけじゃない。キリオも、Saint Snowの2人も、Aqoursのみんなだって知りたがっている。

以前ユイとミカが見せてくれたライブ——あれはスクールアイドルに対して真

剣に向き合うことでしか実現できない最高のパフォーマンスだった。

あんなライブを行えるグループが………一切の情熱もなく活動していたとは思いたくない。

「どうなんだよ……葛城!!」

声を張り上げるリユウヤを見て、ユイは拍子抜けしたかのように肩を落として言った。

「なあんだ、そんなこと」

「あ……?」

「まあでも、言いたいことはわかるよ? なんのモチベーションもない状態で西都に君臨するスクールアイドルになれるわけないもんね」

「それはどういう——」

「もちろん多少の努力はしたよ。そのための練習施設だって会長が用意してくれたし。……でもスクールアイドルって思ったよりシビアでねえ、正攻法じゃどうにもならない時もあつたつけ」

ユイの言わんとしていることが徐々に鮮明になっていく。

「あ、その顔はまだピンときてないでしょ。簡単なことだよ、いくら努力したからってさ……短期間で千歌ちゃん達や聖良さん達に肩を並べられるわけないじゃない?」

「……やめろ」

「他に実力のあるグループへの脅迫、妨害行為……あとちよつとした暴行。邪魔者を消すためならどんなことだってしたよ」

「やめろッ!!」

鋭い視線をユイへ突きつけたリウヤが身体を震わせながら叫ぶ。

彼女はブレザーのポケットからトランスチームガンとコブラボトルを取り出した後

——表情から一切の笑みを消して口にした。

「もうわかったでしょ?——『オレにとってスクールアイドルなんてもんはなあ、破壊のための手段でしかないんだよ』」

《コブラ!》

「蒸血」

《ミストマッチ!!》

小柄なユイの身体が霧に吞まれていく。

赤い花火と共に再び姿を現した時には、もう彼女の表情を読み取ることすら叶わなかった。

「さあ来いよ万丈。お前の怒り……余さずオレにぶつけてこい」

「かつ……らぎい……!!」

《ドラゴンゼリー!》

装着したスクラッシュドライバーにスクラッシュゼリーを叩き入れ、コブラの装甲を
まとったユイを見据える。

「変身ツツ!!」

《潰れる! 流れる! 溢れ出る!!》

《ドラゴンインクローズチャージ! プラア!!》

弾けたビーカーの中から空色の鎧に包まれた戦士が現れる。

「今の言葉……後悔させてやる……! お前には何が何でもぜってえ……高海達に謝って
もらうからな!!」

「クククク……! ハハハハハハツツ!!」

『それでは第2戦——始めツ!!』

審判の掛け声と同時にスタークとクローズが駆け出す。

ユイはトランスチームガンを駆使しながらの中距離戦に持ち込もうとするが、当然リユウヤの方は簡単に彼女の思い通りの展開に持つて行く気はない。

常に1歩出ることを意識し、逃げる隙を与えなかった。

「フンツ！ハツ……！オリヤアアアア!!」

「ふっ……!」

リユウヤの繰り出したラッシュを受け止め、スタークは品定めをするかのように彼を観察しだす。

「ハザードレベル4.6か……!期待以上の成長ぶりだ……こりゃあキリオの奴もどこまで到達してるのか楽しみなってきたぞ……!」

「あいつは今……関係ねえだろツ!!」

引き絞った拳を放ち、榴弾を思わせる一撃がスタークの腕に炸裂する。

仰け反りながらもすぐに体勢を立て直した奴は、取り出したスチームブレードでリユウヤを牽制しつつ彼に言った。

「いいや?大有りだよ。もちろんお前も重要だが……本命はむしろあっちさ」

「ああ……?どういうことだよ……!?!」

「ま、あいつのことはログに任せて——今はお前に付き合うとするか、万丈オ!!」
《エレキスチーム!》

「なかなかの動きだ……——スクラッシュドライバーの副作用は克服完了、と。じゃあ次のステップに移るとするか」

「なにをブツブツ言ってるやがる……！」

スタークは向かってくるビートクローザーによる斬撃を受け止め、蛇を思わせるスライディングでリュウヤの股下を移動し、彼の背後に立った。

「——ッ！」

だがリュウヤはそれを見越していたのか、反撃がやってくる前に上半身を捻りながら地を蹴って跳躍。

「オラアアアアアッ!!」

振り返り際にスタークの横顔めがけて強烈な右ストレートをお見舞いした。

「ぐっ……おお……!!」

さすがに不意を突かれた今の攻撃には反応しきれず、防御することもままならないまま数メートル後方へ吹き飛んでしまう。

……いける。単純な戦闘能力で比べれば圧倒的にこちらが優勢だ。

奴に——スタークに勝てる……!

「どうだ葛城……もうお前に、遅れはとらねえ!!」

「ククク……クハハハ……ッ……！」

亡霊のように揺らめきながら立ち上がるスタークに狂気じみたものを感じつつも、リュウヤは気圧されることのないように踏ん張りながら再度構えをとった。

「最っ……高だなあ……万丈……！」

千鳥足で歩み寄ってくるスタークに警戒する。

……奴のまとう空気が変わった。なにか仕掛けてくるとすればこのタイミングだろう。

（なにをしてこようが関係ねえ、来るならこい。……お前の野望は、全部ここで潰してやる……!!）

「ハア……」

立ち止まったスタークが深く息を吐き出す。

——その直後、深緑のバイザーに隠れた奴の瞳が……真紅に輝くのを見た。

「さあ……実験を始めるようか」

第50話 レベリングの罠

腹部に伝わる鈍痛——内臓に損傷は確認できない。
四肢の可動も申し分ない。戦闘続行は十分に可能だ。

——おっと、また感情を忘れていたぞ。いけないいけない。

せつかく学んだのだから活かさなくては。楽しみながら……そう、楽しみながらだ。そう決めたのは自分だったろう？

これまでのような勿体ないことはしない。……じつくりと、たつぷりと、時間をかけてここまでやってきたのだから。

『君がこんな風になっちゃったのは……あたしのせいだね』

馬鹿を言え、*“お前”*にも、ましてやオレ自身にも落ち度はない。あるはずがない。なぜなら今オレはこんなにも楽しい………こんなにも高揚している………！

『違うよ。*“楽しい”*って気持ちは独り占めしちやダメ。……やっぱ、あたしから間違ったことを教わっちゃったから、君は———』

間違ったことなんかひとつもない。正しいことを決めるのは常にオレだからだ。オレはオレだけに従い、オレが正しいと信じた行動を成すだけだ。

『そんな………それじゃあ、

もう1人のあなたは——どうなるの?』

●●●

「実験……………」

うわ言のようにスタークが呟いた言葉を復唱する。

……このフリーズには聞き覚えがある。以前キリオが口にしていたものだ。

いったいどういうことだ?言葉そのものに深い意味があるとは思えない。こちらを動揺させるためのミスリードか?

「は——!」

刹那、前方から高熱と共に吹き荒れるような死の気配を感じ取り、リュウヤは反射に身を任せて横方向に飛び込んだ。

「ッ……………」

紅の光柱が狂ったように舞いながら地面を焼く。

スタークの手元から放たれたレーザーのような一撃は、灰色の闘技場に無数の黒い爪

痕を刻み込んだ。

「なんつだよ……それ……!」

「ハハッ……ア……!!」

再度接近してきたスタークが繰り出す拳をしつかりと捉え、リュウヤも右の拳を引き絞った。

向こうの打撃が到達する直前に振り下ろす速度を上げてカウンターを狙うが、

「ぐっ……ぼ……!?!」

奴の放った拳が直撃する前に強烈な痛みが胸部に走る。

同時に大砲の如き一方的な圧力がリュウヤの身体を後方へ大きく吹き飛ばした。

……余波だ。奴はパンチの余波だけで彼に押し勝つてみせたのだ。

「がはっ……!」

水切りのように地面を転がったりユウヤはすぐさま霞んだ視界を凝らし、近づいてくる殺気だけを頼りに回避行動をとる。

《スチームブレイク! コブラ!!》

「ッ——!」

数秒前まで自分が倒れ伏していた場所に射撃が着弾したのを一瞥した後、混乱する頭で必死に思考を加速させながら駆ける。

(なんだ………!!?急に攻撃の威力が上がったぞ………っ!?)

「どうした万丈………!逃げてるだけじゃ勝ち目は——ないぜえ!!」

「うっ………!」

スタークの胸部にあるコブラの意匠が怪しく光る。

直後、亡霊のように透き通った2体の大蛇がジグザグに這いながらリュウヤを喰らおうと迫った。

「う——おおおおおおおおおッ!!!」

《スクラップブレイク!!》

咄嗟の判断でドライバーのレバーを下ろす。

鼓膜を振動させるけたたましい爆発音が響き渡る。

クローズチャージが空振りした拳と連動するように、出現した龍のオーラが2体のコブラを相殺した。

「ハアッ………ハアッ………!!」

闘技場一面に広がった蒼い焼け野原の中心で膝をつく。

……何もかもが先ほどと一線を画している。放たれる一撃が全て桁違いの重さだ。

「——もうおしまいかな？」

余裕をアピールするかのように片足に体重を寄せて佇んでいるスタークを見やる。

……確実に勝てると思っていた。それなのになんだこのザマは。

急激な状況変化に身体も脳も対応しきれていない。これでは反撃することすら叶わない。

仮面で素顔が隠れているのをいいことに、リュウヤはつい場の絶望的な空気に流されるように情けなく表情を歪めてしまった。

「万丈くん！」

「これ……さすがにまずいんじゃない……?!？」

窓ガラス越しに両者の戦いを見守っていた千歌達が徐々に原型をなくしていく闘技場に血の気を引かせながらそうこぼす。

「葛城の奴……………また妙な力を……………」

キリオはスタークの見せた驚異的な“力”を目にし、かつて奴と戦った際に体験した感覚を掘り起こしていた。

——あの赤い光をスタークがたとえば奴の身体能力が底上げされ、敵にぶつけば対象はたちまちに蒸発する。恐ろしいほどに強力なエネルギーだ。

（あいつらが使ってるトランスチームシステム……………とやらの力なのか？だが氷室が変身したナイトローグはあんなもの1度も見せたことはなかったはず……………）

スタークだけが使える機能——という可能性もあるが……………そうだとしてスクラッシュドライバーといいネビュラスチームガンといい、どうしてわざわざ新兵器を開発する必要があった？

あんな強力な力が扱えるのなら、ユイのような“ブラッドスターク”に変身できる人材やアイテムを量産した方が手っ取り早く戦力を揃えられるだろうに。

それ以外に考えられる可能性としては……………あまり現実的ではないが、装着している彼女自身に超常的な力があること。

（いや……………今はそんな分析より……………）

落としていた視線を再びリュウヤの背中へと向ける。

今あの戦場に立っているのは自分ではない。

彼が——リュウヤがどう動くかに全てがかかっている。

この何もかもがめちやくちな状況で………彼が勝利の法則を導き出すと信じる
他ない。

「……………万丈」

「おいおい、まさかとは思うが……降参するつもりじゃないだろうな？」

腰に手を当て、茶化するような調子でスタークはリユウヤにそう投げかけた。

膝を折り、肩で荒い息をしている彼を見て……奴は“声色”を変えながら立て続けに語り出す。

「——ふふつ……………かわいそうな万丈くん」

俯く彼を心の底から嘲笑するように、くぐもった声でユイは続けた。

「あたし達 Bernage の無念を晴らすために戦つてたのに、利用されて裏切られて……………今はこうして殺されかけてる。今度は戦兔先生に利用されてるんじゃない？ また裏切られるかもしれないよ……………君の戦う理由ってさ、何もかもが他人から受けた強迫観念じゃない。もつと自分を大事にしなよ、自分のために生きようよ」

トリガーに指をかけ器用にくるくるとトランスチームガンを回しながらそう話すユイ。

……彼女の言葉も間違いではない。

確かに自分はこれまで、周囲の人間に背中を押されて戦いに身を投じてきた。

誰かを助けたかったから——力を持つ自分が誰かの代わりに戦うしかなかったから。

(……ああ)

初めてフルボトルを手にした時………そこに自分の意思はなかったのかもしれない。

ただただ必死に駆け抜けてきた。その過程で自分を陥れた奴らに一矢報いてやろうという気持ちが芽生えて……。

だけど――

「だからって……信じることをやめる理由にはならねえんだよ」

「んん？」

足に余力を集中させ、ふらつきながらも立ち上がり、地を踏みしめる。

「確かに最初はそうだったのかもしれない。けどな、ここまで続けてこれたのは俺自身の意思があったからだ。俺の心が戦えつて叫んでたからだ。……1度や2度裏切られたくらいで……信じる気持ちを止めちまったら、そこでおしまいじゃねえか……！」

「……………」

「俺は信じ続けたい、何度裏切られたって。そう思わせてくれる奴らが後ろにいる……！」

リュウヤは後方から感じた視線に背を向けたまま親指を立てた後、拳を作ってもう一方の手のひらへと打ちつけた。

「お前と今戦う理由なんて……………それで十分だ!!」

「ハハッ——!」

走り出したリュウヤにスタークの撃ち出した弾丸の雨が注がれる。

（疲弊して体力が落ちてる俺の方が不利。どう考えても長期戦に持ち込むのは無理だ……………!）

絶え間なく押し寄せてくる攻撃の波をかわしながら、リュウヤは必死に頭を動かす。

……………動いたのはいいが、ここからどう奴に近づき反撃する?

むやみに接近すればまたあの謎の力で押し返されてしまうのは明白だ。

——いや、明白かどうか判断するのはまだ早い。

（やつぱりごちやごちや考えるのは俺の柄じゃねえな。やってみなくちや……………わか
らねえっ!!）

急ブレーキをかけ、火花を散らしながら方向転換する。

「……………なに?」

突如として一直線に突っ込んできたリュウヤを前にし、スタークは戸惑うような声を漏らした。

陸上選手さながらのフォームで闘技場を駆け抜けてくる彼へ照準を合わせ、奴は再び

禍々しい紅のオーラを腕に纏わせた。

「血迷ったか万丈オ!!」

スタークがトリガーにかけていた指に力を込める。

周囲の空気を焼き払いながら直進してくる光の柱に——恐れからか、それとも自信からか、リュウヤは仮面の下で不敵に笑った。

「うあああああああああああああああああッッ!!」

《クローズドラゴン!》

《Ready go!!》

《スペシャルチューン!》

《ヒッパレー! ヒッパレー! ヒッパレー!》

光線がこちらに到達する直前、ドラゴンフルボトルを装填したクローズドラゴンを左腕のツインブレイカーに、そして右手に握られたビートクローザーにはロックフルボトルを叩き込んだ。

避けてるだけじゃいずれやられてしまう。だったらいつそ……こちらが発揮できる

最大火力で。

「——ッ!!」

《レッツブレイク!!／メガスラッシュ!!》

衝突する直前、あまりの眩さに目を細める。

変身していても身を焼かれるような熱が伝わり、リュウヤは気合でそれをかき消すようにさらに声を張り上げた。

光を受け止めている両腕が燃えるようだ。

蒸発してしまうような痛みのなかで……………壁を突き破るかの如く前へと進み出る。

「ぐっ……………おおおおおおおおおッ!!!」

「……………」

光線の真っ只中を突破したりユウヤがスタークの眼前まで肉薄。

「勝利の法則は——決まった……！」
瞬時にドライバーへと手をかけた彼は、奴の目の前でそう囁きながら思い切りレバーを弾いた。

《スクラップブレイク!!》

蒼炎をまとったクローズチャージの拳がスタークの胸部を挟る。

残った力を全て注ぎ込んで放った最後の一撃だった。

「ガッ……—！」

刹那、奴の突き出した片腕が紅に輝き……道連れと言わんばかりに大爆発を巻き起こした。

「——」

なんとかその場に踏み留まっていた2人がゆらりと上体を崩しかける。変身が解除され、先に地面へと背中をつけたのは……………

「あは……………」

ユイだった。

「うっ……………」

数秒遅れてクローズの外装も粒子となって消滅していく。

その内部から現れたリュウヤは震える足腰で身体を支え、力強く右腕を掲げてみせた。

『先に変身解除されたのはブラッドスターク！よって勝者……………仮面ライダークローズ
チャージ、万丈リュウヤ!!』

そうに瞳を細める。

「俺の勝ちだ葛城。頼むから……もうこれ以上、自分を傷つけないでくれ」

「あは……あはははは……っ！ キヤハハハハハハハハハ！！」

不気味に口角をつり上げた。

「わかってない……わかってないんだなあ……万丈くんってば」

「あ……？」

「でもしょうがないかあ……うふっ！うふふふふふふふ！！」

らユイが立ち上がる。

身体を仰け反らせた。

「葛城……？」

「.....」

どこかの部品が飛んだ機械のように、ひたすら笑いをこぼしながらユイは背を向け

る。

ダメージを負った小さな身体を引きずりながら去っていくその後ろ姿に……………
リュウヤは正体不明の悪寒を覚えた。

「……………あッ!!」

ふと目を落とした先にあつた光景に思わず驚愕の声を上げる。

自分の腰に巻かれているスクラッシュドライバー——そこに装填されていたドラゴンスクラッシュゼリーが、石炭の如き硬い黒焦げに覆われていた。

「なっ……………嘘だろお……………!?!」

先ほどの爆発で破損してしまったのだろうか。もはや見る影もない。

消し炭と化したゼリーを取り上げ、リュウヤは膝をつき涙目で嘆くのだった。

●●●

待機室へと続いている廊下を歩く。

「はは……………ハハハハ……………ッ!」

薄暗い空間に少女の声がこだまする。

「ようやくピースが揃った……。あとは……。あのドライバーを取り戻せば……………」
誰に聞かせるわけでもなく、ユイはずきずきと痛む全身を抱きながら何もなかったところへそう口にした。

「もうすぐだ——なあ、キリオ」

第51話 ローグの叫び

『みーちゃんみーちゃん！スクールアイドルやろうよ！一緒に!!』

唯一の親友がかけてくれたその言葉は……とても嬉しかった。

傷つけることしか知らなかった自分に、他人に何かを与える喜びを覚えてくれた人。そんな彼女の笑顔を汚してしまったのも——紛れもない、自分自身。

自分の弱さが……“あの子”を傷つけてしまったのだ。

——近づいてくる。

「はあ……はあ……」

荒くなった息を深呼吸で無理やり整え、私情を奥底へ追いやり、誤魔化すように強張った表情を前へと押し出す。

——近づいてくる。

「は……っ……」

次……そう、次だ。この戦いにさえ勝利すれば全てが終わる。……全てが解決する。

——痛みが、近づいてくる。

もう戦わなくてもいい。誰も傷つけなくていい。

これが終わればきつとまた、2人で笑い合って過ごせる日々が——

「うう……負けちゃいましたあ……ごめんなさい会長……」

不意に横から現れた少女に意識が持つて行かれる。

うるうると瞳に大粒の雫を溜め込んだユイが、震える声で報告しながら待機部屋へと戻ってきた。

「なに、気に病む必要はない。簡単に決着がついてしまつてもつまらんからな」

1戦目で西都側があらかじめ白星を獲得したことが幸いしているのか、意外にも難波重三郎はあつさりとその返答した。

「かゝいゝちよゝゝ！さすがお心が広いゝ！」

「はっはっは」

媚びを売るように重三郎の目の前で手をすり合わせるユイ。これでもかと褒め称えてくる彼女に、老人も上機嫌な様子を見せていた。

「——単純な奴」

跳ねるような足取りで重三郎の背後へと回った後、ユイが小さくこぼしたのを……隣に立っていたミカは聞き逃さなかった。

「ユイちゃん……?」

「さ、次はローグの番だね。期待してるよ? 難波重工の力を東都の奴らにバツチリ見せつけてあげちゃって!」

「……うん」

思い出のなかに存在しているかつての彼女と同じように笑顔を浮かべたユイに首を縦に振る。

——ズキリ、とどこかが軋むように痛んだ。



「やったね万丈くん——!」

「すごいよ万丈くん——!」

「あだだだだだ!! 痛い痛い!! 今はやめろって!!」

「あ、そうだね、ごめん……」

帰還したリュウヤを労おうと千歌達がこぞって彼の背中を軽く叩くも、外見以上にダメージを負っていたのか小動物のように身体を縮めてしまった。

「ようやくスタークの野郎をぶっ飛ばせたな。……おかげでスツキリしたぜ」

「猿渡……」

照れ隠しのつもりなのか、そっぽを向きながら片手を差し出してきたタクミをきよんとした顔で見上げた後、リュウヤは微かに笑みを浮かべつつそれを握り返した。

「あとは……あんただけだな」

2人のやりとりを傍らから眺めていた青年に皆の視線が集まる。

裾の長い上着を翻し、キリオは余裕に満ちた顔をリュウヤ達に向けた。

「揃いも揃って不安そうな目をするな」

「お前さつきからやけに自信満々だけど……本当に大丈夫なのか？」

「俺を誰だと思ってるんだよ。天才教師戦兎キリオ様だぞ？」

そう言っただけで彼らの横を通り過ぎ、闘技場へ向かおうとするキリオ。

「気をつけてね」

部屋から出る直前、背後からかかった声に足を止める。

振り返り、どこか幼い印象を覚える少女と目を合わせ——キリオは古い記憶のなかにある彼女を思い出す。

「ああ」

ポケットに収納していた1本のフルボトルを布越しに握りしめ、キリオは強くそう返した。

『3戦目！仮面ライダーローグ、氷室ミカ対仮面ライダービルド、戦兎キリオ！』
少女と青年が闘技場に姿を現したことが確認され、審判はスピーカーを介してそう告げた。

「これで……………何もかもが終わりです」

静かな闘志を宿した瞳をキリオに突きつけ、ミカが口を開く。

「西都が勝ち、この国はひとつになり——わたしの目的は達成される」
「目的？」

「ええ。……ユイちゃんと一緒に、また楽しく歌って踊れる日がやってくるんです。わたしがもたらす勝利によって」

戦争の終結を目の前にし、嬉しさからか饒舌に語り始めたミカに対して、キリオは綻ぶように口元を緩ませた。

その様子を見てミカは苛立つように眉をひそめる。

「……なにが……おかしいんです？」

「いや……以前の氷室と比べて、ずいぶん変わっちゃったなーって思ってた。常に眉間にしわ寄ってるし、隈もひどい。千歌達と一緒にスクールアイドルやってた時の方が……俺は好きだったよ、活き活きしてて」

「……余計なお世話です」

吐き捨てるようにそう返答したミカ。

そんな彼女に追い打ちをかけるように、キリオは喋るのをやめようとはしなかった。

「今のお前からは『楽しい』って気持ちも、スクールアイドルに対する情熱も微塵も感じられない」

「……！そんなこと——！」

そう言いかけたところで我に帰り、ミカはハツと口をつぐむ。

「おっと……俺の見当違いだったみたいだな。どうやらまだ未練が残っていると見える」

「本当に……口の減らない人……っ！」

ミカが突き刺すような視線を向けてくる。

歯を軋ませ、怨敵に向けるような眼差しのまま彼女は捲し立てた。

「あなたが……他人がどう思おうと関係ない。わたしはユイちゃんのために戦う……！
ユイちゃんの言う通りに戦って……戦い抜いて……この国を統一する……！あの子と
一緒にまたステージに立つにはそれしかない!!」

「……………」

自分を睨む少女から目を離し、キリオは呆れたように小さなため息をつく。

ミカの言葉……そのことごとくが的を外れて後方へ流れていく。

何も響いてはこない。彼女自身が間違った感情に囚われてしまっているからだ。

（そんなの……友達でもなんでもないじゃないか）

自分は「友達」とは何かを知っている。友情がもたらす美しい物語というものを
……………過去に数え切れないほどの目で見てきたせいだ。

友達とは……仲間とは何かを、キリオは理解させられてしまっている。

「悪いがお前の目的は果たせないよ。……なぜなら氷室、お前はここで俺に敗北するからだ」

ビルドドライバーを装着し、真っ直ぐにミカの瞳を捉えながらキリオはそう伝えた。
「……わかりません。どうしてそう言い切ることができるんですか？……以前の戦いではつきりしたはずです。スパークリングも、ハザードも、わたしの前では何の役にも立たないことを、あなたは痛感しているはずでしょう」

「それを言われると耳が痛いんだがな……前に勝てたからといって、今回も同じようにそうなると——お前はどのように言い切れるんだ？」

張り詰めていた闘争心が暴発する。

顔を伏せ、ミカは前髪に隠れた凶器のような瞳をより鋭利なものに変えた。

「氷室ミカ——お前のなかにあるのは友達を想う心なんて大義じみたものじゃない。自分が嫌われることを恐れた結果、膨張し続けてしまった承認欲求と自己中心的な我が儘だけだ」

「例えそうだとしても……何が正しいかはユイちゃんが決める。ユイちゃんがもたらすものだけが正義たり得る……！あの子の意志を支えることが……わたしの矜持!!」

《デンジャー!!》

ミカの握っていた紫色のフルボトルに赤い亀裂が走る。

《スクラッシュドライバー!》

《クロコダイル!》

装着したスクラッシュドライバーにボトルを装填し、レバーを倒す。

出現したビーカーに満たされた成分がミカ自身を呪うように彼女の身体にまとわりついた。

「そのために戦兔先生……わたしはあなたを全力で叩き潰す。——変身」

《割れる! 食われる! 砕け散る!!》

《クロコダイルインローグ!!》

《オーラア!》

ミカの全身が生成されたスーツで覆われ、その顔には「顎」で砕かれると同時に双眸が現れる。

「……そうだ、俺は“先生”だ」

キリオもまた上着のポケットへ腕を入れ、まさぐるような仕草を見せた。

「まだ成熟し切っていない子供達を正しい方向へと導いてやる義務がある。……ちようど、お前みたいなガキンチョをな」

《マックスハザードオン!》

取り出したハザードトリガーを起動させ、ドライバーの連結部分へと繋げる。

「……不毛です。それはわたしに通用しないと、何度言ったら——」

直後、ミカは仮面の下で目を剥く。

キリオが続けて取り出したのは通常のフルボトルではなく——2本のボトルを縦に繋げたかのような、棒状のアイテムだった。

「それは……………」

「今から個別指導をしてやる。授業料は——特別に免除だ」

手首のスナップを利かせ、握っていたそのアイテムを上下に振る。

ピョンピョン!——と兎が跳ねるような緊張感の欠片もない音が闘技場に響き、離れた待機室で2人の様子を見守っていた千歌達が苦笑するのがなんとなく察知できた。

「さあ、実験を始めようか」

《ラビット!》

キャップを回して“成分”を選択。続いて横に持ち直し、棒アイスの如くそれを折る。

《ラビット&ラビット!》

ビルドドライバーに備わっていた2つのレーンへと同時に挿し込み、キリオは素早く

レバーを回し始めた。

《ガタガタゴットン！ズツタンズタン！ガタガタゴットン！ズツタンズタン！》

《Are you ready!?!》

「――変身」

《オーバーフロー！》

キリオが言葉を発すると同時に形成されていたハザードライドビルダーが彼の肉体を挟み込む。

やがて姿を現した漆黒のビルドのもとへ――「1匹の赤い兎」が駆けつけた。

「ふっ……！」

やってきた「兎」がバラバラに分割され、それぞれ胴、腕、足を象ったような形へと変形する。

ハザードフォームへと変身していたはずのキリオは跳び上がり――自らその装甲を全身に装着した。

《紅のスピーディージャンパー！ラビットラビット！！》
《ヤベーイ！！ハエーイ！！》

「な……」

新たな姿を見せたビルドにミカが驚愕する。

これまで決して一致することのなかった複眼が左右とも “ラビット” に。
そしてハザードの黒いボディを隠し、制御するように……… 兎を思わせる紅の鎧が
被されていた。

『では第3戦目！仮面ライダーログ対仮面ライダービルド——！』

対峙する2人の戦士を確認し、審判は高らかに戦いの幕を切って落とした。

『——始めッ！！』

第52話 ラビットタンク二乗

「ラビットボトル……?」

代表戦が開始される数日前のこと。

ローグの対抗手段を模索していたキリオは、梨子が気絶するのと共に突如として出現した白いフルボトルを手に取ると、用心深く観察し出した。

（こんなボトル……今までこの部屋にはなかったはず。まさか桜内が——）
気を失っている彼女へと視線を落とし、その腕にはめられた黄金色のバングルに眼を細める。

ある時から梨子が身につけていた謎の腕輪。当初は特に気にも留めていなかったが……。

「……………」

梨子を部屋の隅へ優しく寝かせた後、おもむろに取り出したビルドドライバーをテーブルへと置く。

先の白いボトルと常に持ち歩いているラビットフルボトルを挿し込み、恐る恐る反応

を確認する。

すると――

「……！光った……!？」

いつものようなベストマッチではない。だが驚くべきことに、通常のラビットボトルと白いボトルは互いに干渉し合うかのような現象を見せたのだ。

慌ててハザードトリガーを引つ張り出してはそれを起動。すぐさまドライバーへと連結させる。

「そういえば……同じ成分同士で組み合わせるのって初めてだな」

フルボトルが各一本ずつしか存在しないこともあり試せずにはいたが、前々から密かに気になってはいた。

もしも全く同じ成分同士が装填された時――いったい何が起るのか。

「うおっ!？」

その答えはすぐに返ってきた。

レバーを回した瞬間、まるで負荷に耐えられないとも言えるように、白いラビットフルボトルは粉々に爆散してしまったのだ。

四方に飛び散っていった破片を見届けた後、キリオは深く思考を巡らせる。

（成分が反応したってことは………対応できる“入れ物”さえあれば問題なく使えるってことか……？）

キリオはハツと顔を上げると、机の上に散乱していた資料を乱暴に払い除けては複数枚の白紙を広げ、ペンを走らせた。

●●●

「はっ………はあ………っ………は………あ………っ………!!」

ほとんど喘ぐように無理矢理な息継ぎをする。

辛うじて目視はできる———が、まるで反応できない。

「うっ———!」

ミカは全方向から加えられる打撃に苦悶しつつ、襲いかかってくる赤い戦士の残像を睨んだ。

(どう……して……!?)

さつきから理解が追いつかない。

戦兎キリオ——彼が変身したビルドは、これまでのデータとは大きくかけ離れた戦法とスペックで挑んできた。

想定外の事態だ。……どうする？ もはや防御することすらままならない。このままでは確実に——！

「きやあつ!!」

前方から飛んできた蹴りが直撃し、大きく吹き飛ばされてしまう。

倒れる寸前で足腰に力を込め、なんとか膝をつくことなく体勢を立て直した。

「どうして……ローグの装甲を突破できるの………!?!」

ブレーキをかけ再び目前に姿を現したビルドを睨み、ミカは戸惑いに満ちた声音でそうこぼした。

仮面ライダーローグ——自分が使用しているこのライダーシステムは、これまで作られてきたあらゆる兵器を上回る性能を有しているはず。

なかでも防御面に関しては最高クラスの数値を叩き出していた………それなのに。

「別に大した理屈はないさ」

赤い複眼をこちらに向け、青年が語りかけてくる。

「以前の戦いでも妙だと思ってたんだ。……お前のそれ、万丈や猿渡と同じものを使っているにしては戦法に差異がありすぎる。だから根本的な構造から区別されてるんじゃないかと思つてな」

スクラツシユドライバー——単純なスペックの他に、その特徴は「ヴァリアブルゼリー」を用いた変幻自在の攻撃にある。

タクミの戦い方を見ればそれは明白だった。ツインブレイカーに装填したボトルの力を、放出したゼリーによって操る攻撃。それこそが真髄と言えるだろう。

「お前の場合はゼリーを放出するんじゃないく、内側に溜めて守りを固めてるんじゃないか？ わかりやすい例えで言えば……そう、水に溶かした片栗粉」

同じようにローグのスーツには常時ヴァリアブルゼリーが満たされており、衝撃がやってきた際に瞬時に硬化しあらゆる攻撃をはね除けてしまうのだろう。そう考えれば高い運動性にも納得がいく。

だがハザードのオーバーフローなら話は別だ。

「ハザードトリガーのオーバーフローモードには……防御を貫通する機能がある。加えて……俺はその暴走を克服した」

ドライバーに装填されたアイテム——“フルフルビットタンクボトル”に目を落とす。

白いボトルからヒントを得て作り出したものだ。これを使えばハザードの力を理性を失う寸前で維持することができる。

「つまり……お前はもう丸裸同然ってことだ!!」

「っ……!」

兎のような凄まじい跳躍力を駆使してローグへと接近。連続で打撃を与えていく。

どんなに高い防御力を備えているとしても……それを無効にしてしまえば関係ない。

ハザードの力を我が物にした自分の前では、もはやミカは敵ではないのだ。

「そんな小細工でえ……ッ!!」

ローグが薙ぎ払うような回し蹴りを放つ。

強引に作り出したビルドとの距離を掻い潜り、ミカは取り出したネビュラスチームガンとスチームブレードを合体させ構える。

「攻撃が通るようになったところで所詮は旧式。ユイちゃんが作ったスクラッシュユドラーイバーの方が……何倍も強い!!」

高速で移動する紅の兎を仕留めようと何度も射撃を行うが、その全てを難なく回避さ

れてしまう。

ひたすらに撃ち続けるミカは、すっかり焦燥感に支配されているようだった。

「うっ……！」

ものの数秒で接近を許してしまったローグは即座に近接戦闘へ切り替えようとするも、一足早くビルドの繰り出した拳が眼前に迫った。

ヒットアンドアウェイを繰り返すビルド。加えて常時高速で動かれては捉えることは難しい。

《フルボトルバスターー!》

「はああああっ!!」

「……………!?!」

再度目の前まで距離を詰めてきたビルドの手に一振りの大剣が出現。

しなやかな腕力で振り上げられた斬撃がローグの胴体を削った。

「う……………ぐ……………っ……………！」

何度も全身を打ち、地面を這う。

（……………ダメ……………どうにも……………ならない……………!）

絶望的な状況に血の気が引いていくのがわかる。

身体中が痛い。今までローグの装甲に守られていた自分が——弱い自分が、壊れていく。

……またか？何もできなかった自分に………また戻ってしまうのか？

「ユイ……ちや……」

不意にガラス張りになっている待機室が視界に入る。

この戦いを見下ろしている西都の人間達の表情が、頭のなかに流れ込んでくる。

「あ——」

ミカは端に佇んでいた少女へと視線を移し——その期待を失った冷たい眼差し

に気づいた瞬間、瞳の光が薄れていった。

彼女の口元が微かに動く。

ミカにはユイが何を口にしてているのか………すぐに理解できてしまった。

『また?』

「や……………いや……………!——いやあああああああツツ!!!」

ローグを中心として暴風の如き紫の波動が闘技場内に吹き荒れる。

「なんだ……………」

咄嗟に身を屈めたキリオは、唐突に様子が一変したミカへと顔を向き直した。

「やだ……………負けたくない……………嫌われたくない……………。わたしに残された道なんて……………もう……………っ!」

感情が高ぶった影響からハザードレベルが上昇したのだろうか?

そうだとしても大した脅威にはならない、構わず攻め続ければいい。今の彼女にラビットラビットを退ける術はないのだから。

「はっ……!!」

項垂れているローグへ肉薄し、フルボトルバスターによる斬撃を連続して与えていく。

「ぐっ……うあ……っ……!!」

ミカは相変わらずまともに反撃すらできていない。

——フルボトルバスターはハザードの力を最大限に活かすために設計した武器だ。まだ真価を発揮したわけではないが……この状況から分析するに、その必要はなさそうだ。

(これで決める……ッ！)

キリオは身体を捻ると、滑り込むようにローグの背後へと移動。

死角からの全力攻撃だ。防御が間に合わなければこの一撃で決着はつく。

「はあああああッ!!」

両手で握りしめた大剣を掲げ、キリオはパールの戦士めがけて勢いよくそれを振り下ろした。

——が、しかし。

《デイスチャージボトル!》

《潰れな〜い!》

キリオが放ったその一撃は、瞬時に形成された『ダイヤモンドの障壁』によって防がれてしまった。

「なに……!?!」

「――」

予備動作もなくローグが背後へと蹴りを入れてくる。

キリオは反射的に後退し、彼女のベルトに装填されているものを視認した。

「ダイヤモンド……!?!」

スクラッシュドライバーに挿し込まれていたのはダイヤモンドフルボトル。

以前の戦いでミカに奪われた数本のフルボトルの内のひとつだった。

「……反撃開始です」

《デイスチャージクラッシュ!!》

ローグが拳を突き出したのと同時に無数のダイヤモンド片が雨となって凄まじい速度で飛来する。

「っ……………」

両足を使った跳躍でその場を離れた後、再度フルボトルバスターを構えて接近を試みる。

だが、

「……………またか！」

ミカが手をかざし、再びダイヤの壁を築き上げた。

フルボトルバスターの刃が衝突する。それは大量の火花を散らしながらも発動者である彼女の身を驚異的な硬度で守りきってみせた。

「ふっ……………」

「ぐあっ……………」

成分の力で強度を高めた拳がビルドの胸部にめり込む。

強烈な一撃を浴びたキリオは、勢いを殺しきれず後方へと派手に吹き飛ばされてしまった。

「……………なるほどな……………」

立ち上がりつつもミカのとった行動に舌を巻くキリオ。

オーバーフローモードはあらゆる防御を貫通する。しかしそれはあくまで直接攻撃の場合だ。

別途に盾を持つてくることが叶うなら………当然攻撃を防ぐことだって可能というわけか。

（反撃をせずに堪えていたのは……ラビットラビットを破る方法を探していたからか）
氷室ミカ——彼女はこの短時間で、こちらに対抗できる正解を導き出してみせたのだ。

「わたしは……絶対に負けられない……！」

立て続けにダイヤの拳を振りかざしてくるローグの前に、キリオは回避に徹する。

「このままじゃいけないなんて……わかってる……！けど仕方ないじゃないですか!!」

重い連撃を的確に避けながら、マスクの下で叫ぶ少女の声に耳を傾ける。

「だってこれがユイちゃんが望んだこと……！わたしに与えられた————唯一の償いなんだからツ!!」

「——！」

上に意識を集中していたのが失敗だった。

キリオの不意を突いてミカは拳による打撃から蹴りへと移行。またもビルドの装甲

に凄まじい威力を叩き込んだ。

(……………かわいそうな奴だ)

宙に放り出されながら考える。

彼女が歪んでしまったのはきつと周囲の環境のせいだ。

誰よりも純粋な心を持っているミカは——誰よりも汚れやすい。

だから……“先生”として教えてあげなくちゃいけない。

(それは……………間違った答えだって…………！)

仰向けの状態からゆっくりと立ち上がる。

……身体の節々が悲鳴を上げている。まさかラビットラビットが追い詰められる展開になるとはこちらも想定していなかった。

「口を開けばユイちゃん、ユイちゃんって……………お前は一体誰だよ？」

「は——？」

思いもしなかった問いにミカが首を傾ける。

「葛城がやっていることが正しいって……………本当にそう思っているのか？胸を張ってそう言えるか？」

「……………それ、は……………」

答えに詰まった彼女を一瞥し、キリオは怒気を孕んだ声音で問いかけ続ける。

「お前と葛城が友達だって言うなら……………まずお前自身があいつに教えてやれよ。//それは間違いだ」って……………ちゃんと口に出して言ってやれよ！」

「うる……………さい……………！」

「お互いの良いと思えるところを尊重し、悪いと思うところを補い合う……………！それが友達——仲間ってもんだろうが!!」

「うるさいッッッ!!」

悲痛にも感じられるミカの叫びが鼓膜を揺らす。

……キリオが口にした言葉は、彼女自身が一番わかっているはずだ。だからこそ今こうして葛藤し、苦しんでいる。

（つくづく大変な仕事だな……教師ってのは）

自分が正さなければならない。

この場で対峙している、自分が――！

キリオはベルトに手を伸ばし、装填されていたフルフルラビットタンクボトルを引き抜く。

「だがな氷室、俺はお前のことが気に入った」

再び棒状に変形させたそれを力強く振り、成分を活性化。

「なにを言つて――」

「あの状況から自力で突破口を作るなんて普通はできないからな。……頭の回る奴は嫌いだ」

《タンク!》

キャップを回し、全く異なる成分表記が小窓から顔を出す。

「——それじゃあ応用問題だ。これが解けたら満点をやるよ」

《タンク&タンク!》

《ガタガタゴットン!ズツタンズタン!ガタガタゴットン!ズツタンズタン!》

青の成分を選択し再度装填。

直後、どこからともなく現れた小さな戦車達が隊列を組んでローグを襲撃し始めた。

「なっ……!?!」

《Are you ready!?!》

「ビルドアップ」

《オーバーフロー!》

向こうが牽制されている隙にそう唱える。

散開した戦車達が待ち構えるように四肢を形取り、キリオは各装甲めがけて思い切り飛び上がった。

《鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク!!》

《ヤベーイ!! ツエーイ!!》

全身に砲台を装着した青き戦士が地に降り立つ。

“タンク”の両眼をローグへと向け、キリオは静かに宣言した。

「勝利の法則は——決まった」

「うっ……うあああああつ!!」

事態を処理しきれなくなったミカががむしやらに突っ込んでくる。

キリオは冷静にフルボトルバスターの持ち手を握り直し、それを下へ曲げた。

《タンク!》

《フルボトルブレイク!!》

バスターキャノンモードに変形させたフルボトルバスターにタンクフルボトルを装填。エネルギーが充填されると同時にそれを解放。

「——ッ!!」

向かってくる青の砲撃を弾こうとローグが右腕を振るう。

「ぐ……あ……!」

辛うじて背後へ受け流すことに成功したが、許容範囲を超えた衝撃に耐えることが叶わなかったのか、彼女の腕にはそのダメージを訴えるように稲妻が走っていた。

《タンク!》

《ロケット!》

《ジャストマッチです!》

《ジャストマッチブレイク!!》

「はあっ!!」

続いて2本のボトルを同時にレーンへ入れ、さらに威力を高めた一撃を発射する。

「きや……っ……う——!!」

今度は両腕を交差させて耐えようとするも、予想をはるかに凌駕した力にローグはなすすべなく吹き飛ばされてしまった。

《タンク!》

《ロケット!》

《ガトリング!》

《ミラクルマッチです!》

《ミラクルマッチブレイク!!》

間髪入れずに放った3度目の砲撃。

「ぐう……っ!!」

咄嗟に立ち上がったローグはネビュラスチームガンによる射撃で応戦するが、その差は歴然だった。

「きゃああっ!!」

ぐるぐると回転しながら宙を舞うミカ。

再び地面に倒れ伏した時には、もはやすぐに立ち上がることもすら叶わない状態となっていた。

「少し頭を冷やせ氷室。……その後で、改めて話し合おうじゃないか」

《フルフルマッチでーす!》

ドライバーから引き抜いたフルフルラビットタンクボトルを棒状へと戻し、フルボトルバスターに挿し込む。

直後、ビルドの下半身が戦車を思わせるキャタピラへと形態変化し、ローグを囲むように円を描いて走行し始めた。

「う……あ——!!」

《フルフルマッチブレイク!!》

360度からの砲撃を全身に与えた後、トドメと言わんばかりに強烈な一撃がローグ

を捉える。

凄まじい爆発と衝撃波が闘技場内に広がり、パープルの鎧が粒子となって消えていくのが見えた。

——ああ、まただ——

生身で宙を漂いながらミカは思いを馳せる。

（またわたしは……………ユイちゃんを助けられないで——）

古い記憶が蘇る。

ミカは目を瞑り、走馬灯のように次々と脳裏をよぎる映像に身を委ねた。

第53話 ユイちゃん

火星から飛来したパンドラボックスによって引き起こされたスカイウォールの惨劇から4年。

我が国は東都、北都、西都の3つに分かれ………混沌を極めていた――

――
“足りない”。

「……葛城。おい、葛城！」

黒板前に立っていた教師が声を荒げながら1人の生徒が突っ伏している席へと歩み寄る。

窓際で堂々と居眠りをしていた彼女は、軽く小突かれてやっとその顔を上げた。

「……ふあい？」

「前回赤点だった身で睡眠学習とはいい度胸だな」

「いやあ……真面目に聞こうとはしていたのですが、どうにも科学の授業って身が入らなくて」

「つたく……そんなことでは難波重工に貢献できる人材にはなれんぞ」

呆れた表情でその場を離れ、授業を再開する教師。

相変わらず眠たげな様子で瞼を閉じかけている少女に——氷室ミカはひっそりと語りかけた。

「寝ちゃダメだよイちゃん、今注意されたばかりでしょ？」

「だってえ……昨日の夜は遅くまでずーっと、sのPV見てたから、あんまり眠れなかったんだもん」

「またその話……？飽きないよね、ほんとに」

「飽きるわけじゃないじゃん!!みーちゃんだって名前くらいは知ってるでしょ？あの伝説のスクールアイドルの——！」

「葛城イ!!」

「ひい!？」

急に立ち上がったては熱弁し出したユイにまたも教師の怒号が飛ぶ。

もはや様式美と化したやりとりを見て、ミカは微かな笑みをこぼさずにはいらなかった。

——“足りない”。

春の終わり頃。

高校1年生として新たな生活にも馴染んできたある日のことだった。

「みーちゃんみーちゃん！スクールアイドルやろうよ！一緒に!!」

前触れもなく鼻息を荒げながら身を乗り出してきたユイに、ミカは座席を少し引きつつ尋ねる。

「どうしたの急に……?」

「あたし思ったんだ！今まで難波重工って、アイドル業に進出したことはなかったよね？」

「それはまあ、難波は元々重工業メーカーだし……幅広い層に優秀な人材を送り出しているとは言っても、ポップカルチャーな面で見ればまだまだ——」

「だからだよ！今流行りのスクールアイドルとして成功すれば、より注目度が上がるんじゃないかって！」

子犬のような笑顔でそう力説する親友に対し、ミカは若干面倒に感じながらも一考する。

自分達が通っているこの難波高等学校は——難波重工が運営している教育施設。

政府の要人や科学者……と、これまで様々な場所に卒業した先輩方が就任に成功してきた名門校。

ユイが言うには今まさに長い最盛期を迎えているスクールアイドルとして活動すれば……難波重工のさらなる発展に貢献できるかもしれない、とのことだった。

いや、というよりも……………

「ユイちゃんがスクールアイドル好きだからやりたいだけじゃない……？」

「あは、バレた？」

あつさりと白状する幼馴染に苦笑する。

キラキラと目を輝かせている彼女を見て、ミカは吐息のような呟きをこぼした。

「……………いいよ」

「え、ほんと!？」

「うん。ユイちゃんと一緒に何かひとつのことを始めるって……とっても楽しそうだから」

「やった！キヤハハー!!じゃあチーム名決めなきゃだね!!」

何度も飛び跳ね、拍手しながら一層話すスピードを加速させるユイ。

彼女が嬉しそうにしている姿を見て………ミカの心も不思議と暖かくなった。

—— “足りない” 。

「—— つて、勢いで始めようとはしてみたけど……」

「部員不足かあ……厳しいね」

放課後。

夕日の当たる窓際の席で互いに慰めるように向かい合った2人は、直面した問題に肩を落とし嘆いていた。

我が難波高校が名門と謳われる由縁は主に生徒の学力や卒業生の躍進にある。難波

重工に身を捧げるつもりで勉強に打ち込んでいる者が大半を占めているせいか、部活動も盛んな方ではないのだ。

……必要な部員数は最低でも5人。これはメンバーを集めるだけでも骨が折れそう
だ。

「もういつそのこと、自分達で始めちゃうっていうのは？」

「それじゃあ部費降らないじゃん、衣装作れなくなっちゃうよ？」

「スクールアイドルなんだし制服で踊れば——」

「やーだあー！かわいい衣装も着てみたいー!!」

足をバタつかせながら抗議するユイに肩をすくめる。

「やっぱりお金って重要なんだなあ……」

不意に彼女がこぼした言葉に、ミカは小さく身体を震わせた。

………また「金」だ。お金にはこれから先もいい思い出ができるとは思えられない。
い。

「ま、愚痴を言ってもしょうがないし………とりあえず勧誘のチラシでも作りますか
！」

白い歯を見せながら笑うユイ。

どんな問題も解決できちゃうんじゃないか———そう思えるような安心感が、彼女の笑顔にはあった。

「そういえばユイちゃん、前より髪伸びてきたよね」

ふと栗色の髪が胸元辺りまで到達しているのに気付き、ミカは何気なく尋ねてみる。

「ん？ああこれ？……実はねー……えへ、みーちゃんの真似して少し伸ばしてみようかと思って」

「えっ……わ、わたしの真似……!？」

「嫌だったかな？」

「う、ううん！全然！……とつても……似合ってると思う!!」

少し照れ臭そうに自らの毛先をいじるユイに、ミカは爆発しかけた何とも言えない感情を押し留めながら弁明した。

……嬉しかった。彼女と“同じ”というだけで、自分の心は歓喜で満たされるどころか溢れんばかりであった。

（ユイちゃんとお揃い……）

はにかみながらも自分の黒髪に触れる。

これまでなんとも思っていなかった自分の一部が、途端に誇らしく思えた。

——
“足りない”。

「会長！——難波会長!!」

湯気が充満した大浴場の扉が勢いよく開かれ、職員と思しき男がスーツ姿で中に入ってくる。

「なんだ騒がしい……」

貸切風呂に興じていた老人は不快そうに眉をひそめつつも、血相を変えてやってきた男にそう尋ねた。

「それが……今年新たに難波高等学校に入学した生徒のなかに、ハザードレベルが3を超える者がいたのです。それも2人……!」

「……………」

職員の話聞いた重三郎は目の色を変え、彼が所有していた資料を取り上げてはそこに記載されていた文章に目を通していく。

それは毎年行われる、在校生の身体検査結果の詳細だ。

「……………はっ……………」

添えられていた2人の少女の顔写真を見るなり、老人は薄ら笑いを浮かべた。

「スマッシュの研究はどこまで進んでいる?」

「は……………現在安定して誕生できるまでには至っています。このままいけば自我を保ちながら力を扱える技術もいずれ完成することでしょう」

「よし、そちらに関しては問題ないだろう。——では、例の『遺伝子』についてはどうだ?」

声色を変えそう職員に問う重三郎。

…………それはパンドラボックスが東京都政府に回収されたのとはほぼ同時期のことだった。難波重工の調査団体がスカイウォール周辺の大気を調べて回っていた際、明らかに地球には存在しない物質で構成された微小物体が西都で発見された。

分析を進めていくうちにやがてそれは生物の一部であることが判明し、パンドラボッ

クスと同じく火星からやってきたものだという推測が成されるようになった。

「実は——驚くべきことに、あれは他の生物に寄生することで自らの細胞を増殖させています。これまで実験に用いていたのはモルモット等の小動物ばかりでしたが……人間に憑依した際には、一体どれだけの進展が望めるか……！」

そう早口に語る男の表情は、さながら餌によだれを滴らせる獣のようだった。

「ふむ……素晴らしいではないか」

老人がタオルを腰に巻きつつ湯船から上がる。

「次は人間で試す他あるまい」

「よろしいので?！」

「ハザードレベルが高い者を選出するといい。ちょうどいい人材が2人ほどいるのだろぅ?——ああ、だが実験に使うのは片方だけにしておけ。もしものことがあった時に予備が必要だからな」

「し、しかし……」

思わぬ許しに声を上ずらせる男だったが、すぐに冷静さを取り戻して重三郎へ問いかける。

「確かにこれまで実験に使っていた動物自体に目立った変化はありませんでしたが……人間でも同じ結果になるとは限りませんよ?」

「構わん。……何のために私が多くの子供達を育てていると思ってる？」

不敵な笑みを浮かべる老人に男は底知れぬ狂気を覚え、頬にだらりと汗を伝わせた。

「きつと受け入れてくれるだろう。難波が引き取った者は皆—— “いい子” ばかりだから」

●●●

一ヶ月後。

活動になんの変化もなく、普段通りの生活を送っていたある日——

「みーちゃん！聞いて聞いて!!」

「わひやつ……!?!」

興奮気味な様子で目の前に現れたユイに驚き、ちようど机の横に掛けようとしていた鞆が手から滑り落ちる。

「びつくりしたあ……。今度はどうしたの？」

「今朝ねえ、難波会長に呼び出されてさ——!」

「会長に……!? ってユイちゃん何かしたの!？」

「ち、違うよ! 何もしてないよ! ほんと急なお呼ばれだったんだってば!」

ぷりぷりと頬を膨らませながらそう返してきたユイを見てさらに疑問が深まってくる。

「じゃあどうして……? それも会長直々だなんて……」

「それがさ! あたし達だけでも部を立ち上げていいって! しかも活動中は難波重工から全面的なサポートを受けさせてもらえるらしいよ!」

「えっ……? ええええええええ……っ!？」

事態を飲み込めきれずに語尾を伸ばすことしかできなかった。

……どういことだろう。

（難波会長って……スクールアイドルに興味があつたりするのかな?）

いくら傘下の学校とはいえ……成功するかどうかもわからない新入生の戯言にそこまでの支援を施すものだろうか?

「でもなんか条件付きみたいでさ……あたし放課後にまた行かなきゃならないんだよね」

「行くってどこに?」

「なんとか研究所? とか言ってた気がする」

……話が見えない。研究所といえば難波重工が保有するものがいくつか浮かんでくるが——そもそもどうしてそのような施設の名前が出てくる？

（まあ……あの人の大丈夫かな）

腑に落ちない点もあるが、難波会長の提案であるのなら仕方がない。

信じてもいいだろう。ユイと自分を引き合わせてくれた、『施設』の子供達にとって父のような存在なのだから。

……いや、本当は心に残っていたモヤから目を逸らしながらも……従うしかなかったんだ。

「それでどうだったの？」

「なんか1本お注射されたけど……別段変わったことはないかな」

翌日、ユイはいつも通りの元気な様子でミカの前に姿を現した。

「注射……新薬の研究とかかな？」

「さあ？詳しいことは聞かされなかったけど……」

茶髪を翻し、ユイがミカの隣に並ぶ。その矮躯も、仕草も、声も、全てが昨日と同じだ。

「ともかく！これであたし達、難波グループの支援を受けられるって！部室ももう用意されてるみたい！」

「よかったねユイちゃん」

「うん！」

ごく機嫌にスキップしながら先に行くユイに置いて行かれないよう、ミカも駆け出す。
(こんな風に隣に居られる時間が……永遠に続けばいいのに)

幸福感に満ちた胸に手を当て、それを強く刻み込む。

(ああ——こんなに幸せで、いいのかな)

——異変が起こったのは、それから3日後の夕暮れ時だった。

「ん、みーちゃん何か言った？」

「え？」

なんの前触れもなく、ユイにしか聞こえない“声”が彼女の頭に響き出したのだという。

「ううん、なにも……」

「あれー？ 疲れてるのかなあ……」

そしてさらに2日ほど経ったある時。

「うあつ……あああああ……ッ!!」

先日与えられた部室で歌詞の構想を練っていた際、ユイは突然頭を抱えながら呻き声を発し始めた。

「ユイちゃん……!？」

「知らない……! あたし知らない……!! こんなことしてないよう……ッ!!」

「ユイちゃん!? どうしたの……!?! ねえユイちゃん!!」

——ミカは幼馴染の異常行動を見て、ようやく秘めていた疑問をとある人物に尋ねようという決心がついた。

「ユイちゃんに……なにをしたんですか……?」

座り心地の良さそうな椅子にどっしりと体重をかけた老人へ問う。

普段通りの和服姿でこちらを見据える彼は、今にも激昂しそうなミカに対してなだめるように穏やかな目を浮かべていた。

「なに、単なる新薬の実験に付き合ってもらったただけだ。多少幻聴や幻覚が見える可能性もなくはないが……言ってしまうえばそれだけだ。身体が壊れるようなことはないはずだぞ」

「ふざけないでください……! どう考えてもあの症状は普通じゃないでしょう!! 今すぐやめさせてください!!」

「構わんが……君はそれでいいのか、ミカ?」

「は——?」

意図が理解できない質問を返され、一瞬思考が停止する。

「実験を中止するのはいいが……スクールアイドル、だったかな? 君達が行っている部活動への支援は当然打ち切らせてもらおうぞ?」

「そんなの……ユイちゃんの命に比べれば、大したものじゃありません」

「——彼女と過ごせる時間が失われてもか?」

……………「そうです」と即答できなかった自分を、ミカは強く呪った。

「あ」

……………足りない。

足りない。

足りない。

足りない。

この程度じゃ、まだ足りない。もっとユイと一緒にいたい。

朝起きる時も、昼食をとる時も、授業を受ける時も、寮に帰る時も、夕食をとる時も、夜眠る時も——死ぬ時も。

ずっと一緒にいたかった。他に欲しかったものは何もなかった。

自分はただ——痛みを与える他に自分を守る方法を教えてくれた、ユイと共に過ごしたい。

例えば数時間、数分でも………それだけは奪われなくなかった。

「……………」

口の中を強く噛む。

じわじわと広がってくる血の味すら軽薄に感じながら、ミカは心の中で何度も——
「ごめんなさい」と、呪文を唱えた。



「ねえ聞いてみーちゃん。実験ね、今日で最後なんだって」
「え？」

以前より痩せたようにも見える笑顔を見せながら、ユイはミカと視線を交わす。
「もともと数回に分けて少しずつお薬の量を増やしていく予定だったんだって。それでね、今日の放課後に打つ分で実験に使ったのは無くなるみたいなんだ」

……そう、異変が起きたあの日から、ユイは欠かさず会長の言う「実験」とや

らに付き合わされていたのだ。

何も知らないユイの笑顔を確認した途端、これまで内包していた罪悪感が一気に弾けそうになった。

「あの、ね……ユイちゃん……」

上手く声が出ない。

「ん？」と小さく首を傾げる彼女に——ミカは最後まで真実を伝えることはできなかった。

「それじゃあ、行くね」

「……うん」

複数人の職員達に連れられていくユイに別れを告げ、その背中を見送る。

「……助けて、みーちゃん」

「え——？」

発した言葉が大気に溶ける。

研究所へと向かう車に押し込められる彼女の姿を、ミカは眺めることしかできなかった。

その日、ユイは寮に戻ってくることはなかった。

ベッドの中に身を潜め、地獄のような時間を過ごした。

夜が明け、一睡もできずに爛々としていた瞳で着替えようと自室を歩き回っていた時

「おっはよーみーちゃん！もう起きてる？」

軽快なノックと共に、彼女は再びやってきた。

「ユイちゃん……!?」

寝間着のまま脇目も振らずに走り出す。

玄関のチェーンを手際よく外し、扉を開けた先には――

「えへへ……ごめんね、連絡もせずに」

以前よりも大幅に短いカットが施された髪の毛。

ショートカットの茶髪を備えた、葛城ユイの姿がそこにあつた。

「ユイ……ちゃん……？」

「わっ！どうしたのみーちゃんその隈！昨日ちゃんと眠れなかったの？」

「えっと……その髪――」

「ああ、これ？鬱陶しいから切っちゃった」

さらりと返答したユイに言葉を失う。

お揃いに、と。わざわざ伸ばしてくれていた髪を………彼女はなんの躊躇いもなく

「最後の注射を受けた時からスツゲー……じゃなくて、すつごく気分が良くてさあ！」

「どう……して」

「でもなんだか同時にこれまで溜めてきたストレスも爆発しちゃったっていうか？
ちよつとみーちゃんに物申したくなって、真っ先にここへ来ちゃった」

いつもと変わらない笑顔。そのはずなのに………今は、とても恐ろしい。

「みーちゃんってさあ……ほんつと気持ち悪いよね」

「えっ——」

「いつもあたしの後ろついて回ってばっかでさー……小さい頃に一度優しくしてあげたくらいで調子に乗ってるっていうか？」

「あ、あの……！」

「普段は根暗なくせにあたしと話す時だけにやにやにや……って」

どうしてそんなことを言うのか、ミカには全く理解できなかった。

いつも見せていた表情は偽りだったのか。それならどうして自分をスクールアイドルに誘ってくれたのか。

わからない。何もかもがわからない。

「ごめん……なさい……！」

涙を流したミカが崩れ落ちる。

「……………またそれ？ なにかあればすぐ謝ってその場をやり過ごそうとするんだから」

ごめんなさい。状況を飲み込めないまま、ただひたすらにそう繰り返す彼女を——
—ユイは変わらず、笑いながら見下ろした。

「だーめ、許してあげない」

「へ……………!？」

「みーちゃんには悪いんだけどさあ……………たぶん今のあたしって酷いこと言っちゃってるよね？ “そういうこと”を口走っちゃうようになったのも、きつと実験のせいだと思うんだよね。まったく誰かさんが止めてくれたら、こんなことにはならなかったかもしれないのにねえ」

「そんな……………っ……………!」

ユイの瞳の奥が怪しく光る。

紅色の双眼をミカへと向け——ユイは低い声で口にした。

「君が償える方法はただ一つ、あたしに隷属することだよ。あたしが許すその日まで、永遠にね」

そこから先のことはよく覚えていない。

嬉しかったのか、悲しかったのか。当時の自分が考えることを放棄してしまったせいで、ほとんど記憶に残っていないのだ。

……辿ろうとしても役に立たない。

ああ、心底腹が立つ。

氷室ミカという人間は——自分にまで嫌われる存在なんだ。



まだ戦闘の痛みが残滓するなか、灰色の地面に横たわりながら想う。

(なにも………変わってない)

以前の自分は私欲を満たすために、そして今の自分は嫌悪される恐怖から逃れるために。

なにも変わってなどいない。

霧で身を隠し大空を羽ばたいても、

硬い装甲に身を包んでも、

(ユイちゃんのためと言っておきながら、わたしは――)

——
自分のことしか、考えていなかったじゃないか。

第54話 終わりに行くウォーズ

『仮面ライダーローグ、変身解除！よって勝者……仮面ライダービルド、戦兔キリオ!!』

爆発で広がっていた煙幕が徐々に晴れていく。

静かにビルドの変身を解除したキリオは、ピクリともしないまま冷たい地面に横たわっているミカへと哀れむような視線を注いだ。

「く——う、ううううううう……ッ!!」

身体を曲げ、押し殺すように嗚咽を漏らすミカ。

どこか痛々しくも感じるその姿からは………先ほどのような殺気の類は一切伝わってこない。

ただの——弱々しい女の子だ。

「西都の軍を撤退させる、占領した北都を戻す、パンドラボックスを三国共有の財産とする——それが、うちの首相と約束した条件だったな？」

顔を上げ、正面に見えたガラス張りの部屋に向かってキリオが念を押すようにそう尋ねる。

ミカを破ったことで最終結果は2勝1敗。勝ち数の多かった東都の勝利だ。

これedyouやく……………戦争が終わる。

「つしやああああ!! やったなキリオオ!!」

「キリオくん!」

「やっと終わったんだね……………」

待機していた部屋から飛び出してきた千歌達が瞬く間にキリオを取り囲み、思い思いに言葉を浴びせていく。

彼の周囲に並び立った皆も視線を上へと移し、椅子に腰を下ろした諸悪の根源を睨んだ。

『…………ククク。実に見事だったよ、東都の仮面ライダー諸君』

杖を突き、力なく立ち上がった老人がスピーカーを通して闘技場内にいるキリオ達へ

言った。

『誤算だったな。まさかスタークだけでなく、ローグまでをも打ち破るとは』

「御託はもうたくさんだ。親玉らしく……覚悟を決めたらどうだ？」

鋭利な眼を突きつけてくるキリオに対し、難波重三郎は至つて冷静な態度で返そうとする。

『はっはっは……悪いがそれはできんよ』

「往生際の悪い……！ さつさと観念なさい！」

「なんでダイヤが言うの……？」

向こうの振る舞いに耐えかね、正面のガラスに指をさすダイヤに果南が苦笑。

しかし重三郎の発言を納得できなかったのは、当然彼女だけではなかった。

「できない……とは？」

『気付かなかったかな？ この施設には一般人は愚か、難波重工の職員すら存在しない。代表戦の結果を知る者は、今この場にいる我々だけだ』

千歌達は四方の灰色の壁で囲まれたこの闘技場を改めて見渡し、自分達が置かれている状況を再確認する。

老人が何を言わんとしているのかを察知した聖良は、いち早く落ち着いた口調で返答

した。

「……約束を反故にするつもりなんですか？」

『まあ、平たく言えばそうだな』

それはまさに外道の極みだった。

約束事——それも国家間のやりとりを、奴は都合に合わせてあつさりと放り投げようと言うのだ。

「……………どうしてあんたに大企業を担えるほどの人望があるのかわからないよ」

『はははっ……………なんでも言うがいい……………これは敗北ではない、まだ過程なのだよ、戦兎キリオくん。——真の勝者こそ……………歴史を作るに相応しい器となるのだ』

高笑いを響かせる老人から目を離し、キリオはそばに立っていた月にアイコンタクトを送る。

バツチリ、とでも言うかのように敬礼を見せてきた彼女に親指を立てつつ、キリオは一步前に出て再び口を開いた。

「——同感だよ」

『……………ん？』

ポケットからビルドフォンを取り出し、その画面を重三郎に見えるよう高く掲げる。

『おおおお！やった！勝った！我らが仮面ライダービルド！見事勝利を収めました—————!!』

そこには先ほどの戦闘——ちょうど青い姿に変身したビルドが、必殺技の砲撃でローグを下す場面が映し出されていた。

画面左上には薄く「放送は終了しました」の文字がある。

「実況しろとまでは頼んだ覚えはないんだが……」

「ええ？その方が民衆にも伝わりやすくていいと思うけどなあ」

「月ちゃんってレポートとかのお喋り得意だもんね」

キリオの持つ小さな機械を食い入るように見つめた重三郎は、そこで初めて狼狽する様子を露見させた。

『どういう……ことだ？』

「ライブ配信ですよ、ここでの戦いを中継させてもらっていました。……3戦とも、全て

ね」

してやつたりな笑顔を浮かべる月。

最初にこの場所に訪れた時から嫌な予感はしていたんだ。

まるで自分達を世間から隔離するように用意されたこの闘技場に、撮影に使うような機材が確認できなかったことにも違和感を覚えていた。

……西都の連中はこの代表戦を記録する気など更々ないと、最初から勘付いていたのだ。

「東都が勝利したことはネットを通じて全国に広まっている、正真正銘の『事実』としてな」

『……………貴様ら』

思いもよらぬ反撃を受けた老人は、憎しみに満ちた目を闘技場内の集団へと向けた。

「終わりだ難波重三郎、あんたには西都首相の暗殺未遂の疑いもかかっている。今頃施設の周りは警官隊に囲まれている頃だろうさ」

『……………はっ』

震える足で椅子から離れた老人が背後に待機していた少女のもとへ近づいていく。

『こうなれば最後の手段を使うしかあるまい。……………ユイ、この場で奴らを全員、消し飛ばしてやれ』

「えっ……!？」

その一言を聞いて千歌達は反射的に身構える。

無駄な抵抗を見せる重三郎に対し、キリオは追い打ちをかけるように続けた。

「代表戦の結果はもう知れ渡っていると言ったはずだ。俺達を殺しても結果は変わらない」

『ははは……！君達も見たはずだろう、この娘には人ならざる力が宿っている。それこそ超能力としか言い表せない力がな……!』

「……なんだって？」

『ユイにかかれば今この国にいる全ての人間の記憶や意識に介入し、それを改竄することだって容易だ。……そう、我が難波重工の技術が生み出した奇跡の血清によって、ユイは人間を凌駕した存在になったのだ……!』

その老体で力強い演説をする重三郎。

……2戦目のスタークの戦い方を見てしまったせいかな、キリオは奴の言うことが嘘だとは瞬時に判断することができなかった。

「——さあユイ、やってくれ！」

胸元に付けていたマイクの電源を切りつつ、若干の焦りを見せながら老人は少女にそ

う懇願する。

部屋の隅で待機していた鷲尾姉弟は、その光景にどこか不安げな眼差しを注いでいた。

「ふわあ……。えーと、なんでしたっけ？」

「奴らを始末するんだ、お前のあの力で……。早く!!」

あくびをしながら緊張感のない物言いをするユイに重三郎は語気を強めて言う。

「ああ」

白い制服に身を包んだ少女は、怪しげな笑みを浮かべたまま片手を開き——それを老人に向けた。

「——コレのことですか？」

「……！伏せろツツ!!!」

背筋に走った悪寒がキリオを動かす。

彼が千歌達を強引にしゃがみ込ませた刹那、ガラス張りになっていた部屋から紅の光と共に衝撃が拡散。大爆発を引き起こした。

「きゃあっ!?!」

「いったいなに……!?」

続いて放たれた熱線が闘技場の天井を崩す。

「ぐ……あ……!」

至近距離での爆発を身に受けたせい、鷲尾雷斗はぼやけた視界を凝らし、主人の姿を探した。

「会長……! 難波会長ツ!!」

「死んでるよ」

佇んでいたユイが壁際を指し示す。

動かなくなつた老人の肉体は、所々が大きく欠けていた。

「葛城ユイ……! 貴様ア!!」

「ユイ“さん”……でしょ?」

「……! 雷斗!!」

姉の制止を振り切り、雷斗はネビュラスチームガンをユイへと向け発砲を試みる。

しかし、

「ガッ……!」

トリガーが引かれる寸前、細い腕から伸びた触手が蛇のような動きで雷斗の身体を貫いた。

「雷斗ッ!!」

風華の悲痛な叫びが炎上した室内に響く。

紫色の粒子となつて消滅していく弟に手を伸ばすも——その命を繋ぎとめることは叶わなかった。

「らい……と……!」

「はーあ………つたく、難波重工が生み出した? 奇跡の血清? ……結局最後までおめでたいジーサマだったな」

「ユイさん………あなたは………いつたい……!?!」

《ミストマツチ!!》

発生した霧と共に血のように赤い姿へと変身したユイが火傷と裂傷だらけの風華を見やる。

「キリオと万丈が予想以上の成長を示してくれたおかげで、オレはこんな退屈な場所にいる必要はなくなった。……用済みってことだよ、お前らは」

声色を変えてそう語るスタークを、風華はただ呆然と見上げることしかできなかった。

「……………もうすぐだ」

スタークは闘技場にいるキリオを一瞥した後、小さく笑いつつトランスチームガンを振るった。

「チャオ」

再び発生した黒霧が奴の全身を包む。

炎に包まれた部屋に取り残された風華はぐちやぐちやに変形した老人を視界に入れた後、亡骸すら残されなかった弟の面影を視線で探すのだった。

「やばい……………このままじゃ生き埋めだぞ!!」

「出口は!?!」

「ダメ……………来る時に使った通路が塞がれてる!」

崩壊していく闘技場の中心で身を寄せ合う千歌達。

「どけ！瓦礫を破壊しながら進むしかない！」

「う、うん！」

ビルドドライバーを装着したキリオの背後に皆が集まる。

（フルボトルバスターの砲撃じゃ千歌達も巻き添えになる可能性があるか……!?）

《鋼のムーンサルト！ラビットタンク!!》

変身し、取り出したドリルクラッシュャーで少しずつ周囲の瓦礫を破壊し始めるキリオ。

「何やってる万丈！お前も手伝え！」

「それが……さっきの戦いでゼリーが壊れちまつて……」

「はあっ!？」

申し訳なさそうに黒焦げになったスクラッシュゼリーを見せてきたリユウヤに思わず絶句する。

「ビルドドライバーは!？」

「……置いてきちまつた」

「このバカ!!」

「あれ……そういえばミカちゃんは……!？」

2人のやりとりを尻目に梨子が辺りを見渡した。

やがて倒れ伏していたミカの姿を見つけ、梨子は咄嗟にその場を駆け出す。

「……あいつ……!」

気付いたリユウヤも同行し、未だ力なく横たわっている彼女のもとへと向かった。

「氷室!」

「ミカちゃん!」

駆け寄ってきた2人には目もくれず、ミカは腕の中に顔を沈めたままだ。

「逃げるぞ氷室!ここにいたら瓦礫の下敷きに——!」

「……もう……いい……!」

「あ……?」

立ち上がりせようと手を伸ばしたりリユウヤが動きを止め、震える声で細々と語り始めたミカの言葉に耳を貸す。

「……取り返しのつかないことばかり……した……。応援してくれる人はいつぱいたのに……わたしは……ずっと自分のことばかり優先して……っ……A q u o r s や……S a i n t S n o wの人達にも酷いことをして……!」

「ミカちゃん……」

途切れ途切れにそう口にするミカに、思わず梨子の胸にも熱く悲哀な感情が込み上げてくる。

「だからもう……いい……。わたしなんか……このまま死んじやったほうが……っ！」

「いいわけないだろッ!!」

ミカの両肩を掴んだりユウヤは彼女の上体を乱暴に起き上がらせる。

涙でくしゃくしゃになった顔に怒りを露わにした表情を対面させ、奮い立たせるように強く言う。

「意味わかんねえわがままもいい加減にしろよテメエ……! 誰もそんなこと望んじやいねえんだよ! 後悔してるんなら生きろ! 2度と同じ間違いをしないために……今度こそ後悔しないように生きるんだよ!!」

「……………」

「そうだよミカちゃん」

ハツと我に返ったりユウヤの手を優しく解き、梨子はミカの肩を支えながら口ににする。

「……でうずくまってても何も変わらないわ。それに………生きてれば、またスクールアイドルできるじゃない」

「……う……うう……!!」

大粒の涙が彼女の瞳から溢れ出す。

リュウヤと梨子に支えられながらもミカはやがて自らの足に力を込め、ゆつくりと立ち上がった。

「よしっ……開いた!!」

道を遮っていた瓦礫を軒並み破壊し尽くし、キリオはすぐさま千歌達のいる背後へと振り返る。

「急げ!..じゃないとまたすぐに塞がって——!!」

「……!!おい!!」

「みんな危ないっ!!」

遅れてやってきた梨子達がいち早く危機を察知する。

キリオや千歌達が集まっていた真上に巨大な瓦礫が落下してくるのが見えた。

「——!!」

梨子が反射的に左腕を突き出す。

なにも掴めるはずがない手のひらが空を切ったその時、

「え……？」

眩い黄金色の輝きが――梨子の左手首に巻かれたバングルから発せられた。



「あたっ!？」

「いつっ……!？」

放り投げられるかのようにコンクリートの地面に転がる。

「なにが起こった……!？」

顔を上げ、キリオは皆の無事を確認すると共に周囲へと視線を巡らせた。

「外……？」

そこには難波重工が有する巨大な施設――地下にある闘技場へやってくる前に見た景色が広がっていた。

周辺には政府から派遣されたであろう警官隊が集まってきており、皆突然の地鳴りに驚いている様子だった。

……地下からここまでワープしてきたのだろうか？だがそんな離れ業いったい誰がどうやって……？

「いったたたた……。あ、曜ちゃん大丈夫？」

「なんとか……。千歌ちゃんは？」

「私も平気……。梨子ちゃんは——」

千歌は隣で尻餅をついていた曜と互いに怪我がないことを確認した後、反対側に佇んでいた梨子へと顔を向ける。

「……梨子ちゃん？」

どこか遠くを見るような眼差しでこちらを見下ろしている彼女に首を傾げる。

奇妙なことに梨子の瞳は——美しい翡翠色に煌めいていた。

「おーい……。梨子ちゃん？」

立ったままで返事のない彼女の目の前で手を振るも反応はなし。

さすがにおかしい、と思いつつも、今度は頬を軽くつついてみる。

「——無礼だぞ、小娘」

「えっ!? ぶれ……は、はいごめんなさい!？」

あまりにも突然な物言いに驚愕する。

「梨子が……。どうかしたんデスか？」

ふらふらとした足取りでやってきた鞠莉が梨子の傍らで立ち止まり、冷たく感じるほど落ち着いている彼女をまじまじと観察し出した。

「梨子の意識は奥底に眠っている」

「……Oh、頭でも打っちゃったのかしら？」

「えっ!! なになに!! リリーのヨハネ的な人格が覚醒したの!!」

「ちよつと黙ってるすら」

「もう梨子ったら、冗談言ってる場合じゃないでしょ？」

善子、花丸、果南……と次々に集まってくる少女達を見て鬱陶しそうに眉をひそめた後——梨子は声色を変えて言い放った。

「——我が名はベルナージュ。……火星の王妃だ」

第3章 最終兵器エボル

第55話 開演のベルが鳴る

代表戦での東都の勝利——それはキリ才達の思惑通り、インターネットを通じて瞬く間に全国に知れ渡った。

今後は戦争の恐怖から解放された人々も以前のような活気を取り戻すことだろう。

……当然、スクールアイドルも。

「え、えーつと……つまり……？」

崩壊した施設の後始末は東京都政府に任せ、キリオ達は浦の星女学院にあるスクールアイドル部部室へと帰還していた。

「あなたは梨子ちゃんの付けてたバングルにずっと宿っていて……今までは力を温存するために極力出てくるのを避けていたと？」

……突如として自らを「火星の王妃」と名乗った梨子——もといベルナージュが瞼を開け、翡翠色の瞳で千歌達をじつと捉えている。

「ベルナージュ……って言ったら……」

「ミカちゃん達のグループ名と同じずら」

部屋の隅でこじんまりと腰を下ろしていたミカに皆の視線が集まる。

「……Bernageってグループ名はユイちゃんがつけた。意味を聞いても教えてはくれなかったけど——」

「大方、身動きのとれないでいたワタシを嘲笑うための皮肉だったのだろう。……相変わらずつまらぬ真似をする」

椅子にどっしりと構えつつ、長い髪を手で軽く整える。

普段からどこか大人っぽい雰囲気醸し出していた梨子だったが、今はベルナージュの振る舞いも相まってとても高校2年の女の子には見えない。

「皮肉……って、どういうことだ？ あんたは葛城と知り合いなのか？……ていうか、本当

に火星人なのか？」

未だ彼女の言うことを信用しきれない様子のリュウヤがそう尋ねる。

「疑いの目を向ける時はよく考えてものを言えよたわけ。ワタシが残りわずかな力を使いて手を貸さなければ、今頃お前達は瓦礫の下だ」

「あ？ たわけ？」

「まあまあまあ!!」

身乗り出しかけたリュウヤを彼の隣に座っていた千歌と曜が抑える。

「それで王妃様、どうしてあなたはそのバングルに——」

「その前に先に聞いておきたい」

千歌が質問を投げかけようとしたところで遮るようにベルナージュが口を開いた。

「……え、俺？」

奥で腕を組みながら静かに話を聞いていたキリオに、彼女は鋭い眼を突きつける。

「——なぜお前が、彼女達と行動を共にしている？」

「……は？」

数秒間の沈黙が部屋を満たす。

誰もその質問の意味を理解できないまま時間が過ぎ――

「――」

「わっ!!?王妃様!?!」

やがて瞳から翡翠色が消滅し、意識を失うように梨子の上体が机に倒れた。

静かに寝息を漏らす梨子に胸を撫で下ろしつつ……………流れるように皆の視線がキリオへと移る。

「…………どゆこと?」

「キリオくん、火星の王妃様と知り合いなの…………?」

「いやいやいやいや…………まさか!!」

必死に両手を振って否定しつつも、すぐにそれがありえない話でもないことに気がつく。

…………そう、キリオは未だスカイウォールの惨劇以前の記憶を失ったままなのだ。逆にベルナージュと面識があったとするならばその時期以外に考えられない。

「記憶を失くす前は火星人だったとか?」

「う、宇宙ずらあ…………」

「火星人って言ったら…………タコみたいに手足がいっぱいあるイメージが浮かぶけど」

「でも戦兎先生の手足は4本だし…………」

「どうなのキリオ？」

「いや俺が知るかよ」

あたかもキリオが火星の住人であったことが決定事項かのように問いかけてくる果南に素早く切り返す。

「だいたいそのバングルはなんなんだよ？ どうして火星の王妃とやらはそいつに宿つてたんだけ？」

「ユイちゃんの部屋で見つけて、梨子ちゃんの腕に勝手に巻きついたつきり取れなくなっちゃった……とは聞いたんだけど」

「葛城の部屋……？」

はつきりしない表情で語る千歌にキリオはますます混乱を隠せないでいるようだ。つた。

梨子の身につけているバングル——調べればわかるだろうが、ベルナージュの言葉信じればパンドラボックスのように火星から飛来してきたもの……ということになるのか？

……なんにせよ、彼女が自分達の知らない情報を保有していることは明らかだ。再び目覚めた際には知り得ることを洗いざらい話してもらわなければ。

「……ん」

不意にビルドフォンに着信が入っていることに気がつき、千歌達に向けてジェスチャーで席を外すと伝える。

画面に表示されているのは東京都政府——もとい統一国家政府首相となった塔野からの番号だった。

「急に呼び立ててすまないね」

「……いつものことでしょう」

助手席に座っている黒服……ボディーガードだろうか？先ほどからチラチラと目でこちらを追っていて落ち着かない。

スーツ姿の首相と隣り合わせで腰を下ろし、キリオは走行する車の窓から流れていく景色をぼんやりと眺めていた。

「パンドラボックスの光を浴びた人間は好戦的な気質がむき出しになる………だったな」

「……？」

唐突にそう切り出した塔野首相へと顔を向き直す。

彼はどこか疲労に満ちているような重苦しい表情で下を見つめながら続きを語り出した。

「私はこれまで、一刻も早く戦争を終わらせ……この国を統一することだけに力を注いできた」

「ええ……存じておりますが」

「その目的自体は達成できたと言えるだろう。君や万丈くん……そして協力してくれた猿渡くんのおかげでな」

首相は体重を後ろにかけ、天井へと視線を移しながら力ない口調で言った。

「……それなのに収まらないんだ。力や闘争への欲求が……未だ私のなかで渦巻いている」

「え——」

ブレーキがかかり、車内が揺れる。

やがてキリ才達が乗っていた車両が停車し、首相は何の説明もしないまま「着いたぞ」とだけ伝え外へと降りてしまった。

疑問にまみれながらも彼の背中を追う。

「病院………？」

かつての東京都政府首相官邸から車で数分の地。そこに建っていた巨大な病棟が目に見え、飛び込んでくる。

首相に連れられて中に入っていくと、その時点でいつの間にかボディガードらしき人間達までもがいなくなっているところに気がついた。

「……だ」

とある大部屋へと案内されたキリ才は、首相が手で示したと同時に恐る恐る室内へと足を踏み入れる。

10……いや、もっと多い。外見から察するに20代の——それもひどく衰弱した様子の女性達がベッドに寝かされた状態で並んでいた。

「この人達は……？」

「元スクールアイドルだった者達だ。……惨劇が起きたあの日、私と同じ場所にいた」
首相がスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出し、キリオの眼前へと持つていく。

写っているのは三国の首脳陣と……おそらくこの部屋で眠っている女性達。

首相は病室の窓から見えるスカイウォールを視界に入れ、再び沈んだ声を発した。

「スクールアイドルという文化を世界に売り出すため、政府協力下で行われた『スクールアイドルフェスティバル』。そのオープニングセレモニーの真つ只中にパンドラボックスが飛来し——あの壁が出現した。ステージ上でライブを行っていた彼女達は大量のネビュラガスを体内に取り入れてしまい意識不明の重体に、最前列でそれを観賞していた我々首脳陣も直接光を浴びることとなった」

かつての悲劇を噛み締めるように首相は自らの記憶を掘り起こしていく。

「国が分断された影響から物資の流通も滞り……やがて彼女達は満足な治療も受けられなくなってしまう」

「……ここにいる人達を目覚めさせることが、あなたの叶えたかった願いというわけですか」

写真に目を落としている首相を一瞥し、キリオは並んでいるベッドの方を見やる。

……ネビュラガスによって犯された人間を救う方法は現時点では存在しない。

消滅していないということはある程度のハザード^{抵抗}レベル^力を備えていたのだろうが……それもたかが知れている。純正のガスをもろに受けては助かる道はほとんどないだろう。

スタークの手にかかった者達のように、スマッシュの姿ではないことが唯一の救いか。

「国がひとつになったことで以前よりはマシな治療が可能になるはずだが……」
「回復の見込みがないことは最初からわかっていたんですね？」

キリオの言葉に目を細め、ゆっくりと頷く首相。

「だが私は諦めることができなかった。……スクールアイドルに初めて触れたあの日から、私は——」

口をつぐんでしまった彼から視線を逸らし、キリオは思い出す。

塔野首相は西都との戦いでも千歌達が計画していたライブに施設を提供してくれるなど、異常なほど協力的な姿勢を見せてきた。

……いや、もつと前から。戦争の障害となるはずの千歌達を、利用することはあつてもスタークのように完全に潰すような動きは見せなかった。

パンドラボックスの光に蝕まれてもなお、彼はスクールアイドルを愛しているというのか。

「それで、俺をここに連れてきてどうするつもりだったんですか？」

「彼女達を治し、救うことができれば——少しは箱の呪いも楽になるかもしれない。そのために君を呼んだんだ」

「……無茶を言うのはやめてください」

顔を合わせないままキリオはそう返答する。

首相は「キリオなら治療が可能かもしれない」というわずかな希望を胸に自らの秘密を打ち明けたのだろう。

……が、しかし、それは不可能だ。ルビイやダイヤ、理亜が未だ純粋な“人”に戻れていないことがそれを証明している。

（パンドラボックスの呪い……か）

塔野首相——彼はこれまで自分が行ってきたことの罪悪感を、この病室にいる女性達を治療することで打ち消していたんだ。

戦いを求めてしまう自らの心を悔いて……。

「はつきり言いましょう。……残念ですが首相、現状彼女達からガスを取り除く方法も、あなたを元の人格に戻す方法も存在しません」

今度はまっすぐ彼の目を見てそう答える。

……首相自身、過度な期待はしていなかったのだろう。キリオの言葉を耳にしても大

きく落胆するような様子は見せなかった。

「……………」

数秒の沈黙の後、再度キリオが口にする。

「そのための研究を進めることはできません。……………今は無理でも、いつかは——あの箱によつて人生を狂わされた人々を救えるような技術を完成させられるように」

「……………」

ほんの一瞬だけ、彼は救われたように安心した表情を浮かべた。



誰もこちらを見ていないことを確認した後、音を立てないようひっそりと部室を出る。

覚束ない足取りで体育館を抜け、校舎から出ようと玄関を目指した。

「……………」

その少女——氷室ミカは途方に暮れていた。

難波重工は会長が殺害されたことで大混乱に陥り、その主犯であるユイも姿をくらませってしまった。

……独りじゃ何もできない。スクールアイドルとしてやってこれたのだって、ユイが隣にいてくれたからだ。

(これから先……わたしはどうすれば……)

壁に寄りかかりながらぼんやりとした暗い瞳で廊下を歩いていく。

「ミカちゃん、どこに行くの?」

背後からかかった声に反応し立ち止まる。

「わっ! 大丈夫!? 無理に動かない方がいいよ」

振り向こうとしたところでバランスを崩してしまった。

ミカは咄嗟に自分の身体を支えてきた少女——渡辺月の横顔を見つめ、消えそうなほど弱々しい声で尋ねる。

「どうして……?」

「え?」

「わたしはあなたを殺そうとしたのに……どうしてあなたは——」

「君を氣遣うのかつて？」

言わんとしていたことを先取りされ、肯定の代わりにきゅ、と唇を結ぶ。

「君が自分の意思で行動していいことは最初からわかってたからね。……なんだかほっとけなくてさ」

青い表情を浮かべているミカを慎重にその場に座らせ、どこから調達してきたのか……月はミネラルウォーターで満たされたペットボトルを差し出してきた。

「……あなた達と一緒にいるなんて……やっぱりできない」

「どうして？」

「どうしてって……だって、わたしは——あなた達の敵だったじゃない……っ」

つい語気を強めてしまったミカに対し、月は至って冷静な様子のまま返した。

「うーん……曜ちゃん達はそんなこと気にしないと思うけどな。それにさ、もう戦争は終わったでしょ？」

「……………」

まっすぐに視線を合わせてくる月。

自分が殺そうとした彼女が………自分を慰めるような行動をとっていることに奇妙な感覚を覚えずにはいられなかった。

「実はボクね……君達Bernageのライブは結構チェックしてたんだ」

「え……？」

「素晴らしいと思ったよ。『西都を代表するスクールアイドル』……その名を冠するに相応しいパフォーマンスだと、そう感じたんだ」

思い出すように目を伏せながらそう語る月の言葉に、ミカは耳を傾けている自分がいることに気がついた。

「だからこれは……ただのエゴなのかもしれないけど、君には……この先もスクールアイドルを続けて欲しいと思ってる。曜ちゃん千歌ちゃん、AqoursのみんなやSainit Snowの人達と一緒に、これからも国の人々の心を救って欲しいって……そう思ってるんだ」

……今までスクールアイドルの活動をやってきて、こうした『ファン視線』の声をきちんと聞いたことがあっただろうか。

あるはずがない。自分のことで頭がいっぱいだったかつての自分は———そんな人達の想いすらないがしろにしてきたのだから。

「わたし……わたし、は…………」

——許されても、いいのだろうか——？

直後、場の空気をぶち壊すようにポケットの中から振動と共に着信音が流れた。

月が「どうぞ」と指し示したのを視認した後、ミカはボンチョコートで隠れていたポケットをまさぐり、スマートフォンを引っ張り出す。

「え……!?!」

番号と共に画面に映し出されていた名前に——ミカと月は揃って驚愕の声を上げた。

「ユイちゃんから……?」

第56話 和解のガーゼ

——知らない光景が流れ込んでくる。

身動きがとれない闇のなかには、まるで独りきりの映画館のようだった。

他に何もできることはない。だからあたしは上映されている映像を見続けることしかできなかった。

大きなスクリーンに映し出されているのは——きつと“彼”がその手でしてきたこと。

破壊。

絶望。

恐怖。

そして愉悦。

これらにはつきりとした名前が付けられたのは、彼にとってつい最近のことだった。それまでに彼はあらゆる星を喰らい、多くの生命を奪い尽くしてきた。

あたしはそれを……とても悲しいものだと感じた。

被害に遭った星の住人が？……確かにそれもある。何も知らないまま一方的に命を奪われるなんて普通じゃない。想像しただけで胸が張り裂けそうになる。

けれど頬に伝っているこの涙はきつと――

――

彼に対しての感情だ。

●●●

『はあいローグ、元気してた？』

「ユイ……ちゃん？」

スマホ越しに聞こえてくる少女の声にミカと月は息を呑む。

代表戦の直後に行方をくらませたユイが………今になって連絡を。

『今って東都にいたりする？』

「そ……そうだけど……」

『……もしかして浦女？』

「えつと……その……」

そばで様子を見守っている月を一瞥し、ミカは迷うように答えるのを洩る。

正直言つて……ユイが難波重工に対して絶対的な忠誠心を抱いているわけではないことは薄々わかっていた。むしろ何か別の目的のために利用しようとしている節があつたことも。

そして代表戦の際に彼女が起こした行動を見て、それは確信に変わった。

ユイはまだ何かを企んでいる。もしかしたらまた………A q u o r s や S a i n t S n o w、スクールアイドルに対して攻撃を仕掛けてくるかもしれない。

今ここで浦の星女学院の名前を出してしまえば——

『ねー聞こえてるー？どこにいろのつて聞いてるんですけどお』

——『お互いの良いと思えるところを尊重し、悪いと思うところを補い合う……！それが友達——仲間つてもんだらうが!!』

不意に、青年の声が頭に響いた。

「ゆっ……………ユイちゃんは……………今どこにいるの?」

動悸が激しくなり、全身から汗が吹き出てくる。

精一杯の勇気を振り絞り、ミカはユイに対して質問を投げ返した。

『はい……………先に聞いたのはこっちなんですけどー?』

「か、会長まで裏切つて……………この先どうするつもりなの……………!」

『ねえ、なに? うざいんだけど……………さっさと今いる場所を教えてくださいればいいんだって』

「だ……………ダメ……………先に……………ユイちゃんがどこにいるのか……………教えてよ……………!」

じつとりとした手で強くスカートを握りながらそう返答する。

ユイの意思への叛逆。これまでの自分なら罪悪感に負けて言いなりになってしまつただろう。

だが今は……………違う。変わろうと努力しなければならない。

なぜなら間違いを指摘できるのが—— “友達” だから。

『……………』

従おうとしないミカに戸惑っているのか、ユイはそれ以上にも言い返そうとはしなかった。

「ねえ、ユイちゃん……もうやめようよ。今までユイちゃんがなにを考えて行動してきたかはわからない……でも、こんなのダメだよ」

自分達を囲む環境が大きく変わってしまった日のことを思い出す。

Bernageというグループを結成した後も、多くの人を騙し弄んできた。

フアンの人をスマツシユにし、自作自演でライブをめちやくちやにし、挙句スクールアイドルそのものを壊そうとした。

……許されないことをしたのはわかっている。けど、だからこそ――

「誰かを利用したり、傷つけたりするのはいけないことなんだよ。与えるのは絶望じゃなくて……希望じゃないと。だってわたし達は………スクールアイドルでしょう……？」

――これ以上過ちを繰り返すわけには、いかないんだ。

『――仕方ないか』

「…………え？」

ぶつり、と通話が切れる音が耳に滑り込んでくる。

最後に残した言葉を最後に、ユイが連絡してくることは……………2度となかった。

「ま、ともかく……………これで一件落着だね」

背もたれに寄りかかりながら身体を伸ばした千歌がその場にいた全員と順に顔を見合わせる。

「戦争が終わったってことは……………理亞ちゃん達も北都に帰れるね」

「そうね。……………お尋ね者も見つかったことだし」

「……」

肘でつついてくる理亞にタクミは居心地の悪そうな顔で見返す。

「せつかくですし、少し観光でもしていきますか？」

「え、いいの姉様？」

「あつ！なら私がこの辺案内しますよ！」

「ルビィも！」

「もうこの際、みんなで遊びに行っちゃおうか」

「それいい！……あ、じゃあやつぱり東京行こうよ！トーキョー！！」

曜の言葉に賛同するように明るい表情が広がっていく。

窓の外を見てみればもう日は沈みかけ、夕焼けの光が差し込んでくるのが見える。

穏やかな寝顔を浮かべている梨子のそばで、千歌達は開放感に溢れた会話の花を咲かせていた。

「あれ……まだいたのか？」

賑やかな雰囲気で満たされた部屋にキリオが舞い戻ってくる。

「あ、キリオくん聞いてよ！今度みんなで東京の方に行くんだけどキリオくんも――

――」

詰め寄ってくる千歌に圧倒されつつも、キリオは嬉しそうに語り始める彼女の顔を見

て自然と口元を緩めた。

「……よかつたな」

その様子を眺めていた少年がひとり呟く。

戦争の終結を見届けた者達がようやく羽を休める時間を得たんだ。舞い上がってしまうのも無理はない。

少年——リユウヤは猫のように大きなあくびをした後、改めてキリ才達の憑き物が落ちたような表情を見て小さく笑った。



「やっ………」

暗闇に紛れて巨大な施設を狙う影がひとつ。

物陰に潜みながら政府の保有する研究施設を観察するその影の手には……………大量のフルボトルがはめ込まれた「パネル」が握られていた。

「さよなら」

「じゃあねみんな」

「ああ、気をつけて帰れよ」

夕焼けの光も闇色に変わってきた頃。

次々とバスを降りていく生徒達を見送り、最後まで車内に残っていたのはキリオ、リユウヤ、タクミ、千歌、曜、梨子、月……Saint Snowの鹿角姉妹。そして今日加わったばかりのミカ、計10人。

「火星の王妃……？　どういうこと……？」

「あー……梨子ちゃんは記憶してないパターンか……」

「ま、詳しいことはいずれ話すよ」

まだ不安要素が完全になくなったわけではないが、帰りのバスの空間には戦争が起る以前の和気藹々とした空気が戻ってきた。

……このまま順調に千歌達がいつもの生活に戻れることを強く願いたい。

「そういえば……氷室はこれからどうするつもりなんだ？」

終始うつむき加減なミカにリュウヤが何気なくそう尋ねる。

彼女は目を合わせないまま、辛うじて聞き取れる声量で返答した。

「……明日には……西都に戻ろうと思ってる」

「え、そんなすぐに!？」

通路を挟んでミカの横の席に座っていた千歌が上体だけを彼女に寄せてそう問う。

「だって……いつまでもここに居る理由もないでしょ……う。」

「えー!? ミカちゃんも一緒に東京行こうよ!」

「は……?」

「そうだぜ氷室! 俺ももう少しはキリオのところで世話になるつもりだしよ!」

「ええ? お前まだ居座る気だったのかよ?」

「あ? 悪いかよ」

やがてギャーギャーと言葉の投げ合いが始まると、賑やかだった車内をさらに騒がしくする笑いが充満していく。

「……………」

自分に対して一切の非難をぶつけようとはしない皆の様子を見て、ミカは自然と表情を呆然としたものに変えた。

ふと視界に入った月と目が合う。

「ほらね？」と月の口が動き、彼女はミカに対して小さく親指を立てつつそれをひっそりと示した。

「そういえば……ミカさんは泊まる場所の当てはあるんですか？」

奥の席に腰を下ろしていた聖良が前方に座るミカに向けて問いかける。だがミカが「ある」と答えるわけがないことはこの場の全員が承知していた。

するとキリオが前の席から顔を覗かせ、よそよそしく身体を縮ませているミカに向けて口を開く。

「俺の部屋で眠ればいい。万丈とも共有になるが……そこそこ広いし3人程度なら余裕だろ」

「えっ……」

「うわっ……！キリオくんったらナチュラルに女子高生を自室に連れ込もうとしてる!？」

「鞠莉ちゃんに言っちゃおう」

「ちげーよ！善意で提案してんのにそういうこと言われると傷つくでしょうが!!」

ただでさえ聖良と理亞が十千万の部屋を特別に使わせてもらっているんだ。これ以上高海家に迷惑をかけないためにも、万丈と同じく自分の地下室に滞在してもらったほうがいいと思っただけだ。

それと鞠莉^{理事長}に口外するのは洒落にならなくなる可能性があるので割と本気でやめてほしい。

「客室に使ってない空き部屋はまだあるんだし、万丈くんだってそっちにいればいいのに」

「いや、俺は地下^{あっち}でいいよ。どのみち近いうちに西都に帰るんだしな」

「そっか。……ねえミカちや——」

もう一度ミカに話を振ろうと千歌が横に顔を向け直すが、同時に硬直。

ミカの目元から流れ落ちる雫に気がつき、千歌達は戸惑いの混じった顔を見せながら引き波のように静まり返った。

「ミカ……ちやん……う？」

「え……う——あれっ……やだ……どうしてわたし……なんで、泣いて……」

慌てて頬を伝う涙を拭おうとするミカだったが、いくら払拭しても絶え間なくそれは溢れてくる。

「氷室……」

真つ赤になった目元を擦る少女の姿を見つめ、リュウやはじんわりと広がってくる熱い感情に瞳を潤ませた。

つり上がったいた目つきが下がり、戦争が始まる以前の彼女を思わせる臆病な表情を露わにしている。

「そう……だよね。ずっと辛い思いしてきたんだよね」

「へ……う」

千歌は両手を伸ばすと、震えているミカの右手を優しく包み込みながら囁くように言った。

「あんなこととして平気なわけないよね。……人を傷つけて、傷ついて……戦争の道具として使われるなんて普通じゃないよね。そんなの……スクールアイドルの君がやりたと思うわけないもんね……!!」

それはまるで自分の身に降りかかったことを悲しむかのような、目の前で涙を流している女の子に対しての励みしだった。

ミカの悲しみを分かち合うように……千歌は同じように心を痛める。

「でも、もういいんだよミカちゃん。もう無理しなくていい。これからは自分の心に聞いて、自分がしたいと思えることを全力でやろうよ」

「……っ……う……!!」

——その瞬間、やっと理解できた。

自分に絶望し、生きる気力も失ったまま瓦礫の下敷きになることを選ばうとしたあの時……どうして自分は最後に立ち上がったのか。

たとえ全てをかなぐり捨てたとしても、

どれだけの痛みを心に刻み込まれようとも、

……やりたい。自分はまだ——生きてスクールアイドルがやりたいんだ。

「ごめん……なさい……!ごめんなさい……っ!!」

ミカにとつて嬉し涙を流しながらその呪文を唱えるのは——生まれて初めてのことだった。

(……もう、心配する必要はなさそうだな)

泣きじゃくるミカを抱き寄せる千歌を見て微かに笑う。

後ろで和解を終えた少女達から目を離し、キリ才はふっと一息ついた後で深く座席に座り直した。

……そう、戦争は終わったんだ。もう彼女達が傷つく必要はない。

（ようやく……俺の求めていた平穏が帰ってくる——）

沈みゆく太陽の光を反射して輝いている海を窓から眺め、穏やかな気分に戻る。

キリオは疲れ切った身体をシートに預け、十千万に到着するまで一眠りしようと瞼を閉じた。

……その時、

「……首相？」

またも塔野首相からの着信がビルドフォンに入り、渋々耳元へそれを持っていく。

「はい？」

『まずいことになった。今すぐ出動することは可能か？』

「え？ 一体なにが——」

「うおっ!？」

「わあっ!？」

詳細を尋ねようとしたところで突如として大地が揺れ出し、走行していたバスの進路が狂う。

「……なんっ……だ……あれ……!？」

ふと視界に入った光景に目を奪われる。

蛇行する車両に翻弄されながらも、キリ才は咄嗟に反対側の席へと移り窓の外を覗いた。

「スカイウォールが——!」

「変形してる……!？」

遠方に見える黒い壁。見慣れていたはずの障壁が周囲の建物を巻き込みながら大きく移動している様子が僅かに確認できる。

千歌達もそのことに気がついたのか、窓際に近づいてはその信じられないような光景に目を見開いていた。

「なにが……起こっているんだ……!？」

『……奴だ』

キリオが吐露した疑問に対し、通話越しに塔野首相が口を開く。

『ブラッドスタークに……。パンドラボックスを奪われた』

「なんですって……!?!」

『おそらく奴が箱の力を解放し、壁を操っているのだろう』

徐々に組み上がり、塔のようなシルエットを形成していくスカイウォール。

その景色はさながら——キリオ達に世界の終焉を連想させた。

第57話 パンドラボックスの開錠

「みとねえ———!!しまねえ———!!」

人も、建物も、突然空へと伸びた壁によつて何もかもが吹き飛んでいく。

まだ幼かった少女は周囲から聞こえてくる悲鳴に耳を塞ぎながら、訳も分からず街中を逃げ惑っていた。

「なんなの……これ……」

やがて地鳴りが収まると同時に天を仰ぐ。

神話の1ページでも見ているかのような、とても現実味のない光景が———そこに広がっていた。

「また……同じことが……」

変形していくスカイウォールを視界に入れた千歌がふと呟く。

バスの中から見えるその光景は5年前と同じ…… “スカイウォールの惨劇”、その再来と表現する他ないものだった。

「くそっ……！氷室、千歌達を頼む！万丈——は故障中だったか。行くぞ猿渡!!」

「ああ!!」

「あ……！ちよつと!?!」

停車したバスの窓から飛び降りたキリオ、タクミの2人が瞬時にドライバーを装着し、目標である壁を睨みながら変身を遂げる。

「変身!!」

《鋼のムーンサルト!ラビットタンク!!》

《ロボットイングリッド!ブラア!!》

タクミはヘリコプターフルボトルをツインブレイカーに装填しプロペラを形成、キリオはビルドフォンをバイク形態へとチェンジさせそれに跨る。

「待て、俺も——!!」

「うおっ……!」

発進しようとアクセルを捻るキリオ。その直後にリュウヤが強引に同行しようと背後へと飛び移ってきた。

「お前な……!」

「葛城があゝの壁を操ってるんだろ!? だったら俺も一緒に行く!……頼むキリオ! 今度こそ……あいつの目を覚まさせてやりてえんだ!!」

必死にそう弁明するリュウヤを見て、キリオは「相変わらずだな」と小さくため息をついた。

「万丈くん、あの……!」

バスから身を乗り出し、詰まるような調子で何かを伝えようとするミカ。

リュウヤはヘルメットを被りつつ、彼女に対して微かに笑みを見せると安心させるように言った。

「氷室は高海達を守ってやってくれ。……大丈夫だ、葛城は絶対に……俺が連れ戻してみせるから」

「——行くぞ!!」

リュウヤが言い終わると同時にマシンビルダーの車輪が高速回転。瞬く間にバスか

ら離れると猛スピードでスカイウォールのある方向へと走り去っていった。

残された少女達は再び黒い壁へと目を移し、改めてその不気味な外観に小さく身体を震わせるのだった。

「……梨子ちゃん？」

不意に隣に立っていた梨子へ視線を流した千歌が口を開けたまま硬直する。

彼女の瞳は——ぼんやりとした翡翠の輝きを帯びていた。

●●●

あちこちで飛び交う人々の悲鳴と騒音。

「ハハッ……！」

形成されつつあるタワー付近で指揮棒を振るうかのように舞っているスタークには、それらがオーケストラのように調和のとれた美しい音色に思えた。

「フハハハハ……っ！ハハハハハハ!!ブラボォー!!」

芸術品を褒め称えるように両手を掲げる。

混乱し散り散りになっていく人々を背景にして行われたその仕草は、奴だけが別世界にいるかのような錯覚を覚えさせた。

「葛城ツ!!」

「んん……?」

背後から投げられた声に反応し、スタークは抱えていたパンドラボックスを地面に置きつつ身を翻す。

並び立つビルドとグリス、そして1人の少年を見やり、奴は大げさに腕を広げては言った。

「おおつと……これはこれは仮面ライダー諸君。お早い到着だ」

「お前……スカイウォールに何をした?」

身構えながら尋ねてくるキリオと視線を交わし、スタークは静かに口を開く。

「手元にあつたボトルとパネルを使って、パンドラボックスの力をちよつとばかり解き放つただけさ。……ま、これじゃあ星を滅ぼすには足りないがな」

中途半端な段階で組み上げられたタワーを指しながら得意げに語るスタークに対し、キリオ達の疑問は増えるばかりだった。

以前パンドラボックスの研究をしていた際に箱が二重構造であることはキリオ自身

もわかっていたが……スタークはそれをどこで知った？

「……その赤と青のパネルは……」

「赤いパネルは西都から、青いのは北都から頂戴したものだ。……あとはお前らが持つパネルとボトルが揃えば塔は完成する」

元々箱を保管していた東都でなければ知り得ないはずの情報を、スタークは最初からわかっていたかのように言ったのだ。

赤と青、各2枚。

奴が抱えている1枚と、足元に置かれたパンドラボックスにはめられた3枚、計4枚のパネル。おそらく戦争が起こった際の混乱に乗じて奪い去ったものだろう。

……いや、それよりも——

「星を滅ぼす……？ どういうことだよそれ……！ 説明しろよ葛城!!」

今にも飛びかかりそうな勢いで前へと出たりユウヤが困惑と怒りの混ざった表情で問う。

「言葉通りの意味だよ。……地球も火星と同じ運命を辿る、それだけだ」

「ああ……？」

怪訝な顔でスタークのマスクの下を見据えたりユウヤは、苦しそうな声音で奴に語りかけた。

「もう戦争は終わったんだ……！それなのに……これ以上、なにをやるうってんだよ……!?」

バスの中で見た少女の涙を思い出し、彼は拳を強く握りながら続ける。

「氷室も、高海達も……みんな全部元通りになることを願ってる。前みたいに楽しく……笑い合いながらスクールアイドルができる日々を心の底から望んでるんだ……！だから……わけわかんねえこと口走ってないで、お前も——！」

「くだらねえ」

「……は？」

「くだらねえって言ってるんだよ。お前らが言うスクールアイドルってもんは……まさに1人じゃ何もできない人間共が好みそうな文化だ」

リュウヤの言葉を遮り、スタークは低くそう言い放つ。

「前にも言っただろう、スクールアイドルはオレにとって破壊のための手段でしかない。

……オレの求めるものは純粋な力だけだ、勘違いしてもらっては困る」

「お前……なんで……！どうしてだよッ!!」

「……！万丈よせ——！！」

キリオの制止を振り払い、リュウヤはドラゴンフルボトルを片手に駆け出す。

「ふっ……」

予想通りだとも言うかのように小さく笑ったスタークがパンドラボックスを踏みつけた直後、

「なっ……!!？」

箱から一直線に伸びた熱線がリュウヤの身体に直撃し、横倒れになった彼はその場で意識を失ってしまった。

「万丈!!」

「スタークでめえ……!」

走り出したグリスがツインブレイカーを構えながら奴へと接近。素早く奴へ打撃を繰り出すが、その全てが難なくいなされてしまう。

「万丈………万丈ッ!!」

グリスとスタークの戦闘を尻目に、キリオはすぐさまその場から駆ける。

リュウヤの意識を取り戻そうと呼びかけるが、いくら叫んでもピクリとも動かない彼に狼狽の汗をにじませた。

「……？」

ふと倒れ伏した彼から転がり落ちた物が視界の端に映る。

それは周囲の空間が歪むほどの高熱を帯びた——1本の黒いフルボトルだった。

闘牛の如き勢いで放たれるグリスの攻撃を受け流しながら、スタークは自らの余裕をアピールするように饒舌な物言いで伝える。

「ハザードレベル4、4か。ただの人間にしてはかなりのものだが……お前じゃこれ以上の成長は望めない。元々強引にハザードレベルを引き上げていたんだしな」

「それがどうした……！言つとくが俺は……万丈^{あいっ}みたいに情けをかけるつもりはねえぞ……ッ！」

空気を切り裂きながら突き出した打撃が奴の顔面に迫る。
が、しかし。

《ライフルモード！》

「……………!?!」

攻撃が当たる直前、不気味なほど柔軟な動きでグリスの懐に潜り込んだスタークは流れるような手つきで銃と剣を連結させ、その銃口を半透明の装甲へと突きつけた。

《スチームショット！コブラ!!》

赤いオーラをまとった毒々しいエネルギー弾がゼロ距離で炸裂。

「ぐあああああ……………ッ!!」

放物線を描きながら後方へと吹き飛び、そのままキリ才達のいる場所まで転がるとグ

リスのスーツが粒子となって消滅。苦悶に満ちたタクミの表情が露わになった。

「猿渡……！——くそっ!!」

ただ一人動ける者となったキリオは前方に立つスタークを捉え、じりじりと距離を詰めていく。

型落ちのシステムでスクラッシュドライバーを装備したタクミを容易くあしらうとは……。

間違いない、スタークはトランスチームシステムとは別に、何かしらの“力”を備えている。

（まさか本当に……超能力とかいうやつなのか……!?）

奴がどれだけの實力を持っているのか未だわからない以上、全力でかかる以外の手はない。

ハザードトリガーを取り出し、そのスイッチに指を乗せたその時——

「きゃあ!?!」

唐突な光と共に姿を現した少女達に驚愕する。

「はっ……!？」

あまりに突然な出来事に思わず標的から意識を逸らしてしまう。

黄金色の輝きをまといながらその場に瞬間移動してきたのは……バスに残っていたはずの千歌達だった。

バングルの巻かれた左腕を掲げた梨子が先頭に立ち——微かにその口元を動かす。

「——エボルト」

「んん……?——ぐう!？」

彼女が佇んでいたスタークに向けて地面が抉られるほどに強烈な衝撃波を放つ。

奴が吹き飛んだ隙を狙い再度バングルが発光。今度はキリオ、リュウヤ、タクミを巻き込みながらその場から姿を消失させた。

「ははっ……きゃはははは……っ!!」

災害じみた爪痕の上に少女が横たわる。

ブラッドスタークの外装が解除され、小柄な身体で仰向けになりながら、少女――
葛城ユイは掠れた笑い声を上げた。

「……………面白くなってきた」

●●●

「うおおおっ!」

までも放り投げられるようにして街道にワープ。

打ちつけた腰をさすりながら周囲を確認してみれば、そこには見覚えのある風景が広がっていた。

「(ハハ)は……」

「千歌ちゃんの家……だね」

十千万旅館。高海家が経営している宿がすぐ目の前にあったのだ。

わずか数秒の間で起きた突然の事態に混乱しつつも、キリオは自分達をここへ運んだ人物であろう女性へと顔を向ける。

「……ベルナージュだな？」

1人静かに立っていた梨子——もとい火星の王妃に全員の視線が集まる。

彼女は口を開く前に、旅館の入口へ向かおうと音も立てずに両足を動かし始めた。

「えっと……ベルナージュ……さん？」

黙り込んだまま敷地内へ踏み入れたベルナージュの背中に千歌が呼びかける。

彼女は威厳に満ちた眼をキリオ達に向け、依然冷たい口調で言った。

「ワタシに残された時間は多くない。……これからお前達に、エボルトに関する情報を可能な限り教授しよう」

「そのエボルトっての……さっきも言ってたよな？誰かの名前か？」

そう問いかけてきたキリオに対し、ベルナージュはなぜか疑念を含んだ瞳を注いだ。
数秒の沈黙の後——彼女は長髪を軽くなびかせながら言い放つ。

「エボルトは星々を喰らうことで自らの糧とする生命体。……お前達が“スターク”と呼んでいる者の、真の正体だ」

第58話 星狩り族エボルト

「先ほど、確かにパネルがこちらに届きました」

『了解した、奴の行方はこちらでも探ろう。君達は引き続き警戒態勢を維持してくれ』

「はい」

首相との通話を切り、キリオは傍らに置いてある2枚の緑色のパネルを見やる。

片方は以前からキリオが所有していたもの、そしてもう片方はほんの数分前に首相官邸から送られてきたものだ。

スタークがパネルを狙っていると判明した以上、国の長がいる場所に保管しておくわけにもいかないということでこちらに白羽の矢が立った。

パンドラボックスが容易に奪われたことも考えれば政府が備えている戦力だけでは守りきれないのも事実。ならば仮面ライダー達が集結しているキリオの研究室で管理してほしい、とのことだった。

「さて」

ビルドフオンを上着のポケットへ突っ込み、ベルナージュ 梨子を囲んで座っていた千歌達の輪に戻っていく。

「聞かせてくれベルナージュ。……エボルトってのは何者なんだ？」

キリオが椅子に腰掛けつつ投げかけた質問に、耳を傾けていた千歌達も息を呑む。

左から順に月、曜、千歌、キリオ、リュウヤ、タクミ、ミカ、理亞、聖良。各々の顔をうかがった後、ベルナージュは物語を語り聞かせるかのような口調で静かに切り出した。

「——エボルトはこの地球ではまだ確認されていない惑星、『ブラッド星』から来訪した生命体。奴は我々の故郷、お前達の言うところの『火星』を……たった1体で滅ぼした」

「火星を……滅ぼした……!？」

「……って、ユイちゃんの正体はそのブラッド星人ってこと!？」

「そ、そんなわけないよ……! だってユイちゃんは……小さい頃から、ずっとわたしと——」

驚愕するキリオ達を尻目に、遠い場所を見つめるような眼差しで火星の王妃は続ける。

「あの小娘は地球人だ。……ただ、エボルトに肉体を乗っ取られたことでその意識は奥

底に沈められている。ちょうど今の梨子のようにな」

「憑依されてるってわけか……」

つまり葛城ユイ本来の人格は別にあり……これまでブラッドスタークとして暗躍し、戦争を引き起こそうとしていたのは「エボルト」という地球外生命体の意思というわけだ。

それだけじゃない。——難波重工を利用して多くのスマツシュを生み出したのも、スクラツシユドライバーを作ったのも全て奴の仕業ということになる。

「そうか、じゃあ……今までの振る舞いは葛城自身じゃなくて、そのエボルトって野郎が……！……よかったじゃねえか氷室!!」

「確かに……様子がおかしくなる前のユイちゃんって、科学は毎回赤点とつちやうくらい苦手だったのに……急に色んな発明を思いつくようになって——」

次々と囁み合っていく記憶の謎に言葉を失うミカ。

同時にこれまでの屈辱と怒りがこみ上げ、彼女は強く口を結んでは手に力を込める。「エボルトが惑星を滅ぼすには、その星に宿る「エレメント」を一定数集める必要がある。……そしてそれが揃った時、あの破滅の塔が完成し——何もかもが飲み込まれることになる」

エレメント——とはおそらくフルボトル内の成分を指しているのだろう。

……スターク、もといエボルトが所有していたボトルは、全て自らの力で生成したもののというわけか。

「……最後に残ったワタシはエボルトの肉体と精神を切り離すことに成功したが、奴は『あの箱』とともにこの星へ逃亡。ワタシ自身も大半の力を使い果たし、このバングルに精神を封じ込めることでなんとかその追跡を試みたのだが——」

「地球へ来る頃には自力で行動することも叶わないほどに弱ってしまった……というところか」

目を合わせることなくベルナージュが頷く。

顎に手を添え、思考を巡らせていたキリオはゆっくりと目を瞑った。

ベルナージュから逃げてきたエボルトが辿り着き、そして次の標的として選んだのが……この惑星、地球。それは考えるまでもなく5年前の出来事だろう。

その直後にパンドラボックスが飛来し……推測の域を出ないが、エレメントを集めることなく力を解放した影響から不完全な状態であるスカイウォールが形成。惨劇を引き起こすこととなった。

——これで、全てが繋がった。

「エボルトが完全に力を取り戻すことだけは阻止しなくてはならない。……奴を止めることはワタシの悲願でもある。そのためにお前達にはこれからも働いてもらうぞ」

「なんで命令口調なんだ……？」

「やっぱり王妃様なんだね……」

普段の梨子が絶対に見せないような冷たい表情のまま高圧的な態度をとるベルナージュに苦笑する。

「……もうひとついいか？」

キリオは顔を上げ、幻想的に浮かんでいる翡翠色の瞳と視線を交わした。

「あんた、俺の過去を知ってるような口ぶりをしていたな。5年前、スカイウォールが現れる以前のことにについてだ。……なにか知ってるなら全部教えてくれ。あんたは過去に俺と会ったことがあるのか？」

「……私からもお願ひします！」

そう言つて隣に座つていた千歌が頭を下げたのを一瞥した後、キリオは改めて表情を引き締める。

……これまでなんの手がかりもなかった自らの記憶——その答えがわかるかもしれない。

「確かに……ワタシはお前を知っている」

「……じゃあ……!」

「だが」

ベルナージュは期待に満ちた眼差しから逃れるように目を伏せると、ほんの少し声の調子を下げながら言った。

「それを明かすことはできない」

「……え?」

直後に彼女はキリオの横で腕を組んでいたリユウヤに目を向け、再度口を開いた。

「万丈リユウヤ。——お前が、希望になる」

「へ?」

「ちよつ……!?!」

その言葉を最後にベルナージュの瞳は閉じられ、倒れかけた梨子の身体を月と曜が受け止める。

「キリオくん……」

気遣うような視線が千歌から注がれる。

記憶の鍵となる回答を聞き出すことが叶わなかったキリオはその場で膝を折り、ベルナージュが残した謎の意味を探る余裕もなかった頭のなかに反響する言葉に目を泳がせていた。

——ワタシはお前を知っている。



「じゃあ、私達はこれで」

「また今度ね」

「うん、じゃあね2人共」

意識を失った梨子を家に運んだ後、曜と月とは玄関先で別れた。

自宅へ戻り、階段を駆け上がったのは廊下を進んだ先にある部屋へとお邪魔する。

「なんだかすっかり賑やかな感じになりましたね」

「あはは、そうですね」

敷かれた布団の上に正座をした浴衣姿の聖良が何気なく口を開く。

現在理亞と聖良が匿われている十千万の一室。そこに訪れた千歌を加えて、3人はこれまで起こってきたことを振り返るようにぽつぽつと言葉を繋いでいった。

「この短期間で、本当に色々なことができましたよね」

「……いつの間にか戦争に巻き込まれて、それでもスクールアイドルを守るために頑張って、ライブもやって……」

「——やっと、全部終わったと思ったのにな」

不意に理亞がそうこぼし、千歌と聖良は曇った表情で口を閉じた。

「地球外生命体かあ……」

「まさか、宇宙規模の話になるなんて思ってもみませんでしたね」

「……ですね」

千歌が天井を見上げた先にあった明かりに目を細める。

ブラッド族——通称“星狩り族”とも呼ばれるそれは、多くの惑星を転々と渡り歩いてきた“生きている災害”だ。

戦争が終わった矢先、休む暇もなくそんなものが現れるなんて。

直後、ほとんど無音に感じるほど静かな物音とともに部屋の襖が開かれた。

「えっと……失礼……します」

「あ、ミカちゃん」

千歌達と同じく十千万の浴衣に身を包んだミカが恐る恐る中へと歩み寄ってくる。

「ほんとにいいのかな……わたし、ここにいて……」

「なに言ってるのさ。美渡姉も志満姉も歓迎してくれたじゃない」

「タクミだって結局はここでお世話になることになったわけだしね」

今は地下にいるであろう男性陣を思い浮かべる。

少し前まで互いに拳を交えていた間柄だったが、今は共に西都との代表戦を勝ち抜いてきた仲だ。……なので無駄な争いが展開されるようなことはないと思いたい。

「さて、こんな大変な時だからこそ気分盛り上げていかなくちやね」

「……私、もう眠いんだけど」

「ダメだよ理亞ちゃん、夜はこれからなんだから。さ、今日はなに話そっか」

枕を抱えながら上機嫌な様子で皆に語りかける千歌。

その片隅で……影のかかった表情を浮かべている者が1人。

「……………エボルト」

誰にも聞こえない声量で、ミカは怨敵の名を口にした。

「おいキリオ、寝なくていいのか？お前もだいぶ疲れてるだろ」

机に向かって黙々と何かの作業に励んでいた青年にリユウヤがそう呼びかける。

付近の長椅子の上にはこちらに背中を向けながら寝息を立てているタクミの姿。自分も彼と同じように今にも倒れそうなほどの眠気に苛まれている。

そしてそれはキリオだって例外じゃないはずだ。

「もうすぐひと段落つくから気にするな」

「そうか。……ていうか、今度はなに作ってやがるんだ？」

「お前の——クローズの強化アイテムを設計してやってんだよ」

「えっ!?!マジで!?!」

思わぬサプライズについて大声を上げてしまう。

「ちよつと見せろよ……!」

夢の中にいるはずのタクミが「うるせえ」と寝言をこぼしたのを聞き、リュウヤは一段階声量を抑えつつキリオの方へと駆け寄った。

何やらナツクル状のアイテムの設計図が描かれた紙を睨みながらキーボードを叩くキリオ。

やがて彼は悩むように唸ると、椅子を回転させてリュウヤに一声言い放った。

「お前、気をつけた方がいいぞ」

「は？」

前触れもなく投げかけられた言葉に間の抜けた返事をしてしまう。

『『エボルトが完全に力を取り戻すことだけは阻止しなくてはならない』……つて、ベルナージュが言ってただろ？』

「え？ああ……それがどうかしたのか？」

「エボルトは葛城に憑依している——つまり寄生能力を持つているわけだ。それを踏まえた上でこれまでの奴の行動を思い返してみろ」

「エボルトの行動……？」

リュウヤの脳内にクエスチョンマークが乱舞するのを察知し、キリオは引きつりながらも正解を伝えた。

「あいつがスクールアイドルを崩壊させてまで引き起こしたのはなんだ？」

「それは……戦争？」

「そうだ。……その理由は？」

「そう言われてみれば……詳しいことは全然知らねえな」

「答えはこのなかにある」

——チン！と電子レンジのような音が響き渡り、反射的にそちらへと顔を向ける。

フルボトル浄化装置に取り付けられていた小窓が開き、その中には設計図に記されていたものと同じ形状のアイテムが押し込まれていた。

キリオはそれを取り出し、冷ますように息を吹きかけながら胸元まで掲げてみせる。

「“クローズマグマナツクル”。……エボルトが生み出したボトルの力を最大限に引き出せるように設計したものだ」

「エボルトが……生み出した……？」

「ほれ」

キリオが顎で指し示した先を見てみれば、卓上に置かれた1本のフルボトルが視界に入った。

黒曜石を思わせる艶がかった漆黒に龍の意匠が刻まれているのがわかる。

「これ……もしかして焦げたスクラッシュゼリーから出てきたのか!？」

「ああ、お前が受けたあの熱線は……………おそらくパンドラボックスのエネルギーをそいつに吸収させるのが目的だったんだ。お前をさらに強化するためにな」

「でもどうしてだ…………？ エボルトは俺を強くして何がしたいって言うんだよ？」

「そこでさっきの話に戻る。お前、気をつけた方がいいぞ」

「だからなにをだよ！」

焦らすような口調で語ったキリオは、一度間を置いてから再度本題に入った。

「エボルトは…………お前の身体を乗っ取るつもりかもしれない」

「…………は？」

予想もしていなかった言葉にリユウヤは絶句した。

呆然と立ち尽くす彼に、キリオはどこか淡淡とした調子で続けていく。

「さっきも説明した通り、クローズマグマナツクルはその黒いボトル…………ドラゴンマ
グマフルボトル」に合わせて作つたものだ。——要求されるハザードレベルは5」

「ハザードレベル…………5…………」

「万丈の異常なハザードレベルの成長速度……………そこに目をつけられたんだろう。代表戦での奴との戦いを経て、お前は俺や猿渡、そして氷室さえも超える域に達していたってわけだ」

「まさかエボルトはそのために……より強い身体を手に入れるために戦争を仕掛けたっていうのか……!？」

「その可能性が高い」

エボルトが戦争を引き起こした理由……それは、奴自身の力を取り戻すことに大きく関係していたんだ。

ビルド。

クローズ。

グリス。

ローグ。

三国のなかに配置した仮面ライダー達。それらを互いに戦わせ、成長させることで——エボルトは新たな肉体となる人物を見出そうとしていたのだ。

「そして最終的に目標値に到達したのが………万丈、お前だったんだ」

「……っ……」

突然突きつけられた情報に、リュウヤは青い表情を浮かべたじろいだ。

「……ともかくだ。お前が今以上に強くなるのは頼もしいことに変わりは無いが、同時にエボルトに狙われる危険性も——」

少し脅かし過ぎてしまったか、と最後に言葉を添えようとしたところで遮るように着

信音が聞こえてくる。

「……なんだこんな時間に……」

机の上に放置してあったビルドフォンを手に取り、誰からの電話なのかも確認しないままそれを耳に当てた。

「もしもし?」

直後、キリオは向こう側で発せられた声に目を剥くこととなった。

『夜分遅くにすみません……! ちょっと戦兎先生とお話がしたくて……我慢できずにかけちゃいました!』

それは葛城ユイ——いや、彼女の身体に憑依した地球外生命体、エボルトからのものだっただ。

第59話 究極のドライバー

「……エボルト」

電話を通じて少女の声を演出する怪物に向けて抑えきれない怒りの感情をぶつける。

『あれ？もう知ってるんですか？……ああ、火星の王妃から聞いたんですね。——』
『なら話は早い』

少女の声に低い雑音が混ざる。

『お察しの通り、オレは葛城ユイの身体を支配している地球外生命体だ。これから言う要求にお前らが従わなかった場合、オレは迷うことなくこいつを消すことができる』

声色を変えたエボルトは単刀直入にそう切り出した。

寄生能力を持つエボルトにとっては替えの効くパーツでしかないのだろう。

……ユイの命は奴が握っている。要は人質というわけだ。

「お前の望みはなんだ？」

『ようし、いい子だ。……24時間以内に指定された場所へ“エボルトドライバー”を持ってこい。用意できなかった場合、あるいは指定時刻を過ぎた場合、葛城ユイを殺す』

「エボルドライバー……?」

『パンドラボックスの力を最大限に引き出すことができるドライバーだ。……お前が保管しているんだろう?』

その単語を耳にした途端、頭のだ真ん中に針を通されたかのような鋭い痛みが走った。

エボルドライバー……その名前に聞き覚えはない。だがそれがどういう代物なのか——キリオにはわかっていた。

(まさか……)

フルボトルの浄化装置。その稼働を可能にするために大本の部品に組み込まれているとあるパーツが脳裏によぎる。

スカイウォールの惨劇直後、キリオが海岸で目覚めた時に抱えていた物………ビルドドライバーの原型となったアイテム。

「どうしてお前が……アレを知っているんだ……!?!」

荒くなつた息を抑えるように胸元に手を当てる。

『どうしてもなにも……あのベルトは元々オレの物だったからな』

「お前は……っ!……お前も、俺の過去を……知っているって言うのか……!?!」

『さあて、どうだろうな?——場所はあの塔、パンドラタワーの麓に24時間以内だ、忘

れるなよ?』

「おい待て——!」

『チャオ〜』

おちやらけた挨拶を最後に通話が途切れる。

「……キリオ?」

ビルドフォンを握った手を力なく下ろし、虚ろな双眸を浮かべているキリオに対して、そばに佇んでいたリユウヤは不安げな眼差しを注ぐ。

今にも嘔吐するのではないかと思うほどに顔色の悪くなった彼は、背後を振り返り部屋奥の奥に設置された浄化装置を見つめた。

「24時間以内……」

「ああ、それを過ぎれば葛城の命はない」

翌朝。

部屋にリュウヤ、タクミ、ミカ……そして千歌達全員が集まったことを確認した後、キリオは片手に収められたアイテムをテーブルの上に置いた。

形状の似ているビルドドライバーとは逆の赤、青、金、と派手な色で統一されたアイテム。

昨晚浄化装置から取り出し、分解されていたパーツを組み上げ直したエボルドライバーの現物だ。

「ていうか……地球外生命体って……」

「一気にスケールが大きくなりましたわね……」

「驚く気持ちもわかるが、実際に奴は——エボルトは存在する」

ユイの置かれている状況、そしてブラッドスタークの正体……昨日ベルナージュの話を聞けずにいたメンバーにも全ての事情を伝えた。

「これからこのエボルドライバーを持つてあの塔、パンドラタワーに向かう」

「それって……そのエボルトって奴に渡しちゃうってこと!？」

善子の疑問は皆が思っていることだった。

ベルナージユはエボルトが力を取り戻すことを阻止しろと言っていた。……エボルトドライバーを渡すということは、その意思に反するのと同義。

だが従わなければ一人の人間の命が失われることになる。

「いや、奴に渡すことはない。エボルトが行動を起こす前に政府の軍と連携して奴を拘束する手筈だ」

……正直現状の作戦ではどうしても不安が拭いきれないが、他に方法がないのも事実。

ユイの身を守るためにも、まずは向こうの要求に従う素振りくらいは見せなくてはならない。

「……ねえ梨子ちゃん、何か聞こえてきたりしないの？」

ふと千歌が横に座っていた梨子にそう尋ねる。

確かに彼女のなかにいる火星の王妃のアドバイスが頂けるのなら頼もしいのだが

……。

「……………ううん、なにも。ごめんなさい、役に立てなくて……」

「そ、そんな！梨子ちゃんが謝る必要なんてないよ！」

しばらく目を閉じた後で首を横に振った梨子に慌てて千歌が言葉を添えた。

どうやら彼女自身が打ち明けていた通り、ベルナージュに残された力は本来のそれよりも大幅に落ちていたのだらう。この先表に出てこれる時間はあと数回か………もしかすると既に力を使い果たして消滅している可能性だってあるんだ。

不確定要素に頼るわけにはいかない。……自分達の力だけで、なんとかしなければ。

「——うっ………!」

「え?………キリオくん!」

突然その場でバランスを崩したキリオが膝をつく。

……頭が割れるように痛い。脳の奥底が無理やり掘り返されるような………不快感と共に襲ってくる凄まじい痛みだ。

「おい、大丈夫なのかよ………?」

「………ああ」

駆け寄ってきたリュウヤに肩を支えられつつ弱々しい声でそう返す。

「やっぱり疲れが溜まってるんじゃないか………? 奴のところには俺が行くから、キリオは………」

「バカ、昨日の話をもう忘れたか? このタイミングでエボルトとお前を引き合わせるの
は危険なんだよ」

前髪を掻き上げながら視線を横流しにする。

「万丈はここで待機だ。何かあった時のためにこいつらのそばにいてやってくれ」

目で千歌達を示しながらリユウヤに用件を振る。

……自分の読み通りならば次にエボルトに蝕まれるのは彼だ。のこのこ奴の眼前に差し出すような真似はできない。

「……政府側の準備は整ったみたいだ」

ちようど届いたメールを確認した後、キリオは改めて皆に目配せをする。

彼は脇に立っていたタクミ、ミカとそれぞれ顔を見合わせた後——静まり返った

部屋に、微弱な震えを含んだ声を響かせた。

「行くぞ」



「……それにしても濃密な1年だったなあ、もうすぐお前の身体ともおさらばだ。……お前のおかげで、オレは多くの“楽しみ”を得ることができた」

塔の麓——更地と化した大地の真ん中でパンドラボックスを椅子代わりにしながら、

少女は自らの両手に目を落とす。

「スクールアイドルつてのも視点を覚えてみれば暇つぶしくらいにはなった。ステージ上で計算された動きをするだけで人間どもが予想通りに馬鹿騒ぎして持ち上げてくれる様は……これ以上ないほどに滑稽で、上から見てとても楽しめたよ」

怪物はそう言つて笑いをこぼすと、ひらひらりとスカートを翻しながらその場でステップを踏んでみせる。

「……だが所詮はそれだけ、風前の灯に過ぎない。憧れや夢、時が経てば自然消滅する一瞬の輝きに意味を見出そうとするなんて……つくづく人間つてのは愚かな生き物だと———そう思わないか？」

怪物—— エボルトは地に向けていた少女の顔を上げると、前方からやってくる3人の男女に向かつてそう問いかけた。

歩み寄つてきた人間達の1人である青年は手に持っていた“ドライバー”をエボルトに見えるよう高く掲げると、細めた眼で奴を捉える。

「これがお前の求める物か？」

「グッジョブ!!さすがです戦兔先生!!バッチリ持ってきてくれましたね、あたしの大事な大事なエボルトドライバー!!」

「エボルト……ッ!!」

「おいつ……!」

「んん?」

今にも飛びかかりそうな形相で奴を睨みつけるミカを隣に立っていたタクミが制止する。

それを見たエボルトは悪魔の如き微笑を浮かべ、彼女に対してわざとらしく上目遣いの表情を見せてきた。

「あれれ、どうしたのみーちゃん……?なんで怒ってるの?そんな顔しないで、みーちゃんは笑った方が何倍も素敵なんだからさ」

「……ツ!お、まええ……つ!!」

「待て氷室!落ち着けて……!」

「ユイちゃんを返せ……!その顔で、その声で……!わたしの前に立つなア!!」

「ハッハハハハハハ!!怖いねえ、これまでオレに騙されてたのがそんなにイラついたか?だがお前にも非はあるんだぜミカ。お前がユイを難波に差し出したりしなければ、こいつはオレに取り憑かれることもなかったんだからな」

エボルトの言葉にミカは大きく目を見開いた。

そして全てを理解する。以前ユイが受けていた人体実験………彼女が打たれた“血清”とやらの正体が、エボルトそのものだったことを。

「ぐ……うう……う……!!」

「ここで涙……つと、本当に面白いなあお前は。オレが想像した通りのことばかりしてくれる。これまで見てきた人間達のなかでもトップクラスにお気に入りで、ハハハ!!」

「——黙れ」

高笑いを断ち切るように青年が言い放つ。

「んん……?」

「喋るな、笑うな、口を閉じろ。これ以上、お前の声を聞かせるな」

まるで笑っていない瞳をエボルトに向け、キリオは静かな怒りを露わにする。

「お前の目的はこつちだろう」

「……クハハ、そうだったな、からかうためにお前らと呼んだんじゃない。さつさと用を済ませるとするか」

ユイの身体を動かし、エボルトは片腕を差し出してはエボルドライバーを投げ渡すよう手招きをして伝えてくる。

「……………」

キリオは手首のスナップを効かせながら握っていたそれを手放し——奴の頭上めがけて投げ出した。

「——ッ!!」

刹那、背後に隠していたガンモード状態のドリルクラッシャーを引き抜き、宙を移動していたエボルドライバーを射撃。軌道を逸らす。

次に流れるような動きでブレードモードへとチェンジし、同時に高速回転させた刃を地面へと突き立て大量の砂を巻き上げた。

「今だ!!」

キリオの合図と共にタクミとミカが駆け出し、煙幕を突き破りながらエボルトへと直行。

《シンググル!》

「……!」

「そらっ!」

「ごめんユイちゃん!」

タクミが生身のまま取り出したツインブレイカーにローズフルボトルを装填。瞬時に荊棘を伸ばして拘束した後、ミカが足を払って奴を地に伏せる。

たった数秒間の連携。このわずかな時間でエボルトは一時的に自由を奪われることとなった。

「……なんのつもりだ？」

「おい氷室、口の方を忘れてるぞ」

「あ……そうでした」

ミカが横たわるエボルトのもとへ歩み寄り、自害されるのを防ぐ意味も込めて猿轡で口元を封じた。

「……………いいタイミングだ」

全方向から近づいてくる統率された足音に気がつき、キリオは不敵に笑う。

いつの間にか周囲を取り囲んでいたガーディアンと兵士達の存在を確認した後、彼は改めて諸悪の根源である怪物を見下ろした。

「チェックメイトだ。これからお前は政府の研究所に輸送され……葛城の身体から切り離す方法が判明するまで徹底的に調べ上げられる。当然外界とは遮断された環境で、だ」

他の人間に憑依しないよう細心の注意を払って行われる“治療”だ。確実にユイを救うために、どれだけの時間がかかっても完遂してみせる。

「では、手筈通りに」

「了解」

こちらに視線を注いでくる少女の顔から目を逸らしつつ、キリオは一言指示を出した。

やってきたガーディアン達にエボルトの身柄を預け、車両へと運ばれていく奴の姿を見つめる。

「やったな戦兔先生」

「ああ」

どこか含みのある言い方で肩に手を置いてくるタクミに返答した後、肩を落としたミカへと視線を移す。

「……ユイちゃん、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「心配するな、研究には俺も加わる予定だしな。葛城は必ず……俺が戻してみせるさ」
胸を撫で下ろすミカを見てキリオも小さく口角を上げた。

……さて、あとはエボルトドライバーの回収だ。

「……………」

転がっていたそれをおもむろに拾い上げる。

天体を思わせるデザインを眺めながら、キリオは結局はつきりしないまま話が終わっ

た自らの過去について思考を巡らせていた。

—— 思い出せ。

「……………え？」

ピリ、と手のひらに伝わる電撃のような感覚。

「ぐっ……………あ……………！」

「……………？戦兎先生？」

「どうかしたのか？」

突然頭部を抑えながら苦しみだしたキリオに気づき、去ろうとしていたタクミとミカが慌てて踵を返し舞い戻ってくる。

「あ……………っ……………！ああああ……………！！」

「あの、先生？どこか痛いんですか……………？」

「ちよつとすみません！こっちに担架を！」

膝を折ったキリオをミカが介抱しつつ、咄嗟にそばにいた兵士に向けてタクミが救護

を呼びかけた。

熱い。目の奥が焼けるように熱い。

思考回路がショートしたかのような高熱を帯びているのがわかる。

知らないはずの知識が………滝のように流れてくる。

「あ——」

瞬間、目の前が漂白された。

「きゃあつ!？」

「うおつ!？」

直後、タクミとミカは想定外の事態に驚愕する暇もなく吹き飛ばされてしまった。

「あ……!？」

キリオから発せられた紅の雷撃が辺り一面を焼き尽くす。

「なん……だ……これ……ッ!？」

何が起こっているのかはキリオ本人ですら理解することはできなかった。

自分の身体から発生している無数の雷が周囲に衝撃と爆風を撒き散らす光景を、彼はただ呆然と眺めることしかできなかった。

「うわああああッ!!」

「なんだ!？」

不意を突かれた兵士達は散り散りになり、ガーディアン達は軒並み雷撃によつて塵同然になるまでに貫かれていった。

「……ッ!」

その時、キリオは無意識に放り投げてしまったであろうエボルドライバーが数メートル先に転がっているのを視認。

神経からズタズタにされるような痛みに耐えながら地面を這い、それを掴み取って――

「ぎ・ん・ね・ん」

「がつ……!」

伸ばした手を何者かに踏みつけられ、キリオの表情に苦悶が宿る。

「エボ……ルト……!」

「ふう……。ちよつぴりビックリはしたけど、この程度の拘束なら数秒もあれば毒で溶かせるんだよね」

もはや原型を留めていない荊棘を振り払いながら奴はそう語る。

「俺に……何をした……!？」

「ええ？ なにもしてませんけど？」

周りの惨状を見渡し、エボルトは可笑しくて仕方がないとも言おうように気味の悪い笑みをにじませた。

「……ぷふっ！ あはっ……あはははははは!! キヤハハハハハッ!!——バツカみてえ!!」

「っ……」

「はあーあ……まさかここまで落ちぶれていたとはな。この星の大気に頭でもやられたのか?……人間がどんなに知恵を絞っても、絶対的な力の前では何もかも無意味になるんだよ」

「……！ 待て——!」

エボルトドライバーを拾い上げ、まじまじと観察した後——エボルトはそれを自らの腰に装着した。

《エボルトドライバー!》

「ふむ……確かに本物のようだな」

奴はブレザーのポケットから見たこともないボトルを2本取り出し、そのキャップ部分を回転させる。

「ついに……戻ってきた……ッ！」

「そのボトルは……!?!」

キリオの顔が一層痛みに歪んでいく。

エボルトはそれを小慣れた手つきでドライバーに装填し————ゆつくりと両腕を胸の前で交差させた。

《コブラ!》

《ライダーシステム!》

《エボリューション!!》

エボルトがレバーを回すと同時にスナッププライドビルダーに酷似したレーンが展開。

奴の身体を取り囲み“スーツ”を形成していく。

《Are you ready?》

「――変身」

扉を開くように交差させた腕を左右へ広げ、現れたスーツを用いて自らの肉体を覆った。

《コブラ！コブラ！エボルコブラ!!》

《フツハハハハハハハハ!!》

仮面にはコブラの意匠。

天球儀や星座盤、宇宙を連想させる装甲に包まれたエボルトは――くぐもった声
音で自らの復活を表明した。

「エボル——フェーズ1」

第60話 俺のマグマがほとぼしる

「エボル……だと……!？」

身に力が入らない。地面に吸いついているかのようだ。

キリオは新たな姿で名乗りを上げたエボルトを見上げ……恐怖、狼狽、焦燥、不快、あらゆる負の感情に苛まれた表情を浮かべた。

「やっとこの段階まで進めたか……。久しぶりの感覚だ」

身体のうちこちを伸ばしながら弾むような口調でそう語るエボルト。

奴が身につけているベルト、エボルドライバーに装填されているのはキリオもその存在すら知ることのなかった未知のボトル。それぞれコブラの頭とピストンを思わせる造形が施されている。

「戦兔先生!!」

「……なんだこいつは……!？」

「んん……?」

爆風で吹き飛ばされたタクミとミカが身を引きずるように駆けつけ、静かに佇んでいたエボルを視認しては咄嗟にドライバーを装着し身構えた。

「まさか……エボルト……!?」

「大正解!——さて、いきなりで悪いが……準備運動がてら付き合っちゃくれねえか?」

「……っ!」

2人は瞬時にスクラッシュゼリーとクラックフルボトルを取り出し、前方に立つ敵を見据えながらドライバーに叩き入れる。

《ロボットゼリー!》

《クロコダイル!》

「変身ツ!!」

《ロボットイングリッド!ブラア!!》

《クロコダイルインローグ!!》

《オーラア!》

同時に現れたビーカー、そこに満たされた成分によって瞬く間に変身を遂げた2人の戦士を捉え、エボルトは余裕に満ちた声で言い放った。

「……かかってこい」

「……………うあああああッ!!」

「お前ら……………待て……………ッ!」

底知れぬ危険をひしひしと感じとっていたキリオが手を伸ばすも、タクミとミカは視界にすら入っていないかのように彼の眼前を通り過ぎていく。

「らああッ!!」

「はあッ!」

그리스 と ロージュ が同時に繰り出した拳。

二方向から迫ってきたその打撃を難なく両の手のひらで受け止めたエボルは、驚異的な腕力を相乗させてそれを払い除けた。

「ガッ……………!」

「猿渡くん!」

バランスを崩した 그리스 の背中に薙ぎ払うような蹴りを叩き込み、またも彼を遠方へと飛ばす。

「エボ……………ルトオ……………!!」

「おっと」

ロージュの放った死角からの攻撃も容易に躲けてみせたエボルは、テレポートじみた速さでその背後へと回り込んだ。

同時にレバーを回し、右足にエネルギーを集束させる。

《Ready go!!》

《エボルテックファイニッシュ!!》

「ふん……!!」

「かは……あ……っ!」

惑星を打ち砕かんばかりの威力が一点に叩き込まれる。

あらゆる攻撃から身を守ることができる防御力を備えたローグの胸部装甲に、一瞬で巨大な亀裂が走るのが見えた。

《チャオ!》

「!」

鼓膜を突き破りそうなほどに鋭い爆発音。

声にならない叫びを上げて大地を抉りながらミカが転倒する。

戦闘が始まって約5秒。戦いの行方は誰の目にも明らかなほどに圧倒的だった。

「やめ……ろ……!」

燃えるような激痛が意識を支配するなか、キリオは必死に戦闘を止めようと腕を伸ばし続ける。

「猿渡タクミ、氷室ミカ……お前らの役目はとうに終えている」

エボルの手中に超新星の如き光が宿り、徐々にその大きさを増していく。

直後、先ほどの爆発で広がっていた煙幕が晴れると共に、変身が解除された状態で動けないでいるタクミとミカがキリオの視界に入った。

「やめろ……っ!!」

「すぐ楽にしてやるよ」

奴が指先を折り前方を指した途端、宙を漂っていた巨大な光弾が一直線に2人のもとへと放たれ――

「や……めえ……ろおおおおおおおおッッ!!!!」

全身に駆け巡る紅の雷電。

それはキリオの身体機能を瞬間的に底上げし――ミサイルさながらの速度を發揮させ、秒もかからずに彼を2人のもとまで到達させてみせた。

《鋼鉄のブルーウォーリア! タンクタンク!!》

《フルボトルバスター!》

大剣の刃を盾代わりにして構える。

現状發揮できる最高の耐久力を駆使し、キリオはタクミとミカの前に壁となつて立ち
はだかった。

「ぐっ…………お…………!!」

隕石に匹敵する衝撃を備えた光弾を受け止めたその時、身体中の骨や筋肉が悲鳴を上げ
るのを感じた。

「ほう…………？」

「が…………あああああああああ!!!」

肩の痛みを無視しながら強引にフルボトルバスターを上へ振り抜く。

両断されたエネルギーの塊は左右に分かれ、タクミとミカの背後で広範囲の爆発を引
き起こした。

「あ…………く…………」

攻撃を防いで安堵するのも束の間。力を使い果たしたのかキリオは脱力するように
倒れ、俯せの状態で気絶してしまう。

「戦兎…………!」

「戦兎先生…………っ!!」

不安定な足取りでタクミとミカが彼のもとへ歩み寄る。

完全に意識を失っているキリオを庇いつつ、ミカは再度エボルに対して鋭利な瞳を突きつけた。

「ま、今日のところはこのくらいにしといてやるよ」

直後、残像を生み出しながら移動した奴は放置してあったパンドラボックスを回収。開いた手を振り、以前と変わらない軽薄な態度でエボルトは言った。

「チャオ〜」

「待っ——!」

ミカが駆け出そうとするも、身体に蓄積されたダメージがそれを許さなかった。再び彼女が膝をついた時にはもう、奴は忽然と姿を消していた。



「キリオ!!」

「キリオくんっ!!」

病室の扉が勢い良く開かれる。

血相を変えてやってきたのは内浦に残っていたリユウヤ、そして千歌達だった。

ベッドの上で眠っているキリオを見るや否や彼らはその近くへ駆け寄り、傍らに座つ

ていたタクミとミカに眼差しでこの経緯を尋ねる。

「エボル……だつて？」

「ああ」

全ての説明を終え、全身に包帯を巻かれたタクミとミカがゆっくりと頷く。

2人も戦闘での負傷が大きいらしく、一挙一動する毎に苦しそうな表情を見せていた。

「……作戦自体は上手く進んだはずだったんだ。だがいきなり戦兔が……わけわかんねえ状況にしちまつて」

「あ？ どういうことだよ？」

「……戦兔先生から、エボルトと同じような力が発現したの」

ミカが口を開いた直後、病室のなかが一層静寂に包まれる。

彼女の発した言葉の内容を理解できる人間はその場にはいなかった。――2人
を除いて。

「彼自身もよくわかっていないようだったけど……とにかく、その力が暴走したせいで隙ができて、エボルドライバーも奪われてしまった」

ミカが続ける話に耳を傾けながらも、リュウヤとタクミは同じ記憶を思い出していた。

東都と北都との戦争……その最初の戦闘での出来事だ。

그리스とクローズチャージの戦いを中断させたキリオの謎の力。おそらくそれと同じ現象が起こったのだろう。

「それからはずっと高熱を出して……目を覚ます気配もない」

どこか申し訳なさそうに語るミカを見た後、千歌はその視線の先にある青年へと目を移した。

「とにかくエボルトはこれまでとは比べものにならないくらい強くなってる。今の俺達じゃ……到底太刀打ちできない」

細々とそう口にするタクミの言葉に打ちのめされるように、皆の顔が重力に引つ張られていく。

通夜のような空気が満ちるなか、千歌は静かにベッドの横でしゃがみ込み、横たわっている青年の手に優しく触れた。

「私、今日はここに泊まろうかな。みんなは先に帰っててよ、お母さん達も心配するだろうし」

「え？」

日が落ちてきた頃、ベッドの隣で椅子に腰掛けていた千歌が小さくそう伝えた。キリオから目を離さないまま言った彼女の意思を察し、曜は仄かに笑って返す。

「……わかった、美渡さん達には私から伝えとくよ」

他のみんなも首を縦に振り、病室の出口を音を立てないようにくぐり抜けていく。

2人きりになった直後、千歌は瞼を閉じながら語りかけるように独り言を口にした。

「……いつもボロボロだね」

ガーゼと包帯にまみれたキリオの顔を見つめる。

「キリオくんがうちに来てからもう5年かあ。そういえばあの頃はみかん皮ごと丸かじりしたり、普通じゃ考えられないことばっかりしてたよね」

まだ髪色がなかった時の青年の横顔を思い出す。

幼児同然の常識のなさに何度驚かされたことか。

いつの間にか天才を自称するような人間になってしまい、今では出会った当初からは想像もできないほどに感情の豊かさを見せているが。

「ときどき何を考えてるのかわからない顔するよね。……どこか遠くを見るような、自分の居場所を探しているような、ぼんやりとした顔に」

人工呼吸器の取り付けられた寝顔に手を伸ばし、指先で彼の頬に触れる。

「キリオくんがスクールアイドル部の顧問になるって言ってくれた時ね、私すっごく嬉しかったんだあ。……だって私、本当はキリオくん、自分以外のことに関してはあんまり興味がないってこと知ってたから」

いつも冷めた顔を浮かべていた青年を思い出す。

彼にとつて「関わりを持った人達」というのは……失くした記憶を埋め合わせるためのパーツでしかないことは、その振る舞いからもなんとなく察することができた。

彼は冷静な振りをしているながらも、いつも必死だった。「部品」を守ることに一生懸命だったんだ。

つまるところそれは……彼自身の心の支えとも言えるものだった。

「……顧問を引き受けてくれたってことはさ……キリオくんが、私達を大切に思ってく

れたってことですよ？……あ、間違ってたらごめんね！」

自分を構成する大事な“パーツ”に、彼はA q o u r sを……そしてスクールアイドルを選んでくれた。

「だから私は信じるよ。キリオくんの過去が、どんなものでも……キリオくんはキリオくんだから」

廊下の壁に体重をかけ、病室の中から聞こえる少女の声に耳を澄ませていた人物が一人。

ベッドで眠る青年に寄り添う千歌の後ろ姿を眺め——少年、万丈リユウヤは強く歯を軋ませた。



「……くそっ！」

拾い上げた石ころを水平線に向かって思い切り振りかぶる。

月明かりに照らされた海に点々とした軌跡が舞い、やがてそれも波に飲み込まれて消

えていった。

「やつぱり……あの時俺も向かっていれば……!」

リュウヤは浜の上に尻餅をついた後、乱暴に周囲の砂を巻き上げ数時間前の自分を激しく恨んだ。

——『万丈はここで待機だ』

……どうして自分は、ああも簡単に引き下がってしまったのだろう。

いつもそうだ。キリオの言葉には妙な強制力があつて……それに従わなければならない気持ちになつてしまう。

出会った時から、それはずっと続いている。

……いや、そんなもの言い訳にもならない。

キリオだつて言っていたじゃないか、今の自分には誰よりも高いハザードレベルが備わっていると。

(エボルトだかなんだか知らねえが……怖がつてちやどうにもならねえだろ)

なぜならこの力を——仮面ライダーの力を手にした意味を、自分で示さなければならぬからだから。

「悩み事？」

「え？ああ……ちよつとな——！？」

唐突な問いかけに反射的な返答をしようとするも、やってきた人影の正体を視認すると同時にリユウヤは即座にその場から離れ、両手を構えた。

「ちよつとお……そんなに怖がることないんじゃないの？」

「エボルト……！」

リユウヤがその名前を口にしたその時、奴は一瞬眉をひそめては思い出したように「ああ！」と手のひらを合わせた。

「そつか……そっかいやもうバレてるんだっけ？」

「デメエ……！今すぐ葛城の身体から出て行きやがれッ!!」

「ちよつ……！ちよちよちよちよ!!やめてよもうっ!!」

胸ぐらを掴んできたリユウヤの腕を振り払いつつ、エボルトはバックステップで距離

をとりながら唇を尖らせて言う。

「もう……女の子に乱暴しようとするなんて信じらんない」

「次にその趣味の悪い演技をすれば……本気で叩き潰すぞ」

殺意に満ちた目でそう言い放ったリュウヤに対し、奴は相変わらず剽軽な態度で接しようとしてくる。

「あー……怒らせちゃったならごめんね！ たまに無意識に口調が混ざっちゃうことがあつて……こればかりはどうしようもないんだ」

「んなことはどうでもいいんだよ！ さっさと葛城から——！」

「断る」

きつぱりとそう返してきたエボルトに、リュウヤは思わず啞然とした表情を向けた。声色を変えつつ、奴は両腕を広げながら見せびらかすようにその場でくるくると回ってみせる。

「こいつの身体を返すのはいいが……それはオレが完全体になるまで待つてもらおうか。……ま、そうなるのも時間の問題だろうがな」

「……させるかよ」

取り出したビルドドライバーを装着し、リュウヤは隠し持っていたとあるアイテムを握りしめてそれを胸元まで掲げた。

「んん？」

「お前は今……俺の力だけで倒す。全部……何もかもここで終わらせる。もう誰も……悲しませない!!」

キリオから受け取ったアイテム——“クロースマグマナツクル”の持ち手を握りしめ、リユウヤはもう片方の手で漆黒のボトルを振る。

《ボトルバーン!》

ドラゴンマグマフルボトルをナツクルに装填し、それをビルドドライバーに叩き込んだ。

《クロースマグマ!》

「ぐっ……!があ……っ!!」

直後、体内に流れ込んでくる高熱がリユウヤを苦しませる。

許容範囲寸前の力に悶えながらも、彼は稲妻を帯びた身体を無理やりに動かしてベル

トのレバーを掴み取った。

（エボルトを倒す。……俺は、俺が信じる者のために——）

青年と少女達の顔が脳裏をよぎる。

リュウヤは徐々に右腕に力を込め、握っていたハンドルを回し始めた。

（——あいつが守りたかった、平穩のために……！この力を使う!!）

拳を象った坩堝が彼の背後に現れ、内部に煮え滾る溶岩の熱が周囲の空間を大きく歪ませた。

《Are you ready!?!》

「変身ツツ!!」

腕を広げると同時に頭から“ヴァリアブルマグマ”が撒き散らされ、それは付近の砂浜を巻き込みながらリュウヤ自身をも呑み込んでいく。

マグマが意思を持ったかのように八つの龍の頭を形成し、固着。

後方に控えていたナツクル状の坩堝が前へ押し出され、黒く冷え固まったマグマがバラバラに飛び散ったその中から――

《極熱筋肉！クローズマグマ!!》

《アーチャチャチャチャチャチャチャアチャー!!》

――“熱”そのものを体現したかのような戦士が現れた。

「力がみなぎる……」

溶解した鉄を思わせるオレンジのボディに、龍の意匠が施された装甲。

「魂が燃える……!」

背に生えた火炎の翼を揺らし、戦士――仮面ライダークローズマグマが誕生した。

「俺のマグマが……ほとばしるツ!!」

「……ほう、オレがくれてやったヒントをもうここまで昇華させたか」

《エボルドライバー！》

荒々しい口上を叫んだリユウヤをまっすぐに捉え、エボルトは至って落ち着いた様子で淡々とボトルをドライバーに装填させる。

《コブラ！》

《ライダーシステム！》

《エボリューション！！》

「そんなに戦いたいと言うのなら……いいぜ、存分に付き合つてやるよ……ッ！！」

《Are you ready?》

瞬時に生成されたエボルトの装甲を前に腕を交差させ、子供のような笑顔で奴は唱えた。

「……変身」

《コブラ！コブラ！エボルコブラ！！》

《フツハハハハハハハハ！！》

星々が散らばった夜空の下で、蛇と龍が睨み合う。

「——ッ!!」

波が引いたのを合図に2人の戦士が駆け出し——互いの拳を、標的へと突き出した。

第61話 エボルは止まらない

スカイウォールの惨劇——この日本を三つに引き裂き、多くの犠牲者を出した5年前の大事件。

当時の記憶は自分にほとんど残されていない。……だが断片的な光景はほんの少しだけ浮かんでくる。

とても寒くて、痛くて、声を上げる力もなかったあの時は……うずくまって涙を流すことしかできなかった。

しばらく経ったある時自分は大人達に保護され、それから惨劇が起きた日に亡くなったであろう両親のことも特に疑問に思わないまま長い年月が過ぎていった。

施設の子供達と共に過ごし、万丈リユウヤという人間はその環境のおかげで無事に育ってこられたのだ。

………そのはずだったんだ。

「おおおおおおおおおおおッ!!」

星々が輝く夜空のなかに、幾度もぶつかり合うふたつの軌跡。

流星の如き速さで飛ぶ蛇と、それを炎の翼を駆使して追跡する龍。

「はあッ!!」

クローズマグマがエボルへと肉薄し、その胸部に拳を叩き込む。

「ぐう……!」

爆炎が噴き出すのと同時にエボルの残像が消え、奴は吸い込まれるように地面へと落下。巨大なクレーターを形成しつつ仰向けの状態で倒れるも、すぐに立ち上がってはクローズの追撃を回避する。

「——っ」

が、リュウヤもそう容易には逃すつもりはなかった。

瞬時に方向転換し、猛スピードで突貫。エボルの襟を掴み取りそのまま引きずるように低空飛行を行う。

「らあッ!!」

コンクリートの道路へ向けて奴を投げ飛ばす。

水切り石の如くめちやくちやに全身を強打したエボルは強引に両足を伸ばし地面へ突き立て、火花を散らしながらブレーキをかけた。

「……はあ……やるじゃないか万丈……。フエーズーに匹敵するほどのその強さ……まさに化け物だなあ!」

「ごちやごちやうる——せえっ!!」

「おっとー!」

地をひと蹴りしたクローズが一瞬でエボルへと接近。

奴は咄嗟に横へ転がることでクローズの打撃を回避すると、身を捻ってカウンターの裏拳を繰り出してくる。

それを手のひらで受け止め、リュウヤは仮面の下で目の前にあるコブラの複眼を睨みつけた。

「きゃあー……!!」

「なんだよあれ!!」

「逃げろおおおおつ!!」

直後、周囲から聞こえてきた人々の声に目を見開く。

……そうだ、ここは本来戦場になるはずのなかった町のだ真ん中。一般人だつて大勢

「ぐっ……!!」

リユウヤが意識を逸らした一瞬を狙つてエボルトが膝蹴りを放ってくる。

体勢を崩してしまったクローズは、次にエボルトが繰り出した右ストレートに反応しきれないまま――防御も間に合わずに後方へと吹き飛ばされてしまった。

「がはっ……!!」

商店街にけたたましい音が響き渡り、並んでいたシャッターのひとつにマグマの戦士が突っ込む。

「げほ……っ! ケホッ!! ゲホッ!!」

「ふん……」

逃げ惑う人々を目で追いつつ、エボルトは腰に手を当てたゆたいながら口を開いた。

「人間どもには同情するよ。戦争が終わったかと思った矢先に、まさか町を守ってきたはずの仮面ライダーに襲撃されるとは思わなかっただろうな」

「……なに言ってるんだ……！全部お前のせいだろうが!!」

——仮面ライダーエボル。自分達と同じ仮面ライダーでありながら、その出処はまるで違う。

ベルナージュが話したように奴は………破壊しか生み出すことのない純粹な“悪”だ。

「まあまあそう言いなさんな。お前だって、オレと似たような存在なんだからよ」

「ふざけんな……。仮面ライダーは正義のヒーロー……。！テメエみたいな野郎が名乗っていい肩書きじゃねえ!!」

再度特攻してきたクローズとエボルが激突する。

「ッ!!」

天体衝突を思わせる衝撃波が辺りに拡散。

炎の海に包まれた商店街で、リュウヤとエボルトは人の域から脱した力を互いに振るった。

●●●

「地震……?」

病室に伝う振動で目が覚めた。

キリオが眠るベッドに突っ伏していた千歌が瞼を開け、はつきりとしなない視界を凝らす。

「……わっ!」

椅子から転げ落ちそうになるほどの地鳴りと揺れが襲ってきた。

なにやら騒がしい雰囲気をも町の方から感じ取り、千歌は慌てた様子で窓へと駆け寄る。

「え……?」

瞬間、自らの目を疑う光景が飛び込んできた。

次々と倒壊していく建物に、炎上する商店街。

めらめらと燃え盛る炎のなかから逃げ出している住民達を見て、千歌は青い顔で口元を覆うと怯えるように窓から仰け反った。

「なにが……起こってるの……?」

「う……」

ガタン、と何かが落ちたような鈍い音が病室に反響する。

反射的に振り向くと、そこには床に伏しつつも立ち上がろうと腕に力を込めているキリオの姿があった。

「……キリオくん！」

「この揺れはなんだ……？」

かすれた声でそう尋ねてくる彼の肩を支えながら千歌は窓の方を示す。

「町が……町が大変なの……！」

「……っ」

無数の火柱が荒れ狂う町を見下ろし、キリオは悔しそうに歯を食いしばった。

「……あー」

不意に千歌が指した方向に目を持っていく。

暗闇に包まれた空——そのなかを流れ星のような速度で拳をぶつけ合っている2人の戦士に、キリオと千歌は揃って唖然とした表情を浮かべた。

「あれってもしかして……万丈くん……？」

「あの……馬鹿野郎……っ」

「あっ……！ダメだよキリオくん!!」

咄嗟にその場から駆け出しかけたキリオの手首を掴み取り、千歌は彼が出口を指さうとするのを止めようとする。

「離せ千歌……あいつはエボルトに狙われてるんだ！今戦わせるわけには……いかな
い……!!」

「そんなボロボロの身体じゃ無茶にもほどがあるよ……ねえ！お願いだからもつと自分を大切に——!!」

「……っ！」

「キリオくん！」

強引に彼女の手を振りほどき、キリオはベッドのそばに置いてあつたビルドドライブと上着を掴み取つては早足で病室を出て行つてしまった。

「ちよつと待つてよ……！」

再び彼に手を伸ばした千歌だったが、彼の持ち去つていった上着から何かが転がり落ちたのを視界の端に捉え、そちらへ意識を向けた。

「これ……キリオくんの……」

手のひらで転がしたボトルに刻まれたみかんのレリーフ。

キャップ部分に一文「O」と記されたフルボトルをじつと見つめた後、千歌は我に返つたように顔を上げる。

「ちよつと……!待ってたら!!」

青年の面影を追って、彼女もまた急いで病室を飛び出した。

《Ready go!!》

《ボルケニツクアタック!!》

大量のマグマを全身から吹き出したクローズがジェット機さながらのスピードでエボルへ突っ込む。

《ウォッチ!》

《ライダーシステム!》

《クリエーション!!》

対する奴はエボルドライバーにウォッチフルボトルを装填。

《Ready go!!》

《ウオツチ!》

《フィニツシュ!!》

「あ——!?!」

リュウヤの拳がエボルに到達するその直前、驚異的な加速を見せたエボルトが彼の背後へ移動し、

《チャオ!》

「ぐあつ……!!」

黒い装甲に真横からの蹴りを叩き込んだ。

「はあ……っ……はあ……っ!」

建物を突き破りながら商店街を抜け出て街道へと転がったりリュウヤはよろめきながらも立ち上がり、また両手を構えつつ不屈の精神をエボルトへ見せつける。

……恐ろしい奴だ。ブラッドスタークであった時とはパワーもスピードも文字通り桁違い。打ち破るのは一筋縄ではないかない。

（でも大丈夫だ……見たところ今の俺とあいつの実力はほぼ互角。このまま押し切ってみせる……!）

エボルトは勇ましくファイティングポーズをとるリュウヤを見て、歩みを止めながら首を傾けた。

「わからねえなあ……なぜそこまでしてオレに立ち向かおうとする？」

「……理由が見つからねえ方がおかしいだろうが」

「ま、言いたいことはわかる。……だがいい加減、お前は本来オレと肩を並べる存在だつてことを自覚した方がいい」

「は……？」

突拍子もない奴の発言に思わず間の抜けた声が出る。

エボルトは片足に体重かけたまま、強張った様子で立っていたリユウヤに向けて静かに語り始めた。

「不思議だと思わないか？なぜオレが手間をかけてまでお前を犯罪者に仕立て上げ、戦争に引き込む必要があつたのか。なぜお前のハザードレベルが他の連中よりも上昇率が高いのか」

「……………ああ？」

警戒心を保ちつつも奴の言葉に耳を傾ける。

……エボルトがどうして自分を選んだのか。いや、奴の言つたことを借りれば選ぶ必要があつたのかだ。

確かにこれまでそんなことを深く考えたことなんてなかった。ただ目の前のことを

必死に片付けていった結果、この状況に立たされているだけだ。

だがその当初から……エボルトの思惑通りになつていたとしたら？

「答えは簡単だ」

「——ッ！」

目の前までテレポートしてきたエボルトの打撃をいなしながらも、リュウヤは混乱しつつある頭を動かす。

「5年前……あの惨劇が起きた直後！オレはまだ生まれたばかりの赤ん坊が独りきりでうずくまっているのを見つけてね……！僅かに残されていた『遺伝子』の一部をそいつに埋め込んだんだッ!!」

「ぐ……っ！」

エボルトの放った重い一撃がクローズの胸部に直撃。

すぐさま体勢を取り戻した後、リュウヤは再度奴へと飛びかかる。

「そしてその時点でできる限りの改造を施し、強制的に肉体の成長を促した。……より効率的に遺伝子を育て上げるためにな！」

「遺伝子……？赤ん坊……？テメエ、さつきから何わけわかんねえことを——!!」

マグマをまとった拳を受け止めた後、エボルトは瞬時にクローズの腕を掴み取り手前へと引き寄せた。

「お前のことだよ」

「……あ？」

「スカイウォールの惨劇で親を失い、立つこともままならなかったお前に……オレが遺伝子を植え付けた」

——全身が沸き立つ。

ぞわぞわとせり上がってくる何かに戸惑いながら、リュウヤは呆然とした表情で眼前にある蛇を見つめた。

「どういふ……ことだよ？ お前は三国にそれぞれ用意した仮面ライダーを使って、新しい身体を選ぼうとしてたんじゃ——」

「その推測じゃ満点はやれないな。……つまりは出来レースだったってことだよ」

「……っ!？」

「オレの遺伝子を持つお前が突出するのは織り込み済みだった。……それが万丈リュウヤという人間の正体だ。お前は最初から、オレの手のひらで踊っていただけなんだよオ!!」

手品じみた速さでスチームブレードを取り出したエボルが下方向から刃を振り抜く。

「――！」
交差させた両腕で斬撃を防御した後、リュウヤは一旦距離を置こうと後ずさった。

（……俺が……エボルトの遺伝子を持つ……だって……!?）

どこからともなく溢れてくる力。

今まで自分を奮い立たせてくれた根拠のない自信は――全て奴から授かったものだ？

仮面ライダーとしてキリオや……人々のために力を尽くしてきたのも、全部……。

「オレと共に来い万丈。お前はこれ以上……人間どものなかにいるべき存在じゃあない」

手招きをしながらエボルトがこちらに近づいてくる。

俯いたままでいるリュウヤに歩み寄った奴の指先が彼の肩に触れようとしたその時、

「オオオオオオオオオオラアアアアアアアアアアッ!!!」

瞬時に腰を低く構えたりユウヤが引き絞った拳を解放。爆発的な威力を備えたアッパークラットがエボルの顎をしつかりと捉えた。

「——ッ!？」

不意を突かれたエボルトが弧を描きながら宙へと放り出される。

「はあっ……!はあっ……!!」

息を切らしながらも力強く地を踏みしめたりユウヤは、転がり落ちた奴に向け精一杯に声を張って告げた。

「誰がつ!! テメエの言うことなんぞ聞くかよッ!! —— バアアアアアア力!!!」

「……………」

エボルは曲げた膝に片手を置き、気品の欠片もない座り方でリユウヤを見上げている。

「万丈……お前、本当に理解しているのか？ お前は人間じゃない。オレの遺伝子を体内に秘めた怪物……この地球を滅ぼす存在なんだぞ？」

「うるせえ喋んな詐欺コブラ野郎。お前に教えてもらわなくてもなあ……自分が何者かくらい知ってんだよ!!」

拳を手のひらに打ち付け、自らに言い聞かせるようにリユウヤは口にした。

「テメエこそ俺が前に言ったこと忘れてんじゃねえだろうな。……俺は信じる、信じ続ける。キリオも、高海達も……自分自身も!!」

「……ぬう……!?!」

炎の翼からマグマが吹き出し、その勢いに乗ってリユウヤが飛翔。

空中で旋回した後、再度エボルめがけてミサイルのような体当たりを仕掛けた。

「ぐっ……!」

咄嗟に両腕をクロスさせたエボルがその一撃を受け止めようとするも、想定以上の威力を発揮したクローズマグマの特攻は容易に奴の身体を大地から離してしまう。

「お前の遺伝子があるから……それがどうした！俺は万丈リユウヤだ……！マジ強くてマジ最強な——正義の仮面ライダーなんだよッ!!」

コンクリートを抉りながらエボルの装甲を削る。

奴から手を離す直前、握った右手を思い切り引き絞り——顔面へ向けて、それを
撃ち放った。

「くっ……!？」

激しい戦闘音を追ってマシンビルダーを走らせていたキリオが突如として巻き起
こった熱風と衝撃に身を庇う。

「……!」

崩壊した町を奥へと進んだ先に——対峙する2人の戦士はいた。

「——万丈ッ!!」

《Ready go!!》

ビルドドライバーのレバーを回した直後、クローズマグマの右足に大量の溶岩と炎が集中する。

《ボルケニックファイニッシュ!!》

八つの龍のオーラと共に空高く上昇した彼は、静かに俯きながら佇んでいるエボルに向けて全ての力を注ぎ込んだ蹴りを放った。

(いける……!)

エボルトは明らかに消耗している。今この攻撃を当てさえすれば——こちらの勝ちだ。

全ての元凶を倒し、今度こそみんなが望む平穏がやってくる。

「これで終わりだ……！ エボルトオオオオオオオオオオ！！！！」

奴に到達するまで残り数メートル。

爆炎をまとった跳び蹴りが、エボルの胸を捉えようとしたその時、

「助けて……万丈くん……っ！」

「…………え？」

不意に耳に滑り込んできた少女の声。

リュウヤはほとんど無意識に……………攻撃の軌道を逸らしてしまった。
不安定な状態で着地した影響か、直後に大きくバランスを狂わせる。

「…………いい声してんだろ？」

刹那、リュウヤが体勢を崩した一瞬の隙をついて——エボルトは彼の身体に自分の腕をめり込ませた。

「ぐっ……!? う——!?」

形容し難い脱力感と痛みに襲われ——リュウヤの意識は瞬時に奥底へと沈んでいく。

「万丈……!? おい万丈ッ!!」

気絶し、地面に転がったリュウヤのもとにマシンビルダーを乗り捨てたキリオが駆けつける。

呼びかけても返事をしない彼を尻目に、キリオは傍らに立っていた星狩りの怪物へと鋭い眼差しを向けた。

「エボルト……お前え……!」

「……………ふふ」

少女の矮躯を露わにしたエボルトは薄ら笑いを浮かべ、倒れ伏している少年を見下ろ

す。

その手には――龍の頭が象られた青いボトルが握られていた。

「確かに返してもらったぜ、オレの遺伝子」

「……なに？」

《ドラゴン！》

《ライダーシステム！》

《エボリューション！！》

腰に巻いたエボルドライバーに2本のボトルを挿し込み、レバーを回転。

《Are you ready?》

生成されていく群青のスーツを前にして……奴は交差させた両腕を左右へと広げながら唱える。

「変身」

《ドラゴン！ドラゴン！エボルドラゴン!!》

《フツハハハハハハハハ!!》

変身した奴の複眼は両目とも “ドラゴン”。

さながらリユウヤの変身する “クローズ” を連想させる外観へと変化したエボルトは——自分を見上げるキリオ達を嘲笑うように、自らの進化を告げた。

「フェーズ2——完了」

第62話 プログラムされた喜劇

「フェーズ2——完了」

ゆらゆらと揺れる炎の茂みに佇むのは蛇から龍の姿へと進化を遂げた怪物。

絶えず続いている頭痛の最中、キリオは目の前で起こった出来事が受け入れられないとでも言うかのように……………自分を見下ろす異星からの侵略者に開き切った瞳孔を向けた。

「フェーズだと…………？お前、その姿は——」

「言葉通り、また1歩先へ進んだというわけだ。今まで見せてきた力は本来の2パーセントに過ぎない。…………オレはまだまだ進化する」

それは遠回しな勝利宣言だった。

エボルドライバーを使用したエボルトの力はまさに別次元の領域。以前の姿でも全くと手に負えなかったというのに……………奴はまだ強くなるというのか？

リユウヤはキリオの腕のなかでぐったりと倒れたまま動く気配もない。

遺伝子がどうか話していたが……………いったいどういう——

「はあっ……はあ……っ！キリオくん!!」

「……！千歌……!?!」

リュウヤから視線を外し、キリオは不意に投げかけられた呼びかけへと意識を向ける。

病院からここまで駆けつけてきたのか。髪を乱し、肩で息をした千歌が少し離れた建物の壁に寄りかかっているのが見えた。

「フッ……」

「バカ……！早く逃げろ!!」

「え……?」

状況の整理がつかない千歌が顔を上げた瞬間、残像の軌道を走らせながらエボルが彼女の背後へと回る。

「くう……!?!」

「千歌ッ!!」

エボルが放った手刀が千歌の首を捉え、眠るように気を失った彼女を抱えながら奴は再度キリオへと身体を向け直した。

「こいつの身柄は預かっておく。返して欲しければ……………今度は残りのパネルとボトルを全て明日中に届けてもらおうか」

「なん……………だとオ……………」

「場所は前と同じタワーの麓だ。……………今度は変な策を練ろうなんて考えるなよ？オレの前じゃ、どうせ何もかも台無しになっちまうんだからさ」

「ふざけんなッ!!」

「チャオ」

横たわるリユウヤのそばから駆け出し、エボルトに殴りかかったキリオの拳が空を切る。

とても追いきれない速度でその場を去った奴の笑い声だけが鬱陶しく耳に滑り込んできた。

「ああああああああああ……ッ!!」

無数の瓦礫が転がった地面へひたすらに拳を叩きつける。

コンクリートの硬い感触から手に伝わる痛みよりも、心が欠けてしまったことへの悲しみがキリオを深い絶望の底へと追いやった。

●●●

翌日の朝。

突如としてジャックされた公共の放送機関により内浦の町……いや、世界中が騒然の渦に巻き込まれることになった。

『お初にお目にかかる、オレの名はエボルト。星を喰らい、それを自らのエネルギーへと変える地球外生命体だ』

街頭に設置された巨大モニター、テレビ、スマートフォン。

あらゆる電波に乗って流れた映像——そこに映っていた異形の姿に誰もが恐怖し、そして息を呑んだ。

『この地球に生きるすべての人間に告げる。オレはこの町、内浦にあるパンドラタワー

を拠点として……今日から本格的に地球を滅ぼすための活動に移行する。せいぜいわずかな余生を楽しむといい』

紳士的な振る舞いとは裏腹に奴の言動はこの上なく不条理で、信じ難い宣戦布告だった。

「千歌ちゃんが攫われたって……。それって……。その……。本当なの……。？」
「……………申し訳……。ありません。すべて俺の責任です」

ボロボロの身なりで深く頭を下げてきた青年に、高海志満は戸惑いに満ちた眼差しを注ぐ。

夜が明けるのとはほぼ同時にリュウヤを担ぎながら十千万へと戻った彼はひどく憔悴しているようで、絞り出すような声で何度も謝罪の言葉を並べてきた。

「ぐ……………う……………！」

「と、とにかく座って！病院から抜け出てきたんでしょう？安静にしなきゃ……」

よろめき、青い顔で傍らにあつた柱に体重をかけたキリオの背中を支えながら志満は困惑した表情のまま思考を巡らせる。

「もしかしてだけど……さっきやってたおかしな放送と関係が……？」

「……はい」

暗い瞳で虚空を見つめながらキリオが頷く。

先日現れたパンドラタワーの騒ぎに加えて今朝のエボルトによる演説。すでに内浦全体がパニックに陥っている状況だ。

避難勧告も発令され、この町はもう人が住める土地ではなくなってしまうている。

部屋の隅にまとめられた荷物はおそらく千歌の姉である志満と美渡が急いで用意したものだろう。彼女達は今日にでも旅館を出発するつもりだったらしい。

「……………」

すべて打ち明けるべきなのだろうか。

自分のせいでこれまでどれだけ千歌達が危険な目に遭ってきたのか。すべて話して、志満の怒りを一身に受けた方が……………楽になれるのかもしれない。

「ねえ、キリオくん……………あなた、私や美渡に隠してることがあったでしょう？」

「……………」

虚ろな表情を浮かべるキリオの横顔に、彼女は囁くような声音でそう尋ねた。

誤魔化すことは不可能だ。なぜエボルトが千歌を連れ去ったのか、そして自分が何者であるか……………全部、彼女に明かさなくては。

「志満さん、俺は——」

「ううん、言わなくてもいいのよ」

「……………え？」

立ち上がり、ゆつくりと台所へ向かいながら志満は口を開く。

まるで大した問題でもないとも言えるかのように……………落ち着いた様子で彼女は続けた。

「あなたが千歌ちゃん達のためにいつも頑張ってくれていることは……………私も美渡も十分わかってるから。……………ウチに来た頃とは違って、ね」

「……………」

台所から顔を覗かせる志満と目を合わせ、キリオはそのにこやかな表情を視界の中心

に見据えた。

ふと5年前の——この旅館に初めて足を踏み入れた時の景色が重なる。まだ幼かった千歌とは違い、美渡や志満……彼女の姉達が自分に対してどこか警戒するような目を向けていたあの時の光景だ。

今思えば彼女達が気を張っていたのも当たり前のことだ。見ず知らずの人間が、ある日急に一つ屋根の下で共に暮らすことになるなんて怪しまない者の方が少ないのだから。

けど今は……………。

「俺には……まだこの町で、やるべきことが残っています」

「うん。……あの子のこと、お願いね」

キリ才は優れない表情のまま強く頷くと、飛び出すように地下室に繋がる階段へと駆け出す。

「志満姉————千歌の奴と連絡つかないんだけど————ってあれ？今のキリ才？」

誰もいなくなつた空間から視線を外し、志満は階段を駆け下りてきた妹へと柔らかい口調で言つた。

「美渡、すぐにここを出発しましょう」

「え？でも千歌がまだ……」

「千歌ちゃんは今からキリオくんと一緒に追いつく予定なの」

「……？まあそれなら心配ないか。……って、ならもう行つちやおうよ！あーもうようやく戦争が終わつたかと思つたら宇宙人の侵略とか！シャレにならないってー!!」

バタバタと騒がしい足音を立てながら居間の荷物を抱えて外へ飛び出していく美渡の背中を見送つた後、志満はゆっくりと腰を上げてその後を追つた。

「はあ……っ……はあ……っ！」

自分が所持している全てのフルボトルとパネルを机に掻き集めながらキリオは考えを巡らせる。

エボルトの狙いはパンドラタワーの完成。そのために残りのボトルとパネルを要求したんだ。

そしてそれが達成されれば、地球は――

「……………」

長椅子に横たわっていたリユウヤを見下ろす。

普段のやかましい雰囲気は見る影もなく、エボルトとの戦いで付いたであろう頬の擦り傷が痛々しい。

キリオは苦しそうに歯を食いしばった後、震える手を伸ばしきって瞼を閉じている彼の懷からドラゴンフルボトルを回収した。

（どうすればいい?）

血の気の引いた顔でゆらゆらと蛇行しながら街道を歩く。

これから自分は星を滅せるほどの力を持った化け物のところへ向かう。

対抗策は無い。よって千歌を救うには自分が持つボトルとパネルをエボルトに引き渡す他ない。だがそうなればこれまで必死で守ろうとしていた平穩は終焉を迎えてしまう。

自分が何者かもわからず、胸にぽつかりと空いた穴を埋めてくれるパーツの正体も思いつけないまま——何もかもが消え去ってしまうんだ。

「この町も………欠けちまうのか」

立て続けに真横を走り去っていく車両を見送りながら、キリオがそうこぼす。

もう住民の避難は始まっている。パンドラタワーの形成と今朝のエボルトが行った放送が決め手となり、既に半分以上の人々が他所へ出て行ってしまったのだ。

元より人が多いわけではなかったが、道を歩いていて出くわす人間が明らかに減っていることが察知できた。

……怖い。

エボルトのもとへ向かうのがたまらなく怖い。

奴の力は圧倒的だ。勝ち目なんてあるわけではない。

……だけど、

だけどまだ――

「キリオくん」

前方からの呼びかけに反応し、キリオは俯かせていた顔を上げて目の前に立つ複数の人影を視界の中心に収めた。

「……お前ら」

「おはヨーソロー！……なんか、また大変なことになっちゃったみたいだね」

曜と月……その背後に立つ A q u o r s のみんなに、S a i n t S n o w の2人。そしてミカとタクミが揃ってこちらを見つめている。

「なに……やってんだ？」

「ちよっ……そんな怖い顔しないでよ」

「親御さん達の目を盗んで、この町に残ることにしたんだとよ」

そばに佇んでいたタクミが青い表情で眉をひそめる青年に向けて簡潔に説明する。

もはや怒りの感情すら上手く湧き上がってこないほど心がひび割れていたが、キリオは余力を振り絞って眼前に現れた少女達に鋭い眼を突きつけた。

「今からでも遅くない、逃げろ、すぐに、死にたくなければな」

「いいや、遅いよ」

「あと数時間もすれば内浦と……その周辺を含めた地域が封鎖されるみたいですわ」

「海外からの圧力もかかっているみたい」

口々に弁明を始めた彼女達を見て、やがて限界が訪れる。

「頼むから逃げてくれよッツ!!!!」

ぐしやぐしやと髪を乱した後、ひどく取り乱した様子でキリオは皆に咆哮の如き声を張った。

「千歌が心配だから残ったって言うんだろ……? この町に残って……それでどうするつもりだったんだ……!? お前らがエボルトと戦えるのか!? 千歌を助けられるのか!」

胸の内に留めていた不安を全て吐き出しながらキリオは叫ぶ。

「お前らまで失ったら……俺には何も残らない……！また逆戻りなんだよ……！！」

自分を……戦兎キリオを構成する大切な要素である彼女達だけは、何が何でも守り通したかった。

だが今回はこれまでとはわけが違う。勝利の確率は1%もない負け戦だ。

今まで創り上げてきた何もかもを壊すことができる敵が居を構える町に、皆を残すことなんかできない。

「……違いますよ、戦兎先生」

「……？」

「千歌さんだけじゃない。……みんな、あなたのことだつて心配なんです」

一歩前に出たミカが胸元を押さえながら口を開く。

「先生はわたしに言いました。……お互いの良いと思えるところを尊重し、悪いと思うところを補い合う……それが仲間だと。だから言わせてもらいます、あなたは間違っている」

「……………」

光の宿っていない青年の瞳に視線を合わせながら、ミカの隣に並んだ曜が言う。

「キリオくんはもっと周りに頼るべきだよ。……せめて、弱音くらいは聞かせて欲しい」

「聞かせてどうなる。それで今の状況が変わるのか？」

「いいえ。でもあなたの重荷と一緒に背負うことくらいはできるはずです」

「徒労だ」

「軽くはなります」

……強い意志が、一斉に注がれているのがわかった。

正しいことはわからない。いつだってわからなかった。

ただ、自分の信じた道を進んだだけ。

「私達は……最後までキリオくんと一緒にいるよ」

瞬間、暗闇からすくい上げられるかのような感覚が走った。

（俺にはまだ………こいつらがいる）

差し出された曜の手のひらへ無意識に自らの手を重ねる。

未完成のままそびえるパンドラタワーが、キリオ達を嘲笑うように見下ろしていた。

第63話 独りきりのベストマッチ

「よし……行くぞ猿渡、氷室」

「ああ」

「今度こそ……あいつを倒す」

そびえ立つ破壊のタワーを見上げ、キリオ、タクミ、ミカの3人はそれぞれ装着したベルトに手を添えた。

最後まで一緒にいる……とはいっても、当然戦闘に曜達を連れて行くはできない。眠っているリュウヤの看病も含めて、彼女達は十千万で待機してもらうことになった。

「ち、ちよつと待って!」

「ん?」

不意に背後から投げ渡された物をタクミが掴み取る。

手中に収められたそれに目を落とすと、彼は弾かれるように顔を上げてはルビィ、理亞、ダイヤへと順に顔を見合わせた。

「もう……私達には必要のないものだから、タクミが持つて欲しい」

「必ず千歌さんを……助け出してくださいね」

「……………」

ぐつと力強く拳を握り締め、タクミは頷きつつ改めて背後へと向き直る。

「ミカちゃんも……どうか無事に帰ってきてね」

「うん」

月に会釈するミカだったが、その表情からはとてつもない緊張と恐怖がにじみ出ているようだった。

戦場へ向かおうとする3人の背中を押すように、少女達はいつまでも眼差しを注ぎ続けるのだった。



「ようやくだ」

両手を拘束された状態で地面に転がっている少女を見下ろし、怪物は仮面の下で不敵に笑う。

葛城ユイという人間に取り憑き、難波重工を利用し、育て上げた遺伝子も回収し終えた。

あとは当初の予定通り………パンドラボックスを解放すれば全ての工程が完了す

る。

——『全部思惑通り……って感じ?』

頭のなかに響いてくる声に耳を傾ける。

弱々しい……というよりも誰かを心配するかのような柔らかい声だ。

「まあな。 “トリガー” を起動させ、完全な肉体を取り戻せばあとはどうとでもなる」

——『本当に、地球を滅ぼすつもりなの?』

「さてどうだろうなあ。短い間だったが、お前から得た感情のおかげで……オレはすっかりこの星に興味が尽きなくなっちゃった。すぐに喰うのはやめて、壊れるまで遊び倒すってのも悪くはないかもな」

並べられたおもちゃを選ぶ子供のように、エボルトは上機嫌な調子でそう口にする。

「まあ……まずは目の前のことから片付けるとするか」

やがて近づいてくる気配に反応し、奴は横たわっていた少女から視線を外すと前方からやってくる人影を視界に入れた。

「思ったよりもお早い到着だな」

身体の向きを変えつつ、エボルトはこちらに向かつてきた3人へとそう投げかけた。

真ん中に立っている青年の手にはジュラルミンケースが下がっており、その中に残りのフルボトルとパンドラパネルが収納されていることはすぐに理解できた。

「千歌を返せ」

《ビートクロザー！》

「おいおい、取引の主導権はオレにあるってことを忘れるなよ？」

エボルドライバーから飛び出したビートクロザーを握り、その切っ先を倒れている千歌に突きつけながら奴は手招きをして再度こちらにケースを要求した。

「……………」

ボトルとパネルの入ったケースを乱暴に叩きつけた後、キリオは角を蹴って地を滑ら

せるようにエボルトのもとへと送る。

蓋を開け中に望みの物が詰まっていることを確認すると、奴はゆつくりと立ち上がった。龍の複眼をこちらに向けた。

「さて……じゃ始めるとするか」

「……やつぱり素直に取引するつもりなんか最初からなかったみたいだな」

「お前らだつてオレとの決着を望んでいるんだろう？なら話は早いじゃないか」

拘束されたままの千歌から距離をとり、エボルトは手に収められた剣に目を落としながら言う。

「……でお前らが勝てば、地球に住まう全ての生命は救われる。負ければオレの手によつて何もかもが消え去るだけだ。……遅かれ早かれ、そのどちらかの運命は必ず訪れる」

低い声でそう告げた奴に対し、キリオ、タクミ、ミカは同時にそれぞれのアイテムを取り出す。

「ああ、その通りだよ」

《ラビット&ラビット！》

《ロボットゼリー！》

《クロコダイル!》

「お前に勝つて、この世界に平穩を取り戻す。……その運命は俺達が創る!!」

《Are you ready!?!》

形成されていく巨大なビーカーとスーツに囲まれた3人はエボルトを睨み返し、キリオの装着しているビルドドライバーからの問いに強く返答した。

「変身ツ!!」

《紅のスピーディージャンパー! ラビットラビット!!》

《ロボットイングリス! ブラア!!》

《クロコダイルインローグ!!》

《オーラア!》

先手を打って出たのはキリオだった。

西都との代表戦でも見せた驚異的な跳躍とスピードを駆使して一気にエボルトの目を引きつつ、奴に全方位からの打撃を与えていく。

「ふん………」

常人の肉眼では到底捉えることの叶わない速度で放たれた拳による連続攻撃のことごとくを受け止めながら、エボルトは右手の剣を振るう。

「ぐう………」

烈風が巻き起こるほどの腕力を乗せて繰り出された斬撃がビルドに直撃。なすすべなく大地に転倒してしまった。

「おおおおおッ!!」

「はあああああッ!!」

続いて間髪入れずに地面に転がった彼を飛び越えながらタクミとミカがエボルトの背後へと飛びかかる。

後退しつつ紙一重で2人の放った拳を回避した奴が予備動作もなしにビートクロザーによる切り返しを行い、鋼よりもはるかに硬い彼らの装甲に一直線の傷を刻み込んだ。

「っ………!!」

「あああああ!!」

吹き飛ばされたグリスとローグの身を受け止めたビルドが再度突撃を図り、続くようにその後ろを2人が駆け出した。

……………一撃が重すぎる。明らかに以前よりもエボルの攻撃力が向上しているのは全員が瞬時に察知できた。

どうやら本来の2パーセントしか力を発揮できていない、というのはハツタリではなかったらしい。

これ以上、奴を野放しにはできない……………!!

《フルボトルバスター!》

「——ッ!!」

奴の懷に潜りながら大剣を振り上げるキリオ。

それを予想していたのか、エボルトは瞬時にビートクローザーの刃を構えて迫り来る斬撃に備える。

だが、

「ふっ……………!!」

キリオは唐突なブレーキをかけると、両足の次元伸縮バネを使って空高く跳躍。奴の意識を上方へと移した。

直後、滑り込むようにしてツインブレイカーを構えたグリスが接近。

《シングル!》

《ツイン!》

《デイスチャージボトル!》

ツインブレイカーに2本、スクラッシュドライバーに1本フルボトルを装填する。

「らああああああああ!!!」

赤、青、黄に点滅するエネルギーが刃に集中し、練り上げられた最大威力がエボルトの胸部へと殺到した。

《ツインブレイク!!/デイスチャージクラッシュ!!》

「っ……!」

フェイントをかけられたせいか、防御が間に合わずにその一撃を一身に受けてしまうエボルト。

奴は叩き込まれた凄まじい衝撃を殺しつつ、グリスの使用したフルボトルへと視線を注いだ。

「そいつは……」

それはジュラルミンケースに回収されていたフルボトルの内にはない“番外”。エボルトがこの地球にやってきた後に難波重工の技術によって作り出された“ロストボトル”だった。

以前ルビーや理亞、ダイヤをハードスマッシュにした際にエボルトが用いた3本のボトルで——タクミは強引に奴の隙をこじ開けたのだ。

《クラックアップフィニッシュ!!》

「吹き飛ば……!!」

「——!」

完全に意識外の方向——回りこみ、背後から襲撃してきたローグの“顎”がエボルトを捉える。

巨大なワニのオーラをまとった挟み蹴りがエボルの装甲を削り、やがて炸裂するよう
に奴は後方へと吹き飛ばされてしまった。

「ぐ……………」

立ち上がりとしたところで奴は気がつく。

「ハハッ……………」

未だ着地することなく宙に留まっていたキリオへと意識を向け、エボルトは絞り出す
ような笑い声を漏らした。

《フルフルマッチブレイク!!》

「ッッ
!!!」

フルボトルバスターの握られていた腕が横へと伸び、全身を捻りながら強烈な勢いを相乗させてそれを振るう。

遠心力が加わり数倍にまで跳ね上がった威力を備えたその斬撃は、砂嵐を巻き起こしながら周囲の大地を切り裂きエボルの身体へ到達。確実なダメージを負わせた。

「クハハハハッ……!!ハハハハハハハ!!」

「……!？」

広範囲に拡散した爆発の中心で、奴は高笑いを響かせながら再度キリオ達へと特攻。キリオが放った渾身の一撃などまるで効いていないとでも言うかのように、エボルトは不気味に笑いながら右手に握っていた剣を振り上げた。

「がっ……!」

「ぐお……っ……!!」

刃を叩きつけるようにしてグリスを地に伏せ、流れるような動きで柄を用いてビルドの顔面に突きを繰り出し数秒間意識を朦朧とさせる。

「いつ……!っう——!!」

最後に立っていたローグは全体重をかけて繰り出された斬撃を真正面から受け止めるも、想像をはるかに超えた衝撃に装甲が耐えられずに両腕から背中、足にかけて鋭い激痛が走った。

「ぐ……う……！」

追い打ちをかけるようにエボルトが放ち続ける嵐のような剣撃を両腕で防御しながら後退。

回避することもままならず、ミカは鮮烈な痛みと共にやってくる衝撃にひたすら耐え続けることしかできなかった。

「きや——あ!!」

不意を突くようにしたビートクローザーの刃が下方向から振り抜かれる。

咄嗟に腕を交差させて即興の盾を作ろうとしたのも虚しく、打ち上げられたミカは弧を描きながら遠方へと飛ばされてしまった。

「はあ……っ……はっ……あ……！」

膝をつき、徐々にクリアになっていく視界を凝らしながらキリオが再び立ち上がる。

ゆらりと身体を向き直したエボルトは子鹿の如く震えている彼の両脚を見つめ、嘲笑を含みながら口を開いた。

「どうしたキリオ、運命を創るんじゃないのかア……!?」

「……………ああ」

上目遣いでエボルトに鋭利な視線を注ぎながらキリオが返す。

「お前を倒すための勝利の法則は……………もう導き出している」

「ほう……………」

深呼吸をし、上がつっていた息を強制的に落ち着かせた後――

「……………っ!!」

キリオは仮面の下にある自らの瞳に、紅の輝きを宿らせた。

●●●

胸のなかに何かが蠢いているような感覚。

全身の細胞に張り巡らされた「別の存在」が、力尽きている身体を無理やりに起こそうとしてくる。

「は……………!!?」

やがて夢から醒めるように、暗闇に差し込んできた電灯の光に手を伸ばしながら少年は閉じていた瞼を開けた。

「……………は……………」

「あ、万丈くん！」

「大丈夫？」

表情を歪ませながら長椅子から上体を起こしたりユウヤに、そばに腰を下ろしていた果南が労わるように声をかけた。

「エボルトは……………どうなったんだ？キリオは？」

辺りを見渡し、自分が研究室にいることを確認するや否や彼は皆に対して小さく尋ねる。

ほんの一瞬口ごもるような様子を見せた後、すぐに顔を上げた曜が最初に説明を試みた。

「まさか……………俺、負けたのか……………」

だが彼女が口を開く前に、リユウヤは自らの敗北を瞬時に察知する。

やがて弾かれるように立ち上がった彼は、すぐにでも戦場へ戻ろうと地上に繋がる扉

へ向かって走り出した。

「ち、ちよつと！」

扉の横に立っていた理亜が慌てて彼の腕を掴み引き留める。

「なんだよ……！」

「なんだよ、じゃないでしょ!?! あなたその身体でどうしようって——！」

「んなこと気にしてる場合じゃねえんだよ!?!……今キリオ達が戦ってるんだろ!?! だって俺も……!?!」

「……っ」

リュウヤ達が言い争いを展開するなか、隅に佇んでいた梨子が目眩いにでも苛まれたかのように眉間を押さえる。

再び瞳が露わになった時には——そこには翡翠の輝きが入り混じっていた。

「なん……だ……?」

地面に倒れながらも戦況に意識を向けていたタクミは、現在進行形で起こっている信じ難い事態に息を呑む。

「戦兔……先生……!」

同様にミカも困惑せざるをえないといった様子で——目の前で繰り広げられている戦いに目を剥いていた。

「——ッッ!!」

ラビットラビットの特徴である伸縮する四肢を鞭のようにしならせ、荒れ狂う蛇神を思わせる動きでエボルトに連撃を加えていく。

時折複眼から覗かせる禍々しい紅の光は……その力を駆使しているキリオ自身までも人ならざる者だと認識させるような畏怖を見る者に与えた。

「だああああああつ!!!」

「オオッ……!」

一直線に射出された拳がエボルの胸部を決る。

「ハザードレベル4. 9……!」

直後に肉薄したビルドの追撃を躲しつつ、奴は品定めをするようにキリオに眠る力を測定していく。

「5. 0……5. 1……5. 2……! どんどん上がっていく……!!」

「ッ!!」

ラツシユの締めと言わんばかりにキリオが繰り出した蹴りによる薙ぎ払いが奴の横顔に直撃。勢いを殺しきれずに地面を削りながら後ろへ下がった。

エボルトは突如として人間離れた身体能力を発揮した彼を見やり、仮面の下で歓喜の表情を浮かべた。

「……………」

ビルドの全身に紅の稲妻がほとばしる。

——キリオが今使っているのは、以前も彼が無意識に発現させていた“謎の力”。

（正体はわからない……が、この力は俺の戦闘能力をエボルトと同等かそれ以上の域に

まで底上げる力がある)

フェーズ2となったエボルに正攻法で挑んでも敵わないなんてことはこの数分間の戦闘で立証済み。……ならば自分達に残された道はこれしかない。

(リスクは承知の上………だけどこれもエボルトを倒すためだ。俺に………力を貸せ………ッ!!)

雷そのものになったかのような速度で地を這うように移動し、キリオはフルボトルバスターを振るう。

「ッッ!!」

ふたつの刃が衝突し、噴き上げるような火花が散らされるなかでビルドとエボルは互いの顔を睨んだ。

「ああああああッ!!」

人間とは思えないほどの腕力でその場を押し切ってみせたキリオがそのままエボルトを荒野に吹き飛ばす。

大量の砂埃が舞い、なすすべなく転倒した奴はよろめきながらもビルドの顔を見返した。

「ハハッ………!アッハハハハ!!いいぞお………その調子だア………!!」

「おおおおおおおおおッ!!」

もはや数十メートル離れた場所にいたタクミとミカも手出しできない状況。

とてもヒトの力では介入することができない、まさに死闘と呼ぶべき戦いが目の前で展開していた。

エボルトと互角……………いや、徐々にキリオの方が攻撃の勢いを増している。

「ハアッ!!」

再度奴とぶつかり合う直前にフルボトルバスターの持ち手を折り、トリガーを引いて砲撃を放つ。

ビートクローザーを盾代わりにしてそれを防ぎきるエボルトだったが――

「ぐおおおお……………っ!!」

先を読んでいたかのように前進したキリオが時間差で斬撃を繰り出してくる。

分厚い鋼鉄をも容易く断ち切る一撃がエボルトの胴体を捉え、ついに奴はその場で力尽きるように膝を折った。

「……………やった……………!?!」

よろよろとした足取りで立ち上がったミカとタクミが今にも倒れそうなエボルトを見てガッツポーズをする。

「……今度こそ終わりだ」

フルボトルバスターの刃をエボルの首元に当てながらキリオが小さくこぼす。
俯いたままにいるエボルトだったが、奴は相変わらず気味の悪い笑い声を漏らしながら肩を震わせていた。

「ハハハハッ……フハハハハハ……ッ!!——頃合いだな」

「……なに？」

エボルトは首筋にあつた大剣の刃を自ら握り返すと、

「時は満ちた」

囁くような小声で、そう口にした。

「は——？」

直後、フルボトルバスターから伝導するような刺激が脳天まで駆け巡る。
刹那的な瞬間のなかで一気に押し寄せてくる映像と知識に、キリオはどこか遠くへと
ワープしたかのような感覚を覚えた。

（なん……だ……？）

はつきりしない景色を探るようにモヤがかった空間を歩く。
やがて赤みを帯びた大地が遠くに見えてきたその時、

（あれは……………）

神話の戦いを再現したかのような、この世のものとは思えないほどの剣戟が展開している。

黒と白に身を包んだ異形と……………それに挑む強大な存在の気配がキリオの脳内に届いてきた。

「あ」

星を巻き込んだ壮絶な戦いは相討ちで終わり、強大な何かから致命傷になり得る一撃を受けた異形の鎧が崩れ落ちていく。

その内側から覗いた人物と目があつた瞬間、

「」

頭の中が、嘘みたいに冴えた。

●●●

前触れもなく対峙していた2人の戦士の装甲が解除される。

「あはっ……！ キヤハハハハハハ！！！！」

《ミストマッチ！！》

ユイの姿へと戻ったのも束の間、エボルトはトランスチームガンを取り出すとすぐさまブラッドスタークの姿へと蒸血を遂げた。

「戦兔！！」

「大丈夫ですか!？」

戦いの行方を確かめようと駆けてきた 그리스とローグは、スタークの横で呆然と佇んでいるキリオを見て戸惑うように視線を泳がせる。

「戦兔から……離れやがれ!!」

エボルトに対して再び牙をむいたタクミが地を蹴り上げて飛び出す。

青年の横に立つ怪物に対して拳を振り上げようとしたその時――

「がつ……あ……!!?」

まったく予想もしていなかった方向から、強烈な打撃が叩き込まれた。

「猿渡くん!」

「ぐっ……!」

腹部に拳による攻撃を受けたことを察知し、反射的に 그리스が後退する。

狼狽するタクミの背後で、ミカは彼に襲いかかった人物に向けて戸惑いながらも問いかけた。

「なっ……なんのつもりですか……!!? 戦兔先生!」

그리스に向けて右ストレートを放った青年――キリオはどこか冷め切ったような瞳を浮かべて2人を見やる。

「……………全部、思い出した」

「え……………？ せん……………せい……………？」

「戦兔……………戦兔キリオか……………」

ぶつぶつと何かを呟き始めたキリオに対し、ミカは得体の知れない何かを見るような、恐怖の色が混ざった目を見開いた。

「違うな。……………俺は、戦兔キリオなんて名前じゃない」

「……………は？」

「俺の……………本当の名前は——

《Are you ready?》

「変身」

交差させた両腕を左右へと開いたキリオに紅のスーツが重なっていく。

《ラビット！ラビット！エボルラビット！！》

《フツハハハハハハハハハ！！》

ビルドを連想させる頭部。

“ラビット”の両眼を怪しく光らせ、キリオは状況を整理できないままだったタクミとミカを舐めるように見る。

「フェーズ3——」

傍らで待ち構えていたスタークがゆっくりともう一人の自分の隣へと並び立つ。

奴は体重を預けるようにしてエボルへと変身したキリオの肩に片腕を乗せると、彼と声を揃えながら無慈悲に宣告した。

「——完了」

第64話 真実のパラドックス

自分は何者なのか。そんなことばかりを考えながら毎日を生きていた。

いつまで経っても答えは出なかったが、代わりに本能が「やるべきこと」を教えてくれる。

「……………」

かぶりついた果実の形、色、食感、味……………あらゆる情報がインプットされていく。酸味と甘味が共存するオレンジ色のフルーツ——共に暮らしている少女が「みかん」と呼ぶそれは、とても優しい味がした。

「ぐは……っ!!」

拳から伝わる鈍い感覚。これは以前にも経験したことがある。

……そうだ。抵抗してくる奴は誰であろうと始末してきた。

あらゆる星で……弱い女性も、子供も……この汚れきった手で、例外なくだ。

「戦兎……お前……！……いったいどういうことだ……!?!」

蓄積されたダメージによってライダーシステムが強制解除され、仮面の下から戸惑いと困惑に満ちた表情を浮かべた少年の顔が露わになる。

「戦兎」と呼ばれた青年は、こちらを見上げる彼にひどく冷ややかな視線で返した。

「本当の名前がエボルト……って、意味わかんねえぞ……!」

「難解なことを言った覚えはないぞ。突然のことで脳が理解しきれていないだけだ、落ち着けばすぐにわかるさ」

「ぎっけん——!!」

立ち上がろうとしたタクミの横顔を蹴り飛ばし、転がった彼の背中を思い切り踏みつける。

「があ……っ!」

「無駄なことはよせ猿渡、お前達は敗北したんだ。これ以上戦いを続けても自滅するだけだぞ」

「ぐああああああ……!!」

今度は踵を彼の背に叩きつけ体力を削ぐ。

無駄な抵抗をされればこちらの時間まで奪われてしまう。意味のない戦闘は避けなくては。

「やめて……ください……!!」

横から腰に飛びついてきた少女へと視線を移す。

彼女も戦闘のダメージが影響したのかローグの装甲は解かれており、その弱々しい瞳を真っ直ぐに向けてきた。

「どうしちゃったんですか……!! ユイちゃんみたいに、エボルトに身体を乗っ取られたんですか!!」

「違うな」

「う——！」

少女——氷室ミカの首を鷲掴みにし、高く持ち上げる。

「やつと取り戻したんだよ……俺の本当のパーツ^心を。もう自分が失われることに怯える必要はない。なぜなら今ここに……俺という本当の自分が存在するんだから……ッ
!!」

「ぐ……う……！」

眼球だけを動かして何かを訴えかけてきたミカを放り投げ、兎の面を被った怪物がゆつくりと“箱”のもとへ踏み出す。

タクミとミカとのやりとりを腹を抱えながら眺めていたスタークは、パンドラボックスとその横に眠っている千歌に歩み寄るキリオへと目を移すと、興味深そうな様子で顎に手を添えた。

「……………ん」

近付いてくる気配に気がつき、意識を失っていたはずの千歌は重い瞼を開けるとそばに立っていた異形を呆然と見上げた。

「キリオ……くん……?」

寝ぼけているようなはつきりしない声で名前を呼んだ彼女の横を素通りし、キリオはジュラルミンケースに入っていた全てのフルボトルを取り出し、同じく収納されていたパネルへとはめ込んでいく。

欠けていた箇所が残らず埋まると、彼はそのパネルをエボルトの用意していたパンドラボックスへと勢いよく叩きつけた。

「きゅっ……!!?」

直後に台風の如き凄まじい突風が吹き荒れる。

付近に建っていたパンドラタワーが再び変形を始め、周囲のスカイウォールを取り込みその全長をさらに圧倒的なものへと積み上げた。

「……………」

同時にパンドラボックス内部にあったフルボトル全ての成分が消え去り、代わりに何もない空間から何かが現れる。

キリオはそのアイテムを掴み取ると、傍らに座り込んでいたスターク、もといエボルトに向けて投げ渡した。

「“エボルトリガー”……! ついにここまでできたか……!!」

「使えるか?」

受け取ったソレを観察しだしたエボルトがおもむろに上部にあるスイッチを押す。
……が、特に目立った変化は起きない。

「いいや、オレ達が一体化して完全体に至るにはまだお前自身のハザードレベルが足りないようだ」

「そうか。……なら出直そう、ちょうどいい相手がいる」

「オーケー、ひとまずオレ達の家も完成したことだし、ここは一旦引くとするか」

「……………えっ……………!?!」

何も口にしないままエボルトのもとへ歩いていくキリオの後ろ姿を見つめ、千歌はわけがわからないうたった様子で呼びかけようとする。

「キリオくん……………!?!」

ほんの少し肩を揺らしたキリオだったが、彼は振り向きもしないまま無言で暴風のなかに姿を隠し、その場を去っていった。

「高海!!」

「……………猿渡くん!ミカちゃん!」

遠くから身体を引きずりながらこちらへ駆けてくる2人を見つけ、千歌も咄嗟に立ち

上がる。

パンドラタワーが組み上がり、完成形を見せても尚暴威のような風は収まらず……生身で行動していた3人は、瞬く間に地面から引き剥がされてしまった。

「ぐっ……！」

吹き飛ばされた2人の少女と自分を引き合わせようと手を伸ばすタクミ。

届かない——そう諦めかけた時、

「……!?ベルナ——!?」

全身が黄金色の輝きに包まれ……数秒後には目の前の景色が一変していた。

「大丈夫……？」

「うん……平気」

月から手当てを受けたミカが消えそうな声で答える。

十千万旅館………その地下室に帰還したタクミ、ミカ、千歌の3人は、再び梨子の身体を借りて顕現したベルナージュに向けて疑念に満ちた瞳を向けた。

「なあおい、キリオはどうしたんだよ？」

「……………」

帰ってきた頭数が合わないことに疑問を持ったリュウヤが何気なく尋ねるが、それに返答する者は誰一人としていなかった。

「お、おい………どうして黙るんだよ………？」

「万丈くん、ちよつと」

「おい猿渡………！　いったい何があつたんだよ!？」

「落ち着いて」

静かになだめてくるミカを見て我に帰るようにリュウヤがそばにあつた回転椅子に

腰を下ろす。

「……全部知ってたのか？」

タクミの問いに王妃が閉じていた瞳を開く。

重苦しい空気に皆が俯いているなか、ベルナージュは梨子の長髪を整えながらゆつくりと語り始めた。

「ワタシは以前お前達に言ったな、かつてこの手でエボルトの肉体と精神を切り離したと。……もうわかつているとは思うが、戦兔キリオはかつてその肉体部分の役割を果たしていた」

「……なんだよ……それ……」

「……っ！」

淡々と話すベルナージュを見て、冷静さを失ったように髪を浮き上がらせたタクミが立ち上がる。

「全部知ってたんだな……？……真実をわかってた上であんたは……!!」

「どうして今まで……黙っていたんですか？」

横から飛んできた曜の問いに、王妃は相変わらずな調子で無機質な返しをする。

「奴が記憶を取り戻すことでエボルトとして覚醒するのを危惧したからだ。……そして、その事態は現実として起きてしまった」

「……………」

ベルナージュは千歌達と共に回収したパンドラボックスと、空になった大量のフルボトルの方に視線を移しながら続けていく。

「どうやら奴はエボルトとしての記憶を失いながらも、この星のエレメントを集めるという役目を果たしていたらしい」

「ち、ちよつと待つてよ……！ それじゃまるで……最初から……！」

「……仮面ライダーとして戦ってきたことすら、エボルトの野郎にあらかじめ設定されていたプログラムに過ぎないってわけかよ」

ベルナージュの口から次々と明かされていく真実に、その場にいた全員が絶句する。文字通り最初からだ。……最初から、エボルトの思惑通りに事が運んでいたんだ。

キリオが仮面ライダーとして戦ってきたことも。

彼が千歌達と共に過ごすなかで……リユウヤやタクミ、ミカに会おうことも。そして、このタイミングで奴自身が復活を遂げることも。

全部——エボルトが望んだ通りに動いていただけなんだ。

「キリオくんは……………私達のことを、ずっと騙してたの?」

先ほどから黙り込んでいた千歌が初めて言葉を発した。

それを聞いた皆は一瞬口ごもるも、フォローするように横から代弁を添えていく。

「そうじゃないんじゃないかな……」

「記憶を失ったふりとか……そういうのじゃなくて、本当に先生自身も知らなかったんだよ」

「……でもあいつは俺達から離れた」

室内にリユウヤの声音が反響する。

記憶を取り戻したキリオがどのような行動に出たのか……その場にいなかった彼でも想像はついた。

パンドラタワーを完成させ、エボルトと共に去ったキリオは——間違いなく自分達と敵対するつもりだろう。

エボルドライバーを使ってエボルへと変身したことがそれを証明している。

「お前達に忠告しておこう」

ベルナージュは再度口を開き、受け入れ難い事実に打ちひしがれている皆に向けて冷たく言い放った。

「奴らが一つになり、完全体としての力を取り戻せば……それこそ取り返しのつかない

ことになる。打倒できる可能性があるとすれば、それはこのタイミングに他ならない」
「それってつまり……」

不安げな顔を浮かべた曜は、ぼんやりと輝きを放っている翡翠色の瞳を視界の中心に捉えて言葉を詰まらせた。

「戦兎キリオを倒せ。……それ以外に、地球を救う方法はない」



「それにしても、お前の正体を知った時のあいつらの顔……あれは傑作だったなあ」
薄暗い空間のなか、兎の仮面に表情を隠した青年と怪物が向かい合う。

「力を取り戻した後……どうするつもりなんだ？」

「そうだなあ……まずは手駒を揃えるところだろうか。親玉がいなくなつて大パニック中の難波重工辺りを叩けばすぐに戦力も揃うだろうよ」

「……エボルトリガーがあればそんなもの必要ないだろう」

「わかってねえなあ、すぐに星ごと破壊するんじゃないや芸がねえだろ？じわじわと……楽しみながら壊していくんだよ」

邪悪な笑みを漏らしながらエボルトがそう語る。

「……変わったな、お前^俺」

「お互いにな」

以前の自分は破壊行為に楽しみなんか見出すようなことはなかった。

地球で暮らしていくなかで……エボルトとしての思想にも変化が起きたらしい。

「抜け殻だったお前はあのスクールアイドル達と共に過ごすごとで、オレは葛城ユイの身体に憑依したことでそれぞれ“感情”を取得した。……最初は余計なものまで守ろうとするお前にヒヤヒヤさせられたもんだが……今の様子を見るに、かつての使命を果たすには支障はなさそうだな」

膝に頬杖をつきながらこちらを見上げてくるエボルトに、キリオは沈黙で返答した。

「……………」

不意に腰元をまさぐり始めた彼が動きを止める。

常に肌身離さず持ち歩いていたはずの物がなくなっていることに気がついたキリオ

は……………仮面の下で動揺するように眉を震わせた。

第65話 グレートな信念

「キリオくん、それなあに？」

青年の腰ほどまでしかない身長が覗き込むようにしてそう尋ねてくる。

白髪 of 青年の手のひらに転がる、透き通ったみかん色の「ボトル」。それは青年にとつての全てであり、文字通り自分がこの世に存在できている糧ともいえるものだつた。

「俺の……生きる理由だよ」

「変なの。……それより一緒に海行こうよ！海！」

「あまり日に当たりたくないのだが………」

「こんな天気の良い日に外で遊ばないなんてもったいないって！」

強引に自分を日照りのなかに連れ出そうとする彼女の笑顔が目映る。

懐かしい記憶に浸るのをやめ、青年は閉じていた瞼を徐々に開くと殺風景な室内にそよ風のようなため息を吐いた。

「覚悟なら出来ている」

「ここにはいない少年と少女の顔を思い浮かべてはそうこぼす。

「だから……お前達も早く決めろ」



「——ッ！」

梨子の長髪をなびかせたベルナージュが卓上にあつたパンドラボックスへと腕を突き出す。

「……!? ボトルが——」

直後、組み上げられたパネルにはめ込まれていた大量のエンプティボトルが七色の光を放ち、その内部に60種類の成分が満たされていた。

「……っ」

「おっと」

無理に力を引き出したせいからついてしまったベルナージュをそばにいた月が支える。

蠟燭の火が消えゆくように瞳から翡翠の輝きが失われていく様子は、火星の王妃の存在そのものが消失しかけているという事実を皆にひしひしと感じさせた。

「……………」

「タクミ？」

無言で席を立つてはいくつかのフルボトルをパネルから引き抜いたタクミに理亜が不安げな顔で呼びかける。

「どこに行く気…………？」

「決まってるだろ、あいつを……………戦兔をぶっ潰しに行くんだよ」

「ちよつと待って！」

地上へと繋がる階段へ向かおうとする彼の背中に悲痛な叫びがかかった。

エボルトとの戦闘で残った傷の痛みに表情を歪ませながら、立ち上がったミカは出て行こうとした彼に恐る恐る言う。

「無茶だよ……。それに、まだ先生が本当にわたし達を裏切ったなんて決まったわけ

じゃ———」

「そうか？」

振り向いたタクミの瞳から注がれる怒りに満ちた眼差しに、ミカは圧倒されるように口を閉じた。

「なら説明してくれよ、どうしてエボルドライバーを手にした時点であいつはエボルトと戦おうとしなかった？ 奴の切り札を抑えた状況だったんだ、俺とお前と戦鬼の3人でかかれば間違いなく勝てたはずだろ」

「それは……その……先生にも、なにか考えがあつたんじゃ……」

「考えだつて……？ ならどうして俺達にそれを打ち明けようとしらない？」

堪えきれないとしても言うかのようにタクミが声を震わせる。

「間近で戦鬼と対峙したお前ならわかるだろ……？ あいつは本気だった。……記憶を取り戻した途端に迷いなく攻撃してきたんだ。まるで俺達に用済みだとも言うようにな……！」

「ち、ちよつとタクミ！」

激昂するタクミを制止しようと理亜が駆け寄るが、彼女の手を振り払いつつもさらに彼は続けた。

「記憶喪失だかなんだか知らねえが……！ 治った結果がこれじゃあ裏切ったのと変わらねえ！ あいつはもうお前らが知ってる戦鬼キリオじゃねえんだよ!!」

「……………」

「俺は行くぞ。……他についてくる奴は？」

誰もその質問には答えることができなかった。

タクミの言ったことは……きつと正しいのだろう。そう割り切った答えを行動に移すことができたらどれだけよかったか。

終始俯いた状態で無言を貫いていたリユウヤは、タクミの言葉を聞いて強く歯を軋ませた。

「……っ……！」

「猿渡くん……！」

ドアノブに手をかけたタクミがどつと汗を吹き出しながらその場で膝を折る。

彼自身戦闘でのダメージが完全に回復したわけではない。パンドラタワーに向向いても振り返ちに遭うだけだろう。

「……やっぱりまだ動くべきではありません。今はどうか安静にしてください」

「……ちく……しょう……」

聖良に肩を支えられながら部屋の奥へと連れられていき、タクミは青い顔で長椅子に腰掛ける。

沈黙が支配する空間のなかで、皆は励ましの言葉を絞り出すことすらできなかった。

「私、ちよつと買い出しに行つてくるよ」

どれほどの時間が経つただろうか。

少しだけ空気が和らいだ頃、千歌が唐突にそう切り出した。

「そう……だね、食料も補充しないといけないし」

「もうやつてるお店ないかも……？」

ルビイの一言で皆が「そういえば」と目を見合わせる。町に残っている人間が自分達以外にいないことをすっかり忘れていた。

「まあ、レジにお金だけ置いてけば大丈夫じゃない？」

「……エボルトが何をしてくるかわからないから、目立たないように少数で行くべきだ
と思う」

ミカの口にした言葉にどうしたものか、と考え込む千歌。

数秒間の静寂の後、1人の少年が拳手をして皆の視線を集めた。

「万丈くん？」

「俺が一緒に行くよ。……これから外出する時は、戦える人間を最低1人は同行させた
方がいい」

「そっか……そうだよね。じゃあ今回は万丈くんにお願いしようかな」

「私が変わろうか?」

「ううん、曜ちゃんはみんなと上の台所で使えるお皿を並べといて。カレーの材料持つて帰ってくるからさ」

引きつった笑顔でそう返す千歌。

リュウヤと共に部屋を出て行こうとする彼女の後ろ姿を、曜はまだ不安の残滓した顔で送り出した。

「……ああ、そうだ氷室」

不意にリュウヤから名前を呼ばれたミカが弾かれるように顔を上げる。

「うん……?」

「ちよつと借りたいもんがあるんだが」

手を差し出しながらそう語ったリュウヤに、ミカは不思議そうに首を傾けながら怪訝な視線を送った。

「……………」

しばらくお互いに何も言わないまま、誰もいない街道を歩いていく。

「…………どう思ってるんだ？」

「え？」

「キリオのことだよ」

先に沈黙を破ったリユウヤは、まっすぐ前方にある進路を見つめながら千歌へと尋ねた。

「……………わからない」

一瞬の間を空けて一言そう答える。

……………そうだ、何もわからない。彼を許せるかどうかじゃなく、彼が何を考えているのかだ。

以前記憶が戻ったらどうするつもりなのか、とキリオに質問してみたことはある。彼の返答は「今は答えられない」だった。

過去の自分がどのような人間だったのかもわからないのでは判断できない、故に無責任な回答になると言つて明確には口にしなかった。

だが今はどうだろう。

エボルトとしての過去を知り、その上で彼は自分達から離反した。そんな彼はいつた……何を想い、何を考えてそのような行動に出たのか。

仮に本当に自分達を裏切ったのだとして、キリオはどうしてその結論に至ったのかをまだ彼自身の口から聞いていない。

許せるか許せないかを決めるのは、せめてそれを聞いてから判断したい。

「万丈くんは……どうなの？」

「俺？」

「もしキリオくんが、本当に私達を裏切つてたとして……万丈くんはどうするつもりなの？」

どうするつもり、などといひ濁した質問をしてしまった。

自分が本当に聞きたかつたのは……「キリオと戦うつもりなのか」なのに。

「俺か……俺は……そうだな——」

若干の迷いを見せつつも、リュウヤは自分に何かを納得させるかのように強く言い放

つ。

「俺はあいつを信じる」

「キリオくんはまだ私達の味方でいてくれてるって……？」

「そうだとすると、そうじゃなかったとしてもだ」

「……？」

「あ、なんかすまねえ……。俺バカだからさ……。上手く言えなくて伝わらない部分もあると思うけど」

誤魔化すように後頭部を搔いた後、リュウヤはぐつと握り拳を作ってはそれを前に突き出した。

「俺はこれまでの道のりが無駄だったなんて思いたくない。たとえキリオが俺達を本当に裏切っていたとしても……。ボコボコにぶん殴って目を覚まさせてやる」

「あ、あはは……。万丈くんらしいね。でもそうか、そうだよね……。それくらいの気持ちでなきゃダメだよね」

千歌はリュウヤの言葉を噛みしめると、弱気になっていた自分を奮い立たせるように顔を上げた。

「……自分だってキリオを信じると心に決めていたはずだ。なら胸を張り続ければいい。」

彼は今でも……自分達の先生だ。

「ああ、そういや……高海には謝んなきやいけねえことがあつてな……」
「え？」

しばらくして不意に投げかけられた発言に目を丸くする。

「どうして？」

「さつきさ……外に出るときは戦える人間もついていった方がいいって言ったよな？」

「うん……言ってたね」

「実はさ……俺、今変身できないんだ」

「……えっ!？」

思いもよらぬ告白に上ずった声を上げてしまう。

「どうして……?」

「いや……お前らが帰ってくる前に妙な予感がしてさ、何度か試してみたんだよ、変身」
上着からビルドドライバーを覗かせながら、リュウヤは申し訳なさそうにそう語った。

「俺にはガキの頃からエボルトの遺伝子が埋め込まれていた——らしい。けど今はそれも奴に奪われちゃって……たぶんそれが原因だ」

「遺伝子……つて、言ってる意味がよくわからないんだけど……」

「まあとにかく！今のままじや俺はロクに役に立てねえつてこと!!」

強引に話をまとめた彼は、未だピンときていない千歌から目線を外しながら再度声量を下げて言う。

「それで……俺がお前と一緒に外に出てきたのは——お前に付いてれば、こうなるかもしれないと踏んでいたからだ」

「え——」

不意にリユウヤの横顔を見ていた千歌の顔が前へと向けられる。
次の瞬間……よく見知った人物の姿が目飛び込んできた。

「よお」

黒髪に、落ち着いた雰囲気を漂わせている顔つき。

裾の長い上着をなびかせた青年——戦兎キリオが、音もなく目の前に現れたのだった。

「キリオ……くん……」

「2人だけで外出とは……随分と大胆な行動をとるんだな」

「高海、下がってろ」

冷たい表情で見下ろしてきたキリオを睨みながらリュウヤは前へ出る。

「お前が高海と接触しようとするだろうと思つてな。……一緒に来て正解だったぜ」

「お前にしては考えてるじゃないか、40点やるよ。……で、この後はどうする？」

「……っ」

「答えられないか。なら加点は無しだな」

腰に手を当てて余裕を示すキリオに対し、リュウヤは冷や汗を流しながら鋭い警戒を向け続ける。

「もう気づいているんだろ？ エボルト^俺の遺伝子を抜き取られたお前にはもう変身できるだけのハザードレベルはない。戦おうとしても無駄だ」

「……！ 本当に、私達を裏切ったの!？」

淡々と語り始めたキリオに、千歌は堪えきれなくなったように大声を張り上げた。

彼の真意を確かめるのなら………今しかない。

「そうだ」

一拍置いた後、彼は固まった表情のまま口だけを動かして返してくる。

「……今まで私達を……スクールアイドルを守ってくれてた……あの気持ちは……！
もうないの!？」

「そうだ」

「……っ……………キリオくんは、私達の敵なの？」

「……………そうだ」

頭のなかで何度も反響する。

受け入れたくない事実が真正面から突きつけられたことに……とても耐えられなかった。

でも決して退いてはいけない。彼を……キリオを信じると決めたのなら、前を向き続けなくてはならないのだから。

「……………相変わらず曇らない目をしてる」

ふつと綻ぶような笑いを飛ばした後、キリオは独り言のように静かに口を開き始めた。

「馬鹿なお前らに教えてやるよ。俺がこれまで甲斐甲斐しくお前らの世話をしていたのはな、より効率的にシナリオを進めるための『プログラム』に沿って行動していたに過

ぎない」

「プログラム……?」

「ああ、本能と言ってもいい。……だいたい疑問に思わなかったのか? 戦争が始まる前、スタークが存在が浮き彫りになっていたなかでどうして俺は大規模なライブ計画なんざ進めることを許可した?」

「そ、それは……キリオくんが……私達の意思を尊重してくれたから——」

「もし俺がマトモに教師なんかやってたら、どんなことをしてでも止めたと思うがな」
ため息混じりに喋る彼の口調は……気味が悪いほどに冷徹だった。

「お前達の意思を尊重、ね………残念だが違うな。俺が尊重したのはエボルトとしての俺の意思だ。……戦争が起こった直後に A q o u r s が分断されるよう仕向け、スクールアイドルとしての機能を削ぎ、その内に配置した 仮面ライダー 駒を成長させ、戦いが終わる頃にはエボルトドライバーが手に入っている——全部最初から仕組まれていたことなんだよ」

——ほんの少しだけ、泣きそうになったのを必死に堪えた。

「……………たとえば、そうだったとしても……私達と一緒に過ごして……瞬間瞬間に感じ

た心はあつたはずでしょ……う？それだけは絶対に……！嘘なんかじゃなかったはずでしょ？」

「過程はどうでもいい、結局は行き着くところが全てだ」

「ちゃんと答えてよッ!!」

「どうでもいいと言っている」

《エボルドライバー!》

不意を突くようにキリオは取り出したエボルドライバーを腰に装着し、2本のボトルを手中に収めた。

「……っ!」

反射的にビルドドライバーを巻いたリユウヤを見やり、呆れた様子でキリオは言う。
「万丈、お前も俺と同じ造られたヒーロー……。利用され、裏切られ、使い捨てられるのが定めの人形だ」

「っせえ黙れ。その腐りきっちゃまった性根、俺が叩き直してやるぜキリオ」

「往生際の悪い奴だな。……お前が俺をキリオキリオと呼び慕っていたのも、オリジナル本体である俺に従うという本能からではない」

「じゃあ……今はどうだつてんだよ。エボルトの遺伝子がない今でも、俺はお前を信じ続けたと思うてる……！その気持ちはこれっぽっちも嘘なんかじゃねえッ!!」

リュウヤは懷から一振りの“剣”を取り出すと……それを逆手に持ち直しつつ構えた。

「……スチームブレード……？生身で何をするかと思えば……そんなガラクタで俺に挑もうって言うのか？」

あまりにも無謀すぎる装備でこちらを見据えてきた彼に、キリオはからかうようにそう問いかけた。

「ガラクタかどうか判断すんのは——まだ早いぜ……ッ！」

《デビルスチーム!!》

「……!?」

直後、周囲の景色が深い霧に包まれていく。

「万丈くん!」

「ぐっ……！オオ……オ……!!」

取り付けられたバルブを回転させた後、ブレードの刃を自らの身体に突き立てたりユウヤは、そのまま大量のネビュラガスを肉体に注入し始めたのだ。

「ハザードレベルが足りないってんならよお……！……！また足せばいいハナシだろうがああああああ……っ!!」

「……お前」

リユウヤの全身に駆け巡る亀裂のようなものを視認し、痛々しいものでも見るかのようになりオは眉をひそめた。

「づっ………ああああああああアアアアアアアアアア!!」

凄まじい衝撃波と共に霧が拡散。一気に目の前の視界が晴れていく。

「……そのボトルは……」

キリオは目を見開きながらリユウヤの手元へと意識を向け、何もなかったはずの空間から出現した“黄金のボトル”に驚愕した。

る。?????!!
や

「……！」

彼が手にした金のボトルを龍——クロースドラゴンへと装填した途端、その色は黒から真紅へと変化を遂げた。

……まるで、化学反応でも起きたかのように。

《觉醒！》

《グレートクローズドラゴン!》

外観を変貌させたクローズドラゴンをビルドドライバーに叩き入れ、レバーを回転させる。

出現したスナツプライドビルダーに囲まれながら苦悶の表情を浮かべた後、リュウヤ

は歯を食いしばり再度キリオの立つ前方を睨みつけた。

「キリオ……お前がくれたこの力で、俺は……！俺達の明日を切り開く！！」

《Are you ready!?!》

「変身ッ!!」

構えた両腕が広げられたのを合図に、リュウヤの全身が形成されたスーツに包まれていく。

その光景はまるで……彼自身の諦めない心にライダーシステムが呼応したかのように思えた。

《Wake up CROSS-Z! Get GREAT DRAGON!!》

《Yeah!》

シルエットは以前の“クローズ”をそのままに、その装甲にはエボルを思わせる金と紅の意匠が備えられている。

仮面ライダーグレートクローズ——リュウヤの強い意志が新たに生み出した、クローズの強化形態だった。

「おおおおおおおおオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

勇ましい雄叫びを上げたりユウヤを捉えつつ、すぐさまキリオはエボルドライバーにボトルを装填。

《ラビット!》

《ライダーシステム!》

《エボリューション!!》

「……そうきたか。いいぜ、少し遊んでやるよ」

《ラビット!ラビット!エボルラビット!!》

《フツハハハハハハハハ!!》

兎と龍。2人の戦士が互いの双眸を見つめながらゆつくりと前進する。

「キリオくん……万丈くん……」

膨れ上がった闘争心をぶつけ合い火花を散らす彼らを、千歌はただ見守ることしかできなかつた。

第66話 救えラビット

「これは見物だなあ」

パンドラタワー最上階。

神殿を思わせる建造物が並び立つその中心で、エボルトはユイの姿のまま大の字に寝そべっては宙に投影されているモニターを興味深そうに見上げていた。

そこに映し出されているのは2人の戦士による激しい攻防。

荒々しい動きで攻め続ける龍の戦士の攻撃を、兎の面で表情を隠した異形が冷静に対処している様子が確認できた。

「この戦いが終わった時……お前の運命も決まる」

「はあああああッ!!」

迫り来る打撃の軌道を読み、片手を振るつてはその衝撃を後ろへ受け流す。

強引な手段で変身能力を取り戻したリユウヤの放つ攻撃は、そのどれもがこれまでよりも威力と鋭さを増していることは瞬時に察知できた。

(ハザードレベルが上がった……だけじゃない)

キリオは次々に繰り出される連撃を正確に防ぎつつも、リユウヤの発揮した想像以上の力に目を剥いた。

(こいつは新たにエボルトの遺伝子を模倣——いや、“創造”したっていいのか……!?)

それはどう考えてもありえない事実——リユウヤ自身でさえ理解することはできない、理論の理の字もない常識外れな解決方法だった。

「ッ!!」

グレートクローズの拳を受け止め、龍の複眼へと視線を合わせる。

「まったく……俺と戦う相手はどうしてこうも『見えない力』を行使するかね」

「ごちゃごちゃうる——せえっ!!」

「っ……………」

リュウヤがキリオの腕を弾き、がら空きになった胴体へと重い一撃を与える。

あまりの衝撃にたたらを踏むキリオだったが、すぐさま迫ってきた追撃を回避しつつ落ち着いた態度で次の手を打った。

「うおっ……………!」

エボルドライバーから飛び出したドリルクラッシャーを掴み取り、高速回転させた刃をクローズの装甲めがけて振るう。

的確に急所を狙ってくるキリオの動きを予測していたのか、寸前のところで直撃を避けたリュウヤは一旦距離をとるとクローズマグマナックルを取り出し腰を低く構えた。

「——ッ!!」

特攻してきたリュウヤの打撃をドリルクラッシャーで防御しつつ、キリオは彼に向けて冷たく語り出した。

「まったく……わからないもんだな。どうしてそこまで必死になれる?」

「ああ……………!」

「お前が言う誰かを信じるといふ気持ち……そんなものを胸に秘めて、これまで自分が

報われたことはあったのか？」

「ぐあつ……!!」

回転する刃がクローズの胸部を捉え、仰け反ったところにすかさず追撃を与えていく。

「戦兎キリオという虚構の存在を信じ続けた結果がこれだ。裏切りだけが降りかかったこれまでの関係に……価値があると言えるのか？」

「……ああああああ!!」

身を捻ったリユウヤが爆発的な勢いを乗せてクローズマグマナツクルによる右ストレートを放ってくる。

ドリルクラッシャーを逆手に構えてそれを真正面から受け止めたキリオは、伝わってきた衝撃を噛み締めながらも静かに囁き続けた。

「自身を犠牲にしてまで……俺という全ての元凶を気にかける理由は本当にあるのか？」

「——うっせえ!!」

「……!」

眼前にあった兎の仮面に強烈な頭突きを残した後、リユウヤは再度後退しつつ声を荒げた。

「そんなもん……あるに決まってるだろうが!!」

はつきりとした感情を見せないままこちらを見つめているキリオを睨みながら口を開く。

これまで言えなかったことを全部吐き出して……彼の言ったことを否定しなくては。そう感じたリュウヤは呪いのようなキリオの言葉を打ち消すように返した。

「すごい……って思ったんだ。お前みたいなヒーローになればいいな……で、ずっとそう思ってた……!」

全ての始まり……あの夜を思い出す。

AqoursとBernageの合同ライブで起きたスマッシュによる襲撃――

――そこへ駆けつけたヒーローの正体を知った時、衝撃を受けた。

何もなかった自分に注がれた、生きる上での目標となったのが……仮面ライダー^キだったのだ。

「エボルトの計画なんかじゃない……。俺がこの……仮面ライダー^リの力を正しいことに使ったのは、お前や高海……みんながかけがえのない仲間であってくれたからだ」

《ボトルバーン!》

掲げたクローズマグマナツクルにドラゴンフルボトルを装填し表面部のスイッチを押し込み、エネルギーを圧縮。

「キリオ……お前だつて同じじゃないのか。……お前は どうして……！ 仮面ライダーになろうとしたんだよ!!」

《ボルケニツクナツクル!!》

大量の蒼炎をまとつた拳がキリオへと到達するその直前————白銀の輝きが宙を舞った。

「…………ツ!!」

流星を思わせる一撃がエボルの装甲に叩き込まれる。

吹き飛ばされ、地に転がつたキリオはリュウヤの持つナツクルに装填されたドラゴンフルボトルが銀色に変化したことに気がつく、思いがけない事態に遭遇したとでも言うように戸惑う様子を見せた。

「……………その域にまで達するとはな」

埃を落とすように身体を払いながら立ち上がる。

……リュウヤには迷いなんかない。これからキリオがどれだけの非道を繰り返そうとも、彼はそれを否定し “これまでのキリオ” を肯定し続けるに違いない。

これまでそう接してきたように、彼にとつて自分は地球を滅ぼす地球外生命体なんかじゃなく、共に肩を並べられる仲間だからだ。それはきつとりユウヤだけじゃなく……千歌達だつて同じ考えのはずだ。

あまりにも愚かで、理解し難い思考。

……………だけど、

「そんなお前達だから……………俺は守りたいと思えたんだろうな」

「……………え?——ぐっ!!」

不意を突くようにキリオが駆け出し、再度接近戦へと移る。

互いに距離を詰め取っ組み合いになったところで、彼は静かに切り出した。

「もう手加減はなしだ、決着をつけるぞ。……お前も本気でこい万丈」

「上等だ……………!!」

《《ボトルバーン!》》

《《クローズマグマ!》》

キリオの繰り出してきた打撃を避けながら素早くナツクルにドラゴンマグマフルボ

トルを挿れ、ドライバーへ装填。

「絶対にお前を……高海達のところへ連れ戻す!!」

《極熱筋肉! クローズマグマ!!》

《アーチャチャチャチャチャチャアチャー!!》

クローズマグマへと変身を遂げたりユウヤの周囲が熱で歪む。

ほとぼしるマグマをその身に宿した戦士を捉え、キリオは何も言わないまま彼に拳を振り上げた。

「……………」

またも兎と龍がぶつかり合う光景を傍らで見守っていた少女が1人。

手の中に収めていた1本のボトルを強く握りしめた千歌は、ぞわぞわとせり上がってくる嫌な予感に小さく肩を震わせた。



「ふるぼとる……?」

「そうだ。こいつには俺が摂取したみかんの情報から練り上げたデータを基に、生成した成分が詰まっている。さしずめオレンジフルボトルといったところか」

太陽の光を通してほのかな輝きを放つボトルを掲げ、青年はよくわからない解説を饒舌に語る。

気のせいだろうか、彼がこのフルボトルという名のおかしな容器を持ち歩くようになってから、随分と緩やかな表情を見せるようになった。

大切な……死んだ友人の形見でも見るような儂げな視線を注いだ後、彼は決まって口元を綻ばせる。

「えいっ」

「あ……!？」

ぼうつとした眼でボトルを見つめていた青年の隙を突き、少女は彼の手からそれを奪い取ると全力疾走で海岸を駆け抜けた。

「なにをす——」

「取り返してみろーっ!!」

「おいお前……!待てッ!!」

常にこのオレンジ色のボトルを持ち歩いている彼だが、こうして取り上げてみるとひどく動揺するのでとてもからかい甲斐がある。

これは自分の生きる理由だという言葉はあながち間違いないらしい。

自分を捕まえるまでの数秒間、背後で彼も少しだけ笑っていた気がする。

その頃の自分は——握りしめたこのボトルの意味なんて、考えもしなかった。

「そうだ……………これは……………」

互いに殴りかかる戦士達を尻目に、千歌は手中にあるみかんの意匠が刻まれたボトルに視線を落とす。

霧がかつていた記憶が確かなものになっていく。自分は……幼い頃にも同じものを手にしたことがあった。

「これまでもずっと……持ってたってこと……?——キャア!!」

クローズマグマの背にある翼が炎を纏うと共に熱風が巻き起こる。

飛翔したリュウヤはキリオへと特攻すると、そのまま彼の身体ごと空高く上昇。海のある方へと移動し始めた。

「……!」

咄嗟に身を翻してその後を追う。

「キリオくんが……このボトルを落としたことに気づいてないわけない……っ」

彼は自分の手にオレンジフルボトルがないことを知っている。知った上で平気な顔をしているんだ。

記憶を取り戻した自分には必要ないものだから?……いや、きっとそうじゃない。逆だ。

おそらく彼は——

「そんなこと……絶対にさせない……!!」

“結末”を決心した時、不思議と恐怖はなかった。

機械のようだったあの頃に戻ったかのように、至って冷静で正確な思考で自らの運命に決断を下すことができたんだ。

これも全て地球で得た経験のおかげ。……千歌達と過ごした時間の影響なのだろう。そう、記憶を取り戻したあの瞬間から——終わりの刻を予感していたのだ。

「うおおおおおっ!!」

向かってくる拳をいなし、カウンターを繰り出す。

が、それもすぐに叩き落とされては二撃目がやってくる。

「……………」

「ハアッ!!」

リュウヤは防御するどころか、こちらの攻撃を受けることも厭わずにひたすら前進し

続けてくる。

災害じみた勢いを備えた彼は目にも留まらぬ速さで放たれるキリオの打撃を一身に受けながらも、それを上回る威力を乗せた拳を叩き込んだきたのだ。

（想像以上だ）

徐々に対処しきれなくなっていく打撃の嵐を前にして、キリオは仮面の下で苦笑する。

ハザードレベル——それは感情の高ぶりによつて呼応、上昇することライダーシステムの性能を格段にアップさせることができるネビュラガスに対する“抵抗力”。

エボルトの遺伝子を再び目覚めさせ、完全に使いこなしているリユウヤはこの短時間でそれをボトルに影響を及ぼす“7”までに引き上げてみせた。

……互いに攻撃をぶつけ合う度に、こちらのハザードレベルも急激に上昇していくのがわかる。やはり彼を相手に選んで正解だった。

（このまま上手く運べば……俺の狙いを完遂できるだけの材料が揃う）

エボルトリガーを起動させるには最低でも6以上のレベルが必要だ。今の自分のハザードレベルは……5、7といったところか。

この戦いに関しては勝ち負けはどうでもいい。目的を遂行できるだけの領域に達することができればこつちのものだ。

「は——」

一瞬意識が明後日の方向へ飛んでいってしまい、リュウヤの振るった拳が眼前までやってきたところで攻撃に気がつく。

防御が間に合うわけもなく、渾身の威力が相乗された一撃が兎の面のど真ん中を捉え、キリオは空中で何度も回転しなげらなすすべなく吹き飛ばされてしまった。

——顔面と胸、左腕……あと右足のどこか。4箇所ほど骨が砕けたか。

だが大した問題にはならない。脆弱な人間と違って傷の治りは早いのだから。

「ははっ……」

自然と乾いた笑いが口からこぼれる。

「ハザードレベル……5. 8」

「うおおおおおッ!!」

トドメを刺そうと飛びかかってきたリュウヤの拳を両腕で受け止める。

彼の感情そのものが手のひらか伝わってくるようだった。

「5. 9……!」

《ボトルバーン!》

よろめいたキリオの隙を突き、リユウヤはドライバーからナツクルを引き抜いては再び白銀に煌めくドラゴンボトルを装填。

「キリオおおおおおおおおお!!!」

「
」
視界が銀色の光で埋め尽くされ、眩しさから逃れるように目を瞑る。

「……………（めんな）」

「え——？」

銀炎にまみれた拳が兎の面に到達する直前、微かな青年の声がリユウヤの耳朵に触れる。

《ボルケニツクナツクル!!》

同時に炸裂する広範囲の爆発。

エボルの装甲に身を包まれたまま、キリオは弧を描きながら遠方へと落下し、背中から着地した。

いつの間にか彼の手には何かが握られており、おもむろに上体を起こしながら彼はその上部にあるスイッチに指をかける。

「……6. 0」

《オーバーザエボリューション！》

「あ……!? ——ぐっ……!!」

刹那、黒い突風が吹き荒れる。

リュウヤはその場から吹き飛ばされないよう下半身に力を入れつつ、風の向こう側に見える人影に目を向けた。

ゆつくりと立ち上がるキリオの隣に——どこからともなく現れた小さな影が並ぶ。

「やつと……ここまできたな」

「……ああ」

数メートル離れた場所からその様子を見ていたリウウヤには、その人物が誰なのかがすぐに察知することができた。

「さあ、今こそ一つになる時だ……!!」

直後に少女の身体は眠るように横倒れになり、内部に潜んでいた生命体は隣に立っていた兎の戦士へと入っていく。

「待て……!!」

リウウヤが止めようとするのも虚しく、奴は徐々にキリオの肉体を取り込もうと侵食を始める。

……まずい。エボルトは今ここで……完全な力を取り戻すつもりでいる。

エボルドライバーの連結部分に彼が手にしていた“トリガー”が挿し込まれ、周囲に吹いていた突風はさらに勢いを増した。

『真の力よ……! 蘇れえええええ!!』

「やめろおおおおおおおッ!!」

黒い風を突き抜け、リュウヤは死に物狂いで手を伸ばす。
とても間に合うようなタイミングではない。

無我夢中に四肢を振るリュウヤが叫び続けるなか、

「——この時を待ってたよ」

澄み切った青年の声音が、はつきりと聞こえた。

「お前が葛城の身体から出て行った今………被害は俺だけで済む」

『………ん？………？』

キリオが自らの腰に巻かれたエボルドライバーのレバーを回すと、連動するようにエボルの装甲は崩壊を始める。

「キリオ………!?!?——っ!!」

場を満たしていた空気が一変したことで思わず立ち止まるリュウヤだったが、倒れて

いたユイの身体に気がついた彼はすぐさま駆け出し、彼女の身体を抱えると咄嗟にその場から離脱した。

《オーバーオーバーザレボリューション!》

『……お前』

徐々に熱を帯びていくライダーシステムを見て、キリオに乗り移ろうとしていたエボルトは低い声を漏らす。

『まさか……自分からシステムを暴走させる気か……?』

「ああ。……俺達エボルトは、悲しみを振り撒くことしかできない。この世界にいちやいけない存在なんだよ」

『だからこのオレを裏切ると?』

「いいや、2人仲良く地獄へ行こうって言ってるのさ」

とても落ち着いた調子でキリオはそう語った。

……これでいい。これが何もかもを解決させる唯一の手段だ。

自身を含めたエボルトという存在そのものの抹消。

きつと千歌達はこれを実行することには反対してくれるのだろうけど、

(だが俺は……あいつらの意志を裏切ったとしても——自らの手で終わらせてみせる)

これは償いでもあるんだ。

これまで奪ってきた多くの命に対する贖罪——それを自分自身の命を以て果たす。

「おい、キリオ……!? お前まさか……!!」

リュウヤがしっかりとユイの身体を抱えているのを確認した後、改めて意識をもう一人の自分へと向ける。

「終わらせるんだ。始めた時もそうだったように……俺達2人だけでな……ッ!!」

『!!』

「キリオッツ!!」

閃光と同時に広がった爆音にリユウヤの叫びがかき消される。

気を失ったユイを庇いながら、彼は充満した黒煙のなかで青年の無事を祈ることしかできなかった。

第67話 戦兔キリオ

エボルトリガー——それは使用者にパンドラボックスの力を直接引き出すことを可能とさせる究極のアイテム。

火星でのベルナージュとの戦闘で破損していたが、この地球で収集した60種のエレメントを注ぎ込んで復元に成功。

“エボル”というライダーシステムの制御端末としての役割も兼ねているこれを利用し、キリオは自分を含めたエボルトという存在をこの世から消滅させようとした。

全てはこの地球、いや……………この宇宙全ての未来のために。

「う……………」

——意識があることに気がついた途端、悪寒と共に絶望が走る。

目論見が上手くいったのなら自分はもう目覚めることはないはずだった。エボルトと共に消え去ったのなら自分には生命体らしい意識が残っているはずがないのだ。

……なのに、まだ自分は生きている——

「惜しかったなあ……………」

瞬間、全身の血の気が引いていくのがはっきりとわかった。

目の前に立っているのは紅のベルトを巻いた兎の戦士。フェーズ3となった仮面ライダーエボルの姿が見える。

導き出される結論はひとつしかない。

「……………まったく、残念でならないよ。今の今までオレは……………お前を信じていたつてのによ」

「まさ……か……!?」

爆発で広がった黒煙が徐々に晴れていき、その全貌が露わになる。

尻餅をついたまま青い顔を浮かべたキリオは、眼前に佇んでいた破滅の化身に震えた眼差しを向けた。

「ライダーシステムを丸ごと……奪ったっていうのか……!?」

「ま、割とギリギリの勝負だったけどなあ。こちららハザードレベル6以上であるなら……なにも本来の肉体にこだわる必要はないわけだしな。……保険をかけていたつもりはないが、お前がそうなるのなら仕方ない」

「ぐっ……!」

奴は……エボルトはキリオの肉体から瞬時に移り、彼と同時にハザードレベル6へと達したエボルトというライダーシステムそのものを新たな身体としたんだ。

「所詮は一度離れた身……汚れたものを取り戻そうとしたオレが愚かだったか」
「……いやめ——!」

焦りの感情が湧いてくるのも、身体を起こすのも、手を伸ばすのも、全てが遅かった。

《オーバーザエボリューション!》

世界が黒く塗り潰される。

何もかもが虚空に飲み込まれていくかのような、全ての終焉を予感させる気配が近づいてくる。

地面から離され、突風の赴くままに宙を漂いながら——キリオは最悪の存在が蘇る瞬間を見てしまった。

《ブラックホール! ブラックホール! ブラックホール!!》

《レボリューション!!》

《フツハハハハハハハハハ!!》

白に染められたコブラの複眼に白黒の装甲。モノクロ

胸部にはブラックホールそのものを連想させるリアクターが確認できる。

見た者に圧倒的な威厳を覚えさせるマントを下げたその姿は——フェーズ4。
仮面ライダーエボルというライダーシステムの完成形とも言えるものだった。

「キリオ……!?そこにいるのか!？」

気絶したユイを抱えたまま、リユウヤはひどく慌てた様子で駆けつけてくる。

「エボルト……!?その姿は——!？」

「ハハ……ッ」

掠れた笑い声を漏らした後、エボルトはゆっくりと上げた右手を軽く振るう。

直後、秒も経たずに生成された漆黒のエネルギー弾がクローズのやってきた方向へ放たれた。

「うああああああああ!!!」

地面に着弾したそれは凄まじい威力を拡散し、幾度目かの爆発を引き起こす。

「……………」

「打たれ強いな」

必死にユイを庇いながらもその場に立ち留まったりユウヤを見て、茶化するようにエボルトは言った。

「さて……地球滅亡のカウントダウンをする前に、まずはお前達で遊ぶとするか」

「なんだと……!?!」

「……………」

傍らで倒れ伏していたキリオも見開いた瞳を奴へと向ける。

今の時点で完全体へと至ったエボルトに対抗できる手段はない。故に2人は黙り込んでそのまま奴の言葉を聞くしかなかった。

「夜が明ける頃、この街に残っている人間を皆殺しに向かう。……どうせあの旅館にいるんだろう?」

「……………」

吐きそうになったのをぐつと堪え、キリオはめちやくちやになった思考を整える。

だが何も浮かんでくれはしなかった。絶対に成功させなくてはならなかった作戦が水泡と化し、エボルトドライバーを奪われた今エボルトを道連れにすることも叶わない。

いったい……どうすれば――

「時が来るまで怯えて過ごすがいいさ。これまで守ってきたお前の大事なものを……全部壊してやるよ。……チャオ」

無数の残像を描きながらその場を去っていくエボルト。

「あ……………」

抱えきれなくなったダメージと負の感情がキリオの意識を刈り取ろうとする。

「――くん……………」

少年と……もうひとつ、少女の声と共に近づいてくる足音。

……合わせる顔なんてない。

少しずつ暗黒に吞まれていく視界のなかで、キリオは走馬灯のように流れていく記憶の映像を無心で眺めた。



「…………ミカさん、少しぐらいいは何か口にしないとお体に障りますわよ」

十千万旅館の一室。

敷かれた布団の上に横たわった少女——ユイのそばで正座をしていたミカがダイヤの呼びかけに小さく「はい」とだけ返答する。

リユウヤと千歌が気を失ったキリオとユイを連れ帰ってから5時間ほどが経過した。一向に目を覚ます気配のないユイにミカは夕食も食べないまま付きつきりだ。……エボルトに支配されていた親友がやつと戻ってきたんだ、無理もない。

ダイヤはそつと襖を閉め、皆が集まっている地下室を指し階段を降りた。

「だから謝ってるだろ？ほらアレだよアレ、敵を欺くなら味方から作戦」

誰が聞いても無理をして発していることがわかる明るい声が室内に響く。

「…………まんまじゃねえか」

「それはさておき、どうやってエボルトを倒すかが問題だ。今の俺達の力じゃ——」
やけに饒舌なキリオオに対して、皆戸惑うような視線を注いでいる。

意識を取り戻してからはずっとこんな調子だ。他の誰にも会話の主導権は渡さないと言わんばかりにひたすらに喋りを続けている。

そんな彼から感じる違和感にはその場の全員が気がついていた。

「ねえキリオくん」

「だが悪いことばかりじゃないぞ。本来の葛城が帰ってきたことは、俺達は迷うことなくエボルトを叩き潰せる」

まるで曜の言葉など耳に入ってすらないとでも言うようだった。

「ちよつと」

「なに、奴が来るまであと数時間残ってる。それだけ時間があればきつと……………」

急に語気を弱めたキリオが俯き、口を結ぶ。

重苦しい空気が皆の背中を押しつぶそうとするなか、彼は不意に席を立つと早足で部屋の出口へと向かった。

「キリオくん!？」

「すぐに戻る」

そう言い残した後、逃げるように地下室を出て地上へと繋がる階段を駆け上がる。

旅館の入り口をぐぐり抜け、キリオは目的地も定めないまま一心不乱に走り続けた。

「は……っ……はあ……っ！」

街道を駆けながら思考を巡らせる。

……実を言うとう完全体となったエボルトに対抗する方法はないわけでもない。

エボルトリガーと同等の——とまではいかないが、それに匹敵するほどの力を使う者に与えるアイテムを開発すればいい。少し強引だがトリガーを復元した時のように、全てのボトルの成分を使って……。

「……………」

路地裏で立ち止まり、背中を折る。

問題なのはその力をフルに発揮できるだけの人間が現時点でいないことだ。

……そのアイテムが完成したとして、ライダーシステムに必要な不可欠な脳辺縁系とシンクロする強い“想い”は今のキリオにはない。

理論上ハザードレベルも申し分ないリユウヤならば使用できるかもしれないが、それだと単純に持て余す可能性が高い。彼はお世辞にも複数あるボトルの成分を併用した

戦術を考えながら戦闘を行うという行為が得意とは思えないからだ。

リュウヤの力だけではエボルトには勝てない。——使うのは自分でなければ。

「……………は？」

ふと顔を上げた先に見えたのは……………建物の窓に映った自分の姿。
ひどい顔色の青年。その瞳からは大粒の雫が次々に流れ落ちてきている。

「おい……………おいおいおいおい……………！」

涙を見せる自分に言い聞かせるようにキリオは窓へと歩み寄る。

——許されるわけがなかった。

「お前に……………！涙を流す資格なんて——ねえだろうがあああああ！！！！」

正面のガラスに向けて思い切り頭部を振り抜く。

窓がびび割れる甲高い音と共に鋭い痛みが走り、鮮やかな赤が眉間を通して顔面に伝うのがわかった。

「っ……っ……ぐうううう……ッ!!」

……全部自分のせいだったんだ。

火星の王妃との戦いで精神と肉体が分断される前、かつて自分はエボルトとして多くの惑星と、そこに住まう生命を虚無の空間へと追いやり、自らの糧としていた。

地球でのスカイウォールの惨劇も、戦争も——これまで起きてきたあらゆる悲劇の元凶が自分自身だった。

「消えろ……消えろ、消えろ、消えろきえろ……っ！キエロ……ッ!!」

何度も、何度も……硬いガラスに頭を打ち付ける。

仮面ライダーとしてスマッシュを倒してきたことさえもエボルトもう1人の自分の計画の内だった。

そう思い出した時、何度自ら命を絶とうと考えたか。

せめて自分を含めたエボルトという存在を残らずこの世から消し去ろうと自爆を図ったが、それも完膚なきまでに失敗に終わった。

——いつそのこと、この場で消えてしまえたらどんなに楽だろうか。

「消え——！」

「やめてッ!!」

再度頭を振り上げたキリオの腰に少女の重みが飛びついてくる。

横倒れになった彼は自分の身体に手を回している少女を見ないまま、虚ろな瞳を浮かべながら口を開いた。

「……はなせ」

「離さない……!!」

「はなせよ……!!」

「離さない!!」

「はなせって言ってん——!!」

「離さないッッ!!」

数秒間の静寂の間、強い雨が降り注ぎ始めた。

額に流れていた血が滲み、薄汚れた水滴が地に落ちていく。

「離れたら……またどこかへ行っちゃうじゃない」

「……っ……お前には何が見える？」

「え？」

強引に少女を引き剥がし、彼女の肩に手を置きながらキリオは声を荒げて問いを投げかけた。

「見ろよこの頭の傷……もう再生してるだろう？記憶を取り戻した途端にこれだ」

前髪をかき上げ、先ほど付けた傷口の部位を少女に見せつける。

血痕は残っているものの、信じられないことに……ガラスで切った皮膚は完全に治りきっていた。

エボルトとしての力。キリオを人ならざる者だと証明する驚異的な治癒能力だった。

「言ってみろ、お前の目には何が見えているんだ……!?人間か、それとも化け物か!」

「キリオくんだよ!!」

「……は？」

想定していなかった答えに間の抜けた声で返す。

少女はまっすぐにこちらを見据えながら——儂げな笑顔で言った。

「私には……キリオくんが見えてる」

それは、さも当たり前のことを語るかのような口調だった。

化け物であるはずの自分に対して、彼女はいつも通りの名前を呼んでくれる。遠い記憶の……あの日のように。

「さっきのあれ……作戦って、嘘なんだよね？ 最初から自分も一緒に消えちゃうつもりだったんでしょ？」

「……そうするしかなかった」

「違う……！」

「そうするしかなかったんだよ!!」

立ち上がり、雨の音に逆らうように張り裂けんばかりの声音を上げる。

「人間ですらなかったんだ、俺は……！ 何もかもが無駄だったんだよ……！ 今まで歩んできた道も、果たしてきた役目も！ 全部……エボルトの思惑通りに動いていただけだった！ 俺は——！」

——『お前みたいなヒーローになればいいな……って、ずっとそう思ってた……！』

「俺は……お前らが望むような……ヒーローじゃなかったんだよ……ッ!!」

他人に憧れの眼差しを向けられるような存在じゃなかった。

むしろ逆。この世の全てから刃を突きつけられても文句は言えない絶対的な悪。

星を喰らうことを生業とするブラッド星の下に生まれた……破滅の使者だという事実は、どうあつても覆うことはない。

「だから……なんだっていうのさ!!」

対抗するように少女もまた大声を上げる。

「万丈くん、言ってたんだよ……これまであつたことを無駄だとは思いたくないって。私も……同じ気持ちなんだ」

「……………」

彼女の言葉を聞く度に、不思議と安心感が生まれてくる。

これまでも同じ感覚を味わうことがあったが……その理由が、やっとわかった気がする。

「俺は……誰もが憧れるようなヒーローにはなれない……これまでも、これからも」

「うん、わかってるよ」

「身の回りのことを考えるのに精一杯で……エゴにまみれたどうしようもない奴だ」
「それでいいんだよ。キリオくんはキリオくんの……やりたいと思うことをやればいい。これまでだってそうしてきたじゃん。……それに……その方が、ずっと人間らしいよ」

青年の口にしたことを否定するのではない。少女は今いる……ありのままの彼を受け入れると言った。

「完璧なヒーローになんてならなくても……これまでやってきたことは、全部残ってる。絶対に……消えたりしないんだから」

「……」
「これ」

差し出された手のひらに目を落とす。

「大事なものなんだよね？ だったら生きているうちは……ちゃんと持つてて」

乗せられていたみかん色のフルボトルをつまみ上げ、命よりも大切なそれを胸元へと引き寄せた。

「……俺は——」

●●●

「みんな、すまなかった」

全員が集まった研究室に赴くや否や、キリオは深く頭を下げた。

「……んだよ、結局作戦だったってことか」

「気に病むことはない。1人くらいは用心深い奴も必要だからな」

雨に濡れて垂れた前髪を掻き分けながら姿勢を戻し、気まずそうな表情を作っていたタクミにそう返す。

「別に気にしてねーけど……」

「説明もなしに1人で事を片付けようとしたのは事実なんだ。だから一応……謝りたかった」

「まあでも、無事に戻ってこれて何よりね」

「あ……そういえば」

梨子の一言に賛同するように笑顔を見せる一同だったが、すぐに千歌が不安げな様子に変わる。

「火星の王妃様は……なんて言うだろうね」

梨子に憑依しているベルナージュもキリオがエボルトから離反したことはわかって

いるはずだが……未だ姿を見せていない。

以前までの彼女の口ぶりからすると、キリオをこちらの陣営に加えることに対して多少なりとも抵抗はありそうな気はするが……。

「きつと大丈夫よ」

パツと晴れるように笑顔を見せながら言った梨子。

根拠のない励ましではあったが、キリオはそれだけで救われたかのように綻んだ表情を浮かべた。

「それで……エボルトはいつやってくるんですか？」

部屋の隅の壁際に寄りかかっていたミ力が尋ねてくる。

ユイがまだ目を覚ましていないことを気にしているのか、ほんの少しだけ力の抜けたような顔だ。

「……夜明けだ」

「勝算はあるのか？」

「一応」

眉をひそめるタクミにあつさりと返答する。

キリオは卓上にあるパンドラボックスとその横に並べられた60本のフルボトルを視界に入れ、強張った調子で続けた。

「いや……俺の覚悟が本物なら、絶対にな」

第68話 約束のビー・ザ・ワン

太陽が顔を出し始めた頃。少し霧がかつた道路を歩みながら湧き上がる感情に舌打ちをする。

自分の選択が間違っていたとは思わない。記憶を失ったとはいえ、半身が自分を裏切るなんて可能性は考えていなかった。

……きつかけがあるとすれば、あの少女。彼女と接触したことで想定外の不具合が起きたことは確かだ。

決して許されることではない。

これまでの行いを……よりもよって半身奴が否定するなど絶対にあつてはならない。

「一人で待ち構えているとは意外だな」

歩みを進めた先に立っていた1人の青年に気がつき、足を止める。

エボルドライバーの模造品であるビルドドライバーを腰に巻き、正義感に溢れた顔でこちらを見据えている。

……ああ、吐き気がする。そうなるようには設定していないぞ。

「千歌達ならここにはいない」

「浦の星にでも移ったか?……まあいい、お前を始末した後でゆっくり探すとするよ」

白いコブラの双眸が青年に向けられる。

仮面で隠されていて表情を見ることはできないが、怪物が冷静ではないことは彼も察することができた。

自分を裏切った……その事実だけで完全体へ至るという目的を達成したことすらどうでもよくなるほどの怒りが湧いているのだ。

「宇宙のあらゆる星を食い尽くす……それが、ブラッド族の使命だということを忘れたか?」

「……使命、か。おかしいことを言うな。お前だつてそんなものは頭になかったはずだろう。……ただ自分が楽しめれば、それでよかった」

黄色と青の透き通った外装で覆われた缶のようなものを取り出し、青年は静かに口を開く。

「お前がイラついているのは、単に半身である俺が道を踏み外したことが気に食わないだけだ」

「……………」

目を瞑り、青年は思いを馳せる。

……少女は受け入れてくれた。ありのままの自分でいいと言ってくれたんだ。

自分を構成する要素^{パーツ}なんて必要ない。

なぜなら今ここにいる自分は……………既に完成された存在だったからだ……………！

（やっとわかったよ千歌。…………俺で、いいんだよね？）

エボルトかどうかなんてことは……………今はどうでもいい。

「俺は俺だ。戦兔キリオだ。天才で…………教師で…………あいつらの、愛と平和を守る——
——仮面ライダーだ!!」

《グレート!》

《オールイエー!》

缶の上部にある2つの突起のうち片方を押し込み、起動。

「さあ、実験を始めようか」

《ジーニアス!》

ビルドドライバーに装填し、レバーを回す。

《イエー!・イエー!・イエー!・イエー!・イエー!・イエー!》

同時に青く巨大なステージが出現し、キリオの周囲を無数のボトルを乗せたコンベアが走る。

《Are you ready!?!》

「――変身」

やがて覚悟を決めた彼の一声により黄金の紋様クレストが正面に浮かび上がり、肉体へと重なっていく。

《完全無欠のボトルヤロー!・ビルドジーニアス!!》

《スゲーイ！モノスゲーイ！！》

頭部、肩、腕、足——純白のスーツに突き刺さる色とりどりのボトル。

明るい容姿からあらゆる可能性を想起させる戦士の名は……仮面ライダービルド
ジーニアスフォーム。

キリオが辿り着いた、みんなを守りたい、救いたいという願いが形となった……………
ライダーシステムの完成系だった。

「勝利の法則は……………決まった」



「60種類あるボトルの成分をひとつに…………？」

「そんなことが可能なのか？」

「ああ」

手早くキーボードを打ち続けていたキリオが視線をPC画面から外し、無数のコード
が繋がれた状態でテーブルに置かれていたパンドラボックスへと移す。

彼がエンターキーを叩いた直後、箱を形取っていたパネルの内1枚が変形を始め、片手に収まるほどの小さな箱へと変わった。

「これまでビルドを強化してきた成分と粒子を……全てひとつに集約させる」

「そのための……これか？」

リユウヤはパネルがボックス状に変化したそれを掴み取り、首を傾けながら観察しだす。

そこらの素材では以前の白いラビットフルボトルのように負荷に耐えられず爆散する可能性が高い。60種類もの成分を受け止めきれただけの外装を作るには……やはり最も近い存在であるパンドラボックスの一部を使用するのが最適だろう。

「さて……お前らは今すぐここから避難してくれ。万丈や猿渡、氷室もだ」

前触れもなくそう口にしたキリオに「え？」と皆が不意を突かれたような短い声を上げる。

「いや……なに言ってるんだよ。俺達も戦うに決まってるんだろ」

「……なにか理由があるんですか？」

「俺のエゴだ」

依然として忙しなく作業を続けているキリオは、パソコンの画面を睨みながら淡々とした口調で返答する。

とても合理的とは言えない答えが返ってきたので、思わずリュウヤ達は互いに顔を見合わせて怪訝な顔を作った。

「キリオお前……こんな時になに言って……」

「千歌にも言われたんでな……俺は自分の好きに生きると決めた。だから好きにさせてもらう。お前達は手を出すな」

取りつく島もない様子で語るキリオを見て、リュウヤは呆れた表情で助けを求めるように千歌の方を見やる。

困ったように肩をすくめる彼女に細めた眼を向けた後、ため息交じりに彼は言った。

「……なにお前、まさかまた子供を戦わせるわけにはいかないとか言っちゃうわけ?」
「そうじゃない。ただこれから起こる戦いには……俺一人で挑まなきゃいけない気がするだけさ」

「気がするって……そんな不確かな予感だけで……」

「それが人間つてもんだろ」

不安げなミカの言葉にすっぱりとそう返すキリオ。

「お前達の気持ちはわかってるつもりだ。だが今は俺を信じて欲しい。……………エボルトと完全に決別するためにも、必要なことなんだ」

何度も空間を交錯する黒と虹。

テレポートに等しい高速移動で襲いかかってくるエボルに対し、ビルドもまた最適の成分を選び出しながら同等の速度で攻撃を防いでいく。

「——ッ!!」

胸部のリアクターで選択した成分を調合。瞬時に能力を発揮させる。

“忍者”の成分で作り出した分身でエボルを囲み、“ロック”の力で大量の鎖を生
成。それを一斉に伸ばして奴を拘束する。

間髪入れずに“ライト”の成分を引き出し、凄まじい電撃を流し込んだ。

……この程度の攻撃ではエボルには届かないことはわかっている。すぐに次の手

を打たなければ。

「チィ……！」

漆黒の波動が拡散し、奴の拘束が解かれるのと同時に接近。『ダイヤモンド』の力で硬質化した拳に『ドラゴン』のパワーを相乗させて叩き込んでいく。

「——ッ!!」

ビルドの放った打撃はその全てが叩き落とされている……が、エボルト自身も反撃に出る余裕はないようだった。

60本全てのフルボトルを掛け合わせても奴のスペックを超えることは難しい。よってあらゆる成分を状況によって使い分け、手数でカバーするしかない。

それだけのことをやって——やっとう角の戦いへと持っていける。

エボルトリガーが全ての成分を犠牲にして復元したものならば、こちらのジーニアスはその真逆。全てのフルボトルを結集して生み出した対極の力。

（たとえば簡単には勝てなくとも……そう易々と負けてやるつもりもないぞ……ッ!!）

繰り出した一撃がエボルトに受け止められ、静止した直後に互いに迫った複眼を睨む。

「どうしたエボルト……完全体の力はこの程度か……!?!」

「ほぎけ」

「……………」

こちらの腕を弾いたエボルトは身を捻り、禍々しいオーラをまとった回し蹴りを放つ。

反射的に“タンク”、“ダイヤモンド”、“ガトリング”を掛け合わせた障壁を形成し防御した後、咄嗟に奴との距離をとる。

……一瞬でも反応を遅らせてはいけない。

ハザードレベルも拮抗している現時点では奴との戦いは動きの読み合い。1秒でも対応が遅れれば命取りになる。

《ワンサイド!》

「ふっ……………」

キリオがベルトのレバーを回すと、連動するように装甲の半身を覆っていた暖色系のボトルが発光。

《ジーニアスアタック!!》

赤い輝きを右手に宿したビルドが拳を握りしめ特攻。前方で構えていたエボルに強烈なストレートパンチを放った。

「小癪な……!」

「」

《逆サイド!》

両腕を交差させたエボルにそれが防がれると同時にすぐさまレバーを操作。今度は寒色系のボトルが煌めき、右足にそのエネルギーが充填される。

《ジーニアスブレイク!!》

「!？」

エボルトの組んでいた腕に追い打ちをかけるように蹴りを叩き込み、殺しきれなかった衝撃が奴の身体を後方へ仰け反らせる。

（次……!）

再び肉薄し、追撃をかけようとしたするが――

「……調子にのるなよ」

「……！しまっ——！」

前に意識を集中させていたキリオの隙を突き、エボルトは瞬間移動で彼の背後へと回る。

《Ready go!!》

《ブラックホールフィニッシュ!!》

《チャオ!》

「ぐお……っ!!」

意識外からの攻撃がキリオの脇腹を捉え、道路を挟りながら海岸へと吹き飛ばされた。

大量の土煙が舞うなか、痺れるほどの衝撃を受けた身体に必死に力を込めて立ち上がる。

「……っ……!!」

「まさかその程度の力でオレを倒そうなどと……本気で思っているんじゃないだろうな？」

徐々に歩み寄ってくるエボルトへと視線を向け、キリオは仮面の下で苦しそうに表情を歪ませた。

「どれだけの力を合わせようと……地球の技術で誕生した贗作を使用している限りは、決して届きはしない」

キリオの装着しているビルドドライバーを指し、嘲笑うように奴はそう語る。

「お前の選ぼうとしている道とオレの歩む道では……そもそのスケールが違いすぎる。星をも喰らう進化の前では、お前の創り出した希望など塵に等しいと思い知るがいい」

「……………」

刹那的に放たれた光弾がビルドの胴体を射抜く。

背後にあつた海を巻き込みながら広がっていく爆発の中心で、キリオはバラバラになりかけている思考を少しずつ掻き集めた。

（確かに……………お前の力は絶大だ）

火星の王妃ですら仕留めきれなかつた災厄の力。

無限の進化を押し止めるなんてことは1個体では到底成し得ることのできない夢物語なのだろう。

……………だからこそ、自分は団結を選んだ。

海の音が聞こえる。共鳴するように響き合っているのがわかる。

5年前……砂浜で目覚めた時には感じられなかった海の——いや、世界の声が耳に滑り込んでくる。

宇宙を漂っていた時間では絶対に感じられなかった感情が……ふつつつと湧き上がってきた。

「この星ではな……孤独な力つてのはあまり意味を持たないらしいぜ」

「なに……？」

震える足を手で支えながら海中から立ち上がり、エボルトへと向き直る。

「戦う場所がここじゃなかったら……お前に勝つ望みは永遠に生まれなかっただろう。だが今立っているのは火星でも……ましてやブラッド星でもない、俺達の地球^星だ」

……今なら確信できる。かつてベルナージュとの戦闘で感じた不可解な現象。とうに限界を迎えていたはずの彼女が見せた「見えない力」。

それは想いだ。

「誰かを守りたいという願いが……誰かを想う心が……物理現象を超越した力を引き出してくれる。それは独りでは何も生み出せず、そこにあるものを破壊することしかでき

ないお前には……決して砕くことはできない」

5年という短い期間でも……地球で過ごしてきた自分にはわかる。

記憶を失っている間に加え……今もこうして仮面ライダーとして立ち上がっているのは、これまでずっと支えてきてくれた仲間がいるからだって。

その過程で得た力は、エボルトにだって負けはしないと断言できる。

「世界にまで手を伸ばすことはできないだろうが……それでも俺は、あいつらの居場所を守り続ける」

「言い残すことはそれだけか？」

「っ……………!!」

直後、視認できないスピードで肉薄してきたエボルが放った手刀がビルドを貫いた。

胸部に備えていた七色のリアクターが黒く変色し、そこを中心として徐々に風化するようにスーツが朽ちていく。

「思えば上がるなよ。手間はかかったが火星の文明は滅びた。どれだけ抗弁を垂れようとも絶対的な力の前では全てが無意味ということの何よりの証明だろう。……それは地球も例外じゃない」

「ぐっ……………」

「オレに壊せないものは存在しない。それを思い出しながら無様に死ね……!!」

大量に注ぎ込んだ毒がビルドの装甲を崩す。

七色の粒子となっていくキリオだったが、完全に消滅する直前――

「それは……どうかな？」

からかうような調子で、彼は不敵に笑った。

「これは………」

《フルフルマッチです！》

「なに――!?」

《フルフルマッチブレイク!!》

エボルトが異変に気付いたのも束の間、突如として海の中から現れたもう一人のビルドによって強烈な斬撃が放たれる。

迫り来る大剣に反応しきれず、エボルは無防備な胴体に渾身の一撃を許してしまった。

「ぐおおおお……ッ!？」

遅れて身を屈めるのと同時に理解する。

……先ほど霧散したビルドは分身。『忍者』の成分で作りに出した身代わりだったのだ。

おそらくは最初に海中へ叩き出された時点で入れ替わっていたのだろう。完全な虚をつかれた。

「貴様……」

「悪いが馬鹿正直に正面から突っ切るほどお人好しじゃないな。万丈のようにはいかないだろう。」

エボルトの半身であった故に、エボルトの思考を完全に把握している。

ジーニアスの能力もあるが、それに加えて奴は自分自身の狡猾さを見誤った。

「……今の時点でお前と決着をつけるのは難しいみたいだな」

一変して冷静さを取り戻したエボルトが不意にそうつぶやく。

「今日のところはチャオ、と言っておこうか。……次に会うときは、この星の何もかもを消し去ってやるよ」

そう言った奴は背後に出現した黒渦へと足を踏み入れ、徐々にその場から姿を消していく。

「……………次、か」

波の音だけが聞こえてくる砂浜で、変身を解いたキリオはもう1人の自分が言い残した怨念に哀しげな瞳を浮かべていた。



「つたく……今回は撃退できたからよかったけどよ、次に戦うときは絶対に1人じゃ行かせないからな」

「わかってるって」

小言を浴びせてくるリュウヤを適当にあしらいながら手元にあるスプーンで皿に盛りつけたカレーライスをすくう。

「今後はこういう無茶は禁止だからね」

「わかったつつの……。ていうか、好きなようにしろって言ったのは千歌じゃないか」
「無茶をしろとは言つてない！」

「ま、まあ……。無事で何よりだね」

浦の星女学院に避難させていた千歌達も十千万に戻り、今はこうして旅館の設備を借りて共に食卓を囲んでいる。

街に人がいなくなつてからは身体を休める時間もロクにとれなかつたので、後々後悔しないようこの時間を楽しませてもらうとしよう。

「……………」

キリ才はふと思ひ思ひの会話に花を咲かせている千歌達の表情をうかがい、さりげなく目を伏せた。

……みんな追求はしないでくれているが、自分がエボルトの半身であるというのは紛れもない事実。千歌やリュウヤを除いた彼らがそれをどう思っているのか気になるところだが――

（ま……。今それを聞くのは野暮つてものか）

キリ才はふつと綻ぶように笑つた後、改めてカレーを口へ運んだ。

「そういえば……葛城の容体はどうだ？」

皆が夕食を食べ終える頃、ふと思ひ出したようにキリオがそう尋ねる。

ユイもまた千歌達と共に浦女へ一時避難をしていたが、やはり依然として目を覚ます気配は見せていないらしい。

「体調に問題はないと思います。熱もないですし……」

学校にいる間も看病をしていたのだろうミカが小さくそう答える。

「でも……やっぱり目覚めないのは心配だね」

「ユイちゃんだけでも町の外に送り届けて、ちゃんとした治療を受けてもらった方がいいかもしれないすら」

「今の内浦は完全に隔離されてるのよ？……そんなのできっこないわ」

葛城ユイ——この地球において初めて精神側のエボルトと接触した少女。

奴に感情が芽生えるきっかけとなったのが彼女であるなら……彼女だけが知り得る、

奴に関して何かしらの情報を持っているかもしれない。

早い回復を望みたいが……この調子だとまだ少し時間がかかるかもしれ――

「うわあ……なんかいい匂い。カレー……ですか？」

声の飛んできた方向に全員の視線が集中する、と同時にその目が見開かれる。

よろよろとした小鹿のような足取りで階段を降りてきた人物。

今まさに深い眠りから覚めました、とでも言わんばかりにだらしなくはだけた浴衣姿を見せながら――1人の小柄な少女が、キリ才達のいる居間へやってきた。

「……………」

信じられないものを目撃したかのような面持ちで棒立ちしていたミカの唇が震える。
脇目も振らずに駆け出した彼女は、寝ぼけた様子でぼんやりと階段付近に立っていた
少女に抱きつくと、

「う……………う……………！わあああああああ……………！！」

幼い子供のように、大粒の涙を流しながら大声で泣いた。

「……………ふえ？」

間の抜けた声と表情を見せた少女が首を傾ける。

栗色の前髪から覗く瞳からは一切の濁りは感じられない。

エボルトではない————本当の葛城ユイが、そこにいた。

第69話 遅めのモーニング

「ふう……」飯をきちんと味わえたのは久しぶりだよ。生きてるって素晴らしい！」

大鍋に残っていたカレーを1人で30分もしないうちに平らげた後、少女は心底幸せそうな笑顔を見せながらそう言い放った。

「うーん……お腹いっぱいになったらまた眠くなつてきちゃった……」

「ちよ、ちよつと待った！待った!!」

「ふわっ?! ああ、ごめんなさい……」

緊張感に満ちた眼差しで彼女を観察していた千歌達だったが、やがて船を漕ぎ出した少女を見て慌てて彼女の意識を引き戻そうとする。

「えつと……ユイちゃん……だよな? エボルトじゃなくなつて……」

気を取り直して千歌がたじろぎながらそう尋ねる。

少女—— ユイはきよとした顔で自分を覗き込んでいる千歌達に視線を巡らせた後、微妙に引きつった笑みを浮かべながら口を開いた。

「初めまして……っていうのもおかしい話だけど、まあ……そういうことになるね。」

……うん、あたしは正真正銘、葛城ユイだよ。ずっと奥の方で覗いてたから、君達のこともわかる」

ユイはふと横に目を逸らし、月に背中をさすられながら肩を震わせていたミカの方を見やる。

「やつときちんと謝れる。君には迷惑ばかりかけちゃったから。………今までなにでもできなくて本当にごめんね、みーちゃん」

涙で真つ赤になった瞳と視線を交わし、ひどく申し訳なさそうに彼女はそう伝えた。

「う……………ひぐつ……………ユイちゃあああん……………!!」

「おーよしよし」

何度目かの抱擁を交わす2人に思わず千歌達の瞳にも涙がにじむ。

(これが……………本当の葛城ユイ)

少し離れた壁にもたれかかり、腕を組みながらその様子を眺めていたキリオは何とも表現し難い不思議な感情に襲われていた。

本来の彼女を見るのは初めてということもあるが、自分の片割れが憑依してたという事実が妙にとつつきにくくさせる。

「……………ん」

泣きじやくるミカの背中を優しく叩きながら、ユイはふと視線の先に立っていたキリオを見て軽く会釈をしてきた。

反射的に手を上げて返答するキリオだったが、なぜだか余計に気まずい空気が形成されていくのを肌で感じていた。

「おおー！すつごおーい!!」

タオル一枚の姿で露天風呂に躍り出たユイが大げさに腕を広げながら高らかに声を上げた。

「千歌ちゃん家が旅館なのは知ってたけど……実際温泉に来てみるとすごい開放感!!」
「えへへ……それほど……」

「ユイちゃん、あんまり騒ぐと足滑らせちゃうよ……?」

ぞろぞろと後ろに続くのは A q u o u r s、S a i n t S n o w、そして月やミカも含めた女性陣。

ドタバタの連続でお風呂に入る暇もなかったなあ、という千歌の一言を発端に、いつの間にやら全員で身体を休めようという方向へ運んでしまい今に至る。

「ようし! ミーちゃんおいでよ、背中流してあげる!」

「じ、自分でできるよお……」

にこやかな雰囲気のまま早足で洗い場へと向かっていく2人の背中を見つめ、千歌達は自然と微笑ましげな表情を浮かべた。

「……また会えてよかったね」

「うん」

隣にやってきた曜の言葉に頷き、千歌は出会った当初のミカとユイを思い返すと波のように押し寄せてくる感慨深い気持ちに眼を細める。

西都を代表するスクールアイドルとして活躍していた B e r n a g e——その正体が難波重工の尖兵だと知った時は本当に衝撃を受けた。

キリ才達との戦いを通して今の関係に落ち着けたのが不思議なほど……あの頃の彼女達には余裕がなかった。いや、彼女達というよりはミカが、だ。

全ての元凶がエボルトと判明した時は……安心、と言ったら少しおかしい気がするが、それに近い感情は確かにあったと思う。

他人を傷つけるなんてこと、平気でやれるはずがない。どんな形であれそこには理由があるのだと知ることができて……本当によかった。

「さて、じゃあ私達も今日の汗を流すとしますか」

「だね」

浸るのはほどほどにしておき、千歌達も疲労が溜まった身体を引きずるように洗い場へと持っていく。

普段は下手に騒げない分、その夜の十千万旅館はかつてないほどの賑わいに満ちていた。



「別に私達まで洗いっこしなくてもいいじゃない……」

「洗い場の数が足りないんだからしょうがない啦」

「じゃあルビイも理亞ちゃんの背中流してあげるね」

「わ、私はいいわよ……」

「ふふ」

和氣藹々とした様子を見せる皆を湯船に浸かりながら見つめていたユイが微かに笑う。

「今更だけど……ユイちゃん、もう動いて大丈夫なの？」

「平気だよ。病氣してたわけじゃないんだし」

何気なく気遣いの言葉をかけてくれた千歌にそう胸を張った後、少しだけ眉を下げた彼女は俯きながら言った。

「……なんか不思議だな。ちよつと前までは、こんな風にみんなと楽しい時間が過ぎるなんて夢にも思わなかったのに」

「そう思うのもしようがないよ。全部あいつが……エボルトが悪いんだから」

「あはは……確かにそうだね」

眉間にしわを寄せながらそう語るミカに苦笑しつつ、ユイは眼前のお湯をすくい上げながら静かに語り出した。

「みんなは……やつぱり彼のこと、恨んでるよね」

「え？」

「あ、それが普通の認識だと思うよ。でもね、あたし……ずっと彼のなかで、彼のこれまでの生涯を見てきたんだ」

「彼つてエボルトのこと……だよな？」

首を傾けながらそう尋ねてきた曜に頷きつつ、ユイは何かを思い出すように湯船に映る自分を見つめながら続ける。

「あたしも彼のしたことは絶対に許しちゃいけないと思う。……でもそれとは別に、仕方ないんじゃないかなっていう気持ちもあるんだ」

「仕方ない？」

「うん。……ほら、あたし達だつてお腹は空くでしょ？」

いまいちピンときていない様子の曜、千歌、ミカを見て考え込むように「えー」と唸るユイ。

やがて整理がついたのか、3人にそれぞれ視線を注ぎながら彼女は再び口を開いた。「彼にとつて惑星を滅ぼすつていうのは……あたし達にとつての食事と同じ、本能で動いてるだけなんだよ。……だからそもそも、彼はそれが正しいとか間違っているとか、そういう認識は持っていないと思うんだ。それが『当然』つていうか……」

「……でもあいつは楽しんでた」

ユイの言葉を遮るようにミカがそうこぼす。

そう、エボルトは破壊を楽しんでいる。感情を得たことで地球人が思い通りに破壊していく過程に悦楽を見出しているのだ。

感情というある種地球の生命との共通点を持った今でも尚破壊を続けているということを考えれば、それはもはや本能や当然といった言葉では片付けることは不可能だ。

……少なくとも“今のエボルト”は、真正銘邪悪な心だけで動いている。そういった点でもキリオとは真逆の性質を持つと言えるだろう。

「そう……なんだよね。あたしのせいで彼は…… “楽しい” っていう感情を独り占めするようになった」

「そんなのユイちゃんが気にすることじゃ……」

「ううん、あたしのせいなんだよ。……彼が目覚める直前のあたしって、あんまり余裕なかったからさ。スクールアイドルに必死になりすぎてたっていうか……。あたしがちゃんとした感情を学ばせてあげられたら、彼もああはならなかったのかもしれない」
もの悲しげな調子でそう言ったユイから視線を外し、ミカは悔しそうに唇を噛んだ。

……そうだ、本来の彼女はこういう人だった。

エボルトが感情というものを悪い方向に捉えたのも、奴が取り憑くきっかけを作った

のも決してユイのせいではない。それなのに彼女は自身を責め続けているというのか。「戦うしか解決策がないのはわかつてる。……けど、彼の『間違った当たり前』を最後まで正せなかったことは……ずっと後悔してたんだ」

「間違った当たり前……」

どこか遠くを見るような眼差しで千歌が復唱する。

ここにはいない青年の面影が脳裏によぎり、ふと浮かんできた疑問に瞳を細めた。

（もし何かが違っていたら………キリオくんも——）

「万丈、お前は葛城と話さなくてもいいのか？」

「え？」

いつものようにキーボードを打ち何かの作業を行っていたキリオが不意にリュウヤへとそう投げかける。

上の浴場で羽を伸ばしているであろう少女の顔を思い出した後、彼は手を振って飛んできた質問を否定した。

「あいつらの間には入れねえよ。もともと特別仲が良かったわけでもないしな」

「そうか？」

聞きたいこともあるだろうに、意外なところで気が利く奴だ。

まあユイ自身にもリュウヤには窮地を救ってくれた恩がある。いずれ向こうから話しかけてくることもあるだろう。

今はそれより――

「よし……これで。待たせたな猿渡」

「出来たのか？」

手にしていたはんだごてを台に置き、机の中心にあったものを掴んではタクミに向けて差し出す。

リュウヤの持つクローズマグマナツクルと形状は酷似しているが、その色は氷を思わせる明るいブルーで染められている。

「これが俺の強化アイテム……」

「そう、《グリスブリザードナツクル》だ」

来るべき決戦に備え、密かにグリスとローグにも強化アイテムを製作しようと計画を立てていたのだ。

ミカが扱うものはまだ設計段階だが、できるだけ早く実戦で使えるように仕上げなければ。

「ただ少し問題もあってな。……ちよつと手貸してみろ」

「ん？・なんでだよ？」

タクミが首を傾げながら前へ出した右手に触れ、キリオは数秒間じつと何かを探るように黙り込む。

「ハザードレベル4、5……か。やっぱりな」

「なにか問題があるのか？」

「そーいやお前はまだ知らなかったか。万丈にやったマグマナツクルはハザードレベル5以上でないと扱えない。お前のそれも同じ設計で完成させたものだから、要求されるレベルは同等だ」

「ハザードレベル……5……!?!」

部屋の隅で呑気にプロテインを喉に流し込んでいたリユウヤを見てタクミが目を見くする。

手にある空色のナツクルとキリオへ交互に視線を注いだ後、恐る恐る彼は尋ねてきた。

「調整することはできないのか……?」

「悪いが別にデータを構成している時間はない。エボルトがいつ襲撃してくるかもわからないしな。……それに、それぐらいのハザードレベルがなければこの先奴には傷一つつけられないと思った方がいい」

「氷室が使うのも同じなのか?」

「そうなるだろうな」

確かに……これまでの戦いを思い返すとキリオの言葉はもつともだ。

だが何らかの形でエボルトに関わっているキリオとリユウヤはともかく、ただの間であるタクミとミカがその領域へ踏み入れることは可能なのだろうか。

「だが深く心配する必要はない。お前達次第では問題なく扱えるようになる方法はないわけでもないんだからな」

「本当か!?!」

「ああ」

身を乗り出してきたタクミから仰け反って距離をとりつつもキリオは淡々とした口調で続けていく。

「氷室——は風呂だったな。あいつがいる時にも改めて話したいことなんだが……最初に言っておくと、お前達はそれぞれ当初の目的を達成しちまつてるだろう」

「当初の……」

言いかけたところでキリオの言わんとしていることをなんとなく察知したタクミは、口をつぐんだまま小さく頷いた。

タクミが仮面ライダーになったのは……理亜と聖良を危険な状況から救い出すため。そしてミカはユイのためだ。

タクミの場合は現在もまだ完全に安心できる状況とは言えないが、戦争が終わったことを考えれば最初の願いは成就している。

ミカは言わずもがなだが……彼女もエボルトという存在が露見したことに加え、ユイ自身の肉体が戻ってきたこともあつてかすつかり年相応の振る舞いを見せるようになった。

「ライダーシステムを動かすには使用者の強い『想い』が鍵になる。もしお前達が新たに目標となる信念のようなものを見つけてることができたのなら……今以上にハザード

レベルを向上させることもきつと不可能じゃない」

「……………信念」

確かにここ最近の自分は……みんなと過ごしていくなかで、どこか安心しきっていたような気がする。

要は緩んだ帯を締め直せというわけか。

「でもいきなりそんなこと言われてもな……」

「なんださつきから聞いてりやよお。んなもんすぐ近くにあるじゃねえか」

いつの間にかスクワットを始めていたリュウヤが部屋の奥からそう野次を飛ばしてきた。

「猿渡は黒澤に惚れてるんだろ？なら、『この戦いが終わったら黒澤と結婚するんだ』とか勝手に思っときやいいだろ」

「なに殺そうとしてんだよ」

「え？なにが？」

「意味わからないのに使ったのかよ。……ていうか、ルビイちゃんはみんなのアイドルであつて、んな風に私物化していい子じゃねんだよ!!」

（うわっ……………うるさくなってきた）

そばで騒がしくなる予兆を感じたキリオはすかさずイヤホンで耳を塞いでは再び作

業へと戻る。

この研究室に皆が入り浸るようになってまだ日は浅いが、このように賑やかな雰囲気
が満ちるのがずっと以前からの出来事のように感じる。

(……………まあ、嫌いじゃないけど)

とても口に出せないセリフを頭のなかに押し込み、キリオは緩んだ口元に気づかない
まま黙々とキーボードを打ち続けた。



「鷺尾さん、この資料なんですが——」

「鷺尾さん、お電話が繋がって——」

「鷺尾さん、会長のご遺族の方から——」

「鷺尾さん」

幾度目かの呼びかけでようやく重い瞼を開ける。

「こんなところでお休みになられてはお体に悪いですよ」

「ああ……………申し訳ありません」

「では、お先に」

軽く頭を下げた同僚を見送った後、スーツ姿の女性——鷲尾風華はつきりしな
い意識のままデスクに目を落とした。

難波会長が亡くなってからというものの、度重なる激務は絶えることを知らずに側近で
あつた自分に降りかかってくる。

多方面の対応に追われているうちにいつの間にか眠ってしまったのか。……そ
ういえば近頃はロクに睡眠もとれていなかった。

（ちゃんとしたご飯も食べられてないし……………お酒も吞めてない…………）

少し前までは仕事帰りに弟と行き付けのダイニングバーに行くのを密かな楽しみと
していたが、今ではそんな些細なことも叶わなくなってしまった。

「……………」

疲れ切った身体を伸ばす余力もないまま、視界の端に見える書類の山に眉をひそめ
る。

（会長がいなくなって施設の子達も不安だろうし、そろそろ顔を見せなきゃだな

.....)

不安と後悔だけが日に日に増していく。

誰もいない事務室のなかで、風華は微かに口を動かし消えそうな声量でこぼした。

「雷斗.....」

「お疲れのようだな」

不意に投げかけられた言葉に肩を揺らし、反射的に背後へと振り返る。

「.....!? あなたは.....!!」

「久しぶりい、風華サン? お勤めご苦労様」

紅のベルトを巻いたコブラの異形。

不気味なグラデーションが施されたマントをなびかせながら、音もなく現れた怪物が

こちらに歩み寄ってきた。

「……地球外生命体が私に何の御用で？」

意味がないとわかっていながらも精一杯の警戒心を込めた視線で威嚇する。

「実は内浦に潜んでいる邪魔者を排除するための人員が欲しくてね。難波重工が保管している最新の兵器を拝借できたらと思っただが……どうだ？」

「……ハードガーディアンのことですか」

まだ戦争が終わりを迎える前、難波重工が水面下で開発を進めていた改良型のガーディアン。

実戦投入される前に代表戦で決着がついてしまったため、その存在が公に知られることはないまま大量に在庫を抱えることになったのだが……以前から難波重工にいたエボルトなら承知していてもおかしくはない。

「私があなたに協力すると思いますか？」

「タダでとは言わんさ。そうだな……答え次第では、地球を滅ぼした後オレに仕えることを許してやってもいい」

そう言つてエボルトが取り出したのは……奴自身が身につけているものと同じ、紅のドライバーだった。

「人間でも扱えるよう調整したものだ。これを使えば、お前は人智を超越した力が手に

入るぞ?」

差し出されたそれを見つめた後、椅子から立ち上がりエボルトと目線の高さを合わせる。

数秒の沈黙の後、風華は迷うことなく――

「――ッ!」

瞬時に懷から引き抜いたネビュラスチームガンで奴の手にしていたドライバーを射撃。床へ弾き出した。

同時に銃口を白いコブラの複眼へと突きつけ、抑えきれない感情がこもった声で言い放つ。

「私がそんなに冷たい人間に見られていたとは……さすがに少しショックですよ……!」

引き金を絞り数発の弾丸をエボルトに浴びせるが、まるで効いている様子は見られない。

「そうか――なら仕方ないな」

「ぐう……っ!」

エボルが軽く振った腕が風華の腹部を捉え、室内に並べられたデスクを吹き飛ばしながら壁に激突する。

苦悶の表情を浮かべる彼女に、エボルトの冷徹な視線が刺さった。

「オレなりに気を利かせたんだがなあ……。自ら破滅を望むというのなら、今すぐに引導を渡してやるよ」

「――！」

瞬く間に空間が捻れ、尋常ではない爆発が起きる。

エボルトの放った光弾は一角に留まらず、この難波重工本社ビルを半壊させるほどの威力を見せた。

「……逃げたか」

メラメラと揺らめく火柱の奥に風華の姿が見えない。ネビュラスチームガンのワープ機能を使って逃走したのだろう。

「クハハハハ……ッ!!フハハハハハハハハハハ!!」

非常用ベルが建物全体に鳴り響くなか、異形は炎が燃え広がる部屋で不気味な笑い声

を響かせていた。

第70話 終末のランチタイム

——犯した罪は消えない。

気づいていないふりをしていた。だが実際には聞こえていたんだ。

薙ぎ払われる人々の断末魔が……今でも張り付くように耳に残っている。

……呪いは、決して消えない。

「ふっ……っ……はっ……っ……だあ!!」

「っ…………！」

すぐそばから波のさざめきが聞こえる砂浜。

Tシャツにジャージズボンという極めて動きやすい出で立ちの少年と少女が、お互い遠慮なしにせめぎ合っている。

「だりやあぁッ!!」

「わっ…………！」

少年の放った横薙ぎの蹴りが正面から少女を捉え、たまらず足を滑らせた彼女は尻餅をついてしまった。

少年——タクミは肩を上下させながらもまだ余裕ありげな様子で少女を見下ろした後、何やら腑に落ちない表情を浮かべる。

「…………大丈夫か？」

「う、うん……」

「少し休憩したほうがいいな」

転倒した少女——ミカの手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる。

キリオから強化アイテムを使えるようになるには今以上にハザードレベルを上げる必要があると通達されてから2日ほど経った。

新たな信念とやらが見つかるまで少しでも実力を上げようと互いに模擬戦を行って

いた2人だが……………拳を交えていくうちに、タクミはふと違和感を覚えた。
(……………いつ、まさか……………)

「ん？」

背後にある十千万旅館から駆けてくる足音に気がつき、振り返る。

「ちようど休憩してたところ……………はいこれ。こまめに水分とって」

「ああ」

「理亞さんありがとう」

程よく冷えた水が入ったペットボトルを2本持ち運んできた理亞が砂の上に座り込んでいた2人に並び、腰を下ろす。

タクミは受け取った水に口をつけつつ、幸福感に満ちた顔で同じように水分補給をしているミカに対して疑念に満ちた目を向けた。

(……………やつぱりそうだな)

「なんか、よく笑うようになったわよね、ミカ」

「えっ？」

自分を飛び越えながら投げられた呼びかけに思わずタクミが肩を揺らす。

「そ、そうかな……」

「ユイが帰ってきたのが相当嬉しかったのね。あれからずっとニヤニヤしてるわよ。ね、タクミ?」

「ああ」

とりあえずは当たり障りのないことを言っておく。

現在自分が抱えている「違和感」はまさにミカがよく笑顔を見せるようになったことに関係しているのだが………まだ確信は持てない。とことん試してみる必要がある。

「氷室、次は変身して戦^やるぞ」

「え? う、うん………わかった」

生身での戦いはウォーミングアップ程度にしかない。真にハザードレベルを上げるのならやはり実戦形式が一番だろう。

……それに、ライダーとしての戦いならば、こちらの疑問に対する答えもすぐにわかる。

「変身!!」

《ロボットイングリズ！ブラア！！》

《クロコダイルインローグ！！》

《オーラア！》

理亞に見守られながら2人の戦士が対峙する。

徐々に距離を縮めていったグリズとローグは……………ほとんど同時に右手による打撃を繰り出した。

「——ツ!!」

●●●

「氷室が弱くなった？」

「ああ」

鍛錬を終え、昼食をとるために旅館に戻ってきたタクミは向かい合うように席についていたキリオとリュウヤに自らの疑念を打ち明けた。

「さつきもあいつと試しに一戦かましてきたんだけどよ……」

……先ほどの戦闘、制したのはタクミだった。

以前のローグならば例外を除きあらゆる攻撃を跳ね除ける防御力を駆使して冷静に、且つ迷いなく戦局を自分の望む方へと持つて行くことができただろう。

だが今はどうだ。

『うつ……!?!』

防御の姿勢すら必要ないはずなのに、打撃が迫るとまるで怯えるように身体を縮ませる。

『ぐう……っ!?!』

いざ攻撃を喰らっても大したダメージはないはずなのに大げさに痛がるような反応を見せる。

『きやあっ!?!』

しまいにはこちらの猛攻に耐えることもできずに吹き飛ばされ、強制変身解除だ。

……今なら確信が持てる。彼女は確かに以前よりも戦闘における技術や精神が衰えているのだ。

「あいつ……葛城が帰ってきて気が緩んでるんじゃないか？」

タクミの言葉を聞いて考え込むように顎に手を添えるキリオ。彼もどこか心当たり

があるのか、その表情はほんの少しだけ引きつって見える。

「いまいち事の重大さが捉えきれていない様子のリュウヤは、首を傾けてはタクミを見上げながら言った。

「猿渡が強くなっただけじゃねえか？」

「そうだとしても以前のような迫力がなさすぎる。代表戦を思い出して、新兵器で挑んだ戦鬼と途中まで渡り合ってたくらいだろ？」

確かに、とリュウヤの横でキリオが頷く。

代表戦でのミカ——彼女の瞳からは追い詰められた獣のような、強暴性と闘志が溢れんばかりに感じられた。

「うーん……俺にはよくわかんねえけど……」

「あれを見ても同じことが言えるか？」

「“あれ”？」

不意にタクミが指した方向へリュウヤとキリオの視線が移る。

今日の昼食当番である千歌と月……そしてミカが台所に立っている光景が見えた。

「あ、ユイちゃんおはよう」

「んー……おはよう……」

今頃目を覚まして階段から降りてきたユイに気がついたミカが作業の手を止め、彼女

へ駆け寄る。

「ん……この匂いは……海鮮パスタ？」

「そうだよ。果南さんが持ってきてくれたお魚と合わせてみたんだ。味見してみる？」

「いいの!!」

「はいあーん」

「あーん！」

「緩みきつてんなあ……」

これ以上ないほど幸せですと言わんばかりの笑顔でカップルじみたやりとりを見せつけてくる2人に、傍らでその光景を眺めていたキリオとリュウヤが苦笑する。

確かに今の様子を見るとタクミが語った不安も頷ける。

ハザードレベルの変動はある程度ならあり得るだろうが、極端に下がるなんてことはまずないはずだ。よってミカの戦闘力の低下は単に本人の意識が以前のそれとは差が生まれてしまっているということだろう。

（強化アイテムに限らず……エボルトとの戦いで無駄な犠牲を払うのを防ぐ意味でも、できる限りハザードレベルは上げていきたい）

このまま特訓を続けて順調に実力の向上を図ればいいタクミはともかく、ミカに関しては危惧すべき不安要素なのかもしれない。……どうしたものか。

「ああ……やっぱり、皆さんもそう思いますか？」

居間にいた皆がちょうどパスタを食べ終える頃。

思い切って現在のミカの状態について尋ねてみたところ、意外にも本人にもその自覚はあるようだった。

「近頃はなんだか前よりも痛覚が鮮烈に感じる気がして……思うように動けない時もあるんです」

「あー……そういえばみーちゃん、小さい頃から痛みには人一倍敏感だったからねえ」

横に座っていたユイがおかわり3回目のパスタを口へ運びながら何気ないトーンで

そうこぼす。

「今まではユイちゃんを助けるという目標があつたから頑張つてくれました。……だから確かに、それを達成したことから意識が低下しているという可能性も否定はできません」

俯いたミカが申し訳なさそうにそう口にする。

元々戦うことに対して積極的ではなかったのが、ユイが戻ってきたことでその影響が顕著になつてしまつたということか。

「でもよく笑うようになった……つていうのは、別に悪いことじゃないと思うよ」

一連のやりとりを横の席で見ていた月は不意にミカの方へ身体を向き直し、人差し指を立てながら励ますようにそう言った。

「常に殺気立つてるのもどうかと思うし……そこまで気負う必要もないんじゃないかな」

「ま、たしかに」

「そっだよみーちゃん、元気出して」

月の言う通りだ。

状況が状況なのでつい戦闘のことばかり考えてしまうが、氷室ミカという人間の壊れかけていた心が治り始めていると思えばそれは否定すべきことではない。

「……でも、わたしはみんなの力になりたいんです。猿渡くんに負けてるようじゃ……到底エボルトを倒すなんて……」

「微妙に俺のことデイスってないか？」

「……？え？」

「天然かよ……」

肩を落とすタクミを尻目に、リュウヤは落ち込むように視線を落としているミカにある提案を投げかけた。

「試しに前みたいにワルっぽい振る舞いしてみたらどうだ？ちよつとは調子戻るかもしれないぞ」

「いかにも馬鹿っぽい発想だな……」

「あ？」

「お？」

「ち、ちよつと待って！ワルっぽいってなに……!？」

キリオとリュウヤの睨み合いを遮るように両手を突き出すミカに皆の視線が集まる。

焦った様子で顔を上気させた彼女は、なんのことかわからないとでも言うかのように潤んだ瞳を向けてきた。

「そりゃ……以前みたいにツンツンしてみたらどうだってことだけど？」

「まさか自覚なかったのか？『北都に飼われてたあなたなんかと一緒にしないで』だっけ？あれはかなりムカついたぞ」

「あつ……あれはだって……！……ごめんなさい……」

「いや謝らなくてもいいけどさ」

すっかり萎縮してしまったミカを見て逆に罪悪感が湧き上がってきたタクミは目を逸らしながらそう呟いた。

彼女は基本、他人への思いやりに満ちている……と思う。ただ以前は余裕がなかっただけだ。

「まあ、なにせよハザードレベルを上げる特訓は今後も続けるとしようぜ。お互いに切羽詰まってるわけだし」

反応は面白いがこれ以上からかうのも悪いので半ば強引に話をまとめる。

「……うん」

顔を上げないままそうこぼすミカ。

……テーブルの下で強く握られた手に気づく者は、誰もいなかった。



……今日もエボルトの襲撃はなかった。

「えー……まだ全然足りないけど……むにや……」

（夢の中でも食べてる……）

暗がりのなか、眼前に見える心底幸せそうな親友の寝顔に思わず吹き出しそうになる。

ユイ自身あまり身体が大きくないからか、布団を共有してもまだ少しスペースに余裕があるので全く窮屈にはならない。……むしろ1人で眠るよりいい。

（こんな小さい身体で……これまでずっと——）

胸が締め付けられるような想いに眉をひそめた後、目の前にある彼女の頬に触れる。

……エボルトに取り憑かれていた際、彼女は一体どんな時間を過ごしていたのだろう。

もしかしたら自分では想像もつかないような苦しみを体験したかもしれない。そう思うと余計に息苦しくなった。

（弱気になっちゃ……ダメなはずなのに）

口元を引き締め、ミカは強く瞼を閉じる。

……変化が始まったとすれば、きつと代表戦。あの敗北で自分は思い知らされてしまったのだ。

硬い殻に閉じこもっていただけで、中身はこれっぽちも強くなくていい。

痛みへの恐怖を思い出してしまった今は、たとえローグに変身したとしても……以前のような仮面は被れない。

(もう……どうすればいいのか、わかんないや……)

「大丈夫だよ……みーちゃん」

「え？」

思いがけず近くから発せられた声に反射的に閉じていた目を見開く。

「……寝言？」

依然として寝息を立てているユイは完全に熟睡状態だ。

安心しきった彼女の表情。自分が守りたかったものがそこにある。

……少なくとも今は、それで十分だ。

月明かりが揺らめく水平線の前に立ち、キリオの研究室から拝借したビルドドライバーを装着する。

グリスブリザードナックルを掲げ、タクミは手にしていた薄い青色のボトルをおもむろに振った。

——『そのボトルには黒澤達がつけていたボトルに蓄積されていたデータが込められている。今は変身できないだろうが、武器としてなら問題なく使用も可能なのさだ』

「……っ！」

《ボトルキーン!》

握っていたボトルをナツクルに装填し、それをドライバーへと叩き込む。

「ぐっ……あ……!?」

直後、身体の内側から何かが暴発するかのような強烈な激痛が全身に駆け巡った。

ハザードレベルが足りていないことから起こる拒絶反応——今のままではこれを強化アイテムとして扱うことはできないという何よりの証明だった。

「ぐお……ゲホッ!ゲホッ!!」

急いでドライバーからナツクルを引き抜き、タクミは力尽きるように砂浜へと仰向けになつて倒れこんだ。

「胸が破裂するかと思つた……」

まばゆい星空に目を細めた後、あまり進歩のない現状を呪う。

（俺にはもう……戦^{これ}い以外残つていない。だからこそもつと強くならなきゃいけない……）

周りが見えないまま力を振るい、名も知らぬ兵士を殺めてしまったという罪。気の狂いそうな毎日のなかで、それだけが自分の原動力となつている。

だがそれだけじゃ強くはなれない。

「……新しい信念、か」

エボルトを倒して、地球滅亡をめぐる戦いの幕が閉じた時——自分は何を想って、そこに立っているのだろう。

（いやその前に……いつまで生きていられるか、だな）

「ん……？」

ぱしやり、と誰かが水を弾きながら歩く足音が聞こえ、タクミは咄嗟に上体を起こしては波打ち際へと顔を向ける。

「誰だ……？」

薄暗い空間を誰かがおぼつかない足取りで移動しているのが辛うじて見えた。

「——つて、おい!？」

直後にその人影が意識を失うように自ら海面に叩きつけられたのを見てその場から駆け出す。

「おい、あんた——!!」

海からその人物を引き上げ、急いで安否を確認しようとする。
砂の上へ横たわせ、その顔が視界に入った瞬間、

「……!?」

タクミの瞳に……驚愕の色が混ざった。

「鷺尾……風華……」

ボロボロのスーツを身にまといても尚どこか凛々しさを感じさせる女性。

かつて代表戦で互いに勝ち星を奪い合った——鷺尾風華の横顔が、そこにあった。

第71話 デイナーにはまだ早い

朝方の研究室。

キリオと呼ばれ、日差しの代わりに電灯が照らす部屋の中に訪れたルビイ、ダイヤ、理亜の3人は、それぞれ袖を捲った腕を彼に差し出した。

「……………」

彼女達の腕へ順にジーニアスボトルが突き立てられ、微かな痛みが眉を震えさせる。ボトルから流し込まれた成分が全身へと駆け巡り、3人のなかに刻まれていた“呪い”が解放されていく。

「どうだ？」

「特に変化は……………」

「本当にガスが抜けたんですの？」

「ああ、上手くいったようだ」

全員に対して処置を終えたキリオは、ルビイ達に異常がないことを確認すると安心するように息をついた。

ジーニアスフルボトル——キリオが作り出した集大成とも言えるその用途は

単にエボルトに対抗するための強化アイテムというだけではない。

60種類のフルボトルの成分に加え、ラビットタンクスパークリング、ハザードトリガー、フルフルラビットタンクボトルに込められていた増強、調整粒子……………そしてネビュラガスを取り除くことが可能な解毒機能も備えられていた。

エボルトにハードスマッシュとして肉体を改造されたルビー達の救済。それがようやく叶った。

「これで真正正銘、お前達は人間に戻れた」

「……………」

遅れてやってくる実感に戸惑いつつも、3人は互いに微笑み合う。

ジーニアスポトルで救えるのは彼女達だけではない。塔野首相が保護している元スクールアイドルの女性達。彼女達の身体を犯しているガスを取り除くことも可能はずだ。

(まったく……………お互い忙しいったらありやしない)

昨夜のことを思い出す。

『思っていたよりも元気そうで何よりだよ』

着信のかかっていたビルドフォンを耳に当て、最初に聞こえた一声がそれだった。

エボルトが姿を現したことで世界中が混乱に陥っている。少しずつだが落ち着いてきたのですねに連絡を入れた、とのことだった。

『やはり君は残っていたか』

『あいつを倒すのは俺の……いや、俺達の役目ですから』

『……そうか』

キリオ達の覚悟が既に決まっていることは首相も承知しているようで、必要以上の会話は交わさなかった。

……お互い、やるべきことをやるだけだ。

(仕事がひとつ片付いたところで……あつちの事情を聞くとするか)

居間に集まっていたいつもの顔触れ——千歌達は畳の上に正座している女性へと視線を注ぎ、場に満ちた緊張感に押さえつけられるように黙り込んだ。

「じゃあ……難波重工は今、エボルトの管理下にあると？」

キリオの問いに首を縦に振って静かに肯定するのは……昨晚タクミが連れ帰った女性、鷲尾風華。

戦力を求めるエボルトの襲撃に遭い、この内浦に生き残っている人間がいることを祈って命辛々逃げ出してきたのだという。

……奴は自分達を滅ぼすための軍隊を作り、近いうちに決着をつけるつもりだ。

「虫のいい話だということは理解しています。……しかし今この状況でエボルトに対抗できるとすれば、それはあなたの方以外にありえない」

「だから復讐を果たすために……俺達のもとへやってきた？」

「……はい」

感情を押し殺すように風華はそう答えた。

落ち着いて見える表情の裏に隠れた強い憎悪が伝わってくる。

（確かに戦える人間が増えるのはありがたいことだが……）

全身に巻かれた包帯の下にある火傷に、腹部の打撲傷。平気な顔をしているが、彼女は今も猛烈な苦痛に襲われているに違いない。

とても戦えるような状態ではないのだ。

「キリオくん……」

何か言いたげな目をこちらに向けてくる千歌。

わかっている。無下に追い返したりするつもりは当然ない。

キリオは皆とそれぞれ目配せしながら各々の了承を得ると、向かい側の席に座る風華へと再度切り出した。

「協力することについては喜んで手を取らせてもらう。……だがこちらもすぐに万全の状態とはいかなくてな、打って出るタイミングはこっちで計らせてもらうが、それでも？」

「構いません。ご厚意に預かり、感謝を申し上げます」

深々と頭を下げる風華に戸惑いつつも、彼女が再び顔を上げたところで片手を差し出す。

強く握られた手のひらから伝わる彼女の体温は……とても冷たいものだった。

スクールアイドルというものを……随分前から眺めていた気がする。

それ自体の人氣が爆発した頃には高校を卒業していたため、文字通り“眺める”ことしかできなかったが……もしかしたら自分は、それを楽しむ少女達を羨んでいたのかもしれない。

——難波重工が施設の子供達に施した教育は、まさに洗脳と表現する他ないものだった。

自分達を救ってくれた会長には返すべき恩がある。絶対服従は保護された子供達の正しい姿であると教えられてきた。弟はそれを受け入れていたようだが……どうにも自分は、どこか違和感を覚えずにはいられなかった。それはおそらく常に視界の端にあつたスクールアイドルというエンタメの影響もあつたと思う。

……自分とそのアイドル達の生き方は、まったく正反對のものだったから。

みんな自分のやりたいことを、自分らしくいられることを精一杯やっている。……そんな少女達を見ていると、自分もそうなりたいと思ってしまうのだ。

難波重工にとって自分は失敗作なのだろう。だから安全に日常を過ごすには“完璧”を演じる必要があつた。……弟のような、会長の手足となる人間を。

もちろん自分と弟を拾ってくれた会長には感謝している。だからこそ今日まで誰にも悟られずに生きてこれた。

……だが結局は『演じる』ことに徹してしまった。

やりたいこともできずに――最後まで自分は何者にもなれなかった。

「はあっ……はあっ……はあ……！」

「疲れた……」

「お疲れ様、2人とも」

ハザードレベルを上げるための特訓を終えて外から帰ってきたタクミとミカが居間の畳へと倒れ込む。

理亞から渡されたペットボトルを垂直にして水を補給する2人を見つめると、傍らに腰掛けていた風華は苦い表情で目を伏せた。

「……………」

暗い顔で俯いている彼女に気がついたミカは何か言葉をかけようとするも、すぐにそれを喉の方へと追いやって口を結んでしまった。

「あなた達には申し訳ないことをしました」

前触れもなく謝罪をしてきた風華に思わず目が点になる。

「え……………」

伏せていた瞳をタクミとミカの方へと向け、彼女は冷たい表情のなかに仄かなよどみを見せながら静かに口を開いた。

「猿渡くんやミカさん、それに万丈くんも……………ずっとそばにしながら、私は仮面ライダーとして戦場へ放り出されるあなた達を救うことができなかった。……いや、元より救おうなどと思っていなかった」

拳を握りしめ、奥歯を軋ませる。

何もかも失った今だからこそ……………かつての自分の情けなさが鮮明に浮き出てくる。

目の前で苦悩する子供達に自分が施したのは、戦争の兵器へと覚醒する手助けだけ。ミカの時に至ってはハザードレベル向上のために痛めつけられるのを遠くから眺めて

ただけだった。

「……これまでの非道をお詫びします」

「風華さん……」

「あんたが謝つても償いにはならねえぞ」

自分の真横を飛んで風華に投げかけられた言葉が耳に入り、ミカは隠しきれない驚愕に口を開いたまま振り返る。

腕を組み虚空を見つめながら微かに険しい顔を浮かべたタクミが、突き放すように言った。

「今更ただけ懺悔しようが犯した罪は消えない。……傷ついた人も、汚された想いも、全部……残り続けるんだよ」

「猿渡くん……!？」

あまりにつつげんどんな物言いに慌てふためくミカだったが、当の言葉を浴びせられた風華は取り乱す様子もなく——どこか哀れむような眼差しをタクミへと注いだ。

「そう……ですか。あなたも——」

何かを言いかけて唇を噛む。

やがて意を決したように顔を上げた風華は、2人を視界の中心に収めながら細々と語り出した。

「気休めかもしれませんが……あなた方は何も悪くない。私のような身勝手な大人達に利用された……それだけです。だから猿渡くんもミカさんも責任を感じる必要は

」

どこか苦しそうな表情を作ったタクミがその場から離れようと立ち上がる。

ひどく疲れているように見える彼の後ろ姿に細めた眼を向け、風華は小さく肩をすくめた。

「余計なお世話……だったでしょうか……。すみません、不器用な言い方しかできなくて……」

「い、いえいえ。たぶん猿渡くんもわかっていていると思いますよ」

迷惑がられてしまったかと落ち込む風華に慌ててフォローを入れつつも、ミカは再び影のかかった瞳を浮かべて言う。

「風華さんがそう仰ってくれたのは嬉しいです。……でも、やつぱりそう簡単に割り切れるものでもないと思います。だからこそわたし達は……少しでも人々の役に立てるよう、授かったこの力でエボルトを倒したいと思っていますんです」

そうこぼしたミカを尻目に、風華は下がっていた眉尻を徐々に戻しながら口を開いた。

「よかった」

「……う…え？」

「ああ、いえ……すみません、今のミカさんを見ているとつい……感慨深く思ってしまった
まして」

きよとんとした顔でこちらを見上げるミカの瞳を見つめた後、風華は微かな笑みをに
じませて言った。

「私が言うのも何ですが……この戦いが終わった後、ミカさんにはまたスクールアイドル
を楽しんでももらいたいと思っています。これまで我慢してきた分、精一杯の歌声でこ
の国の人々を励ましてあげて欲しいです」

「もちろんそのつもりですよ。ユイちゃんも帰ってきましたし……あ、その時やる
ライブには、是非風華さんも見に来てくださいね！きつと楽しんでいただけたらと思いま
す！」

「Bernage再始動ですね、応援しています」

暗かったミカの瞳に光が差し込んでいく。

イキイキとした顔で心に決めた未来のライブを思い描く彼女を、風華は微笑ましく見
守っていた。

物陰に隠れながら2人のやりとりを聞いていた者が2人。

「行かなくていいのかよ？」

「えー？だってなんかいい雰囲気じゃん」

栗色の髪をぴよこん、と跳ねさせながらそそくさとその場を後にしようとする少女と、それを追いかけるプロテインを片手に持った少年。

「ま、結局最後まで通せなかった合同ライブはリベンジしたいよねえ。あ、その時はまた万丈くんも招待してあげるね」

「しょうがねえな、考えといてやるよ」

「さあて、そうと決まればA q o u r sやS a i n t S n o wのみんなとも話しつけないとね」

ひそひそと弾んだ声音を交わしながら、2人は静かに旅館の奥へと去っていった。



「……………っし……………これで」

キーボードのエンターキーを叩いた直後、電子レンジを思わせる高音が研究室に響き渡る。

落ち着きのない足取りで巨大装置のもとへ駆けたキリオは、小窓に収められていたものを取り出すと恍惚とした表情でそれを眺めだした。

「かんつぺきな仕上がりだ……」

「また何か作ってるの？」

「うおっ!？」

音もなく横から覗き込んできた千歌に驚き、思わず落としそうになったアイテムを慌てて手中へ戻す。

「相変わず神出鬼没な奴め……」

「あ、それもしかしてミカちゃんのもの？」

「ああ。名付けて『プライムログフルボトル』」

気を取り直して完成したばかりのそれを千歌の目の前へと掲げる。

それはログの特徴である高い防御力を飛躍的にアップさせた性能に加え追加装備も備えてある。まさに迫る決戦に相応しい仕様の強化アイテムだった。

……まあ、使えるかどうかはミカの成長次第ではあるが。

「……………次も、また大きな戦いになるんだよね」

ワニの意匠が施されたボトルから目を離し、千歌はふと憂いに満ちた瞳を浮かべてこちらを見る。

ハザードレベルを上げるために奮闘しているタクミとミカに、強化アイテムの製作に精を出すキリオ。

戦いに備える彼ら——それが彼女の心に妙な不安を与えていた。

「エボルトもこれ以上長引かせるつもりはないみたいだからな。……きつと次が最後になる」

「……………」

そう言うときリオは千歌の手を取り、おもむろにポケットから取り出した何かを彼女の掌にそつと置いた。

透き通ったみかん色の輝きを放つフルボトル——キリオの心の支えである、オレインジフルボトルだった。

「これ……」

「やつぱりこれ、お前に預けておくよ。お守り代わりに持つてくれ」

「いいの？」

「ああ。もうそんな物にこだわらなくても、何が大事かはわかってるからな」

受け取ったそれを胸元へ引き寄せた千歌が口元を引き締め、強い意志の宿った目で見上げてくる。

……彼女はひたすら待つことしかできないだろうが、それでも覚悟は決めているようだった。

「エボルトの片割れ」

不意に投げかけられた声に目を見開いた後、千歌とキリオは入り口付近に立っていた人物の方へと目を移す。

「梨子ちゃん……？」

「ベルナージュだな？」

ぼんやりと幻想的に漂っている翡翠色の瞳と視線を合わせ、キリオはほんの少し強張った表情で言った。

警戒心の混ざった眼で自分を見つめる彼を視界に入れつつ、火星の王妃はふっと息をつく。

「いや……今は戦兔キリオだったな」

彼女は聡明だ。過去のわだかまりがあるとはいえ、ここで一戦おつ始めるような性格ではないだろう。

「なにか用か？」

ベルナージュに戦意がないことを察知するキリオだったが、未だ残滓する緊張感に固まりながら彼女へそう返す。

「胸の内を聞いておきたくてな。……あのエボルトはお前の半身。この先自分自身と戦うことになる——その覚悟はお前にあるか？」

「覚悟ならとつくに出来てるさ。それに勝算だつて………」

そう言いかけたところでキリオは顔を伏せた。

……正直に白状すると、エボルトを完全に消し去ることは難しい。

遺伝子が少しでもこの世に残っているのなら、奴はそれを自在に操り自らの肉体を何度でも再生するだろう。半永久的に持続できる命というわけだ。

奴を殺しきる可能性があるとすれば——元の肉体である自分や、遺伝子を持つリユウや諸共細胞の一欠片も残さずに消し飛ばす他ない。

到底そんな手段はとることはできない。

「……………負けるつもりはない。少なくとも地球滅亡を回避するだけの策は考えている」

「ほう」

「だが、それは……正直リスクの方がでかいと俺は踏んでいる」

しかし残されている勝利の法則があるとすれば……それは今頭のなかに留めている方法ただひとつ。

余計な心配はかけたくないのに皆には話していないが——やるしかない。

「キリオくん？」

不安げな顔でこちらを覗き込んできた千歌に気がつき、反射的に彼女の肩に手を置く。

「だが俺は……どんな結末を迎えたとしても戦兎キリオであり続ける。それだけははっきりと言えるだろう」

「……そうか」

彼の言葉を聞いて、ベルナージュはどこか安心したように瞼を閉じる。

「おおっと……!」

倒れかける梨子の身体へ慌てて駆け出す千歌の背中をじつと見つめる。

忘れたくない少女の後ろ姿を強く胸に刻みながら、キリオは思い描いていた自らの計

画に肩を震わせるのだった。

第72話 アポカリプスの日

——『この星ではな……孤独な力つてのはあまり意味を持たないらしいぜ』

——『誰かを守りたいという願いが……誰かを想う心が……物理現象を超越した力を引き出してくれる』

——『それは独りでは何も生み出せず、そこにあるものを破壊することしかできないお前には……決して砕くことはできない』

——『世界にまで手を伸ばすことはできないだろうが……それでも俺は、あいつらの居場所を守り続ける』

「——ッッ!!」

気がつけば横に佇んでいた人型の機械兵器を木っ端微塵に粉碎していた。遅れてやってくる怒りの感情に息を荒げながらも、怨敵の顔を改めて脳裏に刻み込む。

「……!」

雑念を払うように頭を横に振った後、異形は深いため息をつきながら自嘲の混ざった声をこぼした。

「おいおい……ったく、なにムキになってんだオレは?」

整列する大柄な機械兵士達をなぞるように見やり、怪物は息を落ち着かせる。

「これからは存分に楽しむと決めたじゃないか……。ハハッ……! そうさ、もうじき全てにカタがつく……!!」

自分はただ破壊を楽しめばいい。下等な生物の鳴き声など気にせず、自らの快楽を満たすことだけを考えて行動すればいいのだ。

余裕を保て。自分を肯定し続けろ。

でなければ……。エボルトという存在に“欠け”が生じてしまうのだから。

「……………今日がお前らの命日だ」



「よし…………いくぞ」

「うん…………」

十千万旅館の庭園。そこに並び立つ少年と少女を囲むように皆が人集りを作っていた。

「せーの！」

互いに発した掛け声と共に、それぞれ手にしていた強化アイテムを腰に巻いていたビルドドライバーに装填する。

「ぐっ…………う…………!!」

「くう…………ツ!!」

その直後、2人は全身に駆け巡る電撃に屈するように膝を折り、慌ててドライバーからアイテムを引き抜く。

「だっ…………大丈夫!？」

そばで見守っていた千歌達が咄嗟に2人を介抱しに行くその光景を眺めながら、キリ才は難しい顔で額に汗をにじませていた。

現時点でのタクミとミカのハザードレベルは——2人とも4.8。あと一息のところまでは来ているのだが……最後の一押しが足りないようだった。

「もう一度……!」

「ストップ。あんたさつきから失敗続きでボロボロじゃない。そろそろ休憩した方がいいと思う」

「休んでられつか!早くこいつを使いこなさなくちゃ——!!」

「ルビイも休んで欲しいって」

「え?う、うん……!」

「つし……少し休憩するか氷室」

「あはは……そうだね。——あ、ありがとう」

軽く理亞になだめられてしまうタクミに苦笑いしつつ、ミカはそばに立っていた月から水の満たされたペットボトルを受け取るとそれを仰いだ。

「みーちゃん大丈夫?」

「うん、平気」

ミカは握っていた強化アイテム——フルフルラビットタンクボトルに酷似した

棒状のそれに目を落とし、刻まれたワニの意匠をじつと見つめた。

新たな信念、それが変身の鍵だとキリオは言った。未だ自分のなかではつきりと定まる気配はないが、このままレベリングを続けていけばもう少してその答えが見えてくる気がする。

……とにかく急がなければ。

「お疲れ様です」

「風華さん」

色の薄い髪を後ろでひとつに束ねた長身の女性、鷲尾風華が玄関前に座り込んでいたミカの隣に何気なく腰を下ろす。

キリオの診断によると傷はまだ治りきっていないようだが、今朝は体調も優れているみたいでこちらにやってきた当初よりも顔色が良くなった気がする。

「……間に合うんでしょうか、わたし達」

他人に尋ねても困惑されそうな気もしたが、つい弱音を吐かずにはいられなかった。

「不安になる気持ちもわかりますけれど、目標値まで残り0.2のところまで来てるのもまた事実。あなた達なら……きっと大丈夫です」

「……………」

不意に風華はゆつくりと片手を上げ、ミカの頭部に優しく触れる。

いきなりのことで戸惑う様子を見せる彼女に気がつきハツと我に返った風華は慌てて腕を引っ込ませると、誤魔化すように咳払いをした。

「……失礼」

「い、いえ……」

妙な空気に吞まれるように赤くなった頬をさすりつつ、ミカは別の話題を頭のなかで探った。

「風華さんも……小さい頃に難波重工へ？」

「え？」

「あ、その、すみません……前から少し気になって。風華さんや雷斗さんも、わたしやユイちゃんと同じなのかなって……」

「想像している通りだと思いますよ」

一瞬間を食らったように目を見開いた風華だったが、すぐに普段の落ち着いた表情に戻りそう口にする。

「私や雷斗も……他の子と同じように“施設”で育ちました。……今思えば、後悔の連続でしたね」

「後悔？」

「ええ、もっと自分に勇気があったら……と思わずにはいられません。“全ては難波重

工のために”なんて信条は、私には少々全うしにくいものでしたから」

命じられればその通りに行動してきた。……だが、その度に自分の心がすり減っていくのがわかった。

この国を混乱に陥れた三国同士の戦争が勃発した時だって、どれだけの人を傷つけたかわからない。いつそ心のない冷酷な人間になればよかったのだが。

……自分には難波にこの身を捧げる忠誠も、それを捨て自分の人生を歩む覚悟もなかった。どこまでいっても中途半端なのが鷺尾風華の人生だ。

「でも会長が亡くなった今なら……風華さんは自由です。これからは自分のためだけに生きて、誰も文句は言わないと思います」

「はは……一度歩んだ生き方を簡単に変えられるほど、ヒトの心は器用ではありませんよ」

「わたしは変われました」

自虐的に笑った風華にむつとした表情を向けた後、ミカは前方に視線を移して賑やかに話している千歌達を視界に収めた。

「みんなのおかげで自分を見つめ直せたんです。わたしの本当にやりたいこと……：……スクールアイドルが大好きだって気持ちも、仲間と助け合う大切さを、千歌さん達が思い出させてくれた」

柔らかな笑みを見せながらそう語る彼女に思わず風華の口角も上がる。

「だから諦めないで。自分が信じたいと思える大切な何かを、風華さんも見つけてください。……絶対に、約束です」

「約束……ですか？」

「はい」

小指を立てたミカがその手を眼前まで差し出してくる。

一瞬目を泳がせてどこか逃げ場を探すような素振りを見せた風華だったが、すぐに照れくさそうな表情を浮かべて小指を立てた片手を掲げた。

ぎこちない指切りが交わされた直後、ミカは晴れやかに笑いながら言う。

「破ったら怒りますからね」

「……善処します」

「氷室、次は実戦形式だ。付き合え」

「あ、うん」

不意に目の前に現れたタクミに連れられ、ミカはゆつくりと腰を上げてその場を去っていく。

こちらを振り返る彼女に小さく手を振りつつ風華も立ち上がり周囲に視線を巡らせると、傍らに佇んでいた1人の少女に目を留めた。

「鹿角理亞さん」

「え？」

唐突に飛んできた呼びかけに目を丸くしつつ、理亞は歩み寄ってくる風華と目を合わせた。

ハザードレベルを上げるための鍛錬へ向かう少年と少女の背中をじっと見つめながら、風華はいつも通りの落ち着いた口調で彼女に言い放つ。

「あなたに話しておきたいことがあります。——お時間、よろしいでしょうか？」



住人のいない静かな街道を歩くのは買い出しに向かったキリオ、リュウヤ、千歌の3人。

「頑張ってるね、猿渡さんとミカちゃん」

「だな」

「ああ」

千歌の何気ない言葉に2人も同意する。

この数日間で互いにハザードレベルを上げようと奮闘していたあの2人、実は想定していたよりもペースは悪くない。短期間で4・8にまで迫り着いただけでも上出来だろう。

……エボルトに対抗できるかどうかは別として、だが。

「もしかすると……案外簡単に勝てたりしてな」

「いや、エボルトが難波を掌握したのが厄介だ。質はともかく……数で圧倒される可能性もある」

「厳しいなあお前」

肩をすくめたりユウヤを尻目にキリオがふん、と鼻を鳴らす。厳しいも何も現状分析は大切だ。

難波重工が保有していた新型のガーディアンがどの程度の力を持っているのかにもよるが、少なくともエボルトを直接叩きにくくなることは間違いない。

奴を確実に倒すためには……やはり最低でも一対一の状況が望ましいだろう。

(……それでも奴を仕留めきれるかとはわからないが)

感情を得たエボルトは自分達と同じように、その高ぶりによってハザードレベルが上

昇していく。以前完全体となった奴と交戦した際にはなんとかジーニアスで対応できたが、次に拳を交えた時も同じようになる保証はどこにもない。

決め手が……ジーニアス以上の何かが必要になるかもしれない。

「……そういえば、ユイちゃんが言ってたんだけどね」

思いがけず発せられた千歌の語りにキリオとリユウヤはピクリと肩を揺らす。

千歌は以前ユイの口から聞かされた、エボルトについての話をそのまま2人へ吐露した。

「“間違った当たり前”……か」

ユイが見たエボルトの心情——奴が星を滅ぼす理由を聞いたキリオがそうこぼす。

「確にかつての俺は本能から惑星を吸収していた。当然、そこに間違っているかどうかなんて思考はなかった」

「やっぱり……そうなんだ」

エボルトにとつて星を滅ぼすことは人間にとつての食事と同義。生きる上で欠かせない本能からの行為だ。

加えてそこに快樂を見出してしまった今の奴はもう歯止めがきかない暴走装置。自ら立ち止まることも叶わない哀れな怪物。

「もしも……キリオくんみたいに私達と同じような感情が、あのヒトにも芽生えてたら………悲しいことも起こらなかったのかな」

歩みを進めながら千歌の言葉に目を伏せる。

キリオは数秒黙り込んだ後、何かを誤魔化すような含みのある調子で言った。

「たらればを言つても気分が悪くなるだけだ。今重要なのは……あいつは敵で、地球滅亡を阻止するには戦うしかないってことだ」

「それはわかつてるけど……」

口ごもりながら千歌が眉を下げる。正反対の道を辿ったキリオが隣にいるからこそ、

やるせない気持ちちが湧き上がってくるのだろう。

……自分自身思うところがないわけではないが、今それを考えても仕方がない。

「でも私思うんだ、もし何かが違うたら——」

「待て」

再度千歌が口を開こうとしたその時、不意に険しい表情となつたキリオが手を広げて彼女とリュウヤを制止させる。

「キリオ?」

「……………」

首を傾ける2人を意に介さず一歩前に出た彼は、前方の突き当たりに目を凝らしながら懷から取り出したビルドライバーを腰に装着した。

「——ッ!!」

曲がり角から何者かの影が見えた瞬間、暴風雨の如き弾丸がキリオ達めがけて一斉に射出された。

《完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス!!》

キリオは咄嗟にビルドへと変身を遂げ、瞬時に“ヘリコプター”、“扇風機”、“ドライヤー”の成分を掛け合わせて広範囲に熱風を解放。迫り来る弾丸の雨を相殺した。

「なんだ……!?!」

反射的に千歌を庇っていたリユウヤが顔を上げて前方を睨む。

「気を引き締めろ万丈。……エボルトの奴、ついに仕掛けてきやがった」

角からその姿を明らかにする影——それはひとつではなかった。

「あれは……!?!」

軽く1000は超えるであろう数の大柄な体躯を持ったガーディアン達が続々と並び立っている。

ガトリング砲が取り付けられた右腕が一斉にこちらへ突きつけられ、周囲の建物を巻き込みながらの射撃が再び行われた。

「……………」

“ダイヤモンド”の成分で障壁を展開しつつ、キリオは仮面の下で焦燥に満ちた顔を浮かべる。

一切の容赦がない集中攻撃。それが示唆しているのは――

「今日で……何もかも終わらせるつもりか」

ジェスチャーでリュウヤに変身を促しながら、キリオは隊列を組んで接近してくるガーディアン達に両の拳を構えた。

第73話 シスターの祈り

《スクラップファイニッシュ!!》

《クラックアップファイニッシュ!!》

「はあああああッッ!!!!」

黄金の弾頭と紫の大顎が同時に機械兵士の軍勢に突撃する。

並みのガーディアンやスマッシュユならば一撃で数十体を吹き飛ばせるほどの威力。それを前にした大柄の人形達は瞬時に自らの機体を繋ぎ合わせ、分厚く巨大な壁を築き上げてみせた。

그리스とローグの放った必殺技はその巨壁に到達した直後に勢いを殺され、完全に防ぎ切られてしまう。

「なんだこいつら……!!強すぎる……!!」

「これが本当にガーディアンなの……!!」

「…………くるぞッ!!」

凄まじい密度で放たれる弾丸に防御体勢をとる。

一斉に全身へ浴びせられる射撃の嵐に、タクミとミカは圧倒されるように仮面の下で苦悶の表情をにじませた。

「2人とも大丈夫なの!?!」

「俺達に構うな! お前らは旅館に隠れてろ! 絶対出てくるなよ!!」

「風華さんもみんなと一緒に下がっててください!!」

新型——ハードガーディアン of 猛攻を必死に防御しながら、2人は敷地内から顔を覗かせている梨子達にそう注意を呼びかける。

「くっそ……! 戦兔と万丈がいない時に……ッ!!」

「危ないッ!!」

「うお……!?!」

いつの間にかグリスに接近していた一体が左腕のシールドクロウを彼に振り上げる。

「っ……………」

地面にクレーターを残しつつその場を蹴ったローグが瞬時に駆けつけ、降ろされた斬撃を受け止める。

「だあッ!!」

動きが止まった隙を見てタクミが疾走。ツインブレイカーのアタックモードでその装甲を貫いた。

爆発を背にして2人の戦士が再度構えを直す。

……………何度倒しても減っている気がしない。次から次へと湧いて出てくる。

所詮ガーディアンだと甘く見ていたが、これは少々芳しくない状況なのかもしれない。

「先生達が戻ってくるまで……………」

「ああ、それまでは絶対に……………っ!!」

機械兵士の群集に向かって同時に走り出す。

その背中を見守る瞳のなかに、ひとつだけ暗いものが入り混じっていた。

「守り抜くツ!!」

「おおおおおらああああッッ!!」
荒れ狂う龍の姿を模した火炎が街中をうねり、押し寄せるハードガーディアン達を一気に薙ぎ払う。

「——ッ!」

すかさず駆け出した虹色の軌跡が取りこぼした個体へと肉薄。目にも留まらぬ速度で正確に拳を叩き込み、一瞬で無力化してみせる。

ビルドジーニアスフォーム及びクローズマグマへとそれぞれ変身したキリオとリュウヤは、物陰に隠れている千歌から意識を逸らさないよう注意しながら少しずつ周囲を囲んでいる機械兵士の数を減らしていた。

（十千万の方が気がかりだが……千歌を守りながらじゃすぐには向かえないか。——なら）

ビルドの胸部リアクターが七色に輝き、直後に膨大な数の虚像が溢れ出す。

「手数で押し切る」

“忍者”の成分を用いてハードガーディアン軍団の3分の1ほどの数まで分身を生
成。

まだ別働隊が控えている可能性も鑑みて消耗を抑えるためにもフルに力を発揮する
のは避けなくては。

「万丈、俺の手が届かないところは任せた。お前の火力なら1人でもそれなりに数は減
らせるだろう」

「おっしや了解!!」

「千歌！俺達の後ろに付いてこい！絶対離れるな!!」

「う、うん！」

千歌を巻き込まないよう細心の注意を払いながら意思のない機械兵士達を蹴散らし
ていく。

自分達は慎重に進めば問題ないだろうが……やはり心配なのは旅館に残ったメ
ンバーだ。

拳を交えたからこそわかる。キリオとリュウヤは一見難なく対処できているように
見えるが……この新型ガーディアン、これまでとはレベルが違う。

防衛目的に留まらず完全に兵器としての役割を果たすために備えられた装備と防御
性能、そして互いによる連携。どれを取っても通常のガーディアンを遥かに凌駕してい

る。

「……ここまでとは想定外だ。これではエボルトとの戦力差は絶望的。

「あ、キリオくん！」

「ふっ……！」

ハードガーディアンの放った無数のミサイルに対して「ジェット」の成分で作り出した戦闘機型ドローンを発射。残らず撃墜していく。

やはり数が多いのが厄介だ。少しでも気を抜けば千歌に危険が及ぶ。

だが悠長に戦っている時間はない。町中にガーディアンが溢れているのなら、旅館で待機していた皆も襲われている可能性があるのだから。

（……どうか耐えてくれよ猿渡、氷室）



炎の海のなか、家族が消えていく——脳裏に焼き付いて離れない光景。

どうしてあの時自分だけが生き残ってしまったのか……ずっと考えていた。何もかも失った自分を、なぜ運命は生かしたのか疑問に思っていた。

これ以上生きる理由がわからない。何をすべきかわからない。

これまで全てを与えられ、全てを一人の人間に捧げてきたからこそ………孤独に苛まれたとき、目の前が真っ暗になった。

どうして自分だけが。ただひたすらにそう首を傾げ続けた。

——『これからは自分のためだけに生きても、誰も文句は言わないと思います』

羨ましかった。自分も彼女達のように自由に生きたかった。

だから次からは………そうしようと思う。

自分のやりたいことを自由に。全身全霊、何事にも囚われずに。

——もう、迷いはありません。

《グレイシャルナツクル!!》

「らあああああッ!!」

《カチカチカチカチカチーン!!》

地面に蒼い拳が炸裂した瞬間、爆発的に広がった巨大な氷塊がハードガーディアンを数体貫く。

《デイスチャージクラッシュュ!!》

「……っ!」

ローグの展開したダイヤモンドボトルによる盾が全方向から放たれる弾丸を防御。流れるように前後をグリスと入れ替わり、再度ブリザードナツクルを駆使して切り込んでいく。

ミカが護り、タクミが討つ。それを繰り返すことでなんとか凌ぐことができていた。

「ハハッ！ やっぱ所詮は機械だぜ、少しずつだが攻撃パターンが読めてきたア!!」
「なんとか持ち堪えられそう……だね」

タクミと背を合わせつつほつと息をつくミカ。

調子が出てきたことでだいぶ流れが良くなってきた。このまま何事もなく時間を稼ぐことができればいいのだが――

「そういえばみんなは大丈夫――」

「……！ 氷室ツ!!」

「え?」

真つ黒な閃光がほとばしる。

振り返った眼前で起きた爆発に、ミカは呆気にとられるように目を見開いた。

「がっ……あ――!」

「猿渡くん……!?!」

自分を何者かの攻撃から庇ったことで吹き飛び変身が解除されてしまったタクミのもとへ駆け寄り、気を失っている彼を抱える。

「猿渡くん大丈夫!? 猿渡くん!!」

何度呼びかけても閉じられた瞼が開く様子はなかった。

……たった一撃でこのダメージ。こんな芸当ができる奴は一人しかいない。

「……………」

刹那、背後から感じる異様な空気に……思わず全身が震えた。

「思いの外粘るなあ……お前ら」

腰から下げたマントを翻しながらゆつくりと地上へ降り立つ白黒の異形ものくろを強く睨みつける。

「エボ……ルトオ……！」

ミカはタクミの身体をその場に寝かせると、湧き上がる憎しみの感情に身を任せてひび割れるほどに地面を踏みつけた。

片足に体重を乗せ、至って飄々とした態度でこちらを見据えてくるエボルトに対し、ローグは勇ましく白い拳を構える。

「ようミカ………ユイと仲良くやってるか？」

「ああああああ!!」

正面から接近してきたローグの打撃を軽くないしながら、奴は彼女をからかうように饒舌な物言いを展開していく。

「おいおい……いきなり殴りかかるたあご挨拶だなア……!?!」

「ぐっ……!?!」

エボルの繰り出したカウンターがローグの腹部を抉り、くの字に曲がった身体の横方向からさらに回し蹴りが叩き込まれる。

「かつ……あ……!?!」

なすすべなく地面へと転がったミカを見下ろしながら、エボルトは心底馬鹿にするような調子で言い放った。

「本当に笑えるなあお前ら………最高だよ。潰し合ってた奴ら同士が仲良く徒党を組んで、滑稽にも変えようのない運命に立ち向かう光景は………本当に面白い」

奴が立てた人差し指が十千万旅館に向けられた途端、周囲に待機していたハードガーディアンズの銃口が一齐に建物へと向けられる。

「やれ」

「っ……!?!うう……ッ!!」

軋む全身を奮い立たせて強引に立ち上がったミカは、悲鳴を上げているその身体を引きずりながら両腕を広げ、再びダイヤモンドの障壁を張った。

容赦なく殺到する弾丸の雨が残らずローグへと迫る。

徐々に力が入らなくなり、ミカ自身の体力と連動するように障壁は少しずつ強度を落としていった。

「っ……あ——!!」

やがて完全に壁が打ち破られても攻撃は止まず、今度はローグのみを狙った銃撃が続行される。

「が……！ああ……あ……っ!!」

鋭い痛みが絶え間なく与えられる。

……痛い。とてつもなく痛い。

この世で一番嫌いな感覚が——何度も何度もやってくる。

《ブラックホールフィニッシュ!!》

《チャオ!》

「あ……?」

朦朧とする意識のなか、無慈悲に放たれる災厄の一撃。

「ぐ」

悲鳴をあげる暇もなく衝撃がミカの身体を貫通する。

後方に控えていたハードガーディアンごと巻き込み、地面を引き裂きながら転倒するローグ。

やがて蓄積されたダメージが限界へと達し、解除された装甲から苦痛で歪んだミカの顔が露わになった。

「……………」

光を失った瞳でぼんやりとエボルトの立つ方向を見上げる。

奴は嘲笑するようにこちらを見下しながら歩み寄り、ミカのそばで膝を折ると乱暴に彼女の前髪を掴み上げた。

「あの時と同じだなあ……………お前はまた、大切なものを守れずに失うんだ」

「……………ち、がう……………」

「んん？」

必死にエボルトへ鋭利な視線を突きつけながら、ミカは絞り出すように言う。

「あの時とは……………ちがう……………！わたしはもう……………誰かの犠牲を払ってまで……………自分のために生きようとは思わない……………」

「……………」

奴の腕を掴み、震える足腰に残された力を入れて強引に立ち上がろうとする。

「今度こそ……守ってみせる……！そのためにわたしは……仮面ライダー……ローグとして……ここにいます……！！」

「そうか」

「っ——！」

膝を立てようとしたミカを頭から再度地に伏せ、コンクリートに押し付けながらエボルトは低い声で言った。

「やってみろよ」

「う……っ……！！」

ミカの額から流れる鮮やかな血が地面をじわりと暗い赤に染める。

「クハハッ……！フハハハハハハ！！」

奴は彼女から手を離すと、大げさに天を仰ぎながら高らかに笑い声を上げた。

「人間ってのは口先だけで行動が伴わない生き物だということをおレはよく知っている。……おっと、別にお前だけを指してるわけじゃないぜ？この星に生きる人類全てに關しての話だ」

腰に手を当て、茶化すようなジェスチャーを加えながら奴は続ける。

「例えばスクールアイドル、あれは愚の骨頂だったな。平和の象徴と謳いながら……お前らはそれを潰し合わせることで楽しんでいるそうじゃないか。本質的には人間ども

が忌み嫌っていた戦争となんら変わらないというのに」

「ラブライブのことを……言っているの……!? ふざけないで……あれは——!!」

「違う、とは言わせないぜ? あれは真正正銘争い事のひとつさ。競い合いなんて言葉は言い訳に過ぎない。お前達はこれまで、争いを防ぐために争いを楽しんでた」

“ラブライブ!” —— 自分達の磨き上げた技術を駆使して切磋琢磨するスクールアイドルの聖典。エボルトにとってはそれすらも戦争と同義であると言うのか。

「排他された者は人知れず闇に消え、勝者はそんな奴らに見向きもせず栄光を掴み取る。あれが争いと言わずしてなんだというんだ?」

「違うツ!!」

血を吐きながらミカは叫ぶ。

ここで絶対に退いてはならない。……スクールアイドルは、決してエボルトが言うような血生臭いものではないのだから。

「お前は何もわかってない……! 戦争なんかじゃ絶対に感じられない熱い想いを……わたしはユイちゃんや、みんなと過ごすなかで感じた!」

「……………」

「何かを奪うことしかできないお前なんかには計れない素晴らしい素晴らしさが……スクールアイドルにはあるんだ!!」

直後、エボルトのまとう雰囲気が一変した。

熱すら覚えるような怒りの感情が……奴から伝わってくる。

「……………」

ミカが余力を振り絞って立ち上がり、エボルトから距離をとる。

そして装着していたスクラッシュドライバーを取り外すと入れ替えるようにビルドドライバーを腰に巻き、ポケットに忍ばせていた頼みの綱——プライムローグフルボトルを取り出した。

エボルトが憎い。何もできない自分が憎い。

負けたくない。もう何も失いたくない。

奴に勝つためには……もう通常のローグじゃダメなんだ。

「——っ!!」

棒状だったボトルを折り曲げ、2つあるドライバーのレーンへと同時に装填。

……………しかし、

「あつ…………ぐ…………!？」

エボルトに対して憎しみを募らせるミカの意味に反するように引き起こされた拒絶反応が、彼女の全身に強烈な電撃を走らせる。

またもや脱力するようにその場に崩れ落ちてしまったミカは、血の気の引いた表情で目尻に涙を溜めた。

「そん…………な…………あ…………!」

大粒の雫を流す彼女を見やり、奴は白いコブラの複眼をギラつかせる。

「ど…………して…………お願い…………!お願いだから…………起動してよ…………!!」

「ハザードレベル5・0か…………ただの人間がここまで成長するとは驚きだな」

「…………は…………?」

奴の口にした言葉に瞳孔が開く。

5・0…………目標値には達している。それなのにどうして変身できない?

「…………ま、それも…………までだが」

エボルトの手のひらに凄まじいエネルギーが集束していく。

白黒に点滅する光弾は徐々に膨張し、瞬く間に奴自身の3倍はあるであろう大きさと

なった。

「精々地獄へ行かないことを祈るんだな。……チャオ」

友人に伝える軽い挨拶のようにそう口にしながら、エボルトは何の迷いもなく光弾を撃ち放つ。

コンクリートの地面を消し飛ばしながら死が近づいてくる。

「……………いやだよ」

結局自分は……何も果たせないまま、ここで――

《ギアエンジン！》

《ギアリモコン！》

《ファンキーマッチ!!》

「潤動……っ!!」

《ファイバー!!》

「——え？」

自分に覆いかぶさるように立ちはだかった齒車の戦士を見上げる。

「ぐっ……ああああ……!!」

真正面からエボルトの放った光弾を受け止めているのは……ヘルブロス。

ミカはその変身者が誰なのかを瞬時に察知し、その人物が自らのために身を投げ出していることを理解してしまった。

「風華……さん……!!」

「ああああ……っ!!アアアアアアアアアア!!」

メツキのように剥がれ落ちていく歯車の装甲。

喉が張り裂けそうなほどに叫びを上げた風華は……文字通り命を投げ打ってミカの盾となった。

「うっ……!!」

眼前で起きた爆発と共に飛ばされた女性の身体を受け止め、その顔に目を落とす。傷だらけの顔面に浮かぶ双眸が……まっすぐこちらを捉えていた。

「待つて風華さん……!あなたまだ動ける状態じゃ——!!」

彼女を追うようにして旅館から飛び出してきた曜達だったが、目の前に広がっていた悲惨な光景に思わず駆け付けた全員が言葉を失った。

「風華……さん?」

夢であつてほしいという逃避が何度も頭のなかを巡る。

微かに笑う風華の身体から徐々に失われていく暖かさが……それを現実だと訴えかけてきた。

「……………あの時死ななくてよかったと……今なら強く思えます」

ミカの腕のなかで掠れた声を漏らす風華。今にも命の灯火が消えそうなひどい顔色だったが、その表情は至つて満足げなものだった。

「喋らないでください！すぐに処置すればきつと……必ず……！絶対——！！」
必死に自分を救おうとするミカに対し、風華は首を横に振つてそれを止める。

「ぐっ……………うううううううう……ッ!!」

既に肉体が粒子となり消滅が始まっている彼女を見て、ミカは涙を流しながら言葉にならない悲痛な声を漏らした。

……………まただ。自分の弱さが、また他人を傷つけた。

「ごめんなさい……………！ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………ッ!!」

「……………ご自分を……………責めないでください」

神頼みのように何度も同じ言葉を唱えるミカを見つめながら、風華は消えそうな声でそう発する。

「会長や弟がいなくなったあの瞬間から……私はきつと、死に場所を探していたんだと思います。不完全にまみれた人生でしたが……最後にこうして、誰かを守れた。………それだけは……胸を張れる」

「ふうか……さん……!」

「ああ……でも……あの子にもつと……姉さんとして、寄り添えたら……。………どうかあなたは……私のようにはならないで」

徐々に存在が薄れていく風華が震える手を伸ばし、涙で濡れたミカの頬に触れる。

「自分を見失わないでください……。あなたは……仮面ライダーである、以前に——
——氷室……ミカなんですから……」

「……!」

頬に当たる冷たい感触へ手を伸ばす。

咄嗟に握り返そうとするミカだったが、彼女の手のひらは何も掴むことはなかった。

「——」
「武運を」

風華の肉体が完全に消滅し、柔雪のように残滓していた粒子が舞い上がる。独り地面に座り込んだミカは、遺体すら残されなかった風華の面影に嗚咽を漏らすのだった。

「やつとくたばったか？」

凍りついたような沈黙を打ち破る剽軽な声音。

突き刺すような視線が怪物に注がれる。

少女は決して消えないほどに強く刻まれた怨敵の名を頭のなかで反響させ——
やがてその憎しみを確かなものにするように、自らその名前を叫び、慟哭した。

第74話 わたしのプライム

「風華さんが……………」

「……………」

絶句する曜達の後ろで1人の女性の命が失われる瞬間を目撃していたユイは、溢れてくる感情を抑えるように口元を隠す。

「く……………」

充血した眼でエボルトを睨みつけていたミカが立ち上がろうとするも、身体に響くダメージがそれを許さない。

奴は悲しみに暮れる少女達を見やり、笑い飛ばすような態度で言った。

「2度も命拾いした奴が最後には自ら身を投げ出すとはな……。つくづく人間ってのは度し難い生き物だ」

「だま……………れエ……………！お前さえ……………お前さえ……………いなければあああああッ!!」

「……………ハハ」

怒号を飛ばすミカを尻目に、エボルトは再度手の上へエネルギーを集中。またも光弾を生成しそれを彼女に向けて放とうとする。

「……きたか」

しかし奴は光弾を発射する工程を終える前に視線を逸らすと、突如ミカの背後に目を向けて防御の体勢をとった。

直後、彼女の後ろからエボルトに向かって虹色の軌跡が疾る。

《ジーニアスアタック!!》

紅の輝きを宿した拳がエボルトに叩き込まれる。

咄嗟に交差させた両腕と衝突した打撃は広範囲に余波を生み、数メートル離れた海岸で荒波を発生させた。

「……キリオくん!」

地面に座り込んでいたミカのもとへ慌てて駆け寄った曜が一瞬で現れた白い戦士に安堵する。

「はええよキリオオ! お前なにひとりで突っ走って——おっとと!」

「大丈夫みんな!」

「万丈くん……千歌ちゃんも! 無事だったんだね!」

炎の翼をはためかせて低空飛行を行っていたリユウヤに抱えられた千歌が地に飛び

降り、急いで全員の安否を確認しようとする。

順に皆の顔を見渡していくなかで、彼女はふとある疑問に首を傾けた。

「……あの人……風華さんは？」

傍らで俯いていたミカの肩がピクリと震える。

やがて押しつぶされるような周囲の空気に気がついたキリオ、リュウヤ、千歌の3人は……自分達が駆けつけてくる直前に何があったのかを理解してしまった。

「おい……まさか……」

「間に合わなかった……の？」

「……………」

血と涙で濡れたミカの顔を一瞥し、キリオは仮面の下でその眼を鋭利なものにする。

「……………」

拳を強く握りしめ、キリオは前方に佇んでいる破滅の怪物にその眼差しを移した。

「さて……余興はこれくらいにしておこうか」

「なに……？」

おもむろに奴が掲げた両腕が闇を帯びる。

刹那、キリオ達の視界が薄暗く変化した。

「え、なに……？急に暗く——」

「ちよつ……！なによあれ!？」

空を指し示した善子に続いて皆も上方向を見上げる。

内浦の真上に広がっている「黒い渦」。それは真昼にもかかわらず太陽の輝きを遮断し、千歌達に並ならぬ恐怖を覚えさせた。

「ブラック……ホール……？」

「役者も揃ったことだ……ここらで始めようじゃないか」

内浦の町全体を覆うように空中に浮かんでいた黒渦が徐々に降下し、一気に視界から明るさが奪われていく。

「地球存亡を賭けた——最後の戦いをな……!!」

反射的に振り返り、キリオは黒渦に飲み込まれようとしている少女達へと手を伸ばす。

だが次の瞬間には……彼女達の姿は忽然と消えていたのだった。



——また、大切なものが失われた。

全ての元凶であるエボルトよりも、もはや浮き彫りになる自分の無力さに腹が立つた。

満足そうな様子で散っていった女性の顔が脳裏に浮かび、その度に悔恨の念に囚われてしまう。

あんなところで、あんな顔をさせたくなかった。もつと素晴らしい世界に連れて行ってあげたかった。

暗闇のなかで強く思う。人ひとりさえ救えなかった自分に、一体この先なにを果たせるといえるのだろうか。

仮面ライダーの力を授かってから……自分は何一つ守れてなどいない。あらゆることが無駄に終わった。

……価値のないこの命を捧げたとしても、この状況が覆るとはとも思えない。自分にできることなんて、もうないんだ。

——
起きろ。

「……………」

頭のなかに響いた威厳のある声に呼びかけられ、桜内梨子は上体を起こす。

最初に視界に飛び込んだできた景色を視認した途端、彼女は自分の目を疑うようにばかりと瞼を開閉させた。

「なに……………」

そこに広がっていたのは異様な空間だった。

一面を染め上げる暗いマーブル——いや、まだら模様と表現した方がいいかもしれない。

無数に浮かんでいる瓦礫は内浦にあつた建物の破片だろうか。『異空間』と呼ぶのにこれ以上相応しいものはないだろうと思えるほどに異質な光景だった。

現在自分が腰を下ろしているのは黒く透明な道。ガラスのような肌触りだが、どこかこの世のものではないような不気味さを感じる。

「……みんな……!?!」

ふと辺りを見渡すと、数名の少女達が倒れている姿が目に入った。

「ん……」

「いったいなにが……」

そこにいたのは善子、鞠莉、月、ユイ……そしてミカ。梨子の声に反応するように起き上がった彼女達は、同じように周囲を確認するや否や驚愕の表情を浮かべた。

「ちよつ……どこよここ!?!」

「私達……気を失つてたの?」

「みたいだね……」

わけのわからない状況のなか、皆は今置かれている立ち位置を理解しようとする。

「……みーちゃん、立てる?」

「……………うん」

顔を覗き込みながら尋ねてくるユイにそう返しつつ、ミカは重い腰を上げて立ち上

がった。

「ちかっち達がいらないわね」

「それにここ……どう考えても内浦じゃないよね？」

「あのブラックホールの中……異次元空間的な？」

「もう……今は墮天使してる場合じゃないでしょ善子ちゃん」

「べ、別にそんなつもりなかったんだけど!？」

「……うん、ヨハネちゃんの言ってることも間違いないかもしれない」

目を伏せたユイがぼつりと呟く。

「どういう意味？」

思い当たる節があるような素振りを見せた彼女に月が問いかける。

ユイは顔を上げ、改めて周囲の異空間を見渡すと………神妙な面持ちで答えた。

「たぶんここは………パンドラタワーの中だと思う」

「……!?あの塔の？」

見開いた瞳を向ける皆に対してユイが首を縦に振る。

「パンドラタワーは……エボルトの力と繋がってて、彼の思うように内部構造を操作できるようになってるの。それこそタワー自体が生きてるみたいに」

パンドラタワーはパンドラボックスの力を解放して築き上げたもの。そして現在そ

の力を所有しているのは箱の真価と言ってもいいエボルトリガーを持つエボルトだ。

奴がトリガーを手にしている限り、おそらく自分達は外へ脱出することは叶わないだろう。

「……同じ光景を何度も見たからわかる。タワーが完成して、自由に操れる今なら……彼はやろうと思えば、すぐにでも地球を滅ぼすことができるはず」

「すぐにでも!? どうするのよそれ! もう勝ち目ないじゃない!!」

「……? じゃあこの状況はどういうことなんだろう?」

喚き立てる善子の横で至って落ち着いた様子を見せている月は、再度ユイに向かって質問を飛ばした。

「もう戦力差は圧倒的で、あとは向こうが地球滅亡のスイッチを押すだけとしたら……どうして奴は、それをすぐ行動に移さないんだろう?」

他のメンバーと分断されている今の状況を鑑みれば、エボルトは何かしらのお遊びに興じていることは明らかだ。

わざわざ自分達をタワーの中に招き入れた上で、奴はまた別の目的を果たそうとしている。

腑に落ちない点に頭を悩ませる月から目を逸らし、ユイはどこか悲しげな表情を見せ

ながら口を開いた。

「それはたぶん……………彼にとって、地球を滅ぼしただけじゃ“勝ち”とは言えないからだと思う」

「……………というと？」

「彼はきつと——」

ユイが返答しようとしたその直後、背後から耳に滑り込んできた物音に反射的に振り返る。

「そりやあそうか……………敵の根城の中にいるんだもんね」

「——走って!!」

足並みを揃えながらこちらに近づいてくる大量の機械兵士達。その存在に気がついた梨子達は、瞬時に前方へ顔を向き直すと脇目も振らずに駆け出した。

「うわっ……………!？」

「きゃあ!？」

逃走する少女達に向けて放たれる無数の弾丸。

ハードガーディアン達はその巨軀からは想像できないスピードで彼女達を追い回し、休むことなく右腕のガトリングを放ち続けた。

「……………こっちに！」

いくら走っても変わらない景色のなか、先頭を駆けていた鞠莉がそばにあつた瓦礫を指しながら叫ぶ。

スペースデブリを連想させる宙の岩。その陰に身を潜めた梨子達は、徐々に近づいてくる機械兵士達の足音に小刻みに身を震わせた。

「……………」

口を押さえ、息を殺す。

他に隠れる場所はない。ここでやり過ぎずのを失敗すれば自分達の命はないだろう。

「……………」

青い顔で身体を縮ませていたミカが着々と迫ってくる死の予感に瞳を泳がせる。

（立たないと……………立って……………わたし……………戦わないと……………っ！）

足腰に力を入れようとすると何度も同じ光景がフラッシュバックを起こす。

大切な人が失われていく光景。自分の弱さが誰かを傷つける景色が……………はつきりと目の前に映し出される。

「あ……………」

震えのせいで思うように動かすことのできない手でポケットを探り、変身に必要なア

アイテムを取り出そうとする。

紫色のボトル。いつも自分を守ってくれていた外装の源。

「う……………う……………」

必死に掴もうとするが、まるで液体にでも触れているかのように指の間から滑り落ちていく。

何度呼吸を整えようとしても動悸が治まってくれない。

「はっ……………はあ……………っ……………は……………あ……………ッ！」

どんどん荒くなっていく息にどうしていいのかもわからず、ミカは瞳に涙をにじませながら少しずつ自分が諦めかけていることに気がついた。

——次はなにを失う？

今戦える人間は……………仮面ライダーは自分だけだ。ひとりであの数のハードガーディアンを対処できるか？……………無理だ。

出て行っても負けるだけ。負けてまた誰かを目の前で失うだけ。後悔するだけ。ダメだ、逃げないと。どこへ？

——次は誰を死なせる？

ほんの数分前に自分を庇って眼前で命を落とした女性の顔が脳裏によぎる。隣で隠

れている少女達の中に“次”がいるかもしれない。

。

奴の……エボルトの名前を叫んだ瞬間、自分は憎しみよりも恐怖に囚われていた。

自分の力ではどうしようもできない絶対的な力。それを前にした時の絶望。その全てが氷室ミカを打ちのめしていく。

憎い。怖い。憎い。恐ろしい。

(だれか……たすけて………！)

「あたしが食い止めるよ」

不意に発せられた声に反応するように顔を上げる。

先ほどまで自分と同じように瓦礫の陰に潜んでいた少女達の中にひとり……………立ち上がったっている者がいた。

「ユイ……………ちゃん？」

「でもあまり期待しないでほしいな、なにせあたし自身荒っぽいことは苦手だからさ。

……………ただ、少しくらいなら時間を稼げると思う」

佇んでいた小柄な少女は右手に下げていた一丁の黒い拳銃を胸元へ掲げると、引きつった笑顔を自分達に向けてみせる。

少女が持つ銃が何であるかを理解したミカは、戸惑いに満ちた眼差しを彼女へと向けた。

「トランスチームガン……………!? どうしてそれを——」

「えへへ……………実はひとつだけずっと隠して持ってたんだ」

そう言いながらポケットから取り出したのは——コブラの意匠が刻まれたフルボトル。かつて少女の肉体を操り暗躍していた怪物が愛用していた……………血みどろの兵器だった。

「そんなの……………そんなのダメだよ……………!」

「そうよ! 確かに私達は助かるかもしれないけど、あんたは……………!」

「いいよべつに」

驚愕する梨子達を見下ろしつつ、ユイは今にも消えてしまいそうな夢げな笑顔を作り、言った。

「友達を守るのは……当然でしょ」

——瞬間、胸の奥に強い風が吹き抜けた。

ミカの方に身体を向きなおしたユイが膝を折り、恐怖で震えていた彼女の頬に優しく触れる。

「みーちゃんも、そんな泣きそうになるまで頑張らなくてもいいんだよ」

「え……………」

「今まであたし達のために戦ってくれてありがとうね。……次はあたしが頑張るから、

みーちゃんは休んでて」

そう言い残してその場から離れようとする彼女に手を伸ばす。

「待つ——！」

——『自分を見失わないでください』

澄んだ声音が頭に響く。

あの人が残してくれた言葉を思い出す。

去ろうとする少女の背中を見つめながら……ミカは漏らしそうになった嗚咽を無理やり飲み込んで目元を袖で拭い、彼女を追うように地を蹴った。

「……みーちゃん？」

自分の肩に手を置いた親友の顔を覗き込み、ユイは首を傾けて怪訝な顔を浮かべる。
「下がつて」

「え?でも……」

「わたしはもう……大丈夫だから」

前髪に見え隠れする瞳に光が差し込む。

「みんなはそこで待ってて」

胸を張ってそう伝えてきたミカに困惑しつつも、その自信に満ちた表情に梨子達は頷くしかなかった。

(……わたし、バカだ)

ビルドドライバーを腰に装着し、取り出した棒状のボトルを眼前まで持つていく。
(仮面ライダーかどうかは関係ない。……わたしがこれまで必死に戦ってきたのはみんなを……友達を守るため。そこにあったのはわたし自身の想いだ)

手にしていたボトル——プライムローグフルボトルを中心部分で折り曲げ、刻まれた意匠でワニの顎を形作る。

変形させたそれに目を落とし、ミカは目を閉じる。

（戦兎先生も……万丈くんも……みんなを想う優しい心で強くなった）

本当に必要なだったのはハザードレベルなんかじゃない。……この地球に生きる者が持つ、最も強い気持ち。守りたいと願う心。

自分の戦う理由は、仮面ライダーだからじゃない。今後ろにいる大切な人達を守りたいからだ。

……もう忘れるな。心に刻め。

「——ッ!!」

《プライムローグ!》

《ガブッ!ガブッ!ガブッ!ガブッ!ガブッ!》

ビルドドライバーにボトルを装填し、レバーを回転させる。

金色の成分が充填されたパイプが前後、そして天へと螺旋状に展開され、ミカの全身を囲む。

《Are you ready!?!》

「——当たり前！」

彼女の掛け声と共に伸びていた黄金のパイプが一斉に中心へと引き寄せられ、同時にそれを巨大なパープルの大顎が砕け散らした。

《大義晩成！プライムログ!!》

《ドリヤドリヤドリヤドリヤドリヤドリヤー!!》

かつてのローグの装甲に刻まれていたヒビ割れや棘が黄金の唐草模様に。背中には純白のマントをなびかせている。

そして胸元にあるのは……ライダーの証。歯車を背にするワニの姿が描かれていた。

「わたしは友達のために……氷室ミカとして……！」

ローグの強化形態——仮面ライダープライムローグ。

ミカがライダーシステムの極致へ到達した瞬間だった。

「わたし自身が信じる……大義のために戦う!!」

第75話 灼熱のブリザード

「はっ……!!」

虹色の光が戦士の全身から噴き上がり、その神々しいまでの輝きと共に飛翔。

《ジーニアスフィニッシュ!!》

ビルドドライバーに装填されている缶状のアイテム——ジーニアスフルボトルに充填されていた60種類の成分を同時に解放。それらを全て一点に凝縮して渾身のライダーキックと共に放つ。

薄暗い空間に並び立っていたハードガーディアン達は右腕のガトリング砲を一斉射出して対抗しようとするも、天から槍のように突貫してくるビルドは悉くの弾丸を打ち消しながら直進。

そのまま機械兵士達が集まっていた中心部へと特攻。大規模な爆発と同時にその場にいた全てのガーディアンが木っ端微塵に吹き飛んだ。

「……………う……………」

変身を解除し、ビルドの仮面から顔を覗かせたキリオが額ににじんだ汗を拭いながら周囲を見渡す。

「エボルトの奴……俺達をタワー内に引き込んで何をするつもりだ……？」

内浦の上空に奴が出現させたブラックホール——あれはパンドラタワーに繋がる転移装置の役割を果たしていたようだ。

エボルトは自分達をバラバラに分断しつつ自らの拠点へ誘い込み、最終決戦に興じようとしているつもりらしいが……なぜそのような回りくどいことをする？

（……考えるより身体を動かしたほうがいいな）

《ビルドチエンジン！》

上着から取り出したビルドフォンをバイク形態へ変形させ跨る。

リュウヤや千歌達の姿が見えないのが不安だ。自分のように1人で行動することを余儀なくされている者がいるかもしれない。

リュウヤやタクミ、ミカのように戦う手段を持っている人間ならばともかく、千歌達だけでハードガーディアンが彷徨く空間に放り出されるのはまずい。

まずはとにかく前進だ。移動していればいずれ誰かと遭遇するかもしれない。

（……………もう、誰も死なせはしない）

数刻前に消滅していった女性の姿を思い返し、キリオは奥歯を噛み締める。

自分のせいで誰かがいなくなるのは……………たくさんだ。



「鹿角理亞さん」

「え？」

数時間前のこと。

前触れもなく自分の名前を口にした女性に、理亞は弾かれるように顔を向けた。

「あなたに話しておきたいことがあります。——お時間、よろしいでしょうか？」

突然そんなことを話してきた彼女……………鷲尾風華に対してほとんど反射的に頷く。

自分と彼女には接点と言えるものはこれといってなかったはずだ。少なくとも風華の言う「話しておきたいこと」は親しい間柄で交わされるものではないということはずぐにわかった。

「……………何か？」

強張った調子でそう聞き返す。

風華は他に自分達のやりとりを聞いている者がいないのを確認するかのように周囲に視線を巡らせた後、ゆつくりと結ばれた口を開いた。

「猿渡くんのごとで少し」

「タクミの?」

「ええ。……彼からはとても危ない匂いがします。まるで——」

彼女は一瞬躊躇うように言葉を飲み込むが、すぐに気を取り直して言わんとしていたことを紡いでいく。

「……まるで、私と同じような」

「……?」

「猿渡くんを救ってあげてください。……これ以上彼が傷つくのは、とても心が痛みますから。どうか後悔することのないように」

風華が何を伝えようとしていたのかは、その時は理解することができなかった。けれど……彼女が消えてしまった今ならわかる。

——『私はきつと、死に場所を探していたんだと思います』

消えゆく寸前に風華が残した言葉を思い出す。

罪の意識に囚われてしまった者が最後に取る行動。それを間近で目撃してしまったからこそ……彼女が自分に何をして欲しいのか理解できてしまったのだ。

……ハハ。フハハハハハハハ。

蛇の笑い声がする。頭の奥底に追いやっていた記憶が掘り起こされる。

……辛い記憶ばかりが浮かんでくる。

誰かを傷つけた。誰かを裏切った。その罪悪感に背中を押されてこれまで自分は戦ってきた。

潰されそうな重圧のなか、同時に浮かんでくるのは青年達の顔。

あらゆる運命を乗り越え誰かのために戦える彼らは……自分の目にはとても遠い存在に見えた。泥沼でもがいている己とは真逆の存在。最初から行動原理が決まっている者達。

……すなわちそれは、“ヒーロー”と呼ぶに値する人間。

まったく馬鹿馬鹿しい——と、当初は思っていた。だがすぐに思い知らされたのだ。彼らが強くなれたのは守るものがあつたから。

そして自分があの時敗北したのは………独りきりで走ろうとしたからだろう。

何もかもひとりで背負いこんで、寄り添おうとしてくれた人にさえ目もくれずに。

「——ミ！タクミ！！」

耳元で発せられた呼び声が頭のなかで反響し、瞼が開かれる。

ズキズキと痛む頭部を押さえ、そばにいた少女に背中を支えられながらタクミは薄暗い異空間で目を覚まし起き上がった。

「……は……？」

「わからない、気づいたらここに飛ばされて……」

沈んだ表情でそう語る理亞。その後ろで同じように困惑した様子で辺りを見渡しているのは曜、ルビィ、ダイヤ、果南、花丸、聖良。

……全員じゃない。どうやら自分達は分散させられてしまったらしい。

「他の奴らとの連絡はつくか？」

じわじわと残滓する頭痛に眉をひそめながらスクラッシュドライバーを装着し、タクミがそう尋ねる。

「ダメ。さつきから試してるけど携帯繋がらなくて……」

「……は一体どこなんだろうか……？」

無限に広がっていきそうな不気味な空間に目をやり、聖良は途方に暮れるようにそうこぼした。

エボルトが作り出した黒渦。あれをくぐり抜けた途端、視界が真っ暗になったところ

までは覚えている。……が、ここがどこなのかは全く判断がつかない。

宇宙……ということとはさすがにないだろうが、この地球上にいるとは思えない光景を眺めているとそんな考えがふとよぎってしまう。

「……！」

「タクミ?」

《ロボットゼリー!》

背筋に走った悪寒に突き動かされ、タクミは咄嗟に取り出したロボットスクラッシュゼリーをドライバーへ叩きつける。

《ロボットイングリス!ブラア!!》

「俺の後ろに回れ!!」

「え——わっ!」

彼がグリスへと変身したのとほぼ同時に巻き起こる騒音。

突き破りそうなほどに鼓膜を振動させるのは後方から射出された弾丸の発射音だ。

「——ッ!」

《シングル!》

《ツイン!》

ツインブレイカーに装填したローズフルボトル、ロックフルボトルの成分を引き出す。

伸ばしたツタと鎖を何重にも繋ぎ合わせて組み上げた即興の盾を展開し、次々に放たれる弾丸の雨を防御。

（さっきのガーディアンどもか……!!）

目を凝らした先に見える大量の影に歯を軋ませ、タクミはすぐさま背後で屈んでいる少女達に向けて声を張った。

「走れッ!!」

「……っ!」

恐怖で歪んだ顔のまま立ち上がり、少女達は駆ける。

「チツ……!」

タクミは最後尾を走りながら立て続けに火を吹くガトリング砲を防ぎ、追ってくる機械兵士に鋭い眼光を向けた。

——他に戦える人間はいない。1人で守りきれるか？

先ほどの戦闘ではミカと共闘してやっと活路が見えた軍勢が相手だ。1人で理亞達全員を守るのは不可能に近い。

「ぐおっ……………」

「タクミ!？」

発射された無数のミサイルがツタと鎖で形成していた盾を焼き崩し、掻い潜ってきた数発がタクミの身体へと炸裂する。

策を練る余裕はない。今すぐ決断しなければ生き残る人間はゼロになる。

(やれるのか……………!?俺……………だけで……………!?)

防戦するだけで精一杯だが、これも時間の問題。

「……………」

右手に装備した氷結の拳に目を落とし、タクミは刹那の思考を巡らせる。

……………ブリザードナックルで敵陣へ切り込み、引きつける。あとは自分が力尽きるまで暴れて……………できるだけ敵の数を減らす。今はそれぐらいしかできることがない。

自らの命を捧げて……………みんなを——

(……………俺は……………この日のために、これまで生きてきたんだな)

目を瞑り、強く地面を蹴り上げる。

背後から聞こえる呼び声に耳を塞ぎながら……タクミはハードガーディアン軍勢のど真ん中へと自ら突っ込んだ。

「ああああああああアアアアアアアアアア!!!」

ツインブレイカーとブリザードナックルを振るいながら、自身を鼓舞するために叫ぶ。

墓標を定めた瞬間、不思議と身体が軽くなっていくのがわかった。

……償うんだ。自分がかつて犯した取り返しのつかない罪を。この命を以て許しを乞え。

「……………っ」

打撃を打ち込む度に突き刺さるような痛みが腕から全身へと伝わる。

エボルトから受けた攻撃のダメージがここにきて響いているんだ。

「——づ……ああ……ッ!!」

痛覚を噛み殺しつつ奮い立ち、タクミは仮面の下で血反吐を撒き散らしながら拳を突き出し続けた。

振り上げられたシールドクローを受け止め、反撃。別方向からの射撃を回避。跳躍

し、敵の頭上からツインブレイカーで刺突を繰り出す。

続いて視界の端にチラついた攻撃を避け、身を捻りながらのカウンターを叩き込む。

打撃。

回避。

蹴りによる薙ぎ払い。

回避。

防御。

防御。

回避。

気の遠くなるような動作をひたすらに行いながらタクミは思う。今の自分は……この戦いぶりを見た少女達に誇れる姿を見せているだろうか。

屍の上に立っている自分だが……せめて、最期くらいはヒーローらしく終わりたい。

だからもういいだろう。消えてしまっても……誰も、文句は――

「タクミツツ!!!」

背中に降りかかった声に反応するように、金色の戦士の肩が小さく揺れる。

もはや立っているだけで苦痛に感じる状態のなか、タクミは振り返った先に見えた少女達に掠れた声を漏らした。

「なに……してる………今のうちに……逃げ——ろ……!」

襲い来るハードガーディアンへの猛攻に耐えながら彼は少女達にそう促した。

そのなかの1人。前へ踏み出したままだった少女——理亜は目に涙を浮かべながらタクミの背中を見つめ続ける。

「もういいから……!」一緒に逃げよう……!」

必死にそう呼びかける彼女の顔から目を背ける。目を合わせた途端に決心が崩れてしまうと思ったからだ。

タクミは理亜に何も返さないまま、絶え間なく放たれる心のない攻撃を対処していた。

「

不意にせり上がってきた罪悪感に嗚咽を漏らしそうになる。

「……………理亞」

何を血迷ったのか。振り下ろされた斬撃を防いだまま、気がつけば彼はひとつの告白を口にしていた。

「——俺、人を殺したんだ」

言いたくても、ずっと口にできなかつたことを。今際の際だと悟つたからこそ声に出すことができた。

「俺が仮面ライダーになったのは…………お前や聖良さん…………北都のみんなを守るため…………

だと思ってた」

理亞に背を向けたまま、タクミは絞り出すような声音で伝えた。

「でも本当は……怒りの捌け口を……戦いに見出していただけたのかもしれない――

――ぐ……ッ！」

意識外から放たれた打撃が腹部に直撃し、体勢を崩してしまう。

意識が朦朧とする。残された力は多くない。

……頼むから逃げてくれ、と心の底から願う。身勝手な自分のことなんか放っておいてくれと。

「今まで黙ってて……ごめんな」

「だから……その罪を償うために……！自分の命を投げ出すって言うの!？」

こちらに目を向けようとしないうちに、理亞は震える声でそう投げかける。

「――ふざけないでッ!!」

「……!」

「そんなことしても……あんたが奪った命が戻るわけじゃない!!消えた人間は帰ってこないの!!」

頬を伝った雫が暗い空間に溶けていく。

タクミはそこでやっと……その場に留まっていた理亞や、その後ろで自分達を見守っていた少女達の顔に視線を注いだ。

理亞が……守りたかったはずの彼女が、涙を流して悲しんでいる。助けたかったはずなのに——真逆の感情を与えてしまっている。

「自分の罪を悔やむことができるあんたなら……ヒトの命がどれだけ大切なものなのかわかってるはずでしょう!? だったらそんな……そんな簡単に……! 自分を犠牲にするだなんて言わないでよツ!!」

「ア……ッ!」

再度放たれたミサイルが目の前で着弾し、衝撃のあまり変身が解除。生身で吹き飛ばされたタクミの身体が宙を舞った。

転がった肉体に力を込め、彼はすぐさまガーディアンの群れに向かって立ち上がる。

「罪を背負ってでも……生き続けるべきだって……そう言うのか……う!」

「そうよ。……辛い道のりかもしれないけど、生きている限りは……私も一緒に寄り添ってあげるから。タクミがくじけそうになっても……私がタクミを支えるから……!! だから——!」

瞳から流れる暖かな感覚に触れ、タクミは腰に巻いていたものを替える。

「だから生きて……っ！……生きて!!——生きてツツ!!!!」

「」

《グレイシャルナツクル!!》

前方に整列していたハードガーディアンの内、数体が突如として現れた巨大な氷塊によつて貫かれた。

「……………くそ」

一瞬で場を満たした冷気を中心に立っていた少年は……掲げた氷の拳に、手中に収められていた1本のボトルを装填する。

《ボトルキーン!》

「くそ……くそつ……クソ……ッ……クソ!!」

灯された熱い想いに突き動かされながら、彼は絶える様子もなく流れ続ける涙を拭いた。

「ちくしょう……わかつてる……わかつてるんだよ……!」

「タクミ……?」

「俺だって……消えたくない! まだこの世界で……やりたいことが山ほどあるんだ!!」

《グリスブリザード!》

装着したビルドドライバーにグリスブリザードナックルを装填。レバーを回すと同じ時にタクミの背後に拳を象った“アイスライドビルダー”が形成される。

彼の周囲に一層冷気が充満し、その足元を氷で埋め尽くした。

《Are you ready!?》

「当然だ!!」

タクミの全身を包むように降りかかった液体が凍結。

彼の身体にまとわりついた氷塊を背後に控えていたビルダーが砕き、凄まじい冷氣と共にそれは現れた。

《激凍心火! グリスブリザード!!》

《ガキガキガキガキガキーン!!》

かつてのグリスの黄金色は失われ、絶対零度を思わせるメタリックブルーで全身が染められている。

「心火を燃やして——!」

左腕に備えられたパワーアームを掲げながら、タクミは眼前に立つ標的を捉える。

彼の胸に渦巻いていた負の感情は……もうなくなっていた。

「——ぶっ潰す……!!」



いくら進んでも、その景色はほとんど変わらなかった。

「うう……みんなは大丈夫かな……」

この世のものとは思えない光景のど真ん中を歩きながら——高海千歌は不安げな表情でそうこぼす。

（さっきからガーディアンがウロウロしてるし……もし見つかったりでもしたら……）

幸運にもこの空間に飛ばされてきてから機械兵士達の目に留まることはなかったが、このまま一人で行動し続けるのも限界がある。

……だが立ち止まっただけでもしょうがない。とにかく前進あるのみだ。

「……………ん？」

数メートル先に見える微かな光が付き、千歌は反射的にその場を駆け出した。

「もしかして出口……!?」

外の空気に似た匂いを感じ取り、弾んだ調子で先に見えた輝きへと走る。

徐々に大きくなつていく光に目を細ませながら——千歌は薄暗い道を飛び出し、明るい空間へと足を踏み入れた。

「やった！外だ——つてあれ？」

再び目を開けた瞬間に飛び込んできた光景を視認した途端、歓喜の感情が疑問へと変わる。

「……内浦じゃない」

そこは自分達がブラックホールに飲み込まれる以前に立っていたところとは似ても似つかない場所だった。

海が広がっていた内浦とは真逆の、乾いた砂で満たされた荒野に……それを囲む断崖。先ほどまでとは打って変わって広々とした世界が広がっている。

「まさか……お前が一番乗りとはな」

「……!？」

不意にかけられた低い声に驚き、肩を震わせる。

顔を上げた数十メートル先に佇んでいたのは——その真つ白な髪色と声を除けば、よく知っている顔。戦兔キリオと同じ背格好をした……怪物の姿がそこにあった。

「これも運命か?——高海……千歌」

第76話 ヒトの輝き

「ハアッ!!」

ほとぼしるマグマをまとった拳が鉄の人形に炸裂し、その装甲を破壊しながら後方にいた個体までも溶解させていく。

「だああああ……!!何体いやがるんだこいつら!？」

クローズマグマの仮面が解かれ、汗だくになった少年の顔が露わになる。

周囲に敵の気配が無くなったのを確認した後、リュウヤは重い足取りで再び異空間へと歩みを進めた。

(キリオ達はいなくなっちゃうし……さつきからなんかドラゴンボトルが熱いしよ……)

ポケットに忍ばせた銀色のフルボトルに手を添えながらリュウヤは心を落ち着かせようとするが、徐々に近づいてくる妙な気配がそれを邪魔した。

全身の細胞が沸き立つような…… “別の自分” が抱いている感情がダイレクトに伝

わってくるような感覚。

「……？なんだ？」

頭のなかに届いた声に反応し、それが聞こえた方へと足を踏み出す。

何かに共鳴するように高熱を帯びている白銀のドラゴンフルボトルを手握りしめながら、リュウヤは遠くに見えた星のような煌めきへ向かって駆け出した。



「キリオくんと……同じ顔……？」

「勘違いしてもらっちゃあ困る、あいつはオレの姿を真似た偽物に過ぎない。……これが本来のオレだ」

そう語るエボルトを見て、千歌は凄まじい圧迫感に苛まれた。

自分がよく知っている青年と瓜二つだが……その挙動は彼よりも冷たい。自分に関わることで以外は全てどうでもいいとも思っているかのような、どこか情熱のない眼差

しで奴は虚空を見つめている。

エボルトは改めて千歌と視線を交わすと、再度口を開いては彼女へと静かに問いかけた。

「あいつがオレを裏切るきっかけを作ったのは……他ならぬお前だったな」

「……………」

押しつぶされそうな緊張感のなか、気を紛らわせるように千歌は息を呑む。

細めた眼を彼女へと注ぎつつ奴は囁くような声で語りを続けた。

「オレはお前達に正体を明かすまでの間……葛城ユイの肉体を借り、この星に浸透しているスクールアイドルという文化を最も近い場所から観察してきた。……だからこそ断言できる、アレにはなんの価値もないということがな。故にどうしてあんなものが平和の象徴としての役割を果たし続けられたのか理解できなかった。それは今でも変わらない」

「……………」

「協力し合う人々の想いだの輝きだの……そんな形のない不確かなものは、オレが軽く腕を振るっただけで簡単に消え去る。この世界……いや、この宇宙で唯一普遍的なものは純粋な“破壊の力”だからだ。……その絶対的な正しさは、何があっても揺らぐものじゃあない」

「でも」

不意に口を開いた千歌に意表を疲れたようにエボルトの眉が動く。

「でもあなたにはひとつだけ、思い通りにならないものがあつた。……そうだね？」

「……………」

表情には出さない。だがエボルトが放つ雰囲気ですらに奴は怒りの感情を剥き出しにしているのがひしひしと伝わってきた。

一見エボルトは着々と自らの力を取り戻す計画を進め、順調にここまで進んできたように見える。しかし奴の力ではどうにもならない存在……いや、誤算が生まれてしまったという事実があつたのだ。

「キリオくんの意志だけは……どうしようもできなかった」

「———そうだ」

見開いた瞳で千歌を睨みつけ、途端に苛立つような様子を見せると……奴は吐き捨てるように言った。

「あいつがバグを起こしオレのもとを離れたということ。それがこの惑星を訪れて、唯一オレの『正しさ』が揺らいだ汚点だ。そしてそれを招いたのは……………お前だ、高海千歌」

「……………」

切迫していた空気が爆発したかのような強烈な威圧感に思わず後退する。

「あいつはオレの半身だ、どれだけ抗弁を垂れようとその事實は動かない。そして……記憶を失った状態のあいつがお前ら人間の影響を受けて変質した。それはつまりオレ自身もまたお前らを認めているのと同義だ」

ありつたけの不快の念を込めながら、奴はそう口にする。

……エボルトにとってキリオは“もう一人の自分”。異なる道を辿った別の可能性。本物の感情を持ち得ないでいたエボルトと精神が欠落し空っぽな状態だったキリオ。スタートラインは何ら変わらないものだった。

だが人間としての本物の感情を得た後、彼らの歩んだ道は真逆のものだった。すなわちそれはエボルト自身もキリオのように人間としての生に目覚める可能性があったということ。

そしてその可能性を体現した戦兎キリオ——彼の存在はエボルトにとって到底容認できるものではなかった。

「オレはあいつを……そしてお前ら人間を決して認めはしない。破滅を司り、絶対的な力を持ったこのオレが人間ごときに懐柔されるなど……決してあってはならない」

「…………でもそれは、実際に起きたことだよ」

恐怖心に勝った対抗心を押し出し、千歌は一步前に出ながらそう言う。

「あなたが認めなくても……キリオくんは私達のもとに戻ってきてくれた。ヒトとして生きようとしてくれた。あなたが何を言おうと……それは何があっても揺らぐものじゃない」

彼女は意趣返しを含んだ物言いだ。エボルトにそう飛ばした。

「……確かにお前の言う通りだ」

奴は顔を伏せると、先ほどまで尖らせていた怒りの感情を抑えるようにそう言う。

「オレが認めようが認めまいが関係ない。……あいつはオレを裏切り、本来の目的も放棄して愚かにも牙を剥いてきた。——だから予定を変更することにする」

「……………っ!？」

突如として発せられた殺意に気づいた直後、視界が閃光で支配される。

エボルトの真横で一瞬のうちに生成された光弾が千歌の目の前で炸裂し、彼女の身体は後方へと大きく飛ばされてしまった。

「あいつを墮落させた張本人であるお前からスクールアイドルを否定する言葉を引き出せば……………オレの“正しさ”は、今度こそ完全なものになる」

「つ……………う……………!」

砂埃にまみれた顔を上げ、こちらへ歩み寄ってくる白髪の怪物と視線を合わせる。

光のない、凄まじいほどの憎悪と執念が入り混じった禍々しい瞳。姿はあの青年と同じでもにじみ出る凶暴性は奴を人ならざる者だと教えてくれる。

「さあ認めろ高海千歌。お前らがこれまで歩んできた道……スクールアイドルはくだらない、無価値なものだと。……そうすれば命だけは助けてやるよ」

「なんだ……？ ラビットボトルが——」

マシンビルダーを走らせながら不意に感じた熱の発生源を探す。

移動を始めてから1時間ほど経過したか。全く変わる様子を見せない景色のなかを走行しながら、キリオは片手に握りしめたラビットフルボトルに意識を集中させた。

心臓のように脈打ちながら高熱を帯びていくそれは、まるで何かと共鳴しているかのように「急げ」と訴えかけている。

—
!!

直後、耳に滑り込んできた声音にハッと瞳孔を開く。

キリオはマシンのハンドルを切ると、少女の声^{こゝろ}が聞こえた方向を目指して再度直進の軌跡を描いた。

「千歌……!?!」

「く……………う……………っ!」

青年の姿を模したエボルトは千歌の胸ぐらを掴むと高く吊るし上げ、苦悶の表情を見せる彼女に怪訝な眼差しを注いだ。

「なぜ躊躇う。一言口にすればいいだけの話じゃねえか、『自分達の存在に価値はない』と」

「……………ない……………!」

「……………ん?」

「絶対に……………そんなこと……………言わない……………ッ!!」

強い意志を孕んだ瞳で自分を見下ろす千歌を見て、エボルトは未だ彼女の心に折れる気配がないと悟る。

「あまりにも……………愚かすぎる……………ッ!!」

「きやつ……………!!」

放り投げられ、乾いた地面に勢いよく転倒する千歌。

絶望的な状況を前にしても主張を変えようとしないう彼女の姿に耐えかねたように、エボルトは声を荒げながら言った。

「今この瞬間にも証明されているはずだ……！破壊の力に敵う存在などありはしないと！！」

「うっ……！」

掃射される無数の光弾。だが標的である千歌に直撃はしない。

徐々に痛めつけ、彼女から自分の求める言葉を引き出すことが奴の目的だった。

「見ろ……！……ここではお前が積み上げてきたものなど何の意味も成さない！毎日のように戯れていたお仲間は助けに来ないぞッ！」

「——っ！」

正面で起きた爆発の衝撃が千歌の身体を半回転させ、地に叩きつけた。

……足首付近に走る鋭い激痛。先の攻撃のせいで捻ってしまったらしい。

千歌は痛みで歪んだ表情のままエボルトを見上げ、その憎しみに満ちた形相をじっと見つめた。

「もうわかつているはずだ……全てを消し去ることができるオレの前では何もかもが無意味になる。練習に励んだ日々も、仲間も、想いも……その全てが塵同然の存在になるんだよ……！！」

溢れんばかりの怨念がエボルトから放出されている。

自分以上に普遍的な存在はない。破壊こそが“力”。この宇宙全域に通用する絶対

の法則。

それこそが星狩り族エボルト——あらゆる惑星を滅ぼし、自らのエネルギーに変えてきた生命体の持つ“正しさ”なのだから。

「……………」

ふと倒れ伏す少女を見て、思考が硬直する。

涙で潤んだ瞳——恐怖からのものではない。

エボルトは自分に対して哀れみの視線を注いできた千歌を見て……戸惑うように仰け反った。

「なん……だ……その目は……？」

「……………」

返事はない。ただひたすらに可哀想だと言うように、彼女は自分を見つめ続けている。

「その目を……やめろオ……!!」

「っ…………!!」

放たれた衝撃波が広範囲に拡散。

再び吹き飛ばされた千歌は痛覚に支配された四肢に力を込めると、絞り出すような声

で小さく口にした。

「私には……スクールアイドルを否定することなんてできない。……けど、あなたにだって……一方的な言葉は浴びせられないなって……そう思ってる」

「なに……？」

「だって……それがあなたにとって、『普通』のことだったんでしょ……？」

今にも倒れそうな身体を奮い立たせ、千歌は言葉を紡いでいく。

……否定ではなく、肯定する言葉を。

「きつと……あなたにとつての『普通』が……私達にとつて『普通』じゃなかった。ただそれだけのことなんだよ……」

「——違う……!!」

想定外の感情を向けられたことで思考回路が混濁する。

片手で力強く頭部を押さえたエボルトは、完全に余裕を失った様子で彼女を睨んだ。

「オレこそがこの世の法だ、オレだけが宇宙の真理だ……！ 同列に語れる存在など……万に一つもありはしない!!」

——違う、と心の中で否定する。

これまでやってきたことは無駄なんかじゃない。無価値なんて言わせない。

(だって、私達は……………!)

仄かに感じた熱を頼りに腰の辺りを探り、忍ばせていた1本のフルボトルを取り出す。

千歌は両の手のひらで包み込んだオレンジ色のそれに祈るように瞼を閉じた後……エボルトに向けて強く声を張った。

「私達はこれまで……私達の『普通』を貫いて……!前に進んできたんだから!!」

手の中から発する強烈な水色の煌めき。

千歌の想いに呼応するかのよう——オレンジフルボトルは、その輝きを広大な海を思わせるものへと変化させた。

「——消えろッ!!」

凄まじい悪意を孕んだ光弾が彼女の命を終わらせようと放たれる。

千歌は目を閉じたまま握っていたボトルに意識を集中させると……………心の中で、願いの言葉を紡いだ。

(……………信じてるよ、キリオくん)

「……………ッ!!」

刹那、何もなかったはずの上空から別の射撃が降り注いだ。

千歌を消し飛ばさんとする禍々しいエネルギーの塊を相殺した後、エボルトを牽制するように休むことなく発射される光の砲弾。

この荒野——エボルトが作り出した結界の外から放たれる射撃に加え、どこか安心する気配が車輪の回る音と共に近づいてくる。

「くっ……………!?!」

エボルトの正面で着弾したエネルギー弾が巨大な爆発を引き起こし、奴の動きを遅らせた。

「……………!」

目を開けた千歌が気配を感じた空を見上げる。

「千歌ッ!!!」

片手に持ち手が曲がった大剣を、そしてもう一方の手で黄金色の輝きを握りしめた青年が——マシンに跨って駆けつける姿が見えた。

「——キリオくん!!」

マシンビルダーに乗ったまま着地したキリオが走行速度を上げてすれ違いざまに千歌の手を取り、そのまま彼女を後方の席に乗せ大地を疾駆。

「……っ!!」

爆発で広がった煙幕が晴れ、エボルトはやってきたキリオの姿を視認するや否や無数の光弾を宙へと生成。それを解放した。

しかし放射される殺意の悉くを回避しながら彼は徐々に奴のもとへと迫っていく。やがて奴と数メートルの距離まで肉薄するとキリオはマシンビルダーの車体を大きく傾けてドリフトブレーキをかけ、停止。

「

白と黒。正反対の髪色を持った青年が睨み合う。

同じ顔の……全く異なる思想を備えた怪物と人間。その光景を見守っていた少女は、白い前髪から純粋な殺意がこもった瞳を覗かせる怪物に……最後の戦いの予感を覚えるのだった。

第77話 仮面ライダーは壊れない

再開したあの時——その場で葬ってやろうかと、そんな考えが一瞬よぎった。

だが実際に行動に移すことはついぞなかった。当然だ、あの時点で殺せばこれまで計画してきたことが全て水の泡になる。だからこそ泳がせ続けた。

自分の力を取り戻すその時まで……………極めて不快な存在である奴を生き長らえさせてきた。

だが蓋を開けてみればどうだ。何の価値もないこの星の生命に精神を汚染され、挙げ句の果てに“本来の自分”にさえも噛み付こうとする始末。

——破壊こそが“力”。それが自分がこの世に存在する上で不可欠な要素。誰にも侵害されない自分だけの世界。これまで揺らぐことのなかった存在意義。

それを……………それを……………よりもよって、お前が——

(……………吐きそうだ)

目の前にある正義感に満ち溢れた顔を睨む。

醜い。自分と同じ顔を持つ奴に対して抑えきれない憎悪の感情が湧き出てくる。
感情を取得してから……こんなにもそれが鬱陶しいと感じた瞬間はこれまでなかった。

(オレと同じ……その顔で……オレの前に……立つな……!!)

●●●

「危なかったあ……」

「こいつがお前の居場所を教えてくれた。お前の声……頭のなかではつきり聞こえたよ」

手にしていた黄金色のラビットフルボトルを掲げ、千歌の握っていた水色のオレンジフルボトルと並べる。

ラビットボトルはともかく、オレンジボトルの方はおそらくハザードレベルによる変化ではない。千歌の……いや、この異空間にいる皆の想いが重なったことで起きた異常^{イレギュラー}だろう。

「……………」

キリオは彼女に大きな怪我がないことを確認するとマシンビルダーの座席から降り立ち……………眼前に立つ怪物へと視線を戻した。

「エボルト……………本当はお前だつてわかつているはずだ。火星の王妃と相打ちになったあの時……………俺達が身をもつて味わつた“見えない力”の正体は、誰かを想う心だつて。理屈じゃ説明できない奇跡が……………時に絶対的な力すら凌駕する可能性があるんだつてことを」

「紛い物風情がオレに説教でもするつもりか？」

以前のように剽軽な態度でその場の空気を我が物にしようとするほどの余裕はエボルトにはなかった。

道を踏み外したもう一人の自分が……………キリオのことがただただ許せない。認められない。認めた瞬間に自分の敗北が決定することを理解しているからだ。

「ハッ……………お前こそ本当にわかつているのか？お前に本来人格など存在しない。今こうしてオレと相對しているのは仮初めの意志。周囲の人間達によつて注がれた不具合の塊。ただのバグだ。想い……………？可能性……………？笑わせてくれる。一体これまで、そんなものが何度踏みにじられたと思つている」

鋭利な眼差しをキリオに突きつけたまま奴は言う。

「オレが少し手を加えただけで簡単に戦争が起こつた。オレは背中を押してやつただけ

だ、トリガーを引いたのは紛れもなく人間。……ヒトが持つ可能性はお前らの言うような奇跡に満ち溢れたものばかりじゃない。自らの愚かさに気づかないまま破滅する未来だつて十分に考えられる」

「そうかもしれないな。でも何度間違つてもやり直せる。心が負けない限りは……人は何度だつて立ち上がれるんだ」

「ほげけ」

そう切り捨てたエボルトから溢れる殺意が波のように迫ってくる。

奴に言葉は通じない。戦つて証明する他に道はないんだ。

……人間の可能性を。この地球にいる限り、ヒトとヒトとの繋がりは簡単には壊せないってことを。

「かつて歩んだ道を否定はしない。だがお前が向かってくるのなら……俺達は、俺達の『普通』で迎え撃つ。——お前が何を壊そうと、俺達はこの手で創造する」

「感情を取得したオレの強さに際限はない。そしてここにいるライダーはお前1人だ。………ジーニアスごときが通用すると思うなよ」

「1人じゃないさ」

「……なに？」

《グレイシャルフィニッシュ!!》

《プライムスクラップブレイク!!》

キリオと千歌の背後から飛び上がったふたつの影。

絶対零度の冷氣と大顎のような挟み蹴りが同時にエボルトへ殺到。

「……………」

奴はその攻撃を予見していたのか、寸前のところで身を捻ると紙一重でそれを回避してみせる。

後方へ受け流された衝撃が爆発を起こす。その中から現れた2人の戦士に……………キリオと千歌は安堵の表情を浮かべた。

「猿渡くん！ミカちゃん！」

「無事だったか」

エボルトを挟むようにして降り立ったグリスとローグを見やり、キリオはその姿に口角を上げる。

グリスブリザードナックルとプライムログフルボトル。2人に用意した強化アイテムがそれぞれのドライバーに装填されているということは………彼らは達することになったんだ。

仮面ライダーとしての極致に。

「うおおおおおおおッ!!」

大量のハードガーディアンを薙ぎ払い、猛炎をまといながら現れたのはクローズマゲマ。

「あれっ!?!どこだここ!?!……あ!お前ら!!」

変身を解き、キリオはすぐそばまで駆けつけてきた少年——リュウヤと肩を並べると、どこか緊張感を覚えさせない顔つきに笑みをこぼした。

「遅いぞ」

「しょうがねえだろ。いくら進んでも全然周りの景色変わんねえし……ていうかここどこなんだよ?」

「やつと外に出れた！——つてあれ？内浦じゃない？」

「うわっ！なにこゝ……!?」

「あ……！みんな!!」

3人に続くように背後から現れる少女達。

曜に梨子、善子、ルビイ、花丸、果南、鞠莉、ダイヤ。その後ろにいるのは月に聖良、理亞、そしてユイ。

A q u o r s、S a i n t S n o w、B e r n a g e——欠けている者は誰一人としていない。

「……くはっ……！ハハハハハハ……ッ!!」

沈黙を打ち破るようにエボルトが吹き出す。

「……人間ごときが……思い上がるなよ」

自分を囲むキリオ達をそれぞれ睨み返し、充血した眼を大きく見開いて奴は言った。
「雁首揃えたところで……それがどうした？お前らの力でオレをどうこうするなんてこゝ

とは不可能だ。……望み通り、この場で全員始末してやるよ」

「——エボルト」

千歌達の中から澄んだ声音が発せられる。

前へと踏み出したのは手にある黄金色のバングルを煌めかせ、その瞳を翡翠色に輝かせた少女だった。

「……………」

梨子の肉体を借りた火星の王妃にエボルトの鋭い視線が突き刺さる。

彼女——ベルナージュは依然として威風を感じさせる佇まいで奴へと目を移した。

「お前ほど哀れな生き物もそうないだろうな」

「なに……………」

思いもしなかった切り出しにエボルトの眉が動揺するように上がる。

「お前はいつたい何を思いこれまで生きてきた？多くの命を、文明を滅ぼし…………その果てに得たものはお前を満たし得るものだったか？」

「なにが言いたい？」

「自分の存在に価値はあると…………お前は胸を張ってそう言えるのか」

「なにを言い出すかと思えば…………そんな戯れ言を…………！」

怨念で満ちた眼差しが一層ドス黒さを帯びる。

「つくづく愚かな奴らだ。……逆なんだよ。価値があるのはオレだけだ。オレが操る破壊の力こそがこの世で価値のある唯一の存在。それが理解できない奴らがこれまで例外なく暗黒の彼方へと消えていった。——もうじきお前らもそうなる」

《エボルドライバー!》

悪意が充満した空間の最中、エボルトは取り出したベルトを腰に巻きつけながら言った。

「だが簡単には殺さない。……わずかな希望すら残されないほどに痛めつけ、刻み……自ら死を懇願するまで究極の絶望を味わわせてやるよ」

《オーバーザエボリューション!》

《コブラ!》

《ライダーシステム!》

《レボリューション!!》

ドライバーの連結部にエボルトリガーを挿し込み、奴は続けて2本のボトルを装填する。

エボルトがレバーを回すと同時に奴の周囲に現れる黒い竜巻と無数の立方体。

《Are you ready?》

「……変身」

そう唱えながら交差した両手を広げると、浮かび上がっていた立方体が奴のもとへと重なり柱状になる。

直後、エボルトの肉体は出現した漆黒の空間へと呑み込まれ――

《ブラックホール！ブラックホール！ブラックホール！！》

《レボリューション！！》

《フツハハハハハハハハハハ！！！！》

白黒^{ものくろ}の異形がその姿を顕現させた。

仮面ライダーエボル ブラックホールフォーム――その力は既にこの地球を滅ぼせるほどの力があるはずだった。だが奴はすぐにそれを実行しようとはしない。

なぜなら……奴は理解している。ここで地球の生命よりも自分の方が高位の存在であると証明する必要があると。

「……………最後の戦い……………だな」

エボルトの背後に構えていたタクミとミカに視線を送りつつ、キリオとリュウヤもビルドドライバーを装着しようとする。

「戦兔キリオ、万丈リュウヤ」

しかしジーニアスボトルを取り出した直後、それを制止するようにその一声が届いた。

声の主であるベルナージュの方を見やり、キリオは「え？」と首を傾ける。

梨子の細腕を持ち上げた彼女は、その手首に備わっていた黄金のバングルからより眩い輝きを放つと——キリオが手にしていたジーニアスフルボトル、黄金のラビットフルボトルに加え……………リュウヤの持っていた白銀のドラゴンフルボトルを宙へと浮かべた。

「お前達を信じよう。…………エボルトの遺伝子を持つからでも、奴の半身だからでもない。お前達自身をだ」

空中で幾度かの回転を見せた後、それはやがて中心へと集まり融合していく。

「……………」

ひとつのアイテムへと変化を遂げたそれを掴み取り、キリオはその全貌に目を落とし

た。

黒い缶——刻まれているのは“黄金の兎”と“白銀の龍”。

未だ怪訝な顔を浮かべているリュウヤを尻目に、キリオは静かに頷いたベルナージュと目を合わせると……………悟ったように口にした。

「……………なるほど」

「……………おい！」

その直後、徐々にこの結界内部へと現れる数十体のハードガーディアン。それに気がついたリュウヤが咄嗟にマグマナツクルを構えようとする。

「いやいい、俺の背後に付け万丈」

「あ!？」

紅の瞳で手中にあった缶状のそれを見つめた後、キリオは強引にリュウヤと背中を合わせる。

「お前らはできるだけ安全な場所へ」

「う……………うん！」

意識を失った梨子を抱えながら反射的に避難を始める少女達——その中の1人にじつと視線を注いだ後、キリオは眠るように瞼を閉じた。

「お、おい……………キリオ？」

背中越しに聞こえるリュウヤの呼びかけを隅へと追いやり、キリオは分析を再開する。

ベルナージュが作り出したこのアイテム——ビルドドライバーと掛け合わせられるのは間違いない。

だがこの構造を読み解く限り、加えて変身に必要なのは……………。

「——理解した」

「キリオ……!?!」

「構えろ万丈」

「あ!?!いやまだベルト巻いてな——!」

握りしめた黒い缶を振り、上部にあるプルタブを解放。

リュウヤと背中を合わせたまま、キリオは自分のビルドドライバーに勢いよくそれを叩き込んだ。

《クローズビルド!》

「……!?なんて!」

力強くレバーを回転させる。

2人を囲むようにして展開されたスナップライドビルダーに満たされているのは金と銀——キリオとリュウヤ、それぞれを象徴させるボトルの成分だ。

「どういうことだよキリオ!」

「いいから構えろ!俺だって成功するかわからなくてヒヤヒヤしてるんだ!!」
「あーっ……たくしやうがねえツ!!」

改めて互いの背中を合わせ、前後で同時に両腕を構える。

《Are you ready!》

立ち向かうべき標的は同じ。

……心が重なる。想いが繋がる。

背中合わせで心臓の鼓動がはつきり聞こえるくらいの静寂に包み込まれた後、問われた覚悟に2人は応えた。

「――変身ッッ!!」

「ハア……ッ!!」

形成されたスーツがキリオとリュウヤに集束した刹那、エボルトの放ったエネルギー弾が彼らの周囲を炎の海へと変える。

ほとばしる轟音と拡散する煙幕。

煙に覆われた世界のなかで………浮かび上がる金と銀の複眼を、エボルトは目撃した。

「――っ!?!」

脱兎の如く直進してきた影に咄嗟の回避行動をとる。

爆発から逃れた戦士は目視できないほどの速度でエボルトの横を通り過ぎ――
その背後に控えていた心火と大義の戦士の隣へと並び立った。

《ラビット！ドラゴン！》

《Be The One!!》

《クロースビルド!!》

《イエイ!!イエイ!!》

紅と金の“ラビット”、蒼と銀の“ドラゴン”。

腰からはローブを下げ、それぞれの要素を象った半身が組み合わさったそれは

………新たな領域^{レベル}へと達した“ビルド”。

その名は仮面ライダービルド クローズビルドフォーム。ビルド^{キリヲ}とクローズ^{リュウヤ}——
——2人の肉体と精神を結束させたことで誕生した奇跡の形態だった。

『なっ……なんだこれ……!!俺達合体してんの!!』

『ふう……ひとまず成功したみたいだな』

「戦兔先生、万丈くん……!!」

「ふざけてる場合じゃないだろ」

『……ああ』

同時にエボルトの方へ身体を向き直す。

………ここで全てが決着する。あとはここまで築き上げた勝利の法則を戦^{解く}うだけだ。

対峙する戦士達の間に見えない火花が炸裂する。

キリオは思い描いていた方程式を頭のなかで繰り返し解きながら、眼前に立つもう一人の自分を見据えた。

『………これで最後だ』

第78話 ラブ& amp ;ピースを謳え

本来の世界から断絶された空間に何度も轟音が響く。戦士達が互いの全力をぶつけ合っている音だ。

ここは戦場の真っ只中。安全な退避場所を探して彷徨ってはいたが……隠れるところなど断崖の陰くらいしか見つからない。

「わっ……！来て来る来てる!!」

「皆さん急いで!!」

背後から追跡してくるハードガーディアン達から逃げ惑う少女達。

そのうちの1人——高海千歌はそばにはいない青年達へ思いを馳せていた。

自分にできるのは待つことだけ。けど……それだけでも十分力になれる。

全てが終わったその時に「おかえり」と言える人間がいるだけで………それだけで、救われる人だっているんだから。

「だああああッ!!」

上空から黄金の軌跡を描いて飛来してきた槍のような蹴りが機械兵士の群を貫く。
「…………ミカちゃん！」

純白のマントをなびかせたパープルの戦士がこちらへ向き直り、取りこぼしたハード
ガーディアンを殴り飛ばしながら駆けつけてきた。

「みんな大丈夫？ 怪我してたりとか……」

「平気！……それよりそっちは大丈夫なの？」

戦闘が始まってから30分は経過しただろうか。戦えない自分達はタクミやミカに
守られながら身を潜めていなければならないので、詳しい状況は掴めない。

「わたしも猿渡くんも……今のところは特に問題ない」

「キリオくんと万丈くんは？」

不安げな表情でそう尋ねてきた曜に、ミカは若干の間を置いた後小さく返答した。

「たぶん大丈夫……だと思う。でもこの先どうなるかは——」

「きやつ……!？」

ミカが言い終わる前に吹き荒れた突風が会話を妨げる。

荒野の中心で死闘を繰り返している2人……いや3人の戦士が巻き起こす凄まじい
ほどの余波だ。

「おい氷室！ 呑気に話してる暇はねえぞ!!」

「猿渡くん」

不意に降り立った氷結の戦士を一瞥した後、ミカはハツと弾かれるように周囲へと視線を巡らせた。

先ほど薙ぎ払ったはずのハードガーディアンがあちこちから湧き出ている。100……いやもつと多い、気の遠くなるような数だ。

「クソ……！早くあいつらの加勢に行かなきゃいけねえつてのに……！」

「スピード勝負だね」

目にも留まらぬ速さで二丁の拳銃を取り出したミカが背後に向けて射撃。

トランスチームガン、ネビュラスチームガンの銃口からそれぞれ発射された弾丸が2体のハードガーディアンの頭部に直撃し、一瞬で沈黙させた。

トリガーに指をかけながら器用に回してみせた後、再度自分達を囲む機械兵士へとそれを構える。

「10分で片付けよう」

「いや5分だ。今は互角にやり合えてるみたいだが……相手はあのエボルトだ。このまますんなり押し通せるとは思えねえ」

千歌達を守るように前に立った後、タクミは離れた場所で破滅の化身と拳を交えている。『兎龍』に目を移した。

自分達も加われれば快勝とはいかなくとも戦況を良い方向へ持つていくことができるはずだ。

「……………」

お互いに顔を見合わせ、強く首を縦に振る。

ここで終わらせる。……終わらせて、また始めるんだ。

●●●

胸が高鳴る。……高揚感からだろうか。少なくとも恐怖によるものではない。

追ってきた標的が、求めていた状況が、今この場に全て揃っている。

絶対に逃すな。今ここで奴との戦いに——終止符を打つ……！

「ハア……………!!」

『……………!』

繰り出される攻撃を正面から全て弾いていく。

瞬きの間に放たれるそれらに向けて同等の速度で反撃、相殺した。

黒い軌跡が目で追える。はつきりと見える。

エボルトの動きが……捉えられる!!

「……………!!」

右方向からの打撃を視認。右拳によるストレートパンチで迎え撃つ。

光の速さにも等しいスピードを行使している奴に対して パンチパンチ!!

こちらは キック!! 通常以上に活性化されている「ラビット」の成分を駆使し

て パンチキック!! なんとか互角の状況を保っていた。

……次が来る。背後に回り込んでからの パンチ! 回避 キック!!

パ———!!

『うるっせええええええええ!!』

地に足を突き立てながら唐突に急ブレーキをかけた後、キリオは先ほどから頭の中に響いてくる雑念に怒号を飛ばした。

『万丈お前え! さつきからパンチキックしか言えてねえじゃねえか!! その程度の語彙力

しか發揮できないなら黙ってなさいよ!!』

『頭ん中も一緒くたになつてんだからしようがねえじゃねえか! お前こそごちやごちやと面倒なこと考えやがつて——』

『……回避ッ!!』

押し寄せる殺意を察知し瞬時に跳躍。

エボルトの投擲したエネルギー弾を避けつつ、クローズビルド^体となつたキリオとリユウヤは注意深く奴の挙動を目に焼き付けた。

未だ奴はウォーミングアップ程度の力しか出してはいないはず。こちらも向こうが出してくる問題^{攻撃}を順に解いているだけだ。このままでは勝負はつかないだろう。

エボルトが本気を出してからが正念場だ。それまでは落ち着いて………慎重に対処する必要がある。

「クローズビルド」か……なるほど。それが現状、お前らが出せる最高戦力というわけだ」

宙で不気味に揺らめきながらエボルトがそこをぼす。

奴から焦燥の感情は読み取れない。やはりまだ余裕を保っている。

全てのフルボトルを結集させたジーニアスフルボトルと……自分達のハザードレベルによって変質したラビットフルボトルとドラゴンフルボトル。加えてベルナージュ

の力を相乗して生成された“クローズビルド缶”は、間違いなくこれまでで最高の出力を発揮できている。

だがそれでも足りない。エボルトを仕留めるにはまだ1歩及んでいない。

しかしそれは向こうも同じこと。……まさに紙一重の戦いだ。一時たりとも油断は許されない。

「その醜惡な継ぎ接ぎの肉体で……このオレに迫るまでの実力に至るとはな」

『っ……!!』

瞬間移動を用いて一瞬で肉薄してきたエボルの拳を受け止めつつ、眼前にある白蛇の複眼を睨む。

……先ほどよりも一撃が重い。この戦いのなかで凄まじい成長速度を見せている。

置いていかれるな。突き進め。こちらハザードレベルの向上を——！

『あああああっ!!』

はつきりと残像が見えるほどの速度で奴の顔面へと拳を突き出す。

首を傾けてそれを受け流した後、お返しとばかりに放たれる裏拳。それを上体を曲げることで回避し、キリオとリュウヤはすぐさまさらなる追撃を加えていく。

『ハアッ!!』

「……！」

虚空から生成された蒼い炎が龍の姿へと変わりエボルへと喰らい付こうとするも、奴はそれを空中ヘテレポートすることで躲した。

『ふっ……!』

瞬時に形成され背後へ現れた黄金の兎型ユニットがジャンプ台となりキリオ達を奴のもとまで跳躍させる。

「『——ッ!!』」

宙に浮かびながら再度激突するそれぞれの拳。

エボルは徐々に攻撃の威力を加速させている——が、キリオとリユウヤはそれにすらも互角に渡り合うように対応してみせた。

『おおおおおおオオオオオオオオオッ!!!!』

「……………ッ!?!」

拮抗した戦闘が数十秒続いた後、僅かにキリオ達が打撃を繰り出すスピードを上回る。

「舐めるなああああ……ッ!!」

『がっ……!』

激昂しながら打ち込まれるエボルの一撃。

『逃さないッ!!』

クローズビルドは後方へ吹き飛びながらも体勢を立て直し、着地するや否や再度奴のもとへと駆け出した。

「ぐっ……………」

再び接近を許してしまったエボルトが仮面の下で苦悶するように歯を軋ませる。

戦兎キリオ、万丈リユウヤ——この2人が発する気迫に圧倒されているのだと……………数秒遅れて気がつく。

ジーニアスボトルにたかが2本のフルボトルを融合させただけでこれほどの力が発揮できるか?……………ありえない。その程度のスペックでブラックホールフォームの性能を上回れるはずがない。

実際先ほどまではこちらの方が優勢だった。だがこの2人は拳を、そして蹴りを繰り出すごとに攻撃の精度を上げている。

互いの呼吸を徐々に合わせながら……………絶対的な力を持つはずの自分と渡り合っている……………!!

「ぐおおおおオオオオ!!!!」

渾身の力が込められたどす黒い拳がビルドの装甲へと迫る。

……………まだまだ。単純な力比べならまだこちらの方が——!!

『だあッ!!』

エボルの放った一撃が標的を捉えようとした直前、不意にビルドの真横に現れた“黄金の兎”がスプリングを用いて彼らの脚を弾き飛ばし、加速させる。

装甲を抉ろうと殺到したエボルの攻撃——その軌道を難なく逸らしてみせた。

『そこッ!!』

「っ……………」

身を捻りながら振るわれた薙ぎ払いの蹴りがエボルトの首元に炸裂する。

一直線に地面へと突き刺さった後すぐに立ち上がりとするが——悲鳴を上げるように身体のおちこちから舞い散る火花を見て、奴は狼狽するように低い声を漏らした。

「このオレが……押されている……?」

『どらあああああつ!!』

「……………チィ……………!!」

烈風の如き速度で突貫してきたクローズビルドの飛び蹴りを真正面から受ける。

「ぐっ……………おとおおおおおおお!!」

両足を大地に突き立てて耐えようとするも、自分を滅ぼそうとするその勢いからは留

まる気配が全く感じられなかった。

敵は止まらない。自分を倒すまで——いや、地球を守りきるまで止まることはないだろう。

「な……ぜだア……!!なぜ人間……ごとき……に……イ……!!」

『ハアアアア!!』

弾き飛ばされ、膝をついたエボルトの前にロープを翻した戦士が降り立つ。

キリオとリュウヤは肩を上下させながら……地を見つめている奴へゆつくりと視線を落とした。

『同じことを何度も言わせるな。……ライダーシステムは憎しみなんかじゃ強くなれない。誰かを想う心が……願いがあつてこそ、俺達は限界を超えられる』

『俺達には守りたい奴らがいる。……未来に繋ぎたいと想う心がある。それがテメエと俺達の……仮面ライダーとしての決定的な違いだ!!』

「ふざ……ける……なあああああッ!!」

『!!』

再びこちらに向かってくるエボルトに両手を構える。

……が、奴が攻撃を放とうとした直前——後方から飛び出したふたつの影によってそれは遮られた。

「オオ……ッ！」

仰け反ったところに強烈な冷気が備わった剛腕が叩き込まれる。

よろめいたエボルトに対して細心の注意を払いながらこちらを振り返る戦士達に、キリオとリュウヤは揃って表情を緩ませた。

『猿渡、氷室!!』

「どうやら間に合ったみてえだな」

「うん、よかった」

顔を上げたエボルトの双眸から殺意に満ちた眼差しが注がれる。

「死に損ない共が……!!」

「ふっ……!!」

駆け出したミカは両手に握られた2丁の拳銃で巧みに射撃を行いながらも、満身創痍となった奴の反撃を正確に回避していった。

エボルトの繰り出した打撃を受け止め、憎悪に満ち溢れたその仮面を見やる。

「……クハッ……ハハハハ……！今更オレに歯向かったところでお前の犯した罪は消えない……!!永遠に残り続ける!!それがわからないお前じゃないだろう……なあ、ミカア

!？」

「……………わかってるよ、そんなこと」

「…………ツ!!」

苦し紛れにこぼれた奴の言葉を容易く受け流し、ミカはさらなる追撃を与えていく。
「それでも進むしかない。どんなに辛い過去を……罪を背負ったとしても、わたしは……ッ！わたしを救ってくれた人達を裏切るわけにはいかないから!!」

「ぐっ…………!!」

プライムローグの放った拳がエボルの腹部を捉える。

たたらを踏んだ奴に追い打ちをかけるように——ミカはベルトのレバーを強く回転させ、跳躍。必殺技を解放した。

「だからわたしは生き続ける!!たとえどんなに苦しい道が待ってたとしても……自分のために生きるんだ!!——『プライムスクラップブレイク』ッッ!!」

巨大な顎のオーラがエボルトの肉体を挟み込み、凄まじい圧力でその鎧を砕かんとする。

「がああああああ……!!」

炸裂し、宙へ放り投げられた奴に狙いを定めて飛び上がったのは——グリスブリザード。

奴の繰り出した蹴りに対抗するように――2人は意識を重ね、腰にあるレバーと手を伸ばした。

《Ready go!!》

『――!!』

黄金と白銀のオーラが眩い煌めきを放射する。

襲い来るブラックホールを……………2人は、真正面から打ち破ろうと片足を突き出した。

……………最後まで謳い続ける。自分達の求めた理想を。
愛と平和^{平穏}を……………!!

『“ラブ& amp ;”――!』

『“ピース”――!』

『フイニイイイイイイイイイッシュツッ“!!!!』』

全てを塗り潰すような漆黒と、宇宙の果てまでも照らすかのような輝きが衝突する。

「——!!」

『ああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!』

音を立てて崩壊していく白黒ものくろの装甲。

破壊と創造、それぞれを司る最大威力のぶつかり合いを制したのは——

『勝利の法則は……!』

『決まっ……たあああああああ!!!!』

空中で拡散する衝撃と爆音。

幾千もの炎が大地に降り注ぎ火の海を作り出すなか——その中心に、互いの身体を支え合った青年と少年が降り立った。



死に体を引きずりながら思う。

奴らの力は本物だ。この肉体を滅ぼす寸前まで追い詰めたことで……それを証明してみせた。

……きつと、間違っただけだ。

だがそれでも……それでも——！！

認めるわけには
いかない。

「みんな!!」

砂埃にまみれた制服を身にまとった少女達が晴れやかな表情でこちらに駆けてくるのが見えた。

辺り一面をメラメラと覆う炎を避けながら覚束ない足取りで彼女達のもとへ歩みを進める。

リュウヤ、タクミ、ミカ、そしてキリオの4人は変身が解かれた素顔を露わにしつつ、やってきた千歌達に向けて微かな笑みを向けた。

「やったんだね……! やつと……終わったんだね……!!」

「そんなに傷付いて……！すぐに手当てしないと!!」

「エボルトがいなくなつた今……この塔もどうなるかわからない。まずはここを脱出しよう」

「う、うん！」

冷静に周囲を見渡したミカが皆を先導し、結界の外を目指して走る。

「……?」

「キリオくん？」

それに続こうとしたリユウヤと千歌だったが、こちらに背を向け炎の海を見つめながら無言で佇んでいるキリオの存在に気がつき、その静けさに怪訝な眼差しを注いだ。

「おい、キリオ？」

「どうかしたの……?」

動かないまま一点に向けて視線を送り続けるキリオ。

やがて何かを悟つたように目を伏せた彼は、消えたはずの存在に対して——ひどく落ち着いた声音でこぼした。

「やっぱり……このままじゃ終われないよな」

「え？」

《ブラックホールブレイク!!》

刹那、巨大な黒渦が空を覆い尽くし、地表から光を奪い尽くした。

「えっ……!?!」

「なんだ……!?!」

脱出を試みていたミカ達思わず立ち止まり、急変した世界に困惑する。

誰もが驚愕する状況のなか、キリオだけが………至つて普段通りの落ち着いた佇まいを保っていた。

「——ねエ……!」

やがて炎海の中からそれは現れる。

「みとめ……ねエ……ッ!!」

文字通り化け物じみた執念を見せながら、決して認めることのできないものを葬り去るために。

……奴は、再び立ち上がってきた。

「そんなことが……あつて………たまるかああああアアアア………ッッ
!!!」

「なん……だ……あれ……!?」

受け止めきれない膨大な憎悪の感情がリユウヤの顔を引きつらせる。

炎の中から這い出たのは——“蛇の怪物”だった。

ベルトは装着しているものの、その姿はどう偽つても「仮面ライダー」とは呼称できない。怪物に潜んでいた全ての悪意が体现されたかのような醜悪な姿。

……“怪人”と呼ぶのが相応の、毒蛇の化け物がそこにあつた。

「……エボルトリガーのリミッターを外し、システムを暴走させて自分ごと何もかもを吹き飛ばすほどのエネルギーを放出させる」

淡々とした口調でそう語りながら、キリオは自分を睨み続ける怪物へと視線を返す。

「そうまでして……俺の存在を否定したいか」

「きつ……キリオ……くん」

「……っ」

想像を絶する執念を目の当たりにした千歌達は、血の気の引いた顔で一步後退した。

戦意が削がれるほどの悪意を前にし、他に動ける者がいないなか——キリオは一人、黙々とビルドドライバーを装着し直しては戦闘態勢へ入ろうとする。

「ここは俺が食い止める。お前達は外を目指せ」

「おい待てよ……！なら俺も……！！」

そう口にしながらかみ寄ってきたリユウヤに対して手にしていた物を掲げてみせる。黄金色に輝くラビットフルボトル——それが形となつていているということは、先ほど変身が解除された時点でベルナージュの力は途切れ、融合していたボトルは再度分離してしまったのだろう。

「……やっぱり最後は、俺一人で決める必要があるみたいだ」

有無を言わせぬ強い意志を孕んだ瞳で千歌達を見やり、彼は静かに言う。

「キリオくん……」

「戦兔……先生」

「猿渡、氷室、万丈、みんなを頼む。……大丈夫だ、こうなることは予想済みだった」
片手に握ったラビットボトルに目を落とす。

……そうだ、ここまでは想定の内。だからこそ自分はこの先にある「たった一つの解法」をこれまで思い描いてきた。

ソレが成功するかどうかはわからない。けれどやるしかないんだ。

たとえ……………全てが消えて無くなってしまうたとしても。

「万丈」

俯いていた少年に向けて呼びかける。

「もしもの時は……………お前が繋ぎ止めてくれ」

「…………え？」

意味の読み取れない言葉に首を傾けた少年に背を向け、キリオは足を踏み出す。

……………今度こそ、全てにピリオドを――

「キリオ！」

「……………」

不意に投げかけられた声に反応し、反射的に振り返る。

同時に視界に飛び込んできた銀色の輝きを片手で受け止めた後、キリオはその光の正体大きく目を見開いた。

「ドラゴン……………ボトル……………」

「それ、お前に返すよ」

腰に手を当て、口角を上げた少年がそんなことを口走った。

「ここでお前が勝てば、もう戦う必要もないんだしな。……それに、俺にはこいつもある」

取り出したクローズマグマナツクルを掲げながらそう笑い飛ばしてみせるリュウヤ。

「私からもこれ！」

「千歌？」

そして彼に続くように——その隣に立っていた少女もまた、自らが所有していた1本のフルボトルをキリオに投げ渡す。

水色の輝きを放つオレンジフルボトル。……2人を繋いでくれる、絆そのものが形となったボトルだ。

「これはお前にあげて——」

「うん、わかつてる。だからさ……全部終わったら返しに来てよ。……約束だからね？ 破ったらぜーったいに！ 許さないから!!」

そう言つて笑顔で送り出してくれた2人が身を翻し、ミカやタクミ達と共にこの場を去ろうとする。

……抱えきれないほどの想いを。身に余るほどの勇氣をもらった。

結界を出て皆の姿が見えなくなったのを確認した後、キリオは静かに目を瞑り――
――いつものように宣言した。

「さあ――最後の実験を始めようか」

身体に染み付いた動作を行う。

黄金のラビットフルボトル、白銀のドラゴンフルボトルをそれぞれの手で持ち、手首のスナップを利かせながら上下させ小気味の良い音を鳴らす。

「……!?!」

キリオの周囲に無数の“数式”が現れ、これから起こる不可解な現象を対峙する怪物に予感させた。

《ラビット!》

《ドラゴン!》

ビルドドライバーに握りしめていた2本のボトルを装填し、レバーを回転。展開されたスナッププライドビルダーに満たされた金と銀の成分がスーツを形作り、キリオの前後へと配置される。

《Are you ready!?!?》

ベルトから発せられた問いかけを噛み締め、閉じていた目を開く。

両手を勇ましく構え、かつてないほど声を張り上げながら——キリオはその問いに返答した。

「変身ッ!!!」

キリオの肉体に輝かしい装甲が重なっていく。

《ベストマッチ!!》

金の“ラビット”、銀の“ドラゴン”——本来相性がいいとは言えない“トライアルフォーム”のビルド。

背負った者達の想いに応えるように「ベストマッチ」の判定を告げたビルドドライバーから顔を上げ、キリオは眼前に立っている宿敵へと2色の複眼を向けた。

「——」

数秒の沈黙の後、走り出す。

自分の存在を証明するために、

自分の正しさを確立させるために、

「
——ッ
!!!!
」

“仮面ライダー”と“怪人”は、互いの拳をぶつけ合った。

第79話 ビルドが選ぶ明日

綻んでいく空間から覗く景色を頼りに少女達は走る。

エボルトが最後の力を振り絞ってブラックホールを作り出した瞬間からこのパンドラタワーは崩壊を始め、内包していた異空間はメッキのように少しずつ剥がれていった。

「……………こつちー！」

先頭を進んでいたミカに続いて、潮風の匂いが鼻に届くと同時に奥に見えた街並みへ向けて駆け出す。

「出れた!?!」

「やっと帰ってこれたよー!!」

内浦の町に飛び出した千歌達は乱れていた息を整えると背後を振り返り、その傍らでそびえ立つタワーを見上げた。

「……………」

時折伝わってくる振動が皆の心を揺らす。

タワーの中で繰り広げられているであろう死闘を想像し、千歌は青年の勝利を願いながらぐつと息を飲み込んだ。

「……………キリオくん」



拳と拳がぶつかり合う度に周囲の砂塵が大きく舞い上がる。

向こうが繰り出した攻撃を避けてもその威力がはつきりと実感できる。それほどに奴の一撃は絶大だ。

「……………っ！」

顔面めがけて突き出された打撃を回避し、その余波で背後にある断崖が木っ端微塵になる音を聞き流しながら青年は敵の懐へと踏み出した。

「ああああああっ!!」

「ゴ……………オ……………！」

“ラビット”の足で生み出した推進力を糧に、“ドラゴン”の拳をエボルトの腹部へとめり込ませる。

エボルトリガーのフィーバーフローを解き放った奴の放つ攻撃は全てが必殺の域にある。一度たりとも直撃は許されない。

できるだけ反撃の隙を与えずに――― 畳み掛ける……!!

「オ――― オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「……!」

上方向から殺気を感じ取り離脱。

遅れて放たれた両腕による叩きつけが大地に亀裂を走らせ、巨大なクレーターを形成した。

「ツツ!!」

爆発するような勢いで地面を蹴り飛ばしたエボルトが強大なソニックブームを生み出しながら突貫。

「くっ……!!」

研ぎ澄まされた反射神経を駆使し、キリオは奴が到達する寸前で横に転がることでそれを避けた。

「はっ……………！は……………っ！ハ……………ア……………ッ！」

喘ぐように息を吸いながらエボルトを視界の中心に捉え、頭から足先に至るまでの動きを見落とさないよう目を凝らす。

ほんの少しの間違いが、判断の遅さが……………自身の死を招く。

負けられない。奴にだけは……………絶対に勝たなければならない。

「わからない……………ナ……………」

ノイズ交じりの声が遠方から届いてくる。

「『ラビット』と『ドラゴン』は……………ベストマッチじゃあない……………はず……………ダ。ただの……………トライアル形態が……………なぜここまで……………粘れる……………！」

「そんなの……………決まってるだろ」

絞り出すように問いかけてくるエボルトに対してキリオは警戒を解かないまま、不思議がるような調子でそう返答した。

「俺と……………万丈や千歌……………みんなの想いが詰まったボトルで変身したビルドなんだ。本来の相性なんて関係ない。……………俺達が……………！ベストマッチな奴らだからだよッ!!」

《フルボトルバスターー!》

ドライバーから生成された大剣を掴み取り、その持ち手を曲げる。

《ラビット!》

《タンク!》

《ジャストマッチです!》

2本のフルボトルを装填し、エネルギーが充填されると同時に持ち手を開いたまま腰を低く構える。

「そんな攻撃が……今更……通用する……ト……!!」

「試してみるか?」

左足のスプリングに力を込め、風を切り跳躍。

《ジャストマッチブレイク!!》

「ガ……………ッ!」

空中から撃ち出したエネルギーの砲弾がエボルトの肉体を抉り、その体勢を崩した。

着地した直後に再び左足を用いて地を蹴り上げ直進する。

奴のもとへ辿り着く間にフルボトルバスターの持ち手を閉じ、バスターブレードモードに変形。

「……………ッ!!」

そのまますれ違いざまにエボルトの身体へ刃を叩きつけ、引き裂いた。

「ぐお……！オオオオオオオオ………ッ!!」

「らああああッ!!」

振り返った直後に再び大剣を振りかぶり、全体重を乗せた斬撃を振るう。

交差させた両腕でそれを受け止めるエボルト。

ゼロ距離で睨み合う怪物と戦士が互いに前へと踏み出そうとする。

再びぶつかり合った2人の周囲に衝撃波が拡散し、辺り一面の地表を吹き飛ばした。

「最後の最後まで……ひどい思い上がりだな……！お前が使っているのハ………所詮エボルトライバーの模造品……！どう足掻いてもオレには……勝てない……ッ!!」

「ぐっ……!?!」

刃を弾かれ、がら空きになった胴体に星狩りの拳が打ち込まれようとする。

咄嗟に全ての意識を回避に費やす。が、完全に避けきることは叶わなかった。

「っ………!」

奴の打撃が僅かに掠めた脇腹の一部が瞬時に崩壊していくのを察知する。

「だあああああ!!」

想像を絶する激痛に苛まれながらも、キリオは血反吐を吐きながらエボルトの真横へと回り込んだ。

《ゴリラ!》

《ダイヤモンド!》

《タカ!》

《ガトリング!》

《アルティメットマッチです!》

《アルティメットマッチブレイク!!》

「……………ツツ!!」

下方向から振り上げられた斬撃がエボルトの肉体へ吸い込まれるように向かっていく。

「ア……………」

奴に一太刀浴びせ、間髪入れずにボトルの入れ替えを行う。

《忍者!》

《コミック!》

《ライオン!》

《掃除機!》

《アルティメットマッチです!》

《アルティメットマッチブレイク!!》

「はあッ!!」

瞬時に変形させた持ち手を握りしめ、トリガーを引き絞る。

「オオオオオオオオオオオ——ッ!!!」

発射された砲弾に耐えるのも束の間、徐々に後退を余儀なくされたエボルトが勢いに負けて大きく吹き飛んだ。

「このベルトは……俺が、俺の平穩を守るために作ったものだ」

フルボトルバスターを杖のようにして地に突き立て、折りかけた膝を支える。

再度立ち上がりとしているエボルトを捉えながら、キリオはゆつくりと次のボトルを取り出していく。

「そして……あいつらがそのあり方を変えてくれた」

《ドラゴン!》

「かつてのそれとは違う……新しい俺を創ってくれた……!」

《ロボット!》

「みんなが築き上げてくれた……『仮面ライダービルド』が……今ここにある……ッ

！」

《バット！》

《ミラクルマツチです！》

「俺はこの先の未来を創りたい。お前を乗り越えた先にある明日を……………あいつらに見せてやりたい……………!!」

“ラビット”の成分を極限まで活性化させ、解放。

不規則な動きでバウンドし、攪乱しながら奴のもとへと肉薄する。

「そのために俺は……………この力を使うんだッ!!」

《ミラクルマツチブレイク!!》

「戯言をオオオオオオオオ!!!!」

3種の成分が混ざり合った斬撃がエボルトの身体を捉える。

その強靱な肉体に刃を立て、肩が壊れんばかりの力で振り抜いた。

「かつ……………ア……………!!」

全身に稲妻を走らせたエボルトが力尽きるように膝を折る。

「……………っ!!」

軋む四肢を強引に振りながらキリオは再度奴へと接近。
 ずっと頭の片隅に置いていた勝利の法則を思い起こす。
 今こそそれを実行する時だ。

「エボルトオオオオオオオオオオオオ………ッ
 !!!」

《ラビット!》

《ドラゴン!》

《オレンジ!》

《ファイナルマツチです！》

ターの刃を包み込む。

—地上にいる怪物に向けて、最後の一撃を放った。

《ファイナルマツチブレイク!!》

ああああああああああああああああああああ！！！！

!!

エボルトの胴めがけて振るわれる光の刃。

「カツ……！アアアア……アアアアアアア………ツ！！！」

て声音を振り絞る。

ク
ハ
ツ
……
ハ
ハ
ハ
ハ
……
ツ
！
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
！！

これで終わらせたつもりか

……!? オレは遺伝子を自由に操れることを忘れるな……!! この身体が滅んだとしても……お前や万丈がこの世に存在する限り……オレは何度でも蘇る……!! いずれまたお前らに絶望を振りまく時が来るだろう……ッ!!」
消えゆく最中に漏らす嗚咽交じりの言葉。

「精々限りある平穩を楽しむといい……! オレは必ず……この星を喰らうために、もう一度——!」

「……………ああ」

キリオは奴の言い分を受け止めた後、仮面の下で目を伏せ——そして大きく見開いた。

「わかつているさ」

「ア……………!?!」

直後、強烈な異物感と同時にエボルトの身体が強張った。

「なに……を——!?!」

フルボトルバスターによって刻まれた裂傷。そこに突き立てられているのはビルドの右腕だった。

徐々に侵食を深めていく黄金の腕に戸惑いの念を向けつつ、エボルトは瞬時にキリオの行おうとしている強行を察知した。

「まさ……か……！ オレを………取り込もうというのか………ッ!?」

奴の問いに対して彼は沈黙で肯定する。

……奴自身も話した通り、エボルトを完全に消し去るのは不可能だ。

ならば——元は同一の存在だった自分の身体と一体化させることでその存在そのものを封じ込める他に道はない。

それが………自分達に残された、たった一つの勝利の法則だった。

「俺とお前がひとつになること。……それが、地球を救う最終兵器になる」

「馬鹿……な………っ！ オレとお前の性質は真逆……！ 決して同じ方向を向くことはない独立した人格同士なんだぞ……!? 実行したとしても何が起こるかはわからない……!! 互いに打ち消し合い、破綻する可能性だってあるんだぞ……!! それを、お前は——!!」

「………思ってたんだ」

狼狽するエボルトに対して、キリオは悲哀に満ちた眼差しを向ける。

——『もしも……キリオくんみたいに私達と同じような感情が、あのヒトにも芽生えてたら……悲しいことも起こらなかったのかな』

おもむろにそうこぼされた少女の言葉を思い出す。

「もし何かが違えば……俺とお前の立場は、逆だったんじゃないかって」

「なん……だと……!?!」

「俺は偶然あいつらに惹かれ、偶然お前と決別する道を選んだ。……お前を1人にしてしまったこと、本当にすまなかったと思っている」

「やめろ……! やめろッ!!!」

かつての自分が犯した罪は決して消えない。これまでやってきたことは……全部残っているんだ。

血塗られた道を歩いてきた過去をなかったことにはできない。けど……それでも光を目指して歩くんだ。

「俺はお前を殺さない。……お前という過去を背負いながら、俺はこの先の明日みらいを生きていく」

同化している右腕をさらに押し込み、キリオは異形との融合を果たそうとする。



何もかもが閉ざされた世界のなかで想う。

強い感情が自分のなかで渦巻いているはずなのに……どちらが本当の自分かわからない。

けれどはっきりしていることが一つだけある。

自分のやるべきこと………使命だけは……鮮明に――

「ち、ちよつと！なんかあのブラックホール……どんどん大きくなってない!?」

「え!？」

「ほ、本当だ……」

空を埋め尽くしている黒渦を指しながら少女達是不安げに顔から血の氣を無くす。
ずつと鳴り響いていた戦闘音が止んだ今でも、この地球を滅ぼそうとしている巨大な
孔は依然として残り続けている。

「……………っ」

皆が沈んだ表情を浮かべるなか、少年と少女は揃って握り拳に力を込める。

ここにはいない青年の姿を幻視しながら……………必死にその無事を願っていた。

《オレンジ!》

《フルボトルブレイク!!》

刹那、宇宙の外側までも照らせそうなほどに眩い水色の閃光が迸る。

惑星を一撃で両断するかのような巨大な一閃が空へと放たれ、地球を飲み込もうとしていた巨大なブラックホールは瞬く間に跡形もなく消滅してしまった。

その余波で起きた嵐のような突風に身構えながらも、少女達は再び塔の建っていた方向を見上げる。

「見て!!」

不意に1人が掲げた指先の方に皆の視線が集中した。

放たれた斬撃が葬ったのは、ブラックホールだけではなかった。

町の景観を破壊していた塔は頂上から徐々に崩壊を始めていき、日本列島を分断していた壁までもが少しずつ粉碎されていく。

「いったいなにが……」

「……みんな、あれって………!!」

「え?」

摩訶不思議な現象に首を傾けながら、少女達は空に浮かんでいたひとつの影を視界に入れた。

白黒の装甲に浮かび上がっているのは……金と銀。

黒いローブを翻しながら、兎と龍を象った複眼でこちらを見下ろしたソレは——
1人の少女と目が合った途端、その動きを静止させた。

「そういう……ことかよ」

宙に浮かぶ異形の影を見た少年が目尻に涙をにじませる。

彼はすぐさまビルドドライバーを装着しその場を駆け出すと、天に向かって全力で疾走を始めた。

「任せろキリオ……！お前はどこへも行かせない……！お前と高海達が……離れ離れになっ
ていいわけがねえんだからッ!!」

《極熱筋肉！クローズマグマ!!》

溶岩の仮面を被った少年は背に備わっていた炎の翼を雄々しく展開し、異形が漂っている空を目指して飛翔する。

……告げられた役目を、果たすために。

「↓」

誰かが誰かを呼ぶ声がある。

使命を果たしたはずなのに……未だ自分をこの場に引き留めようとする強制力のよ

うなものが胸のなかに感じられる。

「——オ！」

正体不明の違和感だ。……先の行動に支障をきたすはずの感覚だが、不思議とそれを排除しようとは思わない。

「——リオ!!」

真下から徐々にこちらへ迫ってくる熱を感じる。

心の奥底が暖かくなるような……どこか安心する熱さが。

「キリオツツ!!!」

誰かの声が聞こえてくる。

すでに知っているはずの生物の声音。

……………自分に対して発せられた呼びかけだ。

「」

声の主と視線を交わす。……それは、人の姿を模した龍だった。

「俺の手をとれツツ!!!!」

強く差し出された手のひらに釘付けになる。

理由はわからない。けれどもそれを握り返さなければ確実に後悔することになるという予感だけが胸に渦巻いている。

しかし龍の頼みを受け入れるのは難しい。自分はこれから、また別の使命を果たさなくてはならないのだから。

……そうだ、使命だ。遠い宇宙へと旅立って、多くの惑星を――

………使命、とはなんだったか。
そもそも自分は何者だったか。

先ほど龍にかけられた言葉を思い出す。
彼の発したことにその答えが隠されていると………不思議とそう確信できた。

「俺の……名前は――」

焼かれるような熱い想いが手のひらから伝わってくる。

眩い輝きに迎えられながら——青年は徐々に暖かみを取り戻していく自分の心に口元を緩めた。

エピローグ ベストマッチな奴ら

「おお」

見上げた視線の先に見えた7色の橋に思わずそう声を漏らす。

空に虹がかかっている光景を見るのはいつぶりだったろうか。随分長いこと目にしていなかった気がする。壁がないなら尚更だ。

これから踏み入れようとしている学園の表札を一瞥しながら思う。何の偶然か、その名前のなかにも「虹」という字が刻まれていた。

何も知らない一般人が一目見ただけでは学校とは思えないであろうほど都会の街並みに溶け込んでいる校舎を見上げる。今日この場所に訪れたのは仕事の一環だった。

「……………行くか」

正直あまり気乗りはしないが、わざわざ県を跨いでの頼みとなれば無下に扱うのも気が引けたのだ。

「かつての戦争で実際に戦場に立った人間としての体験を生徒達に話して欲しい」――

——と、要するに講演だ。ちよつとした小話をするだけ。

……知らない人間の身の上話など子供達も大して聞きたくはないだろうに。まあ面倒くさいのはお互い様ということで勘弁してもらおう。

柔らかな風が吹き抜けるなかを歩いていく。

訪れ始めている春の気配を感じながら胸に手を当てると——懐かしい感覚が、ふと思い起こされた。

「——くしゅっ!」

「みーちゃん風邪?」

思いがけず発せられたくしやみの音に驚きつつ、葛城ユイは隣を歩いていた幼馴染の顔を覗き込んでそう尋ねた。

「ううん、たぶん花粉症………はっ……くしゅっ!……くしゅっ!!」

「おうおう、これ使いな」

「ありがと——くしゅっ!」

ユイが気の毒そうに眉を下げながらポケットティッシュを差し出すと、赤みを帯びた鼻とぼんやりとした目を浮かべた少女がたどたどしい声で返した。

「そっかあ……もうそんな季節なんだねえ」

「わたし達ももうすぐ3年生になるんだよね。なんだか不思議な気分………くしゅっ!」

「いやあ、まさか無事に生きて年を越せるとはね。千歌ちゃんの言ええ『奇跡だよ!』って感じ」

冗談めかしてそう言い放つユイに戸惑いながら、少女——氷室ミカは伸びた後ろ髪を軽く整えながら目を伏せる。彼女の言う通り、自分達が今こうしていられること自体奇跡のようなものだった。

地球外生命体エボルトとの戦いから数ヶ月が経過した今………当時の状況では考えられなかった平穩に満ちた日々が続いている。

……最終決戦のあの日に自分が命を落とさずに済んだことが、今になって不思議に思う。

そして同時に安心もしていた。もう誰かを傷つける必要も、傷つく必要もない。

ずっと待ち望んできた生活が………こうして――

「氷室！・葛城！」

不意にかけられた呼び声に肩を揺らした後、2人は揃って背後から近づいてくる気配に振り向いた。

「万丈くん――くしゅっ！」

「なんだ氷室、風邪か？」

「花粉症だって」

「ああ、もうそんな季節か」

数秒前と同じやりとりを聞き流しながら、ミカは2人の方を見やって口を開く。

「待ち合わせ場所に着く前に合流しちゃったね」

「そうだな」

「じゃあ駅まで競争しようよ！」

「おっしや上等だあ！」

（子供が2人……）

駆け出していくリユウヤとユイに苦笑しながらミカも走る。

万丈リユウヤ——彼は難波高校のスクールアイドル部に、マネージャーとして加わることとなった。

エボルトとの戦いが終結した後の難波重工は体制が大きく変わり、部活動への過剰な支援も廃止されることになった今……自分達Bernageの活動は、他の学校のスクールアイドル達と何ら変わらないものとなっている。

衣装等の予算も自分達でやりくりしなければいけなくなったが……あまり不便には思わない。自分達だけの力で作り上げていくアイドル活動には、以前では感じられなかった楽しさが見出せるのだから。

「くう……着いた」

「短期間で2度も飛行機に乗ることになるとはな……………」

「すっかりこちらの空気に慣れてしまいましたね」

沼津駅から出るのと同時に大きく身体を伸ばす理亞とタクミを見て聖良が微笑む。

内浦での戦いを経て北海道へ帰ったのも束の間、千歌達からある誘いが届き、S a i n t S n o w の2人とタクミは再びこの地に舞い戻ることとなった。

「……………」

スカイウォールやパンドラタワーが無くなった街並みを見て、強烈な違和感に襲われる。

長いこと皆の心にその存在を刻みつけてきた惨劇の壁——そんなものの最初からなかったかのように、駅前通りは平気な顔をした街行く人々で溢れ返っているのだ。

「やっぱりスムーズに国境を越えられるようになったのは結構デカイな」

「国境って……もうとつくに統一されたでしょうに」

「あつ……そうか」

「ふふ、前線に出ていた猿渡くんにはまだ実感がないみたいですね」

そう指摘され、思わず後頭部を搔いて照れ隠しをする。

……そうだ、戦いは終わった。スカイウォールが完全に消滅した今、惨劇が起こる以前の日本に戻ったんだ。

周囲の環境が突然変化したのもあるが、聖良の言う通り仮面ライダーとして戦っていた自分にとって“平穩”をいきなり差し出される毎日は嬉しくもあり戸惑いもあり、といったところだ。

「聖良さーん！理亞ちやーん！猿渡くーん!!」

「あ」

遠くから届いてきた呼び声に反応し、3人は声の聞こえた方向へと身体を向ける。よく見知った顔ぶれがそこに並び立っていた。

「そろそろ着く頃だと思ってみんなで待ってたんだ」

「久しぶり……でもないですね」

「あはは、向こうにいる間もテレビ電話で話しましたからね」

歩み寄ってきた少女——高海千歌と、その背後に待機していた少女達とそれぞれ目配せする。

Aqoursの9人と……渡辺月。皆エボルトとの戦いを共に生き抜いた仲間だ。

あと少しすればBernageの2人とそのマネージャーも駆けつけて——

「……そういえば、あいつは？」

タクミの何気ない問いに全員が上にある虚空を見やる。

ユイやミカ、リユウヤを除いても拭いきれない違和感があった。この場にいないならぬ人物があと1人いるはずなのだ。

彼の口にした「あいつ」が誰を指しているのかすぐに察した千歌は、パツと表情を緩めては返答した。

「そろそろ連絡が来るはずなんだけど——」

直後、彼女の腰から着信音が流れる。

千歌はスマートフォンを取り出し、その画面に映し出されている名前に視線を落とすと……………柔らかな笑顔でこぼした。

「キリオくんからだ」

●●●

「キリオ！」

「キリオくん……………!!」

数ヶ月前——あの戦いの日。

リユウヤが連れ帰ったキリオが、変身を解いて見せたその姿に…………千歌達は一瞬言葉を失った。

生気が失われた青白い顔に、白と黒がまだらに入り混じった灰髪。人間から大きくかけ離れた奇妙な雰囲気を出している彼にその場にいた全員が驚愕した。

だがしかし……………それが紛れもなくキリオ本人であることは、誰もが理解していた。

「……………俺の中には」

自分を見下ろす少女達から目を逸らしながら、キリオは小さく切り出した。

「……………エボルトがいるんだ。今は奥底で眠っているようだが、奴はいずれ目覚める。必ずだ。……………これから先、このまま俺の人格を保っていられる保証はない」

「もういい、もういいから」

ゆっくりと膝を折り屈んだ千歌が、震える声でそう言いながら尻餅をついていたキリオへと手を回す。

少女の暖かな体温を身に噛み締めながら……………彼は目に涙を溜め、言った。

「俺が過去に犯した罪は永遠に消えることはない。……………俺の戦いが終わることはないんだ」

「全部わかってるから。……………だからせめて、私達のそばにいてよ」

「ああ、そのつもりで万丈の手を握った。……………お前らには、感謝してもしきれない」
不安で仕方がなかった。

エボルトを自分の身に宿して封じ込める——最後の手段ではあったが、結局これはその場のぎにしかない。真に奴を倒すには自分やリュウヤの命までも差し出

さなければならぬのだから。

エボルトとの因縁を断ち切ることは不可能だ。それを理解していたキリオには……千歌達のもとへ帰ることを躊躇した。

だがリユウヤが手を差し伸べたあの時と——今は、そんな迷いはどこかへ吹き飛んでいった。

以前とは違う。自分には帰る場所がある。……待つてくれる人がいる。

（俺の名前は……戦兔キリオだ）

千歌の鼓動を間近に感じながら、キリオは自分が何者かを今一度心に刻みつけた。

「それが……お前達を選択か」

唐突にかけられた声に反応し、顔を上げる。

そこに立っていたのは……翡翠色の輝きを瞳に宿した梨子だった。

彼女に憑依した火星の王妃——ベルナージュは自分を見上げるキリオと千歌をそれぞれ見つめた後、静かに瞼を閉じる。

「……………」

眠っているかのような穏やかな沈黙を見せた直後、彼女の左手首のバングルが眩く輝

いた。

「ワタシの意志は変わらない」

「……！」

パキ、と小さな音と共にベルナージユの気配が遠のいていく。

ひとりでに割れたバングルが落下すると同時に梨子の身体はそのバランスを崩し……地に吸い込まれるように倒れ伏した。

——『お前達を信じよう』

微かな光と共に消滅していく火星の王妃の声。

「……………」

わずかに残された想いを受け止め、キリオは涙を拭い立ち上がる。

後戻りなどできるわけがなかった。

「無かつたことにしたい過去なんて誰にでもあるものだ」

マイクを通して講堂に広がる自分の声に妙な違和感を抱きつつも、キリオは前だけを見て語り続ける。

「戦いの場では自分のことばかり考えてた。……そのせいで間違いを犯しそうになったこともあった。けど生きている限りは前に進むしかない。それ以外許されない」

離れた場所に並んで見える生徒達は皆真剣な眼差しでこちらを見つめている。

「人の一生は戦いに満ちている。自分との戦いだ。……最後に勝利を掴みとるためには、過去を糧にして生き続けるしかない」

スカイウォールの惨劇から分断された三つの国による戦争——エボルトに仕組まれたあの戦いを経て、今ここに生きている人間は何を想うべきか。

上から目線で子供達に伝える言葉なんかない。だがひたすらに「そうあれ」という願

いがあつた。

胸に手を当て、自らの過去の面影を感じながらキリオは言い放つ。

「どれだけ間違つても立ち直れる強さがヒトにはある。……多くの後悔を背負い、多くの希望を抱きながら……この先の人生を歩んで欲しい」

「……………」

校門をくぐり、ビルドフォンに届いていたメールに目を通しながらキリオは口元を緩める。

戦いが終結した直後、ジーニアスフルボトルを用いて治療を施した元スクールアイドルの女性達の容体が回復し、目を覚ましたという塔野首相からの吉報だった。

彼自身もまた同様の方法で肉体と精神を犯していたネビュラガスが完全に除去され、

今ではかつての好戦的な気質はどこにも見られない。

パンドラボックスによって引き起こされた全ての悲劇は収束したんだ。……もうこれ以上、誰かが苦しむこともない。

（それにしても……大勢の前でずっと話し続けるつてのもなかなか疲れるな）

大きく身体を伸ばしながら思う。

普段から教鞭は取っているが、板書も教科書も無しにひたすら口だけを動かすのは初めてだった。

それにこの学校……虹ヶ咲学園の生徒達は皆真面目だ。少しも気を散らすことなくあれだけ多くの視線が一斉に自分へ向けられるという状況はこれまで経験してきたどの局面よりも精神にクるものがあつたかもしれない。

さすがに「仮面ライダー」として戦場に立ちました」とは到底口にできないので、看護の手伝いとして駆り出されたという設定で向かったが……。

「あのっ！」

不意に背後から聞こえた呼びかけに反応し、キリオはのっそりとした気怠げな動きで振り返る。

……制服。虹ヶ咲のものだ。活発そうという以外は別段特徴のない少女がそこに立っていた。

「なにか？」

息を切らしながら発せられた声が自分に対してのものだと少し遅れて気がつき、キリオは内心慌ててそう返事をこぼす。

「あの、私……さっきの講演であなたを見かけた時……思い出して……っ！その……！！」

「落ち着け」

「あわわ……す、すみません！」

何やら意図の読み取れないことを口走る彼女に手をかざしながら一旦息を整えさせた。

深呼吸の後、少女は落ち着きを取り戻すのと同時に一声を言い放つ。

「あなたが東都の仮面ライダー……なんですよね？」

そう尋ねられ、眉をひそめながら深い思考を巡らせる。

……顔も知らない少女だ。記憶力には自信がある。会話したわけじゃない。いつかはわからないが変身するところを目撃されたのか？

「俺は——」

「ああつ……！言わなくてもいいです！私わかってますから!!」

「……いやその——」

「でも違ったらゴメンなさい!!」

「……………」

話の主導権を握らせてくれない。なんなんだこの……………勢いというか、圧というか。

とりあえず彼女の言い分を聞こう、と少女に視線を合わせたまま黙り込む。

「私……………ずっと前に怪物に襲われていたところを仮面ライダーさんに助けてもらって……………ずっとお礼が言いたかったんです」

「怪物……………」

少女の口にした単語を復唱しながら記憶の奥底を掘り返す。

怪物……………というのはスマッシュのことだろうか。なら戦争が起こる前——まだフルボットの成分採取に励んでいた頃だ。

だがその頃のキリオは自分からスマッシュを迎撃しに向かうようなことはしていな

かったはず。そもそもスマツシュ自体キリオを狙って隠密行動していたものがほとんどなんだ。大つぴらに一般人を襲うようなことがあるか？

……いや待て、そうだ、思い出した。

(……かなり前……成分を抜いてスマツシュから人間に戻した奴のなかで、ちょうどこいつくらいの少女がいたかもしれない)

スマツシュにされた前後の記憶は曖昧になる。彼女はおそらく自分がスマツシュにされ倒されたのを「襲いかかってきたスマツシュから助けてもらった」と勘違いをしているんだ。

「別に……礼を言われる筋合いはない」

「……いやつぱりあなたがそうだったんですね!!」

「ああ、さつきもそう答えようと——」

「大丈夫です！誰かに言いふらしたりしませんから!!」

相変わらず上手く喋らせてはくれない少女に引きつった笑顔を浮かべつつ、キリオは再び背中を向けてはその場を去ろうとする。

「じゃあこれで」

「あ！待ってください!!」

「まだ何かあるのか？」

戻した視線の先にあつた少女の顔にギョツとする。……近い。関係の浅い男女の距離じゃないぞ。

「私、実はスクールアイドル同好会の部長をしてまして!」

「……へえ、ニジガクにもスクールアイドルがいるのか」

「はい!それで……あなたは確か、浦の星女学院に勤務されているんですよね?」

「ああ」

「お願いがあるんです!!」

「なっ……なんだ」

そう返した直後、近かつた距離がさらに縮小される。

ギラギラとした輝きに満ちた瞳に圧倒されながら、キリオは数歩後退した。

「浦の星女学院といえば、あのA q o u r s がいる学校ですよね!?是非彼女達に会ってみたいんです!会って……どうすれば同好会の人々が彼女達みたいになれるのか知りたいんです!!」

「つまりパイプが欲しいんだな……?」

「はい!」

「わかつたから一旦離れろ」

「あっ……す、すみません!」

フレッシュなパワーに満ち溢れた少女から距離を取り、キリオはおもむろに取り出したメモ用紙にペンを走らせていく。

「俺の連絡先だ。出れない時もあるだろうがその時は学校の番号にかけてくれ。『スクールアイドル部顧問の戦兔キリオ』と言えば伝わるはずだ」

きよとん、とした表情で首を傾げる少女。

やがて何かに気付くように大きな瞳をさらに見開かせた彼女は、オーバーなりアクションを交えながら言った。

「えっ……えっ!!あなたが浦女のスクールアイドル部の顧問だったんですか!?!」

「ああ」

「すごい偶然!……いや、運命ですよこれは!!」

「もういいだろうか」

「はいっ!ありがとうございます!近いうちにご連絡させていただきますね!!」

ぶんぶんと力強く腕を振りながら去っていく少女を見送った後、ひどく疲れた様子でキリオは踵を返す。

「お礼……か」

かつての自分を思い返しながら自虐的に笑う。

自分は降りかかる火の粉を払っていただけであつて、決して大層な正義感を抱いていたわけではない。それは自分自身が一番わかっている。

……けれども、こうして感謝されることは心地よく感じられる。そう思えるのもきつと千歌達のおかげなのだろう。

「さて」

ビルドフォンを操作し、耳元へそれを持っていく。

「俺だ。今からそつちへ向かう」

「あ、髪染めたんだな」

出会い頭、リユウヤから言われた一言からふと自分の前髪に視線を移した。

エボルトと融合を果たした直後にまだらな灰色だったキリオの髪色は黒一色に変わっており、顔色も良い。以前のような人間らしい外観に戻っている。

「俺達が集まるとこれから物騒なことでも起きるんじゃないかと不安になるよ」

「同感だ」

前方に設置されたステージを見つめながら呟いたキリオにタクミが頷く。

「いつまで引きずってんだよお前ら。もっとパーツといこうぜ!!」

「いつでも気楽そうでいいなお前は……」

ガヤガヤと騒がしい空気を背に感じながらキリオ、リュウヤ、タクミの3人は改めて前へと向き直り、これから始まる最高のライブへと思いを馳せる。

……リュウヤの言う通りだ。全てが終わり、この日を迎えられた今だけは………辛気臭い顔をするのはやめよう。

なぜなら今は、こんなにも――

『こんにちは皆さん!!』

マイクを通して特設会場に伝わる声音。

腰を下ろしていた観客達は皆歡喜の叫びと共に席を立ち、手にしていたサイリウムを乱舞させた。

ステージに舞い降りた13人の少女達は地球を連想させる華やかな衣装に身を包んでいた。

『私達はスクールアイドルの——！』

『Bernage——！！』

『Saint Snow——！！』

『——A q o u r s です!!』

それぞれ名乗りを上げていく少女達を視界に収めながら、キリオは疼く胸元を手で押さえる。

以前の状況下では叶わなかった合同ライブ——達成できなかった宿願を目の前にして、彼の心はかつてないほどの熱を帯びていた。

（エボルト……お前は今なにを感じてる？）

自分の中にいるはずの存在にそう呼びかける。

決して人間を認めることのなかった奴が……戦争が終結し、互いの結束を強めた人間達が手を取り合っているこの瞬間の光景を見て、何を想うのか。今となっては確かめる方法はない。

けれど——少なくとも戦兔キリオという人物はそれを尊いものだと感じている。

今は……その事実だけで十分だ。

何かを助け、救って……………多くの想いを抱きしめ、その心に触れた今だからこそ、そう断言できるんだ。

（こーやって繋がっていくんだな……………ヒトの想いは）

スピーカーから発せられる突き上げるような音楽を耳にしても揺らぐことがない穏やかな気持ち。

ずっと求めていた平穏を心に刻みながら————キリオは、胸に忍ばせていた水色のボトルにそつと触れた。

f
i
n.

ビ
ル
ラ
イ
ブ
！
サ
ン
シ
ャ
イ
ン
!!
♪
S
c
h
o
o
l

i
d
o
l

W
a
r
♪